THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春季特別號

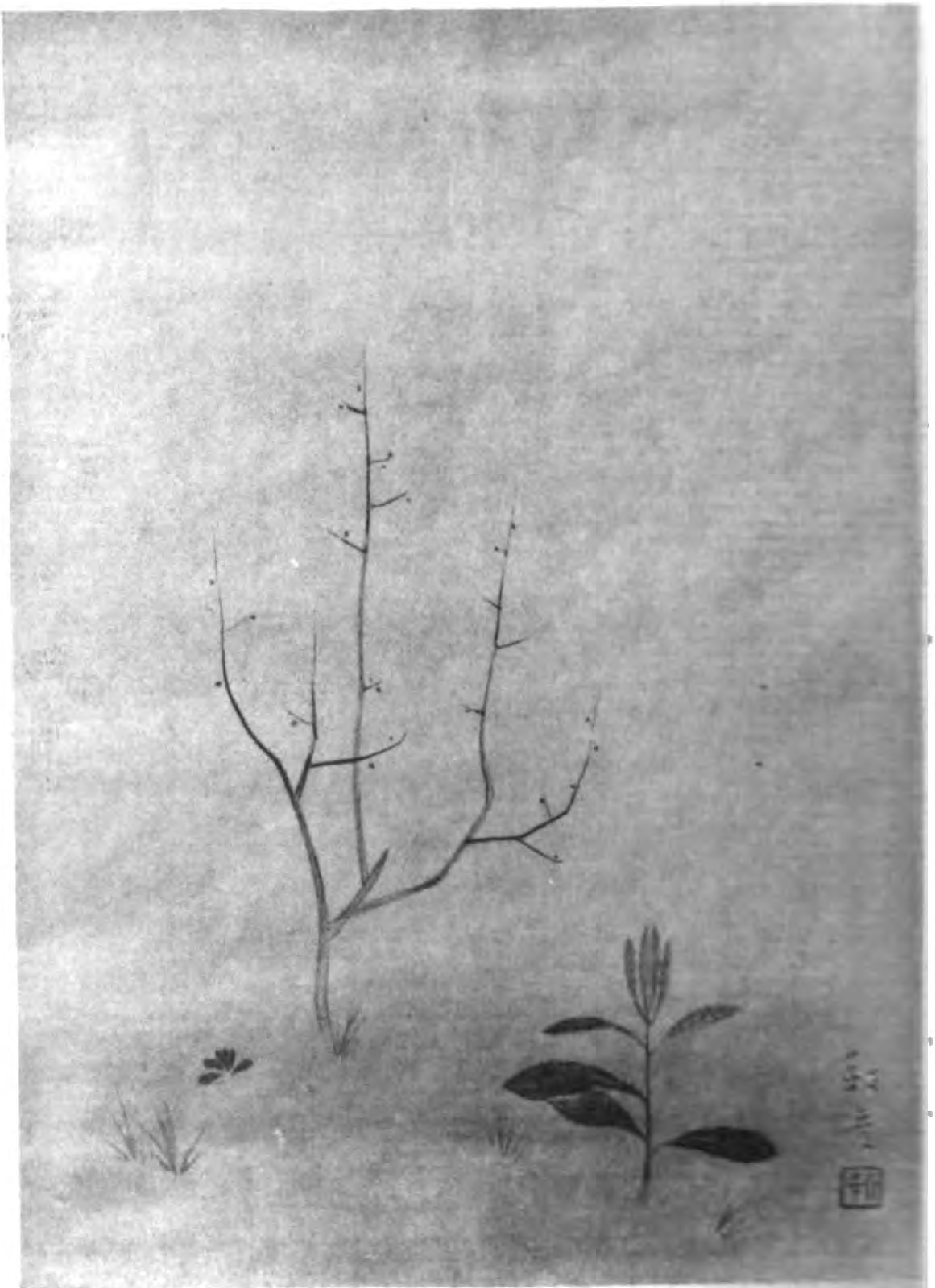
「無軌道時代の鳥瞰」號

第四十四年 第四號 第四百九十五號



探偵小說家の手帳


新マツダ
お空に光るはお星様　おへやの中には新マツダ
ぱつとついたら日の光　其のさわやかで美しい
球は眼によい眞珠色　明るいおへやが嬉しいな
ギバ体温計



春光　安田靫彦筆

松岡靜雄著

日本古語大辭典

【語誌篇發賣】

―内容見本進呈―

定價十圓

菊判一四四〇頁、背革製本、堅牢無比

送料實費

（特價設定をせず）

學界の至寶

東西の文化を咀嚼し、三千年の傳統を有する日本固有の學問は、今や世界の視聽を聚めつゝあれども、未だ我國の上代生活を表象する『**言葉**』そのものゝ、完全なる辭典の缺如せし事は、啻に、學界共通の不滿たるのみならず、實に國民的一大耻辱であつた。本書は正に、この國民文化の缺陷と不備とを完全に補正すべき研究發表であつて、**記・紀・萬葉集**等はいはずもがな、奈良朝・平安朝の諸典籍を縱橫に分析綜合して、合理的に、科學的に、幽遠宏大なる上代を、その信仰・社會・經濟の諸生活上に、活現・再現して、些の遺漏を殘さざるものである。即ち本書は**日本古語の一大辭典であると共に、古典の集約的註釋書**である。殊に著者獨自の新編纂と、全篇を通貫する興味深き學問的大系とは在來の如何なる國語辭典も到底企及し難き特色にして、今後學界の寶典として、凡そ國語の亡びざる限り、本書の意義と價値とは、永遠不朽であらう。

京都帝國大學教授
濱田耕作先生擔任
東亞考古學會編纂

貔子窩

菊倍判、背布製
厚色版木版十枚
玻璃版六十枚

賣價十八圓
荷造及送料 一圓二十錢

本書は限定出版にして、再び複刻本を刊行せず。恐らく品切後の市價は無限であらう

東京・駿河臺 ニコライ堂下

刀江書院

振替東京七三一一八
電話神田三三 二一 七八

[illegible]頭を惱まさゝることであらう。之に就ては我々にも一個の注文がある。

私共は常に疑つて居る、今日の教育界には、假しに云ふに、所謂人格養成と云ふ事につき封建的傳統と謂つた様なものに累されて居りはせぬかと。封建時代に在ては、治められる者には進んで忠義を與ふべからずとし、教育といへば畢竟治者階級間の問題に過ぎざりしことは云ふ迄もない。家には一定の俸祿あり、つまり喰ふに困らぬ者の世に處する所以を講明するのが、教育の眼目であつたのだ。今日は勿論武士など云ふ固定的階級を認めない。けれども教育——就中高等教育——の根柢に横はる方針は、依然として支配階級に屬する人材の養成と云ふに在るのではあるまいか。學校を出れば或は官廳の役人になり或は會社の從業員になる。從つて教育を受くる者も、餘り骨折らずに相當の給料に有り付けると云ふ期待を懷いて學校に這入つて來る。昔の學校は武士の入る處であつたが、今日の學校は卒業した者に武士同様の特權を保障する處となつて居る。夫れ〲方面を異にするも、要するに昔の武士の様に一定の俸給を受けて人を役するの地位に就く。そこに多少の相違はあるが、教育の根本方針には彼と此と殆んど擇ぶ所なきが如く見える。従て教ゆる者の側に、その生產品たる支配階級の據つて以て立つ所の官僚主義や資本主義の根本的批判を缺くは、毫も怪むに足らない。

斯うした教育方針の正否如何も重大問題だが、昨今之れが内部から破壞され始めつゝあるにまた注目に値する。卒業生が世の中に出て大抵喰ふに困らぬ間は人格修養もよかつた。けれども近年の様に、支配者として恥しからぬ「人格」の衣を着飾つても世間が頓と相手にして吳れず、所謂就職難の現實に遭逢して多年の甘夢から醒むるを餘儀なくされては、玆に始めて喰ふ爲には所謂人格修養も何の役に立たぬことを痛感せずに居れぬ。必ずしも結婚すると限らぬ者に賢母良妻主義を說き聞かされる以上に、支配者としての偏つた修養を押しつけられるのは、現代の青年學生に取ては難有迷惑だ。考へ様に依ては有害でもあらう。それも學校を出て直に支配階級の中に確固たる地位を占め得るのならいゝ、お前は支配者だぞと送り出されて、彼等の置かれた地位又その免るべからざる運命を省みると、寧ろ支配さるべき單なる一市民の立場に外ならぬを發見する。彼等はこゝで始めて平凡なる一市民としての新なる生活をどう切り開いて行つたものかと、痛切に考へ直さざるを得ないことになる。而して今まで學校で教はつたことの此際何の役にも立たぬことは云ふまでもない。

斯うした社會の狀勢は、今や現に學窓に在る者にも深甚の影響を與へずには居らぬ。彼等は近き將來に臨かるべき自家の運命を薄ぼんやりと見詰め乍ら、今や自分對社會の眞の且つ正しい關係を識り又把まんともがいて居る。學生間に社會科學研究熱の熾な根本原因の一つはこゝに在ると思ふ。這の大勢を認めず教育界が依然として舊套を脫し得ぬなら、學生間の思想的動搖の罪は寧ろ彼等に在ると謂はなければなるまい。知らず、教育界の先輩諸君は此點に關し果して如何の新方針を包藏せらるるや。

教育界に於ける封建的傳統の排除

——(卷　頭　言)——

中央公論



第四十四年第四號
四月號
四百九十五號

經濟學と辨證法

土方成美

一

辨證法の特色は、その綜合性、絕對否定性、實在性等々であるといはれてゐる。以下に於て之等の特色が果して辨證法のみに固有なるものであるか、よし之等が辨證法のみに固有なるものであるとしても、之を具體的なる經濟現象へ適用する

ことによつて、それだけ吾々の經濟的理解を深めることが[illegible]へることのか、[illegible]辯證法二つのものは互いに排斥し合ふものであつて、二つながら經濟學者が一樣に採り上げることの出來ない問題であらう。片々たる經濟學徒の片手間では到底充分になしとげられる業ではない。たゞ吾々經濟學徒の問題としては、辯證法を經濟に適用する結果どれだけ經濟に關する理解が深められるかといふことである。今や、資本の辯證的把握といふことが高唱せられ、其反面、從來の形式論理に對する懷疑が一般にひろがりつゝある。形式論理に對する無條件的なる信頼の動搖することは、吾人の思索の進展を示すものとして、憂ふべきことではないのみならず、寧ろ欣ぶべきことであらう。しかし、如何なる範圍に於て形式論理が採用せられ、如何なる領域に於て形式論理の採用が拒否せられるかゞ明確でないために、やゝもすれば人々をして徒なる混迷に陷らしめる應なしとしないのである。

先づ辯證法の特色はその綜合性であるといはれ、之によるものにして、始めて事物を個々別々に分離したものとしてではなく、全體との關聯に於て、捕捉することが出來るといふのである。果して此綜合性といふことは辯證法のみの特色であるといふことが出來るであらうか。私には綜合といふことは寧ろ論理の本來の性質から出て來るもののやうに思はれる。常識的に學問的と然らざる知識とが、何を標準として區別せられてゐるかといふことを見ても、綜合的なりや否やといふことに一應の目安が置かれてゐる。例へば米價をたゞ一つ飛び離して考へることはあまり學問的とは思はれない。之に反して米價と勞銀、米價と肥料の價格等の二者の相互の關係といふやうに、漸次綜合を擴げて行く、云ひ換へれば、米價を他の關聯する現象との關係に於て見て行くことがひろければひろい程學問的と考へられてゐるのではなからうか。いくら多くの知識を備へてゐても、相互間に脈絡のないのが學問的でないといふのも之がためであらう。論理の本質は田邊元博士によると、「特殊なるものの普遍なるものに於ける分化を通じて、普遍なるものが自己の同一性を自覺することに存する。」[1] 果して然らば、今日まで行はれてゐる各種の經濟學、しかも辯證法によらないものに於ても、資本、利潤、價格と

1）田邊元博士、辯證法の論理、哲學研究第百四十六號 三頁。

いふ如き分化を通じて、經濟なる普遍が自己の同一性を自覺する如く、體系立てられてゐるものではなからうか。從來行はれ來つた、生產交易分配消費の四分經濟學に於ても、例へば有限なる財貨を通じてする欲望充足といふことを以て此の四つを貫き、之を統一してゐる。即ち之等の特殊を通じて普遍なる「……欲望充足」といふことが自己の同一を自覺するやうに體系立てられてゐるといへやう。其の體系に不完全の程度の差はあらうけれども、苟も單なる斷片的知識と異つて、學問的といはれる限り、大なり小なり此綜合を行つてゐると認めなければなるまい。

綜合性といふことが論理の本質に基くものであるとすれば、甲は甲であつて、非甲ではない。AはAである、Aは非Aではないといふ自同律、矛盾律といふが如きものも、同一の平面に於て廢棄されるのではなくして、たゞ一層高き平面に於て、低次の平面に於ける矛盾對立が反對定立に代るのであるといふ、田邊博士の所說が正しいやうに私には思はれる。或物が夜白く見へ、糞は黃色に見へるとき、同時に此物は白い、黃色いといへば矛盾である。即ち同じ夜なら夜に於て同時に此二つの述語を主語について定立すればそれはたしかに矛盾であるが、夜と糞とを含む立場に立つて見れば、此者は夜は白く見え糞は黃色いといふことは何等矛盾ではないやうである。經濟とは家屬內の交換なき共同的欲望充足であるといひ、同時に經濟とは交換であるといへば、矛盾であるが、一層長い歷史の立場に立つて、經濟とは家屬から漸次其範圍を擴げ來つた、欲望充足のためにする各人の協力であるといへば、矛盾ではないであらう。

エンゲルスは單なる機械運動さへ形式論理の法則に從つては把握することが出來ないと論じてゐる。プレハノフも同樣に形式論理の方式を以ては運動を說明するを得ないとして左の如く論ずる。「物質の運動は一切の自然現象の基礎を構成する。然らば運動とは何であらう。それは明白なる矛盾である。若しも人あつて諸君は運動しつゝある物體は特定の瞬間に或地點にあるか否かと問ふならば、諸君は善意を以ても、ユーバーウエヒの法則、即ち『然りは然り、而して否は否』の形式（形式論理の形式）に從つては之に答へることは不可能である。蓋し運動しつゝある物體は一定の場所にあり、且同時

に其場所にないからである。故に運動を判定するには一點にはあり、又一點にはあらぬの形式、無論此の形式によらざることを得ない。随つて此物體は「矛盾の論理學」の爲めに反駁すべからざる證明を表はしてゐるものであつて、何人と雖も此論理學に與みすることを欲しないものは全て、ツエノーンと共に運動は感官の錯覺に過ぎぬと宣言しなければならない……」1)と。之も或一瞬といふ立場に立てば、或物體は一點にあり、長い時間の立場に立てば、一點から他の點へ移動したといひ得るのであつて、二個の立言の行はれる平面が異ると思へばそれで困難がないやうに思はれる。

形式論理のみでは充分でない、また從來の經濟學等が分類記述を主とし、從つて分析の方面に重點を置いたために形式論理偏重の嫌があつたといふのは正しいであらう。しかし、やゝもすれば、辨證法論理が形式論理にとつて代る如く、となへるのは人々を混亂に導く危險があると思ふ。將來は從來の分類記述の外に、經濟學に於ても、より高き綜合に進まなければならないことはたしかである。田邊博士は更に辨證法は單に綜合性以外に、綜合の絕對性を主張してゐる。しかし之は論理そのものの本質に基くものではなく、從つて實際の經驗に於て實證せられなければならず、實證せられない限り修正せられなければならないといはれてゐる。此點に於ては田邊博士の哲學研究に於ける叙說に讓つて置く。

二

此點と關聯して辨證法に於ては物を不斷の流動變化に於て見るといふ。「辨證法哲學にとつては永久に固定したるもの、絕對的なるもの、神聖なるものは決してあり得ない。それはあらゆるものゝ上に、そしてあらゆるものゝ中に、避くべからざる沒落の烙印を見る、そして發生と消滅の不斷の過程と、低きより高きに向ふ無限の向上以外には、何物もその前に立つことを得ない。辨證法自身が、思惟する頭腦に於けるこの過程の、單なる反映に過ぎない。」とエンゲルスはいつてゐる。

1) Plephanov, Dialectique et logique pp. 102

何故辨證法にして始めて物を流動變化の過程に於て把握し得て、辨證法によらずしては之を把握し得ないであらうか。經濟學の歷史をかへり見るに、正統學派の經濟學はたしかに、資本主義經濟の組織内に於ける諸現象間の關係を論ずることに重點を置いたに違ひない。又墺太利學派は特に、價値の成立價格の決定を中心として論じ、從つて、經濟組織の變革などといふ問題に大した關心を持たなかつたことは事實であらう。併し、それにしても、何等、歷史的變遷を顧みなかつたといふことは出來まい。そは何れにしても從來から存在した經濟史は多く辨證的發展として歷史を見てゐないのであらうが、而かもそれがために從來の經濟史が全然歷史的變化、發展を捕捉しなかつたと稱することは出來ないであらう。辨證法がよりよく人類の歷史を說明するといふのであれば、それは何等か辨證法のもつ特性に基くと解釋する外はなからう。之に關して辨證法は如何なる特性を持つてゐるのであらうか。それは辨證法のもつ綜合性、絕對否定性の原理といふものより外には考へられない。綜合性については再び茲に觸れない。

そこで、辨證法の否定性とはどういふものであるか。

普通の形式論理によると、思惟は與へられた對象に對して、一回限り肯定或は否定の判斷を下す。Aは櫻の木であるといへば、櫻の木でないものではない。Aは櫻の木であるとの判斷を下して置きながら、再びAは櫻の木に非ずといへば明に形式論理に於ける矛盾である。形式論理に於ける一つの判斷はかくして、矛盾概念の何れか一方を一回限りにその對象について述語的に定立する。然るに辨證法に於ては如何なる思惟定立も必然的にその反對定立を喚起し、この定立と反定立とは、綜合性によつて、普遍の綜合に止揚統一せられ、而かも此綜合がまた一の新なる定立として更に自己の否定たる反定立を喚起し、斯くして無限に否定と綜合との過程を發展するのである。[1)]

エンゲルスは此事を麥粒に例をとつて說明する。「麥粒を食せずして蒔いた場合、麥粒そのものは消滅してそれから發芽した植物が之に代る。これ即ち麥粒の否定である。然るに植物自體は、死滅しそれ自體を否定する。併しこの否定の否定

1) 田邊元博士、辨證法の論理、哲學研究百三十七號、一一七頁

の結果、吾人は再びしかも何十倍もの麥粒を得るのである。……[illegible]についても之を見出し得られるとする。更に數學に就ても同様であるとして、擧げる例を見ると、代數學上の任意の大さaをとり、之を否定すると－aを得る、而して吾人は－aと－aとを乘ずることによつてこの否定を否定すれば＋a²を、即ち始めと同じく正の大さを、併しより高度の段階として得る」[1)]

かくの如き實例をエンゲルスは證明として、辨證法をば「それは極めて一般的な而して正にこの故に極めて廣く行はれ、且つ重要なる、自然歴史及び思惟の發展の法則である」[2)]といふ。

三

第一の問題はかくの如き否定の法則なるものが果して辨證法に特有なるものであらうかといふ事である。田邊博士はこれに就て此否定性なるものは經粹論理そのものの本質であると述べられてゐる。玆では、絶對否定性が純粹論理の本質であるかどうかを問題にする必要はない。又私に其能力のないことはいふまでもないところである。しかし純粹論理に於ける否定性は田邊博士のいはれる如く消極的である。机の否定は机でないといふだけの事を意味し積極的なる內容を持つて居らぬ。勿論肯定に於ける机が具體的內容を持つてゐるだけ、それだけ否定も亦具體的內容を持つといふことが出來やう。肯定が具體的內容を加へれば加へるだけ、例へば「白い圓い机である」といふ風に、具體性を益せば益すほど、「白い圓い机でない」といふ否定もそれだけ具體的內容を益すといふことが出來るであらう。それにしても純粹論理的なる否定は結局に於て消極的なる意味しか持たないものである。然るに辨證法に於ける否定は、單なる消極的否定ではなくして定立と同じく積極的內容を持つた否定である。「生産力の發展を欲する」に對する否定は「生産力の發展を欲しない」である。「資本主義を欲する」に對する反定立は、定立と同じ積極的內容を持つた「資本主義を欲しない」といふ否定である。

1) Engels, Anti-Dühring S. 137—9

2) Engels, op. cit., S. 144

田邊博士によればかくの如き雙關的對立は純粹論理の本質から出て來ることではなくして、論理以外のところより出て來るものであると、左に博士の言を引用して置かう。

「それでは今述べた反定立の定立に對する反對對立性と所謂雙關的對立性とは如何に異なるか。後者はもとより辨證法の一般論理性の故に前者を含むものであるが、然し特に後者は前者の上に何ものを附加へることに由り成立するのであらうか。私はこれを次の如き比喩から説明して行きたいと思ふ。今平面上に原點Oをとり、これを判斷の起點乃至立場と想像する。このOから一點Aに至る距離 OA を $+A$ で表はし、これが一の定立を代表するとする。この定立肯定に於ては $+A$ の意味は完全に限定せられ何等の不安を殘さないと考へて置かう。さてこれだけの豫想の下に、若し否定即ち反定立が必然に $-A$ を意味するならば、否定は肯定と同じく完全に規定せられたものとなるであらう。何となれば $-A$ 即ち OA と反對の方向に OA の長さに等しい距離を計つた $-OA$ は、如何なる意味に於てもその規定が $+A$ 即ち OA に劣るところは無いからである。私はこのやうな完全に相對しつゝたゞその方向の反對なる如き一對のもの〻對立を假に雙關的對立性と呼ばうと思ふ。辨證法は否定を肯定に對しかゝる雙關的對立に立つものと考へ、それに由つて反定立の定立に少しも劣るところなき積極的規定を有することを主張しやうとするものである。然るに私の上に述べた所から考へるならば、一般に綜合論理は OA 即ち $+A$ の定立に反對々立をなすものとして、$-Ox$（Xは OA と正反對の方向に任意にOから引いた直線の端を表はす）即ち $-x$ を反定立たらしめるものである。もとより $-OA$ 即ち $-A$ は $-Ox$ 即ち $-x$ の或特殊な場合としてそれに含まれるけれども、$+A$ の否定としての反定立といふ概念には $-A$ といふ限定は含意せられずして、一般に任意の $-x$ が意味せられるのである。………… $+A$ の否定はたゞ OA の方向と正反對なる方向へ同一なる直線上の動きを轉ずることを意味するだけで、量的に OA と等しい長さ $-OA$ をとることを意味しはしない。それは OA に對し $-Ox$ といふ反定立の方向を定めるだけである。これは方向としては勿論

〇Aと同程度に積極的なる意味を有するものであつて、＋A同様に無ならぬ有であるといふ[illegible]に於て量化せられたる否定の積極的意味を説き、これを肯定と同等の資格に於て反省的實在性を有するものと認めた所はである。併し此様な反省的立場に於て定立と實在的反對々立をなす反定立は、定立の有する如き内容上の規定を有することを必要としない。〇Aと反對反對々立をなすものは－〇Aに限らずして任意の－〇xで充分なのである。論理的形式的意味の上から必然に思惟せられる＋Aの反對は－Aでなくして－xである。－xを特に－Aに限定するものは已に單なる論理の否定ではなくして、その外の何ものかでなければならぬ。こゝに前から私が説いたところの否定の不定性なるものがある。——その前提は何か。已に論をこゝまで進めて來た以上、この問に對する答は直ちに導かれること明白であらう。即ち辨證法の妥當領域そのものを今述べた意味に於ける雙關的對立の支配する範圍に限ること、これである。辨證法の否定性が反定立を定立と同時に積極的規定を意味するものたらしめるのは、本來辨證法が任意の思惟對象一般の形式に關はる一般論理の立場に立つのでなくして、或内容的に限定せられた對象領域の絶對否定的綜合的組織に關する特殊理論の立場に立つことに由るのである。

それでは斯かる雙關的對立性の範圍といふのは如何なるものであらうか。私はこれが意識であると思ふ。意識の一般的本質の何たるかは別に精細なる研究を必要とするものであるが、意味志向とそれの充實との内面的統一といふことに由り大體これを概括することが出來るであらう。然るにこの志向と充實との内面的統一といふことは普通に我々が意思活動と稱して居るものに於て最も完全なる姿で體驗せられるのである。この意味に於て意思は意識の範型となる。——さてこのやうな意味の形相に於ては明に雙關的對立性が成立し、又意志の形相を外にしては雙關的對立性の成立する地盤はないと思はれる。」[1]

1) 田邊元博士、辨證法の論理、哲學研究百三十六號一四一頁以下、

かくして博士は辨證法の妥當する領域を精神生活意志生活の領域に限定せられる。

かくの如く辨證法の雙關對立にして純粹論理の立場で成立するものではなくして、意志生活の世界に於て成立するものであつて、「精神生活の具體的構造はそれの本質上、過去を現在に含むといふ意味に於て歴史的であり、他我と自我との交互關係を自我の體驗に含むといふ意味に於て社會的であるとすれば、現實は無限に發展して止まぬものであるから現實生活に對して、雙關的對立の絶對的なる妥當を要求することは不可能であつて、現實に相對的に進歩するといふ暫定性を說明することは出來ない。一度現實と關係し現實の組織としてはたらくに及んでは、その成果の妥當はたゞ現實に對する十全適合 Adäquation に於てのみ成立する。以上が大體に於て此點に關する田邊博士の所論である。

四

博士の主張せられる如く、辨證法に於ける雙關的對立が論理そのものゝ本質より出て來ないとすれば、辨證法の現實生活に對する適合こそ、この論理の經濟への適用の價値を決定する鍵である。

今田邊博士の所說に從つて、辨證法論理が、歴史的社會生活にのみ妥當するものとして、此領域に於ける適合を考察して見やう。

なるほど、意思の世界に於て、或事の否定は、一の積極的内容を持つといへるであらう。「蜜柑を欲しない」といふことは、「蜜柑を欲する」といふことゝ同じく積極的内容を持ち、玆に田邊博士の所謂雙關的對立が可能になるやうである。然るに、「蜜柑を欲しない」といふことは、「蜜柑を欲する」といふことと、完全に正反對な對立をなすとも考へられるであらうか。「蜜柑を欲する」といふことゝ同じ程度に規定せられた一定の内容を持つてゐるのであらうか。「蜜柑を欲する」といふことは、たしかに規定せられた一定の内容を持ち、柿を欲するのでなければ林檎を欲するのでも

なく、蜜柑を欲するのである。しかし「蜜柑を欲しない」といふことには、一面に於ては「蜜柑を欲する」といふことと正反對なる積極的内容を有するとも考へられるが、具體的な事實に就て見れば「蜜柑を欲する」といふことほど限定された内容を持つてゐないやうでもある。「蜜柑を欲しない」ことは、たゞ蜜柑を欲しないのであつて、他の之に代る何ものをも欲しないといふ場合もあれば、蜜柑は欲しないが、麥酒は欲するといふ内容を持つこともある。蜜柑を欲しないといふことは＋ＯＡに對する－ＯＡといふ如き完全なる正反對であるといへやうか。形式的にはいへるやうであるが、具體的な經驗に適用して見ると何が正反對に完全に對立するかは問題とならう。蜜柑を欲しないは、蜜柑を欲するといふことが＋ＯＡであるなら、依然として－Ｏｘであつて－ＯＡといふ如き規定せられた内容を持たないのではなからうか。蜜柑を欲するといふこととの正反對なる内容を有することは、もし蜜柑に對して正反對と考へられることを欲するといふ場合に始めていひ得るのではなからうか。正反對なる概念といへば例へば右と左、上と下、裏と表、南と北といふ如きものであらう。之等は右の反對といへば左を思はなければならないし、南の反對といへば北を思はなければならないであらう。しかし、之とても左を欲しないことは、時として右も左も欲しないことであり、時として右を欲することであり得る。

兎に角具體的な存在の世界に於て、或る事物を欲しないといふことが、直ちに正反對の特定の事物に對する欲求を思せる場合、或る物とそれに正反對なる特定の事物が對立してゐる場合は極めて稀であらう。資本主義を欲せざるものには、社會主義、無政府主義、ギルドソシアリズム、たゞ少し變形されたに過ぎない資本主義等々を欲するもの無數のものが考へられる。然らば資本主義を否定するといふことが、資本主義に對して積極的なる或特定の組織を提唱することを意味しないのである。又資本主義の主張と社會主義の主張とが對立する結果その止揚として出現するものも、之亦特定の内容を豫料することが出來ないものである。

既に田邊博士のいはれる如く、辨證法に於ける鬪爭的對立なるものが、論理そのものの本質に根據を有しない以上、之

はあくまでも經驗に照合して其妥當な妥當を檢しなければならない。故にかりに辨證法が精神生活に於て妥當を要求しようるとしても、現實に對する十全妥當を以て之を檢しなければならず、妥當しない場合には之を修正しなければならないのである。しかも豫め社會事象の變革を豫料し得る性質のものではなく、過ぎ去つた事實に就て之をあてはめて見るに過ぎないのである。しかも上述の如く定立に對する反定立が特定の內容を有せざること以上の如くであるとすれば、辨證法論理の現實への適合を檢すべき標準を發見することも不可能なのではあるまいか。例をとれば、資本主義に對して之を變形せんとする無政府主義者が現れて、資本主義が變形せられた、或は資本主義に對して共產主義者が勝利を制して共產主義社會が出現した、資本主義に對して破壞を企てるものがあつたが遂に成功しなかつた、しかし此ために資本家は一層反動的になつた。之等總ての場合を通じて辨證法論理が適用せられるといへばいへるし、適用せられないといはんとすれば、それも不可能ではない。

凡そ法則となるものが、特殊的な分化を通じて、普遍者が自己同一を自覺することであるとすれば、現實の動きが幾分かでも、此法則によつて豫料せられる場合に於て法則も存在の意味を有するではなからうか。上述の如き定立に對する反定立が不特定のものであり、況や其止揚たる綜合も不特定のものであるならば、此論理を採用することによつて吾々の經濟上の認識がどれ程進展するのであらうか。

經濟學も、もとより個々の現象を、連絡統一して行くものであり、其限りに於て純粹論理の一般的性質を追ふものであることは疑ふを得ないと思ふが、尙其上に辨證法論理を附加することによつてどれだけ、吾々の經濟に對する理解が進むであらうか。此點私にとつて疑問たらざるを得ない。

此點に關聯して述ぶべきは以上の如く、辨證法に於ける定立に對する反定立が內容上不特定のものであるといふことは、社會進化に於ける必然と意思の自由とに深き關係を有することである。實在が辨證法論理の必然によつて、何等の不

規定の何物をも殘す所なく網羅するものではなかつた。歷史には吾人の意思の自由の活用する餘地は殘されてゐないのではなからうか。もとより辨證法論者は、其所謂必然とは、人類の意志の何等關與しない必然ではなくして、人間の意思を通しての必然である。人間が此必然を意識するとき必然は變じて自由となるといふのであるが、果してかくいふことが出來るであらうか。辨證法の論理によつて、個別的現實がすべて生み出されて、何等の課題を殘さないといふのであつたら、それは絕對理性の自由であつても、我々個人の意思の自由と稱しうべきものではない。[1] 思ふに實在をすべて合理化しうるとは、唯物辨證法論者も主張しないのであらうから此點に於て意思の自由の範圍が殘るのではあるまいか。人間の努力は殘されたる自由の範圍に於て活動するのではなからうか。

五

惟ふに、辨證法が今日一般に廣く行はれてゐるのは、理論的な思索に基いてといふよりは、それが、定立反定立の矛盾止揚の理論によつて社會の突然なる變化、殊に革命の必然を根據付けるのに好適であると考へられるためであらう。之に就ては、果して辨證法がかくの如き突然變化のみを證明し得る理論であるかは暫く措かう。辨證法も亦現實に對する適合によつて其妥當を檢せらるべき理論であるとすれば、現實社會に於ける變化には比較的緩漫なるものもあれば、比較的急激なる變化もあることとは何人も否定し得ないであらう。我國の明治維新について起つた經濟上の變革の如き急激であるといへば急激でもあるし、比較的緩漫であつたといへばそう見られないこともないやうである。政治的變革に到つては急激に起つたと見なければならないやうであるが、之も、政權が形式的授受はたしかに短時間内に行はれたであらうが、政權の形式的授受に到る經路を觀察すると必ずしも一概に急激であつたといふことは出來ない。かくの如く具體的な事實は皆程度を異にして或は急激に或は徐々に移り行くものである。一概に社會の變革はすべて突然に起るといふことは出來ない。

1）田邊博士、辨證法の理論　哲學研究　百三十六號34頁

殊に吾人の知覺が鋭敏でないために、突然であると見られる變化も知覺を鋭敏にして見れば、質は徐々なる變化であると見られる場合も多からう。

然らば何故に辨證法が突然變化を説明する特質を有すると一般に思はれてゐるのであらうか。それは有名なる量質變化論である。異質的なる特殊はあくまでも他の特殊と區別される異質である。然るに之が量化せられると二つの異質なるものが統一せられて量が出現する。之を質の量化ととなへてゐる。しかし玆に質の量化といつても、それは決して質そのものが量になつたのではない。質は飽くまでも質として個々の物について存在してゐる。たゞ此異質なるものが量といふ見地にて統一せられるのみである。通俗には水に熱度を加へるといふ例が屢々用ひられる。水に熱度を加へて百度以上に達すると水蒸氣になるといふのである。之は古谷榮一氏が唯物辨證法批判に於て指摘せられるところであるが、水に熱を加へたからといつて、熱度が別に水蒸氣になる、即ち量が質になるのではない。熱の量に於ける變化と共に水に質的變化が起るといふまでのことである。其他にジムメルの指摘するやうに、夫婦の結合も男女二人の結合といふ場合と此男女の間に子供が生れた三人の結合とは質的に異なる點があるといつてゐる。前者は男女の愛を中心とする結合であり、後者は、子供に對する愛を中心とする結合といふのでもあらうか。之等は日常の生活に於て多くの人々の體驗するところであるかも知れないが、之も二人が三人になるといふことは量的變化であり、それに伴つて結合が質的に變化するといふことであつて、質が量になり、或は量が質になるではない。例を經濟の方面にとつて見るに、帽子と、机とは各々質を異にして之を統一することは出來ない。今之を使用價値といふ方面（限界效用説）乃至投下勞働（勞働價値説）といふ方面から量化して二者を統一的に見る。しかも此場合二つの財貨の質が失はれてゐるのではない。

田邊博士はかくの如き質の異なる財貨を量といふ見地に立つて、統一することは、特殊なるものに於ける普遍を通じて普遍が自己同一を自覺するといふ、純粹論理の本質をなすものであつて、辨證法に特有なるものではないといはれてゐ

る。果して然らば特に辨證法によることなくとも、社會の現實たる變化を理解するのに困難は感じないのではあるまいか。

要するに辨證法そのものに就ては始めに斷つた如く、之を根本的に批判するつもりもなければ、能力もないことを卒直に告白しなければならない。唯その經濟への適用が、どれだけ經濟に關する理解を深めるかに就て、平素より少なからず疑問を持つて居り、既に其一端を發表したことはあるが、近時河上博士の辨證法の論理に接して、此疑問が、やゝ明瞭な形になつたかと思はれたので、玆に素朴なる疑問を開陳した次第である。

六

終りに唯物論と辨證法との關聯について、目下私の考へてゐることを簡單に附加することによつて本稿を終りたいと思ふ。

唯物辨證法論者は、辨證法は必然に唯物論に轉換せられなければならないといふ。即ちデボーリンも次の如くいつてゐる。

「マルクシズムは唯物論の地盤に立つことによつて更に一歩を進めた。辨證法は絕對的眞理の學たる形而上學と結合し得ざると同時に、觀念論とも結合するを得ない。實に——ヘーゲルの絕對者そのものは……辨證法的特徵を含んでゐた。然しヘーゲルの體系は……辨證的唯物論によつてのみ除去し得たところの形而上學的要素を含んでゐた……のみならずヘーゲルの觀念論は辨證的方法の本質と矛盾してゐた。何となれば、辨證法は形式と內容とが相互に對立せられないことを要求するを以てゞある。加之、辨證法の立場より云へば、形式と內容とが互に滲透し合つて居なければならない。……現實の辨證的把握は、思辨とは兩立し得ざるものである。しかるに（ヘーゲルの所謂）絕對的精神または絕對的理念なるものは、

たゞ思辨の對象である。……吾人は辨證法學者ヘーゲルの敎ゆる如く、現實みづからが自己自身の中より自由に發展し、且つ自ら自己の諸規定自體を見出すことを、現實に任じなければならない。然しかくすれば、辨證法は唯物論とのみ結合し得ることが明になる」

現實は人間の意識と外界との交渉に於て成立することは疑ふを得ないであらう。我々が表象し、知覺し、欲求するので物があり、反對に物を知覺し、表象することによつて、意識が自己の存在を自覺するといふのは疑ふことが出來まい。そこで實在を辨證的發展と見る限り、人間の意識と外界との交渉を通じて見ることは一應當然なことであると見てよからう。そこ殊に田邊博士の主張せられる如く、辨證法に於ける所謂相關的對立が意志の世界に於ける問題であるとすれば、意志と外界の對象との交渉を以て辨證的發展を說くのが、當然のことのやうである。

唯問題となるのは、かくの如く、實在を人と外界との交渉とか、或は動的相關とかの解釋に立つて見ることとそのことが、果して唯物的なる名稱を附するに適當であるかどうかといふことである。唯物的といふ限りそれは、人間の意識に對立する物、此物の方面に歷史の進化の原動力を置くものに對して附するのが適當ではないかと思はれる。しかしそれは名稱論のことであるから强ひて爭ふ必要もないが、人間と外界との交渉に歷史變動の原因を歸して行くことに私自身に於ても何等の異論があらう筈はない。

しかし、人間と外界との交渉には、種々なる交渉の仕方がある。感性的に外界と交渉する以外に、宗敎的に、藝術的に、その他種々の交渉の仕方が考へられるのである。然らばその內何れの交渉の仕方を以て最も根本的乃至本源的と解すべきかも論理的に導かれることではないのは明瞭であらう。同じく感性的に交渉するといつても、勞働といふ形で交渉するのみならず、欲望對象を消費するといふ形で交渉することもある。何が經濟であるかの解釋は別として、勞働といふ交渉の仕方、欲望充足といふ交渉の仕方、其何れも論理上何が最も重要であるか、本源的であるかは決せられない。勞働とか、生

産とかいふことが本源的、究極的であるといふ主張は、論理的に導くことが出來ないで現實的經驗によつて決せらるべきものであらう。然らば、現實生活に於て、之が或程度まで立證せられるとして、而して私も現實生活に於て、或程度まで立證せられることゝ信ずるが、あくまでも相對的暫定的なことであり、其絶對的なるを主張することは出來ないと思ふ。私が從來主張して來たことも實に此點に外ならないのである。

進んで人間と外界との交渉のうちで何が經濟であるか、要するに人間生活の一面の自己解釋であるから、論理的に決することは出來ず、要するに多數の意識に於て何を經濟と考へてゐるかを基礎として解釋する外はない。私は此點に就ては、屢々述べた如く、人類が不充分なる財貨に就て欲望を充足せんがためにする社會生活に於ける協力、相互の提供獲得である。しかも、相互の提供獲得關係こそ、最も中心をなすものであつて、個々の提供獲得は有機的全體に對する一部と見られるを以て配分關係と稱してゐる。此事は當否は問題外として經濟關係を負擔する諸事象中の一因子を捕へ來つて何が、究極的であるかをいふことも、論理的には不可能であり、現實的妥當の問題であるが、之も要するに相對的なる問題であると思ふ。論理的には、經濟關係を擔ふ諸要素は、相互に作用し合ふのみであつて、之等の諸要素、例へば欲望、生産力といふが如きものを心理的物理的に分析することは、經濟なることを解消してしまふことである。從つて或アトムとかいふが如き一元的要素間の作用にすべてを歸して說明せんとする自然科學的方法は廢棄されなければならないのではなからうか。

政黨株式會社論

高橋龜吉

一、政黨事業發達の經濟的根據

泰西資本家發達の初期に於ては、「政黨」は未だ金儲企業ではなかつた。その頃の政黨は、資本家が、國王貴族等の專制政治的壓迫を脱して、意のまゝに經濟活動を營まんとする、所謂「自由」確保の手段に過ぎなかつたのである。當時に於ける資本家は、「自由」にその手腕さへ伸ばさして貰へば、經濟行動に由つて、多大の利益を贏ち得たからである。

その後に至り、資本家勢力の政治的位地が漸次に增大するに從ひ「政黨」は進んで、資本家的生產の發達を積極的に助長する機關となつた。我が日本に於ては、後進國たるの特殊事情から、政黨の此の種の役割は、官僚政府に由つて最も鮮かに代行せられた。しかし、此の時代と雖も、政黨は、尙ほ直接に營利企業の對照たるに未熟であつた。蓋し、當時、資本主義經濟はその全盛期にあつて、資本家は、その得意の經濟活動に由り、多大の利益を見出すことが出來たからである。

然るに、時代が三轉して資本主義末期の世の中になると、――日本はいま正しくその時代に在る――經濟活動に由り多大の利益を獲得することは著しく困難となる。就中、日本の如くその經濟の發展が各種の事情から行詰れる場合に於て殊にさうである。何故か？ その根本原因は、要するに、資本家的利益獲得の根源である、生產力の增大と、販路の擴張とが行詰れる上に、資本家それ自身の資質亦退化するに至つたからである（それ等のわけは紙數の制限上略するが委はしくは拙著「資本主義末期の研究」改造社版參照）。

即ち、資本家的實力の最も必要なる時に於て、資本家の多く

は、二代以下のボッチャン育ちで、何代の間く、其力でタ、キ上げたのではなく、祖先の遺産の力でその地位を得たデクの棒が多いと來たのである。かくて、經濟活動に由る金儲けに愈々困難を加へるに至つたのである。

こゝに於て、金は有るが、しかし眞の經濟活動に由つては儲けることの出來ない資本家の多くは、經濟活動以外の方法で、金儲けをやることに專心力を入れ出した。それは、政治の力で金を儲けることである。蓋し、現代に於ては、政權を取るには議會に多數の代議士を占むればよい。代議士を多數に出すには豐富なる金さへ持つてをればよい。而して、一度び政權さへ獲得せば、後述するが如き方法に於て、例へば或は各種利權の獲得に由り、或は補助、保護、救濟、買上等の名に由り、或はその他の手段に訴えて、巨大の利益を資本家に約束することが出來る。されば、之を資本家側から云へば、上述の如く益々困難になりつゝある經濟的金儲けに力を入れるよりも、金さへ出資せば、寢てゐて莫大の利益の上がる政黨企業に出資する方が有利だと云ふことになる。而して、經濟活動の實力無き資本家であればあるだけ、此の眞理は强大になる。

事實、之を我が經濟の現狀に顧れば、目星しき資本家的利得のいよ〱大なる部分は、政黨企業に由る利益配當の占むるところとなりつゝある。例へば、[illegible]は、保護輸入關税に基くものと云つて大過ない。又、電氣、鐵道、電車、瓦斯、取引所、その他の獨占的事業の利益源に要するに「特許」と云ふ政黨株の一配當に外ならないのである。遊廓地、學校、官營工場、等々の敷地決定、土地その他の官有物の拂下げ等に由る甘い利益も要するに右と同一だ。更に大正九年以降昭和二年の金融恐慌に至る期間に於て、「救濟」の名に由りバラ撒かれたる十數億圓の巨額は一體誰れの×に入つたか。その他、補助、買上、低利資金貸出等の名に於て如何に莫大の金が、××の懐から、政黨會社の株主の手に渡つて行つたことか。

いまや、我が資本主義は、その本來の生き方たる、資本に由る生産力の增大を通じて、資本の搾取を行ふ代りに、資本に由る政權獲得を通じて、逆に、生産力を抑壓しながら、(利權、保護等何れも生産力を增進する代りに之を抑壓してゐるのである) 政治の力で搾取を行ひつゝあるのである。しかも、その利益獲得の難易は、經濟行爲に由るよりも、政治行爲に由る方が遙かに樂で、容易で、甘い汁が多量である。

斯かる時代に於て、營利に最も鋭敏なる資本家が、少ぞ、行路困難にして利益少き經濟行爲に專念するの馬鹿を仕さんや。

彼等は、技術の向上、工場經營の合理化等に努力する代りに、關稅の引上げ、補助金下附等の運動に全力を擧げる。銅關稅の引上はその代表的のものだ。又、如何なる事業が最も我國に要求せられてゐるかを考ふる限りに、何處に「利權」が遺されてゐるかに血眼になる。事業を興す代りに利權や特許を得ることに全力を擧げる。商品の品質を高め代價を安くして賣込む代りに政府大官の御聲掛りを求める。而して、惡貨が良貨を驅逐するは單に貨幣のみでない。斯くの如き環境に於ては、良買は惡買のために驅逐せられるか、乃至は自らも此の渦中に投ぜざるを得ないのである。

斯樣にして、今日に於ては、大きな「金儲け」は何等かの形に於て、政黨會社の手を經ずしては到底之を期待し得ぬ。之れ「金儲け」に拔目なき有象無象が競つて政黨會社の株主になる所以である。いま世上に囂々たる非難の的となつてゐる東京市會の腐敗の如きは、要するに、右の如き政黨會社營業上の一尖端に過ぎず、それがたま〳〵「合法的」やり方をやる代りに下手な方法をやつた一事實に過ぎない。之を主として個人的道德問題視するは政黨株式會社の營業が如何なるものなるかを知らざるが故である。

二、政黨會社の營業課目及營業方法

政黨會社の儲け口、即ち營業課目は極めて多岐に亘り、一種のデパートメントストアーの觀がある。試に、いまその主なる營業課目及び其の營業方法を一表に纏めて見れば左の如くなる。

(a) 補助保護の部

(1) 補助金下附（船舶、鐵道、航空、無線電信、染料會社等の營利會社から、地方團體その他に及んでゐる。而して昭和四年度豫算に於ける補助費は總計實に約一億五千萬圓の巨額に達する。）

(2) 政府出資（或は半官半民會社の形式その他に由るもの、最近に於ては電力會社の半官半民案が出て世間非難の的となつてゐること新聞で御承知の如し。）

(3) 買上（鐵道の買上げが最近に於ては就中金儲けになる。私鐵が愈々買上げと決定すれば十圓位の株價が三四十圓には騰貴するのだから……）

(4) 國有（買上の一種だが更に一掃的である。過去に於ては鐵道、煙草專賣等に由つて資本家は大利益を得たが、最近は、或は砂糖官營、電氣國營、土地國有などが問題になつて、その

度びに關係資本家を喜ばせたが未だ實現出來ない。)

(5) 關稅保護(これは最も大規模のもので且つ最も實況だ。例へば銅の輸入稅がいま百斤七圓である。さうすると我が産銅年額は約一億斤餘なるが故に、年々資本家は七百萬圓の保護を國民から受けることになる。之れ、資本家が輸入關稅引上げに全力を擧げる譯だ。)

(6) 國產奬勵(官廳が高くとも內地品を使ふ主義を取る。軍艦、鐵道車輛レール等、電信電話等これも仲々巨額に達する。)

(b) 金融の部

(1) 低利資金の融通(或は預金部を通じ或は特殊銀行又は中央金庫を通じ或は簡易保險準備金を通じて市場よりも遙かに安い金利で資金を融通し其間の利鞘を儲ける。いま預金部のそれのみを見るも、後述の事業救濟貸出を除く各種低利資金の貸出高は實に九億一千三百九十萬圓の巨額を算する。)

(2) 不當又は不正貸出(主として特殊銀行を通じて行はれる。例へば不毛の原野を田畑と見做して巨額の資金を貸付け結局之を低當流れとなして金儲けをやるとか、不良株券、不良會社等に同じ如き貸付をなすと云ふ噂のあるが如きである。その代表的なものは朝鮮銀行、臺灣銀行にして、中にも臺灣銀行の鈴木商店及び久原への貸付は有名である。)

(3) 日銀の救濟(これは[illegible]日本銀行が直接なす場合に他日回收の見込ある銀行又は產業に貸付けるものであるが、これとても政黨會社の株主であるか否かに由つて其取扱は非常に異ると云ふことである。)

(4) 政府の救濟(之れは日本銀行の見放した奴を政黨會社が引取つて半分以上は呉れてやるつもりで貸與又は惠與するもので損失は國民が尻拭ひをやる。例へば最近の分のみを拾つて見るも(イ)震災手形の損失補償九千九百八十二萬圓、震手處理法に由る貸付七千六百十一萬圓、台灣金融機關救濟(主として台灣銀行)一億九千百萬圓、日本銀行特別融通貸出六億八千八百萬圓(五億圓國庫補償)以上合計約十億五千五百萬圓に上る。此の外尚ほ預金部の金を救濟的に貸出せる金が、最近の新聞に發表せられた如く、內地事業に一億五千四百五十萬圓、海外事業に一億二千八百二十萬圓、以上小計二億八千二百八十萬圓にして、その大部分は不良貸出、即ち、回收困難なものである。いま、以上を總計せば、大體に大正九年より最近迄に於て、政府が救濟の名に由り恩惠的に貸出又は施與した金額は實に十三億三千七百八十萬圓の巨額に達する。これ丈けの大金が或は議會の決議一つで、或は政府當局の方寸一つで政黨會社の株主に利益配當の代りに救濟の名に由つ

て割賦せられたのである。何とよく儲かる企業ではないか。）

(5) 自作農創定資金の貸出（預金部の金を低利に利用して主として地主の利益を圖らんとするもの。）

(6) 米價調節（已に今日までに於て一億圓近くも國庫が損をして、地主の所持米を高く買つてやるもの。）

(c) 利權の部

(1) 天然資源の開發の特許（水力發電權、鑛山採掘權、漁場占有權、山林、土地等の拂下等を通じて儲けるもの、而して最近に於ては就中水力發電權のそれが最も儲かつた事業であつた。後述の如く電力業者が政黨會社の大株主たる所以である。）

(2) 獨占事業の特許（電力、電燈、瓦斯、鐵道、電車、乘合自働車、水道、取引等々を通して儲けるもの。之れには新設、擴張、增資等にも利權あり、又、契約の更改等にも利權が附隨する。その何れの利權一つを得るにも政黨會社の株主たらざれば殆んど絕望である。所謂、議員其他の腐敗事件の裏には常にこれ等の利權がまつわつてゐる。現に東京市會の腐敗の裏には電力會社、電鐵會社、瓦斯會社等があるが如きである。）

(3) 國有鐵道の開設に由る利權（營利的には到底引合はない地方へ鐵道省が鐵道を布設すると云ふ餌を以て地方民を株主に蒐集するもの。今度の議會で小川鐵相が盛んに攻擊せられてゐるのは此の點である。）

(4) 官營事業の製品販賣權の獨占又は政府購入品の賣込獨占乃至優先（之れも政黨會社の大きな儲け口の一つである。嘘か眞か知らないが久原が遞信大臣になると下拂の久原製作所が二十台の電氣機關車の註文を受けたと噂せられるが如きその一端を語るものである。又、政府御用商人、請負人等が議員になり、又は議員を仔飼ひにする理由の大部分も玆に在ると謂はれる。）

(5) 官營又は官有物の拂下（一方に買上げ運動あると共に一方に拂下運動がある。かつては工場、鑛山等を拂下げでウント儲けた者が「政商」として羨まれた。今は例へば八幡製鐵所の拂下、東京市の地下鐵敷設權の拂下等々と騷いでゐる。何れも安く引受けて儲けんとするものである。）

(d) 雜貨の部

(1) 早耳（米作や貿易や金解禁やその他市場に影響するところ大なる政府の報告、政策等をその道の人に早く漏らす奴である。最近に於ては米作豫想が山本農相筋の政黨株主に早く漏れたと云ふので新聞の問題になつた。神田雷藏氏などその道の專

門家であつたと云ふ。この種の儲け口は株式取引員その他の市場仲買人を株主に吸引する力が大である。）

(2) 遊廓地の新設移轉（之れは最近箕浦などまで瀆職問題で引つ張り出されたので有名な雜貨部の儲け口である。）

(3) 勅選議員、授爵、その他官位賣約（こんなものを配當に欲しがつて株主になるものも隨分ある。お伽物語りの中に、桂が藤田傳三郎に男爵を約束して思ふ樣に行かなかつた失敗談が載つてゐる。）

(4) その他、村の橋一つ、路一つ、學校一つ作るにも政黨會社はその××が儲かると云ふのでなくてはやらない。三等×××一つ設けるにも、煙草の小賣人になるにも、政黨會社の手を通じて行はれる。これ等のこと迄詳はしく書いたのでは際限がない。又、此の外に、政黨會社の主要營業課目としては、機密費の利用、勞働者小作人等の團體的要求を××する各種の受負事業等もある。しかし、紙數の制限もあるので政黨會社の營業課目は此の位にして次に進まう。

三、政黨會社の經營組織

政黨株式會社が、右の如き廣汎なる營業課目を有利に經營すためには、云ふ迄もなく、これに適應せる組織を必要とする。次に、その組織の一般を示せば左の如くなる。

(1) ××の支配

(イ)中央政府、(ロ)地方官廳、(ハ)植民地長官

(2) 特種會社銀行の支配

(イ)滿鐵の支配、(ロ)台銀朝銀の支配、(ハ)興業銀行勸業銀行の支配、(ニ)産業中央金庫の支配、

(3) 預金部の支配、

昔は預金部の運用は大藏大臣の專斷であつたが、弊害が多くなつたので、いまは預金部運用委員會が之を司る。

政黨株式會社の營業上から云へば、中央各省中、最も大きな金櫃の省は大藏、鐵道、遞信、內務、等であつて、農林、商工兩省等が之に次ぐ。之れ、國政から云へば大したものでない鐵道大臣などが政黨會社に於て馬鹿に重要視せられる所以だ。しかし、ボロイ金儲けは人目の屆かぬ遠い植民地に多いので、政友民政兩政黨會社ともに植民地長官を自黨から出すことに必死となる。例へば、田中內閣が嵐の如き世の非難にも拘らず腹心の山梨を朝鮮に据え、上山をイビリ出して川村を置き、樺太、關東州等にも勢力を張りしが如きである。而して、上山に代りて川村が台灣總督となるや、日月潭電力事業の再興（新に四百五十萬圓の政府出資及社債四千九百萬圓の政府保證の下に）及

び基隆要塞地帶下の保留炭田の開發等が問題となり、それが臭いと云ふのでいま現に貴族院で問題となつてゐる。以て、政黨會社の營業組織が、那邊にその目的の尖端を現はしてゐるかを伺ふに十分であらう。

政黨株式會社が次に力瘤を入れる組織網は特殊會社銀行の支配である。現に、政友內閣成るや、滿鐵社長は黨人の山本が新任した。日本銀行總裁の井上氏がやめて土方氏が新任するや、當時、井上が政友會の云ふことを聽かないのでイビリ出されたのだと云ふ噂が專らであつた。更に、勸業銀行總裁に貴族院の馬場を新任せしめたことも、その當時、之れ勸銀を喰物にする陰謀なりとして世の非難の的になつた。又、十億圓に上る巨資を擁してゐる產業組合中央金庫の理事長の椅子が、昨秋、同じく貴族院の八條隆正氏に與へられるや、之れ亦馬場氏の場合と同じく世の非難を招いた。この他台灣銀行、朝鮮銀行が黨人に利用せられて、彼の如き醜狀を暴露し、之を政府が救濟したことは餘りにも明かなことだ。又、地方の農工銀行が如何に政黨會社に左右せられてゐるかも周知のことで改めて說明を要せないであらう。

四、政黨會社の株主及株主配當

政黨株式會社に所要の資本は、要するに、中央議會又は地方議會に於て、多數を占むるに必要な選擧費、黨勢擴張費、議員操縱費、倒閣運動費等々である。この所要資金を拂込むものが、こゝに謂ふ政黨會社の株主である。しかし、この株金の拂込み方法は色々である。

(1) 政黨會社の本部又は重役に拂込むもの。

(2) 政黨會社の支部又は候補者に直接渡すもの、乃至は自ら出馬して選擧費を自辨するもの、

(3) 現ナマ拂込の代りに投票出資をなすもの。これは主として鐵道その他の地方利權の配當を目標とするもの。

以上は株金拂込の方法に出る分類だが、更に之を株主の種別から大別すると、

(一) 大株主(主として前記(1)の拂込をなすもの)

(二) 中小株主(主として前記(2)の出資をなすもの、尤もこの中には大株主が(1)と重複して出資するものもある)

(三) 浮動株主(特定の利權その他の配當を目當として臨時的に株主になるもので、時には大株主級のものであるが、大觀して中小株主級のものである。例へば、鐵道利權、電力利權、取引所問題等々を××として或は投票出資を求め、或は現ナマ出資を求めるの類である。)

右の中、大株主級のものについては、已にその色分けに定評がある。例へば政友株式會社の大株主には三井、安田、久原、藤田、古河、中橋一派の商船系、住友、若尾等あり、民政會社のそれとしては三菱、山口、根津等が著聞してゐる。この外、倒産した鈴木は後藤政黨會社に、十五銀行を背景とする松方は床次政黨會社に何れも大株主であつた等々である。しかし、これ等大株主（及び中小株主の多くについて云ふも同樣である が）の出資は、それ等個人乃至財閥自らのポケツトからなされるよりも、寧ろ、その關係會社（その株式の三割前後を所有することに由つてその支配權を得てゐる）の金庫から營業費等の一部分として出される傾向が愈々大である。だから、例へば政黨會社大中株主の出資が假りに百萬圓であつたとしても、その百萬圓中自らのポケツトから出ることになるものは三十萬圓前後に過ぎず、他の七十萬圓前後はその他の一般株主が不知の裡に出資することになるのである。この故に、政黨大株主の出資はいよいよ容易になる。だが、此の種の出資に對しては、特定の利益配當がなくてはやれぬ。事實、此の種の出資は、報酬として前記第（二）項に掲げし種々の利益配當を直接間接に受けるが故に、その出資は結局に於て有利な投資となりて資本家的問題を起すことは少ない。

例へば、假りに百萬圓を政黨會社に出資しても、その會社にして、或は水電權を得、鐵道を買上げられ、瓦斯契約を有利に更改されるなどして、假りに年々三十萬圓の利益を得れば、實に年利三割に廻る有利なる事業である。それが五十萬圓以上となればいよ〳〵以て有利である。斯樣にして、代議士一人に何十萬圓の運動費を使つても損にはならないと云ふ算盤がとれるのである。

政黨會社の中小株主（次に述べる浮動分子でなくて固定的な）の多くは地方の地主階級又は地方的商工事業家である。これ等株主の利益配當は主として地方的利權乃至地方的低利資金等々の形に由つて割賦せられる。しかし又、農產關税引上、米價調節、自作農創定、土地國有案等の一般的政策からも配當を受ける。

この外、政黨會社の中小株主（中には大株主級もあるが）中には、浮動株主が少からぬ數に達する。即ち、時の政權が政友にあれば政友會社に出資し、民政にあれば民政會社に出資するが如きである。ハツキリした政黨的色彩のない多くの財閥、特許會社、政府關係事業等々の中には此の種のものが多い。

政黨會社の特殊會社銀行に對する支配網は一方に於ては已述の如く、政黨株主への利益を儲けだす一營業課目であるが、こ

の外に、これ等特殊會社銀行に對する支配網は又、政黨株式會社の出資者として大きな役目を演ずる。その出資の仕方は會社であれば營業資その他の形で出し、銀行であれば、回收見込なき者に或は無擔保貸出を行ひ、或は擔保價値なきものを擔保價値ありとして巨額の貸出を行ふ等々のカラクリが行はれるさうである。

與へられた紙數は已に超過したのでこの位ひで擱筆する。唯だ、最後に一言簡單に加へておきたいことは、此の政黨株式會社事業が、近來、いよ〳〵露骨にその營業範圍を擴大し、巨大の政黨資本を集積して、益々膨大の利益配當を株主に行ひつつあることである。世人の多くは之を政界の腐敗だとして專ら政治家のみを道德的に非難してゐる。しかし、斯くの如きは、その本末を誤つてゐるものである。顧るに現在の我が資本主義經濟は、本論第一項に概述せし如く、いまや、經濟活動の代りに政治力に由つて「營利」を追及する時代に這入つてゐる。之れ、宛かも、昔、大名が地主として經濟的に百姓を搾取せしものが、その後政權を握るや、地主としての經濟的活動は之を放置しておいて、政治力を以て（即ち租稅の形で）百姓を搾取するに至つたと同一の歷史的推移に外ならない。本論第一項に已述せし如き今日の時代に於て、資本家が「政治」に由つて營利を追及するに至るは、營利第一の資本主義の仕組からは必然の推移である。

此の歷史の推移は、その當時の經濟的支配階級が、生產增大の發展的位地から生產壓迫の沒落的位地に轉向せることを語るものである。資本家がその營利源を骨の折れる經濟行動に求める代りに、安逸の政治手段に由つて巨利を貪らんとするに至つた、社會機能の退化を示すものである。即ち、それは「政治家の腐敗」ではなくて、寧ろ、經濟的支配階級、即ち現在で云へば資本家階級の墮落である。支配階級がその沒落へ數步前進したことである。之を單なる「政界淨化」運動と云ふ議員の個人的向上に由つて是正せんとするは本末轉倒である。唯一の途は、政權そのものから營利第一主義の資本家階級を除去する外にない。以上のことは又、政黨株式會社のバッコに反對して立てる武藤山治氏一派の自由放任主義的政黨が、彼れの如く、仲間の資本家階級に顧られずして、遂に失敗するに至つた所以を語るものである。

金融資本の躍進

小島精一

〔1〕

一九一一年、米國の經濟界はスタンダード石油トラストの解散事件の成り行きに異常な注意を惹かれてゐた。同國でトラスト禁壓法が施行されてから既に二十年になるが、まだ此時迄大トラストは相變らず橫行してゐたので、輿論の失望と憤懣とは異常に昂進してゐた。大資本黨と札付きの共和黨政府も、もう早、これ以上此怪物の橫行を見逃がしておくことは出來なくなつた。遂に此年スタンダードの解散判決が下された。此の厖大なトラストは法令によつて、三十八個の獨立會社に分解され、これらの會社は共通の役員と重役とを持つことを禁止された。怪物は、遂に埋葬された！　遂に獨占は崩壞して、産業の自由が恢復された！　世人はかう安堵してゐた。處が、判決の眞相が分ると石油株は驚くべき反騰を始めた。判決直前成り行き氣遣ひから五八五に落ちてゐたスタンダード株は直後に六七〇と跳躍し、續いて一、〇〇〇から遂に一、四〇〇にさへ昂騰した。つまり、玄人筋には此解散命令がス社の獨占的威力を毫末も毀損しないことが明白だつたからである。成る程、一大トラストは三十八個の獨立會社に分解されはした。が、その獨立會社の株式は依然としてロックフェラー一族の掌中に把握されてゐる。そして皮肉にも、新設された獨立會社は、相變らず、ブロードウェー二十六號の隣り合つた事務所で執務してゐる。成る程、重役は兼務こそ止めたが、それは所有による共通の支配の實權を毫も損ずるものではなかつた。處で「此の所有による支配」こそ金融資本の奥の手なのである！

翌一九一二年の大統領選擧はトラスト政策を中心題目として

爭はれた。とりわけ、民主黨は眞向から共和黨の緩慢な取締り政策を難詰し、之を以て大資本との妥協に墮落したものと痛撃した。そしてその首領ウイルソンは「トラスト掃滅」の旗幟を振りかざして遂に凱歌を奏することが出來た。

新政府は直に「トラスト征伐」の實行に着手した。そして、その手始めこそ、いしくも金融トラストの徹底的調査――謂ゆるビュージョ委員會の任命――であつた。ウイルソンは宣言書を發して言つた。「一の見えざる帝國が民主政治の形式の上に築き上げられ、全國民は冷酷な一大經濟網中に捕り込められてしまつた。」此の恐るべき禍根を追求すれば、金融トラストの張り廻した蜘蛛手の威力の作用に外ならない。「凡ゆる大獨占の本體こそは金融トラストである。…全産業界は信用網で支配され、その信用組織は強く集中されてゐる。そのために、國民的發展、否吾々の全活動は此少數の支配者に左右されてゐる。そして彼等は個性として假令如何程善良でも、その投資事業の利害を中心に行動しない譯には行かず、從て、必然に經濟的自由を拘束せざるを得ない。これこそ全問題の最大の禍根であつて、いやしくも人民の將來とその眞實の自由とに奉仕せんとする政治家は一大勇猛心を以て此魔城征伐に立ち向はなければならぬ」と。――（此のウイルソンの「魔城征伐」は結局徒勞に終つたのであるが、それは、それとして）――次の事實は翌十三年に此のビュージョ委員會が提出した報告の中に見出される。

(1)全國富の四分の三が全國民の五%に當る少數大資本家の所有に屬してゐる。

(2)とりわけモルガンとロックフェラーとの二大資本團で全國富の三六%を支配してゐる。

(3)モルガン資本系に屬する大會社だけで總數百十二、その支配する資産は二百二十二億弗に上る。

就中三十四個の大銀行團――此の支配は二十七億弗。十個の大保險會社その總資産は二十三億弗。三十二個の交通會社、その總資本百十八億。各部面に亘る二十四個の商工會社、その總資本三十三億弗。十二億の公益企業。その總資本二十二億弗等……。

此報告の爆露した事實によれば結局、厖大な全産業部面の全活動が若干の大金融トラストの利益のために捧げられてゐる！然も、かゝる全部面的支配力は社會的蓄積――「他人の金」の吸引によつて支持されてゐるのだ！

そこでは、個々の、社會人は、その倭小な個別資本では、最早、何事をも、營み得ない。たゞ「トラストのトラスト」のみ、卓越した起業機會を把握してゐる。だから、社會的蓄積は

必然に大金融トラストの魔手に吸ひ寄せられ、厖大な怪物に金融肥満して行く。

此怪物に法外な租税を支拂はない限り、どんな些小の産業的利得も許されない。

(1)投資家と投機者とは高價な代價を拂つて此怪物の利札を買ひ入れねばならぬ。

(2)企業家は高價な貢物を獻上して此怪物の「好意」をかち得ねばならない。

然るに、一般消費者は法外な高價で此怪物の商品を購入せねば一日も生存が出來ない。

×

處で本邦の經濟界も既に此超大金融トラストの支配に蹂躪され行くのである。

〔2〕

本邦の産業界は世界大戰前までは社會的蓄積の欠乏に行き惱んでゐた。のみならず、證券市場の不整備のために、此乏しき蓄積さへも容易に資本に動員化されなかつた。社會人は又投資技術に不慣れなために、その蓄積を自ら適宜の産業證券に投資しやうとはせず、安全な銀行に預金して些小な利子の支拂ひに満足してゐた。それ故乏しき社會的蓄積は銀行聯合會の手許で集積され、從て、相對的には金融資本の投資的能力を著しく厖大ならしめた。大筋に勃興せんとする大工業は直接に證券市場に出動して社會的蓄積を吸收することが出來ないので、必然に節を屈しても銀行家と結合しなければならなかつた。

が、此事情は必ずしも銀行家への産業資本家の隷屬をのみ馴致することはなかつた。寧ろ、産業家をして、自己所屬の金融機關の建設に赴かしめた。かくして、各地方に、必ずしも强大ならざる數多の謂ゆる「機關銀行」なるものが簇出した。それによつて中位以下の産業家も、甚だ有利に「他人の金」を吸收し、自己關係の諸事業を灌漑することが出來た。謂はゞ倭小なる數多の「金融資本團」が出現したのである。

此形體による金融機關と産業との緊密な結合網の構成は吾々をして一見獨逸の綜合的大銀行を想見せしめる。だが、彼我の金融資本網には到底對比を許さゞる實質的相違が厳存してゐた。と言ふのは彼にあつては大銀行は厖大な規模に結成され、その産業的投資は周到な調査の上に築かれて居り、且つ多面的分散によつて愼重な危險回避の途が豫考されてゐたのに、本邦の機關銀行は必ずしも厖大た規模ではなく、その産業投資は專ら自己關係の産業救濟に急であつて、從て、一面的投資の危險に堪

らされてゐた。

のみならず、彼にあつては成長力の旺盛な大重工業を把握し、然も極力その獨占網の確立によつて安定化の促進が企圖されたのに、本邦では往々劣弱な、孤立的産業が投資の對象となつてゐた。

世界大戰の齎らした變態的沸騰は本來劣弱な成長力しかなき幾多の地方的産業にも輕卒な擴大の餘裕を與へた——殊に極度の助成政策が此傾向を人爲的に促進した——ので、外形のみ厖大で、實質は甚だ薄弱なる數多の「金融資本」團を出現せしめた。

それだけに、戰後の反動的打撃は痛烈ならざるを得なかつた。のみならず、不慮の大震災の襲來及び大正十四、五年に亘る人爲的爲替昂騰政策等數次の累積的强壓が重課されたので、謂はゞ溫室育ちの新興産業は續々倒壞して行つた。そして、それは必然に此崩壞部面と緊密に結合してゐる機關銀行の破滅を惹き起した。かくして例へば高田商會の破綻は永樂銀行を道連れにし、茂木の沒落は七十四銀行を、鈴木は臺銀を、松方一門は十五銀行を、村井家は村井銀行を、渡邊家は渡邊銀行を何れも破滅せしめた。實に最近數ケ年の淘汰過程は單に倭小資本の沒落ではなくして、二流乃至三流の、そして屢々外貌的には又第一流的大金融資本團の沒落であつた。

〔3〕

數年間の深刻で、持續的な不況と數次の痛烈な恐慌の試練を經て、本邦の産業根柢は今や漸次合理化されつゝある。多大な犧牲を拂つてはあるが、此反動期に於て、産業組織は急速な飛躍的前進を遂げつゝある。一方に數多の浮薄な金融資本團は沒落したが、他方に於て、剛强な超大資本網は著しくその剛强さを加へた。現に沒落した財團のみならず、正に沒落の危險を豫感しつゝある數多の中位財閥は此の剛强なる超大資本網と結合することによつて切迫せる危機を脫出するに努めてゐるが、それによつて剛强者は愈々その威力を加へつゝある。

此超大資本團への結成過程——從て超大資本の肥滿化は本邦産業の全部面に觀取されるが、私は先づその最も顯著な金融業の現象を二、三の數字で指示しておかう。

實例の一——シンヂケート團を組織せる十二銀行への預金集中の發展

	十二大銀行預金	同全國普通銀行	十二大銀行ノ占メル割合%
昭和元年六月末	三十四億圓	八十八億圓	三九・二
同　十二月末	三十五億圓	九十億圓	三八・八

二　年	六月末	四十億圓	八十八億圓	四五・一
同	十二月末	四十三億圓	八十九億圓	四七・八

即ち昭和二年の恐慌前後の一ケ年間に全國預金は寧ろ減退したのに、大銀行のそれは急速な膨脹を遂げ、その支配力は三九%から四八%へ躍進してゐる。然も此十二大銀行の中でも謂ゆる五大銀行――三井、三菱、住友、第一及び安田――の膨脹率は他の七大銀行より遙に高い。

實例の二――新興信託會社に於ける超大資本への集中

大正十二年の信託法施行以來本邦にも信託會社は急速な躍進的發展を遂げ、今では既に十億圓の信託勘定を把握するに到つたが、此新興部面では超大資本の支配力は實に全體の八〇%以上に達してゐる。即ち

	一流大信託		一流大信託が全信託中占メル割合%	
	信託勘定	内金錢信託	信託勘定	金錢信託
昭和元年末	四億三千萬圓	三億二千萬圓	六九・三	七四・五
同　二年末	七億三千萬圓	五億七千萬圓	七八・七	八三・四

此處で一流とは、三井、安田、住友、關西、加島、鴻池、三菱、共同の八社であるが、此中、三井、安田、住友及び三菱の四超大會社だけでも、全金錢信託の約七割を占めてゐる。

實例の三――保險會社の集中

保險會社の急速な發展も亦驚かれる。大戰前には拂込資本金と責任準備金とを合計して二億圓足らずであつたのが、昭和二年には十二億圓に達してゐる。殊に生命保險だけで八億五千萬圓にのぼつて居る。此の生命保險では明治（三菱系）日本（山口銀行）帝國（古河）共濟（安田）大同（加島）千代田、第一の七大會社が全資金の半分を支配してゐる。火災、海上その他の損害保險の領域では三菱系所屬會社だけで全體の半分を支配してゐる。

これら金融業の三大部面を合計すると少くも此處に百數十億圓の資金が吸收されてゐるのであるが、その過半は三井三菱、住友、安田、第一の超大資本團によつて支配されてゐることが分る。

然も驚くべきは彼等が、此の厖大な「他人の金」の配給それ自體から、如何に高率な特殊獨占的利潤を享有してゐるかである。

私はその一例として最近の大恐慌年の營業成績を示さう。

銀行（對拂込資本利益年率）――%――

		三井	三菱	第一	住友	安田
昭和二年	上	二四・二	二六・一	四八・七	一五・五	一五・一
	下	二三・四	三一・二	一九・四	一七・〇	一六・一

信託（同上）

		三井	安田	住友	三菱
二　年	上	二八・一	一五・一	一三・一	〇・四
	下	三二・八	二〇・九	一八・七	六・四

保險（同上）

	明治生命（三菱）	共濟（安田）	東京海上火災（三菱）	帝國生命（古河）
二年下	八六・四	一二六・〇	二六・四	一四四・九

（註）信託業で三菱、住友等の低率なのは未だ創業期だからであつて、全く例外である。

だが、かゝる高率な獨占的利潤は一體どんな勞力に對して支拂はれるのか。こゝこそ注目されねばならぬ。と言ふのは前にも述べた通り、それは全く此厖大な「他人の金」を自己系統の諸事業へ配給する結果に外ならないのであるから。そして此の潤澤な資金の配給あればこそこれらの所屬事業は夫々の部面に於て獨占的優位を把握することが出來るのであるから。

私は、最近の東洋經濟新報から此事を立證する處の恰好な一例を引用することが出來る。

三菱系の明治生命は總資産約一億圓の一流保險會社であるが、同社の資産運用狀態を示すと

(1)有價證券投資約六千五百萬圓、その中社債及び株券約三千萬圓。社債の中三菱關係事業の分千七十萬圓即ち全體の三割八分強。又株式の中三菱關係の分八百七十萬圓、即ち全體の九割強。

(2)次に貸付金總額二千三百萬圓、その中三菱系の日本窒素肥料の分だけで百八十萬圓、他は不明。

(3)銀行及び信託へ預金一千二百萬圓、之は全部三菱系であること勿論だ。

(4)總投資中、明白に三菱系への分のみで三千八十萬圓即ち全資産の約三割に上つてゐる。

その他、一々實例を示すことは略す。以て、類推するも大過なしである。

〔4〕

超大金融トラストの特徴は一方で社會資金の源泉を把握すると同時に他方で全部面的觸手によつて、全産業領域の利得機會を獨占してゐる點にある。即ち彼等は絕えず流入する厖大な「他人の金」を以て所屬事業を灌漑し、絕えずその觸手の擴充を企圖してゐるのである。

私は次表で本邦三大金融資本の全部面的觸手の鳥瞰を試みる。本表は甚だ粗雜な調査ではあるが、でも、三大資本團の厖大な、多面的擴充を想見せしめることは出來る。これらの主要會社の總資産を合計したゞけでも、それがどれ程の厖大さになるか、そして、それが本邦全産業資本のどんな高い割合を占めるか、それは讀者の研究に委せる。

	三井系	三菱系	住友系
〔1〕金融業	三井銀行・同信託・同生命保險・大正海上火災	三菱銀行—同信託・三菱海上火災・東京海上火災　明治生命　明治火災—東洋海上火災	住友銀行　同信託　同生命保險
〔2〕鑛業及電力業	三井鑛山・北海炭礦—大日本炭礦　基隆炭礦—太平洋炭礦・松島炭礦—姪濱炭礦—神岡水電…	三菱鑛業—九州炭礦汽船—中島礦業—雄別炭礦…	住友別子鑛山—住友九州炭礦・同小坂炭礦—土佐吉野川水電・九州送電
〔3〕金屬及機械工業	日本製鋼—釜石鑛山—芝浦製作—三井物産造船部・豐田織機—三井鑛山　三池製錬所—同製作所	三菱製鐵—東京鋼材—三菱造船—同內燃機—同電機	住友製鋼・同伸銅鋼管　住友電線—藤倉電線—中華電氣製作　日本樂器
〔4〕化學工業	電氣化學—小野田セメント・日本製粉—三井鑛山—三池染料所…	旭硝子—日華製油・日本窒素肥料—日淸製粉—磐城セメント…	住友肥料—日米板硝子…
〔5〕製紙業	王子製紙—富士製紙	三菱製紙	
〔6〕製糖業	臺灣製糖	明治製糖—(鹽水港)	
〔7〕纖維工業	鐘紡—上海紡織—天滿紡織—東洋レーヨン—東洋棉花…	日本生糸(富士瓦斯紡)	
〔8〕商業	三井物産—東神倉庫—三越…	三菱商事—同倉庫・共同運輸・菱華倉庫…	住友倉庫
〔9〕其他—(多少關連アルモノ)	東電—郡是・東洋製紙・東亞興業・大日本麥酒	樺太木材・滿蒙殖産—若松築港—キリンビール・日本郵船	大阪北港・住友ビル・富島組

私はこゝでは、生産力の側から、これらの所屬會社の重要さを少しく檢討してみ度い。豫め結論を言へば、これらの殆ど全部門に亘つて三大閥――又はそれと共に他の一、二の大資本閥――は殆ど決定的な指導權を把握してゐることが分る。

(1)金融業――既に說明した。

(2)鑛業――本邦最大の鑛業部面たる炭鑛業では三井系出炭は約千萬噸、三菱系五百萬噸、此兩系で全體の半分を占めてゐる。然るに住友系は三菱、古河、久原と共に銅山及び精銅業を支配してゐる。亞鉛は三井の完全な獨占である。

(3)鐵鋼業――民間の銑鐵部門は內地では三井、三菱兩系の外にはたゞ淺野の鶴見工場があるのみ。又鋼鐵部門も大體三井、三菱、住友及び淺野―大川―安田系によつて統制されてゐる。

(4)電機工業――電線部門では住友と古河とが壓倒的優位を占め、電機部門では三井（芝浦）三菱、古河（富士）及び日立の四大系統が對立してゐる。注目すべきは、これらの大財閥が夫夫海外の世界的覇者と緊密に結合してゐることである。即ち

芝浦―米國のゼネラル・エレクトリック（モルガン系）
三菱―同　ウエスチングハウス（ロックフエラー系）、
富士―獨逸のシイメンス

(二)造船業では川崎の沒落後、三菱と三井との進出が顯著である。

(5)化學工業――製紙業では三井系が最近に富士製紙（舊大川―穴水系）を奪取して、大進出に成功した。燐肥部門では大川―安田系の大日本人肥が拔群の指導權を把握してゐるが、住友肥料も特殊の優位を失はない。硫安部門では三井（電化）と三菱（日本窒素）とで全體の八割を占めてゐる。曹達晒粉部門でも最大の指導者は大日本人肥だが、三井及び古河の兩資本系も支配權に參加してゐる。硝子及び曹達灰では三菱の旭硝子が獨歩してゐる。

セメント部門は淺野に對して小野田（三井）及び磐城（三井）の進出がある。製粉は三井（日本製粉）と三菱（日清）との完全な支配に屬する。新興染料工業は日本染料と三井（三池染料）の獨占領域。

製糖業でも三井と三菱が最近に大進出し、大日本（藤山系）と共に鼎立的支配を構成する。

(6)大貿易業――近時の恐慌は高田、鈴木、茂木等の有力な大貿易商を沒落せしめ、三井と三菱との獨占權を著しく強化せしめた。彼等は主なる海外原料の一手輸入商として絕大な拘束力を內地生産者の上に揮つてゐる。例へば銑鐵、原油、棉花、硝石、硫安、機械等々……。又他方內地製品の海外進出に際の役割

的をも努めてゐる。

以上は超大資本團の多面的支配の一例示のみ。尚ほ、安田、第一、川崎、古河、若尾等々一流乃至二、三流の大資本團の觸手に就ては説明を略する。が大勢として言へば二、三流の金融資本團又は純粹な産業資本團は破綻を暴露する程度ではなくとも、漸次後退を余儀なからしめられてゐるものが多い。鴻池、加島（廣岡）、藤田、若尾等の整理乃至後退、川崎と第百の合同、森村の三菱への合併、又最近時に上る古河銀行の第一への合併等がその一斑を語つてゐる。

單に矮小な個別資本のみでなく、二、三流の大資本團さへ確實に衰退せざるを得ないことが分る。

〔５〕

大金融資本の制覇の下に全部面は更に急速にカルテル化されてしまつた。鑛業及び重工業部面は言ふまでもなく、輕工業でも、化學工業でも、屢々高度の加工部面さへも、今では、多かれ少かれ、カルテル的統制の下におかれた。此運動は既に大戰直後の反動來と共に開始されたのであるが、殊に大震災後、大[illegible]しく高級化せんとする傾向が現はれてきた。[illegible]行、少數大企業への集中、合理化による[illegible]によつて促進されたものである。

此カルテル運動と緊密な關連を持つものとして、カルテル保護關税の强要が觀取される。そこでは周知の如く、最早幼稚産業を保育するのが目的ではなくして、既にカルテル化した大工業に特殊利潤を保障することが企圖される。或は、正にカルテル化せんとする部門に市場獨占の保障を與へて、その結成を刺戟せんとするものである。例へば銅關税、鋼鐵關税の引き上げ、パルプ關税の引き上げ强要等。

だが、かゝる形勢の展開こそは又實に特殊段階部門間の利害關係の對立を尖鋭化し、それによつて多面的觸手を持つ縱斷結合的大資本の優位に愈々決定的ならしめてゐる。

上述の實例によつて説明しやう。

(1) 銅山及び銅加工業は上述の如く、數個の縱斷的大結合體によつて支配されてゐるが、大戰後銅關税は百斤一圓二十錢から一躍して七圓に引き上げられた。此高率關税壁の庇護によつて、此衰ろ老衰部門は、その生存を持續してゐるのであるが、此關税壁のために原銅を自給せざる小規模の單純加工業者は著しく

窮迫してしまつた。然るにそれは縦斷的大結合にとつては精銅價格の釣上げの恰好な口實を與へるものである。

(2) 製紙業も亦王子、富士、樺太、等の大縱斷結合體によつて支配されてゐる。こゝでも近時熱心なパルプ關税引き上げ運動が行はれた。それは未だ成功しないで居るが、若し、それが實現されるとすれば、その役割りは銅關税の場合と全く同じである。即ち従來外國から低廉な化學的パルプを輸入して製紙業を營んで來た單純業者の存績は脅威されねばならない。處が、興味あることには、此部門では三菱製紙の如き有力なる單純加工業者があつて、それが關税引き上げ反對の尖端に立つてゐることである。

(3) 最も興味深き現象は炭鑛業に於て見られる。内地の炭坑業は三井、三菱を始めとして、貝島、安川、淺野、古河等の大資本團の集中的支配に屬してゐる。そして、彼等を中心とした有力なるカルテル組織が殘存してゐる。

従來此部門は外敵の侵入がなく、寧ろ輸出部門を構成してゐたのであるが、最近には撫順炭その他の支那炭の増大する侵入に脅かされてゐる。生産費の比較から言へば撫順炭の輸入は内地炭より數圓割安である筈であるから内地生産者は此進出の阻止に奔命してゐる。現に滿鐵との年々の割當量の交渉こそ内地石炭カルテルの最大な難問となつてゐる程である。が、ともかくも、従來で滿鐵との妥協に成功して、撫順炭の輸入を人爲的に阻止し、それによつて内地市場の釣り上げを持續してゐる。

處が、此狀勢は、内地の一般産業殊に鐵鋼業者にとつては甚だしき苦痛を課する。

だが、今や鐵鋼業の中心的勢力は既に少數の縱斷的大結合體——日本製鋼、釜石、兼二浦等——の手中に把握されてゐる。そして彼等にとつては炭坑業カルテルの釣上げ政策は何等の苦痛を與へるものでなく、寧ろ逆に石炭を自給せざる單純製鐵業を强壓する恰好な手段にさへなつてゐる。

だが、製鋼業の部門には尚ほ有力なる大會社であり乍ら石炭を自給せざるものが多い。これら謂ゆる單純加工業者は今や次の二途によつて炭坑カルテルの横暴に對抗しやうと企圖してゐる。

(イ)議會の運動により、政府を壓迫して滿鐵の内地輸出制限を緩和せしめやうとすること。即ち、之によつて撫順炭の輸送量を増大し、内地カルテルの炭價釣り上げを破壊するにある。

(ロ)單純製鋼業が協働して共同購買聯合を組織し、直接に滿鐵から低廉な供給を確保しやうとすること。之は今や最も實現性多き企圖として期待されてゐる。

何れにせよ、石炭カルテ[illegible]

的競争は漸次激化するを免れないであらう。

鐵鋼關税引き上げの運動[illegible]して考へられねばならない。

石炭カルテルから[illegible]された鉄[illegible]者は、上述の如く之に應戦すると共に、他方、一轉して自ら獨占化し、銑價を釣り上げることによつて下層段階からの重壓を加工部門に轉嫁し始めた。此運動は大正十四、五年から、とりわけ政府の熱心な援助の下に急速な展開をなし、今やそれは高度の全國的シンヂケート化さへしやうとしてゐる。そして此運動は單に鋼材生産者だけで支持されるばかりでなく、炭、鐵兩部門を縱貫的に支配する大金融資本團こそ又その重要な支柱となつてゐる。と言ふのは鐵鋼業のカルテル化こそは炭鐵兩部門の利害衝突を緩和するだけでなく、銑價の釣上げを通じて大炭鐵業者には二重の特殊獨占的利潤を保障する役割を努めるからである。

そして鐵鋼關税の引き上げは此鐵鋼業のカルテル化を擁護する一要件なのである。

だが、少しく、細目的考察を試みるならば、此鐵鋼業カルテル化自體によつて銑鐵生産者と鋼材生産者との間に上述せる炭鐵兩部門間のそれと全く同一の反撥的關係が尖鋭化し來れるを見[illegible]

上げ[illegible]對する[illegible]

れてゐる。[illegible]に、[illegible]

二[illegible]鋼材[illegible]

釣り上げられ、これだけ鋼材一貫的大[illegible]されねばならぬであらうから。

かく考へてくると、炭坑カルテルを出發點とし、漸次銑鐵及び鋼材諸部面に波及する各段階的カルテル（横斷的結合）化はその随伴物たる段階的關税壁と共に下層部門からの重壓を加工部門へ轉嫁することによつて、一應單純生産者の存續を保障する手段の如く見えるけれども、實は、これにも増して、縱貫的大結合體の特殊的優位に決定的強壓力を賦與する役割りをつとめるものに外ならぬ。換言すれば單純加工業者——即ちカルテル化された高價な原料を購入せねばならぬ處の劣弱加工業者は、自己部門のカルテル化と關税壁とのお蔭で、どうやら余命はつなげるけれども、も早、決して縱斷大結合體の競争者としての溌剌たる生存を支持する者ではない。若し、強ひて、その残存の史的意義を探求するならば結局、大結合體のために價格釣り上げの恰好な口實を與へることに外ならないであらう。

此發展過程は既に四半世紀以前に獨逸その他先進國が通過し

た處であるが、本邦重工業も、今、正に躍進的にだが、極めて忠實に、その足跡を辿りつゝあることが知られる。

〔６〕

重工業及び一般基礎部面の獨占化は本邦金產業の發展に重大た障害を與へ、前述せる過程によつて縱斷的大結合體の優位を「特殊的」に迄引き上げる。今やあらゆる大工業の領域では、單純な大資本の所有者たるだけでは決して此の特殊的優位を享有することは出來ない。從て、原料部面へ向つての從斷的結合への努力が確實に熾烈化してくる。だが、それは既に多面的觸手を全領域に擴充しつゝある二、三の超大金融資本網によつて占有され終つてゐる。

かくて、横斷的カルテル化の普及及びその內的構造の高級化につれて、全產業が漸次重工業的、基礎的陣營と輕工業的加工業的大集團へと分裂してくる。けだし、個々の部面に於て、上下段階的衝突が頻繁になり、且つ激化するにつれて、夫々類似的立場の大集團化を招致するからである。

此問題の典型的先進國たる獨逸では一九〇三—四年に重工業を中心とした高度シンヂケート化の時代が完了し、それに次で始めて全產業が重工業的中央組合と輕工業的聯合とに二分して對峙するに到つた。本邦では尙ほシンヂケート化が充分成熟してはゐない。だから、二大陣營への對峙はまだ左程露骨には表はれないが、然し、吾々は既に此大集團的抗爭の機運の醸成されつゝあるを觀取することが出來る。

それは一方に重工業的統卒者としての工業俱樂部及び日本經濟聯盟の最近の躍進的展開。

そして他方に輕工業的代表者としての商工會議所及び實業團體、殊に大阪實業團體の最近に於ける大結成への熱心な企圖。

その一例證として、前者が常に熱心なカルテル化と關稅引き上げ運動の促進者であるに反し、後者は概して自由貿易論者であり、關稅引き上げの頑强な妨害者である。

處が、獨逸では既に此二大陣營の對立の中に一の甚だ注目すべき制度が胎生されつゝあつた。そして、それは大戰以後に於ける兩陣營の融合——その結果としての全產業中央總括體の出現を俟つて、更に潑剌たる活躍を開始した。そはカルテル促進機關としての「カルテル課」(Kartellstelle) の發展に外ならない。此機關の役割りは就中、カルテル建設の積極的援助、全工業的發展の立場からする各カルテル政策の統制及びカルテル內外に於ける紛爭(即ち段階的カルテル間及びカルテル內部、カ

〜テル統制人、[illegible]
る。

此役割りからも推察されるやうに此運動は始めは専ら重工業中央組合の中に呼び起され――既に一九〇二年にその最初の土台が据へられてゐる――又屢々カルテル代表者の大會合を開催したりして部門的分裂の解決に努力してゐたのであつたが、余りに重工業的色彩が濃厚であつたゝめに輕工業聯合側の不信を買ひ、充分な成果を見ることが出來なかつた。が、大戦後には次の如き主因によつて此運動は著しき發展を遂げるに到つたのである。それは

(1)大戦後大資本的支配が著しく發展し、その結果利害關係の集中化が行はれた。殊に縦斷結合の發展が之を助成した。
(2)輕工業部門にも旺盛なカルテル化が行はれてきた。
(3)合理化運動が全産業的融合を要求した。
(4)革命運動の壓迫に對する全産業的共同戦線の要求。カルテル政策に對する批難及び社會化運動への反撥。

現に此機關―カルテル課―は謂はゞ「カルテルのカルテル」として、全カルテル運動の發展に貢獻すると同時に一方には下層部門の露骨な專横を抑壓して、之を穩和な妥協的な統制體に迄導くことに成功してゐる。此機關の援助によつて經工業部面

つた[illegible]
[illegible]への普及による　これによつて下層[illegible]への
[illegible]は漸次緩和されてゐる。

さて、翻つて本邦の現狀を見るに近時日本經濟聯盟などは、しきりにカルテル獎勵を起してゐるが、まだ、どこにもカルテル課等の設置されたことを傳聞しない。それは偶ぼカルテルの建設に急で、カルテル間の紛爭が激化する時期に到達しないためであらう。

が早晩、必然に、此時期はくる。否、既に吾々はその機運の隨處に醸成されつゝあるを觀取することが出來る。

たゞ、本邦では無産者の陣營が未だ甚だ微弱であるがために、消費者の側からカルテル運動に加へられる重壓がない。一見逆説的ではあるが、それが、全産業的共同陣營としてのカルテル課の建設的努力を緩怠ならしめるであらう。

〔7〕

本邦金融資本の如上の發展は必然に國家と資本との提攜を招來する。現に政府は多くの主要部面に於て獨占統制の重要政

策に直面してゐる。

私は、こゝで此の産業政策の興味ある實證的檢討に立入る余白はないが、政府がひたすらカルテル建設の援助に奔命してゐることは余りに明白な事實である。吾々は世界經濟の大勢に適合する産業立國策の一要目としてカルテルの作用が如何に加工部面の發展を阻止してゐるか、又加工部面のカルテル化が如何に一般消費者の利益を脅かしてゐるか、―かうした取締り政策の實行に就ては殆ど何等の施設の跡を見出し得ない。

それは何故だらうか。政府は畢竟大資本閥の傀儡たるに外ならぬからだらうか。此問題に關連して、數月前の本誌上で吉野博士は本邦の資本家が少くも從來は政府を驅使する程の支配力を把握してはゐなかつたと說明された。博士の研究によれば逆に資本家こそその關係事業の存續のために、あれやこれやの政府に款を通じねばならなかつた。之は畢竟本邦産業の未熟のために外ならなかつた。

假に此說明を妥當だとしても、事態は、今や、急速に展開してゐる。吾々は數ケ年の不況期の試煉に堪へて内地産業の基礎が著しく强大化したことを知ると同時に、大金融資本的結成の發展によつて、政治部面への壓力も著しく强化されたことを知る。それには從來個々の資本家が個別的利益を擁護するために、彼れ是れの政權に迎合せんとしたのと違つて、今やカルテル化された全部面的利益のために「經濟力の全重壓を、直接國家權力の上に作用せしめる」ことが可能になつた。此の集團的强壓の政治的效果が獨占前期の分裂せる産業資本のそれよりも遙に偉大であるべきは言ふまでもない。

既に日本經濟聯盟や工業俱樂部では何れも最近、その組織を變更して、從來の社交クラブ的外被を脫去し、正々堂々とその本來の使命の遂行に立ち向つて來た。こゝに彼等の本來の使命とは全資本的立場から一の明確な經濟政策を樹立し、その忠實なる遂行を政府に强要することとこれである。

こゝに到つて本邦金融資本は更に重要なる劃期的一飛躍を企圖しつゝあるものと言はねばならぬ。

低能内閣列傳

馬場恒吾

吾々は時々絶望的氣分に掩はれる。通るべき道理が通らなくて、通るべからざる無理が通るのを見るときがさうである。上に低能愚劣な内閣があつて、天下の幸福を獨占するに對し、下に壓迫されたる民衆が貧困悲慘の境遇に泣くのを見るときがさうである。これを假りに絶望時代と名づけやう。そしてかうした空氣を養成する所の重もなる原因である所の低能愚劣な内閣の存在を考へやう。考へまいとしても考へざるを得ない。吾々が今尚新らしく記憶してゐる所でも、所謂低能内閣と稱せられるべきものが少くない。大正五年の寺内内閣、十二年の山本權兵衞第二次内閣、十三年の淸浦圭吾内閣は其代表的なものだ。現在の田中内閣は蓋し壓卷とも云へやう

かうした内閣に、見遁すべからざる共通性がある。それは彼等が何故に低能振りを發揮するかと云へば、それらの内閣の首班は何れも内閣總理大臣たる事を唯一無二の最後の目的としてゐて、何かの經綸、若しくは政策を行ふ目的の爲めに總理大臣になると云ふのではないからである。彼等は共通に、口でこそ誠心誠意とか、忠君愛國とか云ふが、彼等の心理は本質的に功名心の權化である。醒めては握る、堂々天下の權と云ふ以外に彼等の夢は存在しない。それ故に總理大臣になつたときに彼等の精神的活動は行き止りになる。それ以後は、只どうにかして、此總理大臣たる地位に陶醉して居たい。其時間を永くしたいと思ふのみだ。人間が陶醉狀態に陷つてゐるのだから、其行動が低能愚劣になる事は蓋し已むを得ざる事に屬する。

其低能愚劣振りを檢討する事が、吾々の時代に何等かの參考となるであらう。

寺内内閣

寺内内閣は大正五年十月九日大隈重信の内閣の後を承けて成立したのである。其年の夏に、大隈侯は朝鮮總督であつた寺内伯に上京を求めた。其時大隈は寺内に向つて、立憲同志會總裁たる加藤高明伯と聯立内閣を組織する事を薦めたのである。所ろで寺内はそれを斷はつた。其理由として、まだ大命を受けないのに後繼内閣の事を相談するのは大權私議になるのみならず、歐洲大戰最中の重大なる時局に當つて、一黨一派に偏する内閣を組織することは、當を得たものでないと云つたのである。そして大命を拜した後にも、此趣旨に依つて一切の黨人を排して、純然たる超然内閣を組織したのである。

翌六年春の議會に於て、大隈内閣を支持したる同志會（後に憲政會）は犬養毅氏の率ゆる國民黨と共に、帝國議會に基礎を有せざる政府は信任せずと云ふ理由の下に不信任案を提出した。此に答へて寺内首相は

「政府は何れの政黨に對しましても專ら公平を支持して虚心坦懐其間に處して至誠胸襟を披き、擧國一致の實を行はんとしてゐるものであります」

寺内は長州軍人の中では割合に生一本な正直な人であつたらしいが故に、かうした擧國一致、政黨に對する一視同仁の理想も全く腹にない事を云つたのであるまい。實際の事實としては、寺内内閣は故人原敬氏の率ゆる政友會に支持され、翻弄されつつ、二年足らずの存在を續けたのである。だが、内閣組織の當初に於ては、各政黨に對して一視同仁の態度で政治を行ふ積りであつたかもしれない。少くとも公けに發表する内閣の意志としては各政黨に公平にすると云ふのであつた。即ち秉公持平と云ふ言葉が當時の通り言葉になつた。

寺内内閣が若し心の底から擧國一致の秉公持平内閣を夢みてゐたとするならば、如何に時代離れのした政治家が我國に存在してゐたかに驚かさるを得ない。擧國一致内閣は露西亞のソヴエト、伊太利のファシスト政治の如き、一黨專制の國でなければ可能でない。擧國一致内閣が望ましきか、否かは別として、それは普通の立黨政治とは兩立しない。普通の立憲政治は對立する二大政黨、若しくは多數の少數黨の離合集散と云ふが如き、政黨の闘爭に依つて政治が運用される。政黨間の闘爭が苛烈になる事に弊害の伴ふ事は勿論であるが、政黨が少しも爭はず、汎べての問題に妥協と苟合を連續的に行つた日には、政治は急轉直下に墮落の途を辿る外はない。東京市會に於て、政友派と民政派が妥協するとき、何日でも何かの利權問題を連想せ

しめたのは良き例である。國家は政黨の存在であるのに、存せざる政黨は全く味のない物の如くした。寺内の擧國一致内閣を理由とする說は此議會政治の原則を無視したものである。

國民黨の犬養は初めは憲政會を見捨つて不信任案を提出せしめ、後には政友會と一緒になつて寺内内閣を支持した。これは憲政會の絕對多數を打破する爲めに、議會解散を招來する彼れの苦肉の策であつたと云はれた。併しさうした内情の有無に關らず、不信任案の提出理由を說明した所の彼れの演說は要領を得たものであつた。彼れは云つた。日本の憲法から云へば、總理大臣の任命は大權の發動であつて、政黨人でなければ大命を拜する事が出來ぬと云ふ事はない。併し事實の上から云つて、大命を拜して大任に當る以上は如何にして圓滿に政治を行ひ得るかを考へねばならぬ。汎べての政務の執行に、議會の協贊を必要とする以上、議會に基礎なき政府で、どうして政治が行へるかと。

これは苟くも政治の常識を具へてゐるものならば、誰れも抗辯出來ない理論である。然るに寺内は、此犬養の說を聞き流しにして、前に引用した何れの政黨に對しても公平を旨とする意見を述べた。其次ぎに正面の反對黨を代表する尾崎行雄氏が演壇に上ると、政府は尾崎に演說をさせないで、衆議院解散の詔

いを促進した。

かうした小法な遣り方に、從つて政府側へつかんとする者が出た。得られぬ。政府側の人は政府が巧妙な作戰で反對黨の口を封じたと云つて得意然たるものもあつたが、政府が堂々たる論議を避けた事が、直ちに政府の無氣力を推定せしめるものであつた。官僚政治家の組織する政府の情けなさには、さうした人心の機微に氣の付く者がなかつた。

已に憲政會を敵に廻はした以上、寺内内閣は政友會の支持に依賴するより外に存立する余地はなかつた。政友會の總裁は强か者の原敬であつた。寺内内閣は完全に原敬に依つて死命を制せらるゝに到つた。

解散後の總選擧に於て内閣は自分の味方代議士を作らんとして、それで密かに政友會の候補者に援助を與へて自分の腹心たらしめんとした。原敬は内閣に向つてキッパリ此援助を斷つた。政友會候補者に好意を表されるのは難有いが、政友會幹部の手を通さずして、直接に候補者を援助する事は斷然お斷り申すと、原は原一流の齒切れのいゝ文句で一本釘を差したのである。官僚政治家が他人の畝にこつそり種蒔きするやうな仕打ちが癪に障つたと見へる。

原がよく話してゐた事がある。寺内内閣は原に斷はられて

後、政友會に手を延ばす事は遠慮した。其代りに寺内内閣直參の候補者を立てゝ、政府直參の與黨八十名を作らんとする計畫を立てた。其計畫を見ると、何分選擧に經驗の乏しい官僚政治家が立てたものであるから、とても見當違ひが多くて物になつてゐない。それで自分も氣の毒に思つて、少しは注意して計畫の立て直しをやらした。それでも選擧の結果は政府直參黨と云ふものは僅かに四十名當選した許りであつた。全く憫れなものだと。

かうして寺内内閣は初めから其與黨の政友會に馬鹿にされてゐた。然るに總選擧後に、内閣は外交調査會なるものを設けて、外交の重要問題はそれに相談すると云ふ事にした。外交調査會の起原は、大隈内閣の時に三浦觀樹將軍の肝煎りで、原、加藤、犬養の三黨首會合が行はれ、外交を政爭の外に措くと云ふ趣旨を申合せたのに始まる。寺内内閣は其趣旨に從つて、三黨首を外交調査會に收容せんとしたが、加藤憲政會總裁は、これは内閣の輔弼の責任を亂すもの、屋上屋を重ねるやうなものだと云ふ趣旨で斷はつた。原と犬養は外交調査會員になつた。本野外務大臣が其幹事長になつた。本野外相は初め議會に於て、帝國の外交方針は自分の方寸より出でると言明した。然るに後に外交調査會の幹事長たるは何事ぞやと議會で反問せられた。

外交調査會が出來た爲めに、外交問題では政友會、國民黨から正面攻擊を受ける心配はなくなつた。これは内閣の利益と見られてゐたが、此二黨は外交調査會の有無に關せず或程度迄は政府を支持すべき立場に居つた。寧ろ外交調査會が出來た爲めに、外交上の施設に關して、寺内内閣は事毎に外交調査會の制肘を受ける不利益があつた。西伯利出兵問題が起つたとき、本野外相は大々的出兵説であつたに關らず、原は只米國への義理合丈けの出兵説であつた。本野は遂に辭職し、寺内は米國に引きづられて變んな出兵をなし、後の内閣に禍を殘す破目になつた。出兵問題に關しては、出兵するもしないのも、内閣自身が自主的になれば少くとも趣旨は徹底したと思はれる。然るに内閣は外交調査會に制肘されて、自分の思ふ事を自由に行ふ事が出來なかつた。内閣は初めより鼎の輕重を問はれてゐたが、其二ケ年の存在の間に、與黨からは益々内兜を見透され、世間的には益々不人氣になり、大正七年夏には已に半死半生の有樣であつた。だから其際に米騷動が起ると、たまりもなく内閣は潰れて、原敬が政友會内閣を組織したのである。

――第二次山本内閣――

原内閣は多くの政治上の罪惡を犯したであらうけれども、こを低能愚劣の内閣と云ふ譯けには行かぬ。寧ろ反對に余りに賢が冴へたと云へる。政友會をして二百八十名の絶對多數を占めしめ、政黨内閣の威風堂々たる有様を發揮した。原の生存中は元老も、軍閥も、貴族院の華族議員、官僚政治家も、皆原の鼻息を窺ふと云ふ有様であつた。政友會の横暴は惡むべきものであつても、政黨が山縣系の陰謀政治家を屏息せしめた點は痛快と云はざるを得なかつた。原の死後、原内閣の延長として存在したる高橋是清子の政友會内閣は如何に贔負目に見ても低能愚劣と云はざるを得ない。それは八ケ月の短かき生命の中に改造非改造の騒ぎの末、内閣不統一を暴露して倒れた。其の低能振りは疑のなき所である。併しこの内閣は原内閣の延長であつて、獨立の一内閣として取扱はれぬが故に、此列傳中からは省く。

次ぎの加藤友三郎内閣は世間の期待に反して低能ではなかつた。加藤首相は海軍々人であるに關らず、軍人らしく鯱硬らず徒らに大言壯語せず、默々として仕事をする間に、其頭のよさを發揮した。在職一年有余の間に、行政整理で相當の功績を擧げ、後藤新平子にヨッフエ交渉を任かした點などは彼れに政治家としての素質のある事を示した。彼れの内閣は他に欠點があるにしても、之を低能内閣と云ふのは當らない。

[illegible]任[illegible]臣として一個の英雄であり[illegible]其音吐朗々たる事が世人の記憶に殘つてゐた。[illegible]内閣がシーメンス事件で倒れて以來彼れに[illegible]十年。其間も倫敦タイムスを讀んでゐるので、世人は彼れを目し一何か爲すあるの人物だらうと思つてゐた。加藤友三郎の病死で、彼れが内閣組織の大命を拜して、東京に乗出して來たとき、世間もそれを英雄奮起と見ると共に、彼れ自身も亦英雄氣取りで、崇嚴無比の擧國一致内閣を作らんとした。即ち彼れの胸に描いた閣員の資格は一つはそれが總理大臣級の人でなければならぬこと、一つはそれが政黨首領でなければならぬことであつた。此方針に從つて彼れは内閣組織の交渉を始めた。彼れは各政黨の首領に入閣を求めたが、高橋政友會總裁、加藤憲政會總裁は共に入閣を斷つた。只革新俱樂部の犬養が承諾した。總理大臣級の人物としては後藤新平、田健治郎、田中義一、平沼騏一郎、岡野敬次郎などの顔振れを揃へた。即ち内閣組織の方針の一つである所の、總理大臣級と云ふ注文は達せられて、外観の威風堂々たる形容丈けは整つた。同時に今一つの方針であつた所の、各政黨首領を網羅すると云ふ内容の實質的の威風堂々は全

然失敗に歸した。

此内閣組織の最中に大地震が起つた。それ故に山本内閣は應急工事として比較的無造作に出來上つたが、其出來る上に山本伯の箔はかなり剝げたのである。大命を拜した後の感想を述べて、伯は伯が出掛けると新聞記者の自動車が何十臺となく伯の車を追つて來る。それは偉大な壯觀だ。十年前はそんな事はなかつたと云つた。それを聞いた新聞記者は山本老いたりと結論を下して了つた。

寺内内閣が屋上屋の外交調査會を拵へた如く、山本内閣は矢張屋上屋の復興審議會を拵へた。外交調査會が、内閣に累を及ぼした如く復興審議會も内閣に累を及ぼした。審議會には高橋是清、加藤高明、伊東巳代治、大石正已などと云ふ政界の巨頭を入れた。さうした巨頭を入れることは山本首相の虚榮心を滿足せしめる効果があるのみで、實際の仕事を運ぶ上には、只役厄介になる許りであつた。震災復興費として後藤内相は初め十五億圓説を唱へたが、それが段々萎縮の徑路を辿つて、閣議では七億になり、審議會で五億九千萬圓になり、臨時議會では政友會の爲めに削減せられて四億六千八百萬圓になつた。

存命僅かに四ケ月にして、山本内閣は虎の門事件で倒れた。虎の門事件で倒れたといふけれども、虎の門事件がなくとも、山本内閣は已に生存の氣力を失つてゐた。この事件が起つたとき、山本首相は未練を捨てる事が出來ず、通りに一應の進退伺を出す事を主張した。之に對して、岡野敬次郎、田中義一などの閣僚が斷として總辭職説を執つた。其結果、山本伯も已むを得ず辭職の決心をしたのである。

其時の閣僚で口の惡い男が、山本首相を批評して、伯は鯱硬つてばかり居て、何んにも出來はしない。例へば仙台平の袴を穿いて、坐はつた儘で小○を足す男のやうだと。

普通人の水準から見れば、山本伯は確かに英雄だ。だけれど、英雄が英雄たる事を自覺した時には最早英雄でなくなつてゐる。第二次山本内閣が低能であつた原因は其處にある。

——清浦内閣——

山本内閣の次ぎの淸浦内閣も亦勇敢に低能振りを發揮した。清浦圭吾子は大正十三年一月一日參内して内閣組織の大命を拜した。一日二日と考へた後、三日の朝は大命を拜辭する決心で參内した。然るに宮中で平田内大臣に說かれて、再び内閣組織の決心をした。そして内閣を組織した事は組織したが、閣員の人選は汎べて貴族院研究會の幹部に一任したのである。清浦は床の間へ置き物に過ぎなかつた。

此内閣は直接的に云へば研究會が作つた内閣であつて、[illegible]の研究會には虎の門事件の起つた事に鑑み、人心緊張の當時に於[illegible]正する爲めに、上下兩院の多數黨たる所の政友會と研究會を連契して、鞏固なる内閣を組織する必要があると提唱した。併し政友會は此議に賛成しなかつた。其結果研究會は貴族院各派から閣員を求めて、純然たる貴族院内閣を組織した。

政友會内に此内閣を助くべしと云ふ說が起つて、其說を唱へる山本達雄男、床次竹二郎、中橋德五郎、元田肇の諸氏は一四六名の代議士と共に脫黨した。それが政友本黨となつて清浦内閣の援助をした。政友會殘留組一二九名は憲政會、革新俱樂部と共に内閣反對の護憲運動を起した。

清浦内閣は一月三十一日衆議院を解散し、五月十日に總選擧を行つた。其間百日の余裕を置いて、與黨たる政友本黨に壓倒的多數を取らしめんとした。内相水野錬太郎、法相鈴木喜三郎兩氏が重に采配を振つたのである。然るに政友本黨の當選者僅かに一一四名、そして護憲三派が壓倒的多數を占めた。清浦内閣は特別議會を六月二十五日に召集して置いて、其議會の未だ開かれざる六月七日に總辭職をした。

清浦内閣は其在職中に皇太子殿下御成婚の式を擧げた。政事方面の仕事としては只總選擧を行つて、奇麗に敗北したと云ふ[illegible]併し合つて見た點では[illegible]を評してあれてたか〳〵の[illegible]ろ殺か黑からうとは思へぬ。彼れが陰鬱たる藩閥政治家に[illegible]れて、不人氣たる特權内閣の首班になつたのは寧ろ彼れの好人物たる證據ではあるまいか。

何が彼れをして總理大臣として出る決心を起さしめたか。彼れには是れと云つて天下に施すべき經綸抱負があつたのでもない。只彼れは十年前に内閣組織を企てゝ失敗した。其時は鰻の香を嗅いだのみだと云つたので、彼れの名と共に鰻香内閣と云ふ香しからぬ名が連想され勝ちであつた。それ故に彼れが眞實の内閣を組織した事は、彼れに取つては鰻香の臭味を洗ひ落す事になつたが、それは毫も低能な清浦内閣を有能な内閣に變化せしめたのではなかつた。清浦内閣が低能であると云つても、それは内閣を組織する各大臣が低能と云ふ意味ではない。現代に貴族院を基礎とする内閣を組織すると云ふ所の觀念其物が低能であるのだ。其表現たる内閣が低能の權化たる事も亦已む得ない。

――田中政友會内閣――

護憲三派の加藤内閣は普通選擧法を制定し得た事丈けに依つ

ても、低能内閣たる事を免れる。加藤内閣の延長たる若槻内閣も、税制整理案を通過せしめた頃は低能でなかつた。末期の三黨首妥協と、政友本黨に對する政權盥廻はしを企てる頃は心神疲勞、意氣銷沈、少なからず低能の空氣を漂はしたが、高橋内閣を除いたと同じ理由で、若槻内閣を低能列傳から除く。

現在の田中内閣は貴族院から重大な決議を突き付けられてゐる。即ち優諚問題と謂はれる所の、水野文部大臣の進退に關し田中總理大臣の採つた處置は輕卒不謹愼の甚だしきものにして、總理大臣としての職責に缺くる所ありと云ふのである。或人が之を評して、田中内閣はこれで死刑の宣告を受けたのだ。それがまだ辭職しないのは只絞首台からぶち下らないと云ふ迄の事だと。死刑の宣告を受けた内閣が吾々の前に迂路つくのを見るとき、吾々はどうしてもそれを有能な内閣とは云へない、寧ろ日本の低能内閣の秀逸を見せ付けられてゐる感じがする。

過去二年足らずの在職中に、田中内閣は果して何をなし得たか。田中首相の一枚看板は軍人的に見た支那問題であつた。内閣成立當初から、聲を大にして積極政策を唱へ、山東へは二度迄出兵し、其費用のみでも一億に近からんとする。そして日本は果して何を得たか。恰かも網にかゝつた小鳥の如く、拔き差し出來ない破目になつてゐる。支那に於ける排日は日本の經濟に大なる打擊を與へ、滿洲の空氣は誰れでも知つてゐる如く日本人に住み悪くなつてゐる。此事態をもち來した内閣を唯に無能低劣と云ふ言葉で批評するのは余りに之を寛大に取扱ふものである。それで少しも反省しない政府は無神經と云ふよりは、寧ろ國家に對する良心がないと云はれる。

田中内閣は其成立以來本能的に議會から逃げるかの如き行動を採つた。昨年春の解散された議會では、政府は施政方針、豫算提出の演說をなし、反對黨が質問演說を初める前に衆議院を解散した。恰も寺内々閣が内閣不信任案の討議で、憲政會に口を開かしめずして衆議院を解散したと同じ筆法である。

解散後の特別議會では會期二週間の所を停會六日間で費やした。そして其議會の濟むのを待つて、山東出兵を決行し、治安維持法の改正を行つた。重要政策は議會を無視して行ふ。それは勇氣があるやうに見へる。併し事實は議會で爭ふ勇氣に缺けてゐる事を曝露してゐるのだ。

田中内閣の成立から特別議會迄約一年は鈴木内相時代であつた。鈴木の官權思想が政府の空氣を支配して、總選擧の前日には、内相自身が議會政治否認に似た聲明を發表した。鈴木内相は後に議會で彈劾されて其職を去らねばならなかつた程の干涉を行つたが、總選擧の成績は政府に採つて思はしくなかつ

た。即ち政友會と民政黨の意思表示如何によつて、政府は斷然議會を切抜ける事にすら四苦八苦の苦しみを嘗めた。

鈴木內相辭職後の內閣改造で久原房之助氏が遞信大臣になつた。それ以來、田中內閣は久原時代に移入した。鈴木の官權思想に代はるに久原の金權思想が政府を支配した。鈴木の選擧干涉がなし得なかつた所を、久原の議員操縱がなし得たかの觀がある。今年の議會に提出された政府不信任案が六十四名の多數で否決された事が其指數となる。

金の切れ目が緣の切れ目と云ふ事は、汎べての金權中心主義に適用出來る。田中內閣は貴族院から致命的の決議案を突き付けられたとき、愈々となれば衆議院を解散すると豪語した。併し解散に要する金は何處にあると消息通は反問してゐる。政府筋の金庫が涸れつゝあるとは政界の常識になつた。生き延びる壽命の短かい政府の爲めに、選擧資金を貢ぐ資本家はない。金權政治は油が切れると同時に火が消へる仕組みになつてゐる。

田中內閣は政黨內閣である。然るに店前に陳列する所の商品は田中自身の軍人思想、鈴木の官權政治、久原の金權政治である。低能內閣でなければ、さうした賣れない品物を陳列する筈がない。

汎べての低能內閣は總理大臣の思想が、總理大臣たる地位に

解散して居られないと云ふ以上に出でないのだ。[illegible]即ち無能力になるより外にはないではないか。

吾々の民族は今重大な內部思想に悩まされてゐる。內部思想とは彈壓と抗爭の激化である。彈壓は政府者の內部狀態を維持する必要から起り、抗爭は民族が生きんとする本能から起る。それらの低能內閣の首班は口を開けば直ちに至誠奉公を云ふ。彼等の至誠奉公は蓋し事實であらう。併し現代の複雜したる社會機能に於ては至誠奉公の念ばかりで政治の運用は出來ない。政治家は社會發展の實際に對する科學的見識を必要とする。それがなき政治家に國を托するのは、素人の運轉する自動車に乘るやうなものだ。吾々はさうした自動車に乘つてゐる者の如く絕望の悲鳴を擧げてゐる。

日本の國債と國富

太田正孝

一

ちかごろ、私たちの取扱ふ財政經濟問題中で、公債ぐらゐ論議の焦點となつてゐるものはない。

この議會における財政問題の中心も、公債にあつたといつてよい。とくに未曾有といはるゝ昭和四年度の豫算が、政友會の年來主張して來た積極政策を實現するために——その目星しいものは殆んど無いにしても——剩余金を全部引き當てたりしてもなほ足らず、少なからざる部分を公債に仰ぐことにしたからである。また、金解禁問題を解決するためには、その準備としても、解禁後の處置としても、公債の増發を避けねばならないといふ正理に背くことになつてゐるからである。さらに後年度に亘る財政計畫よりするも、地租および營業收益税を委讓するがためには、その代り財源の少なからざる部分を公債に求むることゝなつてゐるからでもある。尤も、この點について當局者は、その然らざることをいひ張つてゐる。電話事業公債も、震災復舊公債も、鐵道・台灣總督府・製鐵所各特別會計よりする減債基金の繰り込みも、みなこの委讓税問題とは因果の關係がないといつてゐる。さりながら、どう考へても、税を無理に委讓するといふ事がないならば、かやうな公債政策上の工夫をする必要がないといふ意味において、政府當局者の答辯は、しどろもどろであるといはざるを得ないからである。——なほそのうへに、政府の農村振興のためにする案の實行が、いづれも公債問題に引かゝつてゐるからである。公債に引かゝつてゐるがゆえに、財政當局者たる藏相と主務大臣たる農相との間に爭ひを生じたともいひ得るのである。すなはち、自作農維持創定案に

しても、[illegible]資金の[illegible]轉にしても、農工債券の發行なり未[illegible]證券の增發を來すことになるからである。

また公債政策は、たゞに財政計畫上の收支適合問題としてのみ考へるべきものでないことは、いふを俟たない。それは國民經濟上に重大な影響をもたらすものであるからである。公債の增加し累積されてゆくことは、金融界にも投資界にも強く響いて來る。公債の增發されるにつれて、公債の市價を次第に低下せしめ、その結果、擔保に供して融通を得んとするものも、擔保にとりて融通したものも、これを處分して金にかへんとするものも、ともにともにソロバンに喰ひ違ひを生ずることになるからである。私たちは、それをしも我利一點張りの銀行業者などのためにのみ案ずるのではない。流通經濟が健全に發達してゆくために主張するのである。なほ、かういふ公債を利用するものゝ立場を離れて、公債が國民一般の負擔となる關係においては、さらに切實に考慮を要するものがある。公債は利子を拂ふことはもとより、ゆく先き元金をも返さねばならぬ——それは、とりもなほさず、將來の國民の負擔となることは、私たちが過去の公債によつて苦しんでゐる事實の證明する通りであるからである。租税は現代の國民の負擔であり、公債は將來の國民の負擔となるといふ財政學上の公理は、平凡ながら貴い意味をもつて[illegible]くべしたなどと主張するものではない。たゞ公債の累積された[illegible]く姿をながめて、心靜かであり得ない——そこに然るべき限度があるではないかといふ意味で攻究してみたいといふのにすぎない。それは國富のいく割までゆるさるべきものとするのか、國民所得と如何なる割合を保つべきか、それらの標準がとらへられない場合にはどうすればよいか——問題の要求するところはハッキリしてゐるが、答案をそこはかとなく生み出さうとする大膽な企である。

二

問題を進めてゆくまへに注意すべきことは、一と口に公債といはるゝなかに、いろ〳〵の種別があることである。——第一に國債と地方債との別を見なければならぬ。大藏省の發表によれば、本年一月末の國債は五十八億七百余萬圓になつてゐる。これに昭和四年度の豫算による一億九千八百萬圓を加へ、さらに交付公債をも加へるにおいては、萬分の百十六および前年に生じた剩余金の四分一の償還をしてゆくぐらゐにては知れたもので、結局六十億圓を突破するの日は程遠くないと見なければならぬ。それに加ふるに地方債は昭和三年十月末において十六

億八千余萬圓にのぼり、同年末には十七億二千余萬圓になつたであらうといはれてゐる。しかも地方債の増加率は最近は國債のそれよりも著しく、大正十三年はその前年より九千三百余萬圓を、十四年はその前年より一億一千一百余萬圓を、十五年はその前年より二億三千三百余萬圓を、昭和二年はその前年より二億五千三百余萬圓を、昭和三年もその前年より二億圓以上も増してゐるからである。すなはち、現在の國債地方債は合して七十五億四千萬圓になり、そのこれが百億圓となることも、當局者が、今のやうな遣り口を以てしてゐるかぎりは、数年の内に實現せらるゝことになる。それはさておき、國債と地方債との種別は、國民負擔の關係においては、その異同を辯ずる實益は少くないが、たゞ財政經濟の基準からいへば、先づもつて心すべきは國債であり、その累積の大なることである。——第二に公債は、これを内國において募集されたものと外國において募集されたものとによつて、考へ方を別にしなければならぬ。ロシアのソヴエツト政府が踏み倒さんとしてゐるのも、外國債に對するものが少なからずあるがゆゑに、問題が特にやかましいのである。支那の國民政府の外國債踏み倒しの聲明についても、また同じである。しかし、國民の負擔とする限りにおいては、内國債と外國債は異るところがない。本年一月末において、國債五十八億七百余萬圓中、内國債は四十三億五千四百余萬圓、外國債は十四億五千二百余萬圓の割になつてゐる。また地方債は、東京市大阪市横濱市名古屋市の外債が昭和二年十月末に二億五千八百余萬圓になつてゐるから、内國債は十二億五千七百餘萬圓といふことになる。すなはち國債地方債を通じて外國債は十七億一千余萬圓で、總額七十五億四千萬圓の二割三分弱に當る計算である。——第三に同じ國債でも、取扱ひ關係からいつて、その一般會計に屬するものと、特別會計に屬するものとの區別もある。從來の償還計畫においては、一般會計に屬するものから先きにしてゐる。しかるに委讓税の財源として鐵道や台灣總督府などの特別會計に屬するものからも償還せしむることにしようとするから問題となつたのである。しかし、その區分は公債限度論の關するかぎりにおいては、その重要さがない。——第四に、そして最も重要なる公債の種別は、その公債が生産的のものなりや不生産的のものなりやによる區分である。一言にしていへば、兩者はその償還力を再生するか否かといふことに主點が置かれてゐるからである。苟くも收益をあげ得る事業に投資されたものであり、元利金を償ひ得るソロバンの立てられる生産的公債なるにおいては、その計畫が確實公正であり、その見込のデタラメでないかぎりは、——募集市場との關係は別として——

一應差し支へないといつてよい。それに反して、戰爭もしくは事變に對する軍費支辨のためにする如きは、純消費的に傾りを伴はないもので、最も注意すべきものである。なほ間接に國民經濟に收益をもたらすものは、用心ぶかい立場からすれば、注意を要するものであり、また無理にも利益を生むやうに說きつけて政黨などのために不急な事業を公債財源によつて計畫しないともかぎらないことを留意しなければならぬ。イギリスの傳統的財政政策が戰費支辨の第一位に租稅をもつてするのも、如上の注意から出てゐるものであるが、今次の世界戰爭の如く費額の非常に高まつて來るにおいては、その割合において公債に依ることとの多いのは、やむを得ないことであらう。兎に角、問題は、かやうな經費の支辨を租稅にするがよいか公債によるがよいかの分岐點となるのである。それはさておいて、現在わが國の公債においては生産的のものと不生産的のものとの區分は、どうなつてゐるであらうかを調べてみたい。私は、こゝに大藏省第五十三回年報により、昭和三年三月末における國債の起債目的別による額を列擧して見る。

（イ）諸祿處分もしくは舊藩債處分のため、すなはち制度變更の目的をもつてせるもの九千六百余萬圓。

（ロ）鐵道敷設（十四億七千七百余萬圓）築港・疏水・道路開通・[illegible]・[illegible]など[illegible]の目的をもつてせるもの十六億八千二百余萬圓。

（ハ）軍備擴張（七千九百七十余萬圓）および二戰役（十六億〇三百七十余萬圓）、すなはち軍事の目的をもつてせるもの十六億八千三百余萬圓。

（ニ）紙幣償却（一千余萬圓）國際借替（三億二百余萬圓）煙草および鹽專賣（千二百余萬圓）行政整理および軍備制限整理（九千余萬圓）、すなはち財政整理の目的をもつてせるもの四億千五百九十余萬圓。

（ホ）臺灣（一億三百余萬圓）朝鮮（二億七千余萬圓）樺太（二千百余萬圓）關東州（二百余萬圓）、すなはち拓殖事業の目的をもつてせるもの四億〇百余萬圓。

（ヘ）復興事業の目的をもつてせるもの三億七千五百余萬圓。

（ト）爲替資金の疏通その他（四億四千七百余萬圓）對支借款關係三銀行債務整理（一億二千六百九十余萬圓）震災手形損失補償および善後處理（一億六千九百余萬圓）、すなはち金融調整の目的を以てせるもの七億四千三百余萬圓。以上累計五十三億九千七百余萬圓といふことになる。

このうちで、間接に生産上收益をもたらすものとして築港、疏水・道路開通などのものをも含めたる殖産興業の目的をもつてせるもの、植民地における拓殖事業のためにするもの、および復興事業のためにするものの三種を以て廣い意味の生産的公債とするときは二十四億五千八百余萬圓となり、總額の四割五分に當る。これを控除したる二十九億三千八百余萬圓は不生産的公債となり、總額の五割四分に當る。なほこの外に當然國庫の負擔に歸すべき米穀證券六千五百萬圓を加ふるときは三十億圓を超過することになる。しかもその不生産的公債の二分の一以上が戰費のためにするものにして、如何に日清戰爭（公債財源一億一千五百萬圓）および日露戰爭（公債財源十五億五千余萬圓）が今日にいたるまで、財政上の壓迫となり、いつ償還し得るに至るかを思へば、悲觀せざるを得ない。同時に、財界の好況時代において、當局者が公債償還の道に精進せず、積極政策にのみ浮身をやつてゐた罪を問はねばならぬ。その他制度變更のためにする古くからあるものや、財政整理のためにするものや、對支借款關係のものや、震災手形補償のためにするものなど、如何にも早く整理しなければならぬ性質のものに屬する。

つぎに地方債についてみると、昭和二年十月末の計算によれば、教育費のためにするもの一億三千五百余萬圓、衛生費のためにするもの一億八千百余萬圓、勸業費のためにするもの四億六千四百余萬圓、土木費のためにするもの四億五千五百余萬圓、舊債償還のためにするもの三千八百余萬圓、その他一億三千九百餘萬圓、合計十五億千五百余萬圓となつてゐる。『その他』のうちに如何なるものがあるかは不明であるが、おそらく生産的のものはなかるべく、生産的公債として舉げ得べきものは勸業費および土木費のためにするものだけであつて、合せて九億一千九百余萬圓、すなはち總額の六割に當る計算となる。それを差引いた殘りの不生産的公債は五億九千六百余萬圓となつて、總額の約四割となる。國債の調べは昭和三年三月末であり、地方債の調べは昭和二年十月末であつて、兩者は計算の時を異にしてゐるが、このうちから不生産的公債を拾ひ出してみると、三十五億三千四百余萬圓になり、それに米穀證券の既に欠損となるべきものを加ふれば、三十六億圓となり、公債總額の五割二分見當になるのである。

要するに、公債の累積せられることの注意すべきは、不生産的公債の如何といふことにあり、とくに國債のそれが問題となるのである。公債の限界論も中心をそこにおいて調べを進むべきであらう。

三

たしか中橋商工大臣であつたと記憶するが、昭和四年度の豫算編成について世間が公債の增發されることを難じてゐたのに對して、わが國の國富に對して百億圓見當までの公債は構はないといつたことがある。それは、生產的公債と不生產的公債とに分けたものでなく、公債總額に對するものであつた。もとよりその主張は、積極政策實現のために財源に窮して公債に求むるのやむなきに至つたことを辯護するためのものであつた。しかし、私たちは金解禁問題といふ大切な經濟復興問題を控へてゐる際に絕對的に公債を增發することを否なりとしてゐたので、この說を以て、背理のものとみてゐたのである。それにしても——國富に標準を求めるにしても、それは幾何あるのか。その國富に對する百億圓はいくらに當るのか。私たちは、その材料を求むるのに苦しまざるを得ぬ。

わが國の國富は、大正十一年國勢院時代に內閣統計局が、戰前戰後の國勢調査の例によつて、大正十年末について推算したことがある。それによると、千二十三億四千三百四十九萬圓といふことになつて、戰前の大正二年末を三百二十億四千三百十三萬圓、戰後の大正八年末を八百六十億七千七百〇七萬圓としてゐる。その千二十三億圓の內譯は、かうなつてゐる。

（單位百萬圓）

土地	二三、二四七
山林	三、五二三
海湖川および港灣	五、一五八
樹木	一、七四七
建物	一六、三二七
家具および家財	九、六八四
製造工業機械	一、九八七
鐵道および軌道	三、五四四
農產品	三、三二〇
工產品	二、三一一
貨幣および金銀地金	一、八一三
各省財產	六、四八三

大藏省でも、かつて議會の答辯に備ふるために、國富を推算したことがあるが、これは公表されてゐない。否、その調査設備もなくして、かりそめの數字を示すことも出來ないであらう。こゝに掲げた統計にしても、その資料について、個數なり單價なりを一々檢討してみるのでなければ、何ともいへない。このうちにある各省財產の性質も判明してゐないが、大藏省當

總管財局の調査による國有財産にして、會計檢査院の承認を得て議會に報告されたものによると、昭和三年三月末現在は——一般および特別會計を通じて公有財産は四十三億一千七百余萬圓、森林財産は十七億九千六百余萬圓、雜種財産は三億九千萬圓、合計七十五億三百余萬圓といふ計算になつてゐる。その構成財産は、土地・工作物器具機械を主とし、外に建物・立木材・船舶・鑛業權・株式および持分がある。かうした財産は、貨幣價値上の測定によれば、物價指數との關係もあるが、大體年とともに増加するものであることは疑ひない。それはさておいて、大正十三年末の國富に對し、同年末の公債五十一億一千六百萬圓（國債四十一億九千七百五十余萬圓・地方債九億一千八百五十萬圓）は五分に當り、不生産公債二十八億六千三百余萬圓（國債二十三億五千八百余萬圓地方債五億四百余萬圓）は二分四厘になる。國富の増進をそのまゝにして公債と比較するときは、昭和四年一月末の國債五十八億七百余萬圓と昭和三年十月末の地方債十六億八千余萬圓を合せたる七十四億八千七百余萬圓は、國富の七分三厘に當つてゐる。そして先きに述べたる最近の不生産公債概算三十五億三千四百余萬圓は、國富の二分四厘といふことになり、大正十二年末と同じ比率を示してゐるから、國富の増したゞけ、却つて輕い割合となるべきである。しかも、その位の比率ならば公債の限界としてゆるさるべきかとすいふことは、輕々しく定められない問題である。標準とすべきものはないが、甚だ乏しきうちに内閣統計局の列國國勢要覽昭和三年版から、その重なる國々の國富と國債との割合を計算して參考としてみやう。これも調査の基年などにおいて不揃ひであるが、やむを得ない。

（單位百萬圓）

イギリス國富	一九二五年	二三六、三五〇	國債（一九二七年三月末）七、七三二百萬ポンド	換算 七六、三八〇	割合 〇、三二五
アメリカ合衆國國富	一九二五年	七八三、三六六	國債（一九二七年六月末）一八、五一〇百萬ドル	換算 三七、〇二〇	割合 〇、〇四七
フランス國富	一九二五年	一〇三、五三〇	國債（一九二六年八月末）三三三、一七五百萬フラン	換算 一二五、〇六八	割合 一、二〇八
イタリー國富	一九二五年	四四、七三六	國債（一九二六年六月末）一二四、一〇九百萬リラ	換算 四四、一六〇	割合 〇、九八七
ドイツ國富	一九二二年	七二、六二四	國債（一九二七年三月末）四、三五一百萬ライヒスマルク	換算 二、〇七九	割合 〇、〇二九

右のうちドイツについては賠償金關係を含んでゐないものであらうから、除く方がよいであらう。わが國の國債だけの比率は、上述の富に對して五分七厘に當るから、アメリカ合衆國のこれにはおよぶべくもないが、イギリスよりもよく、フランスやイタリーのそれは、如何にも戰爭による打撃の少なくなかつたことが察せられる。私は、甚だ不安心な材料によつて公債との關係を探り求めてゐるのであるが、根本的にいへば、國富に

對する國富の割合を求めたところが何になるであらうか。これは個人の財産に對する負債が、その財産を直接評價とするときはもちろん、さうでないときにも有力な參考になるのはと、ちがつてゐる。また外國債に對する見返りとしても、動産ならばまだしも、ほとんど意味をなさないものもあるではなからうか。私は昨年パリに遊んで、アメリカの投資家が、世界の寶ともいふべきルーブルを見積ることに首を傾けて、つひに失敗をはつたことを思ひ出して、皮肉な笑ひを禁じ得ない。また、ドイツの賠償金問題についても、實物賠償の窮策なることを思ひ、かつ、いま開かれてゐる財政専門家會議が、抽象的ながらもドイツの繁榮指數協議分科會を開いてゐることの合理的なるを信じたい。

四

私の目ざす結論は、なか〳〵得られないうちに與へられた紙幅は盡きさうである。——私は、公債は國富と比較するよりも、國民所得と比較する方が、より理詰めであらうとおもふ。しかも、それさへ目星しい材料がなく、比較すべき各國についての資料も手許にない。内閣統計局の調査によれば、國民所得は最近著しい増加をなしてゐる。すなはち——内地についてだけの調べであるが——戦前大正二年二十三億三千四百余萬圓であつたものが、六年には二十八億七千四百余萬圓になり、八年には五十七億千百余萬圓にすぎず、十二年には一躍して百二十八億八千二百萬圓、十四年には百二十二億八千二百余萬圓になつてゐるほど、その足どりは大きい。この大正十四年の所得中官業所得は四億二千五百萬圓にすぎなく、私人所得は百二十九億五千六百萬圓で、その大部分を示してゐる。その私人所得中において、課税所得は（脱税額一割を見込んで）五十一億四百余萬圓で、非課税所得は七十八億五千二百余萬圓になつてゐる。そしてまた、その非課税所得中には免税點以下の所得が六十九億六千余萬圓を占めてゐる。さらにその免税點以下の所得中において、農業所得が十六億五千八百余萬圓、工業所得が十八億五千二百余萬圓、商業所得が十三億百余萬圓などの區分を仔細にみてゆくと、なか〳〵興味ふかいものがある。——かうして所得も進んで來たが、公債の増加率も多い。國債だけでも、大正五年の二十四億八千九百余萬圓が、いまは倍以上になつてゐる。不生産國債も大正五年の十六億二千四百萬圓は昭和三年に二十九億三千九百余萬圓に進んでゐる。そして所得關係につき大藏省第五十三回年報につき上述の所得調べと引き合になる年を比較してみると、かうなつてゐる。

（單位百萬圓）

	所得	公債	内譯	不生産公債	内譯
大正八年	[illegible]、九二一	三、九七〇	國債（三月末）三、三七九 地方債（三月末）五九一	一、七三二	國債 一、五九六 地方債 一三五
大正十四年	一三、三三二	五、三七六	國債（三月末）四、三三九 地方債（十月末）一、〇三九	二、六〇四	國債 二、一六八 地方債 四三六

すなはち、大正八年には所得に對し公債は五割であつたものが十四年には四割になり、不生産的公債は三割であつたものが二割弱になつてゐる。言葉をかへていへば、かうした減率は、所得の急激な増加によることになる。けれども、これを根據として、國民の負擔力が増してゐるのであるからであるとして、公債の限度を余地ありとするわけにはゆかない。その所得の內譯を細かに檢討するのでなければ何ともいへないからである。ましてや、國民一般は不景氣に苦しみ、このうへの財政上の壓迫の堪へがたい意味において、將來の國民の負擔の増すべからざる意味において、積極政策の犧牲のために、いや増しに公債を累積することの不可なることは、いふを待たないからである。さらに差し迫つて考ふべき金解禁問題解決のために公債發行を愼むべきことは、論據を別にして大切なことであるからである。

私は、をはりに、土方成美博士が國債と租稅收入との關係を攻究せられ、經驗立證の立場から過去の國債累積の財政上におよぼせる關係をながめ『不生產的公債の利子支拂が租稅收入の三割以上に達するのは極めて危險であるといへよう』といはれたのは（エコノミスト昭和三年十二月一日）、有益な見方であるとおもふ。そして私も同博士と同じやうに、かうした研究によつて、少しでもこの問題に對する世論を喚起することになればよいといふにとゞめておきたい。――（昭和四・三・六）

最近の政界に於ける上下兩院の功罪

吉野作造

小選擧區制の提案

かねて噂のあつた小選擧區制還元案は、政新兩黨の共同提議としていよ〳〵三月九日の衆議院本會議に上程された。現行選擧法が唯一回試みられたばかりであり且つ實際上非常に不便だとの非難もなかつたと云ふ事實は、今回の新提議に對して特に有力なる改正理由の闡陳を要求する。憲法附屬の大事な法典だからさう輕々に改むることを認め難いと云ふ俗説には與みしないが、兎に角斯種の重要法案を會期の切迫した今頃出し拔けに提出すると云ふは、少くとも政治道德上甚だ面白くない。

尤も出し拔けと云つてもまるで豫期せぬことでもない。何となればそは民政黨脫退以來の床次氏の一重要政綱であり、對支問題でうまく彼れと調子を合はせ兼ねた政友會は、或は此問題に由て新黨俱樂部との協同を策すべきかを疑はれてゐたからである。併し選擧法の改正は、就中小選擧區制還元と云ふが如き重要案は、斯うした黨略の掛引に弄ばるるには餘りに國民的生活と密接の關係を持ち過ぎて居る。本當に之を改めようとなら、相當早くから其意のある所を示して國民に準備と研究の餘地を與ふべきだ。幸か不幸か政友會はこの問題に關しては永く新黨俱樂部に追隨するの態度を示さなかつた。裏面の交渉の程は分らぬが、表面政友會の沈默を守つたことは、我々國民をして近く選擧法改正の發案なかるべきを信ぜしむるに十分であつた。故に今回突如として政新共同の提案あるに接しては、我々は意外の感を抱くと同時に、自ら又その提案の動機を怪まざるを得なくなる。

何の見る所あつて彼等は急にこの提案を敢てしたのであるか。床次氏側の立場は我々にもよく分る。去年以來の彼れの宿論であるから、機會のあり次第何時でも其主張の實現に步を進めることに何の不思議もない。併し床次一派の小選擧區論なるものは、之れまで隨分と識者の批判を受け、所謂世に定評あるものである。詳しいことは爰に述ぶるの必要もないが、要するに彼れの提唱の根本趣旨は、由て以て新興階級の擡頭を阻止せんとするに在るは明白だ。彼れが保守主義の人であることは世間周知の事實、彼れ自身は恐らく之を以て國家に報ずる所以と確信して居るのではあらうが、私は寧ろ之を彼れの趣味と見た

い。根か忠信の人ではあらう。併し理を研いて天下の勢を判すると云ふ明識の士でないことは疑ない。故に彼が天下の輿望に反し、所謂新興階級に政治的進出の機會を奪ひ、之に依て國家の安全を護り得べしと考へるのも怪むに足らぬのである。尤も私共の考では、小選擧區制にすることは、一面に於ては所謂新思想の鼓吹宣揚を一層集約的に行はれしむるの結果となり、或は床次氏の期待を裏切るに至るなきやを疑ふも、併し一時的の現象としては、例の高額なる保證金の制度と相待つて新興階級の代議士當選を一層困難ならしむべきも亦疑を容れない。

床次氏の期する所はそれでいゝとして、次に然らばこの突然の提案に依て政友會の目的とする所は何か。政友會自身は之に就て殆んど何事も語らない。けれども提案そのものは默々の裡に之を明白に表示して居るから面白い。讀者諸君も提案を一見されただけで最早その上の說明を聞く必要を認められぬであらう。

提案內容の不埒

提案の內容を精査して直に我々の感ずることは、區制改革の美名？にかくれて政友會が私を圖るのだなと云ふことである。

第一に之は完全な小選擧區制ではない。小選擧區制であると云ふことは固より我々の賛成を繋ぐ所以ではないが、提案者が現行選擧法の改正せられざるべからざる理由をその選擧區の大に過ぐることに置いた以上、特別の理由なき限り、徹底的に小選擧區主義を貫くを以て主張に忠實なものとすべきである。然るに提案の實際を見るに、議員全數四八三名を三三四區に記し、所謂完全な小選擧區は其中の一七八區に過ぎぬではないか。更に之を人數より云ふに、完全なる小選擧區より擧げらるるは一七八名に過ぎず、他の三〇五名は之を一區二人又は一區三人の制に委するのである。之れでは是非とも小選擧區制に還元せねばならぬとする理由が解らない。而も彼等は緊急改正の理由として選擧區の大に失するを說く。羊頭を掲げて狗肉を賣るものに非ずして何ぞ。

第二に我々は政友會の私を圖るの意志のあまりにも露骨なるに驚く。そは總べての新聞が異口同音に非難する如く、一區一人なるは政友會の優勢なる處に限り、その勢力の劣れる場處に於ては無理な形に區域を擴大し、强て味方一人の當選を確實ならしめんとして或は一區二人とし或は一區三人とした形跡の償るべからざるものを見るからである。この前に小選擧區制に還元した時の政友會案も、區劃の配分に付ては兎角の非難があつた様だが、今度の様に多數の中選擧區を配劑してまで露骨にその飽くなき貪慾を遂げんとするが如きことはなかつた。斯んな事は他國にも餘り例のないことである。偶々あればそは必ず結局之が爲に國家を非常の不幸に導いたと云ふ教訓を殘して居る。例へば、大戰前墺匈國の一部をなせるガリシア國がさうだ。古來優勝なる支配權を占め來つたポーランド人が、總人口の半分足らずを有するルセニアン人に君臨して確然その支配權を獨占せんが爲め、人口の如何に拘らず、自家の多數なる處は一區一人とし、その少數なる處には一區二人の制を樹てた。玆を以て僅に半數强を有するに過ぎざるポーランド種は常に議會に三分の二に達する絕對多數を占めて優よその

大勢を左右したので、ルセニアン種は自暴自棄の極遂に暴行的陰謀に出て相手方を傷けるの手段を取るの外なきに至つた。是れ同國の政府が常に異常の紛糾に惱まされ、頻々たる暗殺暴動が巧妙なる計劃の下に遂行されて而も容易に發覺されず、人種爭鬪に無慈悲の暴狀を呈露して市民殆んど其堵に安んぜざりし所以である。殷鑑遠からず、その一端は既に九日來の衆議院の議場にも現れて居るではないか。神聖なる職責を蔑にするの罪は固より朝野兩黨に向つて一樣に之を責めねばならぬも、主として混亂を導けるの罪責は何としても之を政友會に歸せざるを得ない。政友會は今までも隨分我々の眼にあまる所業を働いたが、今度の提案ほど不埒千萬なものはない。

さるにても床次氏の之と責任を分つに至つた心事が判らない。議論に間違ひはあつても、彼れに一片國家を思ふの誠意はあると我々は認めてゐた。政友會の羊頭狗肉案に協動することは、取りも直さず、純正なる小選擧區主義を拋擲することではないか。少しく思を潛めて前後に思慮をめぐらさば、彼れの誠意は恐らく落ち着く場處に迷はざるを得ざることであらう。

提案の動機

提案の内容を吟味して後、更にその直接の動機を付度し、一面に於て私はまた政友會に奸智に長けたものの多きを驚歎せずには居れない。何となれば這個の提案は、僅に一彈を以て數鳥を射落すの名策だからである。

第一に此案は以て十分に貴族院を壓することが出來る。今度の議會では貴族院の鼻息が何となく荒く、一度は選擧問題で田中内閣の鼻柱を折り、次で地租委讓案等を握り潰さんとする勢である。併し貴族院の鼻息の荒い一つの原因が、現政府もいづれ永くは續くまいと見越しての事大思想に在ることは明白だ。之を知つて居る政府側の策士は、思ふに小選擧區制の無謀なる提案に依て當分此儘居据るの態度を示せば、必ずや若干の軟化議員を作り得べしと期待したに相違ない。現にこの提案と同時に、早くも勝田文相が例の青木水野兩ブローカーと會見して研究會の操縱を策して居るとの風說が傳へられた。強て此方から働めなくとも、政府の腰の据え方一つで、貴族院の形勢はどうにでもなる。從來幾多の例が之を明白に示して居る。

第二に不幸にして貴族院が思ふ通りにならず、かねて揚言せる如く議會の解散を斷行せねばならぬ破目になつたとする。その爲にも小選擧區案をものにしておくことの有利なるは申すまでもない。

第三に政府が何かの拍子で倒れたとしても、今の中に選擧法を改めておけば、次の總選擧で見苦しい敗北を免るることが出來よう。如何に不死身の田中内閣でも、この異常の不人氣を前にしては、どんな怖ろしい見えざる暗礁の前途に橫はつて居る位ゐのことは分つて居る筈だ。勢ひ熄む能はずして投げ出すとなれば、次の天下は先づ民政黨に移ると見ねばならぬ。すると民政黨内閣は解散をやる。解散に先つて選擧法を又もや改むることもあるまいし、又改めようとて議會の多數は依然政友會の占むる所だから立派に之を妨げることも出來る。故に今の中に早く選擧法を自家の有利に改めておけば、即ち之で民政黨内閣と戰ふことが出來ると云ふわけになる。假りに政府が多少の干涉を試み

たとしても、政友會の現勢の著しく削がるる恐れなきはほぼ明白だと考ふるものらしい。つまり總辭職の時に全部の機密費を搔つ攫つて行くのと與曲同巧の政友會らしい妙案である。

斯く考へると、今度の提案は瀕死の政友會に取つては起死囘生の妙藥なのである。この案の成立に依つて、貴族院の難關も案外無事に通り拔け得るかも分らない。よしんば天運つきて一度野たれ死したとしても、此處數年間は此案のお蔭で覺束なき餘命をつなぐことも出來るだらう。之れ程の苦心をしてまで壽命を妄執する政友會の事だから、或は當分政變などはないと見た方が安全かも分らない。

『唯權力を握るに在るのみ』

いゝ事をして又はいゝ事をすると期待されて、國民多數の信望を博する。國民多數の信望を集めた結果として權力を得る。之れが立憲政治の常態を說明する法則だ。不幸にして我國にはこの常則が文字通りに行はれない。先づ何等かの手段に由て權力を握る。權力を握ることに由て徐ろに形式上の國民的信望を買ふ。この目的を達する爲には凡ゆる罪惡を犯して恥ぢない。之を責めるものあれば或は之を買收し或は之を威壓する。買收威壓のための必要な手段は權力を握つてさへ居れば自由に之を驅使するに苦しまぬ。正に憲政の逆轉だが、要は唯これ權力を握るに在るのみ。國民大衆の朦昧なる結果當分致し方のない所として、流石に歷代の內閣は、兎や角表面を糊塗しては露骨に此勢に乘ずるを憚つて居たのに、今の田中內閣だけは得々としてこの法則の活用を十二分に發揮せしめ、之より生ずる効果を滿喫して我ながらその幸運に陶醉し切つて居るやうである。「唯權力を握るに在るのみ」。この外彼等の眼中には何物もない。握つた權力を何としても放すまいと藻搔くのは固より當然である。

陰險な策動に依つて若槻內閣を倒壞した。自ら權力は我が掌中に落ちて來る。やがて議會に解散を命じた。選擧には思ひ切つた干渉をする。結果豫期の如くならざるを見ては更に足弱の議員の威迫誘拐と出た。その上今度は選擧法までを改めんとするのである。天下の事正に意の如くならざるはなし。その癖肝腎な意味ある仕事はさつぱりやつて居らぬ。たま〳〵やれば失敗の連發である。對支交渉の如き、益々我國の貿易上の立場を危殆に陷れ、此上不問に附し得ぬものがあるのだが、それでも政府は一向に平然として居る。之で天下を持ち續けて往けるのだから、政治家が民衆を甘く見縊つて放埒の限りをつくすのも怪しむに足らぬであらう。

『唯權力を握るに在るのみ』と云ふは、由來政友會の傳統政策である。最も有效に此政策を活用したのは原敬であらう。併し乍ら彼れは流石に一旦權力を握つた以上之に由つて何を爲すべきかを心得てゐた。權力を握り且つ之を維持するが爲に彼れの犯した幾多の罪惡と又その流した幾多の弊竇とには許し難いものもあるが、兎に角彼れは權力の獲得を以て第二義となし、他に第一義の在るあるを忘れなかつた。今日は時勢も段々進步して、原のやり方ですらが許されない時代となつた。然るを何事ぞ、田中內閣は全然第一義を高閣に束ねて只管第二義に終始しようとするのだから驚くではないか。斯う云ふ內閣の事だから、萬一小選擧區制の新法の下に爭つた選擧戰に敗北でもしたら、乾

宣言し佛蘭西のチャールス十世がやつた様に、又むかし露西亞のストリピンがやつた様に、直に新議會に解散を命じ、緊急勅令を以て更に獨手放恣な新選擧法を作ることであらう。その爲に佛蘭西では有名な七月革命をひき起した。ストリピンは又やがて爆烈彈の見舞ふところとなつた。獨り日本の政友會内閣だけは、國民の驚くべき隱忍と温従とのお蔭で益々太平無事なるを得るのであらう。

民政黨の態度

唯權力を握るに在るのみ。」權力さへ握ればあんな無類の不人氣内閣でも、前回には六七名の小團體をしてカスチング・ヴォートを握らしめた程の議會の形勢をば、瞬く間に六七十名の優勝を誇り得る所まで樂に漕ぎつけ得るのである（無論私は床次氏一派をも初めから政友會の別働隊と見る。此事は二月號の拙論中にも述べた所である）。之では在野黨としての民政黨の手も足も出せぬは勿論だ。彼れも亦萬一の僥倖を期し凡ゆる手段を弄して敵を陷るるの工夫をする外はないのである。何の遑あつて靜に國利民福を攻究するの迂愚を守ることが出來よう。

前期の議會に引續いて民政黨は又もや選擧干渉の不當を鳴らした。他日天下を取つた曉、彼れにまた此點に全然公明なり得るの覺悟がないから、自然糺彈に熱のこもらざるは致方がない。議員の誘拐に對しては所謂黨籍變更案を以て自衞の途を講ぜんと試みたが、議員はもと選擧民の代理人に非ず、その行動を斯くの如く拘束するの本來理に悖る所あるの故にや、是亦豫期の如く世上の同情を惹かない。結局彼等の執る所に、何とかして敵を窮地に陷れんとし殊更に無用の騷ぎをまするに了つたのである。滿洲某重大事件の如き國民の齊しく知らんとする所の消息はいゝ加減に切り上げ乍ら、久原遞相いぢめ如きに過分の熱心を見せたのは、却て傍觀者の嫌忌をそゝつたかと思はれる。少數を以て多數を爭つたと云はさうと云ふのだから、初めから無理な話だ。少數黨の議會に於ける言論乃至行動はもと院外の大衆を相手とすべきだと云ふ肝腎の原則を、彼等が頓と忘れたかに見えたのは、私共の與々も遺憾とする所であつた。

而して民政黨の議會對策の結局自暴自棄的議事妨害に終つたことは、今に始まらぬ事ながら、國家の爲め眞に憂慮に堪へざる悲喜劇であつた。騷擾混亂が下院の年中行事となつたので、新聞記者までが知らずしらず之に慣れ、穩かに事理を說くものあれば之を以て鬪志の缺乏と譏り、譯もなく怒鳴り狂つて人の迷惑を顧みぬ者を却て政戰の殊勳者などと擔ぎ上げる。馬鹿々々しい話である。懲罰の投げ合ひも見苦しいが、やがて其間に妥協的相殺の凞談が始まつてゐると云ふに至ては、公器を弄するも亦甚しいではないか。黨籍を有する議員たるの故を以て、詐欺や泥棒をしたものを帳消しにすると云ふわけには行くまい。懲罰に値するものは斷乎として懲罰に附すべきである。妥協に依て之を免し得る位なら、始め之を懲罰に附したのが間違ひだ。朝野兩黨の泥仕合の結果が斯れ程まで國法を玩弄物視するとは、實に許し難い不埒と謂はなければならない。

床次氏の態度

私は床次氏の一派を政友會の別働隊と觀ると云つた。外觀上必ずしも政友會と歩調を一にするに非るが如く見えるので、世間に多少之を迷ふものもある様だが、私は最近の行動の上より觀測して、どう善意に思ひめぐらしても、到底前說を飜へすの理由を發見しないのである。早い話が、今日の政界に於ける床次氏一派の役割を考へて見るがいゝ。

第一は民政黨に天下をやらぬと云ふ大勢を作ることである。この大勢には憲政一新會も實業同志會も、又流産したやうではあるが大隈侯の家子郎等なるものも、均しく皆合流して居ることは云ふまでもない。

第二には萬一政友會内閣が失脚した場合その後釜を引き受ける準備をすることである。後繼内閣が床次を首班とし政友會の後援に成るか又は床次の勢力を踏臺とする所謂中間内閣であるか、は問ふ所でない。要するに全然民政派を除外し、大體政友會の殘せる公私兩面の陣容を崩さぬものであればいゝ。それで多數政客の所謂政局安定は十分に得られるのだから。讀者よ、今日の政界には、自家の利害の打算上民政黨などに天下を持つて行かれては困まると云ふ人の意外に多いことを記憶せられたい。民政黨に天下をやりたくないと云つて語弊があるなら、利害の繋がる今日の狀況を多少でも紛亂の危險にさらしたくないと言ひ直してもいゝ。之は却々底力ある潮流として久しく政界の根柢に動いて居る。さればと云つて、今更公然政友會の肩を持つて彼れと表面上の責任を分つのも嫌だ。そこに床次が獨立の旗幟をかゝげる根據があるのだ。政界に美服を飾る寄生蟲の絕えざる限り、床次一黨は依然議會の一勢力として當分立派に喰つて往けるのである。

斯の如く考へて見ると、床次一派が政友會と即かず離れずの立場を執る所以も分り、從てまた裏面に於て一脈の相通ずるものあるをも想像される。併し何よりも增して床次氏の這の態度の裡に看視せねばならぬ重要なる一點は、彼れも亦『唯權力を握るに在るのみ』の信者に相違ないことである。世間では往々床次を誹つて何を夢見て居るのかと笑ふ。あの少數を擁して天下を覬覦するのだから、傍から見れば滑稽の沙汰に相違ない。併し乍ら彼れは知つて居る、『唯權力を握るに在るのみ』と。いやでも應でもやがて自分に天下を渡す時が來る。天下を取れば乾度大なる勢力となつて見せる。是れ彼れの年來の確信である。而して考へて見れば、彼れの過去の經驗が彼れをして斯く信ぜしむるにも不思議はなく、今日の政情また必ずしも之を以て彼れの空望と一笑に附し去るを得ざらしむる。要するに、床次一黨の勢力は我國變態政情の産んだ一變態存在であつて、又是によつて益々我國政情の變態たる所以を濃厚ならしむるものである。彼れの存在を呪ふべしとするは我々評論家の無遠慮な放言。而して國民自身には恐らく彼れを責むる當然の權利がないのであらう。

牽制諸勢力の弛頽

權力を握つて我儘をする者はどうしても抑へることが出來ないのか。之を抑へる一番有力なものとして期待されるのが本來民衆なのだけれども、之が駄目なので我々も途方に暮れるのだ。尤も民衆がしつかりしてさへ居れば、始めから斯んな苦勢もなかつたのではある。一體我國には、人民が選擧に由て監督する外、政府の行動に對しては憲

[illegible]第一には元老である、第二には樞密院である、第三には貴族院[illegible]この外軍閥なども算へて其中に入らぬこともないが、有力なものとしては先づ以上の三つに盡くると謂ていゝ。而して貴族院は特殊の沿革あつて從來餘り斯うした機能を發揮せなかつたが、元老と樞密院とは過去に於て屢ゝ内閣の運命を左右したことがある。尤も斯くの如きは憲政の順當なる運用上決して好ましい事柄ではない。少くとも原則として之を認容すべからざるは言ふまでもない事だ。たゞ事實上我國では、之れあるに依りて内閣の專横は幾分之を制御し得るの途もあつたのに、昨今は之れすらが頓と弛頽して一向その機能を發揮しなくなつた。今日の田中内閣が空前の最惡内閣たる所以も、一つには或は之に因るものであらう。

山縣公の存命中などは、一言で以て内閣を辭めさしたこともあつた。彼れに全く好惡の偏頗がないでもなかつたらうが、主觀的には專ら至誠を以て國事を憂へたので、自ら其の表示する意向に千鈞の重みがあつたのであらう。併し何よりも元老の一言を天下に重からしめたものは彼れの有する奏薦權である。後繼内閣を誰に作らしむべきかは今日でもさうである如く、從來も元老に御下問して定め給ふたのである。從て政界に野心を有する限り、何人と雖も元老の意向に相反くことを能くしない。だから今の田中内閣の如きは、山縣公の在世中であつたら、如何に田中が彼れの寵兒であつたとはいへ、疾うの昔に引き退からしめられただらうと想像する。幸か不幸か今日に殘つた唯一人の元老西園寺公は、我が政界進歩の大勢を妨ぐるものとして主[illegible]とし[illegible]の批判をすると云ふことは極力避けて居らるゝから、[illegible]之に關しても[illegible]公百年の後この奏薦權にどうなるだらうと云ふも大問題だが、更に内累して道路の傳ふる如くんば、西公の這般の態度はたしかに我が政界の進歩を促がす一素因を成すものである。たゞ之をいゝ事にして、默内閣の平然として世にはびこるは如何にも苦々しい。

樞密院の重きを爲さなくなつたのは又全く別の理由に因る。樞密院の諒解なくしては、政府の仕事の大半が順調に運べないことになるのだから、この院にして政府を制御しようと思へば本來如何樣にも出來るのだ。現に最近でも彼れに依て政府の倒された例は珍らしくない。併し全體として樞密院の威力は昨今著しく衰へた。是れ一つには人物の低下した爲めであらう。低下と云つて語弊があるなら、政治的材幹の缺如と云つておかう。昔は藩閥の養老院と譏られただけ、更に所發に祭らるる者は大臣級の經歷に富む手腕家であつた。政黨内閣制の行はるる今日となつては、黨人を避くべしと云ふ不文の成規に拘泥して大臣の閲歷あるも之を樞密院に送るを得ず、已むなく事務の才なき學者や軍人や司法官の古手などを擧用してその缺員を補つて居る。伊東金子等の數輩に依て僅に昔の俤を存するのみで、他は何れも海山千年の黨人政治家に大刀持ちの出來る代物ではない。そこで政府が始めから馬鹿にしてかゝる、彼等自身には固より自ら恃むの氣力がない、之に政府牽制の機能の頼み難いは云ふまでもなからう。但し斯くの如きの原則上好ましい現象であることは亦申すまでもない。

この點から云ふと、貴族院こそが最も恃まれて然るべき勢力と謂ふべきである。有爵議員に多分の才能を期待し難しとするも、永年政界に閲歷を積んだ有能の士は結局多くは此處に逆り込まるるのだから、假令若々しい生氣の溌溂は見出し難しとするも、政府に對する威力に於ては本來缺くる所なかるべき筈だ。併し實際に於て未だ多くを之に期待し難いのは、蓋し同院の永い沿革の結果であらう。最近一寸威力を發揮したかに見えたが、引續いて侃々諤々の論鋒を鋭く政府に差向けるといふ意氣は全體として矢張り頗る稀薄であると認めねばならない。

して見れば、結局政府を有效に制御し得るものは人民の外にはないことになる。さて何としてこの眠れる人民の耳目を喚び醒ましたものであらうか。

貴族院最近の活躍

貴族院の最近の活躍は一寸目ざましいものであつた。忽ちその鋒鋩を藏めたかに見ゆるのはあつけ無かつたけれども、斯うした事は兎に角貴族院としては珍らしい現象である。

貴族院は議會創設以來の沿革に於て殆んど藩閥政府の傀儡たるかに運命づけられてゐた。藩閥の沒落と共に新興の政黨主義の内閣に一時楯を突いては見たものの、餘りに多年の屈從に慣らされた彼等の習性は、やがて巧妙なる政黨策士の操縦に籠絡されて遂に事大主義を以て本領とすることになつた。斯うした狀勢は年と共に餘程稀薄にはなりつつあるが、昨今に至て固より甚しく昔と變つたわけではない。

貴族院の歷史に於て時の政府に勇敢に打つ突かつた例の著しいものに二つある。第一は議長近衞篤麿公を頭領とした一派が時の伊藤内閣と烈しく正面衝突したことである。第二は即ち今度の優諚問題の決議だ。併しよく精査して見ると、何れも貴族院それ自身の積極的覺醒の結果と見ることは出來ないやうだ。前者は藩閥の殘黨が藩閥に裏切らんとした伊藤博文に最後の反抗を試みたものと解せられぬでなく、最近の紛糾はまた下院に於ける政黨關係の混亂に因て起されたる不可避の結論と謂ていゝ。詳しく説明する迄もないことだが、最近まで貴族院の大勢をリードせる者は研究會である。而して研究會がこの優勝の地位を占め得しは一にその一絲亂れざる見事な統制に在つたのだ。この特色を有しこの優勝の地位を占むることは即ち下院の多數黨から買はれた所以であつて、つまり研究會と政友會との斯うした結托は、過去に於て政府と貴族院との關係を圓滑にし、由て以て所謂政局安定の功を奏したのであつた。然るに驕る者久しからずの譬に漏れず、政友會は自ら分解して政友本黨を獨立せしめた。やがて三派鼎合の政府が出來、事大主義の研究會幹部は窮餘加藤高明内閣と結托するに及んでさらでも混亂をはじめた研究會内に憲政會の勢力を導き入れた。この勢力は憲政會と政友本黨との合併に依て一層助長せられ、床次一派が民政黨を脱退しても甚しく影響さるることはなかつた。斯くして研究會の傳統方針たる事大主義は、下院に於ける政黨の離合集散の影響を被りて、今や實に混亂の極に達してゐる。少くとも從來の如く幹部の統制の一向利かなくなつたことは、研究會に取つて致命的の打撃である。固より會内には之を喜ぶべしとする者もある。いつれにしても

政府に從來の[illegible]のには顯著な事實である。而して最近の優諚問題に於ては、政府の不人氣を極むるより推して近く政變あるべしと豫想せる者もあつたと見え、政府の暗中飛躍も遂に其効を奏せず、最後の票決に於て政府に意外の慘敗を食ました貴族院としては珍らしい現象であるが、最近の狀勢より推してさして意外とすべき事柄でもない。

尤も私は優諚問題の如きを議會論爭の問題に上ぼすことには反對だ。併し何と責めても參つたと云はぬ不死身の內閣の事だから、せめて斯んな問題ででもと、暗に國民がその票決に一味の痛快を感じたのも諒とするに足る。國民は今や田中內閣に對しては、選擧干渉とか、對支交渉の失敗とか、地租委讓の無謀とか、私設鐵道買上げの醜怪とか、個々の非違を揭げてその失當を責めて居るのではない。よしんば偶に若干のいゝ事をするにしろ、今となつては全體として彼れに一毫の信頼をも置かぬのである。この國民的不滿を露はして吳れたと云ふ點に於て、實に最近の貴族院の活躍は頗る國民の感謝に値ひするものであつた。私が貴族院議員であつたら、私の主義として斯の如きを問題とすべきに非ずとの素志を明にするため票決には棄權するが、許さるるものなら、矢張り起つて政府彈劾の一場の演說位は試みたであらう。

就中貴族院の態度に私の最も喜ばしく感じたのは、議員中白紙を以て議場に臨み贊否討論の演說を聽いてから始めて其態度を決した者が尠からずあつたと云ふ事實である。上院は下院の如く積極的政策を有つ政黨を代表する場所ではない。從て上院議員は下院議員の如く必ず[illegible]要にない。[illegible]ではない、[illegible]でもその態度を變へ得る用意があつて欲しいのだ。下院を以て各政黨の自說を主張する場所とするなら、上院は之に反して各個の意見を戰はし其間より自ら最良の見解の生るるを期待すべき場所である。兩者自らその機能を異にする。この點に於て優諚問題の決議に於ける貴族院の態度は、決議の內容を離れても、久し振りで貴族院らしい行動に出でたものと謂ふことが出來るのだ。

貴族院改革論の見當違ひ

田中首相が優諚問題で貴族院の窘むる所となつたのを見て、政友會の少壯議員は病的昂奮に我を忘れて貴院改革の斷行を幹部に迫つたとやら。その血迷へる暴論に一顧の價もないのは勿論だが、島田幹事長とやらが丸で相手を三才の童兒視して、或はすかし或はおだて、汗みどろになつて慰撫に努して居る圖に、とても馬鹿々々しくて見るに堪えぬ。少壯議員の名に買ひ被つてもう少し物の分つた者も居るだらうと考へてゐたのに、さりとは驚き入つた醜狀である。少壯を以て誇らうとなら、思ひ切つて魂を入れ換えて貰ひたいものだ。固陋の老輩に代るべき少壯の諸君が斯んな風では、それこそ眞に政友會今日の全盛は槿花一朝の哀しむべき榮華に過ぎぬと云ふべきであらう。

一體貴族院が政府を窘めるのは何故わるいか。政府が困まらうが困まるまいがそんな事に頓着なく、率直に思ふ儘を云つて貰ふので貴族院の討論が我々國民の參考になるのではないか。成る程衆議院は我

國民の直接の代表者と云ふわけである。代表者が一人あれば澤山だと云ふのなら夫れ迄の話だが、代表者にも間違ふことはある。參考の爲に第三者の意見も聞いて見ようと云ふので、貴族院を設けたとすれば、下院の多數黨の鼻息をのみ窺ふやうでは何の役にも立たぬ。尤も特に重大の根據なき場合は下院の決定に追從した方がいゝとか、又反對を固執することに依て政府を極度の窮地に陷るるは出來るだけ避くべきだと云ふ樣な不文の原則はある。その結果としてまた政府は大體論として貴族院の反對に因て必ずしも辭職するを要せずと云ふ原則もある。だから貴族院としては何も遠慮は要らぬのである。先き頃の優諚問題の討議のとき、議員中頻りに之れが彈劾の意味を含むのかと氣にしたものもあつた樣だが、そんな事は問題とするに足らぬのであつた。政府が貴族院の彈劾を國民的不滿の一表現と認めて進んで辭職を決行するは妨げない。只貴族院としては進んで彈劾の效果としての引退を迫るを得ずと云ふまでの話である。既に引退の效果を持たぬものとすれば、その議論が如何に辛烈であつても一向差支はない。貴族院の決議が氣に喰はぬとて怒り出すのは、血迷へるも甚しといふべきである。

出來るだけ下院の院議を尊重せよといふ原則も、實は下院が普通の常態に在る場合を豫想しての話であることを忘れてはならぬ。下院が眞に民意を代表して居ればこそ、上院をして讓步せしむるの權威を許されるので、今日我國の下院の如く、不自然なる多數に依て一政黨の横暴の許されて居るのでは、何處に上院を控馭するの道德的權威を認めることが出來るか。選擧が公正に行はれて下院が民意の代表機關たり、その民意代表の事實が完うされて上院が下院に讓るの原則が生れる。凡て政治上の原則は、常に一定の事實を土臺として其上に層々築き上げられて居るのであつて、土臺を離れて空中に遊離して居るのではない。土臺の如何を顧みずして上層の原則だけを主張するのは、代償の債務を履行せずして唯々契約上の權利のみを要求するが如きものである。

勿論貴族院の改革は、以上の問題と關係なく、必要とさるべき理由はある。併しそは時に政府に反對することあるが爲に非ずして、寧ろ餘りに時の權勢に迎合するが爲めである。即ち貴族院改革論は、貴族院をしてその本來の機能を發揮せしめんが爲に唱へられるのだ。今度のやうな事が今後も再々起るなら、或は一時改革論が鳴りを鎭めるかも知れない。然るにも拘らず、政友會少壯議員の間に騷々しき貴革論あり、以てその見當違ひの妄論たるを知るべきである。

研究會統制回復の能否

優諚問題の決議に於て貴族院が珍らしく其本來の機能を發揮したのは、先きにも述べた如く、一に研究會が統制力を喪ひし結果である。而して研究會の統制力如何と云ふことが由來貴族院を論ずる者の一大問題たりしは普ねく人の知る所である。實を云へば、從來の貴院改革論は主としては研究會の統制力を挫かんことを目標として叫ばれたものに外ならぬ。それ程之れは貴族院の機能を碍げ來つたものである。今幸にして一時その統制力は毀れたとは云ふが、それが果して何時まで續くものか。この點は貴族院の將來に深甚の關係を有する重大問題だ。

研究會の統制力に一種の破綻を生じたのも、其の原因は種々あるが當然なる下院政黨の分解であるけれども、他の一面に於て憲政會（即ち今日の民政黨と觀てよい）の勢力侵入も亦決して之を看過することが出來ぬ。而して政友會内閣が此上存續することに、即ち上院の一角に所謂軟化議員を增す所以たること先きにも述べたるが如くにして、之がまた自ら大に研究會の統制力恢復に貢すべきは云ふを待たない。尤も一旦ひゞの入つた器の完全なる原狀回復を期し難きが如く、研究會に昔の樣な威力の發揮を求むることは最早不可能であらう。けれども若干の程度に於てでも研究會統制力の回復するは、貴族院の爲に決して喜ばしい現象ではない。私は敢て民政黨に依怙するの考は有たぬが唯貴族院の正しい活動の爲めにも政友會内閣の此上の存續を快しとせぬ。

お前の希望する如くせば貴族院は遂に政黨化するだらうと云ふ者があるかも知れぬ。政友系あるが如く民政系あり、上院議員に絕對に此種の關係を禁じ得ざる限り、よかれ惡しかれその政黨化的傾向は到底阻止するを得べきものでない、又事實さうであつても別に之を惡いと呪ふべき理由もないと思ふ。私は寧ろ貴族院には、その組織の根本に於て、到底政黨化さるべからざる多くの要素あるの事實に鑑み、モ少し政黨化の趨向が濃厚になつても、一向掛念するに足らぬと考へて居る。大多數が政黨化しても少數の中立階級がカスチング・ヴォートを握るのであれば、亦相當に貴族院の機能を發揮するに十分だ（但し之等の中立階級が適當に其地位を利用するか否かはまた自ら別問題である）。要はたゞ、上院の勢力一方に偏し之と下院の政黨と不當の結托に繫がるが如きことがなければいゝ。（三月十日記）

大正八年一月、原内閣の内相として床次君は選擧法改正案を提出した。此時私は次の樣な設計を試みたことがある。（日本評論に出す）

一普通選擧論（一九九―九六頁參照）。

今度の政友會案に現はれたる區制は、……小選擧區主義を原則として採用しながら、一區二人、甚しきは一區三人といふ例外を夥しく作れるの一事だけで、何となく政友會の公明なる態度を疑ひたくなる。人口十三萬人に就きて一人の代議士といふ原則を採れば、處によりて長し短しの區を生ずるは已むを得ない。さればとて、多年有機的の一個體を成せる郡を二分して一部を他郡に添付するなどは不自然でもあり又適當でもないから、已むなく一區二人の特例を設くるも致し方がない。併し之は出來る丈け避くべき事であり、又嚴格に十三萬人の標準に依らず多少の出入は許すべきものであり、現に相當の斟酌を許すことにもなつて居るのであるから、色々苦心をすれば餘り澤山の例外を出さなくても濟む筈のものである。且斯かる例外は元來濫用され勝のものであるから、そんな嫌疑を避くる爲めから云つても餘程注意を要する所である。然るに今度の案は、議員四百六十餘人に對して、一區二人のが約七十、一區三人のが十もある。之れを獨逸が三百九十七人の議員に對し一區數人の例外が一つもなく、英國の元の選擧法が議員約七百に對し一區二人の例外を認むるもの僅々二十七なるに比すれは其懸隔餘りに甚しいではないか。英國に在ては、牛津・劍橋及びダブリンの大學と倫敦市本部とを除けば、萬已むを得ずして一區二人なるものは二十三になる。普魯西の如く初めから一區二人と云ふ中選擧區主義を採るなら格別、苟くも小選擧區を原則とする以上、今度の政府案は其動機に於て公明を疑はれても辯解の辭に苦しむだらうと思ふ。

良寛に愛された尼貞心

相馬御風

一

古來男女の間に唱和された歌で廣く世に知られてゐるものは、無論少くない。しかし、今日までに私自ら讀んだものでは、萬葉集中の少數を除く外は、その表現の切實味を以て胸をうつやうな作には、あまり多く接することが出來なかつた。

ところが、十數年前はじめて良寛和尚の歌を讀み、その中に彼と彼の最愛の弟子貞心尼との間に唱和された五十餘首のあつたのに接して、私はかくも淳眞な、かくも切實な、かくも無礙な、かくも温かな、そしてかくも淸らかな男女間の愛の表現があり得るものかと驚嘆措く能はなかつたのである。

とも〳〵此の良寛貞心唱和の歌は、良寛歿後貞心尼が苦心蒐集した良寛歌集「蓮の露」の終りに添へてあるものであつて、これほど數多く男女唱和の歌が一まとめにしてあるといふ點でも、古來あまり多くその類を見ないところであらう。

それには尼貞心が僧良寛と初めて相識つてから、最後に良寛の死によつて永遠の別れを告げたまでの間に、兩者の間に詠みかはされた歌の大部分がしるされてゐる。そしてその歌集の序文のおはりに貞心尼自ら

「こは師のおほんかたみと傍におき朝夕にとり見つゝ、こしかたしのぶよすがにもとてなむ。」

と云つてゐるやうに、もと／＼それは彼女みづからの追懷の料としてしるし集めたものであつた。そこに此の集に對して一段のゆかしさを私達に覺えさせるものがある

さて然らばその良寛貞心唱和の歌といふのはどんなものであらうか。先づこゝにその若干首を揭げて置くことにする。

師常に手毬をもて遊び玉ふときゝて

これぞ此のほとけの道に遊びつつ撞くやつきせぬみのりなるらむ

御かへし　貞心尼

つきて見よひふみよいむなここのとをとをとをさめて又始まるを

はじめてあひ見奉りて　良寛

君にかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬ夢かとぞ思ふ

御かへし　貞心

夢の世にかつまどろみて夢をまた語るも夢もそれのまにまに

いとねもごろなる道の物がたりに夜もふけぬれば　良寛

白たへのころもで寒し秋の夜の月なか空にすみわたるかも

されどなほあかぬここちして　良寛

向ひゐて千代も八千代も見てしがな空行く月のこと問はずとも

御かへし　貞心

心さへ變らざりせばはふつたのたえず向はむ千代も八千代も

いざかへりなむとて　良寛

立ちかへりまたもとひこむ玉鉾の道のしば草たどりたどりに

又も來よ山のいほりをいとはずば薄尾花の露をわけわけ　貞心

ほどへてみせうそこたまはりけるなかに　良寛

君や忘る道やかくるるこのごろは待てどくらせど音づれもなく

御かへしたてまつるとて　良寛

ことしげきむぐらのいほにとぢられて身をば心にまかせざりけり

山のはの月はさやかにてらせどもまだはれやらぬ峰のうすぐも　貞心

こは人の庵に在し時なり

御かへし

身をすてゝ世を救ふ人もますものを草の庵にひまもとむとは　良寛

久方の月の光のきよければ照しぬきけりからもやまとも　良寛

[illegible]
[illegible]光とおもはずや君　良寛

春の初つかたせうそこ奉るとて
おのづから冬の日かずのくれゆけば待つともなきに春は来にけり　貞心
われも人もうそもまこともへだてなくてらしぬきける月のさやけさ　同上
さめぬればやみも光もなかりけり夢路をてらす有明の月　同上

御かへし
天が下にみつる玉よりこがねより春のはじめの君がおとづれ　良寛
下にさはるものこそなけれのりの道それがさながらそれにありせば　同上

御かへし
春かぜにみ山の雪はとけぬれど岩まに淀む谷川の水　貞心

御かへし
み山べのみ雪とけなば谷川によどめる水はあらじとぞ思ふ

御かへし

[illegible]　貞心

御かへし
いざさらばわれもやみなむこゝのより十づつ十をもゝと知りなば　良寛

いざさらばかへらむといふに
りやうせんの釈迦のみ前に契りてしことな忘れそ世はへだつとも　良寛
りやうせんの釈迦のみ前に契りてしことは忘れず世にへだつとも　貞心

[illegible]のことを語り玉ひて
かりそめのことゝおもひそこのことば言の葉のみとおもほゆな君　良寛

いとま申すとて
いざさらばさきくてませよほとゝぎすしば鳴く頃はまたも来て見む　貞心
浮雲の身にしありせば時鳥しばなく頃はいづこに待たな　良寛

秋萩の花さく頃は來て見ませいのちまたくば共にかざさむ

　されど其ほども待たず又とひ來りて　　同上

秋萩の花咲くころを待ちとほみ夏草わけて又も來にけり

　御かへし　　貞心

秋萩のさくをとをみと夏草の露をわけわけとひし君はも　　良寛

　……中略……

　ある時與板の里へわたらせ玉ふとて、友だちのもとより知らせたりければ急ぎまうでけるに、明日ははやこと方へわたり玉ふよし、人々なごりをしみて物語り聞えかはしつ打とけて遊びける中に、君は色くろく衣もくろければ、今より「からす」とこそまをさめと言ひければ、げによく我にはふさひたる名にこそと、打笑ませ玉ひながら

いづこへも立ちてを行かむあすよりは鴉てふ名を人のつくれば　　良寛

　とのたまひければ

山がらす里にいゆかば子がらすもいざなひてゆけ羽よわくとも

　御かへし　　貞心

いざなひて行かば行かめど人の見てあやしめ見らばいかにしてまし

　御かへし　　良寛

鳶は鳶雀は雀さぎはさぎ烏はからす何かあやしき

　日もくれぬれば宿りにかへり、又あすこそとはめとて　　貞心

いざさらばわれはかへらむ君はここにいやすくいねよ早あすにせむ　　良寛

　あくる日はとくとひ來玉ひければ

歌やよまむ手毬やつかむ野にやいでむ君がまにまになして遊ばむ

　御かへし　　貞心

歌もよまむ手毬もつかむ野にも出む心ひとつをさだめかねつも

　秋は必おのが庵をとふべしと契り玉ひしが、心地例ならねばしばしためらひてなど、せうそこたまはり　　良寛

秋萩の花のさかりもすぎにけり契りし事もまだとけなくに　　良寛

其後はとかく御心地さやぎ玉はず、冬になりてはただ庵にのみこもらせ給ひて、人々たいめもむづかしとて、うちより戸さしかためてものし給へる由、人の語りければ、せうそこ奉るとて、

そのままになほたへしのべ今さらにしばしの夢をいとふなよ君　貞心

と申し遣しければ、其後たまはりける言葉はなくて

梓弓春になりなば草の庵をとくとひてきし逢ひたきものを　良寛

かくてしはすの末つかた、俄に重らせ玉ふよし人のもとより知らせたりければ、打おどろきて急ぎまうでて見奉るに、さのみ悩ましき御けしきにもあらず、床の上に座してゐたまへるが、おのがまゐりしをうれしとやおもほしけん、

いつ〳〵と待ちにし人は来たりけり今はあひ見て何か思はむ　良寛

むさしののくさばの露のながらへてながらへはつる身にしあらねば　同上

かゝればひる夜、御かたはらに在りて御ありさま見奉りぬるに、ただ日にそへてよわり行き玉ひぬれば、いかにせむ、とてもかくても遠からずかくれさせ玉ふらめと思ふにいとかなしくて

生き死にの界はなれて住む身にもさらぬ別れのあるぞ悲しき　貞心

御かへし

裏を見せおもてを見せて散るもみぢ　良寛

こは御みづからのにはあらねど、時にとりあへの玉ふいとたふとし。

何といふ純眞な愛の表現であらう「いざさらばわれはかへらむ……」の如き、「歌やよまむ手毬やつかむ……」の如き、さては「いつ〳〵と待ちにし人は……」の如き、よむ度毎に私達はその情緒のみづみづしさと、温かさと、淸さとに感動させられずにはゐられぬのである。而もこれが七十歳の老僧と、三十歳の美しい尼との間にとりかはされた愛の表現であることを思ふ時、私達はそこになみ〳〵ならぬ淸い愛の世界の展開を想はずにはゐられぬのである。

曾て私は此の二人の關係について書いた折にも云つたやうに、この七十歳の老法師と三十を越えたばかりの此の尼僧との關係は、一面に於ては正に佛門に於ける師弟の交りであつた。

又同時にそれは歌の道、藝術の世界、美の天地に於ける師弟でもあり、又道づれでもあつた。而も現身の人間としての兩者の關係は、或時は親子のそれであり、或時は兄妹のそれであり、或時は最も親しき心友のそれであり、更に或時は最も清い意味での戀人のそれでさへもあつたらう。清くして溫く、人間的にして而も煩悶の執着なく、靈的にして而も血の通つた、美しく偉く、いみじき愛——まつたく私はいつも此の良寛と貞心との交りをおもふ每に、何ともいへない心のうるほひにみたされるのである。

齋藤茂吉氏も嘗てその著「短歌私鈔」の中で此二人の交りについてこんなことを云つてゐた。

「良寛と貞心との因緣は極めて自然である。この事を思ふ每に予はいゝ氣持になる。良寛は貞心に會つてますます優秀なる歌を作つた。その歌は寒く乾き切つたものでなく、戀人に對するやうな溫い血の流れてゐるものである。人間は生の身であるから、いくら天然を愛したとて、天然は遠慮なく人間に迫つて來る。そこにゐて心細くないなどゝいふのは虛である。良寛は老境に達してから淨い女の貞心から看護を受けた。本當の意味の看護である。良寛にとつては、こよなき Gerokomik の一つであつたらう。世に尊き因緣である。」

この齋藤氏の見方には、私達も眞に同意することが出來る。いかにもそれは世にも稀な尊い因緣であつたのである。

良寛和尚の美しい生涯を考へる上に、私はどうしても此の最晩年に於ける和尚と貞心尼との交りをおろそかにすることは出來ないと同時に、良寛和尚の生活に對すると同じく貞心尼その人の生活に對してもやみがたい興味をおぼえるのである。

二

然らば、良寛和尚のやうな人に、あれまで深く愛された貞心尼とは一體どんな人であつたらうか。

貞心尼——彼女はもと越後長岡の藩士奥村五兵衛といふものの女であつた。寛政十年に生れた。兄弟は一二人あつたらしいがよくわからぬ。又俗に居た時の彼女の名も今は知るよしもない。しかし、彼女が非常な美人であつたこと、そしてその美貌ゆゑに十七八歲の頃同國魚沼郡小出鄉の醫師關長溫（？）に望まれてその許に嫁したこと、そして同棲六七年で愛する夫に死なれた爲に實家に歸つたこと、それから間もなく柏崎に來て剃髮の身となつたことなどは、ほゞ明らかな事實である。

彼女の美貌であつたことは、彼女が後半生を住み暮した柏崎で今日でもなほ廣く語り傳へられて居ることによつてたしかで

あろか、此に私は彼女の直弟で今なほ柏崎野積寺の庵主として生きながらへて居る今年七十七歳の高野智讓老尼の直話によつてもたしかめることが出來た。

此の智讓尼にとりては貞心尼は唯一の受業師でもあり、且つ歳から二十歳まで十四年間起居を共にしてゐたのでもあるから、その語るところには充分信をおいていゝわけである。智讓尼は云つた。

「わしらが庵住さんほど器量のえい尼さんはわしは此の年になるまで見たことがありませんのう。」

から云つてから老尼は更に心にその面影を想ひ浮べでもするやうに靜に眼をとぢながら、

「何でもそれは目の凜とした、中肉中背の、色の白い、品のえい方でした。わしの初めておそばに來たのは庵住さんの六十二の年の五月十四日のことでしたが、そんなお年頃でさへあんなに美しくお見えなさつたのだもの、お若い時分はどんなにお綺麗だつたやら……」といふやうなことも話した。

さうした話を聞いて、更にそのやうな美しく生れた女人が、二十五六の若い盛りにどうして出家剃髮の身とならなくてはならなかつたかをおもふと、私はそこにいろ／＼の涙ぐましい光景を想像せずにはゐられぬのであるが、しかし、今日までに私の知り得た限りでは、彼女の出家に[illegible]た悲嘆の極の結果からきてゐるといふ[illegible]ないのである。

尤も、彼女の生家である奥村家からは、彼女以前に越後西蒲原郡燕村萬能寺十三世の住職であつた光大和尚といふ師僧をも出して居るといふことであるから、彼女の出家も全然無因緣のことでもなかつたらしい。このことは良寛和尚の場合に於ても同樣である。

兎に角二十四五の年頃で愛する夫に死なれ、いやし難い悲みを胸に包んで生家に戻つて來た彼女が、つひに自ら意を決して出家遁世の一路に進んだことだけは明らかである。つまり彼女の出家は他から強ひられたものでなくして、彼女自らのやむにやまれぬ要求からであつたのである。その點では貞心尼の出家は遊月尼のそれと甚だよく似て居る。而も遊月尼も貞心尼も共に非常な美人であつたといふことも面白い。

それにしても貞心尼が何故自分の剃髮の地として特に柏崎を選んだかといふに、それにはかうした因緣がある。それは彼女がまだ長岡の生家に愛育されてゐた頃のことであつた。彼女の家の隣家に柏崎の佐藤彦六といふものゝ娘が女中奉公をしてゐた。その女は少女時代の貞心を殊の外かあいがつて、時々柏崎

の話をして聞かせた。わけても長岡では見ることの出來ない海についてのいろ〳〵の話が、少女の好奇心をそゝらずにはゐなかつた。そして彼女の十二歳の時、つひにその海に對するあこがれに驅られて、彼女は隣家の女中に連れられて柏崎へと海を見に出かけた。初めて見た海の光景は、彼女にとりてはたしかに一種の驚異であつた。就中柏崎郊外の中濱といふところにあつた藥師堂附近の明眉な風光が、兎角物に感じ易かつた彼女の心に消し難い印象をのこした。「いつまでも〳〵こんなところにゐたいものだ」といふやうなこの土地に對する愛着が其の場合彼女の胸に湧き起つたのであつた。

こんなわけで、後年彼女が人生の無常を感じて出家遁世の志を抱くやうになつた際にも、先づ第一に彼女の心に描き出された隠棲の地はその柏崎郊外の藥師堂であつた。しかし、さうした切なる願望を抱いて彼女が其の中濱の藥師堂を訪ねた時には、折あしくそこの庵主は不在であつた。と云つて一旦發念した出家の志をそのまゝ抑へていつまでも安閑としてゐるわけにもゆかなかつたので、彼女は勸める人のあるにまかせて矢張柏崎郊外の下宿村新出の山といふところに庵を結んでゐた眠龍、心龍の二人の尼僧を訪ねて、そこでいよ〳〵剃髪の身となつた。(因にいふ、貞心剃髪の新出の山の庵室はその後眠龍、心龍の兩尼が柏崎の釋迦堂に移つてからはひどく廢頽して今日ではその跡方もないといふことである。)

二十五歳の若さで、しかも人並すぐれた美貌の持主であつた剃髪當時の貞心は、兎角土地の人々の噂の種となつた。師匠の命令で山へ薪採りに行つたりすると、村の人達が目をそばだてゝこそ〳〵何かさゝやき合つたりしてかなりうるさかつたといふ話である。そしていつの間にか村人達の間に「姉さ庵主」といふ仇名さへ云ひふらされるやうになつた。

此の眠龍、心龍兩尼の受業の下に、貞心は二十七歳の頃まで苦しい修行をつゞけた。そして二十八歳（？）の時に師の許を離れて南蒲郡福嶋村の閻魔堂に住むことになつた。福嶋は彼女の郷里長岡からは僅に二里を隔てたところであるから、彼女がそこに住むやうになつたのも郷里に近いといふことが一つの原因でもあつたとおもふ。

此の福嶋の閻魔堂に貞心尼は十餘年間住んでゐた。年齢からいふと二十七八歳頃から四十歳前後までゞある。而もその十餘年間が貞心尼にとりては一生涯中での最意義あり、且最光輝ある時代であつた。彼女が初めて良寛和尚に見えたのも、兩者の間に世にも稀なる美しい交りの結ばれてゐたのも、又彼女が良寛和尚の死に遭つたのも、實にその間のことだつたからである。

三

貞心尼が初めて良寛和尚に見えたのは、前にも述べた如く彼女の二十九歳の時であつた。その時良寛は既に七十歳の老齢に達してゐた。そしてそれは丁度彼が三嶋郡嶋崎村の木村家邸内の小庵に移り住んだ年であつた。

これより先良寛和尚は四十五六歳の頃から六十歳まで十五年ほどの間かの國上山の中腹にあつた五合庵に孤住して居り、六十一歳の時に老衰の結果薪水の勞に堪へられなくなつたので山を下つて山麓國上村乙子神社境内の草庵に移り十年間そこに住んでゐたのであつた。しかし、

行く水は
せけばとまるを
高山は
こぼてば岡となるものを
過ぎし月日のかへるとは
ふみにも見えず
現そみの人にもきかず
いにしへもかくしあるらし
今の世もかくぞありける
後の世もかくこそあらめ
かにかくにすべなきものは
老にぞありける

ねもごろのものにもあるか年月は
山の奥までとめて來にけり

と彼みづからも嘆じたやうに、いかに世を捨てゝ去つた身の上にも、老いの波の寄せて來ることは避け難かつた。山中の孤獨と寂寥とを愛する心は年一年深まつて行つたにも拘らず、肉體の老衰はつひにそれをゆるさなかつた。曾ては孤獨と寂寥とを求めて一歩々々人里から遠ざかつて行つた彼ではあつたが、今は反對に一歩又一歩人里へと近づいて來なければならぬ彼であつた。そして最後に彼が人里の中に、あたゝかな人間愛のうちに自らの老軀を投げ出したやうな形で、嶋崎村の木村家邸内に身を寄せることになつたのが其頃の良寛の生活狀態であつた。

さうした光景の中へ、折よくも現はれたのは二十九歳といふ若さと人並すぐれた容貌の美しさとを備へた尼貞心であつた。而も彼女はそのやうな肉體の美しさの上に、稀に見る堅固な道心を持つて居り、且それまでに交つた誰よりもすぐれた歌ごゝろと洗練された趣味とを持つてゐた。さらでだに老の悲みの傍に心弱くなつてゐた良寛が、一見直に貞心に向つてなみ〳〵な

らぬ愛を寄せるやうになつたのは、自然すぎる程自然なことであつた。

前にも云つたやうに、貞心尼はその頃は長岡在嶋崎村の閻魔堂にたゞ獨で住んでゐた。若い美しい尼がたゞ一人で、あの怖ろしい顔をした閻魔大王と共に、荒れ果てた堂内に住んでゐた光景を想像すると、何ともいひやうのない尊い感にうたれる。

當時貞心も良寛和尚と同じやうに、その生活は托鉢だけによつて支へられてゐた。現存してゐる貞心の遺弟智讓老尼の話によると、貞心のゐたその閻魔堂は臺所の道具にすらも事缺くほどの貧しい堂で、村の者がそこでお講などを行ふ場合には、各自茶碗を手に持ち、箸を髮に挿して來るといふやうな有様であつたといふことである。

二十九歳といふ若さと人並すぐれた美貌とを持ちながらも、さうした貧しさと、淋しさと、わびしさとの中に、たゞ一人住んでゐた當時の貞心尼の心持は果してどんなであつたであらう。それも幼い頃からさうした生活に慣れて來たのであつたのたらばさほどにも感じなかつたかも知れぬが、相當な身分の武家に育てられた上に短い年月であつたとはいへ醫を業とする貧しからぬ家に嫁してゐた經驗までもある身で、しかも二十四五の年頃になつて初めてさうした變り果てた生活の中へ飛び込んで來たのであるから、その苦みと惱みとは決して世間普通の尼僧達のそれの比ではなかつたに相違ない。其點でも、かの名主の家の若旦那の境界から一躍して禪寺の小僧となり變つた良寛和尚との間に一味相通ずるものがある。

兎に角、さうした生活裡にあつて若い貞心はいみじくも其の不退轉の修行を續けたのであつた。而も又貞心尼は良寛和尚と同じく、佛道の修行と共に文學に心を寄せてゐたことも一通りでなかつたといはれてゐる。彼女のその方面での師匠は何人であつたか不明であるが、何でも彼女は少女時代から深くその方へ心を向けてゐたといふことである。そして彼女の出家の原因が夫に死別した悲みからの厭世にあることは勿論であるが、それと共に自由に自分の好む學問の出來るやうな靜かな超世間的な境遇への思慕が與つて力あつたことも亦事實であるといはれてゐる。

こんな風で、貞心尼が二十九歳で初めて良寛和尚に見えたまでには、佛道の修行に於ても、又文學の造詣に於ても、既にかなりの境地まで進んでゐたのであつた。それは前に掲げた彼女の歌が、良寛と初めて會つた時の唱和に於て既にあれだけの秀作を見せてゐるのでも充分わかることである。

しかし、どちらかといふと貞心尼は良寛和尚に師事するやうになつてから、初めて眞劍に歌を詠むやうになつたらしい。而もけなことには貞心尼の歌は良寛和尚との唱和に於てあれほど秀れた作を遺してゐるにも拘らず、他の場合に詠んだ歌にはさほど私達の心を惹きつけるやうな作が甚だ少いのである。貞心尼には良寛和尚に於けると同じくこれといつて纏つた歌集はなかつた。あつたのかも知れないが傳つてゐない。それでも、あちこちに書き殘された歌を拾ひ集めると相當の數にはなるのであるが、どうもいゝ歌が少いのである。

そればかりでなく良寛の歌には題詠が殆ど無いのであるが、貞心尼の歌は良寛との唱和を除く他は殆ど凡て題詠であるといつてよいほどである。それに調子も良寛のそれが萬葉調であるのとは違つて貞心尼のは今古調若くはそれ以下の低い調子のものが多いのである。あれほど良寛に接近して感化を蒙つてゐた貞心尼の歌が、良寛との唱和の場合を除く外、あまりにその影響の少いのは何としたことであらうか。

これは、しかし、貞心尼に限つたことではなく、良寛と交つてゐた多くの人に於て見られる共通點である。良寛の實弟山本由之を初め、解良叔問、阿部定珍、原田鵲齋、同正貞等、良寛の周圍にはかなり多くの歌人がゐたのであるが、いづれも申合せたやうに良寛との唱和を交ふ時にのみ[illegible]くて、他の多くの場合に於ける[illegible]には一向それ[illegible]ないのである。

一體、良寛といふ人は、他人の歌を添削したり、批評したりすることなどは大嫌ひであつたらしい。他人の詠歌の態度がどうであらうと、その調子がどうであらうと、そんなことには良寛は一向頓着しなかつた。そして自分は自分だけの歌を詠んでゐた。そして人が作歌についての用意を尋ねたりしても、たゞ萬葉集さへ讀めばよいとだけしか答へなかつたといふことである。隨て周圍の人々の歌の上にもその影響が及ばなかつたのであらう。

しかし、それは良寛に力がなかつたのではなくして、寧ろ周圍の人の天分が足りなかつたからである。自分達の近くに良寛のやうな秀れた歌を詠む人を得てゐながらも、彼等の多くはそれの影響を受けるべくあまりに天分が低かつた。さすがに良寛と相對して歌を詠み合つた場合には、おのづからその高い調べに同化されていゝ歌も詠めたが、そこから離れて一人で詠む場合には、彼等の多くは其の時代の一般の傾向に動かされ勝ちであつた。此の事は一面に良寛のえらさを示す證據であると同時に、他面その周圍の人々の天分の低さを示す事にもなる。歌の

上では、あれほど人として良寛に愛されもし感化されもしてゐた貞心尼も、やはりその數に洩れなかつた。これはまことに遺憾なことである。

貞心尼は又書に於てもかなり優れてゐた。なか／＼達者な、いゝ字を書き遺してゐる。型にはまつた美しさ一遍の女文字ではなく、相當獨特の妙味を持つた書である。しかし、形の上にいくらか良寛の影響が認められるやうな字を時々書いた位なもので、質に於ては全く良寛のそれとは異つてゐる。やはりその歌に於けると同じく、良寛の書の本當の影響は受けることが出來なかつた。これもまことに遺憾なことではあるがしかたがない。

四

貞心尼が三嶋郡嶋崎村木村家邸内の小庵を訪ねて初めて良寛和尚に見えたのは、文政九年の秋であつた。良寛和尚の高德の聞えは、ずつと以前から彼女の耳にも入つてゐた。敬慕のあまりどうかして一度その人に會つて見たいものだとは、彼女の久しい前からの念願であつた。そこで人を介してその意のあるところを和尚の許へ通じて貰ふと同時に、和尚が常に好んで手毬を弄ぶといふことを聞いて詠んだ歌にかこつけてさうした自分の敬慕の心を傳へて貰つたりした。

　これぞこのほとけの道にあそびつゝ撞くやみつきせぬみのりなるらむ

すると思ひがけなくも和尚からその歌の返しが屆いた。

　つきてみよひふみよいむなこゝの十とをとをさめてまた始まるを

そんなわけでつひに彼女はたまらなくなつてみづから訪ねたのであつた。

　君にかくあひ見ることのうれしさもまださめやらぬ夢かとぞおもふ

まつたくそれは彼女にとりては半ば夢心地の歡びであつた。そして初めて相見たその瞬間から、彼女は既に良寛のひろやかな、あたゝかな、そして澄み切つた明鏡のやうな心に、一切を委ねていだかれたやうに感じた。今迄感ずることの出來なかつた欣求の力強さが同時に彼女の心の底に感じられた。これまでの自分の苦しい求めは、結局かういふ聖者に會ふ爲の求めであつたといふやうにさへ感じられた。

その日は初めての見參であつたにも拘らず、貞心は夜更けるまでも良寛のそばを離れ得なかつた。

　白たへのころもでさむし秋の夜の月なか空にすみわたるか

も

こんな風に良寛の方で彼の老けたのに驚いてゐるにも拘らず、貞心の方では、

向ひゐて千代も八千代も見てしがな空行く月のこと問はず
とも

と名殘を惜みもし、未練を殘しもしてゐる。良寛の方でもその心根を察して

心さへ變らざりせばはふつたのたえず向はむ千代も八千代
も

とやさしく慰め、

又もこよ柴のいほりをいとはずば薄尾花の露をわけ〳〵

といふやうに、しみじみとした思ひを寄せてゐる。

近來頓にわが身の老衰を感じ、山陰の岩間を傳ふ苔水のやうに澄み切つた孤獨と寂寥の心境に住しながらもなほ且切々として胸に湧く我となき人間愛慕の情のやるせなさを感ぜずにゐられなかつた其頃の良寛にとりて、自分を慕ふこの若く美しく而も清い一個の女人の思ひがけなき出現は、これ又夢の如き歡びであつたに相違ない。そして一たび貞心に會つた後の良寛の心には、我ながらも不思議な一種の切なる愛慕の燃え上るのを禁じ得なかつたのである。それはその後程經て彼の方から貞心へ[illegible]

君や忘る道やかくるゝこのごろはまてどくらせどおとづれの
なき

こんな風にして良寛と貞心との交りは、會ふ度ごとに、會つて別れる度ごとに、ます〳〵深くなつて行つた。齡七十を越えた老僧良寛と、漸く三十になつたばかりの美しい尼僧貞心との間に結ばれた此の愛は、まことに世にも稀な微妙なる人間愛慕の結ばれであつた。それは師弟の愛よりは深く、肉親の愛よりは強く、戀人の愛よりは淨い、一種不思議な聖愛であつた。

良寛の居た嶋崎と貞心のゐた福嶋とはかなりの里數を隔てゝゐた。しかも、二人は時々訪ねつ訪ねられつして、その度に親愛の度を深めて行つた。初めのうちは何かと求道の上の話もあつたらしいが、しまひにはさうした境界からすらも超越して二人はまるでこども同志のやうにあどけなく遊び戯れることを何よりの樂みとしてゐたらしい。それは或時良寛が貞心の庵を訪ねた折に貞心の詠んだ

歌やよまむ手毬やつかむ野にやでむ君がまに〳〵なして遊
ばむ

といふ歌、及びそれに答へた

うたもよまむ手毬もつかむ野にも出む心ひとつを定めかね

つも

といふ歌によつてもほゞ窺はれることである。

しかし、そこへ行くまでには、時に心の陰のさすやうなこともないではなかつたらしい。殊に貞心の方にそれが著しく窺はれる。

山のはの月はさやかにてらせどもまだはれやらぬ峰のうす雲

春風にみ山の雪はとけぬれど岩まによどむ谷川の水

貞心が良寛に贈つたこれらの歌は何となく私には求道の上の悩み訴へたゞけの言葉として片づけることが出來ない。又これに答へた良寛の

昔も今もうそもまこともはれやらぬ峰のうす雲たちさりて後の光とおもはずやきみ

とか、

み山べのみ雪とけなば谷川によどめる水はあらじとぞおもふ

といつたやうな歌も、決して單に信仰上の道破をのみ主としたものとは思はれないのである。

けれども貞心尼の聰明と、敬虔と、純眞と、隨順とは、いつとなしに白雲の如く又流水の如き良寛の悠々淡々たる心に同化されて行つた。そしてつひにはそこらを歩き廻るのに自分も連れて行つてくれろと頼んだ貞心に對して、良寛が

誘ひて行かば行かめど人の見てあやしめ見らばいかにしてまし

といふやうなからかひ半分のあどけないはにかみを見せたのに答へて、

鳶は鳶雀は雀鷺は鷺烏はからす何かあやしき

とまでのほがらかさを示す自然な自由な心を得てゐる。

かうして二人はつひには師弟の關係、年齡の相違、性のけじめをさへ超越して、全くのあどけない幼兒の如き交りにまで進むことが出來た。七十餘歳の老僧と、三十餘歳の美しい尼僧とが人目など寸毫も憚らずに、或は毬をつき、或はハヂキをし、或は野に出て花を摘んだりして嬉戯してゐた——さうした光景を想像すると、私はそれだけでも得がたい朗らかな氣分に誘はれる。何といふ不思議な貴い愛の姿であらう。

しかし、そのやうな樂しい月日の間にも、良寛の肉體上の老衰は年一年とその度を增して行つた。そして貞心と相識つてから五年目の冬になつて、つひに再び起つことの出來ない病臥の身となつた。

梓弓春になりなば草の庵をとくとひてまし逢ひたきものを

良寛が貞心を慕ふ思ひは、ここまで[illegible]に達した。深い積雪に閉ぢこめられた此頃を弱い女人の身でどうして遠い道のりを歩いてなど来られるものかと思へば思ふほど、良寛にはます／＼貞心に逢ひたい思ひが増すのであつた。

しかし、いかに雪が深からうとも、いかに吹雪が激しからうとも 貞心はぢつとしては居られなかつた。彼女はつひに萬難を排して師の許へ駆けつけたのであつた。

いつ／＼と待ちにし人は来りたり今はあひ見て何か思はむ

良寛は泣いて喜んだ。彼はもうその時は自分でも眼前に死の閻の横つてゐることを充分覚悟してゐたのであつた。

それにしてもかうして最後の十日あまりを最愛の尼弟子のやさしい介抱をうけて静に此世を去つて行くことの出来た良寛和尚は、何といふ恵まれた人であつたらう。

生き死にの境はなれて住む身にもさらぬわかれのあるぞ悲しき

泰然として死に直面してゐた良寛和尚の前に、貞心も亦何等の躊躇もなくかうした最後の言葉を示すことが出来たし、良寛は更にそれによつて心の静けさをいさゝかたりとも動かされるやうなことがなかつた。良寛の口からはそれに應じて次の如き誰の作とも知れぬ一句が静かに洩らされた。

裏を見せ表を見せて散るもみぢ

かうして裏も表も見せつくした洒落[illegible]つ天保二年正月六日良寛和尚は穏やかな最後の眠りに就いたのであつた。

そして同時に此の稀有な淨さと、あたゝかさと、ほがらかさと、美しさとを持つた老僧と尼僧との現世に於ける交りも永遠の結末を告げたのであつた。

五

良寛和尚を此世から失つたことは當時の貞心尼にとりていかばかり大きな打撃であつたかは云ふまでもない。又その後の彼女の生活がいかに淋しく頼りないものであつたかも想像に難くない。

しかし、この大試錬を經て後の貞心尼の求道は一層の真剣味を加へて来た。良寛和尚を此世から失ふことによつて、彼女の心からは何ものかに頼らうとする弱さ、何ものにか縋らうとするあまえ心が、初めて拭ひ去られた。生死の界を離れて住む身にさへもかうした別離の悲みのあることに驚かされた彼女は、初めて真の孤獨寂寥の底に沈潜することの出来る不退轉の道心を得た。

福嶋の閻魔堂に於ける彼女の獨居生活には、いよ／＼眞の寂味が加はつて來た。

朝餉焚くほどは夜の間に吹きよする落葉や風のなさけなるらむ

その頃の彼女のかうした詠懐も、無論一つは良寛和尚が生前好んで口ずさんでゐたといふ、

焚くほどは風がもて來る落葉かな

の句の影響によつたものであらうが、それにしてもその頃既に彼女自身の生活そのものもほゞその境地にまで進んで居たことも信じていいであらう。

かくて四十歳頃まで貞心尼はかの福嶋の閻魔堂に住みつゞけてゐた。孤獨の底に自然の寂味を味ひ、貧しさのうちに魂の安らかさを得つゝ、彼女の心は年一年と渾成の域に進んで行つた。

そのうち彼女の最初の受業師であつた心龍尼の妹である眠龍尼が天保九年四月十五日に示寂し、續いて天保十一年六月廿八日彼女の師心龍尼も圓寂した。そして天保十二年三月彼女は正式に柏崎洞雲寺泰禪和尚について得度の式を了し血脈を相續して、改めて師の跡を繼いで柏崎釋迦堂の庵主となつた。それは彼女の四十四歳の時であつた。

それ以後に於ける貞心尼の生活は貧しいうちにも極めて平和であつた。良寛和尚と同じやうに彼女も亦多くの人々から愛敬され、彼女の庵は一面それらの人々にとりての道場であると共に、他面常に春風に恵まれた樂しい遊び場所となつてゐた。そして嘉永四年彼女の不在中火災に遭つて釋迦堂の焼失した後に於ても、彼女は彼女の歌の友であり且道の友であつた山田静里を初め多くの人々の寄進によつて眞光寺と稱する寺の側に新しい草庵を結んで貰ひ、そこに安らかな生活を續けることが出來た。その草庵は施主山田静里によつて不求庵と名づけられた。それは八疊と四疊と三疊との三間しかない狭い庵であつた。彼女はそこに二人の弟子と共に住んでゐた。しかし、それでさへも彼女には勿體ないほど廣く感じられた。

なほその庵を不求庵と命名したについて施主山田静里はこんなやうに書いてゐる。その文章は當時貞心尼その人が世間からどんな風に見られてゐたかの證左ともなると思ふから、ここにその全文を掲げて置くことにする。

「よろづのものおのれに求めむより、求めずしておのづから得るこそ、まことの得るとはいふべけれ。されば佛説にも諸經にもさるすぢにをしへありとぞ

此庵のあるじ貞心尼のぬしは、年頃佛の道のおこなひは更

たり、月花のみすてゝより外にいさゝか心にとゞむることなく、ひたすらむなし心に物したまふ。月日を和歌の消息に心をよせて、あま衣たちなれぬる人々はかねてよりよく知り侍りぬ。しかるにことしの氷月の末つかたまがつ火の災ひにてもと住まひたまひしあたりも一つらのやけ野となりぬれば、かの心しれる人々諸ともにことはからひつゝ、あらたにさゝやかなる草の庵を結びて、あるじをうつしすゑまゐらすことゝはなりぬ。これや、さは求めずしておのづから得るとも云べけれとて、不求庵とは名づけ侍るになむ。

もとめなき心ひとつはかりそめの
　　草の庵も住みよかるらむ

こは嘉永四年亥の長月半ばのことにぞありける。かくいふは方寸居のあるじの翁靜里」

かうした里人達のあたゝかな愛敬のうちに、貞心尼は二人の弟子達と共に淸く安らかな晩年を送ることを得たのであつた。そして明治五年二月十一日午前二時過ぎにその不求庵で靜かな往生をとげたのであつた。しかもその享年が良寛和尚と同じく七十五歳であつたのも奇緣といつていゝ。

貞心尼の死病は俗にいふ水氣であつた。前年の秋頃から床に就いてゐたといふことであるが、死についての煩悶などは少しもなかつたといはれてゐる。やつぱり[illegible]臨終に[illegible]おいよ／＼二三日の命といふことを言ふに、何か遺言はないかと訊ねたに對して、貞心尼は、

「何もいゝ遺くことはありませんが、わたしが死んだら、あの柳の木の下に大きな釜を据へ、豆腐のおかゆの雑炊をうんとこさとこしらへて、町中の犬に腹一ぱい振舞つてやつてください。」

かう云つただけであつた。

なほ臨終の四五時間前に、彼女は次の如き一首を詠んで弟子達に示した。

たまきはるいまはとなれば南無佛といふより外にみちなかりけり

これが彼女がこの世に遺した最後の吟詠であつた。

しかし、現在同雲寺裏山にある貞心尼の墓には、彼女の辭世として

くるに似てかへるに似たりおきつ波たちゐは風の吹くにまかせて

といふ一首が彫つてある。これは示寂の前日みずから辭世だといつて弟子達に示したものだといふことである。

それにしても既に良寛和尚の生前、和尚との唱和において貞心

が

　　くるに似てかへるに似たりおきつ波

と云つたのに應じて、良寛が、

　　あきらかりけりきみがことのは

といふ下句をつけたといふことが、彼女の遺稿『蓮の露』に明らかにしるされてゐるのを見ると、その歌は貞心の心に永く用意されてゐたものであるらしい。

そればかりでなく貞心尼は、既に七十二三歳の頃から遠からず自分の死期の遠からぬことを覺悟してゐたらしく、折に觸れてさまざまな辭世めいた歌を詠んでゐるのであつた。即ち七十三歳の秋には、

　　此世だにねがひしことのたがはねば花のうてなもまさしかるらむ

　　露の身のきゆるは秋をねがひぞとおもふものから袖ぞぬれける

などと詠み、七十五歳病中にあつても、

　　あとは人先は佛にまかせおくおのが心のうちは極樂

　　いつまでか長きいのちとわびにしも今は限りとなりにけるかな

などとも詠んでゐる。

いづれにしてもその最後が極めて安らかな大往生であつたことは疑ふよしもない。それは今尚生き殘つて、釋迦堂の庵主となつてゐる高野智讓老尼の直話によつても、私はたしかめるとが出來たことである。

六

貞心尼の生涯の輪廓は以上述べたところでほゞ盡されてゐるとおもふが、更に前記高野智讓尼その他の人々について聞き得た彼女の行狀、逸話等に關する談片を書き添へることによつて、一層彼女の面目を鮮やかにして置かうとおもふ。

×

貞心尼は容貌に於ては人並すぐれた美しい女性であつたが、聲があまりよくなかつた。お經を讀む時など、そのきい〱聲がひどく聞きにくかつた。それで晩年には自分でもそれがいやであつたらしく、多くの場合須磨琴と稱する一絃の琴を彈いて、それに合せてお經を讀んでゐた。琴に合せてお經を讀むなどは普通の尼さんなどには到底出來ない藝當であると遺弟智讓尼も笑ひながら話した。

×

貞心尼の所持品中には、云ふまでもなく良寛和尚の書いたも

つも多くあつたのであるが、不在中家が火災に罹つた時に大半焼失してしまつた。殘つてゐたものも少しはあつたが、人にやつたりしてしまつて、最後まで殘つてゐたのは、遍澄といふ良寛和尚の弟子の書いた良寛和尚の肖像に良寛の弟由之の讃をした一幅だけであつた。

　それについて面白い話が一つある。それはかの戊辰戰爭の時柏崎に來てゐた薩摩の武士で吉田某といふ人が、柏崎西巻家の紹介で一日貞心尼を訪ねた。何でもそれは體格の立派ないかめしい顏をした人で、頭髮を切つてゐた。貞心尼はその人に向つて、

「今の世では髮を切らぬと戰爭が出來ませんかのう。」

などと打とけた質問をしたりした。その後その人は屢々貞心尼の庵を訪れた。そして貞心尼の秘藏してゐた良寛和尚の假名手本を見てひどく感心し、別れにのぞんで無理やりにそれを貰ひ受けて行つた。弟子達ですらそれを非常に惜しがつて、何故あのやうな寶をあんな人になんか呉れてやつたかと訊ねたのに對して、貞心尼は、

「因緣でほしいといふんだもの、くれてやればいゝさ。それに良寛さまのお書きなされたものが、あのやうな遠い國へまで行つて人々に感心されるとすれば、なほさら喜ばしいことではないか。」

といふやうなことを云つて、少しも惜しさうなところを見せなかつた。

×

明治二年三月二十七日の夜、不求庵へ二人の盗人が這入つた。貞心尼は目をさましてそれと知るや、

「おい〳〵、こんな七十になつて手鍋さげてるやうな者のところへ來たつて何があるものか。金が欲しかつたら旦那衆のとこへ行かつしやれ。」

と平氣で怒鳴りつけた。すると盗人はいきなり貞心尼と弟子達をつかまへて足を縛り、上から夜具をかぶせて押へつけた。さうして置いて手あたり次第に何といふことなく奪つて行つた。

ところで盗人が出て行つた後で貞心尼は別に盗まれた物を惜む樣子もなければ、又少しも怖ろしかつたといふやうな風もなく、早速硯を持ち出して來て次の如き教育の歌を認めて弟子達に示して大笑ひをした。

　盗人のはひりて物みなとりければ

前の世になしゝむくひかしら波のかゝるうきめを我にみすとは

　盗まれし品々をよめる歌

　袈裟、衣

しらなみのよるの嵐に立入りてけさはころもの一つだになし

　からかさ、かつぱ

いづくへかさしてゆきけむ雨の夜にぬすみにきたるかつぱか
らかさ

　ちやうちん

提灯を何の爲とや盜みけむ闇をたよりのわざをしながら

　たび

いそちかみあまのとまやに白波のたび〳〵いらばいかにして
まし

この恬淡さは全く良寬和尚の壘をも摩するものである。而も後で盜人の身の上をおもひやつて

輕からぬ罪を脊負ひて死出の山こえゆく時はくるしかるらむ

我が爲に仇なすものもにくからで後の世までをあはれとぞ思
ふ

とあたゝかな憐みをさへ寄せてゐる。まことに貴い心境である。

さうかとおもふと貞心尼は、更にそのことについて

「いや前の世に借りたものを返濟したのだとおもへば何でもないことだ。それにしてもわしは前の世に大泥棒の女房でゝもあつたと見えて、よくまあかう度々盜人に這入られるこんだ。」

こんなことを云つて笑つたりした。さうした超越ぶりには何人も感心させられたものであつた。

×

貞心尼の庵の周圍にはいつも草が蓬々と生茂つてゐた。弟子達がそれをむしらうとしても決してむしらせなかつた。そして

「大事な蟲の棲家だ。このまゝにして置くがよい。それに草だつて同じ生きものだ。かあいがつてやれ。」

こんなことを屢々云ひきかせたりした。

×

貞心尼には不思議に尼さん同志の友達がなかつた。尼さんで貞心尼の庵に訪ねて來る者などは殆ど無かつた。その代り男の人には多くの知己を持つてゐた。明放しに何でも正直に思つた事を云ふ貞心尼のやり方が女の人には向かなかつたのであらう。殊に晩年になるに隨つて隨分と惡まれ口をきいたらしい。しかし、その惡まれ口も心ある者には却つて面白くも、意味深くも聞きなされたものであつたといふことである。

×

貞心尼は非常に犬を好んだ。弟子達が使に出て道草を喰つて

許りでおさくれたのしても犬と遊んでゐたといへば足らなかつたほどに犬を愛してゐた。

犬が庵室の縁の下に來て子を生むやうなことがあると、貞心尼は毎日豆腐のおからを煮ては食はせてゐた。

※

貞心尼の臨終に於ける最後の言葉は、

「さむい〳〵火を焚け〳〵」

といふ一語であつたといふことである。

七

貞心尼その人のいかにすぐれた人であつたかは、上來述べ來つた如くであるが、よしさうでなかつたにしても、今日私達が貞心尼に向つて衷心からの感謝を捧げなければならぬ理由が他にある。

それは良寛和尚の歌の最初の蒐集者であり、又和尚の詩の最初の蒐集者であり且刊行者であつた上州前橋龍海院藏雲和尚にとりても最大切な相談相手であつたことである。貞心尼の集めた良寛歌集は「蓮の露」と題されて、天保五年に編纂を終つてゐる。又藏雲和尚の編んだ「良寛道人遺稿」と題された詩集は、慶應三年に江戸芝尚古堂によつて刊行されてゐる。而もその詩集の巻頭に掲げられた[illegible]良寛を[illegible]つたのである[illegible]。實に良寛和尚の二遺稿は、[illegible]心尼と[illegible]の高い心に[illegible]なかつたなければ出來なかつたものである。

此の二大功績の存する限り苟も良寛和尚に心を寄せる者である以上何人と雖貞心尼の前に頭を下げずにはゐられぬわけである。良寛和尚の晩年は貞心尼によつて稀有な美しさと、一段の光輝とを添へられ、良寛和尚の歿後その歌と詩とは貞心尼を得て初めて今日にまでかくも豐富に傳へらるることが出來た。

良寛和尚の光輝の失はれざる限り、貞心尼も又永遠にその評きを共にするであらうことを疑はぬ。

（完）

附記——此の貞心尼傳を草するに當つて私は二人の得易からざる顧問を得た。一人は多年貞心尼の研究に苦心して來た越後吉川村の上杉涓潤師、一人は貞心尼の現存せる唯一の遺弟である柏崎釋迦堂庵主高野智讓老尼である。今此の一篇を公にするに際して特に私は以上の二師に感謝の意を表する次第である。

資本の現段階に於ける金の意義

櫛田民藏

一

幣制回復の問題は、戰前平價又は平價切下等その方法必ずしも一樣でなかつたが、現在では殆んど凡ての國々がその幣制を回復し、殘つたものは日本スペインの外二三小國だけとなつた。回復後の狀態につき戰前と比較し目立つことは、アメリカを除き世界の主要國が金流通本位制を去つて從來專ら弱小國家の幣制であつたところの金貨の流通無き金本位制を事實上採用するに至つたことである。イギリスは金貨兌換の規定を廢して金地金兌換の規定を設けた。フランスには金貨兌換の規定あれども事實行はれない。白耳義は金爲替本位制である。墺太利、匈牙利、獨逸、伊太利、露西亞は金爲替制又は金核本位制を採用し、今尚兌換規定の制限にかゝわらず事實上兌換は回復せられ通貨は安定してゐる。

これ等歐洲主要國の新幣制は資本の帝國主義的段階、特に戰後資本の相對的安定の時期と呼びなさるゝ現段階に於て、如何なる意義をもつだらうか、問題は同時にこの時期に於ける世界貨幣としての金の意義をせん明することである。

金核及び金爲替本位制は、金貨流通の有無を以て金流通本位制と區別せられるが、貨幣價値の基礎を結局金におくことにおいて金流通本位制と同じく、金本位制の一種である。今日の社會は何故に貨幣價値の基礎を金商品に求めなければな

らないだらうか。高度に發展せる資本主義―資本の集積に伴ふ企業の獨占を前提し、それは最早自由市場に於て表現されずして、一面に於て、トラスト、カルテル、資本集中、銀行資本の産業資本化、國家資本主義的傾向等によつて特徴づけられたる資本の現段階に於ても、自由競争は決して廢止せられるものでなく、獨占のかゝる意識的統制形態の一傍らに又は並行して一存在する。それが廢止せられない限り、また獨占の種々なる發展形態が根本に於て私生産の基礎に立つ限り、一國の幣制は何等かの方法に於て金商品を價値の尺度及び價格の標準としてもたなければならない。そして この事は資本家的商品生産に共通する事實である。それ故に、戰後の新幣制の、從つてまた金の特殊な意義を考ふるには、まづかゝる一般的形に於て問題を考察する必要に迫られる。

金解禁又は本位制の回復と云へば、おごそかであるが、要は爲替及び物價問題であらう。戰前平價回復は下落した貨幣價値を戰前の金標準に復舊することであり、單價切下は貨幣名目變更の場合もあるが普通は戰前の金標準を切下げて概して現在の下落した貨幣價値に適合せしめることであるから、前者は商品側に變化なく一定の通貨收縮を伴ふ限り一般物價の下落として、後者は、商品側に變化なき限りその騰貴の現狀維持として表はれる。即ち一方は、商品價格の犧牲に於て貨幣價値を引上げることとなり、他方は、貨幣價値の犧牲に於て商品價格を維持することとなる。過渡期に於ては前の方法では貨幣をもつ者は得をし商品をもつ者は損をするが、後の方法では反對に商品をもつ者が得をし貨幣をもつ者が損をする。この素朴な見解からも、金利業者と産業資本家とは利害相容れない。産業資本家が同時に銀行業者であり、銀行業者が同時に産業資本家であるところに於ては、問題は簡單でなく、更に小企業者小所得者及び勞働者階級の利害が加はるから一層複雜となり、もし政策實行の時――景氣變動の間に於ける一定の時――を誤るならば、社會動亂の危險をもち來たすのである。勞働力は商品であり、無産者のこれに對する立場も自づと明白なやうであるが、勞働力は特殊な商品であり、商品勞働力の所有者たる無産者は無條件には單價切下に贊成し得ない。何となればそれは實質勞賃の減却を意味

するからである。無條件には平價回復にも賛成し得ない。何となればそれが生活必要品の下落を伴ふ限り、結局に於ては一般に勞賃の低下を意味するからである。無產者は一般的にこの勞賃制度に抗爭する理由をもつ。しかしながら、この抗爭が妨げられ、戰前平價と單價切下といづれかを擇ぶべく强制せらるゝならば、階級對立を一層明白にしおし進むる意味に於て戰前平價に賛成すると同時に、勞働時間失業其他待遇に關する可能なる一切の社會政策的施設を要求することであらう。この一般的な意味に於ては、有名な『賃勞働と資本』に於て答へられてゐる。

かくて問題は複雜で重要であるが、戰前平價の復舊にせよ單價の切下げにせよ、ともに貨幣の價値を金に結びつけやうとするに至つては一つである。現在日本で金解禁があれば市中銀行の日銀預金の一部及び國際貸借關係の支拂差額を合せ月々一千萬圓、年一億二三千萬圓であらうと云はれ或はもつと多く年三億に上るとも云はれ、それに伴ふ物價の下落も——正貨の流出は必ずや利子率の騰貴を伴ひ、諸證劵の下落を惹き起すが、必ずしも通貨の收縮とそれに伴ふ物價の下落を惹き起すものでなく、物價の下落は商品側に變化なき限り通貨收縮の諸操作を條件とする——相當の高に上ることであらうが、假りに貨幣の値上りを三億とし、これがために必要な商品價格の値下りを三億とすれば、價値又は價格の大さに於ては同じものであるのに、何故、一方は他方の犧牲とせられるか。これ第一にこの世界に於て金が事實上價値の尺度として存在し、從つて第二に立法者が一般に金を以て價格の標準としなければならないからであり、第三に立法者が戰前の金標準に於てそれをもたらうとするからである。而して、こゝでは第一問のみが問題である。何故に金商品は價値の尺度でなければならないか。

二

經濟が組織立てられ、信用制度の完備せるところ、又は國家權力の統制作用が充分行はれ得るところでは、兌換を停止

しても通貨價値に影響はないのであるから、今日の實際に於ては金兌換の必要に金が國際的決濟の手段として要求せられるからである。國際貸借決濟の手段は何故に金でなければならないか。一定の木綿と一定の金は價値又は價格の大きさとして見れば、全く相等しいものであるのに、國際的の支拂は何故に結局に於て商品木綿でなく商品金でなければならないか。それは、金が工藝用又は奢侈的欲望を滿足する自然的性質の故ではない。金のかゝる自然的性質は『誇示、趣味、優越、歡樂欲』等人間の特殊の欲望を滿足せしむるだけであつて、他の商品の使用價値と異らない。また國際貸借の決濟手段として金が要求せられるのは、むろん工藝用乃至奢侈的欲望滿足のためではない。世界主要國の法律が金を以て價値の尺度と定めてゐるからであるか。しかし、戰後各國の本位制回復の過程は吾々に爲替安定のためには、國際上の決濟手段として金爲替、結局に於て金が必要であること、而して國家の法律は單にこの世界經濟上の事實を承認するに過ぎなかつたことを語つてゐる。從來の金本位制も一國の内外に於ける同樣の事實を承認しただけであり、國家の法律によつて金が貨幣となるのでなく、事實はむしろその反對である。

貨幣商品としての金を普通の商品から區別するものが價値の分量でなく、金自身の自然的性質でなく、また法律の作用でもないとすれば、如何なる事實が金をして國際貸借の決濟手段として世界貨幣たらしむるか。金は一般的交換手段として凡ての商品と交換せられ得ると共に凡ての商品は金と交換せられ得る。これは發達せる商品經濟の下に於ける一般的事實である。この事實の理論的分析は、理路の必然として次のことを證明する。即ち金は商品として他の諸商品と同じやうに人間勞働の生産物として價値をもつてゐること、金と云ふ特殊な具體的な物體は、他の凡ての商品に共通する抽象的一般的人間勞働——社會的勞働としての勞働時間——を直接に體現すること、普通の商品に於ては價値と特殊な使用價値との二重の存在として予盾をふくむが、金商品に於ては、金は『一般的使用價値』(マルクス)として直接に價値を體現することによつて『價値の獨立な姿態』(マルクス)となり、價値と使用價値との予盾は廢止せられること、かゝる形態

は、金が普通の商品として諸他の商品と交換せられることから必然的に發生し、いはゆる『商品に內在する價値と使用價値との矛盾の一定の發展』の結果たること。かくて金は特殊な商品として普通の商品からそれ自身を區別する。『金及び銀は、總ての生產物がそれと交換して讓渡されるに比例して總ての商品の轉化せる姿容となり、從つて全面的に讓渡し得る商品となる。金及び銀は、實在的勞働の素材交換が地球を包圍する割合に應じて一般的勞働の體化として實現せられる。金及び銀は、その交換範圍をなす特殊等價の系列の發展に比例して一般的等價となるのである。商品は世界流通に於て、それ自體の交換價値を普遍的に擴大するが故に交換價値の金及び銀に轉化せられたる姿容は世界貨幣として現はれるのである』（マルクス、『經濟學批判』宮川氏譯本二二八頁）。金が世界貨幣であるのは價値の分量上の問題ではなく、價値品質の對象化の問題であつて世界市場を前提する。そして金が貨幣材料たり得るのは、金が金屬として自然的にもつところの品質の同一又は均一性、分割及び結合の可能性等が同じやうに等品質であつて單に分量的の差異をもつところの價値――一般的勞働時間――の特質を、表現するに最も適するからであり、經濟の發展に伴ひ、貨幣材料たりし諸他の商品が金によつて驅逐せられたのは、金がもつところの以上の諸性質の外、その小なる分量が比較的大なる分量の價値をふくむためである。かくて、金は完全に一般的交換手段であり、『一般的使用價値』（マルクス）たり得る。金のこの性質は金が自然的にもつところのものではあるが、それが使用價値――一般的使用價値であるのは、商品交換の一定の發展を條件として發生する流通に關する人間の欲望を一般的に滿足し得るからであり、金に對する個々人の特殊な欲望に應ずるからではない。だからそれは特定な生產關係――分業と私有財產との下に於て人間が生產に支出する勞働を等しくするところの關係を前提するものであつて、一つの形式規定に屬する。金が工藝用その他に於て人間の欲望を滿足する使用價値は社會制度の變化に拘らず尙ほ存續し得やうが、一般的交換手段として金がもつところの一般的使用價値は商品の流通が無くなると共にその效力を失ふだらう。

商品價値の品質と分量との區別及び價値の物化に關する問題は、マルクス新作論の言葉と云つてよいが、商品の問題は、價値の品質及その物化であつて、分量のことではない。即ち、國際貸借の決濟手段として普通の商品でなしに金商品が要求せられるのは金價値の分量でなくて、それが世界貨幣として『價値の獨立な姿態』に於て存在するからである。『金銀は如何なる點に於て他諸姿容の富と區別せられるか？これを區別せしむるものは、價値の大小は、商品に對象化された勞働の分量に依つて決定せられるからである。寧ろ、金銀は富の社會的性質の獨立した體化であり表章であるといふ事實が右の區別を成立せしめる。(社會の富はその私有者たる個々人の富として存在するに過ぎない。それが社會的の富たる實を示すのは、これ等個々人が自己の欲望を充たすため、質的に相異なる諸使用價値を相互交換するからに過ぎない。資本制生產の下に於ては、彼等は貨幣の媒介なくしては此の交換を行ふことが出來ぬ。斯くして個々人の富は貨幣の媒介によつてのみ社會的富として實現される。この富の社會的性質は貨幣と云ふ物の上に體現されるのである。—F・E）即ち富のこの社會的存在は、社會的富の現實的諸要素の彼岸にあるものとして、社會的富の現實的諸要素と並立し、且つその外部にあるところの物として、事物として、商品として現はれるのである』(マルクス『資本論』第三卷高畠氏譯本改造社版下卷一一四頁)。信用制度の發達せるところに於ても恐慌の場合決定的の時に於て金兌換が要求せられるのは、金が一定の社會關係の下に於てとるところのかゝる特殊な姿態のためである。それ故に貨幣は商品であり價値をもつと云ふ事實の認識は事態のせん明に不可缺なことではあるが、それだけでは特殊な問題を一般化しただけで、何故に金商品が貨幣であるかを說明する所以でない。況んや單に金は貨幣だと云ふ素朴な貨幣金地金說の如きは特定な社會關係の必然にもとづく貨幣の本質を物化し、從つてまた財產制度、×××的財產制度を金めつきすることに依つて之を永久化せんとするものである。本位制回復と共に、貨幣金屬說は再び擡頭するやうであるがその或ものに於ては、貨幣が普通の商品から區別せられる所以の特質を看過し、從つてその前提としての商品流通を看過し、引いてそれと財產制度と

の關係が看過せられてゐる。

貨幣が金であるのは金と云ふ特定の具體物が直接に一般的人間勞働の體化として存在するためである。地から掘り出されたぴか／＼する自然物がそのまゝの形で凡ての商品と交換せられると云ふ目に見える事實が吾々を愚弄するのである。けれども、それが價値としての商品流通を前提し終局に於て分業及び私有財産の結果たることがせん明せられるとき、金貨幣の魔術は理論的には一應克服し得る。資本の集積に伴ふ金融資本の發展は國内及び國際市場を統制しやうとするけれども、一般に商品生産の基礎たる私生産的方法を廢止し得ない。それが廢止せられない限り、金と云ふ具體物が人間勞働と云ふ抽象性のものを直接に體化する魔術が存在し、從つて貨幣商品金が、價値の尺度たる事實が存在し、引いて金と云ふ物質の定量を價格の標準とし、之を金本位制と云ふ法律にまで高めやうとする人間の作爲が存在し、かくて金貨幣の魔術は實際的には決して克服せられない。かくて世界は金貨幣が價値の尺度たる必然性をもち、吾々は金本位制の必然性をもち、いまや舊平價か新平價かと云ふ金量の大小としての價格の標準を問題としてもつのである。

三

高度に發展せる資本制の下でも金本位制は何等かの形で存在しなければならぬ。だが資本の發展段階の異なるに從つて金の諸機能の重要さも異なり、幣制の上にも一定の變化が認められる。そして現在見るところの變化の特徴は國内に於て金の流通無き金本位制即ち金核本位制又は金爲替本位制として表はれたことである。

この制度の下では金塊又は金爲替兌換であるから金貨の鑄造なくその流通もない。對外支拂の手段としては在外正貨引當の金爲替又は外貨金爲替が用ゐられるから、發券銀行は金爲替を賣買することになり、金核本位制は金爲替本位制としての機能をもつことになる。金の機能は計算貨幣としてはたゞ觀念的にのみ作用し、吾々は商品の價値を計るのに現實に

金鑄貨の一片だも要しないから、金流通の有無は金本位制に必要なものではない。たゞ貨幣の價値が金の一定量として一定なと結びつけられてゐればよい。金が國內にあるか國外にあるかは、戰爭の如き場合問題となるが、平時に於ける本位としてはその所在如何は問題ではない。かくて金核又は金爲替制も一の金本位制であり、從來の金流通本位制と異なるところは、金が流通手段としてもつところの機能が停止せられ、單に國際的支拂の決濟手段たる機能に制限せられることとである。

金の流通無き金本位制は一八一九—一八二一年のイギリスに遡るが、その特殊な形としての金爲替本位制は戰前に於ては印度その他弱小國の幣制であつた。然るにいまや、イギリスは一百餘年の昔に歸つて金核本位制を採り、歐洲の主要國中には金核本位制と雖も事實上金爲替本位——ドル本位を採つたものが少なくない。これは戰時戰後一般に金の生産不足のためだと云ふ。曰く『世界の正貨需要高は年々前年末現在高の三分の割合で增加して行くのに、南阿その他の金産地の生産は二分位しか增産なく、全世界の金は前年末現在高の約一分づゝ供給不足となるが、これは金價値を高め一般物價を低下せしめ、世界の財界を不況に導く原因となる。そこで金の節約は人類の經濟的幸福をはかるため是非必要であり、金爲替制、金塊本位制、比例準備制はいづれも金節約の精神に合致する』と。戰時戰後金生産の方面には技術の改良無く、世界の金生産高は一九一三年の七十六萬八千キログラムに對し一九二六年には六十萬キログラムに過ぎない、金生産高のふえないのは事實である。だがヨーロッパ諸國に於て正貨保有高の少ないのは、アメリカの金保有高が著るしく多いからであろう。もし前者の新幣制が正貨保有の少ないためだとならば、後者に多過ぎるためであろう。ヨーロッパの新幣制は、世界金生産の一般的減少のよりもまづ世界正貨保有の不平等な分配にあるとも云ひ得やう。

然るに各國正貨準備の多少は、通常の狀態では、大部分は當該國家の輸出産業が外國市場で實現し得た利潤の高を表はすものであり、正貨保有高の大部は正貨準備より成るものとすれば、各國正貨保有の多少は、當該國家の産業が世界市場に占むる勢力の多少をも表はすであろうから、その不平等な分配狀態は、終局に於て各國に於ける生産力の不平等な發達

を意味すと云ひ得やう。戰後の世界經濟はアメリカとヨーロッパ及びヨーロッパ諸國間に於ける生産力の極めて不平等なる事實を出發點としてゐる。アメリカが債務國から債權國になつたこと、そして金融の中心地がロンドンからニューヨークに移つたことは、戰時戰後生産力のかゝる不平等なる發達の表現であつて資本發展の現段階の一大特徴である。そしてこれは、世界の物價水準五割高と共に戰爭の結果として戰後にのこされた事實である。かくて、世界に於ける金の不平等な分配は生産力の不平等な發達の表現となる。

この事實は直接間接に戰後ヨーロッパの經濟的復興が主としてアメリカに依賴しなければならないこと、同時に通貨の安定が現段階に於ても一般に金を必要とする限り幣制回復の方面に於てもアメリカの『援助』にまたざるを得ないこと、從つて新幣制は舊幣制に比して何等かの變化を受けなければならないことを意味するであらう。變化は、一面には金融の中心地に在外正貨をおき、國內では金の推積を計るやうになければならぬであらう。金核又は金爲替制は在外正貨と流通金貨のひき上げを特色とし、かゝる目的に適合する。かくて極めて大體的には、不平等な生産力の發達と之に適應する不平等な正貨保有と云ふ一定の經濟關係と而してかゝる關係の下に於ける過渡期の幣制としての金核又は金爲替制との關係が見られぬではない。だが、イギリスの如き、金解禁當時用心のためアメリカにクレデットを設定したけれども元來アメリカの援助なしに幣制を回復し得ない二三の國々と同一視し得ない。日本の如き年々多少とも金貨の鑄造はあるが殆んど全く流通なく事實上の金核本位制の國である。戰時中の中立諸國及び交戰國中フランスの如き金流通を回復しやうとすれば出來ないわけではない。諸國がそれをしないのは必要がないからである。諸國が金を流通から引き上げたのは、戰爭中の必要によつてではあるが、元來金の流通は金本位制に必然なものでなく、信用の發達に依つて極度に縮小せらるべき性質のものである。新幣制の成立をもたらした根本の理由はそこにあるので、戰時中の金鑄貨引上げと戰爭による或る國々のアメリカへの從屬關係とはむしろそれを促進せしめ且つ一般化したに過ぎないものと云ふべきでなからうか。

から考へると貨幣制は流通界の範圍でないことになり、貨幣としての金の機能は單に國際收支の決濟手段に、即ちたゞに世界貨幣としての機能に限ることは、一つの世界的傾向として認められるが、同時に吾々は資本の集積に伴ふ現段階に於てそれの出發點であつたマーカンテリズム時代に於けると類似の現象を見る。マーカンテリズム時代、産業資本主義時代、帝國主義時代など云ふことは、生産力の發展に伴ふ生産關係の變化、從つてまた資本の特定な發展段階を指し、區別立てをすれば面倒になるだらうが、排他的のものでなければ、またむろん何年何月と云ふやうに時を劃し得べきでなく、こゝでは大づかみに歴史上の大きな景氣變動の波位に見て差支なからうと思ふ。資本の歴史に於て特にヨーロッパに於ては、その初期、國内の生産物が商品化されず、輸出目的の小企業の生産物のみが商品として外國に輸出せられてゐた時代、この時代に於ては、輸出商品は單に金を國内に吸收する方便であつて金は富の唯一の形態として貯藏せられる。然るに諸外國との交通を媒介として國内産業が發展し、企業が集中せられ資本が集積せられ信用は發達して生産物が一般に商品化せられるやうになると、先きの時代とは反對に、貨幣は單に商品を轉形する手段方便としてのみ考へられると云はれたが（マルクス）、いまや資本の異常なる集積に伴ふ金融資本の時代に於てその端初に歸り金は流通から引き上げられ『衣魚にもしやびにも浸されない永久の退然貨幣』なるかの如く貯藏せられ、その一部のみが國際收支の決濟手段として國々を流轉する。

だが帝國主義の時代はマーカンテリズムの時代ではない。ともに國家權力の保護干渉はあるが、大部分封建生産に支配せられてゐた當時のヨーロッパに於ては、國家權力は資本制のために社會の發展を推進する役割をつとめ、金融資本のヨーロッパに於ては金融資本のために資本支配の現狀を『治安維持』する。マーカンテリズム時代に於て退藏貨幣として堆積せられた金貨幣は漸次に流通手段に轉化せられたが、今は流通から引き上げられた金貨幣は正貨準備政府保有その他の名の下にたゞ堆積せられる。ともに金貨幣の機能は世界貨幣としてのそれに限られてゐるがその發展の方向はちがつてゐ

る。高度な產業及び信用組織の下に發生した金の機能の變化は內容複雜であつてもちろん資本制初期に於けるそれと同一視得ない。同じ金核又は金爲替制でも印度やヒリッピンや南米小邦のやうな商品經濟の未發達のところと現在のヨーロッパに於けるとはちがつてゐる。南米小邦の如き最近まで幣制なく中央銀行なく一般に不換紙幣國であつたところでは、新幣制は幣制の統一生產物の商品化等國內產業の資本主義化として結果するであらうが、現在のヨーロッパに於てはもはやそうした役目をもつはづはない。それなら新幣制はヨーロッパ諸國に於て如何なる役目をもち、また新幣制の下で集中せられる金の機能は如何やうに轉化せられるだらうか。

四

アメリカは金の貯藏によつて利するところ無いからアメリカに堆積せられた金は再び世界に分散せられるであらうと云はれたが、この事は、ヨーロッパ幣制回復の運動に伴ひ一部分アメリカ發券銀行を中心とする主要國家間の協定として行はれたやうである。一九二七年五月フラン安定のためイングランド銀行からの莫大な預金の引出に關係し、七月初めニユーヨークに開催のアメリカを中心とするイギリス、ドイツ、フランスの發券銀行代表者會議。同年九月以降アメリカよりヨーロッパへ連月正貨流出、ヨーロッパに於ける爲替ます〳〵安定。一九二八年一月に入りドル爲替相場弱、正貨の流出つゞく。ロンドンに於ける英米佛の發券銀行代表者會議、イタリー代表者の參加、而して、同會議がロンドン正貨準備維持協定（ドイツ、オーストリア、ハンガリー、オランダ、ベルギー、フランスの諸發券銀行加盟）への參加。（大塚教授監修、ヴアルガ世界經濟年報、第一輯及び第二輯による）。この二つの發券銀行會議は、ヨーロッパ幣制回復に伴ふ正貨分配に關係し、そして一九二八年初頭に於ける正貨流出に伴ふドル爲替の低落は、當時アメリカに於ける低利率による短期資金のロンドン移動及び外債發行等の影響もあるが、主要原因はアメリカを中心とする諸國發券銀行の協定による正貨分

配置にあつたと云はれてゐる（同上ヴァルガ年報）。假りに戰後歐洲の諸國家を國家にまで集中せられた金融資本家と見るとすれば、それに金を貸してゐるアメリカは一大銀行資本家の地位にある。銀行資本は自己の資本が投資せられてゐる企業者間の競爭を廢止しなければならない。世界に對するアメリカの現狀維持——アメリカの獨裁——を維持するためには、アメリカは諸國家間の互に矛盾する諸政策の調和のために世界と協定しなければならない。金保有の分配に關する協定はアメリカ銀行の金利政策と同じくかゝる目的をもつであらう。

このことは、歐州復興に關する他の諸政策と同じくヨーロッパ諸國に於ける勞働と資本との關係の一定の安定を前提するであらうが、貨幣制度の確立はますます安定化の傾向をつよめる。貨幣價値の安定と共に、從來外國にとん逃せる資本の歸還、外債による正貨吸收、大銀行の外債を以てする內外債の引受、かくていはゆる內地景氣の釀成等大銀行自身の金融資本としての活動が開始せられる。これは組織と能率の高い勞働力とをもつヨーロッパの或る國々にとつては可能なことである。新幣制は、アメリカに於ける在外正貨の機能に重心をおき、一面アメリカへの從屬を意味するやうであるが、この從屬關係は、企業の組織とゝのはず能率の低い勞働力をもつ植民地諸國家に於けるそれと同じではない。一九二三年獨逸の在外資本は約八十億馬克と稱せられ、その一部はマルク安定と共に獨逸國內に歸還したが、大部分は海外におかれてゐる。之を戰前一九一四年の二十八億、一九一〇年の三十五億（當時イギリス七十億、フランス三十五億と計算せられた）と比較すれば非常な低下であるが、その後の狀態は、むしろ之を基礎とするドイツ金融資本の活動が目立つてゐる。一九二五年以降、株式社債發行高の增加と同時に外債發行高も增加し、外債發行高は一九二五年の千萬馬克に對し翌一九二六年には六千七百萬馬克となり、二七年度に於て一層の增加であり、その他の形態に於ける投資を合すれば、一九二六年度に於ける海外資本輸出の總計は一億一千二百萬馬克に上る。（フリードリッヒ『ドイツの資本輸出』による）。ドイツにしてさうだとすれば、フランス、オランダ其他に於ける金融資本の海外投資熱は察するに難くなく、ヨーロッパ諸國は經

濟の復興をまたずして早やくも世界市場の競爭に加はるべく强制せられる。ドイツはその顯著な一列であるが、借金して海外投資をしなければならないところに、現段階に於ける資本家國家の矛盾せる生存條件が存在するのであり現段階の一つの特徴である。かつては武裝解除、賠償義務及び資本輸入等の諸特徴を兼備するに依つて聯合國から中歐に設定せられた二十世紀の新殖民地だと云はれたドイツは、今やその借りた金を資本化することに依つて資本輸出にまで進出し、いはゆる『借金帝國主義』にまで發展しつゝある。而してドイツの新幣制はこれを促進せしめたのである。

この借金帝國主義が如何やうに發展するかは今後の問題であるが、資本輸出の傾向に伴ひ植民地獲得の運動も自づと盛んとなり、世界市場再分割の要求がこれ等の國々に於て高まりつゝあるのも事實である。かゝる要求は結局國內に於ける産業の合理化と國家の産業保護の政策を促し、戰後ます〱せまめられた世界市場の爭奪となり、その結果は正貨の爭奪として表はれてゐるから、アメリカの獨裁による世界の正貨政策はたえず攪亂せられなければならぬ。即ち、現段階に於ては、アメリカを中心とする意識的統制作用としての正貨政策が行はれてゐるが、それは決して諸國生産力の不平等な發達を前提する競爭法則を廢止し得ないのである。アメリカは年一億二三千萬圓づゝ今後十年間正貨の流出をつゝけ得ると云はれてゐるが、上の如き傾向の前にアメリカはやはり正貨の流出を恐れなければならぬ。『人類の幸福のために』歐洲幣制の確立に助力すると云ふアメリカは正貨の流出を恐れてゐる。『人類の幸福のために』正貨を節約し金流通無き金本位制を採つたヨーロッパは正貨の爭奪に余念がない。

最近に於ては、ヨーロッパの金保有高はます〱増加の傾向にある。ヴァルガ世界經濟年報(インプレコール、八年一二八號)によれば世界主要國の金保有高の變化次の如し。

世界の金保有高(單位百萬馬克年度末現在)

一九一三	一九二四	一九二七	一九二六(六月現在)

一、ヨーロッパ	二〇四六一	一三二八九、八	一五九一[illegible]、八	一八[illegible]、一
内譯				
ドイツ	三九七四	八一八、八	一九三[illegible]、五	二一四九、七
イギリス	二一二三	三一七八、八	三一一三、四	三九一九、九
フランス	五二九九	二九八一、四	三三五六、一	四七五九、八
イタリー	一二〇九	九一六、五	九五一、三	一〇七九、二
ポーランド	—	八三、八	二四三、六	二六七、〇
ロシア	—	三〇六、七	四〇七、四	三三五、九
スペイン	三八八	二〇五三、五	二一〇八、八	二一一二、五
二、アメリカ合衆國	七九三七	一九三〇八、七	一八三七一、七	一七二〇四、二
三、合衆國以外の諸外國	—	一〇五六七、九	一一四〇六、〇	一一六五九、九
カナダ	五九八	八四九、七	九九三、二	七六七、〇
アルゼンチン	一三〇七	一九〇二、三	二二六八、〇	二五四九、五
英領印度	三五〇	四五六、〇	五〇六、四	五〇六、四
日本	七一四	三〇九三、八	二六五二、一	二六五〇、六
合計	三三六三六	四三一六六、四	四五六八八、五	四六九三九、二

二」金保有高總計は一九一三年末から一九二八年半ばに至る十四年半の間に百三十三億金馬克に上り、即ち約四割増加した。」三一九二七年末に於てヨーロッパの正貨準備はアメリカのそれよりも二十億少なかつたが、一九二八年中頃には約十億だけふえた。戰前に比しヨーロッパの金保有高は二十億だけ少なく、アメリカのそれは倍以上に上る。ヨーロッパ諸國中、スペインとイギリスとそしてシワイツとは戰前よりも非常にたくさんな金をもつてゐる。三爲替の外見上の安定にもとづ

き正貨準備の作用は事實上制限せられたにかゝはらず凡ての發券銀行は古い慣はしから及び將來の戰爭を見越して出來るだけたくさんの金を集めやうと努力してゐる。特にフランスとドイツとは近頃になつてその正貨準備を著るしく增加した』(同上ヴァルガ年報)

ヨーロッパは新幣制の下でます〳〵金を貯積する。だがヨーロッパの幣制は金貯積の增加によつて再び金流通本位に立還るとは思はれない。イギリスの金貯積は戰前に比し著るしく增してゐるが、この國が百余前に再び金流通本位に還つたと同じことをくり返すとは考へられない。而して金が國際收支決濟の手段としてもつ機能は全く廢除することは出來ないが、中央銀行の爲替賣買及び國家の貿易干涉によつて――この傾向はトラストの發達に伴ひ國家資本主義形成と共にます〳〵強くなるであらう――その最小限度に制限し得るのであるから、單に爲替の調節のみを問題とすれば、各國各自が自國内の金貯積に努力するのは何のためであらうか。ヴァルガは一部分は古いトラデションから一部分將來の戰爭を見越してのことだと云つてゐる。教科書には貴金屬は對外收支の支拂手段としての外、天災、凶作、戰爭の場合に一般的購買手段として役立つと云ふやうなことがかいてある。金は流通手段として機能が停止せられ、支拂手段としての機能が最小限に制限せられても『一般的購買手段』と云ふ役割がある。その役割はおい〳〵高まるやうに見える。

日本社會運動スパイ物語

里村欣三



一 スパイに就いて

無産階級運動を彈壓する目的から、政府が屢々スパイ政策を行つてゐることは、われわれの頻繁に聞くところである。然しながら斯かる蔑づべき卑劣なる政策によつて、どれだけの効果を擧げ得るか否かは、甚だ疑問でなければならぬ。

何故なれば政府が無産階級運動の內部にスパイを放つて、そのスパイが最大の効果を發揮するためには、先づ何よりも同志と大衆の間に信賴をかち得なければならない。そしてそのためには最も熱心なる階級運動の鬪士を粧つて、極めて戰鬪的な行動に出ることを餘儀なくされるからである。しかし斯かる戰鬪分子の出現こそは、支配階級の最も恐怖し、戰慄するところであつて「彈壓の目的」そのものであり、しかも彼等がそのスパイ政策を有効に遂行して行くためには、ある程度まで階級運動の發展と昂揚を放任し、默認し、庇護しなければならぬ「矛盾」を曝露するに到るからである。

われわれはそれらの實例を數限りもなく、世界の社會運動史上から豐富に求められるであらう。ロシヤ社會運動に現はれた、最も大仕掛けなスパイとしては、先づユウゼン・アゼンと有名な革命僧ゲエオル・ガポンであらう。

アゼフが赤い假面をかぶつて、ロシヤ革命運動のなかに潜り

込んで來たのは昨世紀の終り頃からであつた。彼は社會革命黨が組織される最初からの黨員で、しかも忽ちにして黨内の首領株になつてしまつたのである。分離してゐた支部や團體を一とまとめにして中央本部を設け、黨の組織化と機關紙の發行に努め、露國の内地へ盛んに革命文書を密輸し、農民社會黨を組織し黨のテロリスト行動を助長したなど、彼のやつた仕事で一つとして「革命的」でなかつたものはない。

わけてもアゼフのアゼフたる所以は、彼がテロリストとしての目醒ましい活躍振りであつた。彼がその方面で實權を握りはじめたのは、一九〇三年十二月、有名な暗殺團の首領グレゴリー・ブルシユニが捕縛されてからであつた。その後をうけて彼はあらゆる陰謀を計劃し、あらゆる暗殺を組織指導して、革命黨員として大膽な面目を發揮する一方、同時に彼は惡辣無道なスパイとしての辣腕を思ひのまゝに揮ふてゐたのだ。

一九〇四年、時の内務大臣のフオン・プレーフがサザノフとシユルスキーの一味によつて斃されたが、その暗殺を計劃したのも、またツアールの伯父セルヂアス太公がイワン・カリヤエフ及びドラの二人に暗殺されたが、その指揮者もまた實にユウゼン・アゼフで、彼が黑幕にゐて自由に糸を操つてゐたのだ。かやうに大がかりな仕事に成功したアゼフが同志の間に絶大な尊敬を拂はれない譯がなかつた。——と、同時にその信頼を巧みに利用して、彼の手から無數の同志が暗々裡に官憲の手に賣り渡されて斷頭台の露と消えて行つたのだ。

この彼は旣に小學校に在學中その級友を煽動して教師に反抗させ、その蔭に廻はつてその陰謀を教師に密告してゐたほどの少年で、全く生れながらのスパイであつた。アゼフは後年この自分の卑しむべき性格と、ロシヤ當時の國情を明敏に感知して、スパイとなつて身を立てる決心で、ドイツから爆彈の製法を學んで歸國するや、彼は政治警察外國事務長官ラツチコウスキーから多額の運動資金と逮捕御免の保證を得て、社會革命黨に加はつて來た生え拔きのスパイであつたのだ。

有名な革命僧ゲエオル・ガポンは一九〇五年一月二十二日數萬の勞働者を率いて冬宮に押寄せた、所謂「流血の日曜日」の大立物であつた。この事件後に彼はロンドンに亡命を餘儀なくされたが、その翌年彼が歸國した時には、旣に革命の風潮が彼を置き去つて、往年の勢力は全く地を拂つてゐた。そこで彼は首相ウイツテ及びラツチコウスキーと約してスパイになつたのであるが、これを知つたアゼフは恐るべき競爭者の出現に驚いて、ガポンを遂ひに暗殺してのけたのだ。これはアゼフがラツチコウスキーと秘密警察署から永久に自分が重要な人物として認

められてゐたい、その陋劣な競爭心のためであつたが、スパイ政策の見苦しい矛盾の曝露でなければならぬ。

ピアトニツキーの手記「革命の陣頭に起ちて」を讀むと、果敢な非合法運動を戰ひ拔いた「イスクラ團」の幾多の同志のうちにも、巧みに革命家の假面にかくれて運動を賣り、同志を裏切り去つたスパイのあつたことが曝露されてゐる。シトミルスキー、グルトヴーゲン、マトヴエイ、マリノフスキーなどのスパイがそれである。彼等は何れも仕事の出來る有爲な鬪士と見せかけて、不思議にも多くの大衆から信頼をかち得てゐたのだ。殊にマリノフスキーなどはモスコウ縣から選出された、社會民主黨の國會議員で、レーニンですらもが最後まで彼に尊敬を拂つてゐて、容易に彼がスパイであると噂された流言を信じなかつた、と言はれてゐる。ジノヴエフはその「ロシヤ社會民主勞働黨史」に於いて、

『スパイ・マリノフスキーは勞働運動の古い指導者で、金屬工組合の議長であつた。彼は多年ペテログラードの勞働者の間に――いやそれ以外の土地に於いても大きな人氣を博してゐたので、彼が勞働組合運動の指導者のグループの代議員としてプラーグに來た時には、吾々は彼にモスコー近郊の一工場に地位を與へ、プラーグで選擧された中央委員會を通じて、選擧以前に逮捕されないで議會に乘り出すことが出來るやうに、選擧日まで一ケ年間は音なしく行動することを彼に命令をさせた。そしてその通り旨く行つた。所が御承知の如く、後になつてマリノフスキーがスパイであることが明かになり、その事件のために吾黨は多大の犧牲を拂はねばならなかつたのである。しかしながらマリノフスキーはウマウマと議會フラクションや吾黨の中央委會員、それから「プラウダ」及びモスコーの新聞「ラボーチ・プチ」の編輯部に侵入することが出來、殊に「ラボーチ・プチ」の建設のためには彼は誰よりもよく活動したのだ。それにも拘らず今日過去をふり返つてみると、當時の情勢のために、政治警察のその無恥な行動も決して彼らの大なる利益にならなかつたことがはつきり知れるのだ。勿論マリノフスキーの協力によつて政治警察に百人以上も吾々の最良の同志を逮捕したのであるから、吾吾に與へた損害は少からざるものではある。然しそれにも拘はらず、吾々は政治警察の見込は當が外れたといふことが出來るのだ。と言ふのはマリノフスキーは他の代議士の如く屢々外國で起草された原稿の演説をしなければならなかつたので、やむなく議會に於ては革命的行動をとらざるを得なかつたからである。その上に彼は吾が六人の代議士の首席であり、信用を失はないためには、吾々の革命的行動を餘儀なく助けなければなら

なかつたからである。』

と、皮肉に「スパイ政策の矛盾」を指摘してゐるのである。

ビスマークは死ぬるまで、社會主義者を呪ひつゞけてゐた。彼は烈しい憎惡に燃えて、彼の公的機關紙「ハンブルゲル・ナツハリヒテン」に於いて、彼は社會主義者を一擧に片づける方法は、社會主義者をして死者狂ひの行動に訴ふるを餘儀なくさせて街頭に驅り出し、そしてそこで彼等を射殺する以外に方法はない――といふ猛烈な意見を書かせてゐた。その彼がフランクフルト・アム・マインの聯邦公使であつた時、その妻にかういふ手紙を書き送つてゐる。

『材料の缺乏からスパイは虛僞を報告し、事件を法外に誇張する。これらのスパイは如何なる犯罪が企まれてゐるかを確めるために任命されてゐるもので、若しそこに何等の陰謀も見出されなければ、自然に彼等は「どうにかしなければならぬ」と考へるやうになる。何故ならば何事も報告が出來なければ、彼等は餘計な人間になるからである。しかし誰も餘計な無能者になりたくないから、彼等は事實を揑造するか、または佛國の古諺にあるやうに「運命を修正して自らを救ふ」か、然らざれば彼等自身で陰謀を企むであらう。』――と。

シユレーデル・ブレンヴアルトと稱するスパイは、ベルリン警察參事官から最初は月二百マーク、その後には二百五十マークの俸給を受けて、チユウリツヒに於ける總ての集會で暴力行動を煽動誘惑してゐた。一八八三年の夏には御用無政府主義者カウフマンと共にチユーリツヒ會議を開いて、十三人の同志を集め得て、シユレーデルが議長で、この會議でその後ウインナ、シユツガルト及びシユトラスブルグでシユテルマツヘル、カンメレル及びクミチユの手によつて實行された殺人事件が計畫された。この事件後シユテルマツヘル、カンメレルは絞首台でその罪を償つたが、シユレーデル自身は國外に亡命して、「フライハイト」を彼自身の負擔で刊行してゐた。勿論その金は彼自身のポツケツトから出たのではなかつた。

「チユーリツヘル・アルバイテルスチンメ」の紙上で四回に亘つて、最も模範的な手際で將來に行はるべき市街戰の方法を說明し、そしてまた特に砲兵及び騎兵と戰ふ方法を敎へた、前のバーデン砲兵隊長エーレンベルグ卿はベーベルとも個人的には少しばかりの知り合ひであつた。この紳士もあらゆる集會でベーベルの同志が武器を購ふために據金を勸めて廻はつた。獨逸と佛蘭西との間に戰爭が勃發するや否、ベーベルの同志は一齊に瑞西からバーデン及びヴエールテンブルグに亘る鐵道線路をズタズタに破壞し、そして郵便局及び鐵道倉庫を占領すべき

だ！と、ベーベルにかやうな一切の忠告を文書と口頭で與へてゐた——この親切な紳士こそは、プロシヤ警察に雇れてゐたスパイであつたのだ。

シユミツトと云はれるスパイは、自分自身で暗殺基金の設置を提案して、そしてイの一番に二十フランを寄附した。この男もまた警察に雇はれてゐて、自分で自分の計畫をそのまゝすつかり警察に報告して報酬を貪つてゐたのである。

「議會手段による進歩は、しかく遲々たるが故に！」——と、欣然と立つて黨の同志に所信を陳べて、彼等に爆發藥と爆彈の製法に就いて指揮を與へてゐたイーリング・マーロと稱する男は、間もなく秘密探偵の化けの皮を剝がされたものだ。

——アウグスト・ベーベルはこれらのスパイ事實を擧げて、一八九八年十一月二日伯林に於いてなした「暗殺計畫と社會民主々義」の演說に於いて、忌憚なく政府のスパイ政策を罵倒してゐる——『吾々がこれらの事實を心に描くならば、吾々はさしたる明敏を要せずして、暗殺計劃の犯人が眞に何人であるかを決定する。責任を問はねばならぬのは、民衆の中のアナーキストではなくて、役人席にゐるアナーキストである。投獄すべきものは、彼等なのだ！』

二　買收し損ねた××係長の話

以上の外國の實例からも知れるやうに、スパイがスパイとして充分な仕事をなし遂げるためには、また最も勇敢な、しかも有能な革命家の假面にかくれて　同志の間に信頼を持たなければならず、そしてこの詐術こそがスパイとしての必須條件であることが知れる。そして同志間のその信頼を巧みに利用して、運動の機密を搜り出し、運動の同志とその機密とを××の魔の手に賣り渡すのが彼等スパイの常套手段である。その行爲と、その憎むべき心事とは共に許すべからざるものだ。

この卑劣極まるスパイ行爲のために、どれだけ多くの運動が××され、幾多の同志が暗々裡のうちに××の魔手に賣り渡されたであらうか！——われわれはまたこれらの憎むべきスパイ事實を、日本社會運動のうちにも屢々見出すのだ。

凡そスパイとなつて、階級運動からその同志を裏切るに到るまでには、幾多の原因と經路はあるであらう。正當な手段で生活の方法を持たない者が、始めからスパイとなつて階級運動にもぐり込んで來るものは別として、極く普通に見受けられるのは薄弱な、意思の弱い性格のために、スパイに抱き込まれる例が多い。××に×××××されて、心ならずも運動に不利益な秘

を漏らすとか、または生活の困難なために金錢その他の誘惑に落ちて××されるとか、或ひは秘密にしてゐた舊惡が露見して、それを××して貰ふ××の××でスパイになつたとか――さう云ふ意思の弱さから、××に抱き込まれた實例が甚だ多いのである。

シンクレーアの「スパイ」と云ふ小説を讀むと、ピーターと呼ばれる意思の弱い、怠け者の失業者が××から××××されてスパイに抱き込まれる經路が、巧みに描かれてゐる。マリノフスキーはまた青年時代に刑事上の犯罪があつたのですぐロシヤ保安部の網に引かゝつてスパイになつたのだと言はれてゐる。

××がある目的のためにスパイを得る場合には、あらゆる手段を惜まないものであるが、私はこれに就いて一つの實例を示すことが出來る。しかし色んな條件や事情があるのでこの事件の關係者の本名を公表することが出來ないのが遺憾である。私は假に牧野君と呼んで置かう。

牧野君は大正十二年六月、日本×××事件で檢擧された一人である。その牧野君が某××係長から「スパイ」を××された話であるが、これは××のスパイ政策を充分に暴露するに足るものだと思ふ。

牧野君が××署に檢擧されたのは、共犯の多くの同志が檢擧されてから、一週間ばかりを經過してからであつた。それが第一に怪しかつた。それから××署に檢擧されてからも、牧野君に對して一度の取調べもなく、そのまゝ留置されてゐた。

『後になつてから、前後の事情を考へ合はせてみると、まるつきり彼奴等のやり方が怪しいことだらけだつた！』――と、彼は私に話した。始めつから自分をスパイに××する見込みで、豫定の筋を立てゝゐたのだ、と云ふより外に考へられない――といふのだ。

牧野君が××署に拘留されたまゝで、凡そ一週間を過ぎた頃、不意に×××から某××係長が××署に現はれて、牧野君に對する訊問を始めたのだが、その訊問といふのが全く心から打ちとけた「相談」であつた。

『牧野君、君はもう一度ロシヤに行つてみる氣はないかね……？』と、××係長が心から打ちとけた態度で、牧野君に笑ひかけた。

しかし牧野君がこの出し拔けに持ち出された「ロシヤ行き」の相談には、全く薄氣味の惡い面喰ひ方をしたのは謂ふまでもない。××××事件で檢擧されたからには、治警違反で何年かの刑に處せられなければならないのは解りきつたことで、す

つまりこの覺悟を決め込んでゐた矢先に、この打ちあけた相談である。牧野君が薄氣味惡く感じて、心から不審に思つたのも無理はない。

恰度その頃ヨッフェ氏が後藤子爵の肝入りで、日露交渉の下準備のために我國に來朝してゐた時である。日本朝野の名士や抜け目のない利權屋たちの訪問攻めにあつて、ヨッフェ氏は持病の腎臓病がぶりかへして、後には熱海に靜養を餘儀なくされたほどに身邊の多忙を極めてゐた。

ヨッフェ氏の來朝は非公式のものではあつたが、しかし日本朝野の名士によつて歡待の限りを盡くされた。それは支那内地に於ける排日の傾向が強くなつて、日本資本主義の前途に多大な暗影を投げかけてゐる時に、ヨッフェ氏が巨大な福音をもたらして現はれたからである。日本政府の立場としても、この際自分から望んでも日露通商を再開して、行詰りつゝある日本資本主義のために打開の方策を講じなければならない現實の必要に迫られてゐたのだ。しかしながらロシヤは、社會主義聯邦の赤い國である。日露交渉の眞意が「通商」にあるのか、或ひは赤い思想の「宣傳」にあるのか、ロシヤ政府のその態度には多大の疑問がなければならなかつた……

『そこで！――』と、××係長はにやッと不氣味な微笑みを漏らして、[illegible]ロシヤに關係の有るの片山潜がゐる。一つこの[illegible]を通じて、××××××××貰ひたいのだが、何時君に賴むね――、何分にも君は×××員だし、入露の經驗はあるし、その上ロシヤ語は堂に入つたもので、かう三拍子揃つた適任者は、君を措いて外にはないのだが。――それから一つ仕事ついでに××を上海に誘ひ出して貰へまいか？　さうすれば有無を言はさずにフン縛つてしまふのだが……。』

牧野君はこの「相談」にはひどく面喰つて、石のやうに默り込んだ。これから××係長は猶も聲を沈めて

『え、どうだね。承知してくれるかね……？』と牧野君の顏色を覗ひながら。承知さへして與れれば今直ぐに××して××に入露する手筈をつけるし。仕事の成否にかゝはらず×××の××をすると言つて、兩のポケットを重たげに揃ひあげる恰好をしてみせたと云ふのだ。

牧野君は啞のやうに默り込んで、指の爪を噛みちぎつてゐた。俺をスパイに××する氣でゐる。全く俺をみくびつた畜生だ！　とぷりぷり牧野君は腹を立てた。

『え、どうだね……？』と、またも××係長は一膝乘り出して來た。牧野君は噛みちぎつた爪を吐き捨てた。それから××係

長の顔を眞正面にみつめながら、かうきつぱり答へてくるツと横を向ひたといふのだ。

『いや駄目だ。僕は口が不調法だし、そんな大それた大役を滿足につとめられる器用な人間ではないんだから、きつぱりとお斷りいたしますよ！』

すると今までにたにたと北叟笑んでゐた××係長が急に威丈高になつて

『馬鹿！』と、大聲一番怒鳴りつけた。しかし、牧野君はそれ位の怒號に、一たまりもなく魂消る人間ではない。そこで彼は色々に手を替へ品をかへて、口說いたり、すかしたり、煽てたりしたが、牧野君はつひに承知しなかつた。散々に手を燒いた揚句の果てに

『よし、覺えてゐろ！　こんな重大な××××××せて置いて、貴樣が拒絕したからには、一生涯××××××××××××××！』と、××係長は烈しく腹を立てゝ荒々しく出て行つた。

牧野君は勿論、覺悟を決めた。實際に彼等がそのやうな××を×××けた以上、この自分をこのまゝにして置く筈がない。今日××するか、明日は×××すかと心待ちにして度胸を決めてゐたが、しかしその後間もなく某××係長はある殖民地の警察に榮轉したので、牧野君はすつかり諦めてゐた「社會」に再び出ることが出來たといふのだ。

『全く……』と、牧野君は私に話すのだ。『若しも僕の意志が弱かつたり、あるひは金に眼を吳れるやうな人間であつたら、早速彼等の手に乘つて階級運動を裏切つてゐたであらう。彼等が若しこれと眼をつけた人間ならば、どんな××××××もきつと×××にせずには置かないのだから、全く恐ろしい話さ。』

三　日本社會運動に現はれた最初のスパイ

日本社會主義運動の記事に現はれてゐるスパイでは、加納豐といふのがその最初のものであらう。明治三十八年五月二十一日附の週刊新聞「直言」には、次のやうな記事が出てゐる。――

「同志中に犬あり！」とは近來何處よりともなく吾黨中に傳はれる言葉なりき。而もその犬の果して誰なるか。一人なるか、二人なるかは、何人も之を知るを得ざりき。

然るに或日同志の一人、加納豐氏は頗る奇異なる消息を漏し來れり、曰く『予は警察の刑事に誘はれて屢々某牛肉店に飲食したり、或夜同店に於て同署の警部高橋某と邂逅し、終に相

携へて品川遊廓島崎樓に遊びたり。蓋し警察は予を買收せんと欲するものゝ如し、予は態と釣られたる眞似をして却つて彼等を釣らんと欲したり。後高橋警部は予を×署に招き、終に明らかに秘密探偵の任に當らんことを予に求めたり、然れども予は良心の許さざるにより斷然之を拒絶したり』

何人も知らざるべき此の事實を、加納氏自ら語り出でたるは、加納氏が却つて敵を釣らんと欲したるの心事を證するに足るとなし得ざるに非ず。然らばこの事實に依りて加納氏が嫌疑を受くべき道理なきに似たり、而も群疑は此の事實を中心として加納氏の上に集中せり。

事こゝに至りては、最早默過すべきに非ず、乃ち去る十六日の夜、同志十數名平民社に會して此事を議せり。木下尚江氏座長席に着き、先づ加納氏をして高橋警部との關係を辯明せしむ。加納氏はその既に若からざる質撲なる風采と、その漆黑にして威儀ある長髯と、其の常に微笑を湛えたる温顔とを以て同志に對し何の恥ずる所もなく、いと詳細に、牛肉店、島崎樓、×警察署及び高橋警部の住宅に於ける會合の次第を物語れり。加納氏の辯明終るや、鋭き質問の矢は諸方より起り來れり。

曰く「足下はユニテリアンの信者として遊廓に入るを疚しとせざる乎」曰く「×署が足下に着眼したるは、足下が先づ買收せらるべき態度を示したるがために[illegible][illegible]つために其平生に反して遊廓に踏入るまでの苦肉の策を用ひながら、何故×署に於ける會合の時、喜んで買收に應じて更に深く彼等を釣らざりし乎」曰く「足下は足下の親友と稱する台長某氏が警視廳の御用通信を爲せるの事實を知れる乎」曰く「足下は夜間平民社の周圍を徘徊したる事なき乎」「足下が態に横須賀の演説會に赴きし時、先づ警察署を訪ひたるは何故乎」「同じく横須賀に於いて同志某々の原籍を問ひて之を手帖に書きとどめたるは何故乎」「足下が島崎樓にて買ひたる娼妓の名は如何」曰く彼は如何、曰く是は如何。加納氏は是等の質問に對し些の憤怒の氣もなく、些の羞恥の態度もなく、落着き拂つて慇懃に應答せり、然れども總ての應答辯明は能く十分に同志の疑を解くに足らず。更に尙加納氏は高橋警部に對して斷然之を拒絶したりと稱しながら、猶その後に於て數回高橋氏の住宅を訪問したるの事實を知り得たり、而も加納氏は之を辯じて曰く、是れ他同志中に買收せられたる者あるを探らんがためなりと。而して又、其被買收者は（高橋警部の語る所に依りて）我同志中に二名あり、其一名は齋藤、岡、松崎、石川の四氏の中に在るを思へりと。質問詰責は更に起れり。曰く「高橋警部が足下に對し（買收を拒絶したる足下に對し）他の被買收者の

事の如き重大の秘密を語るとは、何人も信じ難き所に非ずや」曰く「然るに足下が堅く高橋警部の言を信じて他の同志を疑ひたるは、事餘りに輕卒に非ずや」

加納氏の之に對する答辯は甚だ要領を得ず、只高橋警部の言を信じたりと云ふに在りき、又此の四人の新嫌疑者中、松崎氏はこの席に非ず、石川氏は何の辯解も爲さず、岡氏は起つて「只諸君の判斷に一任するのみ」と挨拶せしが、獨り齋藤氏は勃然として怒り、其の長大の軀幹を以つて加納氏の前に進み「予にして若し眞に嫌疑を受けなば、彼の巣鴨なる二氏に對しても予は直ちに割腹して死すべき也」と面色を變じ加納氏に詰れり。

是にて質問と辯明とを終り、座長は次の如き處分案を提出せり。曰く「要するに加納氏今回の事は我同志として少くとも輕卒の行爲たるを免れず、若し加納氏の平生を知らざる冷酷なる司法官をして之を聽かしめば、正に有罪の判決を下すべき證憑十分なりと謂はざるべからず、故に吾人は我主義の前途のため、及び加納氏自身のため遺憾ながら加納氏が暫く我黨の運動より退隱せんことを要求せんと欲す、諸君の意如何」

衆皆之に賛す、座長乃ち同志の決議として此旨を加納氏に告ぐ、加納氏唯々として之を諾す。温顏微笑元の如し。

斯くの如くして秘密探偵嫌疑者の處分は終れり。而して加納豐氏は今後平民社に出入せず、吾黨の集會に出席せず、吾黨の同志と交際せざることとなれり。――

以上の文中に「巣鴨に在る二氏」とあるのは平民新聞の發行禁止事件で、禁錮處分を受けてゐた西川光二郎幸德秋水二氏を指したものである。

加納豐は最初クリスチャンで、安部磯雄氏のユニテリアン教會の會員であつた。後に安部磯雄氏、西川光二郎、木下尚江氏等の發企によつて社會主義研究會が生れ、キリスト教的社會主義運動が活潑なる運動を始めると共に、加納豐もその方面から「平民社」の社會主義運動に近づいて來た男であつたらしい。非常に温順な性質の男であつたが、當時は相當に活動してゐた男だと思はれる。

「明治三十七年二月、日露戰爭が遂ひに開始され、それから以後平民社はいよいよ烈しい迫害の下に戰鬪した。三月二十七日發行の平民新聞第二十號は「嗚呼増税」と題する論文のために起訴され發行編輯人たる堺が輕禁錮二ケ月に處せられた。これが社會主義者入獄の皮切りで、私の入獄以後平民社は「籠城」の覺悟を定め社内に寄宿して一種の「小共産社會」を作つた。日露戰爭はいよいよたけなはとなり旅順が遂ひに陷落して、日

本冬號は當局の怒りに觸れ發した、平民社はその間に立つてなほ非戰論の主張を續けた。八月七日の平民新聞にトルストイの日露戰爭反對論をもつてその全紙面を埋めた、八月十四日オランダのアムステルダムでは萬國社會黨大會に於てロシヤ社會黨の代表プレハーノフ氏と日本社會主義者の代表片山潛が握手して兩國勞働階級の親和を象徴した。十一月三日平民新聞は一周年を記念するためマルクス・エンゲルス共著の「共產黨宣言」を譯載し同時に東京市外瀧の川に大園遊會を催したが、園遊會も宣言も皆禁止された。そして今度は幸德、西川の二君が入獄する事になり社會主義協會も同時に解散され平民新聞も遂に「全紙赤刷の終刊號」を發行せざるを得なくなつた。然し平民社は更に「週刊直言」を發行して又一年の運動を繼續したが明治三十八年十月九日遂にいよいよ「悲壯なる解散式」を行つた。つまり平民社は日露戰爭をもつて起り日露講和と共に亡びた。」（堺利彥「その頃を語る」から）

この當時の平民社の非戰運動を裏切つて買收されたスパイの役割が、眞に如何なるものであつたかは充分に想像される。同年五月二十八日の「直言」はその社說に一篇の「探偵論」を揭げて、痛酷な口調を以てスパイ行爲の憎むべきと政府のスパイ政策とを罵倒してゐる。――

前號の「直言」は吾人同志者間に於ける探偵嫌疑者出現の議論を報導するの不幸を見たり、吾人は日本政府が吾人同志の間に探偵を放ちて以て敵情を偵察することに驚くものに非ず。斯の如き卑劣陰險の手段は古今東西の政府によつて用ひられ、又用ひらるゝ普通政策なれば也、吾人は此の奸策を施す政府を恐れずして、此の奸策の機械となる探偵其物を憫れむの情に堪えず。

吾人は探偵の雖事業たるを思ふ。機敏ならざるべからず、忍耐ならざるべからず、陰險ならざるべからず、而して殘忍ならざるべからず、偉人たるの資格を具するに非ずんば、よく大探偵たるべからざる也。故に看よ、古來探偵となつて能く其の友人を賣り、其の同志を賣りたる者は、必ず其の友人同志間に於て尊信敬愛せられたる堂々の男兒なりしことを、彼等や探偵に於て成功せり、悲哉人生に於て失敗せり、故に地上尤も惡むべき者は探偵なり、而して尤も憐れむべき者も亦探偵也。

彼の最初より政府の手足たるの身を以て、卽ち探偵の職務を擔ふて敵壘に入り込むものの如きは、是れ齒牙に掛くるに足らざる也、熱心なる同志者にして偶々政府の買收する所となり、昨日の心友を賣つて精神的自殺を遂ぐるものに至つて、吾人は人生の悲慘之に過ぐるものゝあるを知らず、記憶せよ、彼等はそ

の主義に忠實なるがために遂ひに政府の買收する所となれる也、彼等は熱心なる政府反對者たるが故に、遂に政府の買收する所となれる也。然れども彼等にして買收せらるべき何等の缺陥あるに非ずんば、政府豈に買收の手段を行ふことを得んや。然り彼等は其主義に忠實なりしと共に、必ず常に赤貧洗ふが如くなりし也。彼等は浮世の波風に吹き荒らされたるが故に、心情冷酷にして反抗の氣燃ゆるが如きものあり、要するに彼等は常に社會の繼兒なり。御し難く誘ひ易し、吾人は探偵談を讀む毎に一簞の食一瓢の飲功に此の稀有の天才兒を誘惑するに餘あらしめたる苦辛の經路に慨然たらざるを得ず。

之を近く吾人の經驗に徴して感慨更に新なるを覺ゆ、吾人が絶交を宣告したる彼が眞に其の良心を痲痺したりや否は、吾人が言ふを好まざる所、且つ之を言ふ能はざる所なりと雖も其の形跡を綜合して彼を無罪と判定せんとも亦吾人が理性の許容せざる所なりき。只だ吾人はこの一事を明言せんと欲す、同志諸君、彼は決して最初より探偵として入り込みたるに非りし也、彼は最初より社會主義者の假面を被ぶりて入り込みたるに非りし也、吾人は信ず、彼は眞に忠實なる吾人の同志者たりし也、雄辯なる演說家たりし也、忍耐なる運動者たりし也、而して猛烈なる政府の敵者たりし也、然れ共彼が積年の人世の經驗は彼を驅て社會主義者の福音に渇仰せしめたりしと共に、又探偵たるべき誘惑を感受するに恰當の事情を具備せしめき。吾人は飽くまでも彼を持して「探偵」と明言することを欲せざる也、然れ共政府が×警察署の手を以て彼を買收して探偵となさんとせる着眼に向ては吾人は其の明慧を稱するに躊躇せず、誠に彼は尤も古き社會主義者の一人なりき、彼は社會主義者の運動の巨細に通達せり、彼は熱心忠實の老成者として同志者の信任愛慕を受け來れり、――而して彼は赤貧者たりし也、吾人赤貧の同志間に在りてさへ彼は一段目に立つ赤貧者たりし也、彼にして若し吾人同志間の探偵たらんと欲せん乎、其の性格に於ても位地に於ても決して不適當なるものに非りき、政府が之を誘惑するに於ても亦決して不適當たるものに非りき、去れば諸君、彼にして眞に探偵たりしとするも、吾人は滿腔の憐愍と憎惡を抑へて、先づ彼のために嗚咽流涕を禁ずること能はざる也。

全地の同志諸君に告ぐ。世に探偵ばかり恐るべく憎むべきものはあらざる也、何となれば彼は決して眞實を報告せざれば也、彼は常に針小棒大の報告を爲すのみに非ずして、常に全然虛構の報告を上申して其の手腕を示し、或は自ら脚本を描きて然る後同志を誘導してその演者となし、之を密報して以て探偵の功を誇る、而して多くの無辜者は是がために或ひは牢獄に

殺ぜられ、或に教育帝におけらる、良心一點の光明を留めん良り、如何でこの醜悪な道を敢へてすることを得んや、蓋し吾人は「人」を以て探偵を見ることを欲せざる也、然れども天下、探偵より更に劣にして惡むべきものあり、此の探偵を使ひ且つこの探偵を信ずる古今東西の政府即ち是れ也、既に友を賣ることを甘ずるの徒、豈政府に信實なるの理あらんや、獨り政府は之を解せざる也。然れども吾人は飽くまで探偵を憐憫す、奸惡なる探偵は奸惡なる社會の産兒に外ならざれば也。

四 古道具屋のスパイ

大正八年雜誌「新社會」五月號に、かういふ記事が出てゐる。

――大阪市南區高津町九丁目十九番地古道具商安部庄吉氏は久しく大阪同志の一人として我々の間に知られてゐた。殊にその慇懃にして質實らしき態度風采は、頗る人の信任を博するに足るものがあつた。

外間に其の安部氏が元大阪府の巡査であつたこと、そして屢々同志間の秘密を其筋に賣つてゐたことの確證が現はれ、大阪諸同志の詰問に堪えず遂ひに下記の告白書を葉書に認め、我我の許に郵送して來た。

ここに載せた事實は我々の手におもしろくないが、私はここによつて君の參考にもなると思ひ、且つは其他の人々にもお目にかけて置きたい氣がするので、茲とこゝに掲載する。告白書の文面左の如し。

前略小生儀從來同志として御交際をなし頂き居りたるにも不拘、××の××を受け余儀なく同志諸氏に對する不利益なる言行を爲せし事を告白仕り候也

大正八年三月三十日

安部庄吉㊞

右立會人

岩田金二郎

橋浦時雄

武田傳次郎

松浦忠造

その當時大阪の方面では、まだこれと言ふほどに活潑な社會主義者の運動は起つてゐなかつた。橋浦時雄その他數人の同志によつて「自由クラブ」と稱する、大阪在住の主義者によつて生れたグループがあつたばかりである。

安部庄吉もこの「自由クラブ」の同志の一人で、彼はさゝやかな古道具屋を開業してゐた傍、社會主義者のグループに加入

つて、東京方面から配布されるパンフレットやその他の印刷物を自分でも讀んだり、それを仲間に配つたりして相當に働いてゐた。

その後になつて運動上の秘密が屢々警察側に漏れたり、同志の所在が嗅ぎつけられたりすることが頻繁に起つた。そこへ持つて來て彼の前職が大阪府の元巡査であつたといふやうな事件がばれたものだから、同志の疑ひが彼にかゝつて、前文の告白書のやうに他愛なくその正體があばかれたのである。

五　有吉三吉事件

大正九年の正月元旦であつた。小石川指ケ谷町渡邊政太郎の宅で「北風會」の例會が開かれ、その席上でいきなり中村還一が有吉三吉のために斬りつけられた事件がある。この事件は當時の新聞にも報導せられた、社會主義者仲間に可成りな話題を提供した。

それはかねがね中村還一が有吉にスパイの嫌疑をかけてゐたので、その意趣晴らしに有吉が中村を斬りつけたのであるが、被害者はほんの僅か首筋に輕傷を負つただけで濟んだ。刄物は剃刀とも肥後の守とも云はれるが、肥後守の方が本當らしい。有吉は即日自宅から富坂署に引致されたが、警察から直ぐに電話がかゝつて來て、有吉の身柄を誰かゞ引取れば釋放しても差へないと云つて交渉があつた。しかし自分から進んで誰も有吉を引取らうと云ふ者がゐないので、宮島資夫が彼を富坂署から貰ひさげて來た。

スパイの嫌疑をかけられたのに憤慨して、有吉は中村を斬りつけたのであつたが、しかしその事件から一層彼に對する嫌疑が反對に強くなつて來た。藪蛇だつたのだ。傷害罪で告訴されてゐる有吉の引取方を、警察の方からわざわざ交渉して來るのも怪しかつた。

有吉がスパイの噂さを立てられ始めたのには、相當の根據があつた。彼は上野櫻木町に住んで、夫婦と子供一人の家族であつた。大杉榮は可成りに彼を信用してゐたものと見えて、以前「近代思想」の發行所を彼の家に宛てゝゐた位だ。そして彼が集會の中心になつて、彼の家で社會問題研究會を開いて、熱心に運動してゐた位で、外目には勇敢な同志に見られてゐた。ところが何時とはなしに、不思議な噂さが立ち始めた。それは有吉の家へ秘密の出版物や禁止本を隱せばすぐにばれて警察から手入を喰ふといふのである。炭俵か縁の下に隱匿してある出版物が、碌すつぽに家宅捜査もされないで、いきなり炭俵や縁の下から摑み出される。密告するものがなければ、さうさう容易く

發見される譯がないからである。

それから有吉は、ゴムマリの上繪を描いて、暮しを立ててゐたのだが、彼の生活は非常に窮つたもので、ゴムマリの內職から得られる收入ぐらゐでは到底やつて行ける生活ではなかつた。有吉の近所に住んでゐた同志の妻君が、屢々見かけたと云ふのであるが、有吉の常尾行が座敷に上り込んでよく有吉と二人切りで酒を飲んだり、碁を打つたりしてゐた。

それから、これはずつと後の話であるが、和田久太郎が偶然に有吉を訪ねて行つた時、立派な洋服の紳士が百圓ばかりの金を有吉に握らしてゐるのを見かけたと云ふ。その紳士が立ち去つてから有吉は自分から進んで、

『あれか、あれは警察の者さ……』と、悪びれもせずに打ち明けた。それは和田に感づかれたと知つて、自分から高飛車に出たのではないかと思はれる。

或時、近藤憲二の尾行が

『あんたが私をまいて有吉の家に行けば必ず、それが警察に知れる。警察に知れれば私の落度になるのだから、どうか私をまいた時だけは有吉の家に立寄らないで下さい。』と、くれぐれも泣きついて頼んださうである。

和田久太郎が發禁になつてゐた大杉の「勞働運動の哲學」を有吉の家から持ち出して吉田時雄か誰かにあづけた。それを吉田時雄が大阪に持ち込んだのであつたが、橋浦が大阪に下車するより早くスパイが驛に張り込んでゐて、大阪に持ち込んだ部數だけの受取書をちやんと用意してゐたさうだ。橋浦が「勞働運動の哲學」を大阪に持ち込んだことを知つてゐる人間は、有吉と和田と吉川、それに橋浦の四人以外に知つてゐる者はなかつた筈である。これを密告したスパイがこの四人のうちの一人であることは容易に判斷の出來ることとである。

ここで機智に富んだ和田が、「フンドシ事件」といふ妙案を工夫して、このワナに有吉が安々と引かゝつて、遂ひにスパイの確證を和田に握られたのである。

和田は再び大阪へ「勞働運動の哲學」を持ち込むのだと觸れて、有吉に手傳はせてその荷造りをした。荷造りがすつかり出來ると、有吉は何とか用を作つて不意に居なくなつた。その留守の間に和田は書物を引張り出して、フンドシやボロ布をつめかへて荷造りを仕直し、それをひつ擔いで東京驛に持ち込むと、案の條スパイが張り込んでゐて

『おい、待て！』と、來た。

『何んだ？』

『何も糞もない、その荷物に用があるんだ。置いて行け！』

と、いつた樣な譯で有吉も私服のスパイもまんまと、和田の手にかゝつて一杯喰つたのである。

これは大正四五年頃の話であるが、橋浦は賓文社が家宅搜索される危險を知つて、未然に柳行李一杯の禁止になつた出版物を擔ぎ出して、それを某氏のうちに一先づ隱匿したが、それでもまだ危險が感じられるので、到頭それを有吉の家に持ち込んで緣の下に隱した。すると間もなく警官に踏み込まれて、いきなり緣の下から件の隱匿物を押收された。これなどは明らかに有吉の密告による結果であつた。

大正八年の七月、服部濱次の主催で社會問題講演會が築地に開かれたが、その解散間際に大杉、荒畑、服部、橋浦などが一齊に檢束された。有吉もその時に檢束された一人であつたが、彼のその時の態度が實に怪しかつた。檢束されないで濟むところを無理に、自分から進んで檢束されたのである。それは自分だけが檢束されなければスパイの疑ひを受けはすまいか——さういふ考へに支配されて檢束を貰つて出たのだらう。

大正九年一月元日に中村還一を斬りつけた事件から、遂ひに有吉に對するスパイの嫌疑が動かされないものとなつて、一月六日本所外手町の岩佐作太郎宅で「スパイ裁判」が開かれることになつた。立會人は近藤憲二、村木源二郎、古川守邦、服部濱次、延島英一、和田久太郎、橋浦時雄の諸氏で、この裁判の結果、有吉に對するスパイ事實の確證が十二分に擧げられた。

「新社會評論」第七卷第一號の「いろいろ消息欄」に次のやうな記事が出てゐる。

『同志間にスパイの現はれた事は珍らしくない。ズツト昔には加納豐氏が其の嫌疑を受けて同志との交際を遠慮したこともある。所が今度(昨年末から)有吉三吉氏が怪しいといふ評判が立つて、それには餘ほど確かな證跡も發見されたといふので同志間の問題になつた。すると有吉氏は其の噂を立てた人として中村還一氏を斬つた。中村氏の負傷は可なり重くて、三週間ばかりの治療でやつと回復した。有吉氏は今起訴されかけてゐるともいふが、兎にかく警察は此の事件に對して頗る冷淡だと云ふ。和田久太郎、岩佐作太郎、服部濱次、吉川守邦、近藤憲二、橋浦時雄、村木源二郎、延島英一の八氏から一月六日附に來た葉書には、有吉氏に對し「右之者は諸種の事實により明かに或筋の間諜なりと認む」とある。まだ外に一二名同じ嫌疑の者がある。御用心々々々。其の後聞くところに依れば有吉氏は行衞不明の由』

有吉三吉は舞鶴軍港の製圖工であつたが、警探に買收されて

軍港の機密地圖を盗み出さうとして失敗し、二ケ月の處分を受けたがそのまゝ逃走して幸徳秋水を頼つて上京したと云ふのであるが、これは有吉自身の話だから當にならない。幸徳秋水の世話で近所のソバ屋の出前持をしてゐたことはあるさうだ。

大正二年頃から彼は賣文社に出入りしてゐた。妻君にのろいので「妻ノロジー」といふ言葉が彼から出た仇名であると云はれ、その女房は某警察署長が媒介したと云ふ評判もあるが、その眞僞は何れも保證の限りではない。上野の櫻木町でゴムマリの上繪を描いて暮らしてゐたその以前には、築地に住んで寒暖計の目盛をして暮らしてゐたが、生活にはいつも追はれて最も困難な時代には某社會主義者夫婦の裸體を寫眞に撮つて密賣したほどだと言はれてゐる。金錢にかけては必要以上にやかましい男で、彼がスパイに買收されたのも、恐らくその缺點のためであらうと謂はれてゐる。

六　名物おでん「吾助」の主人

有吉事件から間もなく黒瀬春吉がスパイの嫌疑を受けて、自分から裁判を買つて出て査問に附せられた事件がある。

黒瀬春吉は威釆堂々たる巨漢で、大逆事件の際には紙幣僞造の嫌疑を受けて市ケ谷に入監してゐた。大逆事件が結審すると共に、彼にかゝる一切の嫌疑が晴れて出獄した。[illegible]「吾助」と云ふおでん屋を淺草に開いた。このおでん屋には當ち當時の進歩思想家の間に人氣を呼んで、生田長江、大杉榮、山口孤劍、土岐哀果、安成貞雄、伊庭孝などさうさうたる連中が絶へず出入して繁盛を極めた。そこには勿論「おはんちやん」といふ素的な美人が、惜しみなくそれらの常連に愛嬌をふり撒いたためもあらう。

「おはんちやん」と呼ばれる女は、またひどいメカシやでデコデコと白粉を塗りたくつて、派手な赤いものづくめの衣裝で巧みに酒客の間を斡旋して廻つたものだ。當時彼女との關係を噂された人間が十指に餘ると取沙汰されたほど、物凄い發展ぶりを示した。

中村還一もまたおはんちやんとの關係を取沙汰されたうちの一人であつた。亭主の黒瀬といふ男はまた風變りな人物で、自分の女房を他人の自由にさせて置いて、自分は自分で勝手に某女史を追かけ廻はしてゐたのだ。

ところが不圖したことから、黒瀬は中村が某女史と關係してゐると誤解して、それから二人の間が急に仲違ひになつた。その後ある所で偶然に中村と黒瀬が落ち合つて、烈しい口論になつたことがある。その時黒瀬が、物凄い見幕で、中村にかう云

つて喰つてかゝつたと云ふ。

「手前は何故、俺の女房を捨てゝ、他の女とくつつくんだ！」

その場に居合はした誰かゞ黒瀬のこの理屈には吹き出して。假へ中村が他の女と關係したにしても、お前の女房と切れればそれに越したことはないではないか――と。から云うて黒瀬をなだめると、彼は

『いや、俺の女房を捨てゝ、他の女に走るのが怪しからん！第一俺の女房を中村の奴が慰みものにしてゐたのが癪だ！』と言つて罵り喚めいたといふのだ。

この戀の鞘當から中村と黒瀬の仲が益々惡くなつて、先づ最初に怪しいと黒瀬にスパイの嫌疑をかけ始めたのが中村であつた。それ以前からしきりに有吉の辯護につとめたり、仲間のうちで誰よりも先に警察事件をいち早く聞き知つてゐたり、それこれの事情から黒瀬の態度には疑ひがかゝつてゐた。それを感づいた黒瀬は自分から進んで「査問」を要求して出たのだ。證據さへなければ自分にかゝつてゐる嫌疑は譯なく一掃できると、圖太く考へたのであらう。そこで黒瀬の要求通りに「スパイ裁判」が賣文社の階上で開かれることになつた。

その日の黒瀬夫婦の扮装（いでたち）は、とても大袈裟な芝居がゝつたもので、黒瀬は黒紬の羽織紋付に仙臺平の袴をつけ、女房のおはんちやんは鹿の子絞りの派手な赤い着物を着流して、まるで八百屋お七そつくりの扮装（いでたち）であつたと言はれる。

この裁判の顛末は「新社會評論」（第七卷第一號）に詳しく出てゐるから、左に抜萃して轉載する。

今回の「犬の裁判」は大體に於て頗る善く右の事實（加納豊の事實）に似てゐる。今回の嫌疑者は黒瀬春吉氏で、氏は有吉刃傷事件の時から種々な點に於て同志間の嫌疑を招き、ために自ら同志との交際を遠慮すべき旨を岩佐作太郎氏に申出でたるに係らず、其後北風會の會合に出席したので、その時居合はせた數人の同志から退席を迫られた。そこで黒瀬氏は他の同志に對して「査問會」の開催を要求した。服部濱次、岩佐作太郎、橋浦時雄の三氏はその要求を容れ、發起人となつて査問會を開いた。時は三月十三日の夜（大正九年）所は有樂町服部洋服店の三階。來會者は同志三四十名、外に新聞記者數名、傍聽者數名。

先づ發起人から開會の挨拶があつて、次に座長を堺利彦氏に指名した。堺氏は座長に就いた。次に評決員として荒畑勝三、吉川守邦、服部濱次、橋浦時雄、岩佐作太郎、久板卯之助、近藤憲二、堺利彦の八氏が選ばれた。

それからいよいよ査問會が始まつた。査問は主として岩

佐、延島、吉川、村木、荒畑、吉田の諸氏から提起された。各問者の中には可なり激昂した態度も折々見えたが、黒瀬氏は始終冷靜な態度で、それぞれの疑點について辯明した。

主なる疑點は（一）有吉刃傷の當夜、負傷者中村氏がどこの醫者に行つたかを探しに行つた筈の黒瀬氏が、其の中村氏を探さずして稍しばらくして歸つて來た事。從つて其時間中に警察に電話して報告したのだらうと云ふ事。（二）其の翌日黒瀬氏が有吉氏を訪問した事。その訪問につき有吉の云ふ所と黒瀬の云ふことと一致せざる事。（三）其前後黒瀬氏が有吉に對して寧ろ辯護の態度を取つた事。（四）昨年の精工會のストライキの時、黒瀬氏の取つた態度の曖昧であつた事。（五）黒瀬氏が平素屢々警察に出入する事。（六）鑛山勞働同盟の機關誌が發賣禁止になつた時、公の通知に先だつて黒瀬氏がその事實を知つてゐた事。（七）有吉が傷害罪として六ケ月の判決を受けた事も、黒瀬が眞先にそれを知つて人々に告げた事。（八）黒瀬氏が曾て警察から探偵たるべき誘惑を受けたとは、自ら明言してゐる所だが、左樣な誘惑を受けるのは平生から買收されやうな態度を示したからではないかといふ事。

右の諸點に對する黒瀬氏の辯解は皆な相當の理由があるかのやうに私（堺）には聞かれた。第八項の如きは固より明白の辯明の出來得べき事柄ではないが、其他の七點は何れも明白な判定を下し得べき事柄でもない。然るに只一つ刃傷當夜の電話一件が最も重大な意味を有する疑點になつた。中村還一氏が人に語つた所によれば、黒瀬氏は中村氏を見舞つた時、あの刃傷の晩、自分が警察に電話をかけて報告したと自ら中村氏に語つたと言ふ。然るに黒瀬氏は全くその事實を否認してゐる。其の席には他の二三の人も居たから、そんな話が中村氏にだけ聞へる筈がないとも云つてゐる。そこで改めて其事を中村氏に質すと、中村氏の答は甚だ不明瞭であつた。

所が中村氏と黒瀬氏との間には種々複雜な個人關係があるので、それを明白にしなくては此の問題を十分に解釋する事は出來ないと言ふので、關係者多數の意向により、以下しばらく秘密會になつた。秘密會の內容は勿論こゝに書くわけには行かない。

秘密會が終はると、直ぐに評決員の會議があつた。その結果は全員一致左の評議となつて報告された。

『各問の結果は黒瀬春吉氏のスパイたる事を認むるに足らず、然れども同氏の平生の行動は我々の信用を繫ぐに足らざるものあり、依つて同氏は今後我々と運動を共にする事を遠慮されたし。』

猶査問會に關する證言につき、中村還一氏の態度に明白を缺くものあるを遺憾とし、同氏に對して警告の意を表す』

之で査問會は終つた。

七　モスコウの街で「黑い眼玉」を探して歩いた男

日本鑛夫組合のすぐれた鬪士の一人に、坂口義治と云はれる男があつた。彼は夕張炭坑の坑夫上りで麻生久と一緒に、鑛夫組合の運動に永らく從つてゐた鬪士であつた。

インタナショナル第四回大會に、この青年が某氏の紹介狀をもつてひよつこりと入露して來た。鑛夫組合では無斷で入露して、インタナショナルの大會に列席したかどで、彼を除名處分にしたと聞いてゐる。

彼は炭坑で片眼を失つてから、義眼を入れてゐた。ところが入露する途中で、その義眼がどうかしたはずみに拔け落ちて見失つてしまつた。それで彼はつぶれた片眼を隱すために、白い繃帶を卷いてモスコウにやつて來た。

モスコウには美しい賣笑婦がゐる。つぶれた眼を女から見られるのが悲しかつたのであらう。彼はモスコウに着くや否や、直ぐにもある同志に通譯を賴んで廣いモスコウの街へ「黑い眼玉」を買ひに出かけたのである。

先づ最初にその二人は、ソヴエツト國立醫療所の委託醫が開業してゐる眼科醫院に出かけて行つた。すると美しいブルヂョアーの女が出て來て、見馴れない二人の異邦人の姿をぢろぢろと眺めながら、怪訝さうにかう聞いたと云ふのである。

『おゝ、お前さん達はトルキスタンからやつてお出でかね……

……？』

何故そんなことを聞くのだと言ふと、女はお前達の言葉がトルキスタンに似てゐるからだと答へた。彼等の一人が「日本人だ」と説明しても、その説明が腑に落ちないのか、猶も二人を不思議さうにぢろぢろ眺めて、

『日本人（ヤポンスキー）、日本人（ヤポンスキー）！』と、ばかりにまるで始めて聞いた人種の名ででもあるかのやうに怪訝に呟きつゞけたと言ふ。

教養のあるブルヂョア婦人でもが、この通りであるから、この赤い國の都にだつて、さうザラには「黑い眼玉」が日本人に用意されてゐる筈がない。色々な眼玉箱を取り出して調べて見れたが「青い眼玉」や「茶色の眼玉」ばかりで、日本人向きの「黑い眼玉」はつひに見當らなかつた。ブルヂョア婦人は眼玉箱を取り片附けながら、この二人の氣の毒なトルキスタンにモスコウで有名な眼鏡店を二三軒紹介して吳れた。

二人のトルキスタンを案内役にして、モスコウ中を駈けづり廻はつた揚句、やつと最後の店で日本人向きの「黒い眼玉」を探がし當てることが出來た。

その店では若い娘が店番をしてゐた。彼女は二人のトルキスタンに、すつかり同情して店中をひつかき廻はして、やつと格恰な「黒い眼玉」をたづね出して與れたのだ。

『これなら、きつと似合ふわ………』

さう云つて、娘は坂口の眼から繃帶を取りのぞける手傳ひまでして、氣の毒な片眼の男に充分な同情を寄せた。坂口は繃帶をかなぐり捨てるやうに捲り取つて、洞穴のやうな暗い眼窩に素早く「黒い眼玉」をぐるぐると押し込んだのである。娘は『あッー』と、思はずこの物凄い有樣に悲鳴をあげて顔をふさいでしまつたと云ふが、これは決して誇張した話ではないであらう。見馴れない野蠻な異邦人が、ぐるぐると眼玉を押し込む姿を想像するなら、一寸不氣味な凄さを感ずるであらう。

黒い眼玉をはめて、いつぱし男振りをあげると、彼は待ち切れなかつたもの〻やうに言ひ出した。この道にかけては誰の要求もすぐに衆議一決するもので、二三人の者が暗い公園に闇の花を求めて出掛けたものと思はれる。それからその一團が用意の××××××を買ひ求める段になつて、藥種商に這入つて行つたものゝ、「ユーレーニン」や「タリャーチ」はお手のものだが、さて××××××をロシヤ語で言へるものがない。皆んな智恵を絞り切つて困つてゐると、いきなり坂口が指をヘンな風に折り曲げて、ビーア樽のやうに肥滿してゐる女房をのけぞるほどに笑はせて、その難澁な言葉の意味が忽ちに解決したと云ふのだ。

この彼は大正十二年の共産黨事件から、スパイの嫌疑を受けて、それつきり運動から姿を消さなければならなかつたのであるが、彼は入露する前からスパイであつたといふ說と、ロシヤから歸つて兄貴に强要されたのでスパイになつたのだらう——といふ二說がある。しかし前後の事情を考へ合はせてみると、どうも入露前からスパイであつたのではないかと思はれる。

彼は滿州里から入露したといふのだが、しかしその時の話に辻褄の合はない節がある。彼は滿州里の宿屋で領事警察から召喚された時、賣藥商の名刺を振り廻はして賣藥商人に藥の効能を並べ立てゝ、係官を煙にして信用を博し、かゝせて難なく國境を越えたといふのだが、その的な筋書が入露經驗者の得心を買ふに足らな

それからインタナショナルの大會が終つて國するに際して、モスコウ郊外の停車場まで

ス」旅館から在露の同志が大勢で見送つて來た。その見送りのうちに坂口もゐて、互に日本に歸つてから大いに運動することを誓ひ合つて固い握手を交はして別れたのであつたが、先發の一行から一月ほど遲れて坂口の一行も歸國して來た。ところが坂口の同志に對する態度が急に一變してゐたのである。自分の住所をはつきり教へなかつたり、無闇に同志を疑ふやうな態度をみせて、機會のある毎にスパイの噂をして同志に氣不味い思ひを見せるやうになつた。

その年のメーデーに檢束された者で、第四回大會に出席した同志の寫眞が、いち早く警視廳の手に渡つてゐるのを見て來た人間もあつて、同志間にスパイのゐることが薄々に知れ渡つた。

大正十二年六月五日に、××黨事件の檢擧が行はれた。その檢擧の端緒になつたのは、佐野學が坂口にあづけた文書を、澁谷杢太郎の家から擧げられたからである。佐野は坂口を非常に信用して、自分の秘書にまでしてゐた位ひである。坂口は佐野からあづかつた書類を、澁谷にあづけて、米櫃の底に隱匿させて置いた。澁谷といふのは坂口の兄貴の女房の兄にあたる男で、澁谷あたりでアイスクリーム屋をやつてゐた。

坂口が佐野からあづけられた書類一件を、この澁谷の家に隱匿してから間もなく、表を通りすがつた警官『この家から革命歌が聞えてゐた。怪しい搜査をする!』と、稱して踏み込んで來るなり、底から、檢擧の證據物件を押收して引き上げる。その後豫審判事の調査の文面には明らかに「り澁谷杢太郎方を搜査して、以下の文書を押收した」告が記載してあつたといふから、この事件がスパイの密告によつたことは明白である。しかもこの文書一件に關係のあつた者は、前記の佐野、坂口、澁谷と、それに坂口の兄貴の四人である。

前にも云ふ通り佐野は最も坂口を信用して、自分の秘書までさせてゐた位であるが、しかしこの事件では佐野の失態は免れ得ない。佐野學はこれより前に、屢々坂口から脅迫されて、金錢を絞られてゐた事實があるからだ。

坂口の兄といふのは兩眼の盲ひた盲人であるが、凄い腕利きで「夕張小僧」とまで異名を唄はれた賊である。明治二十年代には彼はやうやく十八九の年輩であつたが、しかも嚴重な日本銀行を破つて、金庫を開けたと云はれるほどの剛膽な大賊である。日本銀行の金庫が破られたのは、後にも先きにもこの事件が最初であると言はれる。その眞僞は受け合へないが、彼は手

を打てば金庫の扉が自然に開く程度に達してゐるとも傳へられ、出身地の夕張炭坑では彼の名を聞けば、泣く兒も默るさうである。

彼は最初から盲人ではなかつた。彼は宇都宮監獄を出獄してから盲人になつたもので、それにはこんな話がある。若しこんな大賊を滿足な體で出獄させれば再びどんな犯罪を犯すか知れないといふので、××が彼の兩眼を××でつぶしたのだと云ふのである。

坂口義治氏がロシヤから歸國すると、屢々佐野の家にこの夕張小僧が現はれて

『弟の義治は云はゞ、お前さんのお蔭で麻生さんの鑛夫組合から除名になつたのだ。食ふに困るから何んとかして貰ひ度い！』

と、頻りにゆすつた話がある。

或時はまた某氏の家に現はれて、

『私の入る××黨の細胞は何處だね？』

と訊ねて、某氏から俺は××黨に入黨してゐないから、何も知らないと突放されると、夕張小僧は忽ち居直つて

『よし、それならいゝ。弟は麻生さんの方が駄目になつて食ふに困つてゐる有樣だ。弟から聞いた秘密を殘らず警視廳に賣り込むが、それでもいゝか！』と、威丈高になつて脅迫したが某氏がビクともしないで

『俺はそんなことに係はりはない。貴たる秘密があつたなら、勝手に賣り込めばいゝぢやないか！』とばかりに戰來にはねつけたので、夕張小僧はスゴスゴと引き下がつて行つたといふ話もある。

この盲目の夕張小僧の手引きをして歩いてゐたのが、現職の××で、渡邊某といはれるスパイであつたと云ふことである。

それから××黨事件の檢擧直前に、偶然にある同志がその頃早稻田南町に住んでゐた佐野學の家を訪問すると、佐野と澁谷が何事かを烈しい調子で言ひ募つてゐる場所にぶつかつた。

佐野は玄關に眞靑な顔で突立つてゐた。澁谷杢太郎は太々しく玄關に腰を据えて

『……ぢあ、先生、調べられたら先生にあづかつたあれを隱したと申立てゝもようがせうね？』と、念を押してゐた。それに對して

『いゝ、いゝとも！君の勝手にし給へ！』と、佐野は眞靑に震へながら強い調子で言ひ放つてゐた。この光景を目撃して、その同志はすかさず「事の破れた」のを直感して、直ぐに八方に飛んで危急を知らせたので、××黨事件の檢擧前に多くの同志が國外に逃れ得たのだと云はれてゐる。

肥つた女

丸木砂土

肥つた女

肥つた女は、最非現代的な女である。日本で肥つた女といはれるのは、築地何がしの待合の女將、北陸の某といふ藝者、何々侯爵夫人、或は文壇の某女史と稱せられる方々で、どなたも餘り現代的でない。何となれば、現代はスポオトによつて鍛へられた、最健康的に美しい女の體の時代だからである。たこの時代だからである。

生めよ、殖やせよ、とはエホバの言葉である。今日の歐羅巴の女は、痩せよ、鍛へよ、と叫んでゐる。肥つた女が痩せた女になるのは、體の合理化である。贅肉の淸算である。今日の美しく痩せ、美しく鍛へられた女は、最早貴婦人でも淑女でもない、ガアルである。半處女である。ガアルといふ英語で通用する現代の若い女は、歐米のレビュウを風靡する踊り子の一團のチラア・ガアルとかホッフマン・ガアルによつて代表される千九百二十五年以後の新しい女である。「美と健康への道」を歩かうとする女である。此處にはけれども、肥つたガアルといふものはない。二重腮、垂れた乳房、太い足、ふくれた襟首を持つたガアルはない。現代はそんな女を求めてゐないからである。

今日僕等が肥つた女といふものを考へると、それは唯滑稽か好色かの意味に考へられる。この解釋は必ずしも僕等の罪のみではない。多くの昔の漫畫家又は春畫家にとつて、肥つた女はこの二つの範圍に誂え向の題材を提供したからである。古くはドオミエ、トルウソオ・ロオトレエク、ロプス、ロオランツン、カヴルニイ、レアンドルから、獨逸では諷刺雜誌「シンプリチスムス」のハイネ、共產主義畫家のグロッスに至る迄、肥つた女は殘酷極まる方法で描き盡されてゐる。グロッスの描いた肥つた女は、淫樂そのものである。ロプスの描く肥つた女は、魔女に近く出來上つてゐる。その外海岸とか溫泉場の記念繪端書に、最滑稽化され、諷刺化されてゐるのが肥つた女である。文藝上の作品でもボッカチオに「不仕合な人」があり、モオッパサンに「脂肪の塊」があり、近くは獨逸表現派のブロンネンに「放逸」があり、山羊に愛を求める肥つた女の怪奇な一場は、讀む者の目を蔽はしめる場景だ。その外警句、俚諺、形容詞に肥つた女を嘲弄し、揶揄するものは甚だ多い。夫程肥つた女は非現代的存在である。

けれども過去の女としての肥つた女を見ると、決して之は看過すべからざる文化史上の問題になつてくる。肥つた女を以て繁榮、富、戀愛、享樂、奢侈の象徵として見たり、或は肥つた女を寵愛撫した豐滿なる生活欲の時代が、文化史の上には花々しく殘つてゐる。少

くとも前世紀までは、或は世界大戰前迄には、美人の要素は、病的、肉欲的、憂鬱的、疲倦的であり、痩せた女は決して美人とは數へられなかつたのである。それならば今日肥つた女は全く存在の價値を失つたかといふと、必ずしもさうでもない。さすが女丈にすたりは無い。今日でも特に肥つた女を求める人がゐる。昨年十月十二日の東京朝日新聞の記事によると、紐育のアブス・エ・デエジイ劇場では喜劇女優として十代の美貌の少女で、二十二貫以上の女を募集してゐる。同じく昨年の上野の御大典奉祝博覽會の餘興場には、米國から九十三貫といふテ・レル夫人が來て、大に人氣を得たものである。

どつちが好きか

そこで世間では、誰も彼も今日のスポオトによつて鍛へ上げられた女ばかりが好きか、と言ふと、どうもさうばかりでもないらしい。伊太利のある新聞が「貴下は肥つた女を好まるるや、痩せた女を好まるるや」といふ質問を各方面に出した事がある。その返事によると、まづ世間では肥痩の贊否相半ばすると見なければならない。むしろ伊太利の婦女には胸部と同じく臀部大にて、肥つた女、豪い肉附の女の多い處であるから、多少北歐の人とは見る所も違ふかも知れない。そこでその贊成側の返事を見ると、こんな事が書いてある。

1 痩せた女は家の外で。肥つた女は家の中で。

2 肥つた形のエヴのみが、ボッカチオもどきの戀の悅びに適してゐる。

3 健全にして理性ある男子は、神の造り給へる女を愛するも、流行の造れる女を愛せず。

4 痩せた女は吾人の力强き腕には餘りに貧弱なり。

5 圓くないヱヌスといふものは、考へられぬ。

6 かの希臘の婀娜者プリネが、着物掛けのやうな今日の羅馬のある種の女のやうに痩せてゐたとすると、少くとも一年の懲役には行つてゐたに相違ない。

7 丸々したものの方が戀の爲には享け入れ易い。

等、等、等。

昔の肥つた女

そこで先づ昔の肥つた女はどうか。

古代希臘の人が禮讃した女の体は今日僅かに見る莊麗な裸體彫刻によつて明かである。けれども肥つた女がまるで問題に成らなかつたか、といふとさうばかりではない。戀の神カリピゴスの話はこの一例である。これはある百姓の二人の娘が、いづれも臀の自慢をして、往來へ來た二人の兄弟の息子にこれを示して競爭したところが、その男の方が夫々姉妹の臀に惚れて、兄は姉を、弟は妹を嫁にした。そこでこの嫁さんは「美しき臀を持てる女」と呼ばれるに至り、二人で戀の神樣の社を建て、これを「美しき臀の神カリピゴス」と名付けたのである。これが今日ナポリの國民美術館にある有名は彫刻カルピゴスである。これは薄く軟かな衣をたぐり上げて、輝くばかりの背中の肉と、大いなるお臀をまるまると見せてゐるので知らぬ人のない大理石像である。

けれどもこれが羅馬時代になると、肥つた女は一つの求められた型になり、更に文藝復

興期に入ると、その强烈な生活力は、好色的世紀の領域にまで入り込んでゐる。この時代に西班牙人が理想とした女の姿を書いたものを見ると、

三つの白いものは、肌と齒と手と
三つの黑いものは、目と瞼と眉と
三つの紅いものは、唇と頰と爪と
三つの長いものは、躰と髮と手と
三つの短いものは、齒と耳と足と
三つの廣いものは、乳房と額と眉の間と
三つの小さいものは、口と胴と踝と
三つの太いものは、腕と腰と腓と
三つの細いものは、指と髮と唇と
三つの小いものは、胸と鼻と頭と。

これによつて見ると、大きな腰と太つた腓はルネサンス時代の美しい容姿に數へられたものであらう。殊にこの時代の文書には、痩せた女を嘲罵した言葉が多く殘つてゐるのを見ても、漸く肥つた女の時代が來た事が分る。それが後年のブルジョア時代になると、殆ど肥つた大な女が世の美人とされてゐる。例へばゲエテを驚嘆させたネルソン將軍の愛人エンマ、ハミルトンの容姿を調べてみると、躰全體が大きく、骨逞しく、且異常に肥つてゐたさうである。その胸は神話にあるアリアドネの胸を持つと言はれ、頭と耳は少く可愛ゆく、齒並びは少し惡かつたが、目は明く青く、髮は黑く、その動作は寧ろ荒々しい女であつたらしい。少くともこの勇武並びなき名將の愛した女は、決して中肉中背ではなかつたのである。

美人に對する男の理想が、その時代の生活と離すべからざるは當然であらう。戰後の獨逸でスポオト仕立の女がもて囃されるに至つたのは、戰後の榮養不良と生活困難が生み出したものだ、とはある皮肉な文化史研究家の言葉だが、これは偏見である。けれども十八世紀の佛國王朝時代が、奢侈と華麗の時代であると共に、この時の美人は同じく豐麗なる美貌容姿を持つてゐたに不思議はない。この時代の女は美しい肉であるばかりでなく、花の如くに肥つた肉であつたと言はれてゐる。ルイ十五世の寵妃ポンパヅウル夫人は、決して特に肥つた女ではなかつたが、その胴は丸く、手は福々と太り、兩頰に笑くぼを浮べてゐた位であるから、寧ろ肥り肉の女と言つて好いであらう。

十九世紀の終り頃の美人寫眞は、今日多くの風俗史に載せられてゐるが、皆コルセットが辛うじて大な乳房を蔽ひ、強大な腰と肥滿した腓とを持つた女である。それが今日の歐洲人のおばあさんの時代であり、お母さんの娘時代の理想美人だつたのである。

西洋美術に現れた肥つた女

かういふ昔の肥つた女が、美術の上には、どう現れてゐるか。

西洋美術は裸體に初まつてゐるが、どういふ肉體が藝術家を刺戟してゐるかといふと、これはその時と所とによつて違つてゐる。希臘の美術は理想化されたる自然を覓め、その他の時代は寧ろ自然らしき美の理想を獲やうとしたものである。肥つた女を美しき理想と見た美術家のゐたのは當然である。

希臘の彫刻に現れた女は、肥つてもゐなければ痩せてもゐない。最均齊ある美しき躰である。それが基督教時代を經て文藝復興期に入つて、ミケランジエロがあの巨大な人間を作り出すに及んで、圓い肉體の線が發見され

藝術に於ける肥つた女は、この時代に於て本當に發育になつて來たと見て好い。それがラフアエルの優婉となり、女の肉體は初めて花の蕾が綻びる風情があり、その胸の膚は襟から露はに現れ、太つた股に裾は亂れて、女の顔は誘惑的な丸みを帶びてきたのである。殊に肥つた女を描き出したのは、ヱネチア派の畫家だ。この時代のヱネチアは淫蕩と溫柔と、東洋と南歐の怪しく交錯した海港都市であり、三十萬の人口に對して一萬一千の遊女を置いた位であるから、ヂオルヂオネ・チチアン、パルマ・ベツキオの藝術が豐滿なる女の陰を描き出したのは尤もである。その特色は高く聳して盛り上げた乳房であり、脂太りの橫肪であつた。ここに肥つた女は西洋美術史上に顯著な地位を占めて來たのである。ヱネチア派の畫家は、決して痩せた女を描かなかつたばかりでなく、男を描く場合にも女のやうに肥つた軟かな肌を選ぶやうになつたのである。

文藝復興期の最美しい女の像は、チチアンの「天國と地上の愛」であらう。その露滴る膚をあれ丈の情熱を以て描いた畫家は、後のルウベンス以前にチチアンを措いてはない。このチチアンから出て、西洋美術史上の肥つた女を完成した畫家は、我がペエテル・パウル・ルウベンスである。コレツジオはフイレレツエに出て、レオナルド派の好色畫家であるが、この女は有り餘る甘美な液に滿ちてゐない。

ルウベンスはバロツク精神の代表的畫家である。この畫家はミユンヘンにある「羊飼ひ」の絹で、自ら半獸神のフアウンとなり、若い女を手籠めにしやうとする劇を描いてゐる位の藝術家だ。そのフアウンの××××××××××××××××××××××んでゐる。その外「メヂスのカタリナ」の三人の相戯れる肥つた娘、愛する妻を描いた「毛皮のヱヌス」の胸と股、ここに××は×ひ、××は勝ち、××つ××と、泉來る熱望と、××××××××ある。ラフアエルの女の肌は、大理石の冏さを持つてゐるが、ルウベンスの女の皮膚は、×××××××××××××××さうである。その××××××××××××××である。その胸の肉は小波のやうに襞をつくり、その咽喉の肉は首輪のやうに卷き付いてゐる。その皮膚は生き乍らマリアの人のことになつてゐる。驚きを神バッカスを抱き踊る女のものにもある。毛皮のヱヌス」は丘の如くに盛れ上つた胸と腹の如き太股を持つてゐるが、この毛皮を着たヘレネ・フウルマンの淫蕩なる立像を眞似して絹靴下一つで、毛皮の外套を辛うじて背中から膝に廻して寫眞をとつた肥つた好色的な墺太利のある女の姿は、今日歐羅巴の書物に多く轉載されてゐる。

肥つた女の畫家としては、レンブラントも一度は見ておかなければなるまい。この畫家が好んで使ふ背景の暗色と細く纏めたやうな黃色の中に、愛する女サスキア・フオン・ウイレンブルクの豐滿なる白い體が橫たはつてゐる。肥つた頰と二重顎と張ればつたい腿とは、又ルウベンスとは違つたレンブラント獨特の型である。

僕等は十八世紀に入つて、更に肥つた女の畫家を見る。佛蘭西のゴウシエとフラゴナアルとワトオである。この華麗時代の名畫家の女は、唯肥つてゐるといふよりも、もつと好色的であり、十八世紀の淫蕩といふ新しい快樂を描いた人達だ。十九世紀で僕等は漸く鍾

代主義の肥つた女を見る。ゴヤの「マヤ」がその一例である。佛のマネエ、獨のコリントに至つて、肥滿の凱歌が再び聞え、更に腐敗した肉の女を描いたのがフエリシアン・ロプスだ。ブウシエの女の肌から薔薇の香りを嗅ぐならば、ロプスの女の胸からは、アルコホルが鼻を衝いてくるであらう。ルウベンスの女が獸に近い女ならば、ゴヤの肥つた女は地の靈である。

妻としての肥つた女

然し昔の肥つた女も、美術に現れた肥つた女も、實は僕等には餘り緣の薄い問題である。目下の我々に最も直接重大なる點は、かういふ肥つた女が僕等の妻になりはしないかといふ心配である。或は現在の妻が將來年をとると共に肥つた女になりはしないかといふ危惧である。

妻としての肥つた女は、多血質であるに拘らず、その性質は消極的なのが多い。尤もこれには例外も多いが、概して言へば肥つた女は妻として決して惡くないさうである。不活潑な所があるが、忠實である。奇拔を好まず平凡に就く。外面的には平俗圓滿である。夫に對する態度は母性的である。變化を嫌つてスタビリテイに富む。快活である。これ等は善良なる母又は妻として決して惡い性質ではない。それに子供を生むとなると、多産的なのは餘り芳しくないが、不思議に肥つた女は男の子を好んで、いかにも溫良な、稍甘やかす育て方をするものである。

妻としての肥つた女は、性的にはどうか。これは申上げ憎い。唯××××××は、××的ではあるが、纖細な美的色情には乏しい憾みがあると言はれてゐる。

職業婦人としての肥つた女

妻としても惡くはないが、職業婦人としての肥つた女の性能は、案外鋭敏なものである。計數に明くて、几帳面で、商賣氣に富み信用が出來る。かういふ性質から、會計の記帳係とか、家政婦とか、料理屋、肉屋、麵麭屋、酒場なぞが西洋では肥つた女の商賣として擧げられてゐる。

肥つた女の特性を最好く利用したものは、男女淫事の媒介を司る職業である。日本ならばさしづめ待合の女將に肥つた女の多いのは、且それで金持になつてゐる女の多いのは肥つた女の計數的商賣氣が成功してゐるせいで、西洋でも娼家の女主人に肥つた女の多いのに、東西少しも違ひのないのも面白い。

家政婦とか料理女としては、肥つた女は理想的である。そのゆつたりした溫柔と快適とは、何人にも愛嬌を與へる。料理女として適してゐるといふ事は、肥つた女には美食家が多く、且酒のうまいまづいのが分る人が少くないからだと西洋では言つてゐる。

肥つた女の化粧

然しいくら肥つた女でも、女の身嗜みは缺かされない。肥つた女はいかに化粧するか。これは定めし肥つた女の少からず苦心されてゐる所であらう。日本の肥つた女は寧ろ化粧には相當の斷念をされてゐるやうだが、西洋の肥つた女は、そんな臆病なものではない。肥つた女は性質上體の匂ひが烈しいから、これを消さうとして強い香水を使ふ事も屢ゝ見る處である。殊に花の匂ひを取つた香水を多く用ひると言はれてゐる。そこで鈴蘭、ジヤ

スミン、香料などと用ひる香水によつて、その女の熱情を知る事が出來るとは、西洋の通人のよく言ふ處だ。

香水ばかりではない。西洋の肥つた女は、白粉も匂ひの強いのを濃くつけるやうである。その白粉も顔ばかりでなく、洒落た女になると、腕にも太股にもつける。從つて頬紅も濃い。日本ならば最嫌ふと思はれる肥つた女の厚化粧は、西洋では不思議でも何でもない。瘦せた女の厚化粧は病的に見える。日本の肥つた女も、決して遠慮する所はない。

太い足

唯ここに少し厄介なのは、肥つた女に多い太い足である。上體の肥つたのを苦にする女は勿論多いが、足の太いのに苦勞する若い婦人の多いのも察せられる。足といつても腓(ふくらはぎ)の事ではあるが體は肥つてゐなくつても、足だけが太い方が多いから厄介な話である。幸ひ日本服を召される方は裾で隱すが、我が愛すべき青春洋裝の美少女諸孃が餘りに太い足を氣に病んでゐられるのは、眞に同情に堪えない。まして履物は短くなり、女のすそは已に過ぎる事に實證された、映畫に見る外國女優の足は、女が見ても惚れ惚れする位に見事な恰好であるに及んでは、尤も至極な次第である。

けれども肥つた女の足が、胸、腰、腕と同じやうに、男の崇拜物の一つである事は、性慾心理の教へる處で、太つた足は太いながらに美しい足とは又別の××××を現すものである。それは長い裾が腓を隱した時代と、今日のやうに膝までの裾の時代とを問はない。殊に女の足がスポオトによつて叩き上げられて、筋肉の固さうに骨ばつた、男のやうな足に成る傾向が多ければ多い程、脂肪の多い腓の厚ぼつたい、娘らしい丸々した可愛い足が男の目をひくやうになるのは當然であらう。千九百二十七年の「ライプチヒ日報」に數回掲げられた廣告として、僕は次のやうなもののあつた事を知つた。

「過日少女數人を連れてプラネタリウムへお入りの、足の太い、若い女の方に是非お目にかゝり度、當方はあなたのお後へついて行つた、背の高い、瘦せぎすの青年です(目下當地在學中、父騎士領主)」

この種の新聞廣告は、獨逸には少しも珍しいものではないが、特に太い足に目をつけた所に、この青年の特殊な情操を知る事が出來る。日本の若い少女諸孃も、決して太い足を悲觀されるに及ばない。

流行と肥つた女

ところが肥つた女には、太い足よりももつと恐るべきものがある。それは流行だ。

肥つた女と流行といふもの程、お互に仲の惡いものはあるまい。肥つた女の爲の流行といふものは、少くとも今日は存在しない。けれども流行は轉々しても、肥つた女は依然として存在する。尤も衣裳屋の方では、肥つた女の爲の流行も作りたいのだが、殊に金離れの好い女は、肥つた女に多いのだが、これを着て見せるマネキンの方で承知しない。肥つた女と流行は、確に一つの謎である。幸ひ流行らしい流行のない日本の肥つた女は、この點丈でも稍に悦ばれていい譯である。

文藝復興期時分を見ると、流行が著しく好色的になつてゐる。つまり女の躰の一部分を誇張して、そこに男の目を惹き付けやうとし

たのである。それが胸と腰で、この時代の女は胸をふくらまし、腰を大くく見せやうと手を盡してゐる。ネネチアの遊女は、腓と股とを以て流行の中心とし、肌にぴつたり合ふ下ばきや靴下を付けて、その曲線を大くしたものである。

　十八世紀になるとさういふ流行は腰に移つて、蜂の腰といはれるやうに、胴を締めて、胸と腰を大くし、同時に起つて來たのが、胸と肩とを裸にして見せるデコルテといふ衣裳である。デコルテはすでにダンテの時代に初まつたものであるが、十四世紀にバイエルンのイサベラ女王は帶の邊まで着物を開いて着て、宮廷に流行した話もあり、このデコルテと胸を出す事は、十九世紀に至つて絶頂に達してゐる。もとより胸を露はにするからには、胸も乳房も圓々として肥つて大くなければならぬ。デコルテの衣裳は、確に肥つた女にとつて救ひであつた。

　胸を露はにして見せる風俗は文藝復興期と十八世紀とでは餘程意味が違つて來てゐる。文藝復興期は露はさなかつた胸といふに過ぎなかつたが、十八世紀はわざ〳〵露出させた乳房といふものになつてゐる。特に美しい大い胸を張り出して、日本の着物のやうに衣裳の胸を切り開いて、男の目を引き付けたものである。

　これが今日の女が胸の太る事を嫌つて、乳房は僅に半球の形を欲し、「薔薇色の苺」といふ乳首を愛するに至つては、誠に流行の變遷も驚くべきものだ。

乳房

　かういふ十九世紀の肥つた女を最得意ならしめた大な胸の乳房のふくらみは、×××××として之を詩に書いた人も昔から多い。

　十七世紀頃の男の見た乳房は、片手で握り得る程度を宜しとした。そして乳房の間がなるべく離れて、互に外側に向いてゐるのを「仲の悪い姉妹」と稱して、最美しいと思つたのである。胸は「雪の如くに白い」のを上乘とした。

　乳房を賞美した詩人の中では、獨逸のホオフマン・フオン・ホオンマンスワルダウに「胸の美」といふ詩がある。その一節を讀むと、

いかなるアダムも甘き味に渇く
そは林檎實のる樂園なり‥‥
そは世界もうな跪るべき
磨き上げられたる聖壇なり‥‥
そは冬も花咲く薔薇の灌木なり‥‥
そはユレップの汁溢るる二つの杯なり‥‥
そは淡き紗もて被ひたる二つの太陽なれどその眩き光は明なる眼をも盲になす‥‥
そは白鳥の如き白絹の軟き衣なり
そは紅玉と大理石の婚禮の二つの寢床なり‥‥

　乳房の色は、絹や象牙や石膏の白さに譬へられるが、その最美しい中心とされるのは、軟かな乳首にある。「ドオリスに與ふ」といふ短い獨逸の詩に

　朝毎に露を葉に貯く
　薔薇の如く
　君が薔薇の蕾も
　あらゆる薔薇に勝れかし

といふのがある。薔薇の蕾に例へ、苺の實に例へるのが極まり文句のやうである。

　乳房に觸れる詩には、ゲエテの「羅馬哀歌」に「感ずる目もて眺め見る手もて感ず」といふ

一節がある。それ以上は申し上げ兼ねる。

　ここで問題になるのは、肥つた女の乳房であるが、どうもその大さは「片手で蔽ふ」といふ程度のもので、且垂れたのは下品とされてゐる。佛蘭西十八世紀の寵妃マリイ・アントアネットの乳房を象どつて果物皿に造つたものがあるが、その形は半圓の眞珠のやうで、その乳首のふくよかさは、誠に綻びんとする花の蕾といふ外はあるまい。乳房を以て女の理想と希望と情趣の中心と考へた思想は既に古くからあり、大いなる腰は子孫の繁榮といふ原始的の考へから崇拜され愛好されたと同じ意味で、美しい乳房を悦んだのは、決して好色的意義ばかりではない。

　唯肥つた女は、その丸く團々たる乳房で、ある種の×××××にある滿足を與へる方法がある。その外肥つた女はその肥つた體の各部分について、×××××××になる事は甚だ多い。

　美しい胸又は乳房は、歐洲の生活でばかり崇拜されると思つたら間違ひである。印度の性典「ガアストラ」を讀むと、その第七章に「乳房を大く美しくする法」といふのが、詳細に亘つて說かれてゐる。アンチモンと米の水とを常に擦り込む時は、處女の乳房は大く高くなつてきて、讀者の心を奪ふ事盗人の金を掠むるが如しとある。或は柘榴の實と白いからしをねつて塗るとか、蛇の脂と牛酪と蜜の種をねつてすり込むとか、この外數多の方法で、女の胸は肥り、美しく、大く、且垂れないやうになる道が說かれてゐるのを見ても、胸と乳房の美は、印度の女にも好ばれた筈である。

　尤も今日の肥つた女は、現代の「細い線」の傾向に從つて、乳房を大くする方法なぞは思つてもゐない。反つて之を小く見せやうと苦心してゐる。そこで出來たのが、日本にも廣告を見る「乳抑へ」である。然し日本服を着る小さい日本の女には、殆ど用のないものだ。

世界の肥つた女

　そこで今度は世界の肥つた女を調べてみると、やはりいつの世にも肥つた女は絶えた事がないやうだ。近代歐羅巴を賑はした女は、千八百十五年に巴里で見世物に出たホッテントットのヱヌスと稱せられたサアキ・バアトマンといふ女で、お尻の脂肪肉に盛り上つた高さ一六・二センチメエトルだつたといふ事である。千八百六十四年に英國で二十一歳で死んだ同じくホッテントットの女は、お尻の脂肪の厚さ丈が、一・二五吋で、その皮膚には皺が寄つてゐたさうで、健康の時はもつと脂身が多かつたらしい。

　かういふ亞弗利加の女以外に、歐羅巴でも決して肥つた女には負けてゐない。千九百二十三年に佛蘭西の田舎の四十一になる女で、十人の子の母親だが、重さは正に三百六十八封度で、見世物に出る契約をして汽車に乘らうとすると、扉が狭くて體が入らない。仕方なくて無蓋貨物車に乘せたところが、大勢に只で見られて、興行成績が面白くなかつたといふ話である。

　千九百八年にブリュッセルの傍で死んだエリゼ・マリイ・チュウリイといふ女は、四百二十九封度で、心臟で死んで、棺を擔ぐのに十二人を要したさうである。又千九百七年に市俄古で死んだホリアム・モオラアといふ女は五百二十封度で、この婆さんは死ぬ七年前か

ら、部屋の外へは一歩も出られなくなつたさうである。これも扉の口が狭くなつてしまつた爲で、死んだ時には窓を壞して、家具の運搬に使ふ挺を持つて來て運び出したさうである。朝日の飛行機に乘らうとしたテレル夫人が、飛行機の入口が狹くて乘れなかつた話も僕は新聞で讀んだ。

獨逸では千九百五年のフランクフルトのシツレル祭に見世物に出た巴里生れのヰクトリヌ・ユリニヨンといふ娘は、十七歲で四百十六封度、腰の周圍が二メエトル六、腓が世間の女の胴よりも太く、汽車に乘る事は出來ず腰を掛ける時は、椅子二つを要したといふ事である。西プロシアの怪少女ヘルタ・スプリツトゲルベルさんは、十六歲で五百五封度寫眞を見ると、足首の太さが日本の男の太股位は確にある。去年の十一月二十一日のアサヒグラフには、紐育のウエイト一家の寫眞が出てゐるが、一家六人の重さ二百七十貫を越えると書いてあつた。

いかにして痩せるべきか

以上肥つた女には肥つた女の歴史と世界とを持つてゐながらも、肥つた女自身についてみれば、痩せる爲にはそれこそ身命も投げうちたい位に思つてゐる事は察しられる。減食、湯治、マッサアジ、服藥位では滿足しないで手術を醫者に求める女は西洋には甚だ多い。「痩せる藥」といふ危險千萬な賣藥を飲み、護謨の栓のついたロオラアでこすり、飲料を節し、パラフイニバスを用ひ、電氣療治に苦心してゐる。今日の女は絕對に用ひなくなつたコルセツトに代るべきものが、護謨製で精巧を極めて造り出され、寢る間腰に當てる護謨のバンドや乳抑への廣告は續々と殖える一方なのも尤な話である。西洋の蒸し風呂は肥つた人が痩せる爲に入るもので、垢を洗ひに行く處ではないと思つて好い。田舍の溫泉場に肥つた女が痩せて歸る繪端書の必ずあるのもこの爲である。

獨逸の醫者の言ふ所では、だぶだぶの頰や二重腮、三重腮を切つてつめるのは譯はないやうだ。乳房の大く下がつたのを短く切る手術もやるやうだ。下腹の肥つて垂れるのは、「脂肪の前垂」とまで言はれるが、これも新しい方法で切つて取れるさうである。

痩せたいといふ現代の若い女の切なる願ひを利用して、伯林で出る雜誌「みみづく」は「四月の莫迦」に、米國ハアバアト大學先生の發明にかゝる「痩せる方法」を載せた事がある。それが贋物を造つた寫眞で、四月の莫迦」とは思はれぬ位本當らしく撮影してあつた。大い臀を小くする爲に眞空の金屬の桶のやうなものを腰に卷いて電流を通じるとか、太い脈を細くする爲に、昔のすね當のやうなものを卷いてて電流を送るとか、横に成つて寢ると肥るといふので、救命帶に枕をつけて吊してこれに倚りかゝつて眠るとかいふ案があり、一寸一時は事實らしくさへ思はれた位である。

然しこれは「四月の莫迦」で今日の世界の肥つた女は、依然として救はれずに、肥つた儘であるか或は益々肥りつつある。これは少くとも時代錯誤である。これを救ふに完全なる「痩せる法」が發明されない限りは、何とかして肥つた女の現代美を發見して、肥つた女の新しい生活的意義を造らなければならぬ。僕も一つ考へるとしやう。

新支那訪問記

村松梢風

南京（三）

日本學全盛

古くから『南京三多』といふ言葉がある。南京で多いものが三つあるといふ意味。臭蟲（南京蟲）道臺（金で買つた官吏）驢子（驢馬）以上を南京三多と云ふ。

處が、最近は別の南京三多が稱へられてゐる。目下南京で多いものは、日本の學校の卒業生が一萬人、獵官運動者一萬人、賣春婦一萬人、これが最近の南京三多だといふ。

一萬人はどうか知らぬが、現在國民政府を初め諸官衙の官吏や國民軍の將校に日本の學校の出身者の多いことは事實だ。若し學派別にするなら日本學派全盛で壓倒的優勢を示してゐる。何處の役所へ行つても、どの室へ入つても、必ず日本の學校出が働いてゐる。帝大、早稻田、明治等は無論珍らしくない。高商、醫專、工業、水產、農業等の各種の專門學校の卒業生がそれ〴〵採用されてゐる。

日本學の流行は近年の支那に於ける最も注意すべき現象である。地理的關係からいつて從來歐米留學生に比して日本留學生の數の多いことは當然だが、實質的に日本學の眞價が認められるやうになつたのは最近の傾向である。

各學校でも盛んに日本の學校出を教師に招聘する趨勢だ。就中、法、文、醫、の三部は日本の大學出を採用しなくては存立しないといふ位の定評がある。これは南京に限つたことではなく上海でも北京でもさうである。工業や農蠶等の技師にも日本の專門學校出身者が一番多く採用される。

かういふ風に日本學が盛んになつて來たにつれて、日本の出

版物が非常な勢ひで支那人の間に讀まれるやうになつた。上海の内山書店は現在では南方支那第一の日本書籍小賣店だが其の仕入れの豐富なことは驚くべきものだ。其の店主内山氏は私の先年來の知己だが、最近の傾向には矢張り驚いてゐた。其の店で支那人だけに賣る書籍が此の一二年間に數倍に達して現に毎月増加しつゝあるといふ。

文學、思想、醫學、工業、農業、法律經濟等の各種にわたつて日本の出版物が支那へ輸入され支那人間に消化される量は是れを精密に調べて見たら餘程の數字に上るかも知れない。雜誌も中央公論、改造の二つは智識階級の青年間に甚だよく普及されてゐる。六法全書なども書店でいくら仕入れても直ぐ賣り切れてしまふさうだ。文學や思想方面の物は、日本の本が賣れるばかりでなく、それの飜譯が盛んに支那で出版されてゐる。日本の現在の重なる作家の物で單行本に飜譯されてゐないものは殆どないくらいだ。

支那の新らしい青年で、日本語を話さないまでも日本文を讀まない者は殆ど少ない。自國に優秀な出版物の少ない現在の支那としては日本の書籍を讀まなければ新時代の學問をする上に非常な不便があり、從つて時勢に遲れるといふ結果になる。

然らば、支那の青年が斯様に日本の書籍を讀み始めたのは、日本獨特の文化を憧憬してゐるのかといふと彼等の氣持はさうではない、彼等の主なる目的は日本の書籍を通して歐米の新思想新智識を吸收しやうといふのである。それともう一つの理由は、歐米の物でも原書とか英譯とかで讀むよりも日本譯の方が遙かに讀み易い、早いはなしが漢字だけ拾つて讀んでも意味の幾分かは通じる。がそればかりではない。外國語の達者に出來る人でも、日本譯で讀む方が反つて共鳴の度が深く感じられるといふ。それは文字の上から來る影響ばかりでなく、内容的に何となく東洋的なものがあるので直ぐにピタリと心に觸れるといふ。これは私も屢々支那の友人達から告白的に聞かされた言葉である。さうありさうなことではあるが、これは面白い事實だと思ふ。トルストイにしろ、マルクスにしろ、それをどんなに正確に譯したつもりでも、一度日本語を通して表現すればそれは矢張り日本の物になつてしまふ。廣い意味では東洋的なものになることは免れないものらしい。元來支那人はどんな新らしいものでもどんな突飛なものでも平氣で受け入れる特性を有つてゐるが、然し全然自國にないものは受け入れない。古來の何處かにあるものだとか、現在直ちに修飾して自己のものとすることが出來るとかいふのでないと承知しない傾向がある。此のことは服部宇之吉先生の支那研究といふ名著の中でも支那

國民性の特徴の一つとして詳しく説かれてあつたが、學問上の問題でも、或ひは藝術や日常生活の上でも此の特性は屢々認められる。極く卑近な一例を擧げても、最近支那の若い女子は全部斷髪になつた。都會ではよく〳〵でないと長い髪は見られない。こんな突飛な事はあの舊式な支那の婦人達に出來る筈はないと思ふことを近々一年間に平氣でやつてのけた。これが日本だつたら到底かうまでは氣が揃はない。假りに政府が斷髪令を出したところで日本の婦人達は到底承知しない。然るに支那の婦人は未練氣もなく髪を切つてしまふ。が、其の代り支那の斷髪は何處迄も支那式である。西洋婦人の斷髪とは全然違つた形の支那流の斷髪をこしらへてゐる。それが支那服にはよくうつる。かういふ處の調和性の發達してゐることは感歎の外はない。學問上の問題でも、例へば共産主義を説いても支那人は手易く共鳴する。けれども、共産主義なるものは古來の支那の思想の中にも立派に在るものであることを證據立てなければ容易に得心しない。そして自分達の生活に都合よく嵌るやうな共産主義でないことには受け入れない。孫文の三民主義などは此の點を非常によく摑んでゐる社會主義である。あらゆる方面にかういふ特性が認められる。これから考へて見ても支那は今後どう變るか分らない。どんな突飛な轉換が行はれないとも保證しがたいが、然しどう變化したところで支那は矢張り支那である、支那がロシアになつたりアメリカになつたりする筈はない、必ずや巧みに調和して支那らしい國家なり政體なりを造つて行くことゝ私は確信する。支那の變化を日本が頭痛にやむ必要などは毛頭ないと考へる。

最近支那全土に於ける日本學研究熱は非常なものである。去る九月南京で開かれた全國教育代表會議では、中等學校以上では日本語を英語と對等に學科に置くことを滿場一致で可決した。其の前に浙江省の有名な教育者は英語を全廢して是れに替ゆるに日本語をもつてすることを提議したがそれはさすがに通らなかつた。實際としては此の會議以前から殆んどあらゆる學校で日本語を正課若しくは隨意科として教へてゐる。此の事は日本國内ではまだ大して注意されてゐないらしいが、私は是れは日支國交上の非常なる大問題であると考へる。

一方では濟南問題に絡んで日支交渉が停頓してゐる。頻りに日貨排斥が行はれてゐる。新聞紙の傳へるところに依ると排日は徐々深刻であるといふ。それは私の見る處でも、最近支那の日本に對する行動は確に國論である。然るに、此の秋に當つて、一方では教育者が全國の支那の學生に日本語を教へることを決議し、現實としては既に日本の學校の出身者が最も重寶がられて

新政府の官吏に任用されてゐるし、日本の書籍はドシ〳〵賣れてゐる。此の現象をどう見る？唐の文化を盛んに吸收しつゝあつた時代の日本に支那排斥の思想や感情があり得ただらうか？主客顚倒したる現在の支那國內に眞の排日があると考へるのは大間違ひである。日本文化禮讃は現代支那に於ける澎湃たる趨勢である。親日は支那國民の正直なそして熱烈な感情である。

南京の町を步いてゐると洋服を着た青年達が元氣な聲で話し乍ら行く。何氣なく其の話を聞き乍らついて行くと銀座のカフェーの話をしてゐる。南京には日本人はまだ七八十人しか居ない。人懷かしい折だから呼び留めて話して見るとそれは中國人である。料理屋へ行つて食事をしてゐると隣室に宴會があつて盛んに日本語でメートルをあげてゐる、日本人の宴會だらうと思ふと豈計らんや國民軍の士官連中の集りで日本人は一人も混つてゐない。さういふ將校達は名刺の肩書に大尉とも少佐とも書いてない代りに『日本陸軍士官學校卒業』なる肩書きを入れてゐる。排日の國ならそんな眞似は出來ない筈だ。折角支那人に化け込んでゐる私を茶館で見掛けると傍若無人に日本語で話し掛けるので私の正體が暴露してしまふ。朝早く旅館の前を軍隊が通る。將校が號令を掛ける、日本の號令だ、さては日本の陸戰隊が來たのかと飛び出して見ると國民軍の兵隊だ。兵式教練は全く日本と變りはない。

南京に彼等が一萬人居るかどうか知らぬが、とにかく中國語などは知らなくても不自由をしない程度には先方に日本語を話す連中がゐる。何とも云へず心強い。或人は現在の國民政府は日本の學校の出店だと云つた。

支那に國權恢復運動はあつても、眞の日本排斥運動はないのである。若しあれば田舍の何も知らぬ學生位のものである。濟南で陸軍が衝突しても、日貨排斥が行はれてゐても、個人の好感情は傷つけられない。或時私は支那の青年數名と濟南問題を話した時、試みに私が

「日本は讓步しないであらう。何故かと云ふと、日本の國力は山東出兵を十年繼續しても苦痛を感じない、國威を墜してまで軟弱な外交は取らないでせう」

と云ふと相手は眞面目に

「成る程さうでせう、然し日本と支那が何時迄も仲違ひをしてゐては外國へ對して不體裁ではありませんか」

と云つた。私は冗談とは云ひながら赤面せざるを得なかつた。同文同種とか唇齒輔車とかいふ言葉は古く云ひならされてゐるだけに私なども曾ては陳腐な氣持がして、そんなことは單なる空想に非ずんば政治家の外交辭令に過ぎないといふ風に考

へたこともあつたが、近來沁々味はつて見ると、支那人にしても日本人にしても、おなひ以上の友人を世界の他の國に求めることは困難であると思はれて來た。これにしても濟南問題などは無條件に解決して、條約問題でも成る可く多く支那の要求を容認する方針に出て日支間の暗雲を速かに一掃すべきである。日本は强國である。彼の要求する物は先づ與へて見るがよい。それが日本に取つて何等の屈辱でない。元來濟南問題は國際問題としては相當大問題であるに相違ないが、日本の國民生活の上から見れば微々たる事件である。少なくとも日本の安危に關する迄には甚だ距離のある問題だ。是れしきの利害關係や體面問題にとらはれて東洋百年の和平と親善を害なふことは甚だ遺憾である。

排日は聲であり又勢ひでもあるが、それは一日にして鎭めることの出來る問題だ。排日恐るるに足らずと云つても私は敢て田中大將の口吻を倣ふのではない。私は支那に排日はなく寧ろ親日あるのみと云ひたいのである。此の支那の國民の（智識ある階級の）日本に對する感情をわれ／＼が正當に理解しない場合が、排日以上に一番恐ろしいことである。

獵官運動・賣春婦

序でにもう少し「南京三多」の話を續けよう。日本留學生一萬人と對抗して獵官運動者一萬人、賣春婦一萬人と云ふことも獵官運動者の中には日本留學生も多分に混つてゐるだらう。

目下南京の旅館といふ旅館は全部滿員だが、其の大部分は地方から來てゐる獵官運動者だといふ。旅館ばかりではなく素人家にも居るし、食客もある。獵官運動者專門の合宿所まで出來てゐるさうだ。

官吏の任用法は以前に比べたら幾分改まつてゐるだらうが、然し此の點ではまだ／＼舊態依然たるものがある。買官は裏面で盛んに行はれてゐるといふ。地方の知事などは數萬元で購はれてゐるさうだ。其のくせ表面では「腐敗貪官汚吏」といふ言葉が盛んに唱へられてゐる。そんな言葉の唱へられてゐることが一面に於て賄賂の横行や貪官汚吏の存在を裏書してゐる。

私の觀る處でも、現在は金で買はないまでも交際主義で獵得しなければ官吏たることは六ケ敷い。第一の缺陷は官吏の任用令が制定されてゐないことで、隨意に任用されるから必然的に惡弊が生じる。往昔の科擧制度が打破されて以來は海外留學がそれに代ることになつたが、留學して歸つても官吏に登用されるとは限らないし、又事實海外留學生が必ずしも秀才であるとは云へない。どうしても國內に新らしい試驗制度が確立して、

官吏の身分が安定する迄は此の弊害は附き物である。考試院の職制はつまり此の缺陥を匡正するためのものだがまだ現在では役所が成立したのみで實際の仕事はしてゐない。

其處で、交際主義の方法としては第一に訪問である。それぞれ縁故をたどつて大官の私宅を訪問する。十度に一度位は會つて貰へるから其の上で賴み込むなり歎願するなりする。だから、大官連中の面會日には門前市をなして殺到する。其の大多數は獵官運動者だ。獵官も骨が折れるが、會ふ方は更に大變で是れがために時間を浪費させられた上にウンと神經衰弱に罹らねばならぬ。然らば國務多端の故を以て無用の面會を謝絶したらよさゝうなものだが、支那ではそれは出來ない。それをやると忽ち評判が惡くなり、今度はあべこべに大官の地位が危なくなる。大官と雖も民衆の輿望によつて地位を保つてゐるに過ぎない。其の好評惡評を造り出す本家本元は是れ等の獵官運動者即ち浪人組である。彼等は一番口が蒼蠅くて而も隙(ひま)といふ武器がある。蠅のやうに八方へ散つて行つて惡宣傳をする。非常に始末が惡いがそれだけに時に利用の道もある。浪人といつても日本のそれとは餘程性質が違ふ。大官と獵官運動者とは斯樣に利害關係が錯綜するので、採用はしないまでも或る程度に客を遇する禮だけは盡さなければならないといふ大官側にも弱點がある。それともう一つ支那では古い習慣として客の多いことが名士の資格になつてゐる。

新聞を見ると必ず大官連中の『何の某啓事』なる廣告が載つてゐて、讀んで見ると面會日や時間の發表である。眞實用事のある者には面會日以外の日に會ふ。面會日といふやつは露骨に云ふと獵官運動者受付時間である。尤も獵官運動者にもピンからキリまであるから、皆一樣に芋を洗ふやうに押し掛けるとは限らない。知事でも狙ふ奴になればそれ相當の手段を盡すことは勿論だ。

とにかくかういふ有象無象が南京に一杯居る。支那に騎牆派といふ言葉がある。騎牆といふのは早く云ふと機會主義投機主義といふ意味で、主義主張なく勢力の强大なる者に附加雷同する輩を云ふのだが、獵官運動者は、殘らず騎牆派だと云つていい。

かうして運動して漸く獲得した大小官吏の地位なるものがどうかといふと實に不安定である。自己の縁故者が上に居る間は安心だが、其の人の一身に變化があると忽ちこつちの地位までフイになる。不安心なこと夥しいが、其の代り在官中は大變割りがよい。官吏は一種の利權であるから收入が多い。第一月給が高くて、仕事は樂だ。北京政府時代の官吏は俸給が少なくて

賄賂が殆ど公收入になつてゐたが、今度の國民政府は賄賂を嚴禁した代りに比較的高額の俸給を官吏に支給する。（全部一樣にも云へないが。）一例を擧げると私の知人の某君は日本の商科大學を卒業して歸ると直ぐ政府に勤めて月給百八十圓を貰つてゐる。もう一人は一年前に卒業して歸ると間もなく二百五十圓の地位を獲得した。日本より遙かに物價の安い國で月給は遙かに日本の學校出を凌駕する。其の代り後者の方は僅か五ケ月で首になつた。前者の百八十圓の先生もはやグラ付き掛けてゐる。位置は不安定だが、仕事は樂である。樂といふより寧ろ仕事のない官吏がウヨ〳〵居る。忙しい者は莫迦に忙しい仕事をさせられ、遊んで月給貰つてゐる者はまるで遊んでゐる。詰り仕事のあるなしに關せず任命された官吏だからである。初任高等官級の官吏に是れが最も多い。私が或る若い官吏と帶道して政府の某要人を訪問した時、其の大官が「忙しくて困る」と云つたら、若い官吏が「私共は閑で困ります」と云つたので大官も苦笑してゐた。

國民政府が成立しても直接民衆政治の上に革命の實績が擧らぬのは、他の原因もあるが、官吏が實質的に少しも變化してゐないことも重大なる原因である。其のために、一部の青年達からは反動的政府だなどと呼ばれるほど依然たる舊官僚的遺風が認められる。行政院內政部の前を通ると三つの門に大きな文字で「鏟除貪官汚吏・剷除土豪劣紳」とペンキで書いてある。誰でもこれを見て苦笑しない者はあるまい。內政部それ自身が貪官汚吏の存在を肯定してゐることが事實になつて、或ひは門を出入する貪官汚吏それ自身が此のスローガンを讀んでどんな氣持がするかしらなどと想像されて却つて滑稽である。私は此の一事を以て現國民政府を攻擊したくないが、當局者は最も強く此の點に思を致して、一日も速く官吏登用の方法を改良し、現在の弊を剷除しないことには必ず近き將來の痛となるだらう。

南京へ來たばかりの時右の南京三多の話を聞かされたが、第三の賣春婦の一萬人は無論嘘だと思つた。何故かと云へば其の後夜ひる町を出步いて見ても一向それらしい者は出沒しない。市中で見掛ける婦人達も多くは綿服を着け、顏に粉黛を施してゐるのを殆んど見ない。上海から南京へ來て目に付く事の一つは婦人の風俗の質素なことである。それが革命の首都らしい賴もしい氣持を起こさせる。それ位だから賣春婦などがゐる筈はない——と私は思つた。處が、此の觀察は私の誤りだつた。賣春婦は矢張り南京三多の一つに違ひなかつた。彼女達は決して白粉をつけない。そして外出する時は一番上つ張りに木綿の長衣を着て步く。是れは革命後の一つの流行であると共に彼女達

の保護色にもなつてゐるのだ。それで上衣を脱ぐと下には緞子や羽二重の美しい服を着込んでゐる――といつた趣向である。外見をケバ〳〵させないところに反つて濃い好みが出來てゐる。私が當初に革命的婦人だと思つて多大の敬意を表したところの街頭の女達の中には是れ等の技術家が澤山交つてゐることを發見した。

鷄（チー）（賣春婦）は到る處に出沒する。又彼等のねぐらに客を誘引する。專門の雞でなくても、夫子廟（フーツミヤウ）の茶館へ出る歌ひ手なども、二三の專門的書場を除いたあとの家のは殆んど皆裏面の商賣をする。一軒の茶館に四十人も五十人も歌ひ手がゐて、それらの娘達は舞台の横に目白のやうにかたまりあつてお客の選擇を待つてゐる。

或日私が例の書場へ行つて歌を聽いてゐると、其處へ一人の少年が入つて來て私の側へ腰を掛けた。其の晩は雨天だつたので客足が少なく、其の卓（テーブル）には私と其の少年と二人だけしかゐなかつた。少年は中學生などが着る鼠色の太掛兒（ターククル）を着て、鳥打帽を冠つてゐる。そして卓の上に頰杖を突きながら熱心に歌を聽いてゐる。私も最初は別に氣に留めなかつたが、よく見ると珍らしい美少年である。顏の色なぞは透き通るやうに美しい。齡は十六か七位である。親と一緒に來れば別だが書場などは餘り少年の來る場所ではない。

「君は唱が好きですね」

と話し掛けると、少年は私の顏を見返したゞけで默つて合點いた。

「誰が好きですか」

「劉蓮芬が好いです」

劉蓮芬は十四位の可憐な娘だから此の少年が好くのも無理はないと私は思つた。そのうちに少年はポケットから煙草を出して吸ひ始めた。何だか其の態度が變つてゐるやうに思はれた。やゝ暫らく經つてから私は更に妙なことを發見した。それは此の少年の耳朶（みゝたぶ）に穴が明いてゐるではないか。男の子が耳に穴を明けるといふことはまづない。

「君の家は何處？」

「姚家巷です」

「君の家へ遊びに行つてもいゝですか」

すると少年は俄かに一變した娼らしい表情をして、あたりに氣を配りながら

「わたしの方は構はない」と低い聲で云つた。

藝者を禁止した南京には、藝者以上に露骨な賣春婦もゐるが、此の茶館の美少年のやうな技巧家も偶にはある。

南京四不

南京三多を書いたついでに今度は『南京四不』を紹介しやう。これも最近の通り言葉になつてゐる。曰く、電燈不明、電話不靈、道路不平、水不清、これを南京四不と云ふ。直ぐ樣かういふ言葉を案出するところが支那人である。南京の暗いことは此の訪問記の冒頭にも書いたが全く暗い。現在南京には下關と城内との二ケ所に電燈會社があるが、どちらも電力不足で、殊に城内の會社の電燈などは十燭位では豆ランプ程の明るさだ。處が、其の電力不足の中で盜用が盛んに行はれてゐるが、最も大規模の盜用は、軍隊、諸官衙、大官の邸宅等だと聞いては些か呆れざるを得ない。到頭溜り兼ねたと見えて南京の新聞が此の事實を指摘して軍人や官吏の公德心の缺乏を攻撃しだしたのも無理はない。

現在の南京には、好い事と惡いことと兩方ある。新と舊と兩面ある。新思想の洗禮を受けて國民革命を實現し、新支那建國の大業に從事してゐる國民黨や國民政府の人達のしてゐることの中にも極端に好いことや惡いこと、極端に新らしいことと舊いこととある。どこの國でもいゝことばかりある筈はなく、いつの時代でも新舊の二面はあるに違ひないが、現代支那ほど其の二面と言葉を露骨に示してゐる國はないだらう。南京三多あり、次に南京四不があれば、更に其の後には南京五惡もあるだらうし南京五好もあるだらう。すべてが、過渡期であり、黎明期である。

其の中で第一に感心することは南京の大官連中の精勵振りである。先づ朝は五時六時から客を接見する。支那の舊官僚といふものは極端な朝寢坊で午後の二時三時を過ぎなければ床から出なかつた。だから客を接見するのは普通夜の仕事で、宴會などは夜半の一時頃から曉にかけて歡を盡したものだ。大官の集る御前會議だとか閣議だとかいふものは深夜にばかり行はれた。從つて世間一般も朝寢だつた。處が今度の革命政府の要人達は此の點で先づ文字通り惰眠を破つた形がある。南京の大官に面會するには眞暗いうちに起きて押し掛けなければならない。私などと來ては寢坊では選手（チャンピオン）、舊官僚以上だからとても困つた。大官が此の通り早起きをするから、屬僚は勿論、獵官運動者も、新聞記者も、すべてが早起きをしなければならないから自然市中一般が早起きになつた。朝の五時には兵隊が方々の廣場や人の通らぬ道路で體操をやつてゐる。南京市中到る處にある水溜りのやうな池から眞白い水蒸氣が立ち昇つてゐる。其の時刻には各所の小さな市場が開かれて野菜だの肉だの提げて

歩いてゐる人がある。自動車や黄包車が朝霧の中を勢よく走つてゐる。やがて紫金山の上に朝日が出ると、城壁の上に頸を並べて眠つてゐた澤山の雉子が羽を金色に輝かせながら四方へ飛び散つて行く。

早朝の南京城内には潑剌たる革命の氣が横溢してゐる。

宣傳の國

南京へ來て一番目に付くものは各種の政治的宣傳だ。紙へ書いたポスターもあるが、大部分は建物の壁や塀をペンキで塗りつぶして書いてある。就中、諸官衙や兵舍や寺院廟などに多い。個人の家も是れに利用されてゐるし、場所は塀と云はず門と云はず柱と云はず應接間と云はずいやしくも人の目に付くやうな場所でさへあれば是れに利用されてゐない處はない。元來支那は宣傳の國だから從來とても煙草や賣藥等の廣告的宣傳は目ざましいものだが、それが近來は悉く政治的宣傳に壓倒されてしまつた。今度私が旅行した範圍では南京と抗州が一番盛んだつた。多くは煉瓦や壁をコバルト色のペンキで塗りつぶした上へ白文字で書いてある。一番多いのは『國民革命的意義』『國民黨綱領』『三民主義就是』『孫總理遺訓』などで是れ等は數千字を書いてある場所もある。

短いスローガンの中には獨特の用語があつて面白いのがある。又場所と文句と調和してゐて面白く感じる場合もある。が大概は場所のいかんを問はないで勝手法題な文句が書いてあるのが革和國らしくて反つて面白い。氣が付いた時、時々手帖へ寫し取つたのを紹介して見やう。

一番多く見掛ける文句は『打倒帝國主義』『廢除不平等條約』『打倒軍閥共產黨』『徹底中國々民革命』といつたやうな處で、地方へ行くと『促進地方自治』『獎勵殖產興業』『剷除土豪劣紳』などが澤山ある。『革命尚未成功、國民仍須努力』是れは孫中山の有名な言葉である。『肅正軍閥餘孽』『一切權力屬於國民黨』『剷除投機的反動派』などは有りふれてゐる。西湖の岳飛廟の門前には半丁餘も針金を引つ張つて大きな字を書いたトタン板が空中に吊してある。其の文句は『健全的中國々民黨才能建設良好的政治』南京城の正門の儀鳳門の樓上には『擁護南京國民政府』と書いてある。國民政府内政部の塀には『促進地方自治、貫徹法治精神』『嚴懲貪官汚吏、痛除積弊惡習』南京の夫子廟前秦淮河畔の長い壁に國民革命的意義と題して『打破個人的安樂觀念、奮起革命的犧牲精神』『於法律上經濟上教育上社會上確定男女平等之原則、助進女權之發達』とあるのも場所柄だけに面白い。

排日的スローガンも隨分目に付く。『打倒日本帝國主義』『回收旅順大連』『厲行日華經濟絶交』などは到る處にある。『打倒日本田中義一』などを見ると田中さんもえらくなつたやうな氣がする。『解除山東人民的苦痛』『恢復我濟南』などといふのもある。南京の江蘇省政府の壁には洋傘をさし下駄を履いた日本の女が山東省を横行濶歩してゐる繪が書いてあつて其の側に『最可怕的――山東省要做日本的殖民地了』と説明がしてある。

方々の電柱に『打倒經濟侵略主義』とあるから見ると南洋兄弟煙草公司の美女牌香煙の廣告であるのは愛嬌でもあり拔け目のないに驚く。

南京から二里ばかりの處に燕子磯といふ名所がある。乾隆帝が遊幸した土地で一寒漁村であるが江南獨特の風景がある。其處の古い觀音堂へ參詣すると本尊の前の兩柱に『孫中山創革命推滿淸建民國功德超乎華盛頓之上』『蔣介石統義師滅軍閥除共黨勳績揚于全世界之間』といふ對聯句が書いてあつた。是れには同行の支那の友人ですら驚いて寫し取つた。

とにかく此の種の宣傳の多いことは驚くべきものだ。就中杭州の如きは、全市をあげて壁といふ壁に宣傳文の書いてない處はない。さしも西湖の名風景もペンキで塗り潰されてしまつた觀がある。あらゆる古建築の壁や塀、橋、樹木、悉くこれに利用されてゐる。碑文字などにまで宣傳しないものはない。現代の支那人は美術を尊重しないと云ふ或ひは審美眼を缺くとしてゐるとか云つて憤る。南京へ來ても同じことで、有名な建物や北極閣なども修築された上にベタ／＼にペンキで書かれてゐるし、莫愁湖でも雞鳴寺でも同様である。宣傳する側から云ふと、さういふ有名な建築物などへ書くことは最も効果があると思つてゐるのだからやり切れない。

然し、此の事實を見て直ちに支那人の審美眼を疑ひ、或ひは破壞性を想像することは早計である。由來支那人には、目的とする物の中心だけを見るといふ特性がある。中心物體だけを重んじて周圍の情景などは少しも氣に掛けないのが支那人の性質である。例へば劇場へ行つて見ると、あたり一面廣告だらけだが、他の場所はとにかく、舞臺の兩側のアーチの柱に堂々と白濁丸といふ淋病藥の廣告などが書いてある。われ／＼が見るといかにも醜惡な氣持を起させられる。が支那の人はそれほど氣にかけない。無論それをいゝ事だとは云はないだらうが誰も表立つて苦情を申し込むほどではない。つまり彼等は劇場へ行つては芝居を見ればいゝのである　舞臺の外の柱などは何が書いてあらうと構はない。大入滿員になつて來るとお客がドシ／＼舞臺の兩側へ上り込む。これもわれ／＼にはひどく眼障りだ

が、俳優が芝居をする場所を塞がない限り構はないことになつてゐる。

料理を食べに行つても同じことで、料理そのものの好惡は非常にやかましいが器物は論じない。それから部屋を論じない。彼等は只味と價とを論じる。直ちに目的物の中心に入るといふことは重大なる支那の國民性の一つである。寺へ參詣する時、その寺の塀に何が書いてあらうと構はない筈である。觀音像を拜む時其の前の柱に孫中山蔣介石禮讃の對聯句が書いてあらうと信仰の氣分を傷けられはしない。況んや壁へペンキで書いた文字くらいは不用になれば其の上を塗つてしまへばいゝ。建物を壞してしまはない限り樂書きは何をしやうと構はない――早く云ふとそれくらいに思つてゐる。日本人などのやうに神經質に身の廻りを氣にしない國民である。

それからもう一つ感心することは、決して亂暴な書き方はしてない。例へば土塀へ書くにしても、正確な輪廓を取つて先づコバルトのペンキで塗り潰した上に細かい楷書で書くとか、或ひは最初幾つも並べて大きな圓を塗り潰して、圓の中へ白ペンキで一字づつ大字を書いて行く。ペンキ屋でも字が上手なせいもあるだらうが誠に規則的で調子をとることに巧みであるから、少くとも見た眼が蕪雜でない。細字を數千字書き連ねたのなどは場所によると一種の裝飾にさへなることがある。かういふ事はとても日本人の及ぶ處でない。

然し、大體としていかにも宣傳が多過ぎる。全く眼に餘る。宣傳するは勝手だがかうザラにあつては效力の如何を疑はざるを得ない。排日的宣傳なども日本の新聞の電報で讀むといかにも仰山らしく聞えて險惡な空氣を想像させられるが、實際市民に與へる刺戟は稀薄である。現場を通つて見ても、そんな物を立ち停つて讀んでゐる閑人は一人もゐない。

中山墓

現代支那革命の中心思想は孫文禮讃といふことだと云つた人があるがそれはやゝ中つてゐる。殊に革命政府樹立以來孫文の人氣は素晴らしいものである。孫文はもう一革命運動家ではなくて支那四億の民衆の頭上に君臨する神である。孫文に關するあらゆる本が出來つゝある。全國の學校は無論のこと、市中の商店、劇場、書場、料理店、醫者、辯護士、どんな處へ行つても孫文の寫眞を掲げてある。況んや官吏政治家の應接間でこれが掲げてない處はない。封筒、書翰箋、雜記帳を買へばそれに孫文の『天下爲公』だの『革命尙未成功』だの、肖像だのが入れてある。孫逸仙の人氣は先年から可成り盛であつたが最近は

それが白熱化して來てゐる。然し、此の現象や傾向を見て、現代支那の民衆の大多數がそれ程孫文を崇拜してゐると考へるのは早計である。孫文崇拜は或る程度までは自然的現象であるがそれ以上は政府の宣傳的効果に歸してい丶。現在國民黨の政治家達は、故孫總理を神格化し其の遺囑を實行しつ丶あるといふ口實を設けることによつて自分達の名聲や信用の不足を補つてゐるのである。だが是れは結果から見てもさほど悪い事ではない。又、純國民黨出身の孫文の門下生であつた多くの政治家達は、感情的からいつても恩師孫文を神として祀ることに贊成でない者は少ないだらう。革命黨員の間に於ける孫文崇拜熱は以前から随分熾烈で、彼が生きてゐる時分でも、國民黨の本部や支部へ行くと會議場の正面には必ず總理の肖像が掲げてあつた。さういふ風だから最近の一般的孫文崇拜熱は彼等にとつては感情的にも實際的にも好都合である。そこで意識的に益々孫文禮讚熱を煽らうとしてゐるかの觀がある。それの代表的事業が南京城外の紫金山に建築した中山陵である。

　中山道路のことは前に記した。それは中山陵へ行くための下關から朝陽門迄三里に亘る大道路だ。朝陽門から紫金山迄は更に卅丁ばかりの距離がある。紫金山は從來は明の孝陵に依つて有名だつた。それが、今は中山墓のために壓倒されてしまつた。私は南京滯在中此處へ二度行つた。

　初めて行つた時は、同宿のTさんといふ日本人と[illegible]といふ支那人と三人で馬車を雇つて行つた。牌樓街といふ町を通つて行くと秦淮河の上流の大津橋へ出る。此の邊へ來ると河水が清くて沿岸の風景も實にい丶。橋を渡ると殆ど家がなくなつて周圍は廣い野原になる。代々木練兵場を幾つもよせた程の眞平らな草原は國民軍の飛行場になつてゐるが、飛行機は一台も見えない。此の道路は非常に古い道で、途中に明朝時代の西華門だの西長安門などといふがあるが樓は跡方もなくなつて今は煉瓦のアーチだけが殘つてゐる。少し行くと明宮の趾がある。一面の畑ばかりだが、正面には午朝門といふ巨大な門のアーチが殘つて居り、濠の跡とそれに架した石橋などが存在してゐる。宮殿の礎だつた大きな石が方々に轉がつて居り、無數の瓦の破片が畑の土と混つてゐる。

　城壁が近くなる。南京城は北京城と共に支那の二大城とされてゐるが、城壁の周圍は南京の方が遙かに廣い。北京は城內に人家が稠密して大都市をなしてゐるのに反して南京の方は實にまばらである。一體南京の城壁は周圍幾里あるかと思つて先年以來度々人に尋ねて見ても皆答へる處が一定しない。書いてあるものを見ても同樣で、或は百七十支里あると云ふかと思ふと

或る人は只の四十五支里と云ひ或は百三十支里と云ふ。支那の里數ほど分らぬものはない。が、城内の直徑里數から測定すると先づ日本の里數にして十里餘、出城まで加へると十二三里といふ處はほゞ確かな測量だらう。それにしても駄々つ廣い城を築いたものだと思ふ。現在では市街地は城内全體の五分の一乃至六分の一位しかないが、明朝時代と雖も此の城内に人家が充滿してゐたわけでは勿論ない。三十萬位の人間は此處に籠城しても糧食の自給自足が出來るだらうと或人が云つた。とにかく廣い。

支那の城壁を望み見た時ほど雄大な、そしてロマンチックな氣持になることはない。

朝陽門の處で中山道路と一緒になる。城外は道路工事の最中で馬車は甚だ危險だつた。此處から紫金山に達する一大平原は小丘が起伏し、北には碧い玄武湖があり、平原は西へ西へと波うつて廣がつてゐる。野原の眞ん中に宏大な煉瓦の門がある。巨大な動物の石像が點々と立つてゐる。それらは皆明陵の附屬物だ。向つて左に紅く見えるのが明陵で、それから二十丁ばかり離れた右手にあたつて明陵よりは餘程高い位置に眞白く見えるのが中山陵だ。紫金山が背後に屛風のやうにそば立つてゐる。此の山は樹木は殆どなく滿山岩石で築かれそれが紫色に、或は光線の具合で金色に輝く。紫金山の名は實にふさはしい。

中山陵の工事には常に千人以上の人夫が入つて働いてゐると云つた。主としてそれらの勞働者のために其の邊には俄か建ちの飲食店が澤山出來てゐる。麵だの饅頭だの賣る店に人と蠅が眞黑く群れてゐる。山の近くへ來ると雜木林などがあり道は坂が多くなつて馬車を進めることは出來なくなつた。私達は降りて歩いた。

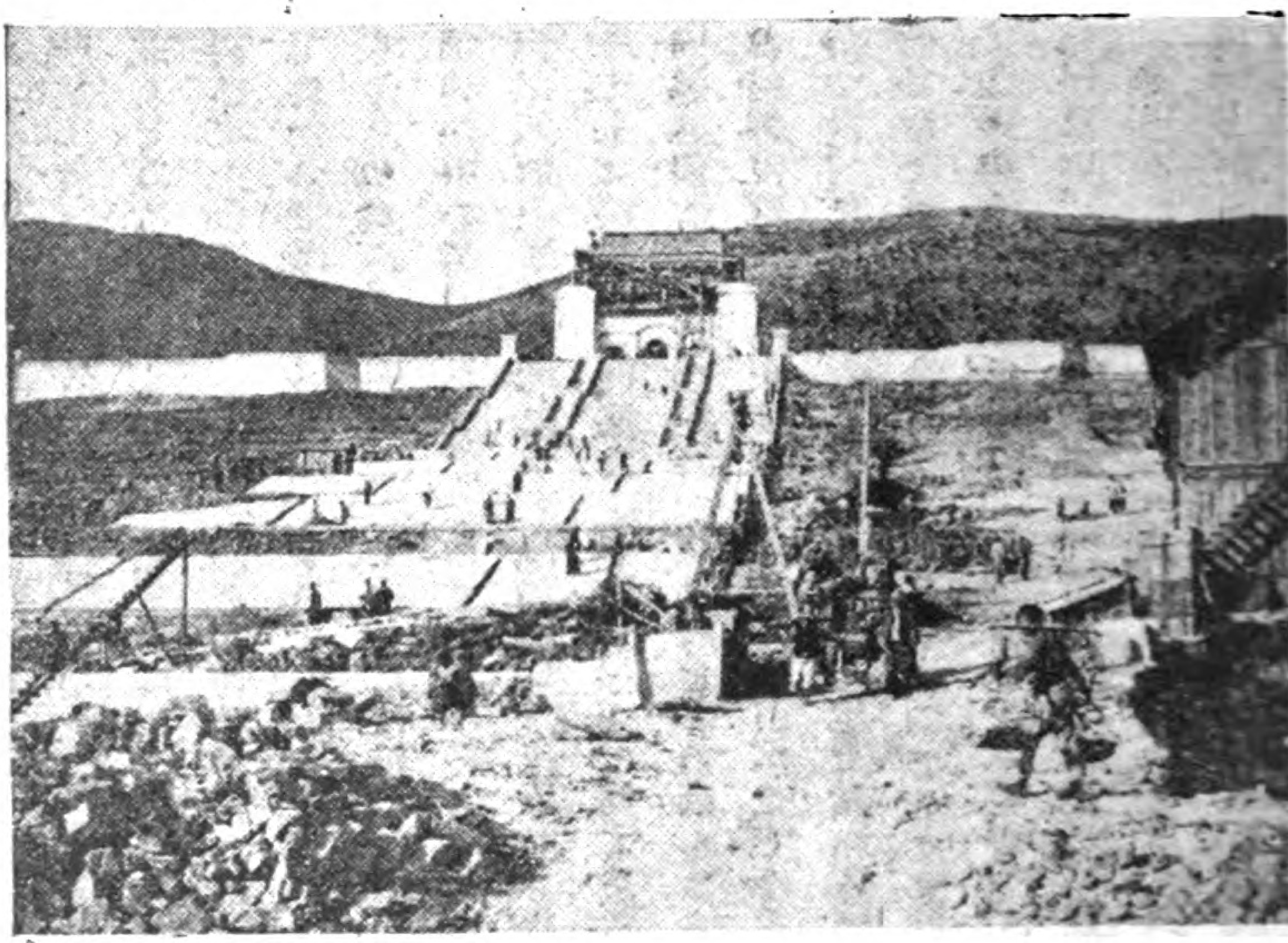
中山墓――。それは實に雄大極まる工事である。世界のことは知らぬが、東洋には是れほど大きな陵といふものはない。紫金山の麓の可成り高い一つの山全體が陵の基礎であつて、それへ幅六七十間長さ七八丁に及ぶ石の階段を設け、頂上に石造の巨大な廟が立つてゐる。眞上に立つて眺めると山下一面に蟻のうごめくごとく人がある。山の兩側面は切り崩して石を積み上げてある。それらの人夫の棲む小屋が落葉樹の林の間に無數に散在する。廟は全部人造石の建築で約二十間四面位の大きさである。內部の柱は大理石で包んで天井や壁は五彩にいろどられ絢爛の美を極めてゐる。屋根は青瓦でふかれてゐる。

全體の樣式は、東洋風に可成り西洋式が加味されてゐるが、いかにも大規模であり、そしてどつしりと落ち付いてゐる。正面の山下から仰ぎ見ると、建物の形と云ひ、廣大な石階

と云ひ、背後の紫金山との調和と云ひ、一點申し分ないデザインである。山の上に登つて廟の前に立つて俯瞰すると、遙かに蜒々たる南京城と相對し、其の間には曠原幾里、西へ西へと波うつて遠く彼方の連山と連なつてゐる。是れ程雄大な景色もまたとはあるまい。

陵の設計は政府が懸賞募集をして選んだのださうだが、そして當選者は何といふ人だか私は聞き漏したが、とにかく中華民國の代表的建築として世界に誇るに餘りある。現代支那には美術は無いといふ極端な論を嘗て屢々耳にし私もひそかにさう思つたことさへあるが、今度此の中山墓の大工事を見て、支那には矢張り偉大な美術が現代にもあることを知つて私は無條件に兜を脱ぎ、且つ何とも云へぬ愉快な氣持になつた。

此の陵は民國十五年に起工された。それから間斷なく工事を進めてゐるさうだが、私の見た時は約八九分通り出來上つてゐた。今年の三月北京郊外の碧雲寺から孫文の遺骸を此處へ改葬することになつてゐる。それ迄に全部の竣工を見る手筈だといふ。工費の總額はどれ位掛るか知らぬが、民國十七年六月迄に費した額が二百四十萬元だといふ。現在の人夫の賃銀は普通が小洋二十錢、石工が三十錢だといふ。小洋二十錢は一圓の六分の一に當る。實に安い賃銀である。此の賃銀を以てして半途で二百四十萬元を費したといふが、同じ工事を賃銀の高い日本や諸外國で行ふとしたら幾千萬圓を要するか分らない。實に驚嘆すべき大工事である。而も一個の墓として是れ程大規模なものは世界中にあるまい。南京政府の人達の自慢するのも無理はない。



工事中の中山陵

孫中山の革命思想は斯く立派な墓を建てることゝ相反し矛盾

しては居らぬかと問者は云ふ。それは云ふ方が野暮である。かういふ例は古往今來珍らしくない。前にも云ふ如く孫中山を神格化することに於ては、敢て急進的共產主義者ならずとも、現代の中華民國人の大多數はそれほど賛成してゐるわけでも共鳴してゐるわけでもない。が、由來神と云ひ史上の英雄といふも果して其の時代の民衆の隨喜渇仰を得てゐたか疑問である。私はむしろ神といふは時の權力がつくるものだと思ふ。中國國民黨は現在三百萬の黨員を有するといふが其の中心勢力をなす分子は勿論少數である。其の少數權力者が孫逸仙を無理に神にするのである。日本の某政治家が南京へ來て孫文禮讃熱の旺盛なのを見て驚歎し「自分は往年日本で數回孫逸仙に面會したが其の當時に於ては此の人が將來四百余州の信仰の對照となりうる程の大人物とも大人格とも看取出來なかつた、今更自己の不明を恥ぢる」といふ意味の文を新聞に寄せてゐたが、某政治家の心境としてはそれも道理だが、誰だつて昔孫逸仙に會つて此の人が神樣になる資格があると考へた者は居ない。孫逸仙の偉さは彼の事業が證明してゐる。

地方の都會へ行くと方々に『中山公園』とか『中山圖書館』とかいふ物が出來てゐる。それも新たに出來たものでなく從來ある物を名稱だけ變へたものが多い。たとへば西湖の孤山にある中山公園などは元來これは清朝皇室の造つたものだ。それが今は中山公園と改名されてゐる。かういふことは見樣によると他人の功を盜むに似て餘り愉快な事實でない。紀念事業なら全然新規に起工すべきである。此の點で私は紫金山の中山陵にはたとひ何千萬元の貴重な國用を蕩盡するとも敢て異議なく賛成する。

山下には櫟林が多く、勞働者の棲むかまぼこ小屋が無數に散在する。小屋の內外で女達が喋つたり炊事をしたりしてゐる。清冽な泉の湧き出てゐる處で甘藷を洗つてゐる女房がある。私が立ち停つて見てゐると女は大きな芋を一つ差し出して

「是れをおあがんなさい」と云ふ。

「謝々、だが生では食へないよ」

「いえ、生で食へる」

さう云つて女は直ぐに別の芋をがり〳〵嚙つて食つて見せる。率直で氣持がいゝ。好意を無にするものも惡いやうな氣がするので芋を貰つて銅幣を一摑み遣らうとすると彼女は「要りません〳〵」と云つて受け取らない。小刀で芋を薄く切つて三人で嚙りながら歩いた。

六朝遺跡

「Tさん、紫金山に紫霞洞といふ古い寺がある筈だが、どの邊でせうね、僕は是非其の寺へ行つて見度いわけがあるんだが」

私がさう云ふとT君は

「それは僕も行つたことはないが、何でも中山慕と明陵との中間の山奥に寺らしいものが見えますよ、先達て來た時道案内の紙が貼つてあつたがそれに確か紫——なんとかと書いてあつたやうに思ふ、それかも知れませんね」

「ぢやあさうでせう、一つ行つて見ませう」

馬車を先きにやつて置いて私達は徒歩で山の方へ入つて行つた。近頃造つたやうな道がある。其の邊には珍らしく松の殖林などがある。五六丁行くと山が近くなつて、谷間の奥に赤い壁の建物が見えてゐる。其の谷は非常に深くて下を水が流れてゐる。側へ行つて見ると、鐵のやうな岩山の中腹に赤い壁の寺があつて、規則的なつゞら折の階段が附いてゐる。其の下を四十五度の角度で溪流が走つてゐて、更に上の方に赤い壁の建物が見える。谷には樹木が多く樺色に葉が染まつてゐる。紫金山の峰が幾つもの層をなして上へ上へと重なつてゐる。溪流の上に橋が架つてゐる。

今では滅多に此處を訪れる人も無いが古へは名高かつた六朝時代の名蹟である。岩石と建物、それへ登る千鳥の徑、壁の色、紅葉、岩の色など、これは實に立派極まる景致である。私達は一番高い建物を目がけて登つて行つた。古い建築で堂内には佛像が數體安置してある。堂の中を通り拔けて背後へ出て見ると其處に瀧があつた。黒い岩を傳つて美事な瀑布が落ちてゐる。其の傍らに岩石を掘つた洞窟があり、入口に『紫霞洞』といふ額がかゝつてゐる。自然と技巧、それから數百千年の時代の錆、私はたつた少し前中山陵で味はつた感激とは全然異なつた感激の中に自分を思ふ存分浸らせることが出來た。

堂内に馬小屋のやうな房があつて其處に齢七八十とおぼしき老人が一人棲んでゐた。老人は頭布を頂き白い髯を垂らしてぼろ〳〵の長袖の服を着てゐる。机の上に本を二三冊置いてゐる。私は此の老人は遷人だらうと思つた。

「先生は此處で何をして居るのですか」と尋ねて見ると

「私は醫である」と答へる。

此の山中に醫者とは意外である。

「病人が來ますか」

「時々來る」

「此處に永くお住ひですか」

「いやまだ廿年位にしかならない」

「お齢はお幾つですか」

「九十七です」
「其の前は何處においでゝした」
「方々私は歩いた、北京にも居たことがあるし、上海にも三十年位住んでゐた。君達は何處の人だ」
「私共は日本人です」
「おゝ日本人か、私は昔日本人の朋友が一人あつた。長崎の人で竹村(ちくそん)といふ人だ」
「それは何時頃の事ですか」
「五十二三年前の事だ」
何とも云へない變な氣持になつた。
堂を出て山の腹に附いてゐる道を降りて來ると下の寺へ達する。すべて此處の建物は岩窟を堀つてそれに屋根を差し出し外部を壁で圍つたもので、屋内の半分以上は洞窟で出來てゐる。其處には僧が二三人居た。一人の僧が私達を案内して説明して呉れる。說法洞といふのは誌公禪師といふ人が此處で說法をした處だと云ふ。淸水の湧く井戸のある洞があつて其處は厨房だと云ふ。一番廣い房には卓が數臺置いてあつて遠方から來た百姓らしい人達が其處で茶を飲んでゐた。正面には佛像がある。
數年前南京にG君といふ日本人がゐた。G君は外國語學校出身の秀才で當時南京へ來て日本の陸軍情報部の仕事をして働いてゐたが、此の人は獨身主義で支那人のボーイと二人で呑氣に暮らしてゐた。或る秋のこと、G君は獵が好きだつたので鳥銃をかついで紫金山の麓のあたりをあちこち鳥を探して歩いてゐるうち、道があつたので山の方へ入つて行くと一つの寺があつた。それが此の紫霞洞だつた。G君は無論初めて此の寺へ來たので物珍らしく感じて寺の内をあちこち覗き廻つた。さうしてゐるうちに妙な物が彼の眼に入つた。其は一つの房の土間に日本の女の履く東下駄が一足脱いであるではないか。此の訪(と)ぶらふ人もない六朝時代の古い寺に日本の東下駄を發見すればG君ならずとも誰だつて驚かずには居られない。G君は不思議に思つて房内へ進み入つて聲を掛けると奥から一人の日本の女が出て來た日本服を着て束髮を結つてゐたが、まだ二十臺に見える可成り綺麗な顏をした女である。そこでG君は其の女と二言三言有りふれた會話を交し乍ら女が茶をいれてくれたので喉をうるほしてゐると六つばかりの可愛いらしい女の兒が側へやつて來た。
「あなたのお子さんですか」
「えゝ、さうです」と云つて女は子供の頭を撫でてやつたりしてゐる。
G君は聞かれたゞけは自分の職業上のことなども話したが女の方では何も身の上の話をしなかつた。G君といふ人は卅過ぎ

てる獨身主義を立てゝゐるくらいで何處か一風變つたところもあり、而はとかういふ世事人事にかけては無頓着でもある、それより彼は女と、殊に日本の若い女と話をすることなどは至つて不得手な男だつたので取り留めのない雜談をしたばかりで間も無く暇を告げて其處を出た。そして鐵砲を擔いで城内をさして戻つて來た。けれども、あとになつて考へて見るとどうも不思議でならなかつた。其の頃南京には日本人の女などは幾人も居ない。それが場所もあらうにあんな山の中の寺に若い日本の女が居るとは何處迄も不可解なことである。紫霞洞の女のことは久しくG君の頭にこびりついてゐた。けれども忙しい彼の職務はやがて其の事を忘れさせた。そして約一年の日が經過した。或日南京で發行してゐる支那新聞の一つの記事を見てG君は駭いた。それは日本人を妻とする李某といふ中國人の犯罪が露見して紫金山の紫霞洞で捕縛されたといふ記事だつた。それより數年前一時南京へ日本の商人が五六百人も入り込んだ時代があつて日本人專門の飲食店さへ出來た。女は其の時流れ込んで來た酌婦の一人だつた。ところが女は中國人の李と深い仲になつてやがて夫婦になり一人の子をもうけた。男はもと／＼善からぬ事をして生活してゐる人間だつたが女と同棲して後は夫婦共謀して種々の悪事を働いた。李の叔父にあたる者が紫霞洞の僧になつてゐた關係から夫婦は三年程前から其處へ番代して官憲の眼を巧みに遁れてゐた。然るに今度或事から足が附いて到頭夫婦一緒に紫霞洞の隱れ家で捕縛されたといふのである。

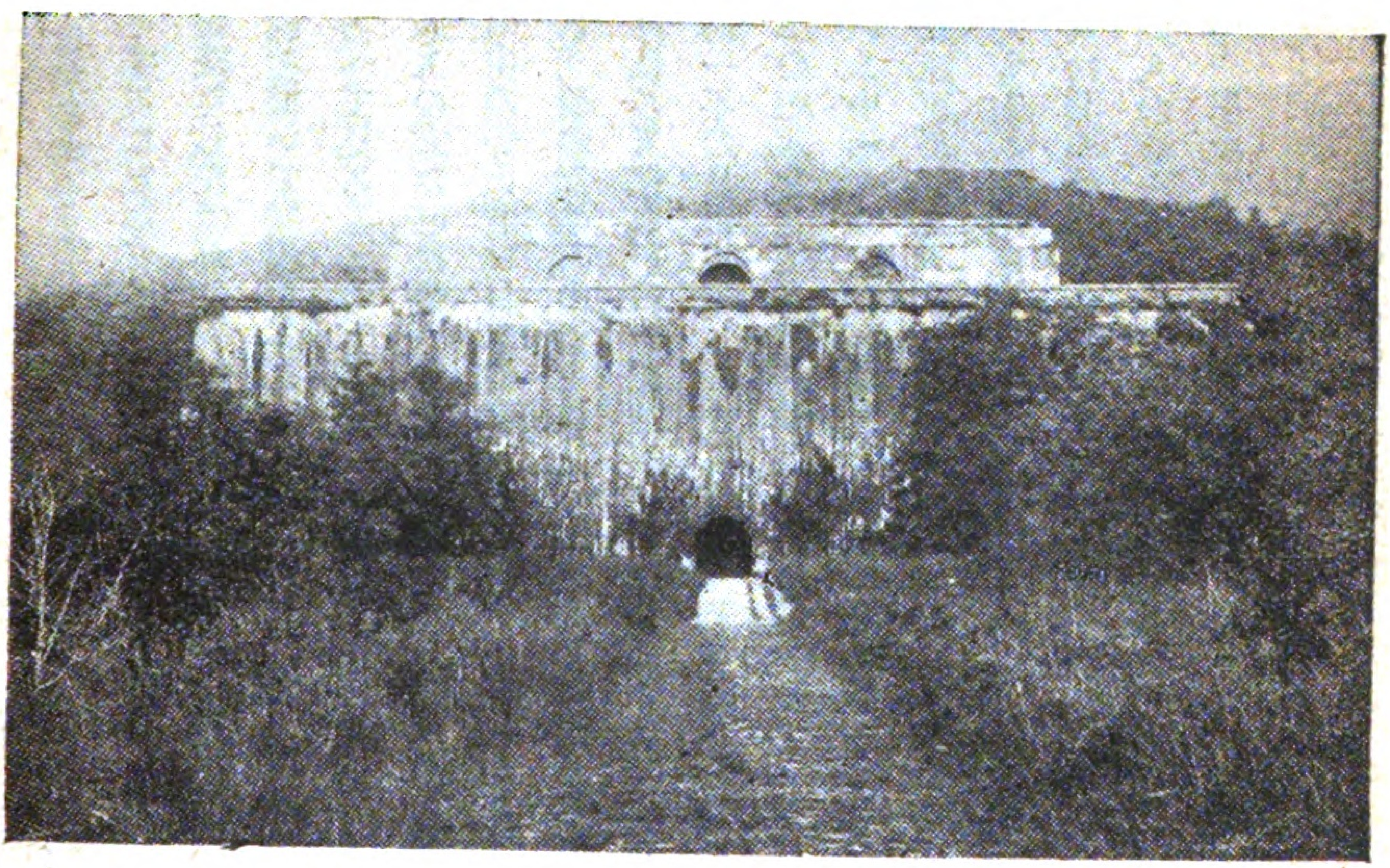
先年私が南京へ遊んだ時、私はG君に案内して貰つて明の孝陵を見物した。明陵の巨大な煉瓦の高壇の上に立ち乍ら私はG君から其の話を聞いたのだつた。私が今日紫霞洞を尋ねて見度いと思つたのにはさういふ理由もあつた。李といふ支那人と彼の妻が其の後どんな運命におかれたかそれは私も聞き漏したが、G君が其の事を話さなかつたところから見ると彼も恐らくはそんなことは無頓着で過ごしてゐたのだらう。けれども多分李は死刑に行はれたに違ひない。

私はG君から其の話を聞いた時、李夫婦そのものゝ生活も面白いと思つたが、それよりもG君自身が此の紫霞洞で日本の東下駄を發見したといふ話に異樣な刺戟を覺えた。彼等が棲んでゐた場所は何處かしらと思ひ乍ら、私は寺の中をあちこち歩いて見た。

私達は紫霞洞を出て間道づたひに明陵の方へと歩いた。其の邊には非常な深い谿谷があつた。谷の上の細徑を傳つて行くと明陵の前へ出た。其處から中山墓を振り返つて見ると、さしもの大工事も白い砂粉で作つた小さな宮殿のやうに見える。明陵

は久しい間の荒廢にまかせてある。もう是れ以上壞滅することは出來ない煉瓦や石の部分だけが殘されて、過去の偉大さを物語つてゐるに過ぎない。

紫金山に孫文の墓を建てることは其の遺言によるといふことだが、明陵と相並んで東洋の二大墳墓が此處に築かれたことは可成り意味が深い。明の孝陵は明の二世惠帝の工事に成るものだが、明の太祖は元を破つて漢民族の主權を恢復した人だ。民國革命も初期の目標は三民主義よりも寧ろ倒滿興漢の大旆の下に全漢民族の血を湧かせたのだつた。太祖の偉業も孫文の功績も民族的活動の見地から見ると大差はない。只異る處は明陵は其の孫が造り自から孝陵と稱したのに對して、中山陵は國民黨の門下生の合力に成り墓に署する

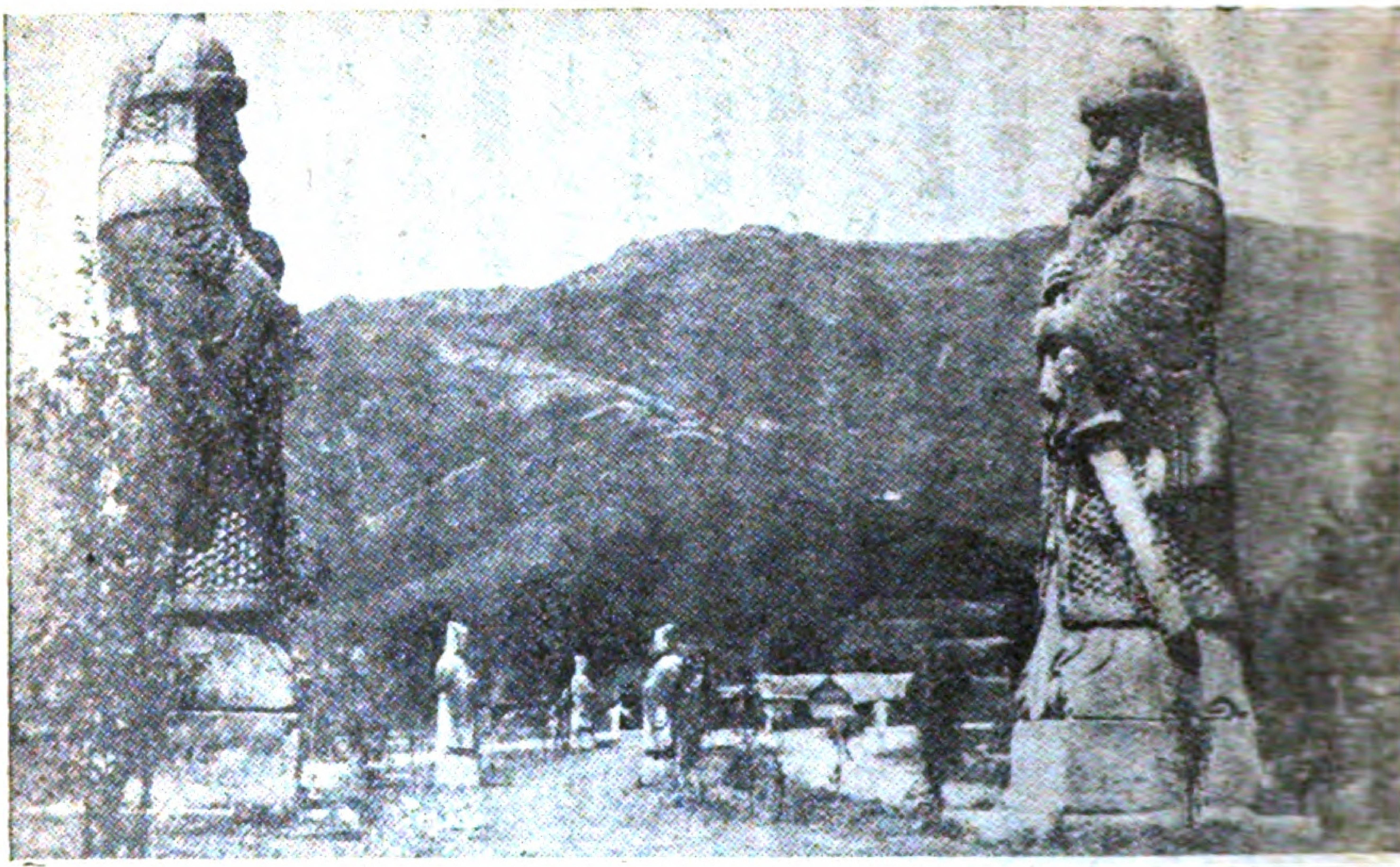


明の孝陵

言葉も『民族』『民權』『民生』の標語と變つてゐるだけである。忠孝が國家の基礎である時代もあれば、民權思想がそれに代る時代もあつてよい。徒らに過去の思想を云々することをやめて、民族主義の立場から此の際明陵にも多少の修復保護を加へることは卿等が祖先に對す義務であると私は考へる。

陳方之博士

私の知人に東京市立廣尾病院の副院長たる醫學博士西方時雄氏がある。その西方氏の大學時代の同級生に陳方之といふ人があつて日本の學界へ論文を提出して學位を取つてゐる。現在は國民革命軍の軍醫總監となつて活動してゐるさうだから南京へ行つたら一度訪ねて見て呉れといふ西方氏の註文で、陳先生へ宛てた



明陵の石像

紹介狀を私は持つて行つた。
　南京へ着いて陳方之博士のことを尋ねると、最近設立された行政院の衛生部司長といふ職について居られることが分つた。一日私は衛生部長薛篤弼氏に用談があつて訪問するといふ平井潑水君、滿鐵の八田厚志君の二人と同行して陳博士に面會すべく其の役所へ行つた。衛生部の



明陵の石像

役所は以前佛人經營の貴格病院といふのゝ建物を其の儘使つてゐた。草蓬々たる廣い庭があつて、煉瓦造りの相應な建物である。

最初まづ兩君が用事のあゝ薛篤弼氏に會つて其のあとで陳氏に會はふと思つてゐた。此の日同行の平井氏は在支廿年の先輩だが、同君は其の昔田岡嶺雲の門人で、嶺雲が聘せられて蘇州の師範學校の教師となつて赴任した時、其の勸誘で平井君は寧波師範學校の教師となつて赴任した。其の後杭州の學校にも奉職した。そして嶺雲は病のために歸國したが平井氏は遂に留まつて今日まで支那のために働いてゐる。さういふ人だから幾分志士的な風骨があると共にごく寛厚な學者である。

私達は暫らく應接室で待つてゐた。綺麗な部屋だが、壁には例に依つていろんな宣傳印刷物が貼り付けてある。『孫文主義系統解圖』なるものがある。これは三民主義を各々枝葉に擴げて圖解してある。『國恥紀念日一覽表』がある。さうかと思ふと支那の喪失地や外國租借地を一見して色別することの出來る世界地圖が掛つてゐる。是れ等の印刷物は各官衙や各學校に配付されて國權恢復思想宣傳に使はれてゐるのだ。其の地圖を見ると、中央亞細亞邊から安南暹羅、佛領印度、北は沿海州サイベリア、臺灣は無論だが朝鮮まで支那の喪失地になつてゐる。他日支那が强大をなして是れだけの面積を恢復したら大變なわけだ。然し、朝鮮が支那に朝貢した歷史は知つてゐるが、朝鮮が支那であつた事實は不幸にして知らない。仍て祖先が侵略主義に依つて得たり奪つたりした他民族の國々を今頃自國の範圖だと極めるのも可成り蟲のいゝ話だが、これでは隣邦を目してやれ侵略主義のやれ帝國主義なぞと云はれた義理ではあるまい。

其處へ、木綿の鼠色の軍服のやうなのを着て、脚にゲートルを卷き、支那靴を履き、頭髮を一分刈りにした人が何か早口に話し乍ら入つて來た。それが薛篤弼氏だつた。どう見ても日本の軍曹位にしか買へない。けれども此の人は先年甘肅の省長になつて頗る令名があり、國民政府成立後內政部長になつたが、今度また新設の衞生部の長官になつた、齡は若いが馮玉祥系では第一のきれ者だと云ふ。さう云へば非常に俊敏な人で私達と話をしてゐる十分位の間にも三つ四つ事務を片付けて行く。日本へ行つたことはないといふが日本語を相當よくこなす。

「もう少し經ちましたら私も日本へ行きます。日本に三月四月居るつもりです」と云ふ。

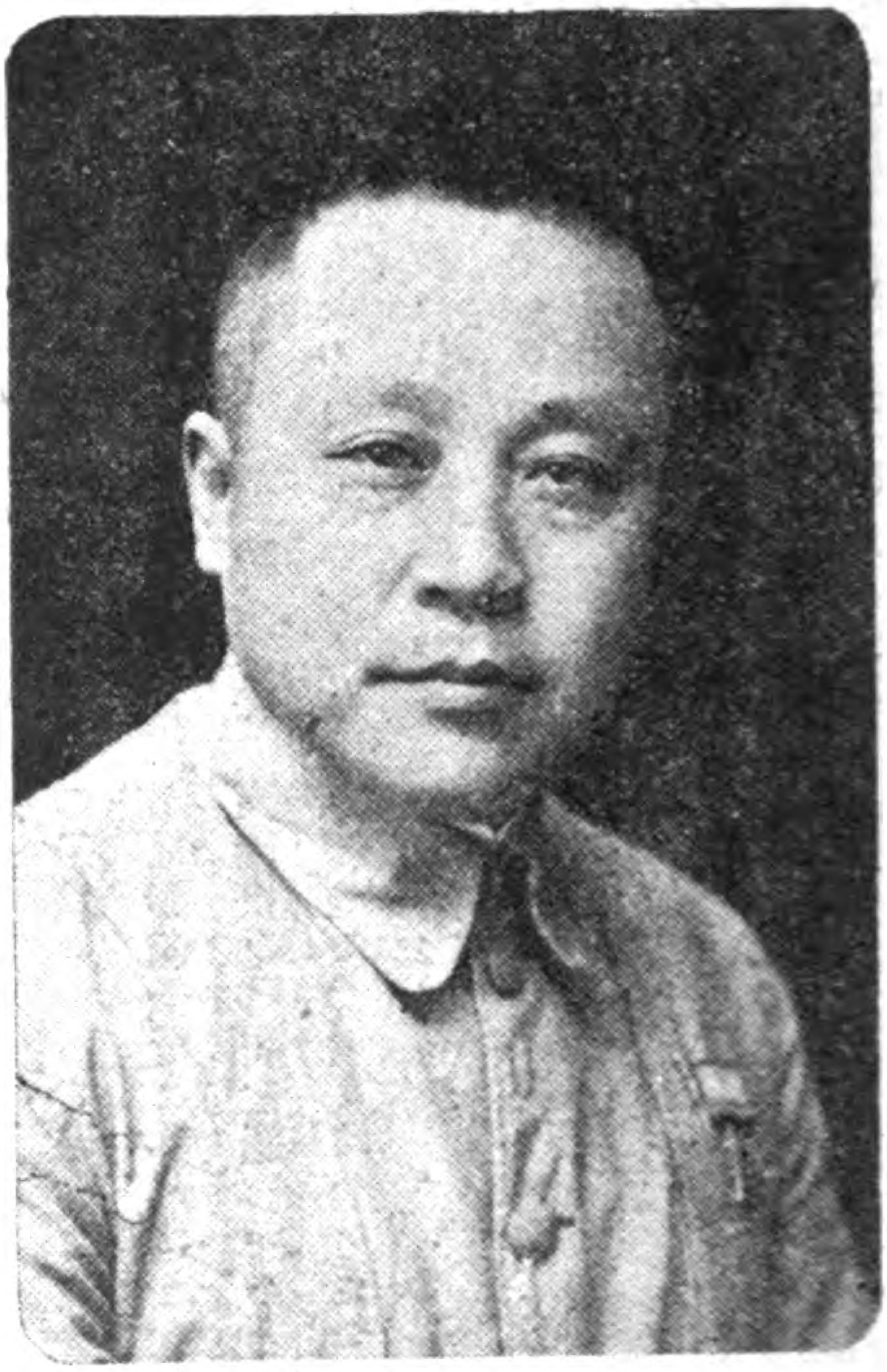
「私は陳方之さんに會ひに來たのです」と私が云ふと

「陳さんを御存じですか、では直ぐ呼んで來て上げませう」

と云つて大急ぎで應接間を出て行つたと思ふと間も無く入れ交りに陳博士が入つて來た。陳氏は小肥りの血色のいゝ柔和な容貌をした人である。矢張り薛氏と同じやうな服裝をしてゐる。東京の舊友の消息を傳へると陳氏は非常に喜んで、明晩自宅へ私達三人を晩餐に招き度いと云つた。

「戰時には隨分働きました。一人で十八の野戰病院を受け持つてゐたのですからね。今は軍醫の方は止めまして、今度此の役所が出來たんで薛さんのお手傳ひをしてゐるんですが、現在の國民政府には金が無いから何も仕事が出來ません。衛生といふことは法律を作つたり統計を取つたりする役所と異つて實際に金を投じて施設をやらんことには全く無意味ですからね、どうも是れには弱りますよ」

と陳さんは云ふ。其の日は忙しさうだから直ぐ辭去して、翌日約束の午后六時に私は陳氏の私宅を訪問した。其處は易家橋の豐八巷といふ閑靜な場所で、門の前に大きな石の唐獅子が二つ据へてある古い建物だつた。兵卒が張り番をしてゐて、名刺を出すと奥へ案内して呉れる。偏門、前廳、後堂といつた具合に建物は奥へ〳〵と並んでゐる。何處にも電燈が付いてゐないので眞つ暗だ。兵卒が私の手を引つ張つて連れてつて呉れる。三つ目か四つ目の棟へ行くと、正面の室から陳先生が蠟燭を持つて迎ひに出て呉れた。陳さんは今日は支那服で寛ろいでゐる。他の客はまだ來てゐない。台の上に燒き物の唐獅子を二つ向き合はせて置いてあつて、其の頭に百目蠟燭が一挺宛立てゝある。室内に電燈の設備はあるが點じてない。陳先生は反動的に古風を好んで殊更に燭を點じてゐるのかと思つて聞いて見ると、例の電燈不明の處へ此の邊は殊に邊鄙と來てゐるので全く用をなさない、やむを得ず蠟燭を立てゝゐるのだといふ。「暗くて氣持が惡いでせう」と云ふが私は反つて此の方が面白い。



陳醫學博士

其の室の正面には高い處に孫文の肖像を掲げ、其の眞下にやや小さい蔣介石の寫眞がかけてある。其の二つの肖像の左右の壁には小型の額が掲げてある。見ると右の方の額は學位記で、日本血吸蟲病の研究に關する論文提出により醫學博士の學位を授與する旨が記載され帝國大學の判が捺してある。左の方のは醫師開業免狀で内務大臣若槻禮次郎の判が捺されてゐる。

四方山の話をしてゐる處へ平井八田の二兒も來着して主客四人で食卓に就いた。陳氏の故郷は寧波である。それで今日の御馳走は大部分寧波の土産だつた。昔寧波にゐたことのある平井氏は、古い支那の女流革命家で、日本にも永くゐた秋瑾女史と、懇意であつて、秋瑾が紹興で捕へられて殺された當時の話などをした。私も寧波附近は一度旅行したことがあるので懷かしい氣持がした。其處へ少し遲れて又一人客が來た。此の人はまだ卅をいくらも出てゐない青年紳士で『余霖』といふ名前であつた。職業はやはり醫者だといふ。

「余君も今年學位をとりました」と陳さんが云つた。

余霖君は福岡の醫大を卒業して更に六年間大學病院で研究して今年學位をとつて國へ歸り、現在南京で開業してゐるのだといふ。今年卅二才で日本で暮した年限は十七年だといかふら日本人と區別はつかない。

「いかゞです、流行りますか」

「いや流行りません、南京の人はまだ日本の醫學のことを知りませんから、商品でも日本品よりは米國品の方が上等だから、矢張り醫學も美國（米）醫學博士の方が上等に違ひないといふ風に思つてゐますから私の處へは來ません」

さう云つて余霖氏は笑つてゐた。下婢が三つ位になる陳さんの子息を抱いて見せに來る。玉のやうな美しい兒である。陳さんは齡四十でこれがひとり兒だといふ。

愉快な時間を過したあとで私達が其の家を辭去つたのは九時頃だつた。主人は燭を執つて他の人達と一緒に私達を門外迄送つて出た。

南京の夜は更け渡つてゐる。

（斷り書き）

私は本誌へ三回に亘つて南京雜觀を書いた。

私の筆が餘りに通俗卑近の現象に即して現下の南京の生命たる政治的核心に觸れないことを批難する人もあるだらうが、觀察は、直ちに中心を剔出して縱横の解剖を試みるものと、低迷迂回して四邊の雰圍氣を描寫しつゝおのづから中心物體を彷彿せしむるものとある。私の場合は即ち後者であつて而も其の不成功たるや云ふまでもないが、か

かる市井雜事の描寫の或る一角から、現代支那の何物かを讀者が掴み得るならば幸甚である。

一由來支那の事は複雜で、一元的論評では盡されない。私が南京でロシア通の布施勝治氏に會つた時、ロシアは要するに赤と白だけの問題だが、支那には青もあれば黄もあり紫もある、と布施氏が云つたが事實さうである。

たとへば政治家に對する解釋でも、多くの人は右派だとか左派だとか中間派だとか云つて色別してゐるやうだが、さういふ概念的の見方は非常に不當である。成る程右傾もあり左傾もあるが、まだ他の問題が澤山ある。

例へば支那には强大なる秘密結社が存在する。青幫（チンパン）などといふのは全國に六十萬の同盟會員を有するといふ結社である。此の秘密結社が裏面に於て政治家を動かしてゐる力は想像以上に大きなものである。

共產黨員は現在約三萬あるといふ。秘密結社は、右にも左にも右傾にも左傾にも作用する。軍閥があり、財閥があり、土豪劣紳がある。對外關係を別にしても國內の事情だけでも非常に複雜である。

同じ樣に個人の思想も單一でない。だから政治現象を批評する場合に大體論は直ぐに出來るが、科學的に硏究するとなると關係する範圍が極めて廣くなつて來る。

かういふ意味から私は支那の社會事情硏究は最も必要な科目であることを痛感してゐる。今度の南京訪問は其の目的から云ふと未だ序の口であると思つて貰ひ度い。

日本雜誌興亡史話

千葉龜雄

曲亭馬琴（一七六七―一八四八年）の「兎園小說」を讀んで、これこそ「雜誌」の構成で行く出版物ではなからうかと思つた。雜誌としては、定期といふ重大な條件を缺いて居るにしてもが、一群の作家や學者が集まつて、かはり番こに、見聞した新事實や、社會現象に對する記錄を提出する。それを雜然と編輯する行き方である。馬琴のことだから、或は粉本を支那から採つたのかも知れぬ。それとも獨創であつたのか。明治期の雜誌が、歐洲から暗示を得たものであることは云ふまでもない。尾佐竹博士は、慶應三年十月に第一號を出した「西洋雜誌」の由來について「此雜誌出板の意は、西洋諸國月々出板マガゼインの如く、廣く天下の奇說を集めて、耳目を新にせんが爲なれば、法學科は勿論、百の技藝に至るまで、世の益となるべき事の譯說、宜く加入すべきものあらば吝惜なく寄贈し玉へ」といふ、第一號卷末の主旨を揭げ、「マガゼイン」は、「マカヂーン」の和蘭讀みであると說明して居る。なほ尾佐竹氏は、「明治の初期にありては、新聞と雜誌との區別無く、「新聞雜誌」と名づくる定期刊行物のあつた位ゐであるが、その前、最も早く雜誌の名稱を冠し、また內容をも雜誌としての、自覺の下に發行せられたのは「西洋雜誌」である」と言ふけれども、新聞雜誌の創世紀は、どこの國でも、新聞と雜誌の區別が判然してないものらしい。不定期刊行であること。數頁を綴ぢ合した半書籍の體裁であること。

が、しかし、明治新文化の立て前から、雜誌の價値を數へる人々は、何と云つても、「明六雜誌」を先頭に置く。「明六雜誌」は、名の示す如く、明治六年に起り、五十二歲の阪谷素と、三十歲の箕作麟祥の間に、四十前後の當時の知識層の新人十四氏

を含み、これ等の人々の學説や意見を掲げた、それがそれ故く、も每號平均三千二百五部も賣れたといふから、大したものである。この雜誌の顔觸れを見ると、大抵英學に親しみを持つた學徒である。思想の傾向なり、史實の引用なり、また實證的な哲學、道德的情調の偏よりでも、まづ英國的だ。雜誌に對する觀念も、やはり英國雜誌を理想としたのであらう。それなら、世界の典型的な雜誌國といはれる英國が、始めて月刊雜誌らしいものが現はれたのは何時か、といふにそれは、一六九一年に發刊された「紳士雜誌(ゼントルマンス・ヂャアナル)」だと云はれる。日本では、將軍綱吉の元祿九年、慶應三年を距ること百七十六年前である。「紳士雜誌」は、ペイタア・モツトオの創立であつたがあまり成功しなかつた。その後にエドワアド・ケイヴが、別の名で「紳士雜誌」を再刊して、これは百五十七年間續いた。一體「紳士雜誌」に限らず、英國の雜誌は、長い年代に亙つて續刊されるが、弟子である日本の雜誌は、ひどく短命である。明治新文化の前哨線に立つた「明六雜誌」でさへ、三年目の九月には、もう四十三號で廢刊して居る。統計によれば、明治十年末の新聞雜誌數百五十六種であるものが、明治四十年には二千三百種、大正十年には、有保證金新聞紙六百五種、雜誌一千七百五十一種であり、十二年には、有無保證金新聞雜誌を合して四千五百九十二種とまで飛躍した。が、さて來る[illegible]ことに[illegible]なくなら、四十餘年前、明治二十二年まで發刊し、千種内外の雜誌目録を一轉して、今日まで殘つて居る雜誌は一つも無い。宮武外骨氏は、明治元年から二十二年間において、既調未調の雜誌類二千五百種に近いと云つて居る。雜誌の短命と變化は驚くに値ひする。また雜誌に經驗深い某氏は、昨今の日本の雜誌の壽命は、ほゞ十年で推移すると云つた。テムポとリズムの急調な現代である。或ひは一面の眞理でないとも云へない、が、その逆理もまた眞理である、現代われ等の觸目する雜誌百種を數へて來ると、二十餘年から十年餘に亙る雜誌も、五六種はある。たゞ昨月起つて二三月、一年程度で沒落する數量に比べたなら、それはとても問題にならない。三宅雪嶺博士は、いつも英國雜誌の恒久性を揚げて、日本の雜誌の短命を說くのであるが、なるほど英國の歴史ある雜誌とても、近代資本主義の壓力で、惜しい生滅の悩みを嘗めつゝあるが、日本よりはもつと壽命が長い。英國民の尙古性と保守氣分が、そう仕向けるわけのものでもあらうか。我國民には歴史の寂びがかゝつて居ることが、その新聞雜誌を輝かす、何等のつつかい棒にもならない。それに日本現代の雜誌は、英國式の質實な編輯法よりも、米國式の華やかな行き方を採つて來て居る。刺戟や、色彩や、時代性や、大衆趣味やに

迎合するけばけばしい編輯術は、どちらかといへば新聞に近づいて來た。刺戟が刺戟である限り、絶えず刺戟の量を加へるか、質を變へるかせねばならない。また、たまたま獨創的な樣式を持つて來ても、直ぐ他雜誌に模倣されるから、新奇性の濃度が忽ちの中に稀薄になる。此間を縫つて、大衆を把握しつゞけるには並大抵の氣苦勞では出來ない。また、わが國でも廿年前までの雜誌は、現代の雜誌に比べて、高級でもあり、知識的でもあつた。あの時代は、雜誌を主宰する人々が、時代に選ばれた知識階級であつた。讀者はそれによつて導かれた。現代の文化と教育の進展は、讀者そのものの知識を高めて、必ずしも雜誌にリイドされるに及ばない。それが讀者を分解さした。過去にあつては、讀者が、雜誌から知識そのものを、在るがまゝに求めた。現代では、知識の材料を雜誌に求める。個人新聞が成り立たぬやうに、個人を焦點とする雜誌も解消されて了ふ。雜誌は文字通り雜誌であり、出來るだけ手廣く、材料を集め、どの趣味にも合ふ公設市場であればよい。それだけ、高級なものが低下されて行くことにもならう。だから全體の行き方が、大衆向きになるのはどうともし得ないにしても、それが、高級な知識的な雜誌が、むやみに低下してよいといふ理由にはならぬ。英米ほどにも高級な雜誌が、それ等を離れて超然と存在し、また存在し得るやうな狀態に置かれてこそ、わが國の雜誌文化はもつと有望な世界に置かれるであらう。

我國雜誌の開祖である「西洋雜誌」同「新塾月誌」の內容は、歐米の科學的發明や、歐米國家の盛衰、史實などの譯載で滿たされて居る。「明六雜誌」になつて始めて「或は事理を論じ、或は異聞を談じ、一は以て學業を研磨」する。思想と批判の雜誌までに進出して居る。英國最初の月刊雜誌「紳士雜誌」は、「散文もしくは韻文の、雜多奇書を集めて、一般の誦讀に供しやう」としたものであり、持主のケイヴは、詩の懸賞を始めた。題は、生と死、神の審判、天國、地獄などをいふので、最高の懸賞金額が五十磅であつた。この「紳士雜誌」は、ジョンスン博士の主宰によつて、當時唯一に賣れた月刊雜誌であつたが、それを模倣した「ロンドン雜誌」が現はれて、物凄い白兵戰を演じた。多數のエッセイ雜誌が、それを機緣として現はれて、英國式雜誌の風潮がそこに築き上げられた。云はゞ「明六雜誌」は、そのエッセイ雜誌の型を追ふたものであらう。他方それ等多數の英國雜誌が、後から來た米國雜誌と手を連ねて、自國の有數な少壯文學家のために、特別に自由な登場を許して、文學界に偉大な貢獻を捧げた。この事績は、後年の日本の雜誌

と對照することによつて、さらに意義の多いことを認めるであらう。

自分が覺めて始めて目に觸れた雜誌は、何と云つても「頴才新誌」である。「頴才新誌」は、まだ自分の生れない明治十年に發刊された。菊版二倍「官報」大で、全國に亙つて、少年の文章の投書を募集して居た。外に、毛筆畫も採つて居た。明治末年まで榮えた投書雜誌のこれが恐らく祖先であらう。眞似するものが多く起つたが、あまり成功しなかつた。野村文夫の「團團珍聞」と、成島柳北の「花月新誌」も、明治十年に創刊された。「花月新誌」の方は忘れたが、「團々珍聞」の、あの銅版らしい、和蘭人のやうな服裝の三人男の表紙は、今でも忘れない。田口半舫や、小林淸親が畫いたといふ、奇拔で超越的な諷刺畫がまた幼稚で、露骨ではあつたが痛快だつた。政府に對する手いたい罵倒と諷刺には、當局もひどく手古ずつたらしい。民權、官員、權妻なんて目新らしい用語が一行每に出る。私が、官僚政府に對する民衆の鬪志を、少年ながらに深刻に敎へ込まれたのはこの雜誌である。この團々社から「驥尾團子」が出て、明治十六年まで續いたが、これも「團々珍聞」の骨法を行つたもののやうに記憶する。少年雜誌「少年園」が出たのは、明治廿一年であるが、これは少年雜誌として、恐らく[illegible]ものであつた。主宰者の山縣悌三郎氏は、[illegible]に當る。敎育家として「理科仙郷」の著述もあり、型を西洋の少年雜誌から採つたものであらう。讀み物、考へ物、科學知識をうまく配合した。森鷗外氏も、「リツプ・ヴン・ウインクル」や、「黑衣僧」などの飜譯を載せて居る。これは、後年、福澤一太郎氏が、「時事新報」から出した初期の「少年」と共に、少年雜誌としては、二つの典型的な存在であらう。二十二年に「小國民」が、石井研堂氏の手から出たが、この方は興味と敎訓を巧みに盛り、素材は、重に日本と支那に採つた。口繪に、柄音、永洗、桂舟などの、極彩色の歷史畫を採り入れたり、投書も、「頴才新誌」からは一歩進んだ、自在な題材を擇ぶ創意でも、隙といふものが無かつた。出版元の學齡館で、「出版界の大王」と自慢したが、自慢するだけのものはあつた。ずつと後から博文館の「幼年雜誌」が出て、「少國民」は衰へた。「幼年雜誌」が投稿に懸賞したり、投書文壇何傑などを擇んだりした商略が、文學少年の功名心をひどく煽つたらしい。その兄分に同じ博文館から、「少年文集」、「筆戰場」が出て、多少の自信のある少青年には、なほ投書熱が病み附きになつた。今日までの文壇で、多少でも活字に緣のあつた人々は、一度か二度か、

書の經驗を持つであらう。吉野作造博士が松風琴といふ筆名で、いつも優等になつて居た。中村吉藏、片上伸の二氏が、きまつて小說の甲賞か乙賞を獲るのもひどく羨ましかつた。自分はまた、どうした譯だつたか、「教育報知」、「教育時論」を時々讀んだ。「教育時論」は、辻敬之が、明治十八年に起し、これは日本で、長く續いた雜誌で、出版元の開發社は、長く飯田町にあつた。原田實氏が主筆になつて、三四年前まで續いて居たが、今はあるかどうか。體裁でも、表紙でも、質實で、いつまでも變らないのを嬉しく思つた。博文館の「日本大宗論集」も、當時から見れば、創意に富んだ出版で、これで博文館の土台が出來たのも成る程と思はれる。大量生産の廉價販賣は、今日の出版政策等のやうに思はれるが、どうして、博文館の大橋佐平氏が、もう典型的な大量生産廉價法をその頃に發明したのだ、どこの地方へ行つてもきつと博文館出版の雜誌か、書籍かど無いことが無い。「日本の少年」も、すつきりした少年雜誌であつたが、博文館の雜誌としては、「太陽」、「文藝俱樂部」を別格として、「女學世界」が忘れられない。女學生といふものが出始めた頃、これほど女學生向きな雜誌は無かつた。一時は、博文館の雜誌中でも、唯一ぐらゐの賣高の頃もあつたらしい。今日の婦人雜誌には、一寸この程度の雜誌の無いのが淋しい。西澤之助が、東久世伯を擔いで居た「女鑑」は、貴族的で、日本主義を鼓吹し、表紙でも、體裁でも上品で、中層階級以上には、よく讀まれた。嚴本善治氏の「女學雜誌」は、それ等とは全く型違ひであつた。藝術的で、出世間的で、すぐれた飜譯や、詩心に漲つた散文が多かつた。若松賤子夫人の光つた飜譯も載つて居たし、嚴本氏の匂の高い一家言には、たまらなく心を惹かれた。後では、青柳有美氏が、月經の講釋や、露骨な性生理などを連載して、我等少年を面喰はしたものだが、今では、やはり先覺者だと敬服する。「女學世界」についで、高信峽水氏の編輯した頃の「婦人世界」が、今の「婦女界」や「主婦之友」の出來る前での、最高の賣れ高を占め、また編輯の技巧でも、與へるところの多いものであつた。村井絃齋氏や小杉天外氏の小說、それに絃齋一家の衛生談があつて、一層「婦人世界」をポピュラアにした。

『「國民之友」生れたり』といふ一句を、村の教員達が何かにつけて話して居た。小學生徒であつた私も、德富蘇峰といふ文章家の名をそこで始めて知つた。長短の章句を自由に嵌み込んで、躍るやうに若い印象につきこんで來るマコオレイ張りの淸新な文體は、誰もみな文句無しに醉はされた。「國民之友」は最後ま

て見當のたが、新年小説附録の成長の記は、新進作家の華新しい登場者であつた。鏡花の「一葉」「一あの道」を讀み了つた事の一夜が、まだ今のやうに目前にある。宮崎三昧の「亡妻を悼む」だの、蘆花の「水鄕の秋」だの、判明的な讀み物がどんなに多く提供されたか。八面樓宮崎湖處子、内田不知庵の論壇も待ち設けられる一つだつた。これに日本のカアライルと云はれた内村鑑三の熱罵も。「日本人」も、大きな蜻蛉のついた表紙の「亞細亞」以來の愛讀雜誌であつた。「日本人」は、後で「日本及日本人」と變つた。田口鼎軒博士の「日本經濟雜誌」、帝大の「東洋學藝雜誌」などと、みんな比較的壽命の長い雜誌であつたが、「學藝雜誌」はその後大正かに「學藝」と變り、それも間もなく廢刊した。田口博士の「史海」は、歴史好きの自分にはたまらない讀み物であつた。新らしい史眼に照された炯拔な斷論が、たとへ獨斷であり、批難が多かつたにしても、彼れの透明な解釋だけは貧乏ゆるぎもせぬ重味をもつて居た。同じ獨斷でも、愛山氏の「獨立評論」のは、材料が雜駁で批判が手に餘るやうなのに比べて、明快さが一段とすつきりして居た。高橋五郎氏の「出版月評」にはすつかり捲かれた。あらゆる部門の著述を、氏が一人で片つ端から嚴正批評し、どんな專門だらうと人見知りをしない。みんな堂々と――眞實はどうでも――一派の若者をつけたら よくて八宗兼學といふ看板を下げた と同意語にしたものだが、こんな雜誌を見たことがない。これは四年ばかり續いたらう。忘れたが「日本人」の卷末に、きちんと一頁づつのゴシップ欄があつた。たしか「雜觀雜話」といつたが、記述が峻辣なのと、人事を廣く知つて居るので評判になつた。これは香川快庵の執筆で、これなどは、今日のゴシップの原祖であらう。その外宗教では、杉村縱橫氏高島米峰氏等の「新佛教」、杉村氏が誰れかを批評して、「彼はホメット也、「マ」のぬけたマホメット也」といふ斷片語を覺えて居る。昔からの楚人冠だ。高島平三郎氏の「兒童心理」、山形東根氏の「社會學雜誌」(?)、これも毎號愛讀した。山形東根氏は、外に瀧川三軒の名で、「丁酉倫理會雜誌」に今でも執筆するが、氏の讀書力と、時代に先だつ透察では今でも敬服して居る。

ごたごた書いて居るときりが無い。「文藝俱樂部」と「新小說」は、日本の文學史に偉大な足跡を印した二大文學雜誌だ。どちらも初號から愛讀したが、「新小說」には、二期ある。前の「新小說」は、金港堂の「都の花」と對抗し、「新小說」は、歌舞伎に對する築地劇場と云つた格だ。鷗外の「破茶碗」なども、たしか「新小說」に載つた。セピヤ色の石版畫の表紙が淸

新なものに思へた。美妙の「花車」、嵯峨の屋の「初戀」などは、みた「都の花」で讀んだし、藤本藤陰の「藪だゝみ」が思ひきつた場景を採つたものと思つたら、間もなく發賣禁止になつた。發賣禁止、風俗壞亂の存在をこゝで知つたわけだ。後の「新小説」は幸田露伴氏が主筆で、水谷不倒の「さび刀」が第一號だつたらう。柳浪の「河内屋」、風葉の「龜甲鶴」などは、その頃の文壇を鳴らしたものであつた。「文藝倶樂部」の永洗、桂舟の木版口繪に對して、「新小説」が、アートペイパアの三色版の口繪を使つたのもハイカラである。「都の花」の前には「小説華錦」や「百花園」がある。「百花園」は、たしか落語家講談師の人情講談を集めて居た。歸化人ブラックの探偵物をこれで初めて讀んだやうに思ふ。「早稻田文學」は、あの紫色の表紙の中期までが黄金時代である。「月史」ともいふべき、その月月の、創作や詩歌の細密な彙報は、この雜誌が創意で、それがどれほど時代に役立つたか知れぬ。「柵草紙」からかけて「めざまし草」に延長する鷗外の活動はそれとして、帝國大學は、「帝國文學」があつて、始めて官學派の、明治大正文壇における地位を確實に占領した。けれども、有數な赤門創作品の多數が、「帝國文學」より以外の方面からのみ出現したのは皮肉である。「太陽」も、改めて第一號から讀み返すと、創作でも、論文でも、常識的であり、兩端れのみに苦心した跡がある。やはり博文館式を離れぬが、それでも當時の民衆教育には、相當な價値を擧げたであらう。「帝國文學」の上田博士が西片町に棲み、「太陽」の高山樗牛氏が東片町に居た。上田氏が有名な夫人と、高山氏が愛犬をつれて、夏の夕暮などに、街路を倘佯する後影を眺めて、それぞれの文致を味はつたりした。「太陽」の初期の創作で、鏡花の「取舵」、眉山の「書記官」、一葉の「ゆく雲」は、當時青年作品として並べられた三作家の特彩を想はせるものが無いでもなかつた。古いところでは「文學界」の、藤村、天知、透谷、孤蝶、禿木等の高踏派群が、自然美の禮讃や、人生の悲觀に、強い傷感性を吹き込んでくれた印銘も深い。「新著月刊」は、島村抱月の「月暈日誌」や、魯庵の「暮の二十八日」など、思ひもかけない方面からの傑作で、ほのかな追想をそそる。今日の「芝居見たまゝ」を、竹越三叉氏の「世界の日本」が先鞭をつけて居たのも愉快である。「反省雜誌」が、「中央公論」に延長して、小説で飛躍したり、清澤滿之の「精神界」が、浩々洞同人の機關として、佛教界に一味の清風を送つたり、「青年文」が、奇才田岡嶺雲の熱罵で、文壇の大御所紅葉を怒らしたり、回想を手繰ればきりがつかない。かくて雜誌は起り、雜誌はほろび、それぞれに文化の使命を果して、またその使命を次代に讓つて行く。それにつけても、精細な日本雜誌史の著述がもう一部二部あつてももう遲くはない時だ。

軍閥の中に蠢く人々

伊藤金次郎

陸海軍を一瞥して

軍閥といへば、明治、大正の日本を通じて、殆んど、別個の城寨を構へて來たものだが、しかし、昭和の今日は、世界を通じての軍備縮少、海軍制限——厭戰亦た厭戰、武人が、社會的勢力において、甚だしい凋落を見せつゝあることは、疑ひのないところである。

だが、人に鬪志あり、國際生存競爭意識がなくならぬ限り、兵隊が、源平の武者繪みたいに五月人形の飾りものとしか、活用せられない時代が、來るものとは、まさか、考へられないが、何れにしても、軍閥は、躍らんとしても、今や、漸く、その潮時を得てゐないことに、事實である、

海軍大臣岡田大將ですら、その第五十六議會で、

「財政計畫については、私は、わかりませんから、大藏大臣が、引き受けてくれましたから……」云々と、口を辷らして、識者の嘲笑を買つたりした。その無氣力と他力本願。

これ、たまく軍閥的氣魄の凋衰を、一岡田をして、體現せしめたものではなかうか。

陸軍と海軍とを通じて、藩閥的內紛が、著るしく、その影を淡からしめて居ることは、人の知るところだが、これと同時に、對社會を前に「軍閥」そのものですら、既に、確固とした凝結體が、見受けられないほどである。

「時は、流れた」といふものであらうか。

學校政策としてのスポーツマン養成是非

□ 林癸未夫

學校が運動競技を宣傳したり、運動會の會計が極めてルーズであつたり、選手を餘り酷使して研學の餘暇を與へなかつたり、某々大學の野球部が物質的好餌を以て中等學校選手を誘引したりするやうな弊害は是非とも矯正しなければならぬが、併しスポーツの盛んなことは學生全體の志氣を鼓舞し、活氣を盛ならしめ、不健全な思想や享樂に耽ることを防止する效果は確にあるから、スポーツマンの養成そのものを排斥することは當を得ない。要は教育本來の目的と兩立し得る程度と方法とに於て實行すべきである。

□ 倉橋惣三

何の場合でも、ファンは其の道を發展させると共に、俗化させる危險のあるものでも

「時」は流れた

そのむかし、鵜崎鷺城學人なるもの、「薩の海軍、長の陸軍」一篇をものして、藩閥的軍閥に、甚だしい嫌忌の情を寄せたものだつた。藩閥の城塞に據つて、劍光帽影、嫌として四邊の塵を拂つてゐたところの、藩閥武人に對して、心魂に徹する巨彈であつたに違ひない。

だが、時代は、暗遷默移する。——いつ、長の陸軍が衰へ、いつ、薩の海軍が、その影をひそめたといふではなしに、今、あらためて、おもむろに、四邊をかへりみると、もう、そこには、往年、鷺城學人を怒らしめたほどの、藩閥的跳梁はない。

こゝろみに、長閥陸軍の寵兒、田中義一を見るがいゝ。桂公や寺内伯のむかしだつたら現職の陸軍武人として、政界に自由獨往し得たであらうけれど、時代は、つひに、かれをして、丸腰を要求し、しかも、丸腰になつてまでも、かれは、政權掌握に便利な政黨首領を欲したではないか。

それから、薩の海軍は、如何であらうか。大佐時代から、霞ヶ關の海軍省要路に蟠居し、早くも、權兵衛大臣を謳はれて來たところの、山本權兵衛にしたところで、看板こそ、薩州海軍の長老であれ、その實勢力においては、なんら見るに足るものなく、全く、東郷平八郎と共に、生ける一個の銅像にしかすぎないではないか。

當年の俊才、財部彪だつて、今では、多くいふに足りず、長州陸軍にしたところで、田中義一以後 花々しくも、將來の日本陸軍を双肩に荷ふに足りるだけの、氣魄をすら、持つといひ得るものゝ一寸、見當らない有樣ではないか。

おもふに、現今、陸海軍首腦部は、陸の參謀總長は、越後の鈴木莊六であり、海の軍令部長は、越前の加藤寛治であり、陸軍の行政長官は、伊豫の白川義則であり、海軍の行政長官は越前の岡田啓介である。そこで、今のところ、陸海軍、いづれの要路を見るも、甚だしく、薩長藩閥的空氣を稀薄ならしめて來

る。ファンに引きづられたり、呑まれたり、酔はされたりする主客顛倒は充分の警戒を要する。況んや學生スポーツマンの場合に於てをやである。從つてスポーツを獎勵する學校の當事者にとつても、細心の注意がたえず此點に拂はれなければならぬ。選手の尊重が其人達のスポーツマンシップの尊重以外、何ものであつても、何ものにもなつてもならない。

□　福田雅之助

スポーツが段々盛んになつて來た。誠に結構な事である。學校としてスポーツ方面に理解と努力を拂はれることは望ましい事である。然しスポーツマンを學校が養成する必要はない。相當な設備を與へた後には學生の自治に任し度い。スポーツマンはコートの上やグラウンド及フキルドの上のみのスポーツマンでなく、一個の人間として立つて欲しい。社會もスポーツマンを人間として見て欲しい。徒にスポーツの華々しさに目をくらましてはならない。

Sportsman means good fellow,
sound hearted he, to the center.

流れる——割合に適當だ。人事は、ところ
らでも進出する。私共は、いつまでも、薩といへば海軍を、長といへば、陸軍をといふ、過去の迷夢から覺醒して、あまねく、人材を、超黨派的に物色し、これらをして、「大きの日本へ」の進出を、待望し、且つ、その擁護と助力とを惜しんではならないとおもふ。

軍人の「花」時代

陸軍でも、海軍でもだが、軍人が寄り集まつたよた話しの末に、「將軍になつちや、モウ駄目だ。働き盛りは、佐官時代なんだよ」——といふ、言葉をわれ／＼は、よく耳にする。軍人、誰しも、將軍を志し、あはよくば、元帥棒をたづさへることをすら夢想するであらうにも拘はらず、佐官時代に、軍人生活の妙味を感得し、そこに、軍人の「花」としての重點を置くゆゑんのものは、本場所の力士同樣、「星」を稼ぐ軍人としては、一寸、珍らしい現象である

ない。

即ち、佐官時代は、たいてい、四十前後のところであり、頭腦の活動力からいつても、同志糾合の點からいつても、ちやうど、佐官時代が、恐らく、軍人としての「花」だといふにあるのだ。

山岳でいへば、中腹から七合目あたりのところ、下を見れば、尉官クラスの後輩が、山の高さも知らず、うよ／＼と夢中になつて蠢動してをる。仰げば、頂上を極めて、最早や下山の外に途のない將軍クラスが、實を結んだ果實の如く、その年齡においても、又た、軍人の階級においても、最後の總決算時に低徊顧望してをる。腹八分目といふ言葉があるが、八分目の腹を、常に保持することが、健康の妙諦ならば、矢張り、佐官どころが、軍人の花なのかも知れない。

しかし、別の見方をすれば、「花」の佐官時代が、軍人として、最も、大切な時とも云ひ

□ **平林初之輔**

一年を通じての試合數、選手の練習時間等に適度な制限を加へれば大して弊害はあるまい。學生のスポーツ熱は大體私は歡迎する。各校の運動部員の間に正當な方法で多少の爭奪の行はれることも仕方があるまい。無論學校當局が爭奪の渦中に少しでも加はることはいけない。選手の成績に手心を加へる必要も更にない。その内に職業スポーツマンができれば學生の方はうまくゆくだらうと思ふ。

□ **横戸信**

知育を過重し體育に冷淡なる現代の教育界にありては少しく脫線してもよいから、根こそぎスポーツを奬勵し度いものです。その結果として選手制度が生れ、競爭意識が盛んになるにつれて選手の爭奪は止むを得ぬかも知れません。私は或る程度までこの運動を是認するものです。また選手なるが故に學費を給

得られる。將軍となつて、みごと、實を結ぶか軍縮の餘波を受けて、現役を叩き込まれてしまふか。七分三分のかね合ひといふところであらう。即ち、尉官どころで、現役を叩き込まれたとしたところで、よし、青年訓練所の教官や、中學校の體操の先生にならぬまでも、他に、方向轉換が出來るだらうけれど、佐官――それも、將軍クラスを目の前にした佐官どころで、首になつたと來ては、軍人としての「變則人格形成」ずみのことだから、今更ら、他に方向を轉ずるにはあまりに、個性が邪魔になることでもあり、かた〲、佐官になつたら、一路邁進、將軍クラスへの進出に、努力するの外はないのである。

おもへば、平和時代の軍人も、丘に上つた河童同様、生存苦中の最たるものであらねばならぬ。

佐官で躓くもの

むかし、尾張から出た太田三次郎は、海軍大佐まで累進したが、薩摩海軍の跳梁に屈服し得ずして、盛んにこれに弾づいたゝめ、早くも、部内を逐はれたものだつた。さうして海軍刷新會をつくつたり、文筆に多少の心得があつたゝめ、イプセンの「人民の敵」なぞを譯したりしてゐたが、末路不振、同郷の八代六郎が、薩摩海軍に拮抗しつゝも、大將となり、華族に列せられ、樞密顧問官として、實を結んだのに比し、甚だ、蕭條たる人生の決算を見せたものだつた。

伊豫の水野廣德は、文筆をよくすること、所詮素人藝を出でなかつたところの、太田大佐の比ではないが、餘藝、身を亡ぼすとでもいふのか、その「軍人心理」の一篇、時の海相加藤友三郎の忌むところとなつて、現役軍人と緣を切つてしまつた。去つたのは、水野自身であつたにしたところで、動機は、まさに、かれの部內存在を、氣まづくさせた海軍當局者の雰圍氣に端を發してをる。水野も、太田同様、時に海軍大佐であつた。

「海の日本」一篇を公開して、海國日本のために氣を吐いた壽部洋六は、國防論にかけて

與され、甚だしきは貧しき家庭へ仕送りが出來る人もあるさうですが、それもよいではありませんか。若しかう云ふ人々が選手になれなかつたならば、高等の教育も受けられず、貧の爲め心がねぢけて不良青年の群に入るかも知れません。唯戒しむべきは學生の本分を忘れぬことです。學校を卒業してスパイクやバットから別れる時、一かどの社會人として立ち得る用意は肝腎でしやう。

□

藤森成吉

ブルジョアスポーツ奬勵の動機の一つが、青年學生の思想を社會科學研究その他に向はしめない爲めの、方向轉換及び欺瞞にある事は、すでに叫ばれて來た事です。此の意味に於ける「學校政策」及び「スポーツマン養成」に對して我々はあくまでも抗爭する者です。

□

內ケ崎作三郎

私は早稲田大學角力部長を創立以來今日までやつてゐます。その間學校政策のために有力なる選手をとりこんだことはありません。

は憲兵軍曹、一時、第二世村山國之のやうに期待せられたものだけれど、不幸、海軍中佐にして、病殁してしまつた。たしか、大佐に名譽進級して、喪を發せられたと記憶してをるが、いづれにしても、太田といひ、水野といひ、寺部といひ、軍人の「花」である佐官クラスで、或ひは死殁し、或ひは、生きながらにして、現役を去つたんでは、當人は、もとよりのこと、世間が、多少、かれ等に期待したゞけ、それだけ、痛惜千萬と申したい。

しかし、以上、列記したのは、ホンの一小部分にすぎない。軍人を志したもの、たれしも、將軍となると定められてゐない以上、峠を仰いで、空しく中道に挫するもの、いくらもある。いや、むしろ、峠に辿りつくものよりも、中道で挫折するものゝ方が、はるかに多い。その幾層倍であるかも知れない。

觀じ來たると「佐官時代が花ぢや」と、これに憧憬し、まるで、將軍になつたことを、老骨の第一歩に踏み入つたかの如き口吻を弄しはするけれど、將軍になつたものは、矢張り、それだけ、えらいといはねばならぬ。

海軍を見詰めて

ところで、軍人としての佐官時代が花ならば、その花の佐官時代中、早くも、花の中の花と謳はれ、今や、漸く、結實期に入らうとしてをるものに、少しく、海軍部内に通ずるものなら、たれしも肯定するところだが、小林躋造、大角岑生、野村吉三郎、山梨勝之進等が、かぞへられてをる。共に、若い／＼といつても、海軍中將なのである。したがつて「次ぎの時代の海軍」を背負ふ人といつたところで、そウ、それは、目睫の間に差し迫つてをるところだ。しかも、次ぎの海軍を負擔する光榮ある以上の人物は、小林が廣島、大角が愛知、野村が和歌山、山梨が宮城――地理的分布を考察する時、あまりに、藩州のにほひの遠いことに、時代變遷の感を深ふせしめられるであらう。

さて、四人の將軍中、最も先輩であるのは大角であるが、かれは、明治三十年十月、少

しかし部員が支人中の有望なるものを個人的に援助して早大に入學せしめ、從て當部員になつたものはあります。この位のことなら大して非難すべき事と考へません。

〔一〕　　市川源三

スポーツマンの養成は一利あつて百害があります。これに異論を挾むものはありません。しかし學校の教育よろしきを得ば、スポーツマンは自然に發生します。自然の發生は寧ろ歡迎すべきもので、排斥すべきものではありません。これを抑壓しては何處に教育が成り立ちませう。かゝる次第で、私は、故意に、人爲的に養成するのを思ひ止まるだけにして置きたいと思ひます。

□　　湯原元一

私は斷然否認致します。その譯は

第一、あんな事は各學校の間に封建割據の舊思想を復活させ

第二、實懷先從の眞人格の成立をさまたげ

第三、生徒を學校の名譽の犧牲にして教育

尉候補生となり、翌年の四月を以て少尉任官大正九年十二月、少將に累進して、所謂、將軍となり、十三年十二月、中將に進級したのだから、本年の十二月における定期進級異動には、多分、大將となるであらう。ツイ、先達つてまで、海軍次官をやつてゐたが、今は第二艦隊司令長官とし、久しぶりで、海上勤務の潮風に吹かれてをる。その肌合ひは、閩外から出でて、圭角を包んだ後天性のたまものか、それとも、尾張人氣質の風土性であるのか、兎に角、軍人ばなれのした圓轉滑脱家で、同鄕の先輩八代六郎の直情徑行とは、似ても似つかぬ人と成りを持つてをる。けだし長い間、齋藤實の下に、高級副官をやつてゐた關係上見やう見まねに、齋藤の物やはらかなタイプに感化せしめられたものかも知れない。

同期には、山本權兵衞の愛婿山本英輔と、大谷幸四郎の兩中將があるが、前者は、橫須賀鎭守府司令長官、後者は、吳鎭守府の司令長官なのだから、畢竟三十一年任官組の三花形として、それ〳〵現代及び近き將來の海軍に羽翼を張りもし、又た、張らんとするものである。だが、等しく、武人であつても、所謂、戰爭屋と行政家とがある。私が、近き將來の海軍擔任者として、大角に指を屈したゆゑんのものは、要するに、かれの軍政家としての才腕と器局を認識したからに外ならない。今に、大角の海相時代到來して、尾張海軍の生んだ二代目の海相となり、八代以後の尾張武門のために氣を吐くことであらう。

山本英輔も俊才だ。かれが、練習艦隊を率ゐて、ケマル・パシヤ執政下のトルコを訪問した時の態度は、一世の梟雄ケマル・パシヤを前に、日東海軍を代表して、毫も、恥づるなきまでに、氣宇の廣大を見せたものだつたといふ。おもふに、同じく權兵衞の愛婿でも、財部彪が、漸く、薹の立つて來た今日權兵衞を中心とする薩州の海軍閥は、かれを以て、財部第二世とし、せめて、潰滅に瀕せんとする薩摩海軍の頽勢を盛りかへさんものと莎みてをるかは知らぬけれど、前にもしば

からその獨立性をうばひ去り

第四、從つて競技が競技慾をみたす爲の競技でなく、他の何等かの目的の爲に御用をつとめるものになつて仕舞ひ

第五、そして其の結果、終に選手をその所屬學校の持馬同樣に墮落させる恐れがあるからです。

以上

□

加藤勘十

私共の如き學校生活の經驗なきものにとつては、運動競技の學生に與へる心理的、生理的影響について論ずる資格を有しませんが、近時の『スポーツ熱勃興に伴ふ各學校の競爭』なる現象を社會現象の一つとして觀ますするならば、之は明かなる學校經營の資本主義化の表現に外ならないと思ひます。宗敎、藝術、法律等々あらゆる精神的文化が經濟組織の上臺の上に咲いた花であります以上、是等のものを營業化する學校經營が、利潤追求のために諸多の企圖を試みることは當然であります。從つて學校のスポーツマン養成は、其の本質に於いて學校經營の隆盛、卽ち利潤追求

〳〵いふとほり、政婦は流れたのだ。花崎一閥の力を以てして、これに拮抗すべくもなく、今更ら、權兵衛の愛婿云々を喋々し、軍に、それだけで、いゝ兒にならうとする考へは、所謂、十日の菊、六日の菖蒲であり、證文の出しおくれみたいに、世の嘲笑を買ふまでのことだらう。

大角や、英輔等よりも、一年おくれて少尉任官したものでは、山梨勝之進の外、飯田延太郎(佐世保鎭守府司令長官)と鳥巣玉樹(舞鶴要港部司令官)等の中將が、殘存してをるだけである。山梨も、大角同樣、圓轉滑脫、どこにも東北人らしい武骨さを見出し得ない。第一次のワシントン軍縮會議に、死んだ加藤友三郎の隨員として赴いて、數字的基礎材料を調べ上げて、遺憾なく事務的才腕を發揮したものだつた。

東北の生んだ海軍武人といへば、岩手縣の栃内曾次郎や、山形縣の上泉德彌みたいに、せめて、外貌だけでも、豪毅卓落らしく思はれるけれど、かれは、外貌も、性格も、商事會社の番頭さんみたいに、そのやはらかな手くだ。だから、「將軍」といふ文字から來る觀念とは、極めて、縁遠い憾みこそあれ、もしすべての生物が、纖細なラインと、尖鋭な感覺とを持つことを運命づけられ、それが、直ちに、近代型といひ得るなれば、わが山梨の如きは、近代型の武人といつていゝであらう。

だから、今後、かれにして、海相たるべき日が來て、議會の質問應答の衝に當るとしたところで、往年、西郷從道が、議會で、一議員から、國費多端の際、軍艦をなにによつて造らんとするかと問はれ、平然として

「軍艦は、鋼鐵を以て造り、その使命は、戰爭するにあります」――と、いつたやうな、ヌーボーな應酬を、かれに期待するわけには參らない。山梨は、どこまでも、近代型の武人として、二と一では三であるといふに違ひない。そこに、かれをして、こゝまで榮進せしめた數學的凡ての根據と、存在理由とがある。

の一手段であることしか思はれませんが、さればこそ學問に從さされて、今學校でスポーツマン養成に熱中することに、我が主我的存在としての自己の存在のために已むを得ないことと存じます。

□

新居格

スポーツ熱が勃興するその餘弊として一種の職業的傾向は止むをえません。今に職業選手と云ふものがアメリカのやうにどつさり出來て、それで飯の立派に食へるものが澤山出來ませう。

學校が特にスポーツマンを養成しやうと云ふ必要はない。

私は學校とか學問とかをあんまり重大には考へない。學校や學生がどうならうが、どうでもいゝと思つてゐます。スポーツマン養成學校があつてもムキに反對はしませんが、そんなことを力を入れてやることも可笑しいと思ひます。なるものならどうなつても仕方がないが、原則として養成するに及ばず。

小林と野村

世上、將來の海軍を云々するもの、必ず、小林と野村の對立を聯想せしめられる。それほど、二人は、部内に傑出した二異彩である。即ち、前者は、軍政に堪能にして海軍大臣、後者は、軍令に明達にして軍令部長——しかも、この叫び聲は、かれらの大佐時代から、異口同音に提唱せしれて來たものであつた。共に、三十三年の少尉任官で、將軍になつたのも、中將に突進しだのも、なんの因果か、同年同期なのである。

おまけに、兩者の宿緣は、ひとり、そればかりか、小林が、加藤友三郎の高級副官をやめると、そのアト釜が、野村であり、野村がワシントン會議に、友三郎に隨伴して、高等策戰に參劃して功を立つるや、小林はゼネーヴの第二軍縮會議に齋藤全權を輔佐して、即かば、錚々と鳴るところの、中國人タイプを見せて、ピリツトしたから味を、列强の前に甞めさせせたものだつた。

更に、宿緣は、兩者を驅つて、小林が練習艦隊司令官をやめて、陸上勤務となるや軍令部次長だつた野村は、新たに海上勤務となつて、小林のアト釜——即ち、練習艦隊の司令官となつたものだ。こゝで、小林が、もしも陸上勤務と共に、軍令部次長にでもなれば、人生流轉史に、更に、一段と妙味を見せたわけだが、かれは、前にもいふとほり、軍政系統の事務に堪能であるため、今や、艦政本部長の榮位に座し、他日の飛躍にそなへてをるのである。

小林は、人も知るとほり、加藤友三郎の甥である。だから、えらいといふわけではないが加藤死してのち、けだし、廣島海軍の代表者たらんほどのものは、今のところ、かれをおいて他には無く、封建のむかし、海上防備、水軍の充實につとめたといふ藝州藩の出身者としては、まことに、そのところを得た進出と見ていゝであらう。

野村は紀州の產——紀州は由來藩祖頼宣にしても、天一坊にしても、紀の國文左衞門に

□　**加能作次郎**

各學校で選手養成上激烈な競爭をしてゐることは事實だらうと思ふ。これは各種スポーツの對校競技が行はれ、而もそれがスポーツ界の興味の中心となつてゐる現狀に於ては止むを得ない現象だと、私は一應之を認める者である。併しそれが爲めに、若し選手自身に職業的傾向を誘致し、各學校當局間に選手爭奪の醜聞を生みつゝありとの事實があるとすれば、これは大に歎くべく且つ大にその非を鳴らすべきだと思ふ。選手自身自ら優秀なる選手たらんと努め、學園自身が運動競技を奬勵し優秀な選手の養成に力を致すのは素より結構だが、それは飽くまで學生としての本分及び學園としての本分を忘れない範圍に於てやつて貰ひたいと思ふ。

□　**針重敬喜**

學校政策としてのスポーツといふものがありとすればそれは私立學校だけの事でせう、其私立學校も始めスポーツを奬勵した動機は

しても、陸奥宗光にしても、岡崎邦輔にしても、前田米藏にしても、目から鼻へ抜けるやうな尖鋭犀利な頭腦の持ちぬしが多いのであるが、野村は大學に入らなくとも、それぐらゐのことは……と、少壯、豪語して、あそこまでうだつを上げて、來たゞけあり、頭腦の明晰な點では、恐らく部内屈指の男で、この點、前述した故人今人の誰れ彼れと似てをること、いふまでもない。

たゞし、かれには、外貌のヌーボーなためか、決して、尖鋭とか、犀利とかといふ感じを起さしめないだけのアトモスファエアがある。況んや、邦輔や宗光みたいに、カミソリ的感觸は、くすりにしたくも見受けられない。ツマリ、それだけ、器局が大きいともいひ得るし、武人として、先天的にめぐまれた素質ともいひ得るであらう。

紀州武人には、さきに、有馬良橘大將あり日露戰爭の閉塞隊長として、勇名、今に鳴る。だが、一介の武辨にして、要するに、戰爭屋であつた。今、かれの後繼者として、紀州武人を双肩に負擔する野村吉三郎には、組織的頭腦の持ちぬしとして、單に、船板一枚下は、地獄だといふ海上勤務だけしか、使用の出來ぬほど部門の狹い男ではない。

おもふに、どちらから見ても、「大ぎの海軍」を舞臺とし、小林とは、好個の取組みである。

陸軍を見詰めて

さて、陸軍部内を物色するに、長の陸軍は衰へたけれど、薩の陸軍が、今も尚ほ、暗々裡に勢力を張らんとしつゝありと、反藩閥的少壯武官中、これを指彈するものがある。

薩州陸軍の本尊は、いふまでもなく、元帥上原勇作であるが、かれは、藩閥的根性において比較的恬淡だとはいふものゝ、現役時代の田中義一等を假想敵國とすることにおいて知らず〱子分等から、薩州陸軍の守り本尊に昇ぎ上げられてしまつたものだらう。

現に、軍事參議官田中國重大將が、臺灣軍司令官であつた頃、畏けれど、故久邇宮下殿

政策としてゞはなくて一般民衆の爲に乃至體育の點を考へて研究し實行して來たのが始まりだと信じます。それが大事に隆盛となり、ゲームの勝敗や選手の活躍などが世間の視聽を集めるに至つて、或る學校當事者や經營者が之れを利用して政策化して來たのです。しかしスポーツは何時迄もスポーツ自身の爲めに奉仕するべきであつて、他の意味に利用されては困ります。スポーツマンも此意味で養成せらるべきで政策の爲めなどは斷じていけません。

□

三島章道

スポーツそのものは誠に大切のことゝ思ひますが、このごろ少々あまりに職業化されたやうな氣がして、それと學校教育と考へ及ぼす時、どんなものかと思はれる點が多々あるやうに思ひます。犧牲者を出すのだと云へばそれまでゝすが、もつと學校が「教育場」だと云ふことを考へて、又「平等」と云ふことを考へて、出來るだけ多くの人が共にスポーツをたのしむやう、只單に見物したり應援したりにとゞまらず實際に參加出來得るものを

に對し奉り、不逞事件が發生したにも拘はらず、かれは首も飛ばなかつたし、世間に顏見せの出來ないほど、軍部當局者から、叱責せられたことを聞かない。これ、卽ち、背後に上原元帥の在るあり、薩州陸軍の寵兒だから今も尙ほ、軍事參議官の榮職に座するものに外ならないといはれてをる。

それから、田中大將の後任として、臺灣に赴いた軍司令官菱刈隆中將も、薩州の秘藏ッ兒であるが、かれの將來は、戰略戰術に不得手でもあり、比較的敎育方面に堪能であるから、上原の庇護を受け、或ひは、敎育本部の方面に進出してくるかも知れない。その他、若いところで、上原の禿頭裡に、その將來を期待せられてをる薩州武人、必ずしも少ないわけではないが、これと拮抗する長州陸軍は前にもいふとほり、田中の現役退陣以後、偶然にも、著るしく衰頽的勢力の影を淡からしめてしまつた。何しろ、菅野尙一がやめて、田中の後繼者が無くなつて、今では、航空本部長の井上幾太郞、技術本部長の吉田豐彥、第九師團長永井來等が、目立つくらひのもので軍部の內外に、その大成を期待せられた淺野一輔中將は、近衞師團長で死んでしまうし、「元」帥まで「成」るんだといふので、親の命名してくれた菊太郞の幼名を打ち棄てゝ、「成元」と自ら名乘つた大井大將も、長岡外史等の轍を踏んで、長閥の本流から外れて、今は、再び起つとも思はれない。

論じ來たれば、長閥陸軍の現狀、山縣、桂寺內、長谷川等の時めいた往年の盛時とくらぶべくもない。

巨然として、陸軍部內に頭角を拔く上原元帥が、なにかにつけて、話頭にのぼるのももつとも千萬なことだ。

今、陸軍を代表するもの

要するに、今の陸軍は、岡山の宇垣一成、越後の鈴木莊六、伊豫の白川義則の三巨頭時代だといはれてをる。

しかも、三人共、同期の任官であるが、鈴木は、變則的敎育を受けて、年少の頃、師範

獎勵するやうにしたらどんなものか。それからスポーツの尊いところは單に肉體的の點や技術のみではない。それは半分であつてあと半分はスポーツマンスピリット——スポーツマンシップが尊いのだと思ふ。それをどうも凡て忘れがちであると思ふ。學校としてこゝを敎育し生徒全體にこの精神を及ぼすやうもつと敎育方針をむけねばらそだと思ひます。

□ 小林愛雄

學生生徒が身心の鍛練を計ることは結構であり、任意にスポーツの一種を選んで健實なスポーツマンたるべく努力することにも贊成であるが、スポーツの興行化、選手爭奪戰の如きは排除せねばならぬ。スポーツを學校の看板にするやうな事はもう今日ではないと信ずるが、學業を棄ててスポーツに走る者の今もあることは遺憾である。それらの點及びスポーツの種類、時期、時間、試合回數等については學校當事者が注意を拂つて適當に監督すべきは勿論、各校協議の上スポーツの本旨を徹底せしめたいと思ふ。

校の教鞭を執つてゐたりしてゐたゝめ、同期は同期でも、宇垣燿よりも、遙かに年長者である。したがつて早くも、來年は、現役大將の定年に達するわけであるが、かれ引退に伴ふ後任參謀總長は、今のところ、宇垣一成の外あるまいとのことだ。

宇垣は、加藤高明内閣や、若槻内閣の陸相をやり、政治趣味を幾分解して來て、やゝもすれば、田中義一の眞似をやらうとする傾向があるが。そウ、軍人宰相の時代でもあるまい。それに、利害の打算に長じた岡山縣人のかれのことだ。眼前に田中の不首尾を見せつけられては、まさか丸腰になつてまで、政界に沒入する迂愚をやらないであらう。したがつて、軍人で押し通せば、次代の參謀總長といふところだらう。

陸軍の岡山閥は、石川閥、佐賀閥と共に、輕々に看過出來ないが、その巨頭宇垣一成、東京警備隊司令官の岸本鹿太郎等、同郷人を庇護引援するばかりか、郷黨を超越して、若いところを盛んに吸引せんとしつゝある。おもふに、宇垣は、今のところ、陸軍部内屈指の野心家と見ていゝであらう。

藩閥を超越して、多少話題にのぼるところを見ると、佐賀の村岡長太郎中將も、かつて陸相候補と見なされてゐたものだが、關東軍司令官として、例の滿洲某重大事件を惹起し一寸、その進路にけちがついたやうだ。しかし、そこは軍閥者流のことだ。世評の思わくなぞ眼中におかず、いつ、どう、うだつを上げてくるかも知れない。

用兵の大家は、朝鮮軍司令官の金谷範三大將だ。田中國重大將と同様、昭和三年八月を以て、大將に親任せられた部内の新參大將である。まだ、多少の將來を有してをるであらう。

元帥論

最後に帥元論を一言するが、世上、やゝもすると、田中義一にして政界に沒入せず、サーベルを棄てざりせば、或ひは、元帥府に列せられたかも知れんといふけれど、元帥は實

□ **横井春野**

選手爭奪の弊は段々とつのつてゆくやうである。これは是非一掃しなければならない。學校政策からスポーツマン養成を如何見てゐるかと申すに

(一)學校の宣傳になる。
(二)學生の墮落を防ぎうる。全校の士氣を鼓舞することが出來る。
(三)スポーツに依つて德育體育を行つてゆくことが出來る。

私は、スポーツは全校生に及ばさねばならないと同時に、一方に於て選手を養成してゆくことが肝要であると信じてゐる。

□ **沼田藤次**

與へられた問題は、おもに野球または蹴球選手のことだらうと思はれますから、その範圍で卑見を述べます。

學校政策と言へば語弊がありますから、それは姑く問はないとしても、現今のやうにリーグ戰が重きに置かれる以上、選手爭奪はや

戰の殊勳者のみのあづかる光榮なのである。觀兵式の諸兵式官にしかすぎない田中が、元帥になつてたまるものか。

かく、觀じ來たると、現代の將軍中、戰爭でもない限り、元帥府に列せられる光榮家は一寸、見當らない。しかし、支那ではあるまいし、元帥は、軍部最高の權威であらねばならぬ。一寸、見當らないくらひのところが、かへつて、その權威を權威あらしめるものである。

今の元帥は、皇族は、しばらく別とし、陸海軍を見ると、陸軍には、奧と上原、海軍には、井上と東郷——共に、實戰の殊勳から云つても、貫祿からいつても、まづは、元帥らしい元帥といつていゝ。

しかも、その上原にしたところで、慾をいへば、日露戰爭に際し、しうと野津大將の參謀長であつたにすぎない。これを、黑木大將が、黑木軍の司令官として、滿洲の荒野に殊勳を立てたにも拘はらず、元帥府に列せられず、かへつて、その麾下の師團長長谷川好道が、後年、元帥となつたことを、かれこれ思へば、第三者をして、そこに、多少の疑惑を生ましむるものがある。

矢張り、閥族の跳梁を云々せざるを得ない。

だが、時代は、軍部の軍人であることを、最早や、許さない。軍閥の城寨に據つて、部外の窺窬を許さずといふ積年の態度は、今では、モウ、つわものどもの夢のあとだ。

陸軍と海軍も、國民の總意を基調とし、その認識を背景とした跳躍でなければ、眞の跳躍ではない。——四、三、五、陸軍記念日を前にして——。

むを得ないことでせう。そして又、春秋のリーグ戰は、國民體育の普及ばかりでなく、それ以外の興味も加はつてをりますから、現今の狀勢では、スポーツマンをもつと廣い見地から見なければなりますまい。單に體育上からのみこれを見れば、スポーツマンの養成には學生の本分を超えた點や、矯正すべき弊害もあることでせう。併しこれとても、あまり嚴しく咎め立てをする譯に行きませんから、今後はむしろ職業チームの現出を促して、學生は學生としてのスポーツマンシップを保たしめるやうに注意しては如何でせうか。

□　出井盛之

今日の學生の健康狀態は、ジムネジアム（體育館）よりもサナトリウム（療養院）の建設を必要としてゐる位です。この場合、體育本位のスポーツを奬勵することは、最も歡迎すべきです。スポーツの流行に伴ふ弊害を指摘するよりも、むしろ、學校とは知識詰込みの場所であるといふやうな觀念を打破することが先づ大切です。

内分泌物語

高田義一郎

一、内分泌とホルモン

人類の肉體を構成して居るものゝ中に、肉月に泉といふ字を書いて「せん」と讀まして居る腺の附くものが澤山ある。それは例へば涙腺、唾液腺、汗腺或は攝護腺等の如きもので、涙、唾液即ちつばき或は汗等の樣に、一定の役目のある液體を、直接或は間接に身體外に分泌することを、その役目として居るのである。然るにその構造を見ると、確に一種の腺に相違ないにも拘はらず、液體を分泌すべき通路としての管を持つて居ないものが、亦少からず存在して居て、之等は久しく醫學上の謎であつた。即ちその謎の主の名を尋ねて見ると、曰く松果腺、曰く甲狀腺、曰く胸腺、曰く扁桃腺等を始めとし、導管の無い關係から、「腺」といふ名稱すら與へられない面々には、曰く大腦下垂體、曰く副腎、曰く卵巢、曰く睾丸、等、實に多士濟々なのである。

所が一八一四年の事であつた。ドイツ、ゲッチンゲン大學教授ベルトホールドが、何かの都合から雄鷄の睾丸を取去つた所が、その雄鷄は男性の標徵としての鷄冠が少くなつたり、美しい羽の光澤が惡くなつたりして來ることが、著しく目に付いたので、それが偶然の現象か、それとも睾丸剔出手術の結果であるかを知りたくなつて、その雄鷄の皮膚の下へ、他の鷄の睾丸を取つて縫付けて置いた所が、彼はその後、再び舊の如く羽の色も美しく、鷄冠も大きくなつて、勇ましく晨を告げる樣になつたのである。之に依つて兎も角も雄鷄の雄鷄たる所以は、睾丸の存在するが爲であるといふ事實が、實驗的に證明されたのであつて、液體を分泌すべき導管を持つて居ないけれども、睾

丸は伊達に存在して居るのでないといふ事と共に、朧ろ氣ながらも睪丸も亦何かの分泌を司るのであらうといふ推定の端緒が與へられたのである。而してそれから二十餘年を經て、フランスの學者、クラウド・ベルナルドに依つて、之に內分泌といふ言葉が加へられ、且つ之はその腺の分泌物が、身體外に出ずに、身體の內部に送出され、血液と共に全身を循環して、一種の化學的作用をするのであらうと說明されることになつた。

それから又歲月が流れて、一八八九年の六月一日に同じくフランスの碩學、ブラウンセカールが、自分の肉體、しかも七十二歲の老軀を、此の實驗の材料に供して、睪丸のエキスを注射することに依つて、心身共に若返るといふ事實を、首都パリーの生物學會に報告するに及んで、內分泌學說は頓に勃興の機運に向つたのである。その後英國の學者、スターリング等に依つて、此の內分泌物に對してホルモン（Hormone）の稱呼が與へられたが、之はギリシヤ語のオルマオから採つた言葉で、刺戟をする物といふ意味なのである。

近年、此のホルモン學說は非常に、廣く深く研究が進められて、導管を有して居る腺、例へば膵臟にも一種の內分泌機能があることを證せられたり、內分泌腺の機能に故障が起れば、それが爲に特種の疾病が起ること、例へばバセドー氏病と呼ばれて、眼球が兎の樣に強く前方へ突出し、心臟の鼓動が激しくなる症狀は、甲狀腺の腫れ上る時に限つて起るし、アヂソン氏病と呼ばれる、皮膚の色が眞つ黑に變化する症狀が、副腎に結核性の變化がある時に度々起る等、副腎の作用と關係が深い、それから又膵臟の剔出手術をした場合に、糖尿病が起つたり、甲狀腺の作用が減退した時に、粘液水腫と稱して智能の低下する疾病が起つたりすることがわかつて來た。

或は又此の內分泌腺の爲に、或る特定の體質の生ずることがわかつた、即ち甲狀腺の機能が高まれば、身長が高く、身體が細長い神經質の人間になるが、若し反對にその機能が減退すれば、人は丈の低い、脂肪過多の感受性の鈍いものとなる、大腦下垂體の機能が高まれば、骨の太い、手足の末端の大きい人間になるし、その機能が低下すれば、身體の發育が止つて、侏儒の樣な不具者となる、それから胸腺といふものは、普通は幼年期のみにあつて、年頃になると同時に、非常に小さく萎縮してしまふものであるが、之が若しも普通よりも早く萎縮すれば、生殖機能が早熟するし、反對に長く殘つて居れば、生殖力に乏しい小兒の姿に止つて居る等を、その一例と見るがいゝ。

倘ほ此の研究の賜物として、內分泌腺の中から、その有効物質を取出して、藥用に供せられる樣にもなつた。即ち大腦下垂

體の後葉からピツイツリンがとれ、甲狀腺からチレオイチンが取れ、膵臓からインシユリンが取れたり、副腎の皮質からアドレナリンが取れたりする樣になつて、インシユリンが、從來食物養生法以外に手のつけ樣のなかつた糖尿病によく効を奏したり、チレオイチンが粘液水腫に用ひられて、「馬鹿につける藥は無い」と古諺を裏切つていふ、此の特種の痴愚者を悧巧にしたりすることを、その一例とすることが出來る。

以下之等の關係に就て、もう少し詳細にその説明を加へやうと思ふ。

二、内分泌の研究方法

内分泌の作用を研究する方法は、右に述べたのに依つてわかる樣に、大體三種に區別せられる。即ちその一は内分泌腺に病變の起つた場合に、その症狀や變化を觀察することであるし、その二は内分泌腺を身體から手術して取除いた後に、續發する變狀を見ることである。之は人類に於ては、特殊の場合以外には出來ないが、動物に就て實驗することは、いくらでも出來る。それから第三は、第二と反對に故意に内分泌腺を身體に移植したり、或はそのホルモンを藥劑の形式で之に與へて、之が爲に起る變化を見ることであるから、之は前掲の如くいろ〳〵の應用製劑のある内分泌腺に就ては、殊にし易いのである。

此の第三の方法の一種に、パラビオーゼを應用すると面白い。パラビオーゼといふのは、一定の動物の身體を手術に依つて聯絡して、一定の別々に生きて居るものゝ、一方から、或る内分泌腺を取去つたり、或は又、一方にその内分泌腺を移植したりすることであるが、之に依つて、その動物に直接にそのホルモンを與へる場合と、全く同一の結果が得られるのである。

第一の方法は、結果は非常に著明であるけれども、内分泌腺に偶然に疾病の起る機會を待たなければならないから、急ぐ場合には用ひる機會が無いといふ欠點がある。

此の樣な研究の結果如何を、之から各内分泌腺個々の場合に就て、述べることにしやう。

三、睾丸と卵巣

ペルトホールドやブラウンセカール等が、夙に睾丸とそのホルモンに關して、内分泌學の基礎を作つたばかりでなく、睾丸と卵巣との内分泌作用は、内分泌の中に於ても、特に人の眼につく程、重要なものである。男が男らしく、女が女らしく、男女兩性の別が明であるのは、實に此の内分泌の結果なのであつて、未だその内分泌の始まらない幼少の時代には、男女の區別

が著しくないし、又已に卵巣の機能が減退して、月經の止んだ後の婆さんには、女性らしくないものが極めて多いことになる。「卵巣を持つが故に女性なり」といふ病理學の泰斗ルドルフ・ウイルヒョーの一語は、實に萬代不易の名言で、卵巣を剔出してその機能を止めたならば、花羞しい佳人も一朝にして無恥厚顔の代物と化してしまう筈なのである。

卵巣を剔出されて、所謂虚脱症狀を呈した例は少いけれども、睾丸を取られた例は、宗教上の關係等から極めて多いのであつて、舊教の寺院で哀調を帶びた讃美歌を歌はす爲に、子供の中に去勢される話は世間周知の事である。ロシアやルーマニア等に散在する宗教の一派で、スコプツエンと稱する者の中にも、五歳乃至十六歳の少年を去勢する風習があつて、去勢されたものは年が長じても、喉頭は化骨せず、聲も身體も子供の時のまゝであるといふ。支那の宦官も亦、此の種の異例として考へることが出來る。

しかし面白いのは動物實驗である。雄の動物から睾丸を剔出して、そのかはりに卵巣を移植すれば、雄を變じて雌とすることが出來るし、その反對に雌を變じて雄と化せしめることも出來る。故に若し之を人類に應用することが許されるならば、男の子がほしいのに女ばかり生れる家では、是非そんな手術がしてほしいといふ事になるであらう。

四、松　果　腺

松果腺はどんぐり大で、大腦の後聯合の上部、中央に位して、昔、哲學者のデカルトに依つて精神の存在する場所と考へられた歴史附の小體である。

鷄の若い中に、その松果腺を剔出すると、生殖腺の發育が著しくなつて、鷄冠が大きくなつたりするのみならず、動作の上にも性的現象を見せるが、此の關係は人類に於ても同樣である。即ち六七歳までの子供で、松果腺に腫物が出來ると、急に身體が發育して、就中生殖器に於て特に著明になる。即ち鬚が生え、聲帶は太くなり、恥毛が生じ、女子ならば乳房が大きくなつて來るが、之は腫物の爲に松果腺の內分泌が止る結果であつて、松果腺の內分泌には、幼少の間、睾丸や卵巣の作用を阻止する力があることがわかるのである。

春情夙發症と稱せられて、四、五歳にして已に成年者同樣の心身を有する異常兒童の例は、時々醫學會に報告せられたり、新聞の記事になつたりすることがあるが、それは大抵此の松果腺腫瘍に關係であつて、短い年月の中に死亡するものが多く、解剖の結果、その事實の立證せられるものも亦尠くないのであ

る。但し、實際にあまりに多くあるから、紙數の關係上、省くことにする。

五、大腦下垂體

大腦下垂體は、その名の如く大腦の底部に、視神經の交叉部の所から下垂して、土耳古（トルコ）鞍の上に栽つて居る豌豆（ゑんどう）大の小體で、前葉と後葉の二部に分れて居る。形態の關係から一名を漏斗（ろうと）體とも云つて、松果腺とは丁度、大腦の上下の兩極にあたる反對の位置を占めて居るが、單に位置が反對であるのみならず、その内分泌機能に於ても亦、松果腺と反對に生殖腺の作用が、强盛ならしめるものである。但し性的機能を强盛ならしめるのは、その後葉のホルモンに依るので、前葉の方は主として骨の發育を助成するから、之に依つて或は巨人となつたり、或は侏儒になつたりすることになる。そこで此のホルモン製劑も、後葉からはピツイツリンが取れるし、前葉の方から取れるものはアンツイツリンと呼ばれる別種のものである。

前葉と後葉との他に、中葉と、いふものがあつて、中葉の分泌液は後葉の淋巴隙（りんぱげき）から第三腦室に入り、それから腦脊髓液の中へ入ることが、トレンデンブルグ氏に依つて確定されたのは、未だ新しい千九百二十四年のことである。

而して此の中葉の部分が破壞される場合には、尿崩症といふ病氣が起るもの丶如くに考へられて居たが、之は間違いで、實は間腦（かんのう）に於ける水分代謝調節中樞（ちゆうすう）に損傷を受けた結果であると認められる樣になつて來た。

六、甲狀腺

甲狀腺は頸部の皮下にあるかなり大きなもので、之が腫れ上る病氣のバセドー氏病患者に於ては、外から盛り上つて居ることがよく見える位である。形は下が大きく、厚く、上部に向つて右葉と左葉と、圓錐形の中央部との三部に分れて居て、男に於ては割合に小いが、女に於ては比較的大きく、特に月經の時に膨大になるのである。又その大さは年齢との關係が多くて、壯年者は體重の千八百分の一位であるが、老年になると非常に小さくなるし、反對に幼年者には割合に大きくて、生れたての子供では體重の約四百分の一の重量を有してゐる。此の事實から推測することが出來る如く、甲狀腺は幼年時代に特に必要な機能をするものであつて、思春期以前にそれが犯される場合には、著しい病變が起つて來るのである。粘液水腫（ねんえきすいしゆ）と稱せられる病氣が、即ちそれである。而してそれと反對に、甲狀腺の機能の高まり過ぎる爲に起るのが、即ちバセドー氏病で、バセドー

氏病と粘液水腫とは病狀に於て、正反對の點が極めて多いので ある。但し兩病のことは、前に一言して居るから、玆に繰返さないことにする。

甲狀腺の肥大する病氣で、地方的に多いものにクレチニスムスといふのがある。古來アルプス山脈の附近に多くあつて、飲料水の關係から起るものと考へられて居たが、ヒマラヤ山脈の北斜面のチベツト地方にも之が多いことがわかり、又米國に於てはシカゴ市の附近から、ガリ、インヂアナ、ハーバー、ホワイチング、オウケガン等の地方に多いのである。所で此の「クレチン」といふ言葉は、フランス語の Chretien から來たもので、昔、ローマ人が異教徒を侮辱する時に用ひたさうであるが、研究の結果によれば、沃度の欠乏がその最大の原因であることになつて來たのは、一寸面白いではないか。

七、胸　腺

胸腺は胸骨上部の内側に在つて、胸骨の上端から少しく上に頭を出して居るから、丁度、前の甲狀腺の尻の下に、その頭頂邊(ちやうぺん)がある如く位置にある。形は不定で、年齡に從つて大小があるけれども、大體に於て中央部と右葉と左葉の三つに分けることが出來る。

胸腺の大さの、年齡に依る相違といふのは、重量に於ては十歳至十五歳に於て最大で約十五グラムに達するけれども、體重との比較上、最大の時期は生後、二歳乃至三歳の頃である。つまり幼少年の時代には、相當の大きさを有してその機能も盛んであるが、丁度思春期頃からは、急に退化し始めて壯年に至れば、殆どその影をひそめてしまふのが普通である。

所が往々にして、壯年に達しても尙ほ胸腺の大きい人もあるが、そういふ場合には生殖器の發育が完全である上に、心臟や血管、並に副腎の發育が非常に不良であつて、反對に淋巴腺の發育が著しく良いのである。尙ほ困ることには、此の如き人々は、普通の人々には何でもない樣な、一寸した事が原因となつて、不慮の死を招くことが屢々ある。

即ち例へば、外科手術の爲に麻醉劑をかけると、そのまゝ永久に麻醉から醒めずに死亡したり、チフスの豫防の爲の皮下注射や、黴毒治療の爲の血管内注射を受けた時に、その施術に欠陷が無く、その藥劑が惡くないにも拘らず、そのまゝ急に死亡してしまう樣なことになる。かういふ樣な人には、胸腺淋巴體質といふ特別の學名がつけられて居て、前揭の如き肉體上の變化は、いつもその死因探究の爲の、解剖の結果、明白になるのである。その變死の原因は未だ不明であるけれども、如上の異

質と密接な關係があることは、取立てゝいふまでもあるまい。而して胸腺のよく發育して居る時に、生殖器の發育の惡い事實と、幼少年時代に之があつて、思春期頃から退化する事實とは、又胸腺のホルモンに、睾丸や卵巢の機能を阻止する作用のあることを示して居るのである。

そんな有害無益な內分泌腺ならば、思春期以後に早く手術して取去るがよからうと思ふ人もあらう。しかし此の胸腺が大きいか小さいかは、平時に外部から診斷することも困難であるし、又診斷がついたとしても、胸骨の內側、即ち胸腔の內部にある爲に、手術が中々出來ないので、何とも致し方が無いのである。

八、副腎皮質

副腎は左右の腎臟の上部に密接に附着して居る扁平な小さい內分泌腺である。つまり左右の腹腔內に一つ宛存在するので、今までの諸內分泌腺が、中央に唯一個あつたのと、一寸様子が異つて居る。而して副腎は皮質と髓質との二部から成立して居るが、內分泌機能は主としてその皮質に依つて司られて居るので、髓質の方は、假令、無くても生命に別條の無いことが、動物試驗に依つて確められて居る、之が即ち副腎皮質といふ題目を掲出した所以である。

副腎のホルモンたるアドレナリンは、今から三十年程前に、高峰讓吉博士に依つて始めて純粹に取出されたもので、その主なる作用は、胃、腸、心臟或は血管壁等を形成して居る不隨意筋に分布して居る神經を興奮させることである。

副腎の內分泌と、密接の關係のあるアヂソン氏病は、一八五五年に英國の醫師トーマス・アヂソン氏に依つて、始めて記載された珍しい疾病で、皮膚の色が、全身、青銅色に變じ、一見銅像の如くなるのをその特長として居る。本病の場合には、副腎が著しく萎縮して居るけれども、之にアドレナリンを投藥しても、決して治癒しないで、遂に死んでしまうのである。

九、脾臟

脾臟は血液の製造所で、腹腔の左側上方に唯一つだけある小判形の、長徑約三寸位の內臟である。しかし之も何か內分泌を司るのではあるまいかと考へられる。

一〇、膵臟

膵臟は、十二指腸へ、輸膵管と並んで開口して居る導管を有する長徑一尺に近い細長い不規則な形の內臟で、その分泌液は

必ず消化の作用を司るものと考へられて居た。從て獨逸語では Bauchspeicheldrüse 即ち腹部唾液腺とも直譯すべき名稱を持つて居るのであるが、近年に至つて之が內分泌にも關係を有して居ることになつて來た。その內分泌は糖尿病の發生に關するもので、膵臟の實質からではなく、その中のラングハウス氏島といふ部分が、その本部である如く考へられる。而してその仕事をするものが、インシユリンといふホルモンであることは、旣に前にも云つた如くである。但し膵臟の分泌液パンクレアチンといふものが、消化作用に關係のあることは、否定出來ないので、つまり內外兩分泌兼任の姿なのである。

尙ほ原因不明で頓死するものを解剖して見ると、他に何一つ變狀が無くて、膵臟に出血が著しいことが往々あるが、之が內分泌と如何なる關係を有して居るかは未だ明白でない。

一一、扁桃腺

扁桃腺といふ名稱は、知らない人が無い位に名高いが、その機能は未だよくわかつて居ないもので、咽頭の兩側に扁桃の樣な形をして、謎の如くに並んで居る。しかし之が胸腺肥大の場合に、淋巴腺と同樣に大きかつたり、感冒その他の呼吸器病にかゝる場合には、先づ之が腫れ上つたりして、行動が甚だ不審であるのみならず、無くても別に故障が起らないといふ考から、米國等では無闇に之を剔出してしまうことが流行して居る樣である。しかし無闇に切取るがいゝか惡いか、之は尙ほ考慮する餘地が大にある樣に思はれるのである。

一二、其他の關係

以上の他にも尙ほ內分泌腺らしく思はれるものがある、例へば攝護腺の如きものがあるし、鼻腔內の下甲介も剔出した後に性慾の止ることが往々ある關係から、矢張り內分泌に關係がある如く考へる人もある。又肥滿した體質と內分泌との關係、氣質と內分泌との關係、犯罪と內分泌との關係、その他いろいろ興味のある問題も殘つては居るが、與へられた紙數も盡きたから、それ等は總て割愛して置く。唯々一言の必要のあるのは、便宜上、各內分泌腺の作用を個々獨立して居るもの〻如く書いたが、事實上、各腺の作用には互に密接な關係があつて、それが非常に複雜だといふことである。それは例へばバセドー氏病の場合に、甲狀腺と同時に胸腺が肥大して居たり、デルクム氏病の場合に、甲狀腺と松果腺とが肥大して居たり、或は生殖腺の作用に關しても、松果腺や胸腺等が之を抑制するに反して、大腦下垂體や副腎等が之を鼓舞する等の如く、到底、單獨に作用しないのであるが、之も一々說明をせずに、一言の注意のみに止めて置く。

五千萬長者根津嘉一郎

O・P・Q

一

金持ち喧嘩せずと云ふ諺を裏切る大金持ちが日本に少くとも一人はある。

五千萬長者根津嘉一郎こそはその唯一人である。その昔天下の三菱に喰つて掛り東武鐵道を乘取つた時は、何と云つても彼れ根津は一介の株成金、それも今から見れば極めて小さいものであつたから、この時代に於ける根津の喧嘩は、至極當り前のことであつたが、彼れはその後も、誰れ彼れの區別なく盛んに張り合ひ、數年前には東京電燈の經營について、三井の代表者藤原銀次郎を面罵し、同じく三菱を背景に東電の取締役となつて居た桐島像一とも衝突して、つひに三井、三菱、安田の所謂御三家をして東電より一時全く手を引かしむるに至つて、彼れの主張の善悪、人格識見の如何は別として、天下の大富豪が束になつて押し寄せてもびくともしない彼れの向ふ息の强さをば、財界では‖少くともその一部では‖大いに痛快がつて手をたゝいたものも少くなかつた。

その根津が國民新聞社の大株主となつて實權を握つたのである。一騒動なくしては收まらないわけであつた。果せるかな喧嘩は初まつた。才人蘇峰も四十年哺育して來た國民新聞社を自ら追ん出ざるを得なくなつたのも、蓋し免れ難き運命であつたらう。

二

根津は甲州の片田舍に生れた。その生家は近郷切つての豪農であつた、と彼れの周圍は稱して居る。永い間豆腐賣りの少年から、たゝき上げたと傳えられて居た野田卯太郎が、晩年には庄屋の息子になり濟まして居つたところから推して見ると、根津が豪農の二男坊であると云ふのも、少からず眉唾物であるが、さう云ふことはまあどうでもいゝ。

根津は今度喧嘩した德富蘇峰が「將來の日本」で賣り出し遙々熊本から上京して國民新聞をつくり上げた、その同じ明治二十三年に、甲州をあとに東京へ出て來て一仕事しやうと云ふことになつたわけで、當時彼れは年二十八、出て來たのも年齡も蘇峰と全然同じ同年であつたことは今から見れば何等かの奇緣であつた。

東京へ出て來た彼れは、先づ甲州系財閥のすべてが例外なく辿つて來たところの株の相場に手を染めたが、彼れは恰度相場道に適度の經驗を得た明治廿七年に日清戰爭の勃發に際會して、日本郵船の株を買ひ煽り、一方米相場でも當つて一擧にして八十五萬圓の富を

つくつたが、餘りに調子に乘り過ぎて戰後の反動では無一文になり、流石の彼れも北海道へ落延びて具さに辛酸を嘗めた。

再び東京に舞ひ戻つた根津は資力もなく、また株界にも大きな波紋が起らない時代とて、鞘取專門となつて小金を貯め、せつせと郵船株や鐵道株を買ひ集めて居たが、日露戰爭中から同戰直後の好況時代には、日清戰後の苦い經驗から彼れはどちらかと云へば株は賣方に廻つて居たので、明治四十年一月十八日から崩れ初めた戰後の反動では反つて、巨利を收めそれから四十二年までの相場師生活に於いて彼れこれ三百萬圓ばかりの產をつくつた。

この間彼れは同鄕の先輩たる若尾逸平のつくつた東京馬車鐵道會社、これは品川から淺草迄の大通りに敷設されて居たもので、後電車となり、更らに雨宮敬次郎の經營して居つたいまの市電青山線、新宿線、三田―日比谷―本鄕線等の所謂街鐵（市街鐵道會社）および外國人の資本を入れて成つて居つた外濠線飯田橋―赤坂見付―虎の門―土橋―神田橋―お茶の水の循環線）と合併して東京鐵道株式會社となり、つひに尾崎市長時代に市に買收されていまの市電となつたもの丶最初の幹線であるが、根津はこの會社に入つて色々策動し、自分の關係して居る東鐵の株を買占め賣り叩く等常に辛辣な遣り方をして居たが、明治四十一年いよ〳〵市が買收することになると、彼れは彼れ一流の怪腕を揮つて當時東京市のタマニー・ホールと云はれた常磐會の首領、政友會代議士、市會議員の森久保作藏を買收し、尾崎市長の懷刀にして當時の市助役たる田川大吉郎が、折角買收總價格六千萬圓と計上したものを、とう〳〵九千餘萬圓に買收せしめた。

この市會買收は根津が大いに自慢にして居るところだが、勿論これ丈の大仕事、しかも星亨以來訓練された海千山千の常磐會を根津一人で、操縱したとは思はれないが、それにしても彼れの傍若無人振りは、此頃からもう露骨に現はれて居つた。

三

いまでは全く沒落して、僅かに當年のプレステヂを止めて居るに過ぎない甲州系財閥なるものも、明治初年から大正のなかば、かの世界大戰の終り迄はなか〳〵隆々たるものであつたので、彼れ根津は若尾、小野等の先輩を賴つて色々の事業に關係を持つて居た。

東京電燈會社は前に述べた市街電車と共に甲州系財閥の代表的事業の一つであつたので、彼れは玆にも重役の椅子を占めて居たが、彼れの入社當時は資本金僅か百五十萬圓、電燈需要戶數七千と云ふ貧弱なものであつたのを、彼れは彼れ一流のネバリで社礎を固め、多少その存在を認められるやうになつた。そこで彼れは、今度はいよ〳〵東武鐵道の乘取り運動に勢力を集中した。東武鐵道は日清戰後財界が有頂天になつて居た時代の明治二十九年十月に生れたもので、三菱を中心に經營されて居たのであつたが業績大いに振はず、會社創立後五年を經て漸やく北千住龜戶間五哩の運轉を見た程の慘憺たるもので、株主も大いに不滿を感じて居た折柄とて、彼れは三菱系以外の大小株主を糾合して、今日

の所謂總合荒しをやり、明治三十八年にはつひに宿望は達せられて、三菱系重役の退社となり、玆に彼れは初めて自己の事業を持つに至つたのである。

好運なる彼れは日露戰後の好況時代に際會してこの東武の經營に大いに積極政策を行ひ、沿線の有力者を味方に引き入れて線路を延長また延長していまでは百八十餘哩の營業線と八十哩の計畫線を有し公稱資本金五千萬圓と云ふ私設鐵道中第一のものとなし、表面に現はれた同社の持株丈でも十四萬株に達して居る。

彼れの事業中東武鐵道に亞ぐものに日本麥酒鑛泉株式會社がある。この會社は今でこそ公稱資本金二千萬圓、拂込千四百萬圓で、一年間に麥酒百二十萬函、淸涼飲料水百五萬函と外に會社自身の使用する瓶二千五百萬本を生產する大會社であるが、そも〳〵の初めは尾張の半田に丸三麥酒株式會社として資本金六十萬圓で產聲をあげたもので創立は日淸戰爭直後の空景氣時代たる明治二十九年九月、東武鐵道より恰度一ヶ月前に出來たものであるが、當時設立された麥酒會社の簇出は麥酒の泡が消えるやうに惡くなつたので、馬越恭平を中心とする大合同が行はれていまの大日本麥酒會社が出來たりして整理時代に在つたのである。さう云ふ狀況で根津は網を張つて待つて居ると、この丸三麥酒がとう〳〵三十萬圓で彼れの網に掛つた。その後永い間加富登麥酒會社として經營して來たが折角彼れが株屋相當の緣起をかついで命名した『加富登』の名にも、一般の株屋や商人は共鳴して吳れず、『加富登を拔く』すなはちカブト麥酒を拔いて飮むことは『兜をぬぐ』となつて敗北を意味すると云ふので、一向賣れない。從つて根津得意の株式市場でもこの加富登ビール株の値が出ないので、剛情な彼れも衆寡敵せずと見て取つたか、遂ひに兜を脫いで、日本麥酒鑛泉會社とし、製品もユニオン・ビールと新し味のある名をつけて賣出し、兎も角も今日の成功をかち得た。

四

彼れの傘下に在る事業はさきの東武鐵道を初めとして、南武鐵道、高野鐵道、富士山鐵道、南朝鮮鐵道があり、外に東京地下鐵道、西武鐵道その他二三の鐵道の株を持つて重役に列し、また日本麥酒鑛泉の實權を握つて居る外、富國徵兵保險、日淸製粉の大株主、重役であり、方面違ひでは銀座の松屋や問題の國民新聞にまで手を擴げて居つて、その全資產は五千萬圓を下るまいと云はれて居り、少くとも今日までのところでは彼れの手を出したもので失敗したものは、東京米穀商品取引所の理事長位のものであらう。この時は例の社金五萬圓流用問題で彼れもほう〳〵の態で逃げ出したが、あとは前に擧げたものゝ外日淸製粉の株買占めでも何でもすべて彼れの意の儘になつて居る。

それもそのはずで彼れは常人の出來ないやうな高利貸的態度を取つて、たゝける丈たゝいて殆んど唯のやうにして引取るのだから、それで損をするわけがない。この叩けるだけ叩いて取ることが彼れのボロ會社經營、否な引受けの一つの秘訣である。

根津は會社の經營や株の賣買で金を儲ける

ばかりでなく、骨董でも少からぬ金儲けをして居る。

彼れは現代實業家に共通な道樂として茶の湯をやり、手垢のついた茶器をひねり廻して居るところ外間から見れば一ぱし一人前の茶人のやうであるが、彼れの茶道は彼れが已れの雅號を青山に住んで居るからと云ふので青山と號して居る單純さによつて知られるやうに、茶道でなく邪道である。

青山の根津の邸内には一軒の骨董屋が常住して居つて、彼れの爲め目利き値踏みをなし、彼れをして大規模の骨董商たらしめて居る。だから東京は素より遠く關西方面の骨董屋に至るまで、金に詰れば止むを得ず根津の門を叩いて、手持ちの骨董を質に入れるか、買ひ取つて貰ふかするが、この場合門を叩いた者が、根津の爲めにうんと叩かれることは云ふまでもない。

から云ふ遣り口だから骨董や刀劍で儲ける金丈でも少からぬもので、嘗つて神戸の金持であつた光村利藻と云ふ男はいまの藝術寫眞の元祖で、多分審美書院だと思ふがこれは光村の寫眞道樂から生れ今に遺つて居るものだが、藝術寫眞や、高級印刷の幼稚な時代に、世の中を知らないお坊つちやんの光村が金を湯水の如く費つたことゝて、忽ち父祖傳來の資産を傾け、最後に三十萬圓からの刀劍を處分しやうとした。しかし一口に何十萬圓と云ふ刀劍は、その時分誰も買人が無かつたので、弱り切つて根津の處へ持込んだら、根津は早速三十萬圓かを拋り出して買ひ取つた。この光村家の刀劍と云ふものは大變なもので、根津はあとで目釘やその他の飾りを處分した丈で立派に元を取り返し、中味は（今は百萬圓以上もしやう）唯になつたと云はれる程である。

五

根津の金儲けに鋭く且つ細かいことは、到底他人の追随を容さないものがある。

昭和二年の秋であつた。東武鐵道會社が社債一千萬圓を募つたが、その遣り口が面白い。東京は素より大阪や名古屋の銀行、信託會社、證券業者數十軒に對して社債入札の勧誘狀を出した。その手紙には社債總額は一千萬圓、條件は年六分の利息で、發行價格百圓につき百圓、すなはち玄人の云ふ所謂六分パーで、期限は十年とちやんと定めてある。それなら何を入札するかと云へば、それは手數料を幾らにするかと云ふ點丈である。つまり安い手數料で取扱ふものに一千萬圓の社債を取扱はしてやると云ふわけだつた。だから三菱と住友の兩銀行は「何を根津の奴め小癪な、幾ら金を遊ばして居ても貴様なんかに使つて貰ふものか」と云ふので返事も出さなかつたが、その外の銀行、信託會社及び證券會社は大競爭で中には有力な銀行や信託會社で、あの小穢い小柄の東武本社へお百度を踏んだものも少くなかつた。この入札は結局一番安く百圓につきたつた一圓十錢の手數料で引受けた山一證券に落ちたが、東武とは古くから緣故があり、特に大正十二年の震災の時に會社に資金の融通をして困つて居るところを助けてやつた三井銀行では最後までこの社債一千萬圓は當然自分のところへ來るものと思ひ込んで居て、あのスマートな三井がとあ

とで表はれたのである。かう云ふ風に根津は算盤以外には何者をも顧みない男である。

根津の關係事業の入札にはまだ〳〵面白いことがある。競争入札をする以上、最安値に落札するのが世間普通のことで、その反對のことをするのは、ボロを出した東海銀行位のものだが、根津の遣り口は一風變つて居る。

と云ふのは、彼れは入札價格の一番安い者に落すことは世間並みだ、それ丈ですまさず彼れはもう一度交渉をする。例へば鐵道なり工場なりの競争入札をすると、その入札者はセメントならセメント、鐵材なら鐵材に就いてそれ〳〵單價と、そしてすべてを合算した請負總額を計上する、さうすると根津は合計の一番安い者に札を落して置いて、今度は個々の材料を見積りについて、若し他に安いものがあるとその高い品物だけその安いものと同値にさせる、例を擧げて云へば甲はセメントを五萬圓と見、鐵材を七萬圓と見積り、乙はセメントも六萬圓、鐵材も六萬圓と見積つて居つて、そして甲が落札したと假定する、根津は甲に總額百萬圓で落して置いてさて改めて乙の見積りを見せ乙は甲より安く見積つて居る鐵材丈に六萬圓に敗けろと云ふ。だから根津の仕事を請負ふ方では、總計では他人より安くとも、一々の材料の單價が高かつたら、飛んでもない目に合ふので戰々兢々たるものがある。

六

併しこれ丈では根津は他の實業家とどこが違ふか？と云ふ疑問が起る。成程對手の弱つて居るその弱點につけ込んで、會社を二束三文に買ひ潰すのは慘酷には違ひないが、それなら日本の實業家で、いや世界の實業界にどこの國の何と云ふ人間が、困つて居る會社を特に高く買つてやる程慈悲の深かつた實例があるか？と反問したくなるかも知れない。市會議員の買收も惡いには相違ないが、大なり・小なり、また市會か、府縣會か、國會かの差はあつても何等かの形ちで買收しない者が果して幾人あるであらうかと云ふことにならう。

ところが實際根津には普通人と違ふところ・がある。それは彼れが土地思惑で儲けることである。彼れが鐵道の計畫をすると鐵道停車場附近の土地を前以て買つて置く、これも大抵の連中がやることだが、彼れのはそれが思ひ切つて露骨であり、且つ大規模である。曾つて創立委員長までして居た湘南電鐵のごとき、儲ける丈は儲けて置いてしかも株の方もプレミアムのついたところで、さつさと賣り逃げてしまつて、いまでは一株も持つて居ない。

また彼れが三百五十萬圓も寄附したと、稱して居る武藏高等學校と云ふ七年制の高等學校でも、いまでは附近の廣大な地所の値上りで彼れは反つて儲けて居ると云はれて居る。

また大正十五年の秋、日清製粉と日本製粉との合併談が進められた時の如き彼れは大いに株を買ひ占めて儲けたが、數日後突如として日本製粉株が崩れ出して來たので不思議だと思つて居たら、あとで兩社の合併談不調が判つて來たが、當事者さへハッキリ知らない時に日本製粉の株を賣り叩いたのは兩社の仲に立つて裁定役をやつて居つた、根津の仕事

だつたことはあとで知れた。

また土地の思惑で臭い話は先年頭山滿一派の國士館の爲めに、世田ヶ谷に土地を買ふ金を出してやつたが、あとで根津はその土地の全部を渡さなかつたのでいざこざが起り、何でも銀座の日本麥酒鑛泉から出て來るところを、どこかの壯士に人糞を掛けられたと云ふ鼻持ちならぬエピソードもある。

萬事この式だから國民新聞だつて根津に云はせれば、當り前のことを當り前にやつてるどころぢやない、むしろ非常に寛大な處置を採つたと考へて居るであらう。

七

今度の物別れについて蘇峯は根津を大いに恨んで居るが、根津の方でも蘇峯を非難して居る。われ／＼局外者から見ると、双方の云ひ分ともに無理もないと思はれる。蓋し前號の德富蘇峯論で馬場氏が論斷したやうに、今日あることは兩者の握手の時にすでに判り切つたことで、兎も角も今日まで三年あまり破綻が表面に現はれなかつたことが寧ろ不思議な位で、之れは流石の根津も新聞が他の事業と異ることを多少理解して居た爲めであり、また蘇峯が出來る丈隱忍したからに外ならなかつた。私は嘗つて金ブン／＼が蜘蛛の巣に掛つたのを見たことがある。どうするかと思つて見て居たら蜘蛛が出て來て金ブン／＼に盛んに糸を捲きつけるが獰猛たる金ブン／＼は暴れて／＼とう／＼巣を破つて逃げた。

由來新聞は金を喰ふものである。儲かる新聞もあるが大部分は損をして居るか、或ひは少くとも儲からないかだ、最近數年間の國民は蘇峯も告白して居る如く震災の痛手を蒙つて恰度資金を幾ら注ぎ込んでも、要る時期に際會して居たのだ、だから根津は蘇峯をこの蜘蛛のごとくに惡く考へた、蘇峯はまた根津がすでに金の要ることを承知で飛び込んで來た以上、或る期間彼れの資金を吸收するのは當然だと思つて居た。

そこで中間に立つて居る兩者の代表者と云つた格の者は非常に苦しい立場に立ち、その間止むを得ず幾分細工もした。それやこれやでまづ蘇峯が怒り、つひに追ん出るまでになつたが、根津としては蘇峯なきあとの國民を急に惡くしては自分の估券に關はると云ふので金は千萬圓注ぎ込むと意氣込んで居るさうだ。そして根津側では純然たる蘇峯の讀者を五千前後と見て居る、その根據は從來民友社から出した蘇峯の著者が少くとも五千部は缺けず、多くとも一萬部を超えて居ないところから來たものだと云ふ。

さう云ふわけで、價値保證の限りでないが、二月末の國民の減紙は五千に止まつたので、根津は新たに陣頭に立つて之れを恢復するのみかもつと殖やして見せると力んで居る。彼れの昂奮がいつまで續くか、普通の營利會社と全然性質を異にする厄介な新聞事業に彼れが果して成功を收め得るかどうか、ボロ會社の整理や土地買占めとは全然手心を異にする新聞事業に、彼れが從來事業界に於いて收めて來た成功をかち得るや否やは全然未知數であると云はねばならない。

「平凡」の廢刊と大衆雜誌の將來

大宅壯一

平凡社の彗星的出現とその飛躍は、最近の出版界に於ける一つの驚異であつた。新聞二頁大の廣告に現はれた平凡社といふ聞き慣れぬ名前を見たとき、多くの讀者は驚異と同時に危惧を感じさせられたものだ。玄人筋の觀察もやはりさうであつた。ところが、意外にも『大衆文學全集』が、大成功を收め、續いて、『世界美術全集』にも成功するに及んで、この駈出しの書肆は、出版界に羽柴筑前守秀吉的の存在を確立した。

かくて全集物によつて大きな基礎を築いた同社は、更に進んで、大衆雜誌『平凡』を創刊し、日本で出る雜誌の七割を占めてゐると豪語してゐる雜誌王國講談社を向ふに廻して戰ひを開始した。

この新しい大衆雜誌の創刊は、またもや新しい驚異と危惧と期待とをもつて迎へられた。平凡社の營業的手腕と共に、社長下中彌三郎の人となり、及びその中に含まれてゐる多少の進歩的傾向を觀取した一般讀書界には、この新しい大衆雜誌にどんな内容が盛られ、それがどの程度まで金城鐵壁を誇る講談社の反動勢力に迫りうるかといふことが、興味の中心であつた。

だが、創刊號を見るに及んで、われ〳〵の期待は著しく裏切られた。編輯技術の上からいつても、内容の上からいつても、甚だしく見劣りがした。種々雜多な要素が、雜然と無統一に併列されてゐるだけであつた。然るにそれが意外にも營業的には成功して、再版まで出した。

二號三號と、内容が追々整理されて來るに從つて、『キング』的要素が益々侵入して來た。それと共に返品率が加速度的に增大して、僅かに五號まで出したばかりで、遂に三月號限り廢刊せざるを得なくなつた。

だが、この失敗が平凡社にどんなに大きな打撃を與へたとしても、これを社會的見地から觀るならば、一つの新しい試みと

して、その五ヶ月間の經驗の中に含まれてゐる文化史的意義をわれ〳〵は見逃してはならないと思ふ。何となれば、從來の大衆雜誌のすべては、單なる娛樂品でなければ、保守思想を無批判に無條件に取り入れた、國定教科書の延長のやうなものであつたが、『平凡』は多少なりともそれ以外の要素を包含した最初の、唯一のものであつたから。

まづこの五ヶ月間に於ける經濟的成績を、私が直接間接に知り得た知識によつて解剖して見るとかうである。

五百頁の雜誌を三十萬刷るとして、一冊の原價が二十三錢乃至二十四錢。「これは部數がこれ以上增えても單價には殆ど變りがない。」それに原稿料が一號につき約六千圓として、一部につき二錢の割合になる。(正月號などは一萬圓位かけたやうであるが、發行部數がそれだけ多くなつてゐるから、一冊に割りあてた額には大した變りはない。)更に、廣告費が約一萬圓として、一冊に割りあてると三錢あまりになる。その外にまだ編輯費その他の雜費を見なければならぬから、一部の生產費がどうしても二十八錢乃至三十錢はかゝる。そしてそれを三十七錢五厘(七割三分)で大取次に渡すと、一部の純利益は七八錢にしかならない。この僅かな利益で、殆ど紙屑にもならない莫大な返品の償ひをつけねばならないのだから大變である。

從つて一號につき約八萬五千圓の投資をして、返品が二割に留つてやつと五六千圓の利益があがる位のものである。反對にもし返品が四割五割にもなれば、月々數萬圓の損失を蒙らねばならぬ。

それでは『平凡』の成績はどうかといふに、創刊號は四十萬と號するが實際は三十四萬(初版三十萬、再版四萬)刷つて、返品が約二割五分、二號は三十萬刷つて、返品が約四割、新年號は六十萬と稱してゐるが、實際は四十二萬位で、返品はまだ確實には分つてゐないが、恐らく五割を遙かに突破してゐるであらう。そして二月號三月號の成績に至つては、更にそれ以上であらう。

それに基礎投資として創刊號の宣傳費を加へれば、この五ヶ月間に平凡社の受けた打擊は、二十萬圓と稱してゐるが、實際は恐らく三十萬圓を下らないであらう。

では、この失敗の原因はどこにあるか。私が下中社長から直接聞いたところによると、まづ第一に讀者層を見誤つたことにあるといふ。即ち、全日本の世帶數千二百萬の中で、大衆雜誌を讀む階級が約百五十萬(これは大衆的諸雜誌の發行實數によつて推定したもの)、その中約二割(三十萬)は、多少進步的傾向を帶びてゐるか、或は少くとも講談社式の惡どい反動主義に

滿足してゐないと考へたのが、そもそもの誤りで、一部智識階級の思想は著しく進んでゐるにも拘らず、一般大衆のそれは豫想外に低いことがわかつたさうだ。だが、私自身の觀察によれば、この下中氏の創刊の豫想にも、又廢刊後の結論にも、かなり大きな誤算がある。又『平凡』があの程度の內容を盛り、その賣上高によつて、今日のわが大衆の意識生活を決定しようとするのは、冒險でもあり冒瀆でもあると思ふ。

次に、高級雜誌の讀者は、月々の內容によつて絕えず移動するけれど、婦人雜誌や大衆雜誌は生活必需品の一種で、いはゞ毎日御用聞きに來る酒屋のやうなもので、一度獲得した顧客は、容易に動かないものであつて、創刊號によつて得た讀者は相當永續きするものと考へたのが、誤りだつたといふ。この觀察は、一部分は正しいけれども、尙多くの誤りを含んでゐることはいふまでもない。

更に、平凡社があれだけの投資と、それによつて獲得した讀者と、同社に對する社會的信用とを犧牲にして、斷然廢刊を決意するに到つた動機は何であるか。

それはいふまでもなく主として經濟的打擊から來てゐる。今日のところ、この種の大衆雜誌は、月々十萬圓の投資をして、うまく行つたところで、せいぜい一萬圓足らずの純益しか上らず、少し失敗すれば數萬圓の打擊を蒙る危險性のあることは、五ケ月の經驗によつて實證された上に、同誌の發行は漸次減少する一方で、このまゝ押して行けば、同社は同誌に殉死しなければならないことが明らかになつたからである。

第二の理由は、營業成績をよくして經濟的基礎を確立するには、內容をもつと卑俗化し、もつと反動化しなければならぬが、それではこの雜誌を創刊した趣旨に悖るといふのである。これは、廢刊の遁辭若しくは裝飾とも見られるし、事實さうであらうが、同じ敎育家出身でも、野間講談社長などには見られない要素を幾分もつてゐる下中社長には、多少さうした氣質のあることも事實だと思ふ。

以上は、『平凡』創刊より廢刊に到るまでの經濟的並に思想的淸算であるが、上記の事實によつて、一般大衆雜誌の、或は少くとも多少進步的傾向を帶びた大衆雜誌の將來を決定することは速斷である。『平凡』及びそれに續いて出た博文館の『朝日』などの不振からして、大衆雜誌の全盛期は既にすぎたかの如く考へてゐる人も少くないやうであるが、それも誤りである。近年大衆的諸雜誌の發行高が急激に增大し、それらの大袈裟な宣傳が廣大なる智識的植民地を開拓したけれど、最近發行高の增進率が需要層の成長率を凌駕し、稍々生産過剩の狀態に陷つて

ゐることは事實である。しかしながら、それはたゞ一時的の現象であつて、大衆雜誌の將來は、倘洋々たるものがあると、私には考へられる。

資本主義が末期に近づいて來るに從つて一般人の生活から、自己修行的、刻苦的傾向が次第に減退して、反對に刺戟的、享樂的傾向が益々著しくなつて來る。現代人の大部分は、以前のやうに、自己を成長させ、完成させるために刻苦勉勵しようとはしないで、ひたすら目前の刺戟と享樂を追ひ求めてゐる。そしてこの傾向は、文化の先端に生きてゐる社會の智識層から始つて、一般大衆の間に擴りつゝあるやうである。かの反動的大衆雜誌の誇大な廣告の中に見うける一攫千金的の成功譚や、刺戟的な美談や、殺伐な讀物類なども、この一般的傾向の大衆的現れに外ならない。

だが、この傾向を最も具體的に反映してゐるものは、近頃の文學であると思ふ。從來の「文學」は、作者にとつても讀者にとつても、自己修行若くは自己完成の一つの手段であつた。どんな退屈なものでも、どんなに讀みづらいものでも、刻苦してでも讀み了へることが、一つの大きな喜びであり誇りであつた。だが、今ではさういふ傾向は、一般大衆は勿論、智識階級の間にさへ、殆ど見られなくなつた。電車の中で樂に讀めないやうな作品は、一部の特志家を除いて殆ど顧みられなくなつた。第一文學者自身が、殆どすべて「文學」に對する魅力を失つてしまつたと告白してゐる位だ。

このことは、從來「高級雜誌」の卷頭を飾つてゐた堂々たる「評論」についてもいへると思ふ。專門的な複雜な內容を、專門的な難解な言葉で表現したものでも、これまでなら、一部は修養のために、一部は見えのために讀まれたものであるが、近頃はさういふものは追々專門雜誌の方へ追込まれて、もつと普遍的な興味と魅力を具へた內容を、もつと平易明快な言葉で書かれた評論が、漸次これに代りつゝあるやうである。

かういふ點から見て、現代は「高級雜誌」の苦難期である。原稿料宣傳費その他の方面で大衆雜誌と競爭しなければならず、それにはどうしても發行部數を增さねばならず、發行部數を增すにはどうしても或る程度まで「大衆化」しなければならず、又時代が享樂的になれば、享樂的要素をもどし〱取り入れねばならなくなる。ところで、かうした時代を最も早く最も鋭敏に反映するものは、現代の新聞であり、次いで婦人雜誌や、娛樂雜誌や、大衆雜誌などであるが、「高級雜誌」も結局それらの跡を追ふべく强いられるであらう。

それでも、「高級雜誌」は、對象が智識階級であり、智識階級は

本來自由主義的であり、觀念的には進歩的であるから、どんなに「大衆化」しても、自由主義的進歩主義的態度を持續することが出來るであらう。

だが、大衆雜誌の場合はさうは行かない。大衆は時代の權威に迷はされ、動かされ易いから、從來雜誌の經營者がそれを巧みに營利の目的に利用してゐたのであるが、今後は階級對立が益益尖鋭化するに從つて、現に新聞の多くが支配階級の奴隷化しつゝあるやうに、多くの大衆雜誌が、支配階級と意識的に手を握つて、娯樂や刺戟で釣つた大衆を反動勢力に組織する傾向が著しくなつて來るであらう。

更にかうした政治的要求が、經濟的要求に刺戟されて、いくつかの新しい大衆雜誌となつて現れる可能性が十分ある。といふのは、今日のわが事業界は、生産的方面は全く行きづまつて、新たに投資して相當の利潤を擧げ得るものは、殆どすべて消費的な方面に限られてゐるからである。電車や、デパートメントや、キネマ劇場などにまで盛んに手を延ばしつゝある今日の大資本は、將來の獨占のために目前の損失を見越して、やがて大衆雜誌にも投資の對象を見出すであらう。『朝日』の創作なども、その一つの現れと見られないことはない。

それに便利なことには、雜誌は新聞と違つて一擧に基礎をつくることが出來る。新聞だと、どんなに素敵なものを出しても、短日月に多くの讀者を獲得するわけには行かないが、雜誌だと、優秀な編輯技術家と纏つた宣傳費とがありさへすれば、忽ちにして何十萬といふ讀者を獲得することが出來る。この點からいつて、雜誌は新聞よりも映畫のプロダクションに似てゐる。從つて今後新聞に比して遙かに凄じい投資的競爭の對象になるであらう。

それでは、大衆雜誌は、本質的に保守的であり、進歩的傾向を代表したり包含したりすることが絶對に不可能であるかといふに、必ずしもさうではないと私は考へる。

現に『平凡』の創刊號が、あの程度の編輯振りと内容をもつてして、あれだけの讀者を獲得することが出來たのは、大衆の間に新しい大衆雜誌を要望する氣運が相當漲つてゐたからだと思ふ。不幸にして『平凡』は短命に終つたが、この氣運は今も殘つてゐるであらうし、若しまた田中反動内閣が倒れゝば、更に増大するであらう。

『平凡』が失敗したのは、『朝日』の不振もさうであるが、古い型を追ひすぎて、それ自體の斬新な特色を發揮し得なかつたからである。編輯者にその人を得さへすれば、進歩的な大衆雜誌は決して不可能ではないと思ふ。

たゞ實際問題として困ることは、進歩的で而も大衆に熱讀されるやうな作品を提供してくれる作家、例へば昔の木下尙江のやうな作家がゐないことである。評論の方はどうにかなるであらうが、偉大な進歩的大衆作家がゐないといふことは、進歩的大衆雜誌にとつては致命的である。

今日のブルヂョア大衆作家は、いはゞ映畫のスターのやうなもので、各新聞雜誌社の間で奪ひ合ひとなり、それがために編輯者は作者の傍につきゝつて顧問のやうな態度をとらねばならない。下中氏ゝ、讀者にのみならず作者にまで媚びなければならないのは不愉快だと、私に述懐してゐたが、今日の狀態ではそれもやむを得まい。しかし、目下プロレタリア作家の間に大問題になつてゐるプロレタリア大衆文學の運動が更に發展すれば、必ずや近き將來に於て、偉大なプロレタリア大衆作家が生れて來るであらう。

又、手をつかねてさうした作家の出現を待つてゐるばかりでなく、偉大なチャーナリストや親切な批評家は、丁度映畫プロダクションで新しいスターをつくつて賣り込んだり、講談社が講談社專屬の作家を養成したりしてゐるやうに、もつと積極的に(勿論悪どい資本主義的手段は極力排斥して)もつと親切に、新しい無名の作家の間から、未來ある新人を見出して、その成長を援けるべきである。

進歩的な大衆雜誌は、偉大な進歩的大衆作家圏をもたない限り、必ず不具的なものとなり、必ず失敗するであらう。

「筑前守義興」正誤(前號所載小杉天外氏作)

頁	行	誤	正
四	一三	最早喰ふ	最早瓜喰ふ
一三	一一	親剛をも	親剛にも
一四	一八	何時にも	何所にも
一五	六	上手も	上手に
一七	八	番兵共	番匠共
一七	一〇	存じ寄り	存じ居り
三四	二	競馬	騎馬
三六	三	貰ふためぢや	貰ふたのぢや
三八	二	余は三好の	余も三好の
三九	一三	靈場など	靈場なと

郊外電車を語る

石川欣一

◇

東京、大阪、倫敦、巴里、紐育、伯林——これを世界の六大都市となす。その人口は……こゝで僕の大演說は途切れて了ふ。知らないからだ。人口は知らぬが、これ等の都會は知つてゐる。またそれ等の郊外も、あるひは非常によく、又は相當によく、下つては極めて僅かに知つてゐる。今、三尺に四尺位の机の上に、世界の六大都市を並べ、その一々に就て郊外電車を語らんとするに臨んで、僕はシーザアか羅馬法王かになつたやうな氣がする。いつ迄もそんな氣でゐれば、やがては松澤村へ送られることであらう。

◇

僕が非常によく知つてゐるのは、大阪の郊外である。人情として、先づそれから書き度い。だがさうすると、この一文は、最もよく知らぬ倫敦の話で終ることになり、從つて龍頭蛇尾、屁の如きものになるであらう。さりとて倫敦から書き始めては、更に感興がわかぬ。だから、よく知つてゐる順に書き、そして、何とかして、棹尾の勇といふ奴を振るつて見よう。うまく振れましたらお手拍子、御喝采の程を願ひます……だが、まだどう振るか、見當はついてゐない。

◇

住宅地としての大阪の郊外、ことに阪神間は、誰でも知つてゐるが、まことによろしい。北に山を負ひ、南海に臨み、大邸宅をならべ、小邸宅便所をつらね——あの邊には棟割長屋式の中流向き貸家が多い——土地は風化した花崗岩の砂だから埃も立たず、霜柱も立たない。廣い坂路を、ペデイクリード・ドッグをしたがへ、八十五圓もするやうな小型自轉車で下りて來る子供をよく見ると、顏つきに一定のタイプがある。これ等はお妾の子で、元來大阪の藝妓に一種のタイプ——川目うけ口等——があるから、その子供達も、滿點乃至零點に母親のタイプを受けついでゐること、メンデルの法則によるまでもなく、自明であらう

◇

このやうな阪神間を走る電車は三本、阪神、阪急及び國道電車である。最後のものはコンクリートの阪神國道を蝸牛のやうにノロノロ動くので、奥さん達が近くのマーケットへ買ひ物に行くのに利用する位のものである。

◇

阪神は一番海に近く、從つて磯臭く、魚臭い。事實、時間によつては魚やさんで滿員のこともある。停留場の數も多く、それやこれやで阪急にくらべて野暮らしくもあるが、阪急が田畑の中へ（もつとも今は大部家もたつた）を驀進するのとは反對に、阪神は昔ながらの村や町をつないで行くので、趣がある。灘あたりの酒倉、その白壁に日があたる景色などは、昔めいたいゝものである。

◇

阪急は日本でも有數ないゝ電車と快速力とを持つてゐる。神戸線の新型電車の如きは、その構造といひ採光照明法といひ、世界的ともいへよう。只、よく人を轢く。轢死人があつたので、村の有力者が數名、檢屍に立會つてゐると、反對の方向から來た電車がその數名を跳ね殺し、轢き殺したなんてのは、まさに珍事である。

阪急は別に寶塚線を持つてゐる。有名な少女歌劇の寶塚へ行くので、日曜や祭日は超滿員。平日も相當に通勤者が乘る。神戸線と寶塚線との分岐點は十三。これを「じふさう」と讀む。神戸線を優遇し、稼いで與れる寶塚線をまゝ子扱ひする阪急は、神戸線の步廊に「十三までの方はこの電車に乘らないで下さい」といふ看板を出してゐる。數年前大阪へ來られた入澤達吉博士はこれを見て僕に「君、ありやどういふ譯なんだね、子供が乘つちやあ、あぶないのかい」といはれた。

◇

寶塚線は石橋から箕面線を出してゐる。この支線は、また恐しく舊式な電車が走るのだが、土地が高いので、夏なんぞ氣持がいゝ。寶塚からは西寶線といふのが西宮で神戸線に合し、尼ケ崎で阪神に接してゐる。西寶線は六甲山塊の東端を走るので、一寸高原電車の趣がある。秋がいゝ。

◇

阪神を「魚くさい」で片づけ、阪急を長々と書いて了つた。不公平だが、大阪にゐた數年間、僕は阪急の沿線にばかり住んでゐたのだから、どうもやむを得ない。

◇

美事なのは十三以西の菜種畑である。進行中の電車の中にまで香が流れ込む。一度英國人と乘り合はした時、これは何といふ植物だと聞かれて困つた。あとで和英辭典を引いたら RAPE と出てゐるので、一寸笑つた。

◇

大阪の名物は新聞電車、僕もよく御厄介になつた。これは市內版を郊外地へはこぶ爲、深夜、つまり午前一時なり二時なりに、特に出す電車で、新聞と醉つぱらいとを積み込む。

◇

和歌山へ行くのが南海。起點が南の歡樂區域に近いので、夜遲く乘ると女給、仲居、藝人等が多く、中々面白い。濱寺あたりの白砂青松、淡の輪あたりの淡路島の景色、いづれ

も趣がある。大阪、和歌山間を二時間と何十分かで走る急行には、食堂車がついてゐる。西洋料理うまくなし。

◇

奈良や櫻井へ行く大軌。上本町といふ高臺に堂々たるビルディングを建築したものである。奈良線で僕の好きなのは、生駒山のトンネルに入る前、ふりむいて見る大阪の大平原である。

◇

京都へ行く京阪。およそ大阪附近の地質的構成を知るによい電車である。歴史的にも面白い場所を通る。ローマンス・カアなんてのが出來て、若い人々がさわいでゐたが、今ではそのローマンスも、結婚か、夫婦わかれか、何とか片がついてゐることだらう。

◇

まだこの他に、新京阪やら、堺まで行く電車や、無線電信局で有名な平野郷へ行く電車やがあるが、あまり大阪はまだ詳く[illegible]にられかないから、この邊でやめやう。

◇

お次は東京。

東京の强味は、伯林のリング・バーンに匹敵すべき山手線であらう。時々「又しても名物の停電」なんてやつつけられるが、山手線こそは堂々新興日本の帝都にふさはしいものである。新宿、代々木の乘換も便利になつた。あれで東京驛から新宿なり池袋なりへの地下電車が出來れば、東京から近郊への交通は、どこへ出しても恥しくないものにならう。

山手線は目黒、五反田あたりの丘と森とがよかつた。今ではすつかり變つたが、それでも去年新綠の頃、代々木から有樂町まで行つたら、やはり五反田あたりには見るべき綠の木が殘つてゐた。

◇

思ひ出のなつかしいのは、中野お茶の水間を走つてた頃の甲武電車である。四谷驛の附近、市ヶ谷見附の土堤とお濠の水、市ヶ谷驛の步廊の後の崖には、つゝじや蒲公英が晩春の日に光つた。しかも女子高師附屬の生徒が多數乘るので、花電車の感がした。僕は中學三年の夏までは、あれでお茶の水へ通つた。三年生だから無邪氣なものだつたが、高商や帝大には大部戀の焰をもやし上げたのもあつたらしく、當時の中學世界に「湖畔電車」として、この電車のことを、それに乘る美少女のことを書いて投書した高商の學生があつた。大將今ではリアリストになり、どこかの銀行の支店長でもしてゐることだらう。

柏木、東中野、中野あたりも、雜木林が多くてよかつた。大學の頃、時々散步に行き、落葉を敷いては冬の日ざしを樂んだ。

冬の眼は潤んだ瞳を放ち
山陰や林の底にじつとして
親しげな瞬きをして見せる。
その背は圓く膝を抱き
もの言ひたげな唇が
猶ほ堅く固く結ばれて居る。

先年、菊池香一郎の詩を、際立てゝ讀んだ

のもこんな雜木林の多であつた。まつたくあの頃の甲武電車には、今のやうな、皆同じ格好、同じ表情、同じマスクの、コミユータアはすくなかつた。乘客の多くは學生だつた。

◇

恐しいのは京成電車。押上驛前のゴタ〳〵、車内の亂雜、電燈の暗さ。僕はしばらく千葉海岸から通つたが、たいていは不便を忍んで兩國から汽車に乘つた。あの汽車もひどいが、京成みたいに衝突や何かをやらぬから、すくなくとも安心してゐられた。市川邊の川、船橋附近からさきの赤い崖、砂の丘……景色は好きなんだが――。すでに存在する以上、京成電車は利權問題以外に、公共機關として、もつとよくなる義務がある。

◇

京成と全く反對の方向に、全く反對な景色の中を走るのが小田原急行である。砧村附近から、强い、ゆたかな、武藏野の景色を味ふことが出來る。最も多い乘客――早熟な成城ボーイス。最も有名になつた乘客――三宅やす子さんを訪問して「奔流」の印税を云々した講談强盜。

◇

「小田急沿線東京へ三十分亭々たる松樹つき理想住宅地坪二圓」といつたやうな案内廣告をよく見る。一度行つて見ようと思ひながら、まだ行かぬ。

◇

愛嬌のあるのが京王電車。「特大カツレツ十錢」なんてことを貼り出した新宿松屋――もとの武藏屋――の店内を出て、ガツタリガツタリ八王寺まで走つて行く。驛で賣る切符はすこぶる新式だが車臺にはすこぶる舊式なのもあり、吉田初三郎先生一筆の「沿線名所圖繪」を出してゐる。沿線に松澤驛あり、「松澤病院スグマヘ」と案内に書いてある。

京成押上驛には東洋軒といふのがあるが、この驛には松屋食堂がある。西洋料理廿五錢、支那料理卅錢均一・ビール四十五錢、黑ビール五十錢といふ安さである。

◇

澁谷から出る玉川電車も、古いには古いが大分ガタピシヤだ。乘つてしばらくは、往來の雜沓にヒヤ〳〵させられる。

◇

東京の郊外には、まだ澤山電車があり、それ〳〵盛に利用されてゐるらしいが、最近乘つたことが無いから何ともいへない。汽車と省線とに對して、大阪の阪神と同じやうな位置にある京濱電車が、前同樣に運轉してゐるのには敬服する。

◇

我々はこゝで一擧に太平洋と米大陸とを橫斷して紐育へ向ふことにする。そして、そこの通勤者と、通勤に乘用する交通機關とを見ることにしよう。

◇

今更いふ迄もないが、紐育の實業中心地はマンハッタン島の下方僅かな所である。そこに林立する——マストみたいだ——何十階といふビルディングに集つて來る重役、番頭、小僧、ステノグラフアー何十萬人。一體どこからやつて來るのだらう！　曰く、マンハッタンの上の方から、ブルックリンから、そして河向ふのニュー・ヂャーシイ州から。

◆

これは紐育ばかりの話ではないが、都會人は都會に住むなら都會を享樂しよう、都會の便利さを利用しようといふ氣持を持つてゐる。晝間は働くが、夜は遊ぶ。程度はことなるが芝居、音樂會、活動寫眞、寄席……それ等が都會の享樂である。都會の中に住んでゐれば、タクシイなり地下鐵道なりで、いくら遲くなつても容易に歸宅出來るが、郊外ではこれが出來ぬ。芝居の最後の幕に至つて、時計と汽車の時間表とを一分おきに出したりしなくてはならぬ。家へ歸りつく時は夜中すぎ、途中で說教强盜にとつつかまる心配は無いにしても電車がつらい。このやうな不便を忍んでまで郊外から通勤するには、何か理由が無くてはならぬ。その理由は何だらう。

◆

寒い冬——どうせ冬は寒いにきまつてゐるが、紐育はどうかすると路面電車が凍りつく程寒くなることがある——がどうやら過ぎて、三位一體教會の墓地の芝生が僅かに綠色を呈し、高層建築の上から出る湯氣が淺黃色の空にとけ込む頃になると、紐育に數多い新聞の一つか二つかゞ、きまつて郊外人の漫畫を出す。彼は中年配の、如何にも人のよさゝうな男で、もうあたゝかいのに冬外套を着、ゴムの上靴をはき、降りもしないエープリル・シャワーにそなへる可く、大きな洋傘を持つてゐる。土曜日の午後、彼はフェリーに乘つてハドソンを西へ渡りつゝあるのだが、見よ、彼の荷物を！　鐵の熊手（レーク）、鋤、ナスターシャムの種子を入れた袋、ブラックベリーの一枝（これは裏庭に挿木にする）、洗濯物をかける細引、馬鈴薯をつぶす道具……時に彼はそれ等を乳母車につみ込み、身のさきにおけの設備の奧で「神天にあり、この世のすべてはよろしき哉」といつたやうな、最もビーテイフイカルな顔をしてゐる。これが所謂サバーバナイト（この字は辭書にない）なのである。

◆

マンハッタンから、ブルックリンへは地下鐵道が行く。北方の、例へばルーズヴェルトが子供の時住んでゐたリバーデール・オン・ハドソンといふやうな上等な郊外地へは、紐育セントラルの汽車が行く。對岸のニュー・ジヤーシイの各地へは、フェリイかハドソン・チューブで河を橫斷し、そのさきはエリイか、デラウエア・ラッカワナの、これも汽車である。從つて東京や大阪の「郊外電車」といふやうなものは無い。然し、例へば僕が一時住んでゐたモントクレアの如き、終點ではあるが朝の七時半から九時頃までは、五分、十分位に汽車が出る。ナイルの下流みたいにひろがつた線路の一つ一つに列車が入つてゐて、それが順々に出て行くのだから、電車も同樣

である。プルマンばかりの贅澤列車もあるが、多くの列車の乘客はサバーバナイトの標本である子澤山の律氣者か、家庭から通ふ未婚の靑年男女かである。

◇

强いて紐育の郊外電車を求めれば、それは、ニューヨークからオレンヂ、ウエスト・オレンヂ（エヂイソンのゐる所）、モントクレア、その他の各地へ出てゐる Public Service の電車であらう。これは大きな會社の經營で、ペンシルヴエニアの方にも線があるが、街路を走り、車も東京あたりの市內電車と大差無い。一度僕の友人が車掌と喧嘩して、お前ンとこは Public Service でなくつて、Public Serve Us! だらうといつたことがあるが、東京あたりにも「公衆よ、我々に御奉公つかまつれ」電車がないこともない。

◇

映畫「伯林」を見た人は、汽車が伯林に近づくにつれ、松林があり場末に堀立小舍みたいなのが並ぶ、菜園のあるのに氣がついたであらう。あれはハノーヴアの方から入る鐵道沿線の實寫である。あの方面の、ポツダム、ワンゼー、ブリユネヴルト等から伯林へ通勤する人もあるが、多數ではあるまい。晝飯をしに家へ歸り、その後で一時間ばかり晝寢をしてから、またオフイスに出かけるベルリーナア達にとつては、あまり遠方から通ふことは不可能である。

◇

一番多く利用されるのは——といつて統計を見た譯ではなし、あるひは間違もあるかも知れぬ——東京の山手線ともいふべきリング・バーンと、それにむすびつくスタツト・バーンとであらう。ツオー、フリードリツヒ・ストラーセ等の驛に於る乘降客の數は、すばらしいものである。汽車が入る、客車の側面にヅラリと並んだ戶が一時に開いて、ザラ〳〵と人が降りる。代つて乘る、戶がしまる、發車する……プロシヤ式の正確さを以て五分に一度位づつに、それが行はれる。

◇

伯林で驚かされるのはエレクトリツシエ・ホツホ・ウント・ウンターグルンドバーンと稱する法性寺入道である。正體は要するに電車で、それが場所によつて地下を通り、場所によつて高架線になる丈の話なんだが、名前が御丁寧なのに感心する。紐育のサブも、上の方で高架線になるが、それにしても紐育人にはサブはサブで、エレクトリツク・エレヴエーテツト・エンド・アンダーグラウンド、レールウエーではない。

◇

巴里の郊外……ヴアンセンヌ、ヴエルサイユ、サン・ヂエルマン、サン・クルー等、いゝ場所もあるが、さて東京の杉並町沼袋といつたやうな所謂郊外住宅地は？　となると、勿論僕の寡聞にもよるであらうが、どうも無いらしい。早くいへば地震前の東京みたいに、郊外は家族づれで櫻草を摘みに行くか、家族なしで蜚見に行くかの場所である。これには

巴里人が、體育の項でいつたやうに、あるひは體育人以上に、都會を樂しむ氣分を持つてゐるのと、巴里がもと〳〵城壁でかこまれてゐて城外へ出にくかつたのと、それから、外國の大都市のいづれもと同じく、家屋建築の關係上、横に離れず上に離れて——例へば「第七天國」のシコみたいに——住むのとが原因してゐるのではあるまいか。從つて郊外へ行く電車もあるにはあるがいさゝか東京や大阪のとは趣を異にしてゐるらしい。

◇

最後に倫敦。

倫敦には約十箇にあまる主要鐵道の終（起）點と、無數の地方線（その多くは電化されてゐる）とがある。そして一日に八千に近い列車が出入する。それが郊外からの通勤者に利用されるであらうことは想像に難くないが、さてどんな郊外へどんな電車や汽車が行つてゐるのか、短い滯在の期間に、いはゆる heart of London ばかりをうろつき廻つてゐた僕は、一向知らない。如何にもだらしが無いが、倫敦通に質問を發して書く氣も起らず、これが論文ならば參考書を調べもするが、今日のところは、ひらに御容赦をねがひ度い。

◇

——と、かう世界の六大都市の郊外電車を書きつらね終へた僕は「これで先づまづ一貫おん貸し申した」やうな氣がする。最初におん約束した掉尾の勇もなくなつて了ひ、ぺしやんこだ。今日は日曜、久振りで郊外散步でもして見よう。

（一八二頁下段より續く）

□

鈴木文史朗

學校の生徒吸集經營政策から學校がスポーツに力を入れる傾向のあるのは苦々しい事だと思ふ。スポーツが日本でも職業として成立つのは望ましいことだが、學生がスポーツ職業人に近い者になつたら、學校がそれを利用するのは許し難い。學校のスポーツは往時の帝大、駒場、高師のやうな程度であつて欲しい。近頃のは興業になり過ぎてゐる。

□

高田保

社會科學の自由討究を「彈壓」する當局が、何故スポーツを「奬勵」するか？その疑問はとりも直さず現在のスポーツの「階級性」を物語つて充分なものと思ひます。學生の本分としてはあくまで「プロレタリアートへ」と心懸くべきであり、從つて現在の「オリムピツク」は「スパルタキアード」へと移るべきだと思ひます。最近スポーツの職業化傾向を救ふの道はこれ以外に在る筈はありますまい。

政界裏面　白眼老夜話

刀吏公記

◇……山縣でも伊藤でも桂でも、あれ等は隨分ひどい政權爭奪をやつたが、しかし國の爲め何か仕出かしてやらうといふ心掛けがあつた。ところが近頃の政治家と自分だけでも言つてゐる連中はどれもこれも小利口で、たゞ政權を取らう離れまいで、嚙み合つて居るのじやから、乃公のやうに長生きしてゐる者はイヤになる。田中にしたところで山縣門下の優等生で、軍人としては長州の利け物といはれた男だつたから、政治家になつたら何か少し位は變つた所ろもあるかと、今日の今日まで乃公なぞ内々多少の期待をかけて居つたが、もうサジを投げたョ。政黨の囚人となつただけで組閣してから二年になるが眼ぼしいことは何一つ仕出かさぬぢやないか。貴族院が今度の議會で優諚問題で田中問責決議案を叩きつけたのもよく〳〵の事だよ。尤もあれは實は田中一人が憎いといふ許りではないので、政友會内閣がまあ一般に倦かれて來た其の表はれだね。一體に日本人は佛蘭西人見たいに倦き性だ。ちよつと考へて見給へ。大正三年の四月に出來た大隈内閣が二年半ばかり續き、寺内内閣が二年、原内閣が高橋の改造内閣を入れて三年あまりといふことになり、次で現はれた加藤友三郎内閣は僅かに一年あまり、山本内閣は半年たらず、清浦内閣が半年といづれも短命で加藤高明内閣が若槻内閣を併せてザッと三年つゞいて居る。そして今度の田中内閣だが、これは昭和二年の四月成立だから恰度二年になる勘定だ。最近十五年間における平均壽命は先づ二年といふのが上の部で、田中がそろ〳〵國民に倦かれて來たのも無理はない。本來から言へば、五年なり七年なりの日子を與へんことには仕事らしい仕事も出來ンのだが、日本人は島國育ちで政治家までがケチな了見を持ち、三年五年七年と椅子が温ると、仕事をしやうとはせず惡いことばかりやるのでまあ二年三年の交代といふところも惡くないか知れんテ。

◇……ところで、田中虐めの張本人は、君、誰と思ふかネ。貴族院が内閣の末期になると政府虐めをやるのは毎度のことだが、今度の議會では少々手酷しかつたぞ。今までは研究會の青木や水野が世間態も憚らずやつて居たが、今度のは少し手口が違ふぞ。研究會の中にも反青木の渡邊千冬などが表面に活躍したやうだが、アレは踊り手だ。また阪谷芳郎や永田秀次郎や伊澤多喜男などが奮發したやうだが、これも倒閣運動の常連といふ奴で、これ等の連中だけが笛を吹いたのでは貴族院もあの通り踊らなかつたらうョ。乃公は今度の芝居のホントの影武者は近衞文麿と黒田長和だとにらんでゐる。若殿原が政界の影武者になるんだから、貴族院も變つて來たものサ。だがこの連中は若いだけに純で生眞目だ

から、そこが興味だヨ。つまらぬ話だが、先達つて近衞と鳩山とお伴の連中が以前の或るカツフエーに出かけて行つたさうだ。女給がお歴々の御入來とばかり悦に入つて、女給のうちの綺麗なのに眼配せすると、女給は身分のある方と聞いて堅くなり、紅茶を目八分に持つて運んだので流石の近衞も鳩山もお可笑しくなつて吹き出したつてネ。すると、今度は女給が承知せず『いかに平民の子でも輕蔑するものではなくつてヨ』と愚入りの眉を逆立てたので、連中もあしらひかねたと、一つ話になつてゐる。何で乃公がこんな話をするかと言へば、つまり近衞にしたところで、鳩山黒田にしたところで親爺篤麿の後光がさして居るだけだといふのだ。近衞や黒田なども銀座に放つておけば年增のモボだヨ。それが近頃では華胄界の「花形」といふワケで、貴族院の大勢を動かす導火線となつて居るから面白い。一體靑木や水野を增長さしたのは原敬で、近衞を引つ張り出したのは加藤高明だヨ。加藤は三派內閣を組織すると對研究策を講ずる上から舊勢力にあまり重きを置かず、坊ちやん育ちの近衞をおだてあげたものだ。近衞が家柄もよし、愛しかね[illegible]ないといふところから、研究會に手を廻してとうとう筆頭常務に祭り上げ、一はもつと彼の自負心を滿足させ、他はもつと西園寺和尚との取り結びをやらせて居つた。それからといふものは、近衞も加藤を德とするやうになり、どちらかと言へば政友會を袖にするやうになつて來た。それに研究會の老人連が萬年御用をつとめて昨日は憲政會、今日は政友會といふ態度を取るので、業を煮やして研究會を脫會し世襲議員の團體を作るといふので今の火曜會に立て籠つたんだネ。こゝには一條實孝や細川護立といふ飲み友達も居るので話が合ひ、今に靑木や水野に一泡吹かしてやらうと考へて居つた。そこでいろ〳〵政府問責の題材を選んだが、地租委讓や何かの政策問題でブツつかれば、世間の不評を招くといふので、例の優詔問題をとりあげ、これで一戰交へやうと內々西園寺和尚まで持ち込んだものだ。和尚も『そんな問題で累を至尊に及ぼすやうなことがあつては困るぞ。併し田中のあのやり方にも困つたものだナ』と洩らしたので、近衞は一先づさつきのカツフエ友達の鳩山にそれとなく話をしたが、鳩山は田中に取りつぎ方が惡かつたものか、田中が馬鹿にしたのか近衞の忠告を容れなかつたので、優詔問題はあんなに大きくなつて了つた。この芝居のも一人の影武者と見られて居る黒田長和はなか〳〵議論家でネ。これは近衞とは少し事情が違ふ。黒田は公正會に居て會內の長老連とソリがあはないンだよ。船越光之丞や、藤村義郎がのさばりかへるのが氣に食はぬ上に、藤村は近來政府の尻馬に乘つて田中の御機嫌ばかり取るので、黒田一派は益々反政府的になつて來て、ひそかに日頃仲善しの近衞一派と手を握つて玆に若手俳優を中心にした同盟が持ち上つて舊幹部と衝突といふことになつた形だ。これは思想界にも實業界にも、他の政界にもどこにもある奴サ。

◇……この形勢をジツと睨んで居たのが同成會の伊澤多喜男だ。この男は鬪志滿々身體こそ小さく瘠せてヒヨロ〳〵して居るが、策略縱橫でネ。政友會といふと毛蟲のやうに憎むといふ性で、民政黨に黨籍こそないが、黨員以上の熱心家だ。曾て加藤(高)の懷刀と言はれただけに今でも江木翼と飯を食つて

は倒閣の内所話をやり、先づ公正會、火曜會邊の反政府組と氣脈を通じ、次で研究會、無所屬邊の不平組と握手し、萬事萬端ぬけ目のない作戰を樹て〻決議案の通過にスゴ腕を見せよつた。柳澤や坂谷や新渡戸や、また赤池、湯淺、阪本、菅原、江木、乃至は若槻、幣原があれまでに踊るには、それ〴〵の立場からそれ相當の理由があつたには違ひないが、その裏面に獻立をつくつたり氣勢を添へたりする作者が居たことを見逃してはいけないヨ。伊澤はその立作者の一人だね。

◇……田中虐めで、反對黨の濱口、安達、江木などが懸命になり、また貴族院内の反政府系の連中がムキになるのは一向珍らしくないこととして、も一つこ〻に面白い事がある。それは新黨クラブの床次の態度だヨ。世間では床次が政府に七分八分の御用をつとめて政權たらひ廻しの夢を見て居ると評するものが多い。成るほどそれにちがひはあるまい。併したらひ廻しといふからには、田中が今抱へて居るたらひを離さなければ問題にならない。然るにだ、田中は一寸たらひを離せばモウ二度と自分の手に廻つて來ない位は知つて居るから仲々手離さうとしない。實をいふと、床次でも、その一黨の榊田や金杉でも、第五十六議會が初まる前に田中から口約束が欲しかつたのだ。ところが田中もさるもの、また「おら」の周圍からは鈴木や小川をはじめ皆んな『口を滑らすな』と田中の口に蓋をしたので、田中は度々床次と會見したが、たらひ廻しのことは一言も言つて居ない。ところが政友會の中でも床次びいきの岡崎などは床次喜ばせを言つて、『この議會さへ政府を助けて置けばあとはそのあとの話でネ』と恰度棚からボタ餅式の口説き方をしたものだ。尤も床次の方ではこの支拂期日不明の手形には大して望をかけて居なかつたやうだがネ。

◇……そこで床次はどういふプランでどういふ行動を取つたかと言へば、それは大體からだ。自分が田中の後を取るには民政黨と一緒になつてやるとしては所詮望みがない。そこで政友會とは一脈の氣を通じて置かねばならないが、政友會に充分好意を持つて味方すれば、田中内閣は無事に議會を乘り切つて内閣の壽命は當分萬々歳だ。それでも無論困る。どうにかして政友會をあまり痛めないで、反感を買はないで田中だけを引つ込ませ度い。これが床次の腹の中だつたらうね。その證據には床次のやつたことを考へればよく分るぢやないか。先づ支那外交については、床次は議會前から彼としては相當の大芝居を打つて、大體田中外交を認め之を應援してやることにした。民政黨が提出した内閣彈劾案には反對して衆議院で否決した。その代り地租委讓案には政府に反對して政府の一枚看板に泥を塗る方に加擔した。けれどもこれは前にも話した通り、主義においては贊成だが、今はその時機に非ずといふ床次式の言ひ方で、これは意味深長だ。それから例の貴族院の優詔決議案と小選擧區制案だが、優詔決議案の方は、貴族院の出來事だから表面は關係がないやうだが、決してさうでない。

◇……床次といふ男は妙に貴族院には知り合ひが多い。これは原内閣後、殊に清浦内閣を盛り立てた以來の關係だが、兎に角貴族院仲間の床次の發言權は馬鹿にされないよ。あの決議案が出た時でも、貴族院議員で床次に向つて「どうしたら好いか」と問ひ合せて來たものが隨分多かつたさうだ。之に對して

床次は『決議案に賛成せい』といふ運動をして居るから[illegible]なものじやないか。これはつまり他人の手で田中虐めをやつたワケだ。それから小選擧區になれば政府黨に割がよいことは床次は多年内務省に居り又内務大臣をやつた關係から又自分の度々の實驗でよく知つて居る。こんな具合だから將來自分が天下を取つて總選擧でもやる時には現行中選擧區制よりは小選擧區制を有利と觀て居るのだ。けれども僅か三十名たらずの新黨では逆立ちしても改正することが出來ぬから、幸ひ政友會が新黨に色目を使つて提携しやうとして居る點を利用して政友會内閣の時に改正案を通して置かうといふのだ。なか〳〵床次としては遠大の計畫だヨ。つまり今言つたやうに外交問題では政友會と一致する。地租營業税の委讓も今年は時機でないが將來はやつてもよい。又選擧區制にしても政友會と同じ考へだといふことを示し、一方では兩税委讓案が握りつぶしになるやうにし、田中首相の率ゐる今の内閣に傷をつけ、優詔問題では田中首相自身の面目をなくして總理大臣を一日も早く引いて貰ひ度いといふ作戰を取つた。これは『お優詔』に關係する床次の[illegible]運動の作戰といふナワと乃公は觀てゐるがどうだらう。

◇……この乃公の話が世間に現はれる頃には、貴族院の形勢も大體定まるだらう。それから田中内閣の進退についてもだん〳〵明確になつて來るであらうと思ふ。理屈から言へば田中は辭めてもよい。また國民も、政友會員は別として、そう惜しがつては居ない。ところが田中は進むことを知つて退くことを知らぬ猪軍人だから往生際は香しくなからう。貴族院で兩税案が否決になれば浮ぶ瀬はない。だが乃公は決して否決にはならぬと思ふ。それはあの兩税委讓案の特別委員の顏振れを見れば分る。一體貴族院で特別委員を擧げるのは誰が擇るかと言へば德川の一了見だ。衆議院の方では先づ各派から何名と議員數の按分比例で人數を割り當て、その人選は各派で決めるが、貴族院では議長の天降り案だ。そこで政府も反政府も重要法案になると、内々議長に希望を申し述べるが、德川は『十六代様』を以つて任じて居るから仕末が惡い。外部から誰を委員にして呉れと云つて[illegible]とその人選を定ふに[illegible]。そこで書記官長位と相談して自分で委員の顏ぶれをこしらへてしまふ。だから各派の連中もそこる〳〵書記官長の成瀬の耳に入れる位が關の山で決して德川の耳には入れない。兩税案の委員を決めるまでは、大分政府側の暗中飛躍が奏功したといふ評判だが、アノ案の特別委員長に田中とキッテモキレヌ兒玉秀雄を持つて來たところは實際臭いヨ。それに委員連中もどちらかと言へば政府系の方が多いが、アレは案を通過させるといふのが前提ではなくて否決させぬといふ立前から撰んだ顏振れだらう。政策問題で貴族院が時の内閣と喧嘩をするのは損だからね。恐らく毎々言ふ通り七分八分までは握り潰しになるだらう。

◇……そうすると田中内閣はどうなるかといふ問題になるが、恐らく再度の内閣改造をやつて延命運動を初めるといふのが落ちかナ。それは田中を初め久原、白川、岡田、三土、山本、望月、小川……と閣僚全部は滿身傷だらけとなつて居る。この仲間の中から何人かやめさせて新しいのと入れ替える事も考えてゐるだらう。田中としては先づ專任外

相を置くだらうね。それから拓殖大臣も置けることになつた。今の大臣中から久原を除けることは出來まいから内務の望月を辭めさすだらう。さうするとそれだけでも大臣の椅子が三つ空く。これに政務官位を少し取りかへれば、そこらの獵官運動者は有頂天になつて喜ぶだらうぢやないか。實はね、貴族院の青木一派も内閣が代つて濱口内閣でも出て來れば、あがつたりだから、どうか内閣改造をやつて貰ひ度い。そして大臣や政務官を貴族院から七八人拔いて貰ひ度いと内々相談を持ちかけて居るといふ噂だヨ。ありそうなことだ。

◇……何故政友會が城明け渡しをテキパキやれないかと言へば、さうすると後が四分五裂して收拾されぬやうになるからだ。今までは兎も角田中が居て、久原の金で黨員を縛つて居たが、田中が内閣を投げ出す時は、政友會の總裁も投げ出さねばならぬ時だ。田中が居なくなると政友會にはあと次ぎがない。鈴木喜三郎でも山本条太郎でも小川平吉でも中橋徳五郎でもまた久原房之助でも一方の雄には相違ないが、田中が辭めた、ホイ直ぐにと政友會の大將にはなれぬぞ。内閣が落ち眼になると、陣笠どもは右往左往だ。近頃では『オレは鈴木黨だ』『オレは山本黨だ』と言つて奴等は旦那探しに熱中して居るといふから淺間敷い話ぢやないか。

◇……田中内閣が倒れると、濱口にやらせ度いね。今の民政黨も一向氣に喰はないが、今時中間内閣でもあるまいぢやないか。民政黨の連中は『若槻内閣が倒れた時西園寺さんは少數黨の田中に政權をやつて憲政の常道を確立して居るから田中が辭めれば濱口さ。そうなれば若槻を大藏に持つて來やう。幣原をモ一度外務大臣にして幣原外交の雪辱戰をやらう。内務には伊澤でなくても安達が居るではないか』と閣員名簿を二つも三つも造へてハシヤイデ居るといふ話だ。俺のとこには濱口内閣の外にもいろ／＼の消息を持ち込む奴が居るヨ。齋藤實内閣だ。宇垣一成内閣だ。平沼騏一郎内閣だ。床次竹二郎内閣だといふ譯で後繼内閣は五つも六つも出來る勘定だが、殊に床次内閣説をかつぎ廻る奴のうちには、床次が總理になつて政友會からも貴族院からも薩派からも大臣を驅り集める、そして與黨には新黨クラブや一新會の外に、政友會からちよつと百名ばかり借りて來る、といふから笑はせるぢやないか。政友會の岡崎や無所屬の小泉（策）なども一夜づくりの内閣が六ケ敷い位は知つて居る筈だがね。田中内閣の影が淡くなるのと反對に、陽氣は好くなる、櫻は開く、浮かれ氣分で大臣病者が急に殖えて來て茶番劇がそこゝに起らうとしてゐるから面白いヨ。

歐洲の大陰謀家

波蘭首相ピルスヅスキー

古莊國雄

陰謀、捕縛、入獄、追放、脱走、叛亂、極刑、貧困の連續がピルスヅスキーの過去三十年の歴史であつた。そして本年六十一歳の彼は、首相兼陸相として、ポーランドのホワイト・ハウスと稱ばるるワルショウのベルヴエデレ宮に起臥し、幾度か投獄の憂目に會つた有名なワルショウ城塞を窓越しに眺めてゐる。『余の半生は闘爭、勤勉、貧窮の三字に盡きる』と言つたムツソリーニの經歴も可なり變化に富んでゐるが、ピルスヅスキーの波瀾萬丈なるには遠く及ばない。ピルスヅスキーの如く、しばしば死線を越えた人物は、現代においては勿論のこと、史上にも珍らしい。

ポーランドといふ國は長い間ロシヤ其他の抑壓を受けて、國及び國民そのものが既に悲劇的である。被征服者として、被搾取者としての血と涙が流れてゐる。近世史家は何れも、この國の不運に無限の同情を注いでゐる。更にポーランドの生んだ偉大な作家シエンキウイッチや、ミキーウイッチ、或は現存の農民小説家レイモント等によつて描かれた民族的悲憤と獨立の理想に燃ゆる作品は世界特異の文學である。かうした環境の中に生粋のポーランドの血をうけて生れたピルスヅスキーは生來の反逆兒であつた。熱烈な青年革命家であつた。陰謀の首魁であつた。彼に對して冠せられてゐる代名詞は、曰く『歐洲の大陰謀家』曰く『ポーランドの孫逸仙』曰く『ポーランドの救済者、建國の英雄』曰く『新らしき獨裁官』『偉大なるアイデイア

リスト』等々枚擧の遑なき程であるが、彼は確かに空想家である。夢を夢見る種類の人物である。シベリアの牢獄にあつても、ロンドン、パリ等に潜伏してゐる時でも、彼は常に夢を追ふてゐた。日露戰爭當時、日本と呼應してポーランドに反亂を起し、露帝國を覆へさんと計つた彼は苦心の末に遙々と東京に現はれたが、日本の當路者からは『夢想者』として冷遇された。(この經緯は後段に詳述する。)彼は多くのポーランド人同樣に相反する二つの性格の持主である。豪快であるが、ロマンチックである。國家主義者であるが、社會主義的思想が浸潤してゐる。非常に果斷のやうに見えて、多分にハムレット型の懷疑を藏する。善惡ともにポーランド氣質を備へてゐるのだ。勇敢な軍人であるが、道化役者のやうな樣子もある。厳めしい元帥服を着けてはゐるが專門的な用兵術や軍略は一向知らない。興味深い人物である。不可解な存在である。シラノ・ド・ベルジユラックとドン・キホーテをつき混ぜたやうな人間である。經歷そのものが、直ちに傳奇小說となり、映畫となり得る。

私は、ピルスヅスキー及び、彼によつて率ゐらるる現在のポーランドの國情を、世界大戰後、イタリア、ドイツを初め歐洲諸國に著しく擡頭した反動的風潮の一つとして、無造作に片付けたくないと思ふ。

露帝暗殺の陰謀

ピルスヅスキーはポーランドのウイルナ市に生れたが、その家は傳統的に革命家を出したものである。父は彼の幼時に家出して、諸處を放浪してゐたから、彼及び彼の兄ブロニスラスは母親のみに育てられたと言つてもいい。教養もあり、明敏な母親であつた。ロシア官憲は反逆的思想に滿されてゐる彼の一家にあらゆる暴壓を加へ、遂には家產を沒收して了つたが、彼等の素志は變じなかつた。苦學同樣にしてチャルコウ大學に入つた兄は、間もなく學生の間に秘密結社を組織し、ロシア皇帝に對する謀反を企てた。その事實を探知した官憲は兄が休日で歸省した時、直ちに捕縛し、シベリアの鑛山に流刑二十年の宣告を下した。彼の一家が、悲運のどん底に陷つたのはこの時である。幼い彼の身邊さへ危險であつたので、家庭に於てしばらく中等程度の教育を受けた。が數年の後、彼も同じく兄の學んだチャルコウの町に出て藥學を勉强する事となつた。兄に劣らぬ血の氣の多い彼は學生仲間を誘導して又も秘密の會合を初めたため、放校處分を受け、止むなく故郷のウイルナに歸つた。革命家として最初の試練に會ひ彼の鬪志は高まつた。そこで彼は郷里の愛國者や、社會主義者を一丸として、一つの革命黨を組

殺した。若きピルスヅスキーをリーダーとする革命黨員は何事か世界を驚かすやうな大事を決行し、ポーランドが如何に露國皇帝の統治の下に悲惨なる境遇に置かれてゐるかを中外に宣明しやうと決心した。この目的の爲に、第一に計畫されたのは當時の露帝アレキサンダー三世を暗殺する事であつた。黨員の間から暗殺の實行委員が選まれ、彼もその一員となつた。實行委員は十名で、内二名は婦人であつた。計畫は數度の秘密の會合によつて次第に進んだ。彼等は計畫が漏洩するのを恐れて、會合には必ず合言葉を用ひ、その合言葉も、會合毎に替へるといふほど周到な注意を拂つた。けれどもツアーの密偵政治はなほ絕大なる威力を發揮してゐる時代であつた。深夜の、ウイルナの郊外のある居酒屋の地下室に開かれた彼等の秘密集會に、一人の熱烈な婦人同志の顏が見えないと言つて黨員が不安な顏を見合はした時、早くもコサックの一隊がその家を取卷いてゐた。十二名の同志は悉く捕へられ、例のナガジユカと言ふ鞭で顏や手足を打ちまくられた。そして簡單な軍事裁判の結果、彼は五ケ年間をシベリアの鑛山に送らねばならぬやうになつた。

一八八六年の十二月、身を切るやうな寒風の吹く朝であつた。彼は、多くの殺人犯人や、國事犯人とともに手錠をはめられ、雪中に長い列を作つてシベリアへ送られた。シベリアにおける數年間は長い受難の歴史中でも特に悲惨なものであつた。苦痛と屈辱、恐怖と絕望の日が續いた。泥棒や、殺人犯人や、あらゆる種類の重罪人に混つて、彼は暗い牢獄に呻吟した。この上もない危險な業ではあるが何とかして逃亡の途はないものかと、彼は日夜心を廻らした。牢獄中には同じく逃亡を企ててゐる三人の無政府主義者がゐた。彼はこの三人と共謀して、一ケ月の間破獄逃亡の計畫に沒頭した。しかるに、機が熟して、三日の後にはいよ〳〵脫走を決行せんと手筈を定めた日に、彼は一人の若いロシア婦人の訪問を受けた。彼女はロシア貴族の娘で、しばしば牢獄を訪れ、不運な囚人達を慰めてゐたものである。そして、特に青年ピルスヅスキーが、ただ自由を求むる爲に現在のやうな苛酷な境遇に置かれてゐるといふ事實に對して同情した。ピルスヅスキーも、女性の純情に對して深く感謝しお互に信じ合つてゐた。そこで彼は、三日後に破獄するといふ決心をその令嬢に打明け、脫走の助力を賴んだ。

『また會ふ日まで御體を大切に……』

といふ青年の言葉を聞いて、しばらく沈默してゐた彼女は決然と言つた。

『貴方は不可能の事を實行しやうとなさるのです。どうしても實行しやうとなさるなら、出來るだけの御助けは致しませ

う。しかし御願ひです。どうぞ、目に見えた危險は思ひ止つて下さい。お母さんの事は心配になりませんか。それから貴方自身のことも考へて下さい。妾の心中も察して下さい。妾は貴方を三日の後に殺したくはありません』

眞心を籠めた少女の諫止を容れて、彼は脫走を見合せた。初志を翻さず、脫獄した三人の無政府主義者は牢獄から數町の場所で射殺された。が彼のみは命を全うした。未來のポーランドの獨裁官は可憐なる少女の言葉によつて、危機一髮の生命を救はれたのである。彼は運命の前に柔順となつた。そして五年の刑期を終へ、一八九二年、祖國に放還された。

死刑の宣告

ポーランドに歸つて、鄕里のウイルナに顏を見せたかと思ふや否や、彼はポーランド第一の工業都市ロッヅに現はれた。ロッヅに住む多數の勞働者を相手にして革命思想を鼓吹するといふのが、彼のシベリア生活中に計畫した大望であつた。絕えずストライキの煽動をして、勞働者の自覺と反抗心を激發せしめ、力強い組合運動の達成に努力した。が、彼は相變らず官憲の注意人物であつた。彼の行動は絕えず尾行やスパイによつて監視され、身邊はこの上もなく危險であつた。そこで文字通り神出鬼沒の行動が爾來十數年も續いたのである。彼は先づ學生風が拔け切らぬので、官憲の眼に付き易いといふ事を覺つた。だから、勞働者風に髮を短かくし、名前をジウクと付けて、純然たる工場勞働者の姿となつた。そして印刷工の群に入り、肉體的勞働に專念する傍、ドイツの社會主義者達の著作を耽讀した。目的は勞働者と學生を糾合した秘密結社の組織である。當時はロシア官憲の彈壓が嚴しく、ロシアにもポーランドにも、有力な秘密結社が成立してゐなかつたが、彼の努力は空しからず、歷史的の意義を持つP・P・S・即ち現在ポーランド政界の第二黨であるポーランド社會黨なるものが生み出された。

彼は工場から工場へ寧日なく奔走した。そして各處の勞働者に秘密結社參加の勸誘を行つた。三人の同志が定まれば『三人の評議會』を組織し、その代表者は中央評議會に出席する權利を持つ事となつた。彼の理想は次第に全國的に勢威を張り、遂には"Robotnic"(勞働者)なる週間新聞を發行して主義の宣傳を行ふに至つた。ロシア官憲はしば／＼秘密結社の暗殺團によつて暗殺された。官憲は今更ながら秘密結社の威力に驚き、新聞の編輯者及び印刷者の所在を發見しやうと努力したが、徒勞に歸した。ピルスヅスキーはその當時實に巧妙に逃げ廻つたものである。彼は一人の役者と知り合になつて變裝術を學んだ。」

浮浪人の風をするかと思へば紳士になる。最近の學生は勞働者に早變りしてゐる。ある時などは料理屋の奥の集會にポーイに化けて、出席し、會集卅名餘は皆捕へられたが、彼のみは悠々と逃れた事がある。官憲はいよ〱躍起となつた。彼の活はます〱深刻となつた。ポーランド人全體に對するロシアの動振壓迫は前例ない程猛烈になつて來た。彼はその暴壓の警察網を潜つて、ワルショウに現れ、グルザボウスキー廣場において、一大示威運動を起した。警官隊と軍隊が群衆を包圍した。三百名の男女が見る間に射殺された。廣場にはどす黒い血が流れた。が首謀者の彼は相變らず包圍の網の目を拔けて、二日後にはオスカーといふ變名でロッヅに現はれてゐた。そして再び『勞働者』の秘密出版を初めた。ポーランド人のすべては、極度の密偵政治に戰慄し、凡んど無言の中に陰鬱な生活を送つてゐたが、どこからともなく〱發行されて、不思議な方法によつて配布てされる『勞働者』を見て、

『闇の夜にベルが鳴つてゐる。確かに力強いベルが鳴つてゐる。誰かゞ、我々の不幸を見守つてゐるのだ』

と囁き合つてゐた。

一九〇〇年の春、ピルスヅスキーはロッヅ市における彼の下宿の一室で、革命黨員の密會を開いた。その頃では熱心な黨員達も、極度の恐怖に襲はれてゐた。十人の黨員が集まれば、必ず一人はスパイであつた。集會の場所はすべて官憲の眼が光つてゐる。そこで止むを得ず、狭い下宿を選んだのであつた。が危險は刻々に迫つてゐた。警官隊は既にその夜の集會を探知してゐた。感づかれた事を知らぬ同志達は靜かに協議を初めた。卓上には新らしく刷られた『勞働者』が積まれてゐた。如何なる方法で迅速にこの新聞を配布しやうかといふのがその夜の主要な問題であつた。協議半ばにして戸外には物々しいサーベルと靴の音が聞えた。續いてドアが蹴破られた。次の瞬間には、黨員二名が射殺された。ピルスヅスキーは特に嚴重に縛められた。そして警官、及びコサック兵に衞られて、警察廳に引立てられた。二ケ月に至る審理の後、彼には死刑の宣告が下された。高等法院に上告したが、却下され、彼はワルショウ城寨の有名な第十號檻房に收容された。それは今までに數千人のポーランドの愛國者達が、斷頭台に上るまでに必ず容れられた歴史的の檻房であつた。

變裝して脫走

陰慘な、ポーランドの運命を物語るやうな牢獄、過去七十年の間に六千人のポーランド人が殺された城寨、その中に打込ま

れて生きて返つた例しはない。黨首を失つた同志達は、何よりも、まづピルスヅスキーをこの牢獄からポーランドの他の牢獄か、或はロシア國内の牢獄に移さねばならぬと決心した。何等かの方法で他へ移せば、萬一脱走の機會もあらうと考へたのである。そのためには彼が佯か作りの狂人になるに限る。狂人となつて荒れ狂へば、恐らく官憲は彼を他の病院付の監獄に移すであらう。萬策盡きてこんな方策を案出した同志達は、如何にしてその方法を獄中の彼に通ずべきかに頭を惱した。が幸にも一つの手段が發見された。第十號檻房の補助看守にアレキサンダー・シーデル＝コウといふロシア人がゐた。看守には珍らしい正直な同情深い男で、囚人達は彼を『白い小鳩』と呼んでゐた。その妻はポーランド人であつた。しかも、革命黨員であるマルヤ・ヒルデブランドウナといふ若い女性は、看守の妻と知り合ひであつた。だから同志の密書は、看守の妻の手を經て、案外に安々とピルスヅスキーの手許に屆いたのであつた。密書を受けた彼は直ちに狂人になり濟した。前記のヒルデブランドウナ女史は當時の監獄醫ドクター・パテツクの談話によつて短かい回想錄を著してゐるが、それによればピルスヅスキーが、技巧の限りを盡して、眞の狂人になり濟し、專門醫の眼を瞞いた有様が躍如としてゐる。彼は第一に食物を拒んだ。何故食べないかと言へば、毒藥が混つてゐるからと答へる。水を飲めと言へば、看守に先づ毒味をせよと要求する。そして手當り次第に亂暴を働く。ラヂウイロウイチといふシベリア人の監獄醫が彼の容態を見て、全く一種の精神病者と見なし、彼を慰める手段として、果しなきシベリア平原の話や、雪の風景の話をすれば、彼の精神狀態は鎭靜して、快くその話に耳を傾けるといふ有様であつた。長い間の精神鑑定の後、彼はいよ／＼精神病患者と決定し、魔のワルショウ城塞からペテルブルグ（現在のレニングラード）の病監に移送される事となつた。『白い小鳩』の看守はその由を妻に傳へた。妻は友人のヒルデブランドウナに告げた。多くの同志はその吉報に小躍りした。

ピルスヅスキーは嚴重な監視付でペテルブルグの病監に送られたが、そこから脱走するにはどうしても監獄附の醫者の助力を借らねばならない。同志は誰彼と物色した後に、意外な適任者を探し出した。それはマヅルキーウイチといふペテルブルグ大學病院の精神病醫であつた。そしてピルスヅスキーの舊友である。この男を巧妙な運動でペテルブルグの病監附とした。狂人ピルスヅスキーは思ひもよらぬ場所で、舊友から看護されるといふ運命を持つたのである。そして脱走の計畫は急速に進められた。或夜、マヅルキーウイチは醫員用正服をピルスヅキーに與へ

今夜の十二時に看守が交替する。その時が唯一の機會だ」と告げ、病室のドアに錠前をかけず退いた。

彼は久々に自由の身となつた。病監の附近にはトロイカを用意して同志が待つてゐた。彼はトロイカの上で素早く服裝を變へた。そして同志から貰つた僞造の旅券と、金をポケットに押込み、ウイーンナ行の夜の急行に飛乘つて、快い笑を漏らした。

日露戰爭當時の策動

ウイーンナからフランスへ、更に英國へと彼は續く二年間を英、佛兩國の間に暮らした。生活の糧はポーランドの同志から送られたが、極めて乏しいものであつた。パリ滯在中はポーランドの留學生と言ふ名目であつたが、ロンドンでは單なる亡命者として一層悲慘な日を送つた。英國官憲も冷酷な待遇を加へた。そして、二度目のパリ滯在の頃、彼は最初の妻を迎へた。マルヤ・ユルキウイッチといふ年若いユダヤ系の美人であつた。ての結婚は全く亡命者らしい、かつ革命家としての特色を發揮したものであつた。新郎新婦とも一着の晴着も作らず、教會の世話にもならなかつた。新婚早々、彼等は汚ない二室の間代も拂へなかつた。食物を買ふ金も無かつた。數週間をほとんど馬鈴薯ばかりで過ごした事もある。貧窮のどん底にあつても彼等は精神的に固く結合されてゐた。

一九〇二年、彼は輝かしい希望に燃えて故國に潜入した。それは、日露間の戰機が熟し、大ロシアの國情が動搖しはじめたからである。この機會にポーランドにある軍隊を使嗾し、一擧にして年來の理想を實現しやうと勇躍した。遂に日露は開戰した。ポーランドに歴史的の幸福が舞込むものと彼は確信した。

ロシアは滿洲の戰地に送るべくポーランドにも大動員令を下した。けれどもその動員は失敗を示した。ピルスヅスキーは自ら、ポーランドの軍團を組織し、日本と呼應して、ロシアの腹背を突く計畫を立てた。或時は墺、露の國境に現はれ、或時は危險を冒してロッヅの工業市に現はれ、同志とともに策動した。が、最も必要なものは金である。小銃である。彈藥である。彼等はその必需品を得る爲に、日本政府と交渉する必要を覺つた。日本からそのすべてを借入れねばならない。ピルスヅスキーは自ら日本訪問を思ひ立つた。そしてアメリカ經由、東京に現はれたのである。彼は日本の外務當局と長い間折衝を重ねた。日本の當路者達は先づ彼の大膽なる態度と巧みな口舌に驚かされた。そして、ポーランドの反亂は今が絶好の機會であると云ふ事を是認した。ピルスヅスキー援助の方針が日本政府の大官達の間に秘密に決定した時、意外な妨害者が現はれた。そ

かは同じくポーランド人でロマン・ヅモウスキーと呼ぶ者であつた。彼はピルスヅスキーの反對者であり、ピルスヅスキーの跡を追つて、反對の宣傳を行ふために來朝したのである。彼はポーランドの國情は未だ革命の機運が熟してゐないと說いた。決して早まつてはならぬ。ピルスヅスキーの如き、笑ふべき夢想家の言を信ずれば、日本は恐るべき失敗を招くであらうと、彼は日本の朝野に說き廻つた。ピルスヅスキーを夢想家とし、單なる冒險家とし、無力な謀反人と斷定したヅモウスキーの言は、日本の當路者を動かした。先に、徹底的にポーランドを援助しやうと言つた大官も、ピルスヅスキー及びヅモウスキーに向つて次のやうな忠告をするやうになつた。

『日本はポーランドと共同戰線を張る時機ではないと思ふ。諸君はロシアと戰ふといふよりも、その前に諸君自身と戰はねばならぬ。先づ諸君自身の爭ひを止め、その後に力强い獨立運動を初めねばならぬ』

ピルスヅスキーの望みは絕望に歸した。日本側から見れば一場の夢に過ぎなかつた彼の理想は覆へされた。故明石大將等が、その前後にポーランドにあつて、盛んに彼地の反亂を煽動したといふ事が、日露戰爭の重要なエピソードとなつてゐるが、ピルスヅスキー來朝の時、日本側も眞劍になつて、彼及びポーランド援助に力を盡したならば、日露役は更に異つた結果を示したであらう。

夢想家として一蹴された彼は、英船に乘り、印度洋を越えて歸國の途についた。出發前の大望に引換へ、何の收穫もない歸路ではあつたが、彼の心中は案外に晴々したものであつた。しかも、完全に世界を一周した彼は、短時日ではあつたがアメリカ文明を見、日本の國情に觸れて、非常に得る處が多かつたと告白してゐる。

日本に使して空しく歸つた後の彼は、生涯の中で最もロマンチックな月日を迎へたのであつた。日露の戰雲は未だ止まない。ロシア各地においては次第に革命運動が勃發する。次々に動員さるるロシア軍隊の中には、革命思想を抱いてわざと入隊する者も多くなつた。彼は得意の變裝、變名を用ひて、各處に出沒した『決死隊』といふものを組織したのもその頃である。その使命はロシアの軍隊を動搖せしむるにあつた。彼等は軍隊輸送車を襲擊して、小銃、彈藥を奪つた。ワルショウの街上で、覆面の一隊が、ロシア軍隊を暗殺した。金貨の輸送車が掠奪された。それ等はすべてピルスヅスキーの指揮する『決死隊』の所業であつた。ロシア官憲は必死になつてその檢擧に努めたが、戰時の混亂時であり、彼等の活動が神速機敏であつた

ため、失敗を重ねた。或時、ペテルブルグから、ワルショウの軍事司令官宛莫大な金貨が輸送され、その車輛は三千名の武裝兵によつて衛られてゐた。然るにワルショウを距る數マイルの地點で、その列車は軌道の破壞のため脫線した。そして護衛兵の大半は混亂の中に射殺された。積み込んだ貨幣は悉く盜まれて了つた。ロツヅでは火藥工場が爆破された。ロシアを呪ひ、革命を高調する秘密文書が各方面に配布された。引き續くこれ等の怪事件が、すべて『ウイクトル』と變名して決死隊を自在に操るピルスツスキーの動きであつた事は言ふまでもない。ロシア官憲は必死となつてこの恐るべき變亂の首謀者、近代的のロビンフツドを檢擧せんと焦つたが、彼は巧妙に逃晦してゐた。或時は堂々とワルショウ一流のホテルに一週間も滯在した事がある。ドイツの商人といふ觸込で、流暢にドイツ語などを使ふ彼の態度には一點の怪しい節もなかつた。或時はロシア士官の正服を着用してロツヅの町を濶歩した。更に彼の大膽さを示すエピソードがある。或時、彼の部下五六名がロシアの派遣分隊に捕獲された。彼は部下を救ふためにロシア軍の大佐の服を着込み、軍司令官からの命令書を僞造して懷に入れ、單身分隊に乘り込んだものである。分隊長は上官の訪問に敬意を表した。そして、軍司令官からの命令書を恭しく受取つた。命令書には捕虜の全部を森に引出して銃殺せよとあつたが、彼はこの執行は自分に任せよと言ひつつ、數名の兵士に捕虜を衛らして森に向つた。そして、兵士に厳命して先づ捕虜を釋放せしめ、自分は兵士の隙を窺つて、その後から逃走したのであつた。

ポーランド人の革命運動が白熱するとともに、ロシアの壓迫は益々痛烈となつた。些少の嫌疑者もシベリア或は極地に流刑された。或は親子諸共てワルショウ城塞の斷頭台に上つた者もある。まさに史上稀に見る恐怖政治の現出であつた。あらゆる種類の彈壓方法が次々に案出されて全ポーランドは凄慘な空氣に蔽はれた。ピルスツスキーはその混亂に乘じて大規模の動亂を計畫し、遂に記念すべきワルショウ劇場廣場の大示威運動となつたが、ロシア軍警の武力には敵し難く、街上には徒らに夥しい愛國者の死體を晒すのみであつた。引き續く不安と、騷亂による犧牲の甚大と、それに比例して効果の顯はれないのを見て、さすがのポーランド人も反露運動に疲れて來た。ピルスツスキーの指令も思ひのままに行はれぬやうになつた。しかも日露間には緩和の折衝を見るに至つた。日本との抗爭から手を引けば、ロシアのポーランド壓迫は充分にその威力を發揮し得るのである。今は革命の不可能事であるといふ形勢が明白となつた。彼は斷然決死隊を解散し、再擧を計るために一時姿を隱

して了つた。

歐洲大戰に際して

鳴を鎭めてクラコウの町に潜伏した彼は、妻とともに下宿住居をした。何等收入の道も無く、同志からの醵金も絶えたので、彼の生活は再び窮迫した。全くのボヘミアン・ライフであつた。が彼はその間にロシア語やフランス語の勉强をした。ドイツ語や英語は既に完全に近く讀み且つ會話も心得てゐたがその方面の復習も怠らなかつた。彼は好んでドイツの軍事專門家の書いた傳記類などを讀んだ。それ等は無論空想家である彼の飽くなき空想を滿足させるものではなかつたが、彼の心に天の攝理に從ふといふ運命觀を根强く植付けた事は注目すべきである。も早、個人の力などで何事も爲し得ないといふ事を彼は悟つた。ポーランドの革命運動は當分絶望である事も洞察した。自然の力を借らねばならぬ。ロシアと墺匈國の間には暗流が漲つてゐる。この二大勢力の間には早晩鬪爭が起る。その機に乘じてポーランドの力を墺匈國に加へ、ロシアを倒す以外に適當な手段は無いものと考へた。その爲に彼はクラコウにおいてライフル・クラブといふものを組織した。これは後年、有力なポーランド軍團の前身であり、遂にはピルスヅスキー及びポーランドの現在の地位を築き上げたものである。夢を追ふ彼は、世界大戰といふ未曾有の大動亂が起る事は豫想しなかつたが、墺露の將來は確實に見極めて、ライフル・クラブを緊急の用具とし密かに時機を待つたのであつた。

バルカンの一角に口火を切られた國際間の紛爭は歐洲全土に空前の戰雲を捲き起した。ライフル・クラブを率ゐて墺匈軍に投じた彼は、先に反露の陰謀を企てた當時に比べて新たなる局面を展開した。そして彼は墺軍とともに墺露國境を越えて最も早くロシアの本土に侵入した一人であつた。

一九一五年の夏からは彼は陸軍大尉としてポーランドの一部隊を率ゐてゐた。彼の重要なる任務は、ロシアの軍隊に編入されてゐるポーランドの兵士達に反露思想を鼓吹し、ピルスヅスキー自身の組織してゐるポーランド軍に加入せしめることであつた。墺國陸軍の最高幹部も、ポーランド軍團を利用することは對露戰略に何よりも有利であると信じ、ピルスヅスキーを優遇した。彼は例によつて危險を冒した。ポーランドの農民に變裝して敵陣に近づいたり、銃火の中を潜つて敵の情勢を報告したり、彼の行動には墺軍將士も驚嘆してゐた。或時彼は、墺軍の前哨から程近い地點にロシアの一支隊が屯してゐる事を聞いた。しかもそのロシア軍は大部分ポーランドの兵士をもつて固

められてゐた。彼はロシアの十人の兵隊を率ゐて、一人その陣地に向つた。步哨が彼にピストルを發射した。彼は兩手を擧げて反抗の意志がない事を示し、悠々と步哨に近づいた。そして、自分はロシアのスパイである。しばらく墺軍に捕へられてゐたが、只今墺軍の重要な秘密情報を報告する爲、敵地を脱出して歸つたのであると、眞しやかに述べ立てた。かくて彼はロシア軍の陣營に入り、ポーランドの兵士達に脱出を勸めた。數刻の後、四百餘名の武裝した兵士は彼に從つて脱走し、墺軍に參加した。この時の殊勳によつて墺國司令官は彼を大佐に昇進せしめんとしたが、彼はそれに滿足せず、少將にせよと要求した。何等の軍事的教育を受けぬ者を大尉から一躍少將に昇す事は、先例も無い事だし、墺國側は途方に暮れたが、彼の機嫌を損ずれば莫大な損害となるので、服裝だけは少將の軍服を着せるが、少將としての給料は支拂はぬといふ珍案をもつて彼を說得した。多くの將校が十數年或は數十年を費して上り得る將官の位置を一年足らずして獲得し、金光燦たる司令官の正服を着けて彼は殊の外得意であつた。かくして彼は表面墺國陸軍の優遇を受け墺軍のために努力してゐたが、內密にはポーランドの運命のみを考へてゐた。機を見てポーランドの眞の獨立を計らねばならぬ。その手段として彼はライツル・クラブ以上に有力なる Polska Organizacja Wojskowa（P.O.W.）を（として有名なポーランド軍團）を組織し、秘密裡に全國的の連絡を取る事となつた。當時彼はワルショウにあつて二重生活を送つてゐた。晝間は墺國陸軍少將としてイューロップ・ホテルの一室を占めてゐたが、夜になれば平服に着替へて人知れず、マルスザルコウスカ街の秘密集合所に赴き、待合してゐる同志とともにP.O.W. の策戰計畫に熱中してゐた。獨墺軍に味方するとは言へ、內密にポーランド軍團の成長に努めてゐる彼の行動を探知して、最も憤慨したのはドイツの軍事當局であつた。少將の榮位にあつて、傲慢なる彼の態度と、ポーランド軍團が既に專屬の火藥庫、兵器廠等を手に入れたる事實を見て、急速にポーランド抑壓の必要を感じたのは有名なドイツの司令官ベルンハルディイであつた。ベルンハルディイは墺國司令官と合議の上、ピルスヅスキー及びその部下を最も危險なる戰線に出動せしめた。第一回の戰鬪において彼の手兵の三分の一は戰死した。更に危險なる第二の進擊を行へと命令されて、ピルスヅスキーは斷然拒絕した。そして生き殘つた部下とともにワルショウに歸つた。彼は直ちにドイツ軍に捕へられ、即時軍法會議に附せられた。彼に冠せられた罪名は『上官の命令に背き、前敵に對して卑怯なる行動を爲せり』といふものであつた。彼は一言の

辯解もせず、不動のまま、明朝夜明の頃、ワルショウ城塞において射殺すといふ極刑の宣告を聞いた。二十五年前、危ふく一命を奪はれんとした城塞に再び危險な一夜を明すことになつた彼は、愈々最後の時と覺悟して、

『余の全身に白鷲のポーランド國旗を卷き付けて呉れ。これが死に際して唯一の願ひである』

と懇願した。午前三時、一人のドイツ將校が彼の獨房に現はれた。ピルスヅスキーはつか／＼と將校の許に進み

『死の用意は出來てゐる！』

と叫んだ。將校は大聲をあげて笑つた。

『慌ててはいけない。君の處刑は取消されたのだ。墺國の司令官が君を射殺する事に反對したのだ。君は今朝放免されて、クラコウに送られる』

二年間の大戰參加の後、最後に死刑の宣告を受け、夢の如く刑を免かれて彼は久々に靜かなるクラコウの自宅に歸つた。彼はしばらくフランスに逃避して形勢を傍觀せんとしたが、墺國側は彼をポーランドの攝政委員の一人に任命して、その歡心を買はんとした。墺匈國、ドイツ、ロシアの三國から歷史的に壓迫され、その勢力に蹂躙されてゐたポーランドは、歐洲大戰の末期においても、かくの如く國際的エゴイズムの犧牲に供されたのである。胸に大望を抱くピルスヅスキーは墺國側の意見に從つて再びワルショウに現はれた。當時は彼の命に從ふ軍團の全員五萬を越え、彼の命令一下、ドイツの非常軍事統治に對して反抗運動を起すべき實力が備つてゐた。しかしながら、彼は部下の血氣を戒めた。

ドイツは打續く敗戰に國內の動搖を來し、その結果、ポーランドに對しては狂暴な態度を示すやうになつた。ベヱセレル將軍は、すべてのポーランド軍團はカイゼルに對して忠順の誓約を行へと命令した。ピルスヅスキーはこれに對して再び反抗した。彼自身その命令に從はぬばかりか、彼の部下全部も、その無法なる所爲に反抗するであらうと豪語した。二日の後、攝政委員の重職に在るピルスヅスキーは、獨軍の手に捕へられ、手錠を嵌めたまま軍法會議に送られて、十年間の懲役を宣告された。そしてマグデブルグのフォルトレス監獄に收容された。墺國外務當局の釋放運動も及ばず、未來のポーランド獨裁官は、いよ／＼ドイツの淋しい獄中で一命を終るかと思はれてゐた。

名もなき一囚人として彼は獄中に十四ケ月間を過した。絕望の極に達して、身心ともに疲れ切つてゐた。その時、彼には全く思ひもうけぬ吉報が齎された。ベルリンに革命が起つて、ドイツ帝國は遂に崩壞した。そして、新らしく生れた革命政府

は、彼をポーランドの國民的英雄として歡迎し、直ちにワルシヨウに歸還せしむるといふのであつた。

晴のワルシヨウ入り、街頭には四萬以上の男女が群つて、ポーランドの自由の爲に、一身の安危を忘れた劇的殉難者を歡迎した。メロドラマの場面は盛んに轉換する。彼はまたまた花々しい役割を演ずるやうになつた。

獨裁官となる

一年以上の入獄の後、彗星の如くワルシヨウに歸つた時、世界の形勢はもとより、ポーランドの國情も一變してゐた。國民の輿望を負ふた彼は、先づ、社會主義的の假政府を組織した。長期の戰亂によつて、無殘に荒廢せしめられた國土に對して、新らしき國家を建設するのである。彼は上は大統領から下は郵便配達夫まで新たに任命せねばならなかつた。しかも、ポーランド新國家の建設に障害を與へるものに、ウクライナ人の侵入あり、ボルセヴイーキの脅威もあつた。トロツキーが『コサツクの馬にラインの水を飮まして見せる』と豪語したのもその頃である。かくの如き内憂外患を切り拔け、ポーランドが獨立國として世界地圖を變革し得たのは一大奇蹟とも言ふべきである。それは全國民の愛國心と、指導者の熱誠、手腕に依る事は言ふまでもない。

ポーランド建國の大業が初めて目鼻をつけたのは一九二一年、リガ條約においてモスクワ政府と平和を結んだ後である。

翌一九二二年、彼は假政府大統領を辭して、參謀總長の職務のみを勤め、一九二三年には元帥となつてワルシヨウ郊外に引退した。彼が活舞臺の表面から暫く姿を消したのは、餘りに激しいポーランド國内の黨爭に耐えられなかつたからである。國内には三十の政黨が分立して、互に勝手な熱を吹き合つてゐた。ビスマルクはポーランド人を評して、

『十年の自由を與へたら、彼等は自らその國家を破壞するであらう』

と言つたが、大戰後のポーランド人はその政治熱、政黨趣味を極度に發揮したものであつた。ウイトスといふ一農夫が、小農黨を率ゐて立ち、長靴をはき、ネクタイを着けず、全くの農業勞働者の服裝のまゝで、首相の椅子を占めてゐた事もある。政界には次第に左傾的黨派の勢力が增大した。そして第一次の大統領ナルトウイツは壯漢のために暗殺された。國民議會はピルスヅスキーの舊友なるウオジーチヨスキーを後任大統領に選擧した。ウオジーチヨスキーとピルスヅスキーは不思議な運命を持つた友達であつた。卄數年前、彼等は共にロンドンに亡命

してゐた。同一の牢獄內で苦み合つた事もある。シベリアの牢獄にも同時に送られた。そして今は兩人とも國家的重職に就くやうになつた。しかも、數ケ月の後には、兩人の間に深刻な鬪爭が開始されるのである。

獨立の國家として認められたが當時のポーランドは貨幣價値の下落、經濟界の不況、失業者の增加等あらゆる悲觀材料に滿たされてゐた。議會は小黨分裂の結果一個の演說練習場となり、國家の前途は暗澹たるものであつた。首相スクルジンスキーの辭任後、ウイトスが再び內閣を組織したが、國內の混亂は停止すべくもなかつた。

表面引退を裝ふてゐたピルスヅスキーはこの時絕好の機會として政府反對の烽火をあげた。彼はワルシヨウの有力な新聞に、新內閣は腐敗分子の集團に過ぎず、時局を救ふ能力なきものと痛烈に攻擊した。政府はその新聞を押收するとともにピルスヅスキーを捕ふべく軍隊を派遣したが、彼は機敏に逃走した。一方彼を禮讃して、ウイトス內閣を倒壞せよといふ宣傳ビラがワルシヨウ全市に撒布せられ、カフェーにおいても工場においても、至る所の街上にもピルスヅスキー萬歲が唱へられた。

その夜、大戰當時ポーランド軍團にあつて彼の部下たりし騎兵三聯隊はウイスチユトラ河を横切つて市中に進軍し、彼の指揮を仰ぐ旨を要請したので彼はその希望を容れ、叛軍の陣容は直ちに整つた。大統領はこの報に驚愕し、首都に流血の慘事を生ずる事を避けんとしてピルスヅスキーに會見を申し込んだ。奇しき運命の兩雄はポニアトスキー橋の上で意外の對面をした。兩人の背後には各々武裝した兵士が控へてゐた。

『國家の爲に憲法を尊重して貰ひ度い』

大統領は先づ口火を切つた。

『遺憾ながら合法的行動を取る時期は過ぎ去つたのである』

ピルスヅスキーは明快に答へた。

『ではこの上、商議を續ける必要はない』

大統領の顏が蒼白となつて、會見は終つた。

政府軍は直ちに市街の防備に努めたが、政府軍中の步兵二箇聯隊も叛軍に投じて大勢は決した。叛軍は堂々と市街に進み、大統領の官邸たるベルヴエデレ宮以外、軍略上重要なるすべての地點を占領した。二日間の市街戰によつて千四百餘の死傷者が生じた。力盡きた政府軍はワルシヨウより五マイルのウイラナウに退却し、七十歲の老大統領は退却部隊の先頭に立ち少なからぬ同情を惹いた。

一九二四年五月十五日、政府反對の旗を擧げて後四日目にピルスヅスキーはベルヴエデレ宮に入つてポーランドの獨裁官と

なつた。議會は彼を大統領に選擧したが、彼はそれを辭退して、政黨政派に關係なく、且つ政治上の經驗を有せざる一化學者イグナス・モシキ博士を推擧した。而して前鐵道大臣バーデルを首相とし、自身は陸軍大臣となつて兵馬の權を總べ、傀儡的大統領を操縱して、政治の實權を握つたのであつた。

彼は從來の職業的政治家によつて政治の進歩が防げられ、政界が極度に濁つてゐる事實を認め、第一にその改革に志した。先づ憲法の改正を行ひ、議會閉會中は大統領によつて議會の權能を行はしむる事とした。かくて行政部に特殊の立法權を有せしめ、更に議會解散の權能をも與へたのである。憲法を改正して後、かくの如き果斷な方法に出でたので、殆んど議會の權能を無視したやうな形であるが、憲法違反の行爲とはならなかつた。これはポーランドの國情、わけても大戰によつて荒されたポーランドを救濟する爲に止を得ぬ手段であつた。彼は國民の信賴を受けて快腕を揮つた。ムツソリーニ蹶起時代のイタリアと一脈通ずるものが當時のポーランドであつた。そしてイタリア經濟界の復興と同樣に、ポーランドの貨幣價値は安定し、貿易狀態も恢復し、失業者の數も激減した。しかして一九二六年十月、ピルスヅスキーは自ら首相となり陸相を兼攝し、相變らず完全にポーランドの政權を握つて現在に及んでゐる。同じく獨裁的權力を揮つても、彼はムツソリーニの如く全然專制獨裁主的行動には出でない。飽迄合法的に出るのが彼の特徴である。そしてムツソリーニに對する如く極端なる反抗の叫びを擧げる者はポーランド國内及び國外にも見當らないやうである。この點は彼が常に狡猾なる責任廻避の手段に出でる爲であると說く者もあるが、彼の經歷が悉く愛國的至情に出で、彼の思想行動に多分の人間味を藏する爲である事は見逃せない。

ポーランドの前途

ポーランドの前途はいろ／＼な意味で希望に滿ちてゐる。農產物其他自然の恩惠に富んだ同國はロシアの記者メレスコウスキー氏が『冒險家と使徒が奇妙に混合されたやうな廿世紀における最も特異な人物』と評した純ポーランド的なピルスヅスキーを先達として向上の一路に進んでゐる。彼は老いてゐる。が彼はどこまでも若い。大統領を容るる筈のベルヴエデレ宮を自分の官邸として威張つてゐるのも彼の若さの現れである。ムツソリーニのやうに敵を持たぬ。彼の居室には『謀叛人』と題する十九世紀の古畫が揭げられ、訪問者は必ず、それによつて、老いて益々盛んな彼の意氣に打たれると言つてゐる。彼が大統領たらんと欲すれば樂々とその地位に就き得るにも拘らず、そ

の地位を他に讓つて、どこまでも眞の責任ある重職を守る所以は、數世紀間外國に壓迫されたポーランドの歴史を一新して、歐洲政局に確固たる地位を築きたい爲である。彼が若き謀判人時代より、苦しみ拔いた亡國の怨みを次の時代に殘したくないからである。

大ナポレオンは嘗て『餘の生涯の大失策は、歐洲平和の隅基石として強大なるポーランドを樹立させる事が出來なかつた爲である』と言つてゐた。世界大戰後の新歐洲にあつても、ポーランドは平和の鍵を握る重要な立場にある。

一九一九年六月ヴェルサイユ條約によつて獨立を認められたポーランドはバルチック沿岸から上部シレシアに至る國境を確定し、引續きドイツ、チエッコ・スロヴアキア、リスアニア、ルーマニア等の境界を明確に定めポーランド愛國者五百年の夢を初めて實現せしめたのであつた。しかしながら、墺匈國の崩壞によつて苦もなくガリシアを奪還したのは例外として、ドイツ關係、リスアニア關係には將來の禍根を殘す種子が蒔かれたのである。即ちドイツはポーランドの爲にポーゼン及びシレジア、ウエスト・プロシアの一部を含む國土の十分の一を失へるに對して甚しく憤慨した。これによつてポーランドはバルチック海岸に出づべき唯一の通路を得、ダンチヒを自由港たらしめたが、ドイツにとつては絶世の遺憾事であつた。リスアニアも同樣である。ウイルナ市及びその附近がポーランドに合併されたため、彼等の苦痛は甚だしく、現在に至つても、ポ、リ兩國間の紛爭は絶えない。

更に對露、對獨の關係は英、露抗爭の影響も加つて複雜多岐を極めてゐる。新しく締結された獨露條約は單なる經濟的協商以上のものであり、兩國がポーランドに對して共通の利害關係を有するため對ポーランド共同作戰のために生み出されたものである。これによつて兩國は、ポーランドの輸出入に極端な制限を行つてゐる。かくの如く國境の三方を露獨及びリスアニアによつて圍まるるポーランドの地位は安泰ならざるのみか、著しく爆發性に富んでゐると言ふべきである。ポーランドの前外相スクルヂンスキーは『四千キロメートルに亘る國境の中、七割五分は絶えず敵國より脅威され、殘りの二割も安全ではない』と告白した事がある。實にルーマニアとラトヴイアを除く國境はすべて問題を孕むといふ狀態であつた。しかして列國間においては安全保證のため數度の條約が結ばれたが、國際關係といふものは利己主義以上の何ものでもない。最近におけるポーランド、リスニア間の急迫した關係を初め、中歐の空氣は眞の『平和』といふものから絶緣されてゐるものと言はねばなら

ぬ。危險は隨處に横つてゐる。ポーランドが完全にこの生存權を保つや否やも將來に殘されてゐる。

更に國内の政情は相變らず紛糾を極め、急進農民黨、穩和農民黨、國民キリスト教ユニオン、ポーランド社會黨、ルセニアン黨、共産黨、ユダア人黨、少數國民黨、其他大小の黨派が鬩ぎ合つてゐる。これ等はピルスヅスキーの政界革新によつてしばらくは鎭靜したが、ポーランド人の特徴である政爭は對外的に國家の基礎が安定するとともに、必ず惹起さるべき運命にある。かくの如く内外ともに多難なる局面に向つて、壯者も及ばぬ活氣を示し、對英、露、獨の關係を巧みに切拔け、着々としてポーランドの位置を向上せしめつゝある彼の功績は列國の等しく確認するところである。

彼の特質

彼は、過去のポーランドが、その四圍の狀勢により、止むなく武力に依つて獨立を計らねばならなかつたと告白してゐる。そして現在においては主として平和的折衝によつてすべての國際間の紛爭を處理すべきものと主張してゐる。彼は平和の使徒でありながら一時の方便として武人の服を着用したのである。

彼は言ふ。

『我等は我等の隣邦に對して常に平和の提唱者であらねばならない。歐洲における新興の諸國、經驗に乏しき國の政治家達はヒステリカルな姑息手段をもつて外交上の最上政策と誤解してゐるが、我等はそれを避けねばならぬ。我等はポーランドといふ新らしい建物を平和と安靜の間に仕上げねばならぬ。これは非常なる大事業である。が、危險なる非常手段を用ふる事は絶對禁物である』

この意味において彼はムツソリーニを罵つてゐる。フアシズムを冷笑してゐる。

彼は卑賤より出でて、異常なる事業を完成したが、ナポレオンではない。彼の表面の形式は獨裁官であるが、彼は『鐵腕の人』ではない。彼は生來の自由人であり、彼の思想は社會主義の思潮によつて陶冶されゐる。若し、ポーランドの大衆が、彼を國王に祭り上げんとしても彼は即坐に辭退するであらう。それは現在の彼の位置から見て必しも不可能の事ではない。しかしながら彼は立憲共和政體の守護者である。如何なる種類のものであつても、それが專制政治であり、暴壓政治であれば彼は心から嫌惡してゐる。彼のタイプはムツソリーニでもなければレーニンでもない。しかも彼はポーランドの歴史あつて以來、最も巧妙にポーランドを建設した人物である。純ポーランド人

る彼が、獨特の風格をもつてポーランドを治め、同時に今後の歐洲政界に如何なる役割を演ずるかは最も興味深い問題である。中歐政局の現狀やポーランドの社會施設其他にも言及したいが彼に關する短い評傳の最後に彼の同國人であるマクス・ゴリンスキー氏の論文を紹介して筆を擱かう。

『彼はポーランドが軍隊と法律家によつて形成された時代に現はれたものである。そしてその兩者が不用となる時代においては、惜しげもなくそれ等と別れる人物である。ビスマルクは常にポーランド人を嘲笑して次のやうに言つてゐた――（ポーランド人といふものは詩の中に生きる政治家であり、政治の中に生きる詩人である）――。彼はビスマルクの嘲笑に似た思想を持ち、行動をした。しかしながら、彼はその欲望に滿々たるロマンチシズムを持つと同時に、その手段としては冷靜なるリアリズムを持合せてゐた。進むべき時には進み、退くべき時には退き、しかも常にポーランドの國家及び國民に一身を獻げてゐたのである。ポーランドの政治界の大多數は彼を（運命の人）として是認し、尊敬し、感謝を捧げてゐる。一方彼を罵倒する一派があるのは、やはり彼が（運命の人）であるためである。が、賞める者も罵る者も、等しく彼によつて、今後のポーランドの運命はすべての國民の眞面目なる努力によつて開拓されねばならぬといふ眞理を教へられてゐる。彼は實にポーランド人の自由を守護した代表者であるといふ事を示してゐる。彼は夢遊病者かも知れぬ。しかしながら、數世紀の間ポーランド人が夢見てゐた獨立自由の夢は、この夢遊病者によつて實現されたのである。……彼は眞のデモクラシーといふものは、國家的危機に際會し、その難關を切拔けた後に實現し得るものと信じてゐる。ポーランドの兵士はただポーランドの獨立の爲に銃劍を握つた。軍團を率ゐた彼も、自由と獨立の爲に戰つただけである。彼のミリタリズムは獨、墺、露のそれ等に比べて格段の相違がある。しかも彼の理想は實現されて、運命の轉換期に立つた彼は劍を收めてデモクラシーの一途に進む。國家的デモクラシー及び國際的デモクラシーの理想に向つて、彼は稀有なるアイデイアリストの立場から今後數年の間に幾多の事蹟を殘すであらう』

探偵小説家の手帳

（一）モダン・アラビヤナイト

甲賀三郎

一

青年探偵小説家の原山達夫は、細身のステツキを小脇に抱へて、小雨にそぼ濡れたペーブメントに、磨き立ての半靴の韻律的な快よい接觸を感じながら、銀座街を疾足に進んで行つた。

──矢張銀座が一番氣持が好いな。

夜も大分更けてゐた爲か、それとも折柄シト／＼と降り出した春雨の爲か、人通りは殆どなくて、大方は大戸を下した店の中に、思ひがけなく煌々と飾窓の燈火が店先を照らし出してゐるのが、反つて變に淋しく、向ふ側の大きな建物が、雨に煙つて大空に浮んでゐるやうに見えたり、時々思ひ出したやうに、ひどい騒音を立てゝ驀進して來る薄汚い電車さへも、何となく愛嬌のある怪物に見えたりした。

──今夜は何だか妙に夢幻的だぞ。サイセリヤのウイスキーが利いたかな。だが、

彼の眼には又してもチラリと頑丈さうな交番と、その前に立つてゐる厳めしい巡査の姿が寫つたのだつた。

──實際交番が多過ぎるよ。今まで氣がつかなかつたが、銀座通りに交番は不必要だと思ふ。いつか或る雑誌社から銀座に

對する希望を訊かれて、一時も早くあの不體裁な路面電車を除いて貰ひたいと答へたが、考へて見ると、交番も通りからもう少し奧へ引込まして貰ひたいね。日本の警察制度の整頓してゐる事は、殊によると、我々から、我々が常に希望してゐる所の、或種の冒險を經驗する事を防げてゐるかも知れない。

こんな事を考へてゐるうちに、彼は早くも交番の前を通り過ぎて、次の横丁まで來かかつてゐた。そこには華奢な白く塗られた自働電話が建つてゐた。

——交番に較べると、自働電話の方はいくらか勝しだ。非美術的な函だけれど、時に戀人の呼出しに役立つたりするのだからね。

然し……

相變らず取留めのない事を聯想しながら、そこを通過ぎようとした彼は、この時に思はず眼を瞠つて、ゴクンと唾を呑んだ。自働電話の背後からチラリと眼に觸れたのは、何と性的魅力に富んだ絹靴下の足ではなかつたか。華奢な靴のスベ〳〵光つた肌に、雨滴が無數に玉をなしてゐるのも、悩ましい程艶めかしかつた。が、何より彼を驚かしたのは、自働電話の蔭から浮び出た彼女が、

——モシ〳〵

と呼んだ事である。

——素敵だ！（彼は心のうちで叫んだ）俺は今晩運が好いぞ。躊躇してはいけない。

彼はツカ〳〵と彼女の傍に寄つた。そして帽子に手をかけながら、

——今晩は、お孃さん（マドモアゼール）。

彼女はニツコリ笑つた。原山は忙しく彼女のピツタリ頭に合つた帽子の下に輝く眼から、眞赤な唇まで見廻したが、知つてゐる顔ではなかつた。彼女は若くて美しかつた。何は兎まれ、女は若くて美しくなくてはならない。彼はすつかり滿足した。

——どちらへいらつしやるのですか。

彼は慇懃に訊いた。

——うちへ歸へるんですけれども、雨が降つて來て困つちまふわ。送つて下さらない。

——喜んで送らせて頂きますよ。お宅はどちら。

——牛込の××町ですの。けれども××の停留場までにしてちやうだい。

原山が威勢よく上げたステッキの合圖に、一臺のタキシが傍に寄つて來た。

——新シボレーのセダンか。我慢出來ない事はないな。

彼は手早く扉を開けた。

——さあ、お乗りなさい。運轉手君、牛込の××まで賴むよ。

二

××停留場の傍で自働車は止つた。

原山は先づ降りて、それから女に手を貸したが、彼女は運轉手達に顔を見られるのを憚るやうに、早足に二三間先に歩んで、暗い蔭に佇んだ。

——運轉手君、五圓で剰金があるかい。

原山は運轉手台を覗き込んで、五圓紙幣を突出した。

——細いのがございませんでせうか。

——剰金がないのかい。ぢや、好いや、剰金はいらないよ。

彼は紙幣を運轉台にポンと抛込むと、彼女の佇んでゐた所に急いだ。彼女は默つて歩き出した。

——あなた、醉つてらつしやるの。

暫くすると女が訊いた。

——さあ、酒を呑むには呑みましたがね。

——宅へいらつしたら、後生ですからシャンとしてゐて下さいね。うちには變に物堅い下男がゐますのよ。私これでも良家の子女なんですから。

良家の子女は好い、と思ひながら原山は眞面目に、

——無論です。僕シャンとしてゐます。

それから十分間ばかり、態とさうしてゐるのだと、十分疑へるやうに、彼女は原山を暗い横丁から横丁へと引廻した。最後に止つたのは、高い土塀を巡らした大きな二階建の家の前だつた。

彼女が呼鈴を押してから、玄關の扉の開かれるまで、氣短かな原山には待切れないほど時間が經つた。彼は彼女に氣づかれないやうに、時折ステッキの先で、敷いてあつた玉砂利をガチャガチャと突ついた。

それほど時が經つてから、玄關の扉を開けて、半身を現はしたのは、横鬢にひつつれた禿痕のある、愚鈍らしい男だつた。

——老執事とでも云ふのかな。然し、執事にしては少し汚いて。尤も彼女もかうした大家の令嬢と云ふ風でもないが。

扉を開けた男はチラリと女を見て、それから彼に眼を移したが、默つて横柄に二人を招いた。

彼女は原山の腕に縋るやうに見せかけて、實は彼を引摺りながら、玄關傍の洋風の應接室と云つたやうな部屋にグン／＼引込んだ。この室は久しく使はないと見えて、厚い絨氈の敷物の

上には、歩くとパツと白く散るほど、埃がうづ高く積つてゐた。

――變だな。恰で空家のやうな家だ。

が、彼女は原山にさうした疑惑を起す暇を與へないやうに、部屋の中で差向ひになるや否や、ぢつと彼の眼を見つめながら、口早に嘆願し始めた。

――お願ひがあるの。きいて下さいね。奥の部屋にお父さんが寢てゐますの。永い間の病氣で、今死にかけてゐますのよ。そしてね、私の夫に何か話したい事があるらしいの。私隱してゐましたけれど、細君なのよ、あなた私の夫に代つて、その話を聞いて下さらない。

――然し、それは、あなたの夫が……

青年探偵小説家も、餘りに奇抜な思ひもかけない依頼に、些か狼狽した。

――之には深い譯があるんですの。譯は後で悠り申上げますから、承知して下さいね。

――聞くだけの事なら、聞いても好いですが、お父さんの方で氣がつくと……

――大丈夫なの。それは。夫は父に一度も會つた事はないのですわ。でも、なるべく離れてゐて、傍へ寄らないでね。

若い美しい女が涙を流さんばかりにしての、頼みを、聞入れないと云ふ譯には行かない。原山はたうとう承諾した。彼女は嬉しさうにして、彼を奥の一間へ案内した。

そこは二十疊位敷けるかと思はれる、廣い日本座敷で、足許もよく見えないほど暗かつたが、中央から稍床間寄りの所に、大きな西洋寢台が置かれて、その上に鬚を茫々と延ばして、色蒼ざめた老人が横はつてゐるのが、辛うじて見えた。寢台の傍には例の愚鈍らしい男がぼんやり立つてゐた。

――あまり傍へ寄らないでね。

適當な間隔の所で、原山を留めて、耳許でかう囁いた彼女は、ツカ／＼と寢台の傍に寄つて、劇的な聲で叫んだ。

――お父さん、夫を連れて參りました。

老人は氣息奄々として、昏睡してゐるやうだつたが、彼女の叫聲が聞えたと見えて、眼をだるさうに開いて、心持原山の方に頭を捻ぢ向けながら、滿足さうにうなづいた。さうして、一言二言ブツ／＼と呟いたが、傍に立つてゐた男に、手眞似で何事か命じた。

男は無言で機械のやうに部屋を滑り出た。暫くの間、押しつけられるやうな沈默が續いたが、やがて彼は再び機械のやうな足取りで、部屋に這入つて來た。さうして原山の傍に來ると、

無言で大きな鍵と一枚の紙片を差出した。原山が受取ると、彼は依然として無言で、又音もなく、老人の傍に歸つた。

原山は渡された鍵と紙片を、無雜作にポケットに押込んだ。彼女はそれを見ると、ツカ〲と彼の傍に來て、例の如く縋るやうにしながら、彼を元の應接室に引込んだ。

――有難う。ほんとに有難う。私、何と云つて、お禮して好いやら分りませんわ。

彼女の顏は喜悅で輝いてゐた。

――私ね、父に背いて結婚しましたの。不幸な結婚でしたわ。然しね、父もいよ〲死期に近づいて來たのを知つて、死ぬ前にすべてを許すと云ひましてね、夫を直ぐ連れて來いと云ふのです。所がね、あゝ、何と恥かしい事でせう。夫は今刑務所へ這入つてゐますの。どうして連れて來る事が出來ませう。けれども眞逆そんな事は云へませんし、何にも知らない父は早く連れて來いと喧ましく云ひますし、ほんとにどうしたら好いかと、身を削られるやうな思ひでしたのよ。

――では、お父さんは私をあなたの夫だと思つて、金庫の鍵と文字盤の暗號とを渡されたのですね。

――えゝ。

彼女は眼をパッチリ開いて、大きくうなづいたが、その中には何となく畏怖を覺えるやうな不思議さが感ぜられた。

――あなたのやうな若くて美しい、その上に、かうした立派な創意力のある天才を、奧さんに持たれた方は實に幸福だと思ひます。

原山はポケットから鍵と紙片を取出して、彼女に握らせて、その手を兩手で愛撫しながら、云ひ續けた。

――あなたのお父さんと夫君に滿腔の敬意を表します。

――あら、あなたこそ、偉大な天才でいらつしやいますわ。若くて、美しくて、度胸があつて、私、ほんとうに、

彼女は性的衝動に堪へないやうに、うるんだ眼でぢつと彼を見上げて、握られた手をブル〲顫はせた。

瞬間に原山はグッと彼女を引寄せて抱きしめた。彼女の赤い唇に彼の唇が重ねられた。數分間の陶醉の後、彼女はそつと彼を離した。

――悲しい事ですけれども、私は之以上にもう感謝を示す方法を持ちませんわ。では、お歸り下さいましな。

原山は靜かに外套を着て、帽子とステッキを取上げた。

――それから、もし後で御迷惑になりますといけませんから、こゝにゐらつした事は、絕體に秘密になすつて下さいね。

――えゝ、承知しました。では御機嫌よう。

青年探偵小説家原山達夫は、何の未練氣もなく、この怪しい家を出た。

三

翌朝十時過ぎに眼を覺ました原山は、物憂さうな伸をして、むつくり起上つて、下宿の主婦が抛込んで行つた新聞を取上げた。社會面を見ると、大きな標題で「牛込に怪盜現はる」と云ふ記事があつた。

昨夜十二時前後、牛込××町北垣市藏方に怪盜が忍込んで、同家の大金庫を易々と開けて、在中の目星しいものをすつかり盜んで行つた。北垣は有名な守錢奴で、銀行をさへ危險がつて、現金其他一切の貴重品を、堅牢を以つて誇る大金庫に盡く入れてゐたと云ふ事だから、盜難被害は驚くべく多額に上る見込である。

尚、奇怪な事は、北垣は久しい以前から病床にあつたが、醫師をも迎へず、たつた一人の老僕に介抱させてゐたらしいのだが、怪賊の忍込む前夜に死んだらしく、寢台の上に冷くなつてゐた。右の老僕と云ふのは、北垣がその守錢奴的な見地から、容易に他人を信ぜず、又多數の召使を置く事も欲せず、只一人彼が生來の唖者であるのを見込んで、絶體服從的奴隷としてゐたので、彼は怪盜を目撃したらしいが、何分唖者の事で思ふやうに取調べる事が出來ない。殊に彼は何か超自然的な現象を見たらしく、ひどく昂奮し且つ激しい恐怖を起してゐるので、係官も手古摺つてゐる。

因に北垣の死因は確かに自然死であつて、他殺の疑ひは全然ないやうである。

以上が記事の大要だつたが、讀み終つた探偵小説家原山は、大して驚きもしなかつた。

——フン、あれが北垣と云ふ守錢奴の家だつたか。それにしても、あいつ等は驚くべき天才だわい。

彼はブツ〳〵口の中に呟きながら、廊下に出て、顔を洗ひ、衣服を改めて、食事を執つたが、食事の濟む時分に、一人の見馴れない男が主婦に連れられて、部屋に這入つて來て、それが××署の刑事だと名乘つた時にも、格別驚かなかつた。

——甚だ恐縮ですが、署長が鳥渡お訊きしたい事がありますので、署までお出下さいませんでせうか。

刑事は丁寧に云つた。

——宜しい。參りませう。何か犯罪の嫌疑ですか。

——いいえ、別にそんな……

——嫌疑さんでも好いですよ。僕、嫌疑を受ける覺えがありますから。然し、嫌疑は單に嫌疑に止つて、僕には絶對に犯行はありませんから、僕は驚きませんよ。無論君任意同行でせうな。縛るやうな人權蹂躙をやると、僕絶對に行きませんよ。

——無論です。そんな失禮な事はいたしません。

——では行きませう。なに、電車で？　それは止しませう。をばさん。タキシーを呼んで呉れない。

原山は警察へ召喚されるのを、寧ろ得意としてゐるやうだつた。

四

——どうも御多忙中恐縮でしたな。

司法主任はひどく愛想が好い。

——實は態々お呼びして甚だ失禮ですが、あなたの昨夜の御行動を、鳥渡お伺ひいたしたいのですがね。

——昨夜ですか。さうですね、十一時頃まで、銀座で飲んでゐました。それから、或る未知の婦人とタキシーで牛込まで行きました。

原山は無雜作に答へた。警部には鳥渡意外と云ふ風だつたが、直ぐに訊き返へした。

——牛込はどちらでしたか。

——××町ですがね、今朝の新聞を見て、始めて氣がついたのですが、どうも北垣と云ふ人の家らしいですよ。

——で、どう云ふ目的だつたのですか。

——別に目的つてないのです。女に頼まれたから、送つたまでです。

——それは少し物好きですな。その爲にあなたが重大な犯罪の渦中に卷込まれるやうな事があつたら、どうします。

——未知の女と未知の家に行くと云ふ事の危險は、私も氣づいてゐました。ですから、萬一の場合を思つて、タキシーを降りる時に、運轉手台に顏を突出して、五圓紙幣で剩金をとらす、彼に十分顏を覺えて置いて貰ひましたし、尚タキシは車體番號が恐らく二萬番號内外の新シボレーのセダン型である事を記憶し、尚念の爲に、私の名刺を一枚座席の下に落して置きました。恐らく、彼等は好奇心を起して、私達二人を尾行して、あの家に這入る所を、突留めはしないかと思ひますが。

——その通りです。その爲にあなたが昨夜怪しい女と二人で、あの家に這入つた事が分つたのです。

司法主任は苦り切つて續けた。

――家に這入つてから、あなたは何をしましたか。

――女に頼まれて、彼女の夫だと云つて、瀕死の病人に會つたのですが、その病人と云ふのは、恐らく彼女の情夫か何かで、共犯者に違ひないのです。彼は巧みに變裝してゐましたが、氣づかるのを恐れて、彼女は私を彼に近づけないやうにしました。

――そして、どうしたのですか。

――昨夜のうちに氣のついた事もあり、今朝新聞を見てから氣のついた事もありますが、恐らくかうなんですよ。彼等二人は金庫が目的で忍び込んだのですね。所が金庫がとても精巧で、手がつけられないのですね。そこで、北垣を威かさうと思ふと、偶然彼が死んでゐた。で、男の方は早速北垣に變裝して、屍體を傍に隱して、例の啞の下男を呼んで、手眞似で、金庫の鍵と文字合（コムビネーション）を出させようとしたが、下男が平素から、夫婦揃つて來る人間（恐らく北垣の養子夫妻ではないでせうかね）でなければ、渡してならぬと、確く躾けてあつたと見えて、容易に云ふ事を聞かない。窮餘の一策で、私を呼び込んだのでせうよ。私が歸つてから、瀕死の病人が飛起きて、金庫を開けにかかつたので、下男は非常に驚いたのではないでせうかね。彼はひどく昂奮して且つ恐怖してゐると云ふ事でしたが。

――それほどまで承知してゐながら、何故あなたはその事を警察に報知しませんでしたか。

――さう云はれると困りますが、道義上は兎に角、法律上、犯罪が行はれる事を知つてゐても、告知しなければならぬ義務はありませんし、それに、私は、かう云ふ創意的な犯罪には、敬意を表したいと云ふ氣持があるのですよ。詰り犯罪家と探偵小說家との相違は、前者は實行し、後者は之れを書くと云ふだけの相違なんですから……

――け、怪しからん。僕は君に共犯の意志があつたものと認める。

司法主任は眞赤になつて怒鳴つた。

――共犯の意志があれば、自働車の中に態と、證據を殘したり、家の中に無暗に指紋を殘したりしませんよ。先刻給仕が私の飲みかけの茶碗を持つて行きましたが、恐らく指紋を對照する爲でせう。それに第一私は何の利益をも得てませんよ。

――有形の利益を得てなくとも、君が女から何事か精神上の慰安を得て居れば、共犯の意志は成立しない事はない。

――ですがね、警部さん。私はたつた一つだけ、共犯の意志のない事を明かにして置きましたよ。それはね、例の下男から

受取つた金庫の鍵と文字合の断片を、一旦ポケツトに收めて、再び取り出す時に鍵だけスリ變へたのです。私は偶然書類函用の大型の鍵を持つてゐましたからね。實は文字合せもスリ變へたかつたのですが、咄嗟にさうは行きませんでした。で、私はそれを悟られない爲に、彼女の手に握らしたのです。鍵なしでどうして金庫を開けましたか。先刻新聞を見て、彼等の天才的手腕に感嘆してゐたのです。金庫の鍵はこのポケツトの中にある筈です。

青年探偵小説家原山達夫は、得々として司法主任を見下しながら、ポケツトに手を入れて、鍵を摑み出した。

が、何とした事か、彼の拡げられた掌の上で、薄黒く錆切つて光つて見えたのは、彼の永い間見馴れてゐる所の、彼自身の所有物に相違ない古い鍵だつたではないか。

——こ、これは……

彼は瞬間に彼女との抱擁の場面を想起した。鍵は無論その時に再びスリ變へられたのである。

——やつぱり彼女は天才だ。

彼は悲しげに掌の鍵を見た。（終り）

（二）銀座綺譚

大下宇陀兒

（一）

斷つて置くが、成毛貞介は探偵小説家であつて實際の探偵ではないんである。いつ頃のことであつたか、東京には落語泥棒といふものが出現して——これがどんな泥棒であつたか詳しい説明はよして置かう。誰だつて落語泥棒のこと位は知つてゐる筈だ——この泥棒について或る新聞記者が貞介を訪ねて來た。泥棒の正體を推測して見ろといふんである。貞介は新聞記事に現はれたところを綜合して、多分其奴は大學校の教授だらうと言つてやつた。所が後になると、その正體はブリキ屋であ

るところが分つたので、結局探偵小説家の推理はちつとも當にならないといふことになつた。そしてその後、東京の近郊では一匹の犬が人間の生首を咥へ出して來たといふ怪事件があつたが、この時はもう誰も貞介を訪ねて來るものが無くなつて了つた。甚だ尤もな次第でもあるが、そこでこの成毛貞介に關しては、次のやうなお話もあるんである——。

さて、銀座にはおよそどんなものでもがある筈だ。綠色の氣持のよい草原などはないとして、古いものでも新しいものでも、生きてゐるものでも死んでゐるものでも。これを試みにMと呼ばれる大百貨店へ入つて見ると、地階から始まるものの陳列は、遂に屋上に到つてアフリカ產のペリカンとライオンとにまで達するし、更にその屋上から俯瞰すれば、モボモガは言はずもがな、あらゆる美醜貴賤の類型を見ることが出來る。とすれば、その朝成毛貞介が非常に早く、その銀座通りを歩いてゐたといふことは、格別不思議なといふ程のことでもあるまい。兎に角お話は、成毛貞介の言葉を借りると「銀座が森林のやうに眠つてゐた」程にも朝早く、彼が新橋寄りから尾張町へ向つて、あの右側を歩いてゐたといふところから始まるのである。

流石の銀座も、貞介以外に殆んど人通りらしいものはなかつた。どの店も、窓へは昨夜のままの鎧戸がひつそり閑と下ろしてあつたし、見渡したところ街の方も、ひどくがらんどうなものであつた。そして貞介は、實をいふと、はじめからして何かの異常事件にでも出會しさうな、一種の豫感めいたものを有つてゐたのだ。恰度彼が、前に一寸引合にだけ出して置いたM百貨店、あそこの帶黃褐色の壁面に沿つて、ぶらり〳〵とやつて來た時、彼はそこの正面入口に近いところで、一匹の犬が頻りと何かにぢやれついてゐるのを發見した。素晴らしい毛並の、颯爽たる耳と尻尾とを押し立てた、いかにも剽悍なシエフアドだつた。貞介はひよいとそこへ立ち停つて、ヒユツ、ヒユツ、と口笛を鳴らしたのだが、するとそのうちに、彼はギヨクンとしたやうに眼を瞠つた。

犬がその逞しい前脚でぢやれてゐたのは、最初彼はそれを非のやうなものだと思つた。が、だん〳〵に瞳を据えて見ると、紛れもなくそれが人間の耳であつたんである。犬に嚙まれたのか、それとも元からさうであつたのか、その耳は端の方が泥と血とで無殘にうちやちやけ、だが、全體としては不氣味に蒼ざめたものだつた。強いて茸に假令へれば、初茸といつてもよいであらうか。只、耳朶と思はれるところだけが、血とは違つて、一種鮮かな紅の色に染められてゐる。貞介はそれをはつき

りと認めたのだつた。

「ウワア！」

と貞介は叫んだ。

それから又氣がついて、叱ッ叱ッと犬を追つた。

犬は狡猾な眼付きで貞介を眺め、と、忽ちその耳をパタりと咥へて、一散に尾張町の方へ駈け出して行く。續いて貞介が、バタ〳〵とそれを追ひかけたのである。

（二）

こゝでこんなことを言ふと、少しく感興を殺ぐ懼れもないではない。が、成毛貞介の足は扁平足といふ奴であつた。學校を卒業した時徴兵檢査を受けに行つたら、檢査官が、こんなヘボイ足ではいくらも歩けまいと言つた。貞介は、なにこれでも一生懸命になると一日に二里や二里半は歩きますと答へて、それで輜重輸卒にして貰つたんである。その貞介がシエフアドを追ひかけたところで、結局逃がして了ふといふことは、最初からして明かだつた。七分の後に、彼は尾張町角の交番で、そこの巡査と次のやうな押問答を始めたのである。

「君が惡いよ。何故君ア僕に手傳つて吳れなかつたのだ！」

「しかし、犬を捕まへるのが我々の職務ぢやないんです。」

「無論さうさ。だが、その犬が人間の耳を咥へてゐたといふことは——」

「咥へてゐたか咥へてゐないか、それがはつきり分つてゐないでせう。見間違ひといふこともありますし——」

「そんなことはない。慥かに僕がこの眼で見屆けたんだ。」

「あなたが見屆けても、私は見屆けてをりません。」

「だからさ、だから君が手傳つて吳れゝばよかつたんだ。」

「いや、あなたが犬を捕まへといて、それから見せて吳れた方がよかつたのです。」

「それア、さう行けば無論その方がよかつたのさ。だけど、犬が逃げて了つたのだから。」

「でせう！　だからです、我々だつて譯も分らずに、犬を捕まへるお手傳ひなんか出來ないのです。」

「いやさうぢやない。兎に角捕まへて吳れさへすれば分つたんだ。」

「いゝえ、捕まへる前に分つてゐなくちア困るんです。」

いくら繰返しても同じことで、巡査の言葉にも一理はあつた。彼等は犯罪の容疑者といふものを、さう〳〵迂濶に捕まへてはならぬことを知つてゐる。相當な證據が揃はぬ限り、決して命令といふものが出ないので、これは前言つた落語泥棒の場

にもその好適例があつた。ちよいと密告された位で、すぐさま容疑者をひつくくる譯には行かないのである。犬が銀座通りを走つたからといつて、一々巡査が飛び出すことも出來ぬであらう。——が、成毛貞介に言はせると、この時彼は腹を立てた。巡査は、「理由もなしに」それが貞介の間違ひであつたことを主張し始め、遂に彼は一人つきりでM百貨店の方へ引返して了つた。巡査は、彼と一緒にさへ來ては呉れなかつたのである。

貞介は無論、先刻の場所で自分の言葉を立證するに足る、何かの證據品を探し出す積りであつた。街は相變らず靜かだつたし、人通りの爲に現場が荒されさうな愁はなかつた。それで彼はせか〳〵と、まだ鐵の大戸を下ろし切つたまゝになつてゐる、M百貨店の正面入口へ近づいて行つたが、するとこの時、彼はその鐵の大戸に凭りかゝつて、まるで貼り付けられたやうな一つの人影を見た。黑い帽子に黑い外套。だが、ハツとして見直すうちに、彼は頗るそれを意外に感じた。その人物といふのが、嘗て彼の高等學校時代の友人であつた、そして今はカトリツク派の牧師になつてゐる筈の、疋田悟郎といふ男であつたのである。

「やア、どうしたんだ。妙なところにゐるぢアないか。」

頭の隅ではチラリと不審に思ひながら、貞介が何氣なくから言つて近づくと、疋田悟郎はハツと狼狽の表情だつた。

「お、成毛か——」

と、答へて、彼はその色の悪い唇をヘンに歪めた。

「ひ、久しく君にア會はなかつたナ——」

「全く——」

言葉が咽喉に引掛つて、お互に妙な氣持であつたといふ。二言三言話すうちに、疋田悟郎はひよいと帽子を脱いでお辭儀をした。

「僕、これで、これで失敬するよ——」

「えツ」

「又、又いつかお訪ねする。」

疋田悟郎は脊の高い男である。その黑づくめのひよろ長い影が、灰色のペイヴメントをふら〳〵と踏んで、だが見る〳〵遠ざかつて行つて了ふのを、成毛貞介はポカンとして見送つたのだつた。

（三）

成毛貞介がそれから後、果してどんな行動をとつたのか、又どんなことを考へたのか、それは追々に分るとして、こゝでは疋田悟郎について、簡單な説明をした方が便利であらう。これ

は貞介の友人中一番變つた男であつたのである。

どこが變つてゐるか、その第一には、彼が高等學校を中途で退學し、幾年か後にはカトリック派の牧師になつたといふ事實を擧げることが出來やう。が、それよりも一段と際立つた特色は、彼が一年間を通じて、春から秋の終りへかけて、殆んど絶對に戸外へ出ないといふことであつた。高等學校の寮にゐて、敎室へ通ふ時には、どんなに遠廻りをしても、必ず屋根のある廊下を通つた。是非とも戸外へ出ねばならぬ、體操の時間は全部休んだ。それから又冬になつて、この期間だけは外出したが、それも雨の降る日かひどく曇つた日に限つてゐた。そしてそんな時には必ず黑い度無しの、それも飛行家用の塵埃除色眼鏡を掛けて出た。天氣のよい日に、或る男が無理矢理彼を誘つて見た、すると彼は眞蒼になつて怒つたといふ。――怒つたと云へば貞介も一度、彼に煙草を勸めて怒られた。煙草はゴールデンバットであつたが、箱から一本をつまみ出して、貞介は、どうだい？　と輕く言つただけのことである。疋田悟郎は矢張り眞蒼になつて怒り出し、それから二階の寢室へ行つて、蓑蟲のやうに蒲團の中へ潜り込んだのだつた。何故彼がその時に怒つたのか、今に至るまで理由が分つてゐない。並べると、さうした例は幾つでもある、が、兎に角、さういつた風の男であつたんである。

で、成毛貞介がM百貨店の前で疋田悟郎に會つてから、恰度一週間經つた時である。それはじと〳〵と雨の降つてゐる日であつたが、貞介は突然に疋田悟郎を、彼が住んでゐるといふ或るアパアトメントへ訪ねて行つた。最初には敎會へ行つたのだが、そこでは疋田悟郎がつい二三日前に牧師を廢めたことを聞かされたのだつた。――アパアトメントは粗末ながらも洋式でしかし最も採光の工合の惡さうな室に、疋田悟郎の標札が掛つてゐた。中は二室か三室に分たれてゐる。その取付の狹い室に、すつかり扉を閉め切つた疋田悟郎が、一人きり暗然たる顏をして成毛貞介を迎へたのである。

「こないだはどうも――。さう〳〵、あれアM百貨店の前だつたね。」

貞介は先づこんな風に口を切つた。そしてポケットからバットの箱を取り出した。

「どうだい、矢張り煙草はやらんのかい？」

「あ、やらん。」

ぶつきら棒に答へた疋田悟郎は、一寸不機嫌に壁の方へ眼を外らしたが、それから取つて付けたやうに言つた。

「あの時ア僕失敬して了つたんだが、君、今は小説を書いてゐ

るんだつてね。面白いだろ?」
「一向に面白いこともないんだよ。殊に種の無い時などはね――」と言ひかけて貞介はふいに眼をキラ〳〵と輝かせた。
「さうだ、さう言へば、僕、最近に素敵に面白い小說を書くよ。」
「へええ、どんな?」
「つまりね、近代的な犯罪を取扱つたものなんだが、早く云ふと、あのM百貨店なんかいゝ材料だ。あそこにはね、今日偶然に思ひ出して探したんだが、三ケ月ばかり前に面白い事件があつたぢやないか。」
とぼけた顏で貞介がかう言ひながら、内ポケットから大切さうに取出したのは、その前の年の十二月四日といふ日付のある、次のやうな新聞切拔だつた。
――旭プロダクションのスター女優立花玲子の失踪事件に關してはその後の調査によつて玲子が當日M百貨店へ行つたことが知れて來た。同店エレベエター運轉手の證言によると、彼は立花玲子が當日午后二時頃グリーン地に緣だけを太く白くとつたマーガレット・オーバーを着てエレベエターに乘り、六階でそのエレベエターを降りると同時にその右手橫にあつた化粧室へ這入つたのを見掛けたといふ。そのマーガレット・オーバーは化粧室の一隅に新聞紙に包んで捨てゝあつたのを掃除夫が發見して秘かに自宅へ持ち歸つたことも確かめられ――云々。
疋田悟郎にこれを讀ませながら、貞介はそつと對手の顏を窺つてゐた。そして疋田悟郎は讀み終ると同時に、ニヤリとへんな笑ひ方をしたのである。
「どうだい、面白いだらう?」と貞介が言つた。「當時は相當評判になつた事件だぜ。――その立花玲子つてのは、君だつて無論知つてるだらう。」
「あ、知らないこともないやうだ。」
「つまりだね」と貞介は疋田悟郎がもう一度その記事を讀み直すのを眺めながら「當時はその立花玲子の行衞がどうしても分らず、結局、自分自身で化粧室内で變裝し、そのまゝ何處かへ姿を隱したのだらうといふことになつたのだ。後から種々の噂が出て、その中には彼女が妊娠してゐたなんていふ奴もゐた。妊娠しては人氣に障るし、それで身を隱したんだらうなんて、ね、そんな風な噂だつたぜ。」
「ま、まアさうだつた、と僕も思ふ。が、そこで君は、こんなものを小說の種にするのかね?」
「さうだよ、非常に面白い種ぢやないか。僕の考へだと、そい

つを殺されたことにして了ふんだ。」

「え？」

「吃驚しなくつてもいゝよ。これア僕の空想なんだから——」

貞介はポツンと言葉を切つて、だが、幾分か氣の毒さうに對手の顔を覗き込んだ。

（四）

多分この時貞介は、疋田悟郎がこの上もなく狼狽することを豫期したのだらう。だが、その豫期は美事に外れた。無論、疋田悟郎は顔色を變へた。が、すぐにそれを元へ戻して、再びニヤ〳〵と頬を歪ませたのだつた。

「なるほど、そいつは面白い空想だね」と彼は言ふのである。

「しかし、ではどんな風にして殺したことにするのかねえ？」

貞介は顎を前へ突き出して、從つて兩肩をぐいと後ろへ引いた。これは彼が怒つた時の癖である。

「そんなことは譯がないよ！」

「譯がないつて、ほう、どうするかね？」

「言つてやらうか？」

「あゝ、聞かして呉れ給へ。」

貞介はそこで又バツトの箱を取り出して、その一本を亂暴につまみ、スパ〳〵と激しく煙を吸ひ込んだ。疋田悟郎は顔を反向ける。貞介は已渡の間黙りこくつて、それから漸く多少の落着きを取り戻した。

「いゝかね、これは近代的な犯罪と見せかけて、その實最も野蠻な犯罪に當るんだ。君はあのM百貨店に、どんなものでもあることを知つてるだらう。」

貞介は突然にべら〳〵と喋り始めた。M百貨店の地階にはどんな商品が陳列されてゐるかを話し始め、だん〳〵に一階二階三階と昇つて行つた。

「——で、愈よ屋上だ。屋上には君、何が置いてあるか知つてるかい？」

「さあ、はつきり覺えてはゐないんだが——」

「さうかい。」貞介が今度はニヤリとした。「ぢアこれも僕が言ふとして、あそこにはね、猿がゐるし文鳥がゐる。小動物園といふ譯だが、從つてアフリカ産のペリカンと、そして三千何百圓とかで賣るといふ、同じくアフリカ産のライオンもゐるんだ。」

「ライオン？」

「分つたらう。僕はそのライオンに立花玲子を食はせるんだ。はつは、どうだい、仲々面白い筋ぢアないか。探偵小説なんか、時々不自然だの荒唐無稽だなんて言はれるが、事實は小説

よりも突飛なことがあるもんだ。ライオンに食はせるなんて、はつはゝゝゝ、こいつは確かに面白い筋書きだぜ。」
疋田悟郎は呀ツと驚いた風である。貞介は痛快らしくそれを見やつた。
「驚いたらう、確かに驚くべき犯罪なんだ。近代的な人間が、どうしたつて思ひ付きさうにない方法なだけに、誰だつてその秘密を解くことは出來ない。一方から見てユウモラスな、しかしそれだけに又戰慄すべき犯罪だよ。――いや、そこで僕は、そのライオンに立花玲子を食はせる時、ライオンが過まつて女の片一方の耳だけを檻の外へ飛ばしたとするんだ。そしてその耳を拾つた男が探偵になる。どうだ、面白いか?」
「面白いね。」疋田悟郎はすつかり落着いて答へるのだつた。「面白いことは面白いが、それで犯人は、その女をどんな風にしてライオンに食はせるのかね? 化粧室の中から連れ出してライオンの檻へ投げ込む時に、人に見られては困るだらうが――」
「さうか、なるほど。」と貞介は又しても肩を後ろへぐいと引いた。「その點はね、犯人に自白させる時でいゝかと思ふ。だが、要するに犯人は、その女を相當長い期間何處かへ隱して置いて、例へばあそこの屋上には給水川のタンクなどがあるだらう。その中へ漬けて置いて、後に人目の少い時を選んで、つまり午前二時とか三時とかいふ時を選んで、ライオンの檻へ投げ込むのさ。化粧室から給水タンクへは、恰度工合のいゝ拔け道でもあるとして、然も水漬けにして置くと、恰度今は冬だから、案外屍體は長く保つよ。」
「よからう。それで大體のところいゝやうだ。が、次に今度は犯人だ。犯人をどうして探すか、又、殺人の動機は何にするか、それをついでに言つて貰ひ度いものだねえ。」
その時疋田悟郎は、さも〳〵悦に入つたやうな、或は又成毛貞介を殊更に慾らせるやうな薄笑ひを、顏面一杯に漂はせた。貞介はそれを見ると奥齒をギリ〳〵と嚙み鳴らし、だが、表には同じやうな微笑を浮べたのである。そして、ひどくゆつくりと喋り始めた。
「聞きたいかね、犯人をどんな人間にしたらいゝか、はつはゝ、聞き度いのは無理もないさ。――そいつがつまり、僕の書かうとしてゐる探偵小說では一番面白いところなんだが、でね、僕は立花玲子が化粧室へ殘したといふ、マーガレット・オーバーを第一の手懸りとする積りだ。――いや〳〵、さう言つて了つては面白くなからう。先づこゝに、非常に變つた男を考へるんだ。その男といふのは、天氣のよい日には決して外出しない。そして已むを得ず外出しても、彼は決して郊外などへは出掛け

ない。彼はなるべく都會の中心を出ないことにし、――例へば銀座とか丸の内とかさういふところ、然もそこを歩くのに、黑い色眼鏡を掛けて歩く。何故か？　彼は醫者に言はせると强迫觀念又は體質的神經衰弱に惱まされてゐるのだ。」

「……………」貞介が鳥渡言葉を切つたのに對し、疋田悟郎はサツと顏色を變へて默つて了つた。

「說明しようか。――それともよすか？」と貞介は今度こそ勝ち誇つた態度であつた。「まさか、僕がまさかそこへは氣付かないと思つて、はつはゝゝ、犯人――その犯人が多寡を括つてゐたわけなんだ。が、いゝだろ？　僕の說明をゆつくり聞いで吳れ給へよ。何も急ぐことはないのだから。――で、僕はこの犯人が、綠色恐怖症だといふことを言ひ度いのだ。綠色ばかりではない。彼は晴れ渡つた空の色をも極度に恐れる。そして綠色の草原も恐ろしい。近代文化の中心である、銀座を彼が好むのもそこなのだ。雨天以外には外出しないのもそこなのだ。そして、さうだ、彼の立花玲子が失踪當日に着てゐたといふ、あのマーガレット・オーバーは何色だつた。グリーン地だといふではないか。ゴールデンバットの箱、あれも矢張り綠色なんだ。」

こゝまで喋つて來て貞介は、ふと疋田悟郎のぐつたりと頸垂れた姿を見て、靜かにその肩へ手を掛けた。

つかつたか君、僕は、僕は只、小說の話をしてゐるのだ。だから、もう少しゆつくり聞いて吳れ給へ。――で、僕はその小說の解決を次のやうにする積りだ。犯人は立花玲子を、その着てゐた綠色のマーガレット・オーバーを恐れる餘り、發作的に絞殺して了つた。が、そこには無論同情すべき點が澤山にある。犯人は變質者だ。裁判所まで行くとしても、當然そこは酌量される。そして或は、犯人を病院へ送ることになるかも知れないのだ――」

（五）

言ひ終つた成毛貞介が、宥めるやうに疋田悟郎の顏を覗き込んだ時、疋田悟郎は羞恥の色でその顏を眞赧にしてゐた。

そして、だが、思ひ切つたやうにその眞赧な顏を振り上げた時、疋田悟郎は次のやうに言つた。

「ありがと。僕は、僕が君の言ふ通りの變質者だといふことを明かに認める。隱してゐたんだ。氣まりが惡いので、誰にもそれを言はなかつたのだ。が、君、君はその小說の筋を次のやうに變へる積りはないか？」

「え？　どんな風に？」

「どんな風にといつて、さうだね――」疋田悟郎はそこで空の

一隅に置いてあつた、古びた眼覺し時計をチラリと見た。「五分、五分待つてゐて呉れ給へ。そしたらその小説の結末をつけるよ。」

成毛貞介は一寸何のことだか分からなかつた。迂濶と言へば迂濶でもあるが、もの〻二三十秒ぢつと疋田悟郎の顔を眺めて、そのうちにハツとしたやうに對手の腕を押へつけた。

「君、馬鹿なことをするんぢやないぞ。な、なにも僕は、そんな積りで來たんぢやない。自首だ。自首をさせやうといふだけなんだ。君を殺させる位なら、僕は、僕は――」

「え？　ぢア――」

「違ふ。違ふよ！　自殺なんかすりアしない。」

「だからさ、小説の結末をつけるのさ。」

悪く落着いてゐるだけに、貞介はふと氣味が悪くなつた。思はずサツと飛びしさつた時である。この一室の外に跫音がして、すると扉がギーツと鳴つた。

「只今、あら、お客樣だつたの？」

開いた口が塞がらぬ程にも驚いたことには、そこへ現れたのが、花のやうに明るい立花玲子の笑顔であつた。

「ヘヘ、ヘヘ、ヘ、、、、」

と疋田悟郎が、始めて腹の底から笑ひ上げた。そして彼は、立花玲子の腕から、毛糸の玉にくるまつた、赤い／＼、眞赤な顔の赤ん坊を受け取つたのである。

「成毛、分つたかい。小説の結末を、こんなことに變へて貰へまいか。――ところで實は、その犯人と思つた男が、身は嚴格なるカトリツク派の坊主なのにも拘らず、女優立花玲子をして妊娠せしめた。人氣の劣へるのを恐れた女優と、和尙から破門されることを心配した破戒僧と、二人が相談して女優を失踪させた。そしてその失踪先が、M百貨店から程近い、或る病院の一室であつたのが、最近に於て、二人は遂に同棲することに覺悟を決めた。人氣と宗教と、二人がお互に捨てることに同意したんだ。但し女優が、當日その良人が甚だしく忌み嫌ふ綠色のオーバーを着て來たのは、殊更人眼に目立たせる爲、それを選んだことにしたらい〻だろ。」

×　×　×

棒立ちになつた成毛貞介は、そのうちにふと氣がついて、まじ／＼と女の耳を見詰めたといふ。それは美しい頬の兩側に、間違ひもなく附いてゐた。M百貨店前、シェフアドが啞へて行つたのは、果してほんとうの耳であつたか否か？　――兎に角成毛貞介は、探偵小説家ではあつても、實際の探偵ではなかつたんである。

――了――



Mrs.7 and Mr.23

谷讓次

1

蜜蜂の群の精勵を思はせる教養ある低い雜音の底に、白い運命の玉がシンプロン峠の小川のやうな淸冽なひゞきを立てゝ流れてゐた。

シャンペルタンの谷の冬の葡萄畑をロウザンヌ發大特急（グラン・ラピイド）の食堂車の窓から醉つた眼が見るやうな、一面に暖い枯草色のテュニス絨毯なのである。それを踏んで、あたしいま香料浴を濟ましてきたところなの、と彼女の全身の雰圍が大聲に公表してゐる、中年近い女が來て私の横にならんだ。肘が私に觸れて、彼女が言つた。

『數は？　何が出て？』

答へるまへに、私はゆつくりとその女を研究した。

近東型の廣い紺いろの顏が、八月の地中海が誇る銀灰色のさゞなみに

よつて風景畫的に裝飾されてゐた。私はきのふモナコの岩鼻から見物したモウタ・ボートの國際競爭を聯想しなければならなかつた。しかし私は、そのことは彼女に話さなかつた。彼女の臙脂色の滿唇（フルリップス）と黑いヴェネツィア笹絹の夜禮服とが、いつかヲトヴィヤのホテルで前菜（オウドウヴル）に食べた、私の大好きな二種の露西亞鹽筋子（キャヴィア）の附け合せと同じ効果を出してゐたからだ。私は銳利な食慾を感じた。そして食慾はいつも私を無言にする。で、私は、私の視線を彼女の下部に投げることによつて、この、自分の娘よりも若いに相違ない中婆さんを慰樂（アミュウズ）しやうと試みた。

彼女の屬する社會層は瞬間の私にとつて完全な神秘だつた。が、私はいま何よりもじぶんのゐる場處をはつきりと認識しなければならない。このモンテ・カアロの博奕場（キャジノ）では、どんな神秘も個人の關心を强ひはしないのだ。じつさい如何に小さな異常現象へでもすこしの好奇心を振り向けることは、こゝの多角壁の內部ではそれだけで一つの「許せない規則違反」なのだ。そこで私はたゞ聖マルタン水族館の門番のやうに、默つたまゝこころのなかで彼女の足へ最敬禮することで滿足したのである。がめたるの靴下が剛悍な脛を包んで、破けまいと努力してゐた。その輪廓は脂肪過多の傾向からはずつと遠かつた。アキレス氏腱は張り切つて、果物ナイフの刃のやうに外へむかつてほそく震へてゐた。私の眼にも判る一大きさ（サイズ）小さなゴブラン織りの宮廷靴が、賭合ひに勝つて得意な時の雞の足のやうな華車な傲慢さで絨毯の毛波（けば）を押しつけてゐた。彼女が足を移動すると、そののけばは一せいに起き上つて、絨毯のうへの靴あとが見てる間に周圍に吸はれて消えた。あまり纖細に、そして音律的に足が動くので、そのうちに私は、じつは彼女が、咽喉の奥で唄ふ高速度曲に合はせてブタペスト風の踊りを眞似してるのであることを知つた。

『ね、何を見てゐらつしやるの？』

この中婆さんは微笑らしいもので私の近代的騎士性を賞美するのである。それから彼女は、伊太利RIVIERAの聖（サン）レモで眼と聲の腐つた不潔な少女達が惡魔よけの陶製の陽物と一しよに賣つてる、雞馬皮に金ぴかの戰車を飛び模様に置いた手提（バッグ）をあけて、煙草の挾んでない象牙の長パイプを取り出し、直ぐにそれを指先で廻しはじめた。電燈の光矢がぶつかつて、花火のやうに音を發して散つた。私はこの意味の不明瞭な手品に見入つてゐた。

『あたしね、ちよいと卓子を明けたの。いま何番が出て？』

今度はりラとすぺいん葱のまじつたにほひが彼女の口から私の嗅覺を撫でた。この女は歡喜の絕頂で泣きながら男の鼻を嚙

び會話であると私は測定した。またこの場合、返事はすべて佛蘭西語でされるのでなければ罪惡であることも私は心得てゐた。ところで、私は流暢なふらんす語を話すのである。

『番號は三十六です、マダム。』

私は給仕長のやうに散漫な好色を隠して言つた。

すると、罩もつた空氣を衝いて金屬性の微風が掠めたのだ。

『あら！　どうしてそれを御存じ？　三十六號はオテル・エルミタアジュのあたしの部屋の番號よ。』

彼女の胸で二つの小丘がわなないた。同時にCIRO真珠の首飾りがちちちちと鳴いて、彼女は胸を見せずに笑つた。ぶろしや聯隊の伍長のやうに青々といが栗に刈つた頭が何時までもいつまでも笑ひに揺れてゐるのである。それにしても何うして私は彼女の部屋の番號なんぞ知つてゐたんだらう？　私はあわてゝ、36はいま私の立つてるルウレット卓子で玉の落ちた番號に過ぎないことを彼女に告げた。が、そのときはもう全然ほかの興味に彼女は身を委ねてゐた。雨の日のシャンゼリゼエに節度もなく滑る自動車の車輪のやうに彼女は自分の心頭がどこへ流れて行くのかじぶんで知らないのである。またその自動車の後窓に都會の迷信中の傑作として護謨糸に吊るされて跳つてる身振り人形のピエロのやうに、彼女は近代的速度を備へた淡いエゴイズムの一本の感覺の尖端にぶら下つてるのだ。

言葉と彼女の上半身とがいつしよに躍り出した。

『わつら！　ムシュウ。ほら、あすこに、そばへ寄るときつとラワタツオルト乾酪と酸菜のにほひのしさうな伯林ドロテインストラッセ街から來た紳士がゐるでせう？　あの肥つた、そら、いま乾板現像液で茶色に染まつてる手を出して、他人の賭金を誤魔化してさらへ込まうとしてゐる――ＡＡ！　何て素走つこい事業でせう！　あたしはあの人を讃美します。いゝえ、あの人はハンブルグの荷上人夫ではないのです。コロンの郊外に生産工場を持つてゐて、半世紀來歐羅巴ぢうの客車と貨物列車へ打つ鋲の供給者なのです。あの人の手はいつも他人のぽけつとへ這入りたがつてうづうづしてゐます。あの人は毎朝熱湯に入浴して、じぶんの身體と一しよに茹でた玉子をお湯のなかで食べるのです。あの人はエストニア孤兒救濟委員會の委託金を着服してこれで亞米利加から理想印しの妻楊子を輸入したのです。そのために青煙突のやくざ船をすつたり傭船しました。うゐ・むつしゆう！　あなたはあの妻楊子を滿載した英吉利代物船の編成隊が不意の光線に追はれた油蟲の家族のやうに仲の好い一列を作つてダンチグ港へ投錨した時の華美な光景を御存じですか？――そして、あの男の足の小指は赤い蘇國毛絲の靴下のなかで

下へ曲がつてるのです。ＯＵＩ！兩方とも――何故こんなに詳しくあたしがあの人のことを知つてるんだらうつてびつくりしてらつしやるのね。だつて、あの人はあたしの良人ですもの。

『tut-tut』

私の眼が高處恐怖病患者と同じ怯惴さで廣い博奕場のあちこちへ走つた。が、私も負けてはゐなかつた。やがて私は、すこし向ふの卓子に、鼻の穴から毛の生えてるリヨンの老生絲商と、生水とＥＮＯの果實鹽と亞弗利加産肉豆蔻と芽玉菜だけの食養生を嚴守することによつて辛うじて繪具付(ペインテド)シフオンの襲着物を着れる程度に肥滿を食ひとめてゐる、安ホテルの椅子みたいに角張つたあめりか女とのあひだに、ルウレツトに忘我して顏を眞赤にしてる私の妻を見つけて、急いでそのことを言ひ出したのである

『彼女(あれ)はこのモンテ・カアロのばくちにかけてはじつに天竺鼠のやうに上手に立ち廻るのです。御覧なさい。ベイチ色の蜜柑(マンダリン)がすつかり上氣してまるで和蘭のチイス玉のやうでせう。二つ光つてるのは黑曜石の象眼ではありませんよ。あれは單に彼女の眼です。無理もありません。今夜は朝までに三千法(フラン)勝つて坂の上の駒鳥屋(ロバン)で私に一九三三年型の純モロツコの洋杖と一流の拳闘選手が新聞記者に會ふときに引つかけるやうな色絹の部屋着を買つて呉れやうと言ふんですからね。いま一生懸命のところです。』

かう言つて、氣がついて振り返つてみると、相手はもうそこにゐなかつた。この女は波斯猫である。だから映畫のなかの人物のやうに音もなく行動するし、たとへモナコ名所犬首岩(テエト・ドュ・シアン)からいが栗の頭を下にして落ちたところで、すぐ立ち上つて懷中爪磨き道具でマニキユアをはじめるだらう。女は兩手を腰に akimbo したまゝ隣りの六番のルウレツト臺のまはりをひやかして歩いてゐた。Ｖ字形に割れた脊中はお尻のすぐ上まで法王新禱臺の素材のカララ大理石だつた。そこに切紙細工の黑蝙蝠が一匹うれしさうに貼りついてゐた。蝙蝠は何處へでも彼女の行くところへ尾いて往つた。

さて、と私は一時にこの現金を數倍若しくは數十倍にもしなければならない目下の事務に返つてゐた。私はＴＡＸＩＤＯの内隱しから mille の紙幣を二枚抜きながら、それを賭け札(カウンタア)に換へてくれる「兩替(シヤンヂユ)」の窓口のはうへ泳ぎ出したのだが、私と窓のあひだには、嘘言とあらゆる惡德の餘地のないほどスキイのうやに瘠せて平べつたい中歐山岳地方の女地主と、星條旗とソウヴアの「Talkie」にだけは必ず脱帽する亞米利加無政府主義の靑年紳士とが挾まつてゐるので、私はしばらく手の寸法(ミユ)と遊ば

なければならなかつた。

ちようど晩餐時刻だつた。人はみんなオテル・ドュ・パリやCIROやアンバサドウルの食堂で皿や給仕人や酒麦と戦つてる最中だつた。賭博場はわりにすいてゐた。それでもこの1923――23の「高い季節(セゾン)」である。着色ジエリイをこんもり型へ嵌めて打ち出して、それへウラルの七寶とルヰ王朝の榮華と近古ムウア人の誇示的輪奐美とをびさんてん風に模細工(きざいく)した。そして香氣と名流と大飾燈(シャンデリア)と八面壁畫とに帝室アルバアト歌劇場のやうに天井の高いこの「機會の市場」だ。様いろの羅紗を張つた長方形の卓子のうへでは、丁抹豚のやうに滑つこい皮膚を有つた好機の女神――このお方はしぢうあの大刈入れ鎌を手にしてる死神のタイピストなんだが、斷髪してることを忘れて速記(ステノグ)用の鉛筆を頭へ挿さうとしてはよく下界へ落とすと言はれてゐる。つまりそれほど頼りない女神である――がほゝえんだり顔をしかめたりする。そしてそのたびに、ナポリの畫學生が三日間大富豪になつたり、コンスタンチノウプルの旅役者が生れてはじめてすつかり借金を返したり、極東日本の一旅行者夫妻が良人から妻への小切手を振出して夫婦同伴で銀行へタキシしたり、市俄古豚肉王の夫人が郷里の豚肉王に宛てた軍資追徴の至急報を片手に山下のモンテ・カアロ本局で同情すべきヒステリイ發作のため痛くないやうに卒倒したり――。

その電文にはかうある。

Fifi has no biscuit.

地上唯一の運命のALHAMBRA、このモンテ――一ばんに灑落てカアロを略して――の賭博殿堂へ私――GEO・タニイ――と彼の蝶形襟飾と白襯衣の胸板とがいま排他的に社交會めかして舞臺してゐるのである。マダム・タニイは巴里トロンシエ街の衣裳屋ボウラン夫人が自分で裁斷鋏(カッタアス)をふるつた蟬の羽にシシリイ島の夕陽の燃えてる夜宴服(イヴニング)をくしやくしやにして、むき出しの細い二の腕へ粒々をこさへたまんまさつさとルウレウト臺のひとつへ埋沒してしまつた。

2

火曜日。モンテ・カアロ。Hotel de Paris の新着客。

エドマンド・モラン卿及びレデイ・モラン。コンノウト殿下。ロイド・ジョウヂ氏夫妻及びミイギャン・ロイド・ジョウヂ孃。フランシス・スワン夫人。ナウクス・タウンセンド大佐。アンドレ・デニユウ氏夫妻。ヴイクトル・アリ氏。ジヨウヂ・タニイ氏夫妻。ジャルデノ・バルベニ氏夫妻。オルツイ男爵夫人。パデレウスキイ氏。以下略。

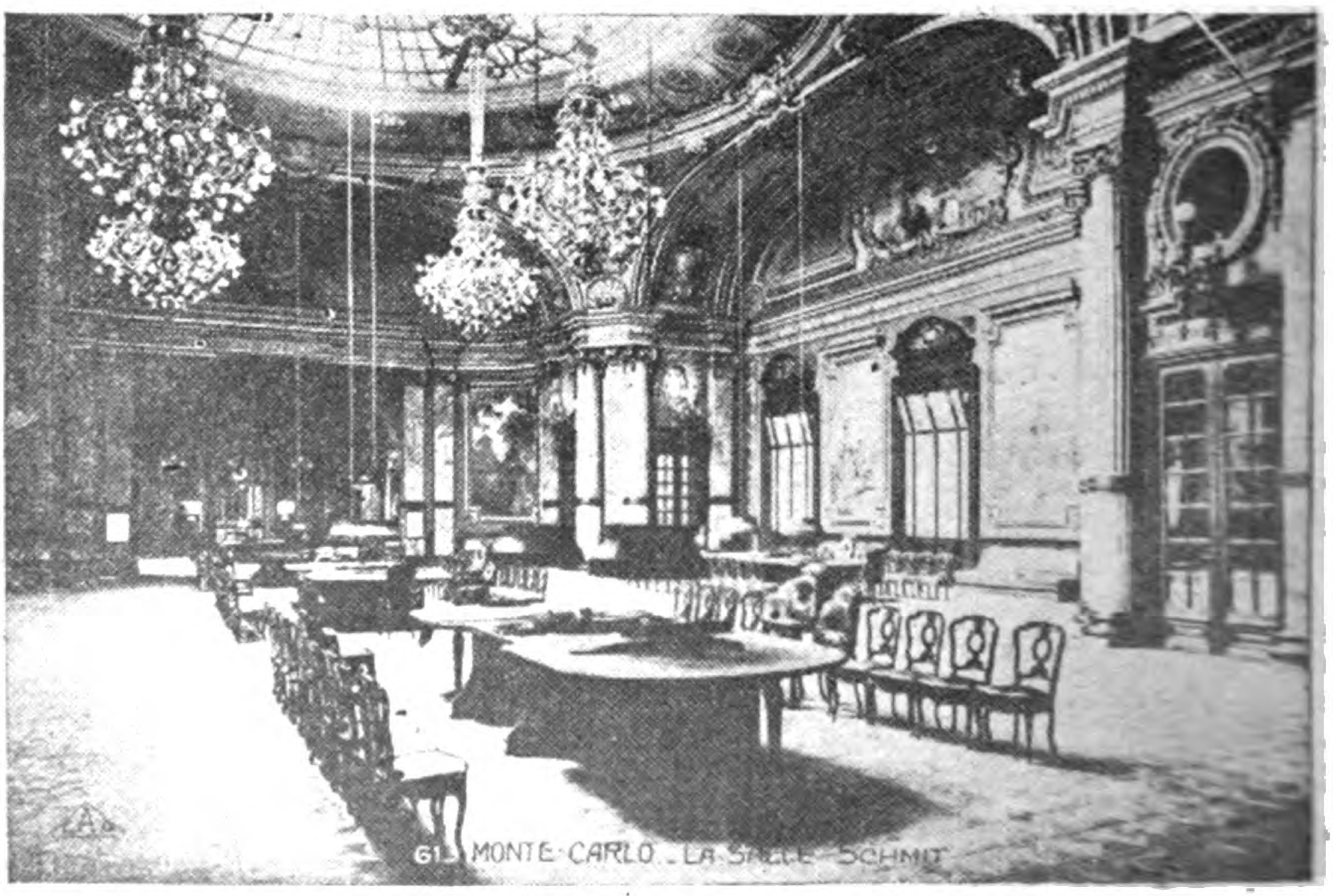


モンテ・カアロの賭博殿堂

私達が Monte Carlo へ着いた翌る日、水曜日の巴里英字新聞だいり・まいる紙大陸版「リヴイラで何が起つてるか・起つてないか」欄の人事往來にかう出てゐた。

　モラン卿は物ごころついて以來理事長をしてきたマンチエスタア紡績同業組合に最近役員の改選があつて、その結果卿のいはゆる「仕方のない鬚だらけの無禮な急進派」のために居心地のいゝ椅子を追はれた精神的負傷を家庭醫師の忠告によつて癒すために、そしてレデイ・モランはこの機會にこゝから各方面の政友へ遊覽保證繪葉書を投函するためにモンテへ來たのだつた。コンノウト殿下は病癒陛下がバグノア海岸へ御轉地になつたのでやうやう岬(キャプ)フエラの別莊へ出かけることが出來るのだつた。その途中モンテ・カアロにとまつて、カフエ・ドユ・パリの前で私の妻のレンズをぢろりと白眼んでそれでも彼女がすなつぷするまで周圍の人々との會話を中止してゐられた。ロイド・ジヨウヂの一家族は土曜日のキャンヌのレデイ・ブウトの晩餐會を振り出しに舞踏と招待とリセプシヨンとが十五分おきに全旅程を埋めつくしてゐた。ひそかにコンミユニズムを信奉する一青年記者が部屋つき給仕に化けてその貸切室へ出入し十五分ごとに彼らの言動のすべてを倫敦本社へ直通電話してゐた。しかし新聞には彼の言はないことばかり出るといつて召使用昇

階段のなかで非常に悄氣てゐる記者を私は見たことがある。君も早く感想兼自叙傳の印税で家内ぢうで特別旅行をするがいゝと私は彼を慰藉しておいた。が、このぶるじよあ的諧謔は彼には通じないやうだつた。そしてロイド・ジョウヂは依然として何時萬年筆と記念芳名錄を突きつけられて署名を求められても困らないやうに右の手だけ手袋をせずにオテル・パリの廊下で杖をついて、それからあの有名な眼尻の皺と同件でしぢう外出してゐた。自動車の踏板へ片足かけたところで「どうぞ（プリーズ）！」と呼びかける寫眞班へは彼は常に選擧民のために貯藏してある微笑の幾らかを許した。この姿態（ポーズ）が一ばん漫遊中の國民政治家らしくて彼の好みに適合したからだ。そのあひだ令孃のミイギヤンはウヰイン法學雜誌の「羅馬私法における賣買契約の責任範圍と其の近代法理思想に及ぼせる必然的投影の價値、並びに以上の歴史的考察」の論文を大ジヤズバンド演奏中のTEAルウムの椰子の鉢植えのかげで讀みながら、誰かゞ話しかけるごとに、勿論すぐ運動帽子のやうに眞ん圓い顏を上げて父のために笑つた。しかし小指はウヰイン法學雜誌の讀みかけの頁へ挾まれてゐるのを私は見落さなかつた。そして相手が若し新しい招待を持ち込んで來たのだつたら、彼女は早速胸の開きから小型記憶帳を取り出して日と時間と場處だけを書きつけてゐた。招待者



賭博場の內部の一室

の名前は決して書かなかつた。たとへそれが未知の人であらうとも彼女はそれを訊かうとしないのである。大戰によつて社交の習慣もかう變つたのであらうと私は思つた。フランシス・スワン夫人は彼女がホテルの日光浴外廊のアペレテフの上で私と私の妻に告白したとほりに、セルビヤの將軍の娘だつた。そこで私はその白鳥(スワン)といふ姓があんぐれかえたゆに系統のものであることを指摘して夫人に滿足な說明を求めたのだつた。それに對して彼女は二つの角砂糖のあひだへ食卓の花挿しから薔薇の花びらを一枚採つて挾みながら、言ひはじめたのである。

『ムシユウ・エ・ダム。私はオデッサの大學を出ると直ぐ第三國際の宣傳員として黑海に沿ふすべての都會の裏街で賣淫婦たちと一しよに人參と洗濯石鹼を食べて生活しました。彼女らに彼女らの社會の採用した新しい政治樣式の哲理を根本的に知らせるためだつたのです。が、間もなく私はその無駄なことに氣がついたのでした。何故つて、彼女等はみんなコルセットに手製のポケットを縫ひつけて、そこへ醜業で獲た三留七十哥と一緒に兵隊達が舊家の客間から盜み出した聖像を押し込んでゐるんですもの。經濟と宗教を同居させるなんて、前者にとつて何といふ冒瀆でせう！　おまけに彼女らは、會話の知れない蠻語しか話さない頸の黃色い一羽の鸚鵡を貰ふためには、最上等の無煙炭みたいに紫いろの熱氣を吐くコンゴウ生れの火夫とでも其の船の碇泊中同棲することを辭しないのです。そのうへ每朝早く市場へ人參と夜來の露と黑土のにほひを運んでくる近郊の農夫達へ彼女らは窓から新聞に火をつけて振るのです。夜明けの闇黑は一さう暗いものですからかうする必要があるのですけれど、―彼女らは「赤い警鐘」紙も「勞働と自由新聞」も火をつけて窓から振るために存在するのだと思つてるのです。さうするとそれを見ておいて市場の歸りに百姓たちが彼女らの部屋を訪問します。そして彼らの馬鹿力の愛撫によつて彼女たちの午後いつぱいの眠りがはじまるのです。歷史的にブルジョアのものと定義されてゐる怠惰・信心・不潔と安逸への强い執着以外、そこには何もないのです。この女達は無產者のなかでの貴婦人であると私は結論しました。同時に私は黑海地方特產の美容用れもんをしたま鞄へ詰めて巴里へ出ました。』

こゝでフランシス・スワン夫人は玩具にしてゐた角砂糖と薔薇のサンドウイッチを口へ入れやうとした。私が心配して注意した。

『小枝を切つて繪具の溶液へ差しておくと、花がそれを吸ひ上げて自動的に着色されます。ニイスあたりではさういふ薔薇をトルキスタンの花崗岩帶で發見された珍しい變種と稱して町か

ビて賣つてゐます。おもにお内祭の花合戰に戀人同士が投げ合ふのですが、首と手足の太い英吉利女なんかがそのまゝ故國の從姉妹へ郵送出來るやうに一二輛づつ金粉燐寸の容器へはいつて荷札までついてゐて値段は五十法です。なかには、物を舐める習癖のある赤ん坊はこれで自殺出來るほど、着色液の性質によつては有毒なのがあります。その一種かも知れませんからお砂糖に挾んで食べるのは中止なすつたはうがいゝでせう。』

これが私の妻を吹き出させた。彼女はH・Pとロココ風に略字のつながつた銀の匙で私の手の甲の靜脈を叩きながら古代ヘブライ語で私をたしなめたのである。

『何を言つてらつしやるの？ 造花ぢやありませんか、これ。』

そして、自分でその花片の一つを捲つてむしやむしや食べてしまつた。もちろんこの時は既に薔薇のサンドウイツチはフランシス・スワン夫人の胃の腑のなかにあつた。例へそれが星のかけらであつても、食卓に出てゐる以上、この女達は鰻藥味汁をつけてフオウクに刺して舌へ載せたことであらうと私は推理した。

消化された薔薇がそのまゝ聲になつてフランシス・スワンの口を出はじめる。

『巴里へ行つたのはオウトバイ競爭の選手になるためでした。ここで私は選手協會の會員章の色ネクタイで髮を結んで、フランチエスコ派の苦行僧のやうに裸足に皮の草鞋をはいて二十六時間もぶつ續けにペダルを踏んだものです。が、これは私に一つの婚約を持つて來るよりほか何の役にも立ちませんでした。男はバルセロナ出身の立體派畫家で闘牛の心得もあつたやうです。「霧の中を往く馬車」といふのと「虹の夢」といふ二つのカクテルを混ぜるのが彼の獨特の技能でした。そして彼は私の銀白の訪問服へ聖エミリオンの葡萄酒でその頃理論的に評判のよかつたサンジカリズムの繪を描いて與れました。鐵槌は鐵槌で集まり、車輪は車輪であつまり、あちこちに調べ革と木靴の模様が散らばつてゐて、ちようどお尻のところに聖書が一冊描いてありました。だからそれを着てグラン・ブルヴウルを歩くことは何んなに私を樂しませたでせう！ キヤフエ・ドユ・ラ・ペエ！ あすこらの椅子に腰かけると、私はたちまち聖書をお尻に敷いてるのです！ 彼はまた手の平に隱れる豆ヴアイオリンを持つてゐて、夜はそれでTOSCAの秋嘆を彈いて私の涙を誘ふのでした。さうして彼は私を伴れて亞米利加へ渡りました。あめりかでは、私たちは私たちの智的さを秘密にして歸化することに成功しました。スワンといふ名はかうして出來上つたのです。彼は忙しがつて衝突して首の附け根を折る株屋

や地下鐵で自ら進んで「春の雛(スプリング・チキン)」に足を踏まれたがる「神呪された胡桃」の多いのを眼當てに、紐育で接骨醫を開業しました。が、その電氣廣告費を稼ぐために彼は毎日違法倶樂部の酒台の向側でカクテル壜を振らなければならなかつたのです。彼が急死したのはこの選擧演說のやうに激しい振子運動がふだんからあんまり丈夫でなかつた彼の心臟へ致命的に影響したのだと倶樂部の醫者が卿へ葉卷で走り書きした死亡診斷書にありました。あとの私のことは多分あなた方のはうが詳しい位ゐでせう。』

私はあわてゝかういふ言葉を挿入する必要を感じた。

『言ふまでもなく近代の新聞はすこし五月蠅くなりかけてゐます。あなたなども隨分個人的に立ち入つた報道をされて御迷惑なすつたことでせう。』

夫人は指を鳴らしてこの私のお世辭に對する喜ばしき受領證の笑ひに換へた。

『事實は私は女秘書聯盟の書記になつて午餐(ランチ)の休憩時間を一時間增すための全國的運動を起して、そのかげに隱れて加奈陀總同盟の最左翼と結托しやうか、それともハリウッドへ行つて映畫女優にならうかとするぶん考へたのです。で、結局、ハリウッドへ出かけてメトロ・ゴウルドキンの配役監督に面會したのですが、海水着に日傘をさして腰で調子を取つて歩く試驗にも、出來るだけ情熱的に接吻する試驗——相手はその監督でした——にも、階段をころがり落ちる試驗にもすつかり及第したのですけれど、最後の乘馬試驗で撥ねられてしまひました。私にはどんなに好意ある馬をさへも恐怖させるところがあるのです。そのために女優になることは斷念しなければなりませんでしたが、あなたが私の名を新聞で御覽になつたとすれば、それは映畫事業に關聯してではなく、遺產相續といふ恥づべき、けれど甘い法律手續の資格としてではなかつたでせうか。全く現在の私は先月亡(な)くなつた父將軍の預金通帳によつてかうしてゐるのですからね。つまり良人と父と、私はいま二重の喪に服してゐて重いのです。しかし私は正規の喪服を着ることは何處までも拒絕します。黑は私に似合つたことありませんもの。』

そしてその申譯のやうに、彼女は父の分と良人のぶんと二吋四方程の黑の絹はんけちを二枚靴下の腿のところから摘み出して、別々のハンケチで左右の眼から桃色の燭のしたゝりのやうな淚を拭くのである。私はそのハンケチが西班牙教徒の寢棺にかける黑レイスの切れはしであることを認めてその通り彼女に告げた。

彼女は父の方のはんけちで鼻をかんでから私の妻に言つた。

「奥さま。お茶へは何をお入れになりますか？檸檬よりも一滴の主人の聲」の蓄音機レコードのはうが宜しう御座いますわ。お茶のなかへあれをすこし爪鑢で削り落していただきますと、どんなにスチイムの利いてる應接間で何時間他所行きの言葉を使つてゐても、決して小鼻の横に脂肪の浮くといふことはございません。さ、庭園へ出て馬車屋の挨拶と夕陽の色を吸ひませうね。お・ヴ・お・あある、ムシユウ！』

そして立ちがけに、通りかかつた給仕を指先で押さへてフランシス・スワン夫人がさゝやいたのだ。

『ビイタア、この紳士にあの「あたしの記憶のために」のカクテルを一つ混ぜて上げて頂戴。』

3

ランキヤスタシヤアのPOLOの名手として知られてゐるナツクス・タウンセンド大佐は、女を操るために赤毛の口髭を短かく刈り込んで、RとUのやうに發音してゐた。彼はまたブラツセル産切子細工の硝子の指輪を三鞭グラスのなかへ落してそれが表面に浮いてるやうに見せる不思議な妙術をも心得てゐたアンドレ・デニユウ氏は恩給で衣食してるセイヌ上流地方の退職戸籍係のやうに見えたけれど、じつは彼は巴里の百貨店プランタンの大株主なのである。ナプキンを頸の下へ押し込んでナイフで給仕人を指揮する癖があつた。夫人は仔馬のやうに若く、ヴイテルボの陶器のやうにこわれやすく、そして二人はいつも、たつた今階上の自分達の部屋の性的天國からこの下界へ下りて來たばかりのところであると告白してゐるやうに見える夫婦だつた。このほか其處には、『モンテ・カアロの誘因の一つの鳩射撃の世紀的大家、齒と襯衣の白い小亞細亞生れのヴイクトル・アリ氏があつた。このモンテ・カアロの高級スポウト鳩撃ちに關しては、産業革命以前から英吉利を中心に異論をなすものが多い。その反對說の大要は、鳩は平和と穏順の半神的象徵であるのにそれを冷たい血において射殺するのは狂氣に近いといふのである。これに對してヴイクトル・アリ氏は先々月浩瀚な反駁文をアムステルダム發行の鐵砲雜誌「火器」に寄せた。そのなかで氏は灰色兎・栗鼠・蜂鳥・馴鹿・かんがるう・野犬等を虐殺するいぎりす人の狩獵趣味を指摘し、これらの灰色兎・栗鼠・蜂鳥・馴鹿・かんがるう・野犬のすべてが如何に平和と穏順の半神的象徵であるかを一々古今の詩篇・散文・學說からの文句を引いて例證した。そして彼は動物に對する感情の相違は畢竟民族の問題であると喝破した。つまり芬蘭人は見ただけで嘔吐するかも知れない豚の胎兒を西班牙人は原形のまゝ丸蒸しにして

賞美するのである。それと同じやうに、一羽の鳩にしても、いぎりすの眼には資本帝國主義のあらゆる美名家として映るだらうし、ホッテントットにとつては單に焙り肉の晩餐を聯想させるに過ぎないかも知れないのだ。そしてわれわれモンテ・カアロの定連(アビチュエ)には、射撃の的以外の鳩といふものの存在を想像することは出來ない。かういふ論旨だつた。この論文には豫期以上の反響があつて、ことに英吉利人が灰色兎・栗鼠・蜂鳥・馴鹿・かんがるう・野犬を襲撃するくだりには、それらの生物に對する氏の同情が切々と溢れ出てゐて、ジエネヴアに本部のある萬國動物愛護會が特にこの一節の拔粹を號外週報として一般に配布したくらゐである。ヴイクトル・アリ氏は來月中旬の鳩擊ち選手權大會に出場のため滯在してゐるのだつた。

ジャルデノ・バルベニ氏夫妻――羅馬ボルゲエス家の姻戚に當る伊太利貴族。夫妻とも、すべての伊太利人と同じに耳のうしろに垢を溜めて、それを落さないやうに朝夕深甚の苦心を拂つてゐる。バルベニ氏はずぼんのポケツトに洋銀の靴箆を入れてゐるのが動くたびにはつきり見えた。夫人は赤皮の飛行帽をかぶつて素膚の脚へおれんじ色の粉おしろいを叩くことによつて靴下以上の効果を出してゐた。

オルツイ男爵夫人――山腹の Villa Bijou で每土曜日ダンスを催ふす。誰でも知つてるとほり、平穩に年をとつて來た英吉利の探偵作家だ。今なら Villa Bijou, Monte Carlo といふアドレスだけでフアンの郵便が屆くだらう。

パデレウスキイ氏――白い長髮にちよこんと帽子を載せて裾の長い外套を着てゐる人。ホテルの食堂の音樂家を恥かしがらせないやうに注意して何時も發見しにくい隅の卓子へつく。

それから朝飯(プチ・デヂュネ)の盆に載つて部屋へくる新聞を見ると、片眼鏡の外相オウステン・チャンバレンの夫人もこの Hotel de Paris に泊つてゐるとあるけれど、どれがその人かちよつと私には判らないのである。が、丁抹の王樣だけはホテルの社交室で一眼で認めることが出來た。王樣の身長は六呎五吋である。私達はコペンハアゲンでよくこの巨人王のことを聞かされたものだ。それがいま私たちのゐるホテルで外ながらお眼にかゝれたわけだ。王樣と女王さまは每年キヤンヌへおいでになる。そしてそこを根據にジユアン・レ・パン、アンテイブ、ニイス、モンテ・キヤアロ、マントン、サン・レモと incognito でお歩きになるのである。

かうしてオテル・ドユ・パリは全歐羅巴の上流と禮服と談笑と香氣と宮廷風の大裝飾とによつてＬＩＰＯの電氣看板が飛行をはじめたやうにモンテの官能を刺激してゐた。

私たちも禮服へ [illegible] した。私達も讃美の [illegible] を渉つた。香氣のために私は毎朝オウ・ド・コロンを飲んで、頭髪にはゴミナ・アルジエンテンの固化油(フイクサ)を使用した。妻は英吉利直輸入の婦人煙草「仕合せな夢(ハツピイ・ドリイム)」を喫かしつゞけた。そして爪を三角に切つて貝細工の光澤を模倣するのに午前いつぱいかゝつた。

4

私達はマルセイユ發ヴアンテミイユ行きのP・L・M列車をアンテイブで見捨てたのだつた。

そのとき一七八八年以來の記錄の氷の風が北極から露西亞と波蘭土の野原を吹き拔けて歐羅巴の主要部分の都會の記念塔とアパルトマンの窓枠とを痛さうに揺すぶつてゐた。

KEWの役人が兩手を空中に抛り上げて宣言した。フアロ列島の東部に精力を持つ高氣壓がある。この北極風が勞農共和國の氷原を撫でて來るために現在の寒さであると。つまり、すべての社會的妨害がさうであるやうに、その天候の場合も原因は狂的(クレイジイ)露西亞の世界呪文の有難くない反應であると彼らは言ひたいのだ。

が、それとは關係なしに、ルウマニアでは汽車が雪の下に寢ころんで。旅客は工兵隊が風俗博物館から應急に借用して來て雪中に立てた亞剌比亞煙管(パイプ)を通して外部の家族と會話してゐた。

ウキインでは大型輸送自動車の陸軍飲食所(キヤンテイン)が街上に出張して通行人と好奇な外國の旅行者とに羊の脂肪肉と蕎麥粉と上官の命令とを煮込んだ熱湯汁(シチユ)を無料分配してゐた。百貨店歸りの若い貴子女の飲んだあとからは、兵卒達が口紅を舐め取るために先を爭つた。ダニウブが六呎の厚さに氷結して子供たちはみんなスケイトに行つたのでブオレストの學校は自然に閉鎖された。

獨逸では、スプリイ河と魚類の意識が凍つて、浮浪人はその無機物化した魚を發掘して來ては湯槽(バスタブ)に放して蘇生させて賣つてゐた。伯林ではすべての市街自動車のエンヂンを一晩ぢう動かしておくことによつて夜中に發動機油の凍るのを防がなければならなかつた。

マンチエスタアではフイルズ製鐵會社の地下室蒸氣釜が氷つてたところへ急に加熱したので破裂して三人の職工が釜と一しよに即死した。

ランダイでは佛蘭西軍の歩哨が寒氣のために衣裳人形のやうになつて凍死した。ルツエルンの湖では汽船の羅針盤が氷つて岸壁に熱烈な接吻をした。巴里では二つの橋の鐵材が收縮して交通遮斷になつた。ヴエニスでは運河と礁湖(ラグウン)がすつかり硝子張

りになつて、市民は一時ゴンドラから解放された——。

これらの土地を寒氣災害視察員のやうに巡回して來た私たちに、RIVIERAの太陽と植物系統は何と浮氣に見えたことだらう！

汽車を出ると地中海が空色の歡聲を上げた。誕生日菓子のやうに立體的な緑の山がそれに答へてゐた。停車場と機關車の間に一線の海が光つてゐた。そこに快走艇（ヤット）の赤い三角帆がコルシカからの微風を享樂してゐた。ヴエランダを廣く取つて、いぶし銅の訪問板にまでミモサの花の屆いてる原色塗りの玩具の山荘（ヴィラ）が、それぞれの地形から人の注意を惹かうとしてゐた。近づいてみると、その一つ一つが固有名詞を秘藏してゐた。La Boheme といふのがあつた。"MA CHERIE" といふのもあつた。英語では "The Wood-nymph" などといふのが見られた。ミモサは何處にでもあつた。空氣はその黃金色の吐息のためにグラスの香水工場のやうに滋つぽく、かつ酒精的だつた。海岸の散歩街（プロムナアド）では巨人の椰子があふりかのはうへ脊伸びをしながら行列してゐた。化粧クリイムの浪へ樺色に燒けた海水着の女達が走り込んだり逃げかへつたりしてゐた。砂には日光と戀と子供の遊びと籐椅子とがあつた。人々はみんな大金を費つて遊びに來てゐる者に特有な、小さな事件を好む惡戲らしい眼つきで素早くお互ひを見交してゐた。私たちは自動車道路に沿ふオテル・アングレテエルの自動車庫へ行つて支配人に會ひたいと言つた。

こゝは新型の自動車に自動車學校の教授格の運轉手をひとり附けて、一週間でも一月でも自用車として貸切りにするところなのである。はじめに保證の金を置けばリヴイラのなかなら何處へ乘つて行つてもいゝことになつてゐた。自動車とそれから運轉手の食糧、車の手入れや運轉手の宿泊料、チツプ、グラアチ費その他は一切こつち持ちで、ほかに巴里十六區のアパルトマン代ほどに高い借賃を拂はなければならないのだ。しかし、そこの自動車には何う見ても富豪の自家用としか思へないすべての設備と裝飾が行き屆いてゐた。支配人が私たちを案內した陳列場（ショウ・ルウム）には、まるでエトワルへ向つて右側のシヤンゼリゼの窓のやうに、高慢な感情の機械動物がすつかりお化粧を濟まして思ひ思ひの媚態（コケトリイ）を凝らしてゐた。それは丁度貴族の女たちによつて育てられて來た犬の展覽會と言つた、高價な女性的な感じだつた。その、みどり色の垂幕を背景にあちこちに近代的光輝を放つてゐる新銳の自動車のあひだを、私達は堵列禮に臨む東洋艦隊の艦長夫妻のやうに見て廻つた。

アルプス國境防備兵のやうにしつかりした足許と精悍な長身

とを持つ伊太利製のランチャ。

麒麟のやうに清楚なエスパノ・シイザ。

撫でながら走らせることを必要とする誇りの高いワザン。

それから何もかも承知してゐる第一人者の應揚な微笑を忘れないロウルス・ロイス。

私達は彼女の好みで鼻の尖つたランチヤンを選んだ。三週間の契約だつた。それはスポウツ・カアのやうに脊の低い眞つ黄いろに裝つた稀大の伊達者だつた。黒と黄の配合はこの週間の流行だと言つて、彼女は黒の制服をつけた眞面目頬の運轉手を悅んだ。私が名を訊いたら彼は「第十九番」とだけ答へた。かうして19が彼の呼稱になつたのだ。そしてこの黄瑪瑙の卷煙草パイプのやうに粹なランチヤが、これから三週間私たちの自用車としてモンテ・カアロ公園の小徑に park されるであらうし、19は三週間のあひだ私達が「ほんとに彼男だけは私たちが掘り出した寶石です」と言ひ得る身綺麗で小氣の利いた

“My Good Man„ となることとであらう。

『僕らはこの車で、君に運轉させて眞直ぐ巴里から來たのだから、そのつもりで。』

私が言つた。妻がつけ足した。

『さうしてムシユウ19はあたし達んところに三年――いいえ、足掛け四年働いてゐる忠實な忠義な運轉手さへ[illegible]頭の召使ひは腰が浮いてて困るんですけれど、あなただけには――なんですつて。』

『さうだ。是非さういふ風に考へてゐて貰ひたいな。』

私が激勵した。すると19はにこりともせずに答へるのだつた。

『はい。すつかり承知してをります。』

で、いきなり地面がうしろへ滑り出した。

ランチヤの後部席には巴里一流の鞄店で買ひ集めて來た私たちのスウツケイスが晴天の朝のカプリ島のやうにかゞやいてゐた。そのなかでも Claridge の館表だけを一枚貼つた深紅の女持ち帽子箱と、二人のゴルフ棒を差した縞ズツクの袋とが人眼を引いてるやうだつた。が、私達の誇りはそれだけではなかつた。妻はわざと帽子をとつて、水玉模樣のスカアフと一しよに短い斷髮が風に流れるのに任せた。私は彼女の足を蜥蜴皮の靴と一しよに自動車用毛布で包んでから、私の自動車用革外套の襟を立てゝ、自動車用鳥打帽子の鍔を下げて、自動車用ブライアにダンヒルの自動車用點火器で火をつけた。そしてうしろへ倚りかゝつた。外套の下に私は緑灰色のゴルフ服を着てゐた。ゴルフ靴下の房も言ふまでもなく緑灰色だつた。彼女は職選した

アンサンブルのうへから大きな巻毛の自動車用コウトで埋めつくされてゐた。そして一分おきに自動車用手提から自動車用鏡を出して薄飴いろのKEVAの口紅をアプライしてゐた。19の黒い制服には金釦が重要性をつけてゐた。すべてが巴里からドライヴして來た人に相應しい「長い途に狐色になつた荒(ラフ)さ」だつた。私は彼女の肩に手を廻して、19がますく速力を踏んで一時間七十七哩するのを微笑によつて默許しておいた。

私達は高(アバ)コルニッシュ街道の行手にモンテ・カアロが出現するのを待つてゐた。

モンテ・カアロだけは別だ！

これは地球に打ちこまれた蛇眼石の釘みたいなものなのである。女惡魔のコンパクトに幽閉されてゐて開けるとすつと吹いてくる冷たい微風のやうな場處である。

このモンテ・カアロは太陽の下の何處よりも盛大な國際的自由意思(ケアフリイ)を唯一の價値として實行(プラクテス)してゐるのだ。その驚くべき原動力は鐵片のかはりに黃金を引きよせる特殊裝置の磁石にある。そこでは近代的に洗練された物質が——そして物質だけが——公認の王位に就いて二大陸の名士連(セレブレテイス)を踊らせてゐるのだ。

何うしてここへ「自動車一台持つて歩かない普通(コンモン)の旅客」として汽車で着くことが出來やう！停車場から來た人はホテルでも直ぐに二流の客と踏んでしまふに違ひないのだ。それはこの愉快に輕跳な物質慾の環境への驚くべき反逆でさへもあり得るのだから、しごく無理もないことだと私は自分に言ひきかせた。そこでかうして自家用自動車を自家用運轉手に運轉させて巴里からすつ飛ばして來たもののごとく見せかけてホテルの玄關へ乘りつける必要があつたのだ。そしてそのためには例へ空(から)つぽでも衣裳鞄の一つや二つは餘計に持ち、ゴルフ道具と乘馬服だけは、ゴルフと乘馬に何らの關係なく、忘れることを許されないのである。これではじめてホテルも眞劍に相手にして吳れるだらうし、私たちも「上品な自信」をもつて周圍の華麗さに接することが出來るだらうし、誰とでもほゝえみ交して最近のHITである芝居の評判を話題に上せられるだらうし、さうしてモンテ・カアロの中心に潜りこんで其の柱石(キヤプテン)たちと混合(ミキサブ)し、彼らのあひだに流行するカクテルの秘密をさへも知り、彼等の愛好する冗句(ジヨウク)に哄笑し、かれらのdoingsをDOすることが可能であらう。つまりこれから歐羅巴最前線の「速い一團(ファスト・セット)」に私達も參加しようとしてゐるのだ。Tra-la-la！

ホテルへはマルセイユから電報してある。

"Coming this evening. Mr. and Mrs. Tany."

[illegible]は満足の眼でもう一度身邊を檢査したる

この、私たちとモンテ・カアロとを最も効果的に結びつけるために、私たちはその目的で取つておいた別經濟の三分の一を今度の服裝と持物と所謂「おもて見(フロント・シャツ)」の全部へ新しく投資したのである。そしてこの瞬間の發明になるダンスのステップは、出て來る前にことごとくマスタアした筈だ。しかも、私達のやうな人のためにひそかに存在してゐるあのアンテイブの車庫を利用して、競馬馬のやうにスマアトなこのランチヤと、裁判官のやうに厳粛な「19」とを手に入れることに成功したではないか。何がほかに私達の Make-up に缺除してゐるといふのだ？

『あ！　どつかから犬を借りてくりや宜かつた！』

私が叫んだ。彼女は非常に悲しさうな顔をした。

『犬？　さうね。ペキニイスか何か――でも、もう遅いわ。駄目よ。いまになつてそんなこと言つちやあ――。』

私は、私たちの完全さに汚點をつけないために、犬のことはこれきり考へないことに決めた。そしてさう彼女に約束した。

コングミンの小灣が私達を呑まうとして斷崖の下に待ち構へてゐた。

ランチヤは、それがランチヤであるところの、すこしも速力をゆるめることなしに私たちを[illegible]コングミン、[illegible]失望させた。

私たちのホテル入りは so far 美々しい成功だつた。最初の美少年は彼女の帽子箱を、第二の美少年が彼女の化粧鞄を、第三の美少年は彼女のステッキを、第四の美少年は第一のスウツケエスを、第五の美少年が第二のスウツケエスを、第六の美少年は――とにかく第十一の美少年が私の眼鏡サックを捧げて續くまで、じつに十一人のボウイが私達の背後に行列した。そのあひだ忠實な19は車扉(ドア)のそばに直立して帽子を脱つてゐた。大理石の階段のうへには支配人フリユウリ氏が出迎へてゐた。

彼は手を揉み首を曲げて習慣的に笑つた。が、彼の頭腦は私たちの「狀態(ナンバア)」と所屬級を把握(サマツプ)し、一刻も早く待遇の等別を確立しやうと忙がしく働いてゐた。私は彼にフアシスト風の眞直ぐに腕を上げる挨拶をして、先づ私たちが如何に方々を旅行して來た場慣れ者であるかを示した。それに對して彼は帝政時代の佛蘭西外交官のやうに片手を胸に當てゝおじぎする禮を返した。それは古風に優雅なものだつた。そして彼は私たちのために特に部屋の用意が出來てゐると言つた。But then, この M. Fleury は巴里リッツ・ホテルの支配人レイ氏、オテル・ロワヤル・オスマンのメラ氏、エドワアド七世ホテルのブラロン氏、オ

デル・ジョルジュのタレイル氏とゝもに大陸ホテル經營の五人男であることを私は以前から知つてゐた。

5

専賣皮の靴のさきで星がギタノの舞踏を踏つてゐた。カスタネットはモナコの夜の海の音が鳴らしてゐたのだ。オテル・ド・ユ・パリとCASINOのあひだに、食卓布のやうに明るい燈火と人々の笑ひ聲とがあつた。私と彼女は、理髪師のやうなつめたいにほひを發散させながら禮裝の肩を較べた。私には固い洋襟が寒かつた。

カフェ・ド・ユ・パリから音譜が走り出て來た。白絹を首へ卷いた紳士が、その白絹を外してシルクハットと一しよに入口の制服の男に渡してゐるのが芝居のやうに見えた。女たちは金銀のケエプをしつくりと身體に引き締めて、まるで鮮の鱗を持つた不思議な魚のやうだつた。彼女らの夜會服の裾は快活に擴がつてゐてさうして背ろの一部分は靴にまで長かつた。流行は絶えず反覆するものであると賢人が言つた。あれほど批評の聲のやかましかつた短袴時代は過去へ流れて、世はスカアトだけがヴィクトリア朝へ遷つたのだ。しかし、矢張り膝頭の見える女もゐた。が、今もいふとほり流行は絶えず繰り返すものである。だからこれは、遲れてゐるのではなくて、現下の長袴流行の一つ先を往つてるのだ。つまりこのはうが早いのだ。とは言へ、その敵（ライヴァル）に當る長袴連中はそのまた短袴時代の次ぎに來るであらう長袴時代を生きてゐるのかも知れなかつた。すると、いまの短袴組はそれを通り過ぎた又また一つ未來の時期を摑んでゐるのだと主張するのである。

賭博場（キヤシノ）の建物は航空母艦のやうに平たく長かつた。正面（ファサアド）に赤い滿月が懸つてゐた。それは大時計のやうに出來てゐて、針が動いてゐた。

大玄關を這入ると、私たちはすぐ左手の廣間へ行かなければならなかつた。そこは一應入場者を審べて切符を發行するところだつた。その部屋は合衆國高等法院のやうに出來てゐて、ボウル・ボウの稅關吏のやうな疑ひ深い、そして何時も突發事を待つてゐる眼をした役員たちがとまり木の上に止まつてゐた。彼らは低聲に出入りの女達の身體つきに關して際限のない冗談を交換するよりほか用もない樣子だつた。そこで私たちは旅行劵の檢査を受けた。役人は私達に入場を許可するかしないか長いこと相談したのち、はじめから解つてたやうに許可することに決定した。

私の網膜のなかで光線と色調とアリアン人種と demi-mond

[illegible]の[illegible]とが衝突して漲つた。[illegible]の停車場の様な温氣のなかを饒舌と昂奮と羊装とが共通の興味のために集合し、練り歩き、揺れ動いてゐた。ここにはヴアテカン美術館のそれにも劣らない一面の壁彫刻が微細に凹凸してゐた。垂れ絹はすべて五月の朝のSAVOY地方の野の草色だつた。壁畫が霞んで、圓天井の等身像は聖徒の會合のやうに空に群れ飛んでゐた。いたるところに大笠電燈と休憩椅子があつた。大笠電燈は王冠形の水晶と獨創とで出來てゐた。そして、金の鎖を莖に持つたフロリダ黄蘭のやうに宙乘りをして、そこから靜かに得意の夢を漂ひつゞけてゐた。休憩椅子は海老茶の天鵞絨の肌をひろげて、傍へ來る女の腰をしつかり受取らうと用意してゐた。ケルンの大伽藍の内部を祭壇のうへの奥の窓から彩色硝子をとほして覗くやうな、この現世離れのした幽艶なきらびやかさが刹那の私から觀察の自由を略奪した。が、私の全身の毛孔はたちまち外部へ向つて開いて、そのすべてを吸收しはじめたのである。私は駐外武官のやうにタキシイドの胸を張つた。

La Salle Schmit はルウレットの部屋だ。Salle Louzet は「三十&四十」だ。そして La Salle Médecin は「鐵の路」の賭博室である。その何れもに禮裝の人々が充滿して、このモンテ・カアロの博奕場を經營してゐる「海水浴協會」——何と遠くから持つて來た名であらう！ お、これも、多くの「自殺」を遊がせるといふ意味でなら實に妥當だと言へる——の常雇ひの世話係りや、自殺と不正を警戒してゐる探偵や、初心者にゲイムを教へる手引役や、卓子へ人を進める客引き——この成語はナポレオン當時募兵員が巴里の街上に立つて通行人に出征を勸誘した故事から來てゐる——やが開會の鈴を聞いた代議士のやうに、急にめいめい自分たちの重大さを意識して人を別けてゐた。

それは大停車場のやうな堅實な廣さだつた。何處にでも明光が部屋の形なりに凝り固まつてゐた。自殺者を擔ぎ込む「墓のサロン」の扉が口を結んでゐた。すると私の耳にちよつと靜寂が襲つて來た。そのなかで一つ上釣つた女の聲が走つた。

『Rien n'ra plus!』

女は台取締人の顏を見て言つた。彼女はいまの囘轉に負けて無一文になつたのだ。この頃は「運が背中」で、今夜でたうとう財産のすべてを失くしてしまつた。彼女は早口にさう口說いて卓子の人の同情を求めてゐるふうだつた。

まるけ・むつしゆう！

まるけ・むつしゆう！

ら・ぼうろ・ばつす！

眠さうな顏と聲の台取締(クルピエ)が、かう呟きながら片手で囘盤を廻して同じ手で「丸藥(ビ)」をはじいた。

『Un cochon——豚(コシヤン)！』

女は卓子を叫いて起ち上つた。みんな知らん顏して盤から眼を放さなかつた。女は出口へ急いだ。彼女はこれから何うするだらう？きつと今着てゐるあのおれんじ色のドレスを「木の枝へ懸けて」——質に置いて——歸つて來て、その金でもう一度運命を試驗するに相違ないと私は思つた。この月夜の果樹園のやうな空氣を呑んで陶醉を覺えたものにとつて、「綠色の羅紗」の手ざわりは一生峻拒出來ない魅惑なのだ。恐らくそのうちに彼女は女性の誇りまで「木に引つかけ」たのち、ルウレット台の一つで勇壯に自殺することであらう。今のやうに「豚！」と叫びながら！——しかし、そのためにこのキヤジノでは、自殺者に對するあらゆる人員と設備を調へて待つてゐるのではないか。Tra-la-la!

まるけ・むつしゆう！

まるけ・むつしゆう！

ら・ぽうる・ぱつす！

退屈で、そして冷やかな台取締(クルピエ)の聲だ。

Quatorze rouge, pair et manque

『十四！ 十四！ 赤、偶數、小！』

『卅一！ 卅一！ 黑、奇數、大！』

あちこちにその呼び聲(アナウンス)が轉がつてゐた。そのたびに台取締(クルピエ)の棒の先で負けた賭札(ブウルボア)が掻き集められ、勝つた賭け(スティキ)へはそれぞれの割合ひで現金代りの札が配られた。どの卓子も廻囘盤(ルウレット)はたいがい最低十法の規定だつた。幾つもの台が整然と並んで、そのすべてが顏いろを變へた紳士淑女で一ぱいだつた。肩から脊中まで裸かの夜會服(デコルテ)にタキシイドと燕尾服が重なり合つて盤を覗いてゐた。長方形のルウレット台には綠いろの羅紗が敷き詰めてあつた。これが歷史的に、そして物語的に有名な「モンテ・キヤアロの綠の LURE」なのだ。この金錢の遊戲を司つて、幾多の悲劇と喜劇が衝突するのを實見して來た證人である。卓子の中央は兩側からくびれてゐて、そこにふたりの取締人(クルピエ)——Croupier が向ひ合つて座を占める。その手元には出納の賭札が手ぎわよく積まれてある。二人のタルウピエの中間に廻轉盤、それを挾んだ左右に線と數字の這入つた賭け面がふたつ續いてゐる。人はぐるりとその兩方を取りまいて、つまり一つの卓子で一時に同種のゲイムが二つ進行してゐるわけだ。タルウピエの一人は右側を支配し、他は左を處理する。人は兩替(シヤアンジユ)で換えて來た「灰色の石鹼(サボン)」——大きな金額の丸札——をそのまゝ賭

けてもよし、細かいのが欲しければクルウピエが同額の「ぼたん」に崩して呉れる。廻轉盤と賭面には一から三十六までの數が仕切つてある。卓子の賭け面のはうは一二三・四五六と三つ一線に縱に進んでゐるが、廻轉盤のは一・三三・二六・二四といつたぐあひに入り混つてゐる。この圓盤がクルウピエの手によつてまわされるのだ。同時にそこに白い玉を放す。すると盤の數字には一つづつに穴がある。玉はいろいろに動いた末そのうち何れかの數へ落ちる。これで勝負が決する。賭け札（ブウルボア）は卓子の面のその數字へ張つてあるのだ。

まるけ・むつしゆう！

まるけ・むつしゆう！

ら・ぼうる・ばつす！

賭け方と拂戻しの歩合ひとはじつに複雜をきわめてゐる。みんな鉛筆と記錄用の紙片を持つて陣取り、一々番號のレコウドを取つて統計を作り、それによつて可能性の多い數字、言はゞ「その台の傾向・癖」を探り出さうと眼の色をかへてゐるのだ。數字はまた赤と黑と二つの色に別れてゐる。いはゆる Rouge et Noir の運命の分岐だ。だからこの「赤か・黑か」に賭けることも出來るし、そのほか偶數奇數、それから、三十六のうち十八までを落第（マンケ）、十八以上を及第（パ）としてこれらにも張り得る。そして、例へ當つても、出した金額の率によつて一倍から三十五倍まで返つてくる金の割合が違ふ。赤のところへ百法（フラン）——十圓——置いて赤が出たとしたところで、賭金は別にその一倍、百法にしかならないが、假りに十一へ眞正面に百法抛り出して十一へ玉が落ちたとすれば、百法の三十五倍と元金の百法と、つまり三千六百法——三百六十圓——といふものが轉がり込む。賭けたのが百圓なら三千六百圓だ。しかし、かうなると私も、四角（キャレ）だの馬乘り（アーシュヴァル）だの橫斷線（トランスヴァサル）だの柱（コウラム）だの打（ダズン）だのと色んな專門的な細部や、他の二種の chemin de fer と trente et quarante のゲイムにまで言及したい衝動を感ずるのだが、いまこゝで私はその煩瑣なる事業に着手してはならない。要するにたゞ、白い「丸藥（ピル）」一つの氣まぐれによつて「灰色の石鹼」と「扣鈕」とがさまざまに動き、そのたびに或る人の財布はトランクのやうに大きくなり、ある人のぼけつとは夏の住宅區域のやうに空（から）になり、自殺する女や發狂する男や、製粉工場を手離してもう一番と踏み止まつたり、勝つた金で逸早くビアリッツに家を買つて勇退したり、とうとうホテルを夜逃げして、來る時は自動車の窓から見て通つたコルニッシュ道路に長い月影を引きずるものも出てくれば、それをまた途上に擁して每晩「卓子」で見た顏が拳銃を突きつけるやら——「みどり色の誘惑」は時

として意外の方向と距離にまで紳士淑女をあやつつて止まない。

まるけ・むしゆう！

まるけ・むしゆう！

博奕においては夫婦といへどもふところは別である。で、軍資と祝福を分け合つたのち、私達はその人混みのルウレット室で銘々の信ずる道に進むことにした。五時間後に出口で落ちあふ約束。

6

五時間後。

深夜の Le Café de Paris, Monte-Carlo.

そこは音樂よりも會話を愛する人々のために出來るだけ交響樂から離れた、光りと影の多い「一部落」だつた。そこでは酒杯と煙草と煙草の灰と、寫眞現象液で手の赤い獨逸人、フロウレンスの齒科醫、ウヰインの毛皮商、グラスゴウのニユウス・ビイ紙特派員、フランシス・スワン夫人、ヴイクトル・アリ氏、それから私と私の妻とが、みんな一時にしやべり出さうとしてはぶつかり合つて、急にみんな控へて默つて、すると暫らく誰も何も言はないものだから今度はみんなで大笑ひをしてゐた。そんなことばかり繰り返してゐた。それぞれに面白い顔をしてゐるといふやうな理由から、一しよにキヤジノを出ると直ぐ何時からともなくこれだけの人が集まつたのだつた。私たちはソルボンヌ附近の下宿の大學生のやうに快活と卓子と經濟を持ち寄つて誰の壜からでも飲んでいゝことに決議した。が、給仕人の注意を捉へて何か註文するのは多くウヰインの毛皮商だつた。彼は今夜好運の女神が自分のうへに微笑んだからその祭典を擧げるのだと説明した。しかし、さうでなくても彼はしぢう祭典をあげてゐるらしかつた。彼の鼻は隣りの食卓の酒まで嗅ぎわけたし、手は秋の夕方の電線のやうにふるへてゐた。フロウレンスの齒科醫は自分に話しかけられた場合にだけは決して答へなかつた。そして彼は誰のとも知れない一本の脱毛に興味の全部を集中してゐた。彼はそれを卓子の法瑯板の上に押さへて、ペンナイフで端から細かく刻む仕事に沒頭してゐた。彼はまたタキシイドの胸のポケツトへ革命的な襟飾を押し込んで、それを素晴しい變り色の絹ハンケチであるかのごとく見せる術にも成功してゐた。じつさい、もし一度彼がそのネクタイであることを忘れて、ぽけつとから引き出して口の周圍を拭きさへしなかつたら私たちはみんな何時までもそれがハンケチであることを信じ込んでゐたらう。

ピイ紙の特派員は水蜜桃のやうな少年だつた。彼は手の平に金いろの細毛を生やしてゐた。そして去年の暮れマドリッドの古い[illegible]に居あはせたと言つてゐたのにその時のことを話した。

『火よりも煽りが恐しいのです。それはまるで古帽子から燻ぶる反動思想のやうに——。』しかし彼の聴手はフランス・スワン夫人だけだつた。夫人は假裝舞踏會の士官學校生徒のやうな、身體の輪廓に食ひ込んだ水色の男裝をしてゐた。これはあの護謨絲で自動的に中箱の引つ込む仕掛けのミラノ製の Italianissima 燐寸のやうな、非常に役立つ、寸分の隙もない効果だつた。夫人によれば、近代社會の大きな間違ひは、男女の性別を不可侵の事實としてこれにだけは手のつけやうとしないところにあつた。何故か？われわれは生理學を矯正して優生學を案出したではないか。そのほか大學の講座はあらゆる反逆の科學で重いのだ。研究室の窓からは手のつけられないほど増長してしまつた人造人間が二十三世紀の言語で通行の女にからかつてゐる！

ヴイクトル・アリ氏は鳩撃ち大會が濟むまでは禁酒してゐると言つてグラスを無視した。そして一度灯にすかして見てから水を飲んでゐた。

キャフエは博奕場のこぼれで溢れてゐた。私達の隣のテエブルには地圖で見ると上の端のはうから來たらしい二人の青年が陰氣な服裝をして「金酒」を飲んでゐた。スウプのなかへ麵麭を千切つて浮かすこととの好きなミドルエセックス州の代言人(ソロシタア)や、絶えず來年度の鐵道延長線の計畫を確かな筋から聞き込んだと吹聽してゐるプラハの土地利權屋や、コルセットの留金が引釣つてきつと靴下の上部に筋切れがしてゐるに相違ない巴里下りのマドモアゼル——でみ・もんでん——や、南佛蘭西の汽車中に英語の掲示がある・ないで今大議論を戰はしてる亞米利加の老孃たちや、かういふ夜と晝をはき違へた群集がめいめい他人の言葉を押し返してそれに勝つ必要上ほとんど絶叫に近い大聲を出しあつてゐた。そこにはまた交通巡査のやうに冷靜な猶太人の給仕長があつた。通路に屯して卓子の空くのを覗つてゐる伊太利人の家族伴れがあつた。そのなかの娘は待つてゐる時間を利用して立ちながら繪葉書を書いてゐた。銀盆に電報を載せたボウイが「何時ものテエブルにゐるいつものムッシュウ」のところへ走つてゐた。伊太利人の娘と衝突して兩方が笑つた。ここから一つの戀が噴出すべき筈だと私は觀察した。這入つてくる人ばかりで誰も出て行く人はなかつた。ちようど今日から明日にならうとしてゐることを私は齒科醫の腕時計で讀んだ。

そして獨逸人に言つた。

『僕はオテル・エルミタアジュのあなたの部屋の番號を知つてゐます。三十六號でせう？自分は妻と別々に部屋を取る習慣だなどとは仰言らないでせうね。』

ところが彼の驚愕が私を驚愕させたのである。しかも彼のは覺えのない罪を責められる人が不思議さうに示す種類の驚愕だつた。

妻ですつて？　あなたは人違ひをしてゐる。悲しいことだ。私は結婚するほど舊式でもないし、オテル・エルミタアジュは外部から見たことがあるだけです。』

私はじぶんが單なる即席の思ひつきでこの個人的な會話を切り出したのではないといふ立場を守護するために、すこしばかり顏を赤くして粘着(パアシスト)した。

『それだけではないのです。僕はあなたがコロンの製鐵會社の社長であることも、亞米利加から妻楊子を輸入した本人であることも、そしてそのために何艘の英吉利貨物船を傭船(チャアタア)しなければならなかつた――すつかり知つてゐるつもりです。』

『恐るべき獨斷だ！』　獨逸人は卓子を叩いてグラスにシミイを踊らせた。『私は單なる正直な映畫技師です。』

私は默つた。これ以上主張をつゞけることはこの肥大漢と私とのあひだの決鬪に終りさうだつたから。しかし、それにも係らず私は、自分のはうが正しいことを確信してゐた。何故なら、現に今夜の若い時間に、彼の妻のいが栗頭の波斯猫がわざわざ私に指さしてこの男が良人であると證言したではないか。

ヴイクトル・アリ氏の大笑ひが一同の注意を要求した。

『解つてる、わかつてる！』彼は眼と眼の中間で兩手を泳がせてゐた。それは明らかに可笑しさのあまり駈け出してこやうとする涙を睫毛の境ひで追ひ返すための努力を示してゐた。ばらばらの言葉でアリ氏は唱へ出したのである。

『――あの人はハンブルグの荷上人夫ではないのです――あの人は毎朝熱湯の風呂へ這入つて自分の身體と一しよに茹で上つた玉子をお湯のなかで食べるのです――それから、あの人のそばへ寄るとリンボルグ、ぢやなかつた、ラックフオルト乾酪のにほひがする、と言ひましたね。それから、それから――あの人の足の小指は赤い蘇國毛絲の靴下のなかで下へ曲がつてゐる――からでしたね？』

『それは何ういふお話しでせう？』

フランシス・スワン夫人がずぼんのポケットへ手を入れて訊いた。

7

ちようどそこへ、髮油を手の序でに顏へも塗つたやうな、頰の光つた樂長が近づいて來て何かお好みの曲はございませんでせうかと質問したので、私が一同を代表して「ハリファアックスへ行くやうに」と勸告した。すると突然私の鼻さきに菫の花が咲いた。それは安價香水のにほひと田園の露を散らして私の洋襟を濡らした。曲馬團の少女のやうなモナコの風土服を着た花賣女がわざと不調な英語でその一束をすゝめてゐた。これは私にすこし考へるところがあつて買ふことにした。私は女の殘して行つた菫の花を嗅いでみた。それにはアルコウルの疑ひがあつた。そして不自然にまで水をかぶつて重かつた。私はモンマルトルのLA・FANTASIOを思ひ出した。そこでは賣つた花束を、醉つた所有者が席を離れて踊つてるあひだに、その女賣娘が廻つて來てひつそり持つて行つてしまふのである。そしてそれに水をかけ、香水をふつてまた賣りに來るのだ。かうして同じ花が一晩に何べんとなく新裝して賣りに出される。そして人は自分の買つた花束を朝までに何度買はされるか知れないのだ。

これではないかと私は思つた。で、私は花賣女に怪まれないやうに卓子の上で菫の束を操つてゐることにした。が、それでも不安だつたので、私は妻の口紅棒（リップ・スティック）を借りて花を結んである紫のりぼんの端へX（クロス）をつけた。そしてやうやう安心することが出來た。

みんながヴィクトル・アリ氏の口を見詰めてゐた。そこからは露西亞煙草のけむりと一しよに言葉がぞろぞろ這ひ出してゐた。それらが空中でいろいろに繋がつてかういふ一つのモンテカアロ風景を作り出してゐた。しかしこれは私があんまりロンシャン競馬場の泥みたいな土耳古珈琲にコニャックを入れ過ぎたので、その御褒美に、キャフェ・ドュ・パリの空氣が私にだけ見せて呉れた蜃氣樓だつたかも知れないのである。

私は菫を逃がさないやうに注意した。そしてアリ氏の物語に追ひついた。

――それはまだあのルイといふ貨幣――廿五法――が佛蘭西にあつた頃ですから大戰前のことでした。

いつの間にかシリア生れのひとりの若い男が、暇な時のキャジノの役員たちのあひだの話題に上つてゐました。その男は旅行上履のやうな皮膚に端麗な眼鼻をもつた美青年でした。彼が評判になつたのはそのためではありません。毎晩決まつたルゥ

レット台のきまつた椅子に座り込んで、最少額の十法ばかり賭けつゞけてゐたからでした。いや、きまつてゐたのはそればかりではありません。彼の賭ける數も一つに限られてゐました。それは二十三でした。なぜ彼が23を選んでそんなに固執したかといふと、彼にとつてその理由は到つて簡單です。當時かれは二十三才だつたからです。一體博奕場へ出入りするものゝあひだには、數に關する妙な恐迫觀念のやうなものがあつて、銘々がめいめいの「數」を大事に持つて守つてゐます。それは或る人にとつては生れた日と同じであつたり、または名前の綴りの字數であつたり、その由つて來たるところは千差萬別ですが、みなその數字を限りなく神聖なものとして、それに絶對の信用をつないでゐることは同じです。で、「23」もさういふわけで、いつも二十三へばかり賭けてゐたのでした。かうしてキャジノの内部で「23」が彼の代名詞にまで有名化した時です。

その晩かれは例によつて「自分のルウレット台」で十法の最小限度を二十三に張り拔いてゐましたが、ふと氣がつくと、何かしら異狀に冷い固いものが彼の太腿を横から押してゐるのを感じたのです。何だらう——「23」は下を覗きました。御存じの通りルウレット台の下には何の仕掛けもありません。が、彼はそこに無意識らしく迫つてゐる隣の女の足を發見したのです。

その女といふのは高級賣春婦以外の何者にも踏めない、三十あまりの、それでも見たところはたしかにパリジャンヌのやうでした。彼女は鋼鐵色の薄い夜會服を着て、廻轉盤と「白い丸藥」との機會的な接吻に眼を据えてゐるだけで、たとひもう一度あの大戰がぶり返して來ても、自分だけはこのまゝにしておいて貰ひたいといつた樣子でした。ですから、もちろん無意識でせうが、女の脚は夢中のあまり椅子から乘り出して、「23」の大腿部にしつかり觸れてゐたのです。こゝで若いシリア人は、盤面の二十三に對する愛着以上の興味を感じなければならなかつた筈です。何故？地下鐵（メトロ）の雜沓で女の腕が押して來る。押された男は、それが地下鐵會社が乘客へのお禮に出してゐる景品であるかのやうに、特權としてその接觸を享樂するのがつねではないですか。近代都市の交通機關内では、朝夕どれだけ多量にこの擬似性欲が消費されることでせう。時としてはそれは情事でさへあると私は思ひます。しかし、言ふまでもなくそのためには、押して來る女の脚が飽くまでも忍びやかに、そしてふつくらと兩方の着物をとほして暖い體温が通ひ、血のときめきが感じられる——といつたやうな條件が必要でせう。だから

この「乗物のなかの相手」には處女よりも人妻のはうが面白いと今アレキサンドリアへ書記生になつて行つてゐる悪友が言つたことがあります。とにかく、これほど議論の多い都會的「交渉」をその未知の女と持つことになつたのですから、「２３」は先方から向いて來たその幸運に感謝すべきだつたかも知れません。かれは挨拶のために自分の膝でそつと隣りの女を小突いてみました。そして驚くべき發見に出會つたのです。

はじめに彼の注意を惹いた冷い固いものは、他ならぬその女の脚でした。じつに彼女の脚は鐵板のやうに冷徹でした。岩石のやうに堅固でした。そしてコンクリイトのやうに小さくさらさらに固形化してゐる表面が「２３」にも明かに感じられたといふから、彼の興味は一時にほかの方角をとりました。岩のやうな脚をしてゐる女！　好奇心が「２３」を打つたのです。彼はシリア人らしい物靜かさでその女のスタデイを開始しました。

ゲイムが進むにつれて女の脚はますます壓迫して來ます。彼は脚でそれに答へながら、それとなく横へハンケチを落して拾ひ上げる拍子に手で觸つてみました。たしかに鐵です。石です。コンクリイトです。彼はだんだん大膽になつて腿で押し返したり、手で撫でゝみたりしましたが、女は氣がつくふうもありません。しかし、これは無理もありません。女にしてみれば、まるで部屋の外壁へ微風が當つてゐるやうにしか感じなかつたことでせうから。

長い話を短かくするために——それから二三日經つた夜更けでした。「２３」は其の晩の二十三に見限りをつけてキヤジノを出やうとしてゐました。あれから「岩のやうな脚をもつた女」が一度も姿を現はさなかつたので、彼はそれを内心不滿に感じてゐたところでした。キヤジノの正面の階段を下りると、芝生と椰子と月夜の公園（ジャルダン）が一面にゆるい登りになつてゐます。そのオテル・ドユ・パリへ近いはうの角に人影が固つてゐました。何か罵るやうな聲も聞こえます。「２３」はそばへ駈け寄つて人混みのうしろから首を伸ばしました。

あの女でした。地上に倒れてゐるのです。蒼い顔に齒を食ひしばつて、半分閉ぢた眼に月が光つてゐました。そして、もつと異常なことには、彼女の片手が同伴者である中老の英吉利紳士の燕尾服の裾をしつかりと押へてゐることでした。

紳士は女の手を振り離さうとして威厳のうちに蹌いてゐました。見物人は夫婦喧嘩を見るやうな眼で立つてゐました。そこを分けて「２３」が前へ出ました。

「何うしたのです？」

するど紳士は、待つてゐたやうに何かわけのわからないことを怒鳴りながら、いきなり力まかせに女の手を振り解いて横町の闇黒へ逃げ込んでしまひました。が、走り出す前に彼は「23」のポケットへ何か嵩ばつたものを押込んでいつたのです。女はたゞ卒倒してゐただけでしたから、「23」がその鐵板のやうな脚を抱いて自分の部屋へ擔ぎ込むと、まもなく意識を恢復しました。そして同時に、救助者の若いシリア人に戀を感じたといひます。いや、すくなくともさう彼女は宣言したのでした。

女はコカイン中毒者でした。謎の脚は長年そこへ注射針を刺して來たためにそんなにも皮膚が固化した現象でした。よりいけないことは、彼女はこの博奕場の幽靈の一つで、あの低音のルウレットの唸りを聞くことなしには生きてゆけない組なのです。彼女にとつてゲイムに勝つことはコカインを買ふための必要事だつたのです。が、それが何うにもならない時は、賣春の目的でキヤジノで客をさがしました。その夜もさうでした。しかし、思ひどほりに紳士をつかまへることの出來た彼女は、喜びで氣がゆるんだせいか、それともコカイン注射の有効期間が切れて彼女の有機が一時的に分散したのか、彼女はホテルへ行く途中であゝして意識を失つて倒れたのです。が、彼女の職業本能が、紳士を捉へてゐる手だけは離させませんでした。掛り合ひになつて名の出ることを恐れた紳士は、「23」の出現を何よりの好機會に、地上の彼女を「23」に押しつけて、雲がくれをしたわけでした。同伴の動機があまり紳士的でないので、或ひは彼は「23」を探偵とでも思つたのかも知れません。これで氣がついて「23」がポケットからさつき紳士の押し込んで行つたものを出して見ると、それは書物のやうなルイの紙幣束でした。

この時からです。ふたりが新らしい共同の商賣をはじめたのは。

つまりこの偶然事から思ひついたのですが、彼らは何らの資本なしにこのモンテ・カアロで「白い丸薬」と「緑色の羅紗」とを相手に一生遊び暮すだけの財政を二人のあひだで保てることに氣がつきました。それはその晩の過程(プロセス)を忠實に反覆するだけの勞力でいゝのです。女が賣春を裝つてキヤジノから男を街へ出す。そして町角で氣絶を眞似る。そこへ「23」が現はれる。オテル・ドユ・パリあたりの客は自分の名前に對してだけは恐しく潔癖ですから、例外なしにみんな「23」を警官と間違へて金を押しつけて逃げるのです。それはまるで萬人が萬人約束したやうな行動だらうです。

ふたりはエルミタアジュの三十六に同棲してゐて、今でもときどきこの手を用ひてゐます。公然の秘密のやうなものですが、個人の生計に關與するほどモナコの警察は暇ではないと言ひます。これで彼女は要求するだけのコカインを樂み、「23」はまた毎晩の「二十三」の軍資にこと缺かないわけでせう。

忘れました！　それ以來、女は「七夫人」として知られてゐるのです。なんでも其の最初の晩が七日だつたさうで、彼女は若い燕の「23」に勸つて7にばかり賭けることにしたのです。が、どうせゲエムは二の次ぎで腕を攫んで倒れるための男を物色しに一月に二三度キヤジノに出現するだけのことですが――。

コロン製鋲會社の社長・亞米利加の妻楊子・ハンブルグの荷揚人夫・朝の入浴と玉子・下へ曲つてゐる足の小指――これは誰でも未知の人に話しかけるときの彼女の有名な文句です。

「7夫人と23氏」は私の知る限りモンテ・カアロの最善の產物ですよ。今度キヤジノで敎へて上げますから見て御覽なさい。「23」はちよいと故ルデイといつた感じの、中婆さんにはちようどいゝ玩具です。もつともシリア人だから小鳥のやうな圓い眼に落ちつきがありませんがね――。』

氣がつくと私の手は空(から)だつた。菫はやつぱり栞のりぼんにX(クロス)をつけたまゝ逃げたのだ。

澤田正二郎（評傳）

中村吉藏

自分の手近に居るのに慣れて了ふと、大した存在とも思はなかつたものが急に遠ざかつて行くのを見ると、滿天に光の尾を引いて飛ぶ一大彗星のやうな不思議な發光體に化し去つたのに、今更眼くるめく感じがする。澤田正二郎の死が自分に今、さうした衝撃を與へてゐる。生前、もつと勞はつてもやりたかつた、もつと褒め上げて自重させてもやりたかつた、もつと惡口を吐いて胸の底と底とでぶツつかつても見たかつた、イヤ、それよりも眞ツ先に、彼の大きな仕事に對して心からもつと感謝してやるべきだつた、――こんな愚痴めいた感じが、後から後から泉のやうに湧き上つて來て仕方がない。大正二年以來、十余年間、互に手を握つて、或はたとへ手を分つても足の向を一つにして、新劇運動の爲めに共に闘つて來たわが無二の戰友、澤田正二郎は已に他界の人となつた。彼の死後彼が獨自の發光體であつた事がハツキリ目に附いて來るにつけ、取殘された者の心は愈々暗くなる。

昨年の十二月二十八日、故小山内薫の葬儀が築地小劇場で擧行されて、弔ひの花環が舞台にうづ高く、觀客席の兩翼まで溢れた中に、我國新劇運動の先驅者の死が悲痛に、莊嚴に弔はれた。式場に列した自分は、ベンチを隔てゝ澤田と顏を見合せたが、互に目禮を交はしただけで、口も利かなかつたので、歸り道に、帝劇の樂屋へ足を向けて彼の部屋へ立寄つた。あまりにあつけなかつた小山内の死が話題になると、お白粉をぬりかけて半裸體でゐた彼は、深いため息と一しよに「何んだか自分が死んだやうなひどい衝撃を受けました。自分の屍體を見るやうな氣がするから小山内さんの家へはワザと弔問にも行かないで、自宅で小い蠟燭をつけて長い間默禱をつゞけました。苦ん

でもつまらないから、いつそ道樂でも始めてやらうかと思ひます」と日頃の氣力充滿した彼にも似合はない、ニヒリスチックな事を口にした。

「道樂はいけないよ」と自分は笑ひながら受答へて「君のやうなはち切れさうな肉體の持主には、腦溢血なんか警戒する必要がありさうだ、血壓は計つて見たかね」と聞くと、「イヤ血壓なんか計るのは恐ろしい氣がするからやりません、いづれ近い中に洋行でもして來やうと思ひます」といふので、それには贊成して、後で舞台の「キリスト」を見て歸つた、親しく語り合つたのはこれが最後で、それから數十日の後に、彼が中耳炎を病んで、それが素で不意の死を遂げやうとは、夢にも思ひがけない出來事であつた、「何んだか自動車にでも轢かれて死んだ人のやうな氣がする」自分はさう云つた方が、あきらめが附くやうに思ふのであるが、あの當夜の彼の言葉、樣子を一々思ひ返して見ると、あの時已に死の豫感があつたやうな氣もする、今になつては、さう云ひ切つても善い。

小山内薫が仆れたのを、自分が斃れたやうに、感じたと云つた澤田正二郎の意識の中には、たとへ態度の相異こそあれ共に新劇運動の第一線に立つて戰つてゐる築地小劇場の一代表者としての小山内薫と、新國劇の統率者としての彼自身との對照關係の潜在が暗示されてゐる、この暗示は正しい、確には明治末期から大正初期へかけて我劇壇につむじ風の如く捲き起つた新劇運動に、二つの尖角があつた、その一つは小山内、左團次の自由劇場の出現であり、他の一つは坪内博士の文藝協會の創立である、前者は主としてインテリゲンチヤを觀客對象として、西洋近代劇の飜譯上演に主力をそゝぎ、高踏的な純藝術劇若しくは文學劇の新分野を目ざして進まうとする企てゞあつた。この運動は劇界に新らしい一波紋を描いて、さまざまな形で擴がつて行つたが、今日その決算表を檢めると、關係者であつた左團次が在來の歌舞伎劇の固定した界線に多少の歪曲を與へた事と、別に築地小劇場一派が成立して、そこに正系的な立場を作りつゝある事である。然るに後者は、在來の歌舞伎劇が、徳川封建期の治下に發生し、成長し、完成して已に爛熟期を經過した舊き國民劇たるに對抗して、明治期、乃至大正期の立憲治下の社會生活、民衆精神を反映し、廣い意味で時代思潮の動きにつながり、新らしい趣味、嗜好に適合した新國民劇を築き上げやうとする大がかりな、全く劃時代的な企圖であつて、その達成の爲めには、我が國土的な、乃至、國民的な創作劇が要求されると同時に、何等の傳統もなく、門閥もない、づぶの素人から技倆ある俳優を作り出さなければならない一大困難な事業が作

うてゐる、このヘラキュレス的努力の試錬の前には、文藝協會が先づ躓いて了つた。次いで抱月、須磨子の藝術座は、汗まみれ、泥まみれになつて暫らく持堪え、やつと本仕事に取りかゝる足場だけ掛け了つた時に、不幸な運命の電撃を受けて、中途で仆れて了つた。この文藝協會――藝術座の企圖と努力の傳統を承けついで、勇ましい、年若いヘラキュレスとして起上つたのが、澤田正二郎であつたと、今、自分はしみ〴〵思ひ當つてゐる。時代の大衆の中に底深く根を下ろさうが爲めに、汗まみれ泥まみれになつて、基礎工事に取りかゝつた者は、高見の見物に慣れてゐるインテリゲンチヤから常に嘲けられ、罵られる、文藝協會の場合がさうであつた、藝術座の場合もさうである、更に澤田の場合が殊更さうである。それ丈澤田は最も强かつた、最も徹底的に、深く〳〵大地の底にまで掘り下げて行つて、ゆるがない基礎工事を立派にやり遂げた、その代り、高見の見物のインテリゲンチヤが嘲り、罵る聲は藝術座や、文藝協會のそれに幾十倍する喧噪を極めた。彼は決して快くは思はなかつたらうが、平氣な顏をして、俠客劇の次に劍劇を發明し、大衆の大渦卷を身邊に牽引すると見究めるや、次第に藝術的な劇へと半歩、一歩、を進めて來て、「新國劇」の存在を漸く世間から認めさせ、やがては一方の手に大衆を、他方の手には、曾て彼を嘲り、罵つたインテリゲンチヤをも默々の中に摑んで了つて、舊國民劇たる歌舞伎劇の一敵國が、今こゝに儼然として存在する事を何人にも首肯させずには置かなかつた。

勿論、新國劇の大成は、猶、その前途に期待せなければならなかつたが、先人が躓いたり、仆れたりした地點を遙かに突破して來て、この空前の難事業をこれまで遣り遂げたその精力、その叡智、その熱情その忍苦、その力量、彼は我が劇界の若きヘラキュレスだつたと云ひたい氣がする。彼が人としてこの事業のために放射し盡したこれ等の精神力は又直に俳優として舞台の上に放射し盡したものであつて、彼に於ては人と俳優と事業と舞台との間に何の間隙がない。たとへ未完成のまゝで仆れた事が最大の遺憾であるとはいへ、彼が我が國新劇運動のより多難なる一尖角をこゝまで延長して來たその功績は、他の一尖角の、指導者であつた小山内薫に優るとも、劣るものではない、イヤ、指導者は、必ずしも代りが得られないではないが、指導者と實行家とを一身に兼ねた彼には容易に代る者がないのは事實である。それ丈彼が啻に新劇運動史上のみならず、我が國の演劇史上に殘した足跡は偉大である。彼は如何にしてこのコースを取つて來たか？

彼の自叙傳たる「苦鬪の跡」を一々引抄する繁は避けたい

が、その中から特に注目すべき事實は學びたい——彼は近江の琵琶湖畔、大津の地で明治二十五年に生れてゐる。父は土州、山の内藩の豪士で、前任地長州から轉任して來た收稅長であり、母は東京生れの人である。「お前は支那服を着て三井寺の石段の下に捨てられてゐた支那人の兒だよ」と云つて、祖母や、母からいつもからかはれてゐたといふから或は低能兒か、不良兒視されたものらしい。これが彼の心に深く喰入つて或る反抗の根を植えつけ「よし、俺は支那人だぞ」と自ら叫びつゞけたといふから、一生を通じて、何人をも、何物をも一應は彈き返さずには我慢出來なかつた彼の負けじ魂、反抗精神は早くその素質の中に根太く芽ぐんでゐたのであらう。これあるが爲めに、彼はあらゆる事業の中最も困難な事業である劇界の遮斷線に一路を貫通する偉功を立て得たが、又これあるが爲めに彼は三十九度以上の體熱を侵して强いて舞臺に立ち、可惜夭折の悲運に見舞はれたのである。

彼は三歳の時、父を失ひ、母に連れられて東京へ歸つて來た。六歳の春、下谷小學校に入學させられたが、學校の成績も惡く、七歳になるまで門齒が生えないで、大きな口からダラダラ涎れを垂らしてゐたので、本願寺前の袋物屋の看板に事よせて「門跡前のガマロ」の綽名を呼ばれてゐた。この侮辱が一層深く、彼の心をひねくらせ、つむじを曲げさせて行く許りとなつた。唯この學業成績の不良兒に、一つの特技があつた。それは繪を描く事の巧みさであつた。文部省主催の全國小學兒童の繪畫習字展覽會に、彼は氣輕く一本の柳の木を描いて出品した。それが時の皇后陛下——昭憲皇太后陛下の御目にとまり、宮内省へ獻上を仰せ附けられた事が校長の口から傳へられた。澤田の紋所の「柳蛙」の由來、因緣がこゝにある。

彼に發奮、勉學の一動機は與へられたが、開成中學の入學試驗は漸く末尾で通過した。二年生の時、軍人志願で、陸軍中央幼年學校の入學試驗に臨んだが、比較的强度の近視眼であつた彼は、體格試驗で一も二もなく刎ねられて了ひ、軍人志願への途は堅く鎖されて了つた。

友人の死が彼に體格を練る事の示唆を與へて、野球、テニス、擊劍に熱中させ、更に柔道に身を打込ませた。彼の演技が一部からスポーツと評される程精力的で潑剌たる生氣を發散したのはこゝにその下地の素養がある。柔道着に竹刀を持つて月下に立つた殺伐な姿は、後年三條橋下に、血刀を提げて立つ「月形半平太」の原型である事を彼自身が云つてゐる。

一高入學試驗に失敗して後の彼は、一年前から馴染となつた開盛座の客席に入りびたつたり、脚本を書いて伊井蓉峰を訪ひ、

次に小山内薫の鬪を乞ふたりした。十七歳の時自由劇場の「ボルクマン」を觀てから、「芝居國の世界」が忽然彼の眼前に隱顯し始めた、俳優生活に向つて希望の第一歩が動きかけて來た。

かくて彼は早稻田の文科に入つた。文科の春季大會の餘興として、坪内博士の「桐一葉孤城落月」の上演が企てられ、「一葉の前と、石川伊豆の「二役がはり」が彼の初舞台となつた。次いで彼は文藝協會の門をくゞつて研究所の生徒となつた。こゝで松井須磨子や、彼の後年の盟友倉橋仙太郎などと顏を合せる機會が來た。

明治四十四年、文藝協會公演として、帝劇で「ヴェニスの商人」が上場された時、彼は故土肥春曙のポーシャ姫の背後に槍を持つて突つ立つ無言役の雜卒であつた。彼は、この槍先で東儀鐵笛のシャイロックの尻を突刺したら、この芝居の結果は何うなるか？など、彼らしい反抗精神を内に燃やし立てながら、神妙に突立つてゐた。

その「ヴェニスの商人」と同時に帝劇で上演された「人形の家」が、文藝協會の研究所で稽古を積まれつゝあつた時、自分は島村抱月の囑を受けて、演出の監督に通ひつゞけてゐたが、生徒の中に交つてゐた筈の澤田の顏はまだ見知らなかつた。すると大正二年、文藝協會が分裂しかけた時、第二期生の倉橋仙太郎一派が、自分の飜譯したイプセンの「ブランド」を旗上興行に使用したい、ついては舞台監督をも願ひたいと申込んで來た、その時、自分は試みに一座の俳優の中に、有望なものがあるかと聞いたら「澤田といふのが居ります、新派臭いと批評すの者もありますがなか〳〵有望です」と云つた。その時、澤田の名は初めて自分の耳に鑄り附けられた。

この劇團の旗擧げの準備がまだ進まぬ中に、抱月須磨子の藝術座の創立となつて、自分も舞台監督の任に當る事となり、二期生もこれに合流した。同年十月、有樂座での旗上興行に、マーテルリンクの「モンナ・ヴンナ」を上演し、須磨子のヴンナの相手役として、澤田のプリンチワルレが、彼の聲音の美と底力と、ロマンチツクな氣分の飛影を見せた。第二囘に、帝劇の「サロメ」で澤田の豫言者ヨカナアンは象牙の如く冷たく美しい肉體と音樂的なリズミカルな聲調とで觀客を魅了す」も　があつた。自分は俳優としての彼の前途に望をかけて來た。

次いで「復活」が藝術座の興行方針を所謂大衆向に一轉せしめた際、須磨子と、澤田始め男優一派との感情の反撥が極度まで行きついて、遂に脱退が決行された、澤田一派の脱退宣言は、藝術座が藝術的に墮落したのを憤慨する主旨に強調されてゐた。當時は彼の頭の何の隅にも後年の俠客劇や、劍劇の幻の

片影だもさゝなかつたに定まつてゐる。

脱退組の澤田一派は有樂座で旗上興行をしたが、失敗に了つて、それから桝本清、秋田雨雀君等に率ゐられ、新時代劇協會の名で北海道に渡つたり、東北巡業をして歩いたり、その間、旅先の困苦を嘗めつくし、なけなしの衣類を脱いで入質してやつと幕をあけ、トヤについて幾日も身動きが出來ず、窮乏のドン底に落ちてゐるといふみじめな噂が風の如く東京の仲間へ傳はつて來た事もある。又その後、上山草人一派の近代劇協會に加はつて、澤田が「金色夜叉」などをやつてゐると聞いて、自分は赤坂の演伎座へ出かけて、鐵の檻の間からそつと舞台をのぞいた事もある。又帝劇で、同じ協會がチエホフの「櫻の園」を上演した時、澤田がガーエフの役をやつてゐるのも自分は見た。その技倆には確かに鮨が附いて來てゐたが、彼の長い受難時代が、何んとなく彼を荒ませてゐるやうなくらい氣持を起させた。

大正四年に、澤田は藝術座へ復歸したので自分との接觸は親しくされた。當時、インテリゲンチヤ仲間の問題となつた淺草公園への進出興行にも、彼は勿論參加してゐる。後年、公園劇場が彼の根城となつた因縁も早く玆に結ばれてゐる。夏季の研究劇「闇の力」の成功は、日本に於ける純藝術的の劇の最高記錄の一として當時一大センセーションを惹起したが、須磨子のアニツシアと澤田のニキタとは今も猶、自分の網膜の底に映像が浮んで來る程の傑れた演技であつた。この以前、小笠原伯邸内の庭園で公演されたギリシヤ悲劇「エヂプス王」に扮した彼の悲劇的表現も鮮やかな光を放射した。しかし須磨子の剛情我慢と、澤田の溢れ漲る反抗精神とが打ち合ひせり合ふて、やゝもすれば危險なスパークスを散亂させる日々の芝居の稽古は、稽古以上にしんけんな勢の爭鬪でもあり、心と心との取つ組み合ひでもあつた。演出監督は實に氣骨が折れた。抱月は手をあぐねて屢々、自分に代つてくれといふ。自分は命令的でなく、暗示的に双方を調和させやうとして、仲裁役のやうに苦んだが、十分間の稽古が、二時間も三時間も働きつゞけた程の疲勞を感じさせた。今から振り返つて考へれば、新劇界の獸王と獸王との生命がけの嚙み合ひを見たとも云はふか、或は龍、虎相嚙いて、凄まじい嵐を捲き起す壯觀を眼にしたのは自分の生涯の光榮あるモーメントだつたとも云へさうである。しかしあの當時は手に汗を握りつめた。生命が縮まつた。

六年の春、自分が重い肺炎に罹つて、病床で呻吟してゐる頃、澤田は再び藝術座を脱退し、六月、新富座で「新國劇」第一回の旗上興行の蓋をあけた。岡本綺堂の「新朝顏日記」松居

松翁の喜劇「寝台列車」その他を上演したが經濟的の大失敗に了り、最後の一日の興行税が支拂出來ないのを、彼の一親友が書籍や衣類を賣拂つて調へてくれたといふ慘ましい逸話を殘してゐる。彼は一座をまとめて都落ちをし、京坂へ向つて旅立つた。これが後年、彼が大成功の鍵をさぐり當てる首途であつたが、その長いコースに於て、彼は所謂邪劇の鍵を拾ひ上げたり、劍劇の鍵を見附けたり、最後に、藝術的なものをさぐり當てやうとするあらゆる努力をし盡したのは、素より彼の識見の底光りにもよるが、一面文藝協會時代——藝術座時代に培はれた彼の修養、見聞の心の肥料が、その後日の開花、結實に寄與する力の資源となつた事はいろんな意味で推想出來る。

同志と都落ちをした彼は、京都の南座で「朝顔日記」などの外に、座附作者としての仲木貞一の新作「飛行曲」を以て開演したが、此時、近代劇協會の元の女優であつた衣川孔雀の入座一件から孔雀の舊情人上山草人を怒らせて、草人夫妻は京都へ乘込み、手詰の談判を持かけた。「芝居を打こわしに來たのか？」澤田はさう云つて、短刀を懐にし、上山と膝を突合せた。相手を刺し殺す覺悟であつたらしい。しかし血の迸る前に、笑ひ合つて事無く解決されたが、南座の興行は、新富座の不入以上の、慘憺たる破局に終つた。十一名の俳優の中、後に踏留つたのは僅かに八名であつた。

彼は殘黨と、驅り集めた一座を作つて、大坂道頓堀の角座に立て籠つた。本物の太刀で火花を散らし合ひ、或は素肌に本水を浴びて見せ、肉體を以て觀客の腦に打つかつて行く奔闘劇——所謂邪劇をつゞけてゐる中に、松竹合名社の白井社長と握手する機會が來た。その時、白井社長は、誰か賓物にする女優を入れたらと云ふと、澤田は即座に「私を賓物にしたらいゝでせう、私を鴈次郎にしたら何うです」と云つてのけたといふ。こゝにも彼の面目が躍如としてゐる、彼は壯齡二十六歲であつた。

かくて同じ道頓堀の辨天座を根城として一日二回興行が始まつたが、仲木貞一の「深川音頭」や「花笠獅子」などの俠客劇が關西の水に合つた。財界は世界戰爭の餘波を受けた成金時代で、觀衆は夜あけ前から辨天座の切符賣場に殺到した。歌舞伎劇でもない、新派劇でもない、所謂一種の邪劇ではあつたが、肉體を打つけ合ひ、火花を散らし合ふ、活氣と殺氣との迸る奔闘劇が、生氣の抜け切つた劇に飽いた觀客大衆を、夢中に興奮させて了つたのであらう。

その頃、自分は關西へ旅行して、一夜、京都京極の夷谷座にかゝつてる新國劇を、そつとのぞいて見た。澤田が印袢天を着て、俠客肌の親分に扮してゐるのが、錯覺的な映象のやうに舞

台の上を動いてゐた。これがあのヨカナーンの澤田の成れの果てなのか、これがあのエヂプス王の澤田の成れの果てなのか、さう思うと、情なくなつて胸が痛かつた。自分もやはりインテリゲンチヤの地金が出たのだ、匆々、宿へ引上げて、手紙を書いて持たせてやつた。自分があれ程、望みをかけた君が生活のためとはいへ、あんなまねをやつてゐるを見ると世界が暗くなつたやうな氣がする――そんな文句から始まつて、大分手きびしい事を書きつらねたものであつたと記憶する。その返事は「…まア長い目で見てゐてくれ――」と云つたやうな例の負けじ魂をぶッ附けた文言であつた、「長い目で見てゐてくれ」これはこの前にも、この後にも、自分は彼から聞かされた反撥的の定まり文句であつた。

當時、大阪で空前の大人氣を博してゐた連鎖劇の山崎長三郎即「山長」に對して「澤正」の人氣は相競爭する形で、輒り合つてゐたがやがて次第に「山長」は蹴落されて行つて、「澤正」の人氣は日に日に高まつて行く一方であつた。仲木貞一の代りに入つた座附作者としての行友李風が大衆の興味のコツを摑んだ新作を續出したのも、この競爭の決勝に大きな力を與へたのは事實である。まげ物の「月形半平太」などに、劍劇の或る典型的なるものを完成したのも此の時であらう。成金時代の爛れ切つた人心にピッタリと眞劍をつき附けて、血の凍る寒さと、肉の疼く痛快味を感電させ、迸る火花の中に或る解脱を投げつけやうとする意圖の一面によく大衆の感覺を緊張させる芝居的な興味の中心を摑んだ聰明な直觀が閃めいてゐる。これが圖に當つて澤正の芝居は、蓋があく毎に道頓堀を揺り動かす全盛を見せた。映畫に、劍劇の嵐が捲き起り、幕末ものの大衆文學が、今日、一大流行期を劃する勢を見せて來たのもその源流は澤正の劍先から光り出したものに外ならない。この一點から見ても、彼はたしかに非凡である。

「長い目で見てゐてくれ」さうくり返してゐた澤田は、この全盛の夢にひたり切つてはゐなかつた。二回興行を一回興行にするかねての願望と、飽くまで低廉な觀劇料で何處までも、大衆と接觸しつゞけやうとする彼の提議が松竹に納れられた時、彼は「新らしい日光の輝く日が眼に見えて來た」と心を躍らせて云つてゐる。永い間インテリゲンチヤから罵倒され、嘲笑されながら踏み堪えて來た甲斐があつて、藝術的なものをも上演する機會がここに開かれて來たからである。その第一回興行に自分の當時の創作史劇「井伊大老の死」を上演したい希望が申込まれた。恰も左團次一派が歌舞伎座で上演中、澤田は東上

て、歌舞伎座の舞台を見た。「自分が演れば別に工夫がある」と彼らしい事を云つてゐたが、自分と一しよに左團次を樂屋に訪れた。それから彼は直に大阪に引返して、浪花座で初日を出した。自分も引張つて行かれて、講演會など開いて氣勢を附けた。記錄的の大成功をかち得て、大入を標示した赤旗、黄旗、白旗が順々に悉く掲げられたといふ善い幸先であつた。山長劇と成美團とが合同して、關西新派劇となり、一回興行を始めて對抗したが見事に打負かされた形になつた。

この後、澤田は、新國劇の將來の運命を占ふべく、大雨を突き、暴風を犯して、富士登山を決行したといふ。それには決死的の勇氣を要した。彼は登山者の仲間が切に諫止するのを耳にもかけず、生命がけで大風雨の中を頂上まで突破して行つた。彼が底知れぬ剛情さの試煉でもあつたが、彼が一面に性來のロンマンチストである事が見られる。今回の死も、彼がロマンチツクな一つの信念の爲めに、一層强情を突ッ張らせて、この運命にまで驅り立てられたものと思ふ「私はこんな事ぐらゐで休んでは、もうたゞの一人前の人間になつて了ふ」と彼は云つたが、彼は凡人以上といふ信念で、あの重病を押し、舞台に立ちつゞけたのである。

新國劇は岡本、菊池、久米諸作家の作品を次第に上演目錄に加へて來た。彼は一般大衆のファン以外に、一般智識階級にまで働きかける企圖の實行に取りかゝつた。かくて六年前、都落ちした新國劇は、再擧して東京進出を試み、獨逸表現派のカイザーの作「カレーの市民」を提げ、「父歸る」「國定忠治」を加へて明治座に開演した。しかし關西の澤正は、まだ關東人に認められなかつた。文藝協會、乃至藝術座時代の彼は、インテリゲンチャの仲間にその前途を嘱望されてゐたが、それは一般大衆とは何のかゝわりもなかつた。やつと二の替りに、山本有三の「嬰兒殺し」菊池寛の「屋上の狂人」及び大衆向の劍劇「月形半平太」を上演した。次第に客足が附いてついに大入が掲げられた。その次には十二月興行に、又も東上して中里介山の「大菩薩峠」を上演し、一大センセーションを起した。決定的に東京人をして澤正の存在を認めさせた。幕末、劍劇物の、劇界、映畫界、乃至大衆文學に於ける勢力の昂進は、澤田のこの決定的勝利に依つて加速度的になつたと云へる、

大正十一年の秋、澤田は新國劇を率ゐて大阪から東京に移り、淺草公園劇場に根城を構へた。淺草、馬込に、新國劇演劇研究所を設け、自分は所長に推されて、仲木貞一、水谷竹紫が專ら生徒の監督、敎養の任に當つたが、文藝協會、乃至藝術座の研究所の傳統が彼の心に蘇つたのであらう。しかし大震災後は

これを閉鎖するの止むなき状態に立至つた。大震災といへば、その直前、座員の奇禍に巻添えを喰つて、彼は象潟署の拘留所に、慘虐な苛責を受け、白麻の夏服に血を浴びた受難に面した。大震災は彼に釋放の機會を與へ、次いで日比谷公園新音樂堂に野外劇を公演して、罹災民慰安に奉仕した。これが當時、一般社會の目を見張らせた。

更に彼は、あらゆる俳優、劇團に卒先して、赤坂に新築された演伎座を根城とし、常に大衆と智識階級とを兩手に摑んで行つたが、十四年の春、興行中に火災が起つて演伎座は全燒の厄に罹つた。彼が根城を燒出された事は、更に一つの受難ではあるが、これが爲めに、彼は曠野に放たれて、中央の大劇場たる帝劇、新橋演舞場、乃至邦樂座の檜舞台に、自由に立ち得る機會を惠まれた。公園の澤正から、赤坂の澤正となつた彼は、ついに東京の澤正、イヤ日本新劇壇の澤田正二郎と成り了せた。

この以後の、彼の上演目錄には、エドモンド・ロスタン原作、額田六福翻案の「白野辨十郎」や、眞山青果の「桃中軒雲右衛門」「富岡先生」「坂本龍馬」や自分の「星亨」や新進としては金子洋文、永田衡吉などの作も加へられて來た。現在の劇壇の標準からいへば、新國劇はついに第一線にたつて、新らしい國民劇の確立の爲めに戰つてゐる重要な力である事を認めなければならなくなつた。一昨年の十周年記念は第一期の基礎工事は完成して、新國民劇たる新舊技術に於て、第二期の戰鬪行動に移る一轉機であつたものと見られる。彼は今、戰半ばにして忽然として仆れた。半成の大建築物は青天の霹靂と共に倒壞した。新劇壇の一大損失であり、一大打擊であるといふ以上のものでなければならない。

已に一言した如く彼が半步一步築き上げて來たものは新劇運動史上、空前の一大業績にまでつみ重ねられたと云つても、決して誇張ではないと思ふが、この事業家としての彼の精神力及び意志力が直に舞臺に移されては白熱的の情熱となり、壓倒的の力となり、觀衆をして磁石の前に凝立する感あらしめたのである。身動きもせず彼の技藝に魅入らされたのである。往々センチメンタルに流れる瞬間もないではないが、そこに彼の陰影の多様さがあり、如何なる役に扮しても、相當に成功せしめる秘訣が横はつてゐる。自分は嘗て悲劇俳優として、左團次、吉右衛門、及び澤田を擧げ、大膽な比較論として一部に目をみはらせたやうだが、今日に於て、自分はその適確なる事を證せられたやうに思うてゐる。悲劇のみたらず、喜劇にも、又悲喜劇にも、或は史劇にも現代劇にも、彼はあらゆる方面に、役を仕分けて見せた。悉く勝れてゐたとも云へないが、大破綻を生じた

ものは嘗てないと云へやう。彼は俳優であるのみならず、演出者として、又興行者として、あらゆる非凡の能力を示したのは今更驚嘆をくり返させずには置かない。劇界の若きヘラキユレス！三十八才の生命はあまりに短かかつたが、その仕事の分量は五十年或は八十年に價すると云つても善い、死なれて見て、彼は凡人でなかつたと、自分は今更痛感する。

嘗て彼が野外劇を公演して公衆慰安に奉仕した日比谷新音樂堂で、彼の告別追悼式が行はれた日、弔ひの花環の山が盛り上つた中に、數萬の大衆の群は藹然として追慕の一至情に凝結したかの如く見えた。彼は死後に光の尾を滿天に引く白晝の發光體であつた。今更に彼の偉大な存在であつた事が、日頃彼に親しかつた人々に新らたな異常の衝擊を與へた。

自分としては拾年前、素人出の名女優であつた松井須磨子を藝術座で葬つて新劇のために愛惜の情に堪へなかつたが今又須磨子より、もつと大成した、もつと前途の新しい彼を葬つて新らしい國民劇の前途を葬つた感じがする。

しかし、時代の要求が、常に人物を生むものと假定すれば、やがて澤田に代るべきものも生れて來るであろう。彼の死は新劇動運史の幾多のページを燒却した感もあるが、これが激勵の動機となつて、第二の澤田、第三の澤田イヤ、彼以上の者が、生れ出でゝ、新らしい國民劇のために、戰ひをつゞけん事を冀ふて止まない。澤田正二郎を傳へるのは、やがて新らしい國民劇の前途の展開に資せんが爲めに外ならない、彼が今日まで戰ひ取つた戰線を、更に擴充するに努める者の奮ひ起たん事は劇界の切なる一大要望である。（三、一〇）

山本宣治君の慘死

吉野作造

一

山本宣治君の兇刃に斃れたことは、知人として私の最も哀しむところである。併し玆に私が急遽筆を執つたのは、深厚なる追悼の辭を述べんが爲めではない。それは別の機會に讓ることとして、玆には同君の慘死を一つの社會的出來事と觀、公人として我々は之を如何に取扱ふべきかを考へて見ようと思ふのである。

而して私をして斯う云ふ氣分にならしめた一つの大きな原因は、嚴肅なるべき同君の死に際して各方面から起さるる餘りにも喧しき雜音が、惱ましきまでに我々の靜思を紊すのに憤慨したからであることを附言しておく。

二

まじめに山本君の兇死を見詰めて居る我々の靜寂を妨ぐる最も不愉快なる雜音の一つとして、私は先づ在野黨殊に民政黨の陣笠連中の空騷ぎを擧げねばならぬ。山本君の死をして徒爾ならしめたくない。玆處まではいゝ。而も彼等の之に緣つて獲んと欲するものは、唯これ「政府の窮追」のみではないか。即ち彼等は好機逸すべからずとして盛に政府攻擊の具に之を利用せんとする。自分から騷ぎ立てるのも變だから無產派の側で積極的行動に出て貰へまいかと云ふのも蟲のいゝ話だが、無理に之を失態の一に算へて警視總監や內務大臣の處決を促すなどは、まるで隣りの葬式に自分の店の廣告をするやうなものである。不謹愼を通り越して之はまた餘りに圖々しい話だ。

動機の純不純は別問題とするも、斯んな事で內相や總監の責任を云々するのが土臺間違つて居る。と云つて、誤解されては困る、私には毫末も一般的に望月宮田の兩君を尊敬に値する能吏だと辯護するつもりはない、又山本君の死を斯んな處まで責任を持ち上げて行く程の問題でないなどと輕く視る考も有たない。望月內相は姑く措くも、宮田總監の如きは果して新聞の謂ふ所の如くんば實に困つたものだと思つて居る。相當の方法を立てて彼に辭職を迫ると云ふのなら、私はいつでも贊成する。たゞ山本君の死の場合に方つて、單に之れ丈けの事實に對し、警視總監に責任ありとするの議論に不服なのである。糺すべき責任は何處までも糺す。併し乍ら之には自ら際限がある。適當の埒を超えて責任の範圍を無暗に擴げるのは、啻に責任糺彈の本旨に悖るのみならず、又著しく官界の風紀を傷くるの恐れなしとせぬ。責任の範圍を策略の左右する所に委するは、由來憲政運用上の一大禁物なのである。

責任の糺彈は本來その人の具體的な失態の爲に事が起り、從てその人を換ふることに依て未前に之を防ぎ得ると云ふ範圍に止まるべきものである。山本君の兇變に關し、右の意味での直接の責任者は誰か。私の考では、あゝ云ふ事情の下に於て意外の變事を見るに至つたことは元々已むを得ないのではなからうか。之に鑑みて一般的に警戒を嚴にすると云ふのなら別だ。從來通りの方針を踏襲するのであれば、假令內相總監の地位に其人を換えたからとて、必ず繰返されぬと保證の出來る事柄でない。强て推測を逞うすれば、或は當の警察署長に山本君に對する警護を特に不當に減じたと云ふやうな懈怠があつたかも知れぬ。さうだとすればそれ丈けの責任はあるが、併しそれが無かつたとしても、一體あゝした事情の下に起つた兇事を果してよく豫防し得たものかどうか。多少の過失は實は山本君自身にもあつたやうだ。兇變その事に就き餘りに警察官憲の責任を追及するのはやゝ酷に過ぐるの嫌がなからうか。況んや總監內相をや。尤も內相なり總監なり將た又署長なりが進んで自ら責め、上司に對してその進退を伺ふと云ふが如きは、官規上穩當の措置だらう。外部から懲戒的責任を問ふべき問題では斷じてない。

之に關連してモ一つ云つて置きたいことは、被害者の身分の代議士だと云ふ事は當局の法規上の責任論に何の關係もないと云ふことである。代議士が思想言論に關し憲法上特別の自由を保障されてあると云ふを此場合に援引するは、憲法論の滑稽なる穿き違ひである。代議士をして十分その職責を盡さしめる爲には、その思想言論に付て些でも外部の威迫危害を蒙むること

無からしむるやうにせねばならぬは勿論だ。從て代議士の思想言論は、政治上出來るだけ自由ならしむるを要し、彼の身邊は警察の手心の上で出來るだけ厚く之を保護するを要する。併し代議士が少くとも憲法上特別に自由を保障されて居るのは、只その院内に於ける發言に限られて居る。一たび院外に出ては、政治上又從て警察の實際取扱上多少寛大な待遇を期待し得べき外、その思想言論に就て有する自由の範圍は本來何等常人と異る所はないのである。況して代議士に加へられたる危害は常人に加へられたるそれ以上に特に官憲の責任を増大すべしと云ふが如き道理のあらう筈はない。

代議士は大事な身柄だからと云ふを理由とするなら、特に加害者の刑を重くせよと云ふ説は成り立つ。昔しの刑法には、同じく人を擲るのでも、常人を害するは輕く役人を害するは重しとせられ、同じ役人でも奏任官と勅任官とでは各々刑の輕重を異にしてゐた。之も一つの主義ではある。併し今日では、官尊民卑の陋風を排すべしとなし、身分に依つて刑を分つは畏れ多いがたゞ皇室に限ることになつた。されば今日では例へば一國の首相原敬を殺した中岡艮一でも、その殺人罪たる點に於ては市井の無頼漢と全然同一に取扱はれたではないか。加之之に依て内務大臣を更迭しろの警視總監を罷免しろと云ふが如き問題は絶對に起らなかつた。實は起らないのが當然なのである。

三

民政黨の責任糺彈論の理由なきことは上述の如し。濟々たる多士を擁し全く之に氣付かぬ筈もないから、彼等の知つて之を騷ぐは全く政略に出ずるものと觀てよからう。之を政略に利用するのは彼等の勝手だけれども、さりとは迷惑至極の話である。兎に角山本君の兇死は天下を激動せる異常の慘事である。議會の開會中代議士がその抱持する主義主張の爲に兇徒の慘殺に遇つたと云ふことは、社會的に重大な問題である。事柄の重要性から云つても、犧牲者個人の立場から云つても、之が黨略に利用されて喧々囂々の裡に弄ばれるのは、何としても忍び難い事だ。原敬の場合でもさうであつたと思ふが、今度も我々は實は黨派を超越した共同の痛恨事として朝野兩派が手をつなぎ合つて山本君の靈を慰めて欲しかつたのだ。主義を同うせぬ立場を異にしたと云ふは生前の事、所信に殉じ死んで職責をつくしたと云ふ彼の靈は今やすべての議員のひとしく皆則るべき共通の寶ではないか。死者を前にして心なき爭ひを續ける程あさましいことはない。政友會の諸君の態度が、民政黨の不當たる責任糺彈論に激せられ不本意ながら輕佻浮薄の應酬を敢てしたの

かどうかは分らぬが、民政黨の場所柄をも憚らざる妄動が、啻に故人の靈を瀆したるのみならず、又著しく我々の憤懣を唆つたことだけは疑を容れぬのである。

四

不愉快なる雜音は民政黨側からばかりではない、無産黨自身の裡からも來た。彼等の或者は之を自家の宣傳に利用せんとしたのである。宣傳もそれ自身決して惡い事ではない。と云つてどんな方法を採つてもいいと云ふわけには往くまい。山本君の場合は、澤正の葬式とは違ふ。少しは故人の意を汲んでやつてもいゝのではあるまいか。

假りに私が死んで行つた山本君の身になつて考へて見る。第一に自分は世間から壯烈な大丈夫の死などと持て囃されるのを耻ぢる。自分は別に大義の爲に已むことを得ずして敵の陣中に飛び込んだと云ふのではない、又は屢々警告を受けしにも拘らず之に臆せず職務の爲に飛び出して圖らず敵の襲撃に斃れたと云ふのでもない。現に相手方を請じて暫くでも情思を披くの餘裕があつたのだ。夫れにも拘らず其兇刃に一命を殞したのは、何と謂ても自分の不覺に違ひない。第二に自分は折角懷に飛び込んで來た獲物を見すく取逃したことを悔ゆる。相手方は成る程始めから自分を殺す意圖でやつて來たのであらう。彼れが胸中にどんな恐しい計畫を秘めようと、そは自分の關する所ではない。たゞ自分には全同胞を味方の陣營に包擁しつくすの責任がある。而してふだんは立派に之を成し遂げ得るの自信もあつたと思つてゐたのに、咄嗟の急に臨んで不覺にも之が鈍り、遂に相手の壓倒する所となつたのは返すぐも不徳の致す所、今更悔いても及ばない。自分達は本來何よりも先きにあゝ云ふ頑迷の連中にこそ自分達の腹心を披瀝すべきでなかつたか。如何に先入の偏見にかたまつてゐても、根が眞面目の質なら胸襟を開いて物の筋道のどうしても判らぬ筈はなく、不眞面目の男と看破つたら又いゝ加減に之をあしらうと云ふ方法もあつたらう。狂人でない限り命までやらなくとも濟んだ筈だと思ふのに、事玆に出でず意外の不覺を取つたのは、何としても慚愧に堪へぬ。この點に於ても自分は、自分の死の餘り英雄的に飾られるのをいさゝか迷惑に思はぬでない。

斯う云つたら世間に或は怪しからぬことを云ふと怒る人があるかも知れぬ。併し乍ら私は彼れの知音朋友の前に起つて弔辭を述べて居るのではない。彼れに代り謙遜な心持を以て彼れの死に對する當然の評價を社會に求めんとして居るのである。私は飽くまでも彼れを純情質實の紳士と見る。彼れはきツと能く

言つて與れたと私の代辯を感謝して居るに違ひないと思ふ。少くとも血に依て潔められた彼れの魂は、決して俗人と一緒になつていつまでも空威張りを喜ぶものではないと信ずる。

この心持ちを味はつて彼れの靈を慰め彼れの遺志をつぐのが、此際同志の諸君に依て爲さるべき第一の仕事ではあるまいか。

五

そこで又私は今度は假りに同志の諸君になり代つて考へて見た、今我々は當に何を爲すべきであるかと。斯くて私の第一に氣にかゝることは、山本君を犬死にさしてはならぬと云ふことである。上にも述べた樣に、正直のところ山本君の兇死はそれ自身直に重大な意義の認めらるべきものではなく、從つてあの儘で永遠の墓場に眠ることは決して彼れの本意とする所ではない筈だ。そこで跡に殘つた同志の人々としては、どうしても玆處で彼れを徒死せしめざる爲めの新なる仕事を發見し、その遂行に依て傷める彼れの靈を慰めると云ふ義務が感得せられなければならぬと思ふ。然らばその新なる仕事とは何か。

私の判斷にして謬らずんば、第一は之を好機として七生義團とやらに突撃することである。突撃と云ふ文字に拘泥して、兇器を提げ大擧して夜襲でも敢行することと思ふなどと誤解してはいけない。思想的に正々堂々の合戰を開始すべきことを謂ふのである。到底彼等と我等とは和すべからざる敵味方だと云ふ者もあらうが、初めから和すべからざるものと諦めて匙を投げるのなら、爭ひは即ち直接行動に由るの外なく、彼が匕首をひらめかして襲ひ來たからとて今更我に泣き言を云ふ義理はない。苟も暴力に訴ふべからざるを以て彼れを責むる以上、一應は懇談に依て事理を明にするの雅懷を示す必要はあらう。階級意識で尖鋭にして立場に一點の弛みを見せるなと云ふはいゝ。違つた階級の人を敵とするは、その階級に留ることを非とするのであつて、到底彼れを動かし得ずと斷辯することではない。敵は飽くまで敵として押し付けて置くと云ふのが階級鬪爭の本旨なら、これ程非社會的な方針はないとせねばならぬ。殊に世間には獨り七生義團ばかりでなく、斯種の反動團體は外にまだ澤山ある。我方を極左とし彼等自らは右翼を以て任じ、始めから喧嘩腰で對抗して來るのだから、ふだんは近寄らうたつて却々近寄るすべもないのだが、幸にして今度の事件は、我々をして比較的たやすく彼れに近づくを得しむる因緣を作つたものである。闘つて無理に相手を克服するばかりが能でもあるまい。自ら信ずるの篤き者は、寧ろ說得に依つて主義の勝利を完うせんと努

むべきであらう。山本君の靈は、恐らく同志諸君に所謂復讐を期待して居ない。私が彼れの志を嗣ぐの任に在るのなら、直々七生義剛を訪ねて赤心の觸突をはかるに躊躇せぬであらう。

私は出鱈目の空想に基いて斯んな呑氣らしいことを云つて居るのではない。山本君の同志諸君の眼には、私の如きは微温(なまぬる)ののらくら者に見えるだらう。不幸にして世間からは、永年の間、飛んでもない兇惡の非國民と見られて來たものらしく、刺客がつけ狙つてゐると警戒されたことも一再にとゞまらず、現に貴様を殺すとて兇器を突き付けられぬばかりに脅かされたことも二三度はある。書面の脅迫に對しては手の屆くだけ向ふの宿所を探して自分から單身面會を求めに往つた。向ふから面會を求められた人には、虚心坦懷赤らさまに胸襟を開いて聽きもし且つ說きもした。而して其間未だ嘗て一度も身に恐るべき危難を感じたことはない。只遺憾なことは、多くの場合、斯種の人達は他に爲めにする所を藏すと見え、概して眞實を語るを避け、私の問に對しても終に顧みて他を言ふを常とせることであつた。けれども話して見て始めて相互の誤解が釋け、遂に、轉じて親交を續けるに至つた例も一つ二つはある。だから私は、山本君の場合にしても、冷靜虚心に應對したなら、或は相手の銃鋒を挫いてあの慘虐に到らずして濟まし得たのではなかつたかとも考ふるのである。少くとも跡に殘つた同志の諸君に取ては、私の提案する所のものの如きは、決して六かしい仕事ではない。之に成功してこそ、始めて山本君の犠牲は無駄でなかつたことになるのだと私は考へる。

尤もいろ〳〵手を盡したが遂に兇妄の態度を悛めぬと云ふこともあらう。さうすれば最早外に途はない。和し難き敵味方の運命と一旦はあきらめて、積極的に彼等と相抗爭せぬまでも、少くとも味方の犠牲は山本君一人にとゞめ之れ以上に波及させぬ工夫をすることが肝要だ。國法の許す範圍に於て進んで此派の禍害を芟除すべく起つも亦妨げない。

いづれにしても直接に關係のない方面を掻き廻して徒らに世間の耳目を散らすのは愚だ。改革者の血をこの上流さしてはいけない。出來るなら之を機として頑迷者に血の洗禮を授けてその謬妄を開導してやりたいものだ。要するに開導感化か、否らずんば抑壓鬪爭か。二者のいづれを執るかは敵の出樣一つ、どの道故人の志を伸びしむることが根本の問題だ。たゞ御祭り騷ぎに日を暮して、山本君は一體何の爲に犯されたか分らぬ、と云ふ樣な事にしては相濟まぬのであらう。

以上の方策も、考へ樣に依つては、山本君の慘事をいゝ意味に利用した巧妙な宣傳と云へぬこともない。前に私は宣傳それ自身必ずしも惡くはないと云つた、が併し、之を機會として一派の人々の間に、從來の過激な主張を一層尖鋭化し、由て一面には味方の士氣を鼓舞し他面には大衆の鬪爭氣分を唆らんとするが如きあらば、恐らくそは故人の遺志を成す方途として此際にふさはしきやり方ではあるまいと思ふ。同じく一種の主義の宣傳ではある、(一)從來容易に近づき得ざりし敵陣の中へ至誠の刃を振つて斬り込むか、又は(二)之を機會に味方の油斷を戒め、敵味方のけぢめを判明にして、所謂大衆の覺醒を促すに努めるか。前者は宣傳として實質的な積極行動であるが、後者は一面大衆の獲得に依て陣形の擴張を示すが如くにして、その實近所に餘計な墻壁を作るの嫌なきを得るか。何となれば、この種の戰術の當然の結果として、必ず自家と最も親近なる境地に多くの敵を作るべきを以てである。現に一派の噪狂者流は、今次の兇變を以て反動政治の計劃的行動なりと烙印して一般既成諸政黨に呪咀の叫びを差し向け、更に之に安んぜずして、一般無產黨の沈着なる措置を階級精神に裏切るものと罵倒し、以て玆に處でも民主主義排擊の常套手段を忘れざらんとする。山本君の死は斯うした人並に取て成る程宣傳に最も好都合な題目であらう。併しお前は彼方へ往つて居た資格の無いて來る場所ではないと、甲を排し乙を斥け、低い高い山のてッぺんに山本君の亡き骸を祭り上げて一體どうする意圖なのか。生前の緣によりて肉身は暫く彼等の弄ぶに一任しておかう。死んだ後の彼れの魂は、今や彼れと共に社會改革に志ある全民衆の裡に息んで居る。貴い彼れの犧牲の意義を一部少數の噪狂漢裡に沒却して、暫時の間でも大衆の面前にその姿をかくさしむるのは惜しい。

七

山本君は生前に於て秘密結社たる日本共產黨と關係あつたかどうかは知らぬ。勞働農民黨は日本共產黨の傀儡に過ぎぬと云ふ流說の眞僞は別として、山本君が勞働農民黨の幹部であり又頗る勇敢なる鬪士であつたことは、取も直さず、彼れが少くとも共產黨員と誤解さるることを厭はなかつた證據になる。而して彼れを共產黨員と早合點したことが犯人黑田の殺害決行の主要なる原因であつたとすれば、この點に於て山本君は、勞働農民黨に屬する一人としてその黨の主張の爲に一命を捧げたものと謂ふことは出來る。

然り、その限りに於て山本君の死は勞働農民黨のみに關する問題である。所が更に密かに犯人の當初からの意圖を調査し、併

せてまた斯かる事象を産んだ一般社會的狀勢を省慮すると　之は決して勞働農黨だけの問題でないことが分る。何となれば、犯人は山本君一人のみでなく、更に機會があらば水谷君や淺原君や龜井君やをも俎上に上ぼす考であつたと云ふから。乃ち見る、犯人黑田は、共產主義者たるの故を以て山本君を憎み、又最も强く共產主義を憎むが故に第一番に山本君を血祭りにあげたけれど、元と彼れの憎むは共產主義にとゞまらず、偏狹なる國家主義侵略的なる帝國主義に反對する凡ゆる進步思想を敵とし憎むものの如くである。要するに彼れは、詮じつむれば、世間にザラにある一個の短見無識なる反動政治の盲目的讚美者に過ぎぬ。從て彼れから敵視せらるゝのは、獨り共產黨や勞働農黨ばかりではない、社會民衆黨も日本大衆黨も、事に依つたら淸瀨一郎君程度の自由主義者も、同樣であるのかも分らない。故に私は曰ふ。山本君の死は、少くともその社會的意義に於ては、共產主義に殉じたものではないと。尤も彼の屬せし勞働農黨の人達が、その舊緣に依つて之を我等一己の內事だといふのは勝手だ。が、之に依て、一般無產政黨の人達や自主主義の立場に在る人達が亦自分達の問題と云ふ見地から山本君の死を取扱ふのを、僭越だとして妨ぐることも出來まいと思ふ。

八

最後に私は、私自身も或は其一人ではないかと想はるる、反動的狂熱家連から嫉視憎惡の標的となつて居る全團體の問題として、善後策を考へて見よう。

私は今度のやうな、小にしては親族知友の胸に癒やし難き傷を與へ、大にしては無用に血を流すことに依て社會の一大損失を釀す不祥事の、再び繰返さるること無からしむる爲に、わけても、暴力の跋扈に依て社會當然の進展が一時でも滯められ又歪められることを將來に絕無ならしむる爲に、少くとも次の三點に社會全般の注意を喚起し、併せて我黨の一面の努力を集注したいと考へる。

第一、思想的鬪爭の場面を一層純正公明なものにすること。

仲間の一人が殺されたからとて鋒鋩を引つ込める必要は無論ないが、相手の暴擧に憤るの餘り、社會全體の同情を利用して彼等の思想的立場の撲滅を呼號するなどは、寧ろ愼むべきことと考へる。匕首を以て襲ひ掛つて來たのは彼等の間の一朝の過失と見て、之が措置は別にあらためて攻究するとしよう。思想上の喰ひ違ひは其外に於て、各々の立場を互に敬重すると云ふ約束の上に、何處までも正々堂々と爭ひたいのである。我々は

[illegible]ても、客觀的に二つの立場の對立するは明白なる眼前の事實だとすれば、所謂思想は思想を以て戰ふべしとするの主義以外、相手方の主張を挫く爲に此際何等特殊の便宜を利用するは卑怯であらう。動もすれば過られ易きフエヤ・プレイの精神を此場合特に鋭敏にするのでなければ、徒らに益々相手方の激情を昂進せしむるだけの結果に了らぬと限るまい。

暴力の使用が純正公明なるべき爭ひを瀆す第一の禍惡たるは云ふまでもない。而して私共は之と同時に、爭ひを純正公明ならしむる爲には、暴力の外なほ幾多の愼戒を要するものあることを知らなければならない。一時的に集つた社會の同情の之れを利用すべきに非らざるは前段にも說いたが、之にも增して愼しむべきは、所謂共產黨式の戰術である。思想鬪爭に於ける共產黨的戰術の何であるかは、之れ迄いろ〳〵の機會に於て一再ならず說いた。殊に本誌二月號の拙論に於ては可なり委曲をつくして論じたつもりである。一言にしていへば、共產黨的戰術は思想戰に於ける直接行動に外ならない。相手方の心からの納得を待たず、自分の思ふ壺に無理に人を引き入れようとすることである。腕力を方便とすると否との別はあるが、威壓を以て人心を強制せんとする點に於ては、暴力行使と何の異る所もない。果して然らば、[illegible]は、必ずや亦た、思想的直接行動をも亦之として排斥するものでなければならぬ。實際の結果から云つても、共產黨式の戰術の横行を寛過することは、取りも直さず、反動團體の暴力使用を誘動挑發することに外ならぬのである。

第二、暴力行爲非認の社會的要求は思想問題と分離して叫ばるべきこと。

暴力行爲は思想戰の葛藤に用ひられたので始めて惡いとされるのでないことは勿論だ。それ自身惡いものだと云ふことは多言を要せずして明かである。而してその惡事たることを高調せんが爲めに、犧牲となつた者が思想界の先覺者であり社會革命の勇士であると云ふ點を力說し過ぎると、(一)或は昂奮し易き味方の者を促して復仇の擧に出でざるを得ざらしめたり、(二)又或は正反對の考を有つ敵方の胸裡に暴力謳歌の念を起さしめる恐れ多しとせぬ。いづれにしても、斯くて暴力行爲そのものを絕對に排斥すべしと云ふ趣旨の事實上大に薄らぐことだけは疑ひない。今日の開明の世の中に警察裁判の制度の斯くも發達した中に在て、暴力の行使を寛容し些でも之に同情を寄せる態度のあるべしとは、殆んど想像し能はざるが如くにして、事實時々之れあるを見るのだから驚くではないか。明治三年參議横

井平四郎の暗殺せられた時、假令誤解にもせよ耶蘇教を信じて國體を危くする者を除かんとした其の精神が立派だからとて、廟堂の大官のうちにすら助命論者が尠くはなかつた。翌年同じ厄運に遭つた大村益次郎に付ても同様の事あり、各官衙の權限の明かならざりし時代の事とて、甲の判定を下した刑の執行を乙恣に之が停止を命ずると云ふ様な事があつて、滑稽な官界の紛議をかもしたこともあつた。明治の初年は致方もあるまいとして、世は大正の盛代と進んでも、甘粕大尉の蠻行に對し、殺された相手が大杉夫妻だといふ丈けの理由で、公然同情讃美の聲を放つた不所存者も現はれたのである。滿洲某重大事件の關係者が、所謂國家の爲に圖つたのだと云ふ點に免じてか、今仍ほ國法の訴追の外に晏如たるを得るも、蓋し亦同じ精神の働いた結果であらう。事の内容がいゝからとて暴力行使を寬容するやうな習氣を此儘にして置いては、焉んぞ知らん、官界には官界の標準あり民間には又民間の標準あり、各々その是非する所に從ひ深く自ら忌む所なくして、事の決着を暴力に頼み遂に不祥なる革命的風潮を馴致するに至る恐れがないだらうか。

故に私は曰ふ、暴力非認の要求は思想問題と分離して叫びたいと。最後の目標の善惡に拘らず、暴力の使用は徹頭徹尾いけないと云ふことにしたいのだ。この爲めには暴力寛容論も戒めねばならないが、被害者が思想界の先覺だと云ふ點を强調することをも同様に愼みたいものと思ふ。

第三、反動的暴力團體の存立を可能ならしむる社會的緣由に關し、政府當局の反省を求むること。

七生義團が暴力を振つたからすべての反動團體は皆暴力行動を愼まないと云ふのではない。併し概して云ふに、之等反動團體は殆んど例外なく彼等の所謂大義の爲めには敢て暴力に訴ふるを辭せずと氣構ひて居る様である。この世智辛い世の中に、さりとは殊勝の心掛けであるが、能く考へて見ると、彼等は一面に於て生活に屈托するの必要から救はれて居るが爲めに、自ら天下の公義に頭を使ふの餘裕を得て居るのではあるまいか。金で節義を賣つたのでは固より無からう。併し金で彼等の生活を保障するものがないとしたら、今日の世の中に於て、どうして斯くも多勢の青年が、一文にもならぬ事に奔走したり、心にもない事に喧嘩を賣つて人の迷惑を醸したりする事實を理解することが出來よう。斯くして私は遂に、最近の好もしからざる風潮の終局の責任者として政府當局の反省を促さざるを得ないことにした。春秋の筆法を以てすれば、山本宣治君を殺した者は今日の田中内閣であると心私かに確信する所あるからである。

何を以て斯く斷ずるや。巨細の説明は一朝一夕にして盡し難

いが、試みに二三の著なる例證を擧げんに、(一) 政府當局は今日餘りに所謂共產主義の禍惡を誇大に吹聽し過ぎて居る。思慮の淺い者が、政黨高官の言だからと輕信して、誰れ彼れを天地相容れざる國賊と思ひ込むのも無理はないと思ふ。その證據に、此種の連中に未だ曾て一人も、能く相手方の立場を研究して來たものがないではないか。(二) 政府當局(並びに與黨)は自家に不利なる思想家社會運動家に對し故らに危險人物の烙印を捺し、以て之を民衆との接觸を遮斷せんとした。之れが反動的傾向に富む固陋な人達をして、どれだけ不當に憎惡嫉視の範圍を擴げしめたか分らない。(三) 政府(又は與黨)がふだん院外團などの名の下に公然暴力常習者を養つておくのも、文明國の大汚辱だと思ふ。院外團をすべて不逞の徒の集りといふのではない。知見の狹い私の如きでも、大臣だの次官だのと云ふ人から彼奴をなぐれとの內命を蒙り之を勇敢に遂行することに依て僅に衣食の料を得て居ると云ふ若干の青年を知つて居る。最近の例としては、議會に於て記者高山金一君に故なく靜養三日を要する暴行を加へた院外團員があつたと云ふではないか。理義の辨別を外にして、只氣に喰はぬ者を擲ぐると云ふだけを商賣にする奴もする奴だが、いゝ氣で之を養ふと云ふのも常識を以てしては解し難い。(院外團に付ては序を以て同じ樣な警告を民政黨にも發して置きたい)(四) その外直接政府與黨の養ふ所でないとしても、私の推測する所では、殆んどすべての極端なる反動團體は、直接又は間接に政府筋の物質的庇護を受けて居るやうだ。所謂反動主義を標榜して居るものでも、中には無暗に暴行などをしないものもある。之等は大抵金で外部との關係を有たないもののやうである。自分で金を出して寄り合つて居る程のものは、概して眞面目な、又質のよい團體と見ていゝ。併し此類のものは案外に其數多からず、兎角妄動に依て自己の存在を見せびらかしたがるものは、陰に陽に其筋の庇護の下に立つ連中である。固より何をすると云ふ約束のあるのではなからう。併し何を以て忠勤を擢んずべきやは、以心傳心、自ら相通ずる所はある。是れ時に其筋の思惑を外づれ、飛んでもない事態を發生して保護者に迷惑を掛けることある所以である。少少間違つた事を仕出かしたとてその都度怒つてはイザと云ふときに手足の如く働かすことは出來ない。是亦何事も大目に見てやる所以、而して時には賴まぬ仕事にも不本意ながら報酬を與へ、全然の過失に對しても何彼と骨折つては只管その曲庇につとむる所以である。

成程之れでは我々風情の者は到底枕を高うして安眠するこは出來ぬ筈である。此際無產黨の人達などは須らく起て、

君の犧牲を無意義ならしめざる爲に、徹底的に這般表裏兩面の情實を剔抉し、あの陰欝なる妖雲を政界思想界から一掃するに協力すべきであらう。内輪揉めに浮身をやつして居ては、何時まで經つても爽快なる天日を仰ぎ見ることは出來ない。

九

之に關連して私は、昨今の政界が朝野兩黨を通じ餘りに「國體」と云ふ文字を濫用することをも誡めて置きたい。優諚問題の如き、之を政治問題とすることには贊成出來ぬが、大權の尊重とか輔弼の責任とかに之を結び付けるは先づい丶として、抑租委議が國體觀念を傷けるなど放言する者あるに至ては洵に沙汰の限りである。何事でも國體問題に持つて來れば、それで政府の痛い所を突いたつもりであらうけれど、識者に對しては說明者の陋劣を笑ひ提案の重みを失はしむるにとゞまり、無智の大衆に對つては、斯くも國本の破壞を意とせぬ者が多いのかと無用の昂奮を挑發して、遂に爲すべからざる事を爲さんと決意せしむるに至らぬを必しない。この點は世間一般に、わけても在野諸黨の論客に、愼重なる反省を冀ふておく。(三月九日記)

新著月評

最も權威ある批判であり推薦である

田中王堂著 現代文化の本質

杉森孝次郎

現代が、殊にその日本が最も必要とする、しかしながら最も缺乏してゐるものは根本聰明そのものだ。わが王堂氏は、幸ひにしてそれの比較的、そして實に稀有的、特絶近似的持ちぬしのすくなくとも一人だ。

いふところの根本聰明とはなにか。それは、それこそは哲學者だ。

哲學とはなにかと私はこゝに敢て設問する。哲學とは、常に幼兒の如くに物を見、物を呼び、物を考へる行動にほかならないと私はここに答へる。

わが王堂氏は、ともかくも自己の判斷力を信じ、自己の思索力、推理力を信じうる人だ。その點に於いてかれは一幼兒の如し。長じてなほ一幼兒たる純眞性と獨自性を失はざるためには、その人は卓越または強大なる識力、根本的識力を持つてゐることが必要だ。さうでないならば、かれは早く、また一貫的あるひは轉變的に思想的、信念的に「暗示」され、「催眠」される。けれども、これよりも反哲學的、非哲學的な現象はない。

現代のいはゆる哲學者、哲學なるものを見よ。そのいかに壓倒的大多數が單なる模倣病者であることとか。横の現在を被暗示的にまれるか、過去の自己をさうするかのほかにかれらはいでない。ハイカラとチヨンマゲと、いづれも單なる模倣病者のみ。

理由によつて物を信ぜず、あるひは不信せず、オーソリチーによつてさうする人は哲學者でないが、さうすると、哲學者でない人がいはゆる哲學者または哲學徒のなかに現代に於いていかに夥多なことか。王堂氏は、比較的に遙かに、その高低水準を超越してゐるに近い。

故ジエームズ・ブライスはその不朽的の一著"The American Commonwealth"のなかで、アメリカの二大政黨に空場の名を與へてゐる。現存の二大政黨とも只、往昔に於いては實在として、價値として實線的なものであつたが、いまではそのいにしへの名ごりをわづかに表貼の紙片に保存してゐるにすぎないといふ意意であるのだ。「現代文化の本質」は、王堂いまだ死せずの一記錄及び一象徵であらねばならん。王堂氏たるもの、いよいよ續々としてより善きものを生產し、未死どころか、ルネツサンス(再生)を確實に證示し來る必要がある。社會は實に氏の聰明を無用とすべき理由を持たない。

現代の多くのオーソリチーズは、思想上、哲學上のいはゆるそれらは、不幸にして正しき認識論を全く持ち合はせない。それゆゑに、かれらの常識と世才は信頼すべきものであるとしてさへも、かれらの哲學と思想はむしろ消極的價値そのものだ。王堂の判斷、思索、著述は、この關係に於いて"The exception proves the rule"に屬する珍重すべき一つの場合だ。

哲學者とはなにか。實感のすべて、殊にも實感中の實感ともいふべきものを、その自分の知力、評價力で知りつくし、評價し了せねば措かぬ智性の持ちぬしたる人が即ち哲學者だ。政黨派の現代に於いて、王堂氏が少點社

に屬するといふ事實は否定しがたい。

此の egotism (勿論 egoism とは全く別極なもの)、hyperbolism はあるとして、そして瑕瑾として批難されてもしかたがない。しかし、それは決して致命的なものなどではさらに〳〵ない。ただ、王堂氏の判斷力、思索力、推理力をもつてして、現代の活問題、死活的重要問題のかず〳〵を、もつと幅廣く、奥深く、徹底的に、そしてなによりも努力的に研究することを實現しないことは、氏自身の不心得でもあるが、社會の愚をも根本に於いて證據立てる。

人類は宗教的動物だと私は近時ます〳〵考へる。カント、マールクス、またその他各種の obscurantism と anthoritarianism がそれを證據立てる。集團主義を積極的に條件とする被暗示、輕信、妄信、歸依、改信、獻身、殉がそれだ。人類が宗教的動物であることは必ずしも悲觀を値ひしない。しかし、どうせさうだとすれば、われらは、ます〳〵、いよいよ、聰明なる宗教、能ふ限り眞善美なる宗教を常に持つことと社會をして、他人をして持たしめることに油斷があつてはならん。

Love all, trust few と先人はいうた。王堂氏の如きは、現代に於いて、眞に思想、哲學に直接的關心を持つものが、事を共にするための最低限條件を備ふる貴中貴に屬するものでなくてなにか。

氏の新著に對する、もつと個別論文的に立ち入つた批評、また新著の全體評等は私はこれを別の機會にゆづる。その著内の私自身の思想に關する、學術に關する部分に對する批評の如きは、亦た勿論これを他日の機會にゆづる。(四六版六〇五頁、定價三・〇〇、東洋經濟新報社)

十一谷義三郎著　唐人お吉

新居格

十一谷義三郎氏が「唐人お吉」を書いた意圖は明かである。それを氏は單行本「唐人お吉」の序言のうちに明かにしてゐる。「忘れられた屑(紙屑の意)の中にこそ、その時々の生活や時代精神や、またそこに虐たげられ、甘やかされた個人の姿なぞが、生々しく潜んでゐると信じたからだ。經濟史や文明史や社會思想史なぞ、學者の抽象術に殺された記述に手頼るよりも、直接に、端的に、かうした過去の心臓に觸れる方が、※※に有意義だと氣附いたからだ」。この考方はたしかにうなづける。かくて氏の「唐人お吉」は描かれたのであるが、そこに一箇の「唐人お吉」を描がいた上にその當時の時代と生活、西洋文化の初光が差し初めた海港の風物が丹念克明な筆で描破されてゐる。私はこの作を仕上げるまでに作者がした準備的努力の並々でなかつたこと、及びそれに表現形式を與へることに苦心したことを聞知してゐた。だから讀まない前からそんなにも努力したものならどんなに失敗しても構はない。よし失敗してもそれは片々たる上手又は成功にどれだけ優るかも知れないと考へてゐたのであつた。今「唐人お吉」を一讀して私はまことにこの作が刻苦になるものであることを十分に看取した。一行一句を苟くもしないで熱意を込めてゐるのを見た。ただ熱意があまつて剛直にすらなつて居る形迹を認める位である、それと同時にこれ以上適切には現はしえないであらうと思はれる非の打ちどころのない巧緻もある。そこに努力が發散させた光澤を見る。みがきにみがきをかけたやうな所が隨所に感得させられる。

この作中、唐人にたいする當時の人の感じ方、考へ方は實によく出てゐる。その點全く生々しく描かれてゐる。封建的形式的主義の

幕府の官吏と、不同國にたいする使命を朗らかにもつ合衆國領事との對照も巧みにこなして居る。

われ〳〵はこの作者の筆によつて十分にその當時の社會につれて行かれ得るのである。そうした時代に外交政策の犠牲になつて最初の洋妾となつた可憐な美女、それが一方そのためにうける冷嘲とその美女が唐人もまた人間だと思ふ心理經過何れも自然である。作の初めの方の部分はお吉の生ひ立ちと彼女が輝やかしい生活の描寫になつてゐる。それは洋妾になつてからうける暗らいそしていやしめをもつて見られる生活と對照的には效果があることは勿論であるが、作者はどの部分にも均等の力を注いでゐるために作の中樞機構に若干の鮮明を缺きはしないかとも思はれる所がある。卽ち作者は材料を尊重し過ぎて作者に持前の忠實性をあまりにも出し過ぎてゐるのではないかとさへ思ふ。

時代、社會生活、個人のこの大きな題材をつかんで、その何れにも疎そかでない留意をつなぎすぎたために一篇創作としては纏まりに多少の遺憾がない譯ではない。詰り視線を、しかも忠實なる視線をどれにもこれにも投げかけたために配景と登場人物との遠近法をつくることに多少の手抜かりとも見える點がありはしないか。成程この篇は唐人お吉に中心があるのは無論であるが、それが特に強く浮彫されないのは他のことに就いても多くの描寫をしない譯には往かなかつたからである。だから作者はこの作を土臺としてさらに立體性をもたせた「唐人お吉」を書くことも出來るのであつて、本書は素材料に創作的表現を與へた以上に素材そのものをもう少し創作化することも出來たのであらうが、作者は平面的に一應あるが如く書かねばならなかつたのである。この作に就いての文壇諸家の評言を私は殆ど見てはゐない。けれど諸家は思つたほどこの作をほめなかつたかのやうに記憶してゐる。だが、前にも云つた如く、わたしは多少の文句が云へても、この書を極力推賞することに於いては人後に落ちぬのである。

この種の刻苦作が出ることは全く望ましいからである。

メッサー著　認識論概説

雨宮庸藏

哲學上に於ける認識論の價値いかんは兎に角として、所謂認識論とはいかなるものであるかを知るに便利な著作として、私たちには R. Eisler; Einführung in die Erkenntnistheorie. A. Messer; Einführung in die Erkenntnistheorie. 紀平正美著・認識論などを持つて居るが、今回メッサーの該著がその第三版（一九二七年刊）によつて邦譯された事は蓋し意義あることであり、同時に譯者の勞を深く多とせねばならぬことである。

本書は章を分つ九、主として所謂純粹理性の關する認識論をあらゆる傾向にわたつて取扱ふて居るのであるが、又實踐理性の要請としての價値評價や宗敎的信仰方面にも深き顧慮が拂はれて居り、入門概論の著作としては殆んど理想的である。なほ原著の平明な措辭と及びそれに應ぜる流暢な譯筆亦讀者にとつて嬉しい點である。

只玆に一言すべきは、概論としての本書もその敍述が著者獨自の立場で批判的に一貫せられて居る事である。彼が本書を「篤き敬と友情とを以て」キュルペに献じて居るのでも分る如く、その立場は批評實在論である。卽ち、主觀を離れて存在せる實在の世界が存し是を認識する知覺は實在世界の理解を目的とする學的事業の出發點であり檢査所である

とする點に於て、素朴實在論的であるが、然し認識作用が決して受働的な作用でない事や、知覺して始めて事物の色彩なり香氣なりがあるのだがだからと云ふて事物を知覺するためには該事物より出る作用が必要である事や、他人の意識過程の間接知覺などを說く事によつて、その立場の批評的なるをいふ。

彼は此立場に於て意識を物自體への關件と見做しカントの Ding an sich をかく認むることによつて一種の形而上學の可能を指定する。即ち實在の根本性質を研究するのではなくして、認識作用殊に其作用に內在する先天的因子を研究對象とする形而上學、換言すれば個々の學問に於ける先天的內容を研究する超越的な經驗的形而上學の可能を說く。斯くして彼の所論は Korrespondenztheorie や Abbildtheorie やを想はせ、新カント學派やバーデン學派や現象學派やと對立し、其思想內容は頗る複雜である。然し今それを詳細にかたる紙幅を持たぬし、又それにも價ひしない

私は今茲認識論を兎に角パリュアブルなものレイゾン・デートルを持てるものと假定してきたのであるが、そしてその限りに於て本書を敍述し評價してきたのであるが、然し右の簡單な敍述によつてもうかがはるる如く現代にはびこる認識論は背自きそしてその名に價ひしない無能力的者ではなからうか。認識論が、自然科學は知識を獨斷的に假定して居るとして是に一矢をはなち、以て知識の妥當性を見きはめ、思惟の認識可能の根據と範圍とを明らかにせんとする意企を持てるはよくそしてかかる出發點を持つ以上、換言すれば學を成立せしむる知識それ自體の批判である以上、それは全く論理的構成にたたねばならぬものと考へらるるであらうが、然し玆に現代認識論の過誤は胚胎して居ないと誰が云へやうか？マルクスがダス・キャピタールの始めに於て商品を自明的とせる如く知識の存在も亦自明の理であり、而して實に知識がいかに妥當なものであり無限に信頼し得るものであるかは、自然科學が經驗的に顯示し乃至せんとして居るではないか、今何を苦しんでその妥當性を檢し認識可能を問題とする必要がある？何を苦しんで時空の直觀形式に逃避し十二範疇をば云爲する？況んや「物それ自體」の愚劣なる措定をや。

抑々知識はいかにして可能なるかも、商品はいかにして可能なるかの如き方法をとつて始めて意義を生ずる。誠に現代認識論の最も不聰明なるは、それが社會的事實認識の如き

新刊紹介

自作農創定と農業問題（和田叡三著）自作農創定政策や自作農地法案の階級性を暴露し、併せて我國農業事情と農民の社會的地位とを解明す（四六版一九〇頁、定價・六〇、東京神田錦町一の一二福原ビル內上野書店）

サヴエート・ロシアの農村問題（產業勞働調査所譯）社會主義サヴエート共和國聯盟治下に於ける農業協同組合をとき、ネップの效果を論じ、都鄙離反の世界的文明現象の間にありながら此の國に於ては農民大衆が社會主義的都會の援助下にあるを明らかにし十月革命以來農民の獲得せるものに關する重要な數字を提供して居る。（四六版二五五頁、定價一〇〇、上野書店）

コミンテルン第一回大會宣言根本方針決議（東條俊三譯）雄渾的確な原文は玆に遺憾なく移植された。（四六版一二一頁、定價・六〇、上野書店）

工場へ（今村保男譯）一九二八年二月の第一回國際組織會議及其直後の無產青年インターナショナル執行委員會に於て指導的役割を演じたエム・ゴルキツクが、右の會議に於ける決議をいかにして實現すべきかを書いた小冊子と及びその決議全文との飜譯である。著者の意企は本書に於て明快に示されて居る。（四六版一八六頁、定價・七〇、上野書店）

マルクス主義の基礎（田畑三四郎譯）フランツ・デイーデリツヒ編纂のマルクス・ブ

必要性を持たぬ事のみならず、單に論理のための論理を犯し、徒らに煩さき無能力に陷つてな怪恬然たる事である。故に Denken は思惟中の論理的事實であつても、それは元來時間的心理經驗的の事件として思惟に起れる事實である、さればそれが先天的に妥當すると云ふも、それが眞理であり得るのは單なる概念內の事であるからではなくして實に背後に經驗が承服を與へて居るからだ。故に此の理を忘れ、對象を思惟的な觀念的なものとしてのみ論理を進むるは大いなる誤を犯す事であらねばならぬ。ライプニッツは Vérités de raison と Vérités de fait とに分けたが、理性の眞理は事實が許容してのみ可能なのだ。アインシタインの學説は、命題は、概念に基礎をおく思惟必然的の事であるが、それが人に眞理なることを稱し得るは、實に背後に經驗が口をきいて居るからである。それに反していかに精緻な論理を以て眞理たる事を強要するも竟に顧られざる運命にある現代認識論は、そが論理のための論理の誤謬を犯して居るからである、「理性の眞理」を妄信して居るからである。それはいかに普遍妥當を大聲叱呼するも何ものをも解明し得ない、猛省すべきである。價値認識論亦更に論理の過剩を排して心理的歷史的社會的要素を顧慮せねばならぬ。認識論が最も認識不足に陷つて居るは寂ましき皮肉ではないか。宗家認識論に於て既にかくの如し、日本認識學界に至つては、素朴實在論的模寫現象を反覆して居るにすぎない、益々自らを權威視する陶醉認識論あるにすぎない。

かくして現代認識論はナンセンスである。私たちは快朗たるナンセンスをば現代精神生活の必需品とさへもするが、そしてその意味に於て現代はナンセンスの時代でもあるが、然しだからと云ふて現代は認識論の時代だとは云へない、認識論の持つナンセンスは晦澁晦迷であるからである。

かくしてメッサーの認識論概說も、先づかかる立場から評價されて始めてその眞如の價値を暴露する事ができるのである。(菊判三八一頁定價三五〇、東京赤坂青山南町六の一〇一・甲子社書房)

高橋龜吉著 明治大正產業發達史

土方成美

高橋龜吉氏が發表せられた明治大正產業發

レヴューの紹介、斷片的ではあるが手頃な人々にとつては便利な書である。(菊版三一三頁、定價一・五〇、東京神田美土代町內外社)

市川左團次歌舞伎紀行（大隈俊雄編）　今はなき小山內氏が一昨年十一月建國十年祭に招かれた時の談話に直接端を發せる歌舞伎劇の歐洲進出は、左團次一行の渡露興行となつて具體化した。本書には幾多の感想日誌なども見られるが、最も價値あるは、當時歌舞伎に關してソビエート聯邦新聞雜誌のものせる紹介及批評を編者の譯出せるものである。(四六版四八一頁、定價二・五〇、平凡社)

欧米歌舞伎紀行（市村羽左衞門著）　卒直な內容と興味ある插畫とが嬉しい。(四六版二〇五頁、定價一・五〇、平凡社)

世界大觀と新日本の建設（加藤政之助著）　齡米壽に垂んとして意氣聲鋒以てかかる力著を出だされたる事に對して青年は頭をたるべきである。英米獨佛伊などの國勢及我國の重要問題は玆に手にとる如く論せられて居る。只露西亞のオミットされたるを遺憾に思ふ。(四六版三〇一頁、定價一・八〇、平凡社)

悲劇の出生・季節はづれの考察（生田長江譯）　ニイッチェ全集の十卷である。其にショーペンハウエルやワグネルなどの影響下にあつた時の著作であるが、ツアラツウストラ・ニイッチェの原型は既に此の時代にあらはれて居る。譯筆は相變らず精到。最後にニイッチェ全集が本編を以て譯了されたるを祝し生田氏の勞をねぎらはずには居れない。

達史は本文七百頁、之に參考圖書索引等を合せ含む尨大なる大冊である。私は此大冊を一讀したに止まるので數字の根據等に一々遡つて精細に之を批判する等のことは、他日に讓らなければならない。加ふるに、此の方面の研究は、自身としても多少試みに關係上、一枚の表の作製にも、其資料の蒐集、加工にどけだれの手數を要するかに就ては、多少の理解を有するつもりであるから、斷片的な記述を拾ひ上げて、所謂揚足とりをする氣にはなれない。玆に讀後の感想とでもいふべきものを述べて、氏の著述に對し、敬意を表さうと思ふ。

氏が本著の序文に於て我國に於ける經濟學は今や模倣時代を去つて、獨創の時代に入らなければならない。徒らに泰西の學說を我國の事實にあてはめる事をなさず、我國の事實そのものゝ上に、學說を建設しなければならない。我國に於ては明治の研究は此頃旺盛であるが、まだ部分的なものばかりで、大きく纏つた綜合的なものはない。此欠陷を充さんといふのが本書を著述した氏の意圖であるといはれてゐる。即ち氏の抱負は中々大きいのである。しかも氏は尙今後數年後に本書の數倍にも達する日本經濟史を發表せられる由である。其成果を今より鶴首して待つもの、豈筆者のみではなからう。

扨、氏が本書の敍述を體系立てられるに當つて、何を目安に置いてゐられるであらうか、もとより具體的な個々の事業を其技術的、經濟的方面に亘つて、產業別に說くことは氏の企圖せられるところではない。廣く產業の全體に亘つて其發展を鳥瞰せられんとするのである。

本著の構想を見るには先づ其編別に着目するのが捷徑であらう。全編を六篇に別つて、第一編を總論とし、玆では明治大正產業發達史の位地を說明し並びに明治大正產業發達史を概觀せられてゐる。第二編は經濟制度の革命時代と題し、維新前の產業狀態を簡單に敍說して、明治政府によつて行はれた諸般の施設を述べてゐる。第三編は、維維新革命の整理と發展準備時代であつて明治十年より明治二十六年に至る民間產業發達の素地の成立か說かれてゐる。第四編は產業發展の時代と題して明治二十七年より大正八年に至る迄の產業發展は更に其中の各時期について、敍說し終りに各種事業別に其發展を說いてゐる。第五

（四六版六四九頁、定價三・〇〇、新潮社）

The Story of Ancient Japan（磯部彌一郎譯） 古事記の譯である。嘗てチェンバーレイン教授などの飜譯があつたが、該譯は今絕版であつて殆んど手にはいらない。故に本書の如きは日本英語學生のためにも英語を語る外人のためにもその存在理由を誇つてもいゝものである。譯筆は平易であつて英語の素養ある人にとつては古事記の原文を讀むよりたやすい。（ポケット型二五三頁、定價一・七〇、東京麴町區內幸町一の五・三修社出版部）

廢村賦（寺神戶精一著） 農民解放運動の時代的言論をも一つの泡沫とし雜騷としてその下には土臭強く蠢いて居る地方が多い。そこには無知の農民があり死にいく大地がある本書は小作爭議も階級鬪爭も嘗てあらはれず封建の殘滓に眠り因襲に纏づけされて居る霞ケ浦沿岸のかかる寒村に取材して、この農村時代相を如實に描けるもの。筆觸は鮮新でありリアリスチックでありユーモラスある。益しよき長篇農民文學の一つ。（四六版五七三頁、定價一・八〇、東京市外杉並町成宗一一三農民文學社）

ギールケの團體法論（石田文次郎著） ギールケは法律學に於ける形式的概念主義と戰ふては歷史の發展より汲取れる實證理論を提唱し、抽象的個人主義と戰ふては道德的團體主義を展開した。然り而して彼の中心思想なる團體法論は、人的團體の法的本質に關する全然新なる構成であり、個人主義的法制の

篇は全體の編別上、多少の無理を感ずる點が、あるが我國產業革命の進展と題して特に第五篇に於て觸れた發展の中主として工業に於ける發展、例へば機械化、經營單位の擴大、農業國より商工國への進展を說いてゐる。第六篇は產業の整理時代と題し大正九年以降氏の所謂、我產業發達の行詰を敍述してゐる。

全體の構想のあらはれである編別について所感を簡單に述べて見やう。產業の發達といふことを中心として我國の經濟發展を見る場合に、大別して技術的なる見地と、經濟的なる見地とがあらう。例へば動力の變遷、技術的に見た生產物の種類の變化、例へば農產物から、工業生產物へ、同じ工業の中でも粗工業から精工業へといふ風に見て行くのは技術的な見地を中心とするものであらう。之に反して、企業の收益、資本といふ如き方面から企業の發育、企業形態の變遷等に重點を置いて見るのは經濟的見地に重點を置くものといへやう。

今高橋氏の著述は何れの見地によるかといへば、兩者の何れでもなく、兩者を包含してゐるものといへるであらう。前者の見地を重點とすれば、產業史が、他の資本主義發達等と比して產業史たる特色を强く持ち得る長所を有する代りに、經濟全體の變遷を鳥瞰するには多少不便なる點がある。

之に反して經濟的見地を重點とすることは經濟全體の發展を鳥瞰するのには、便利である代りにやゝもすれば、景氣變動史、資本主義發達史といふが如きものに比して產業史たる特色が薄くなる虞があるやうに思はれる。

今高橋氏の著述は此兩見地を合せ含ませやうとするところに、氏の苦心が存在すると共に、多少の難點も此中に見出されるのではなからうか。例へば產業といふ點に中心を置き、之の發展、沈滯といふことを標準として見ると、大勢としては我國に於ても產業發展といふ趨勢をとつてゐることは否むことは出來ないと思ふ。氏の所謂整理時代たる大正九年以後に於ても之が例外をなすわけではないと思ふ。產業には景氣の變動に伴ひ、著しく進展する時期と、比較的整理緊張の時期とがある此點に於て大正九年以後を整理期と名付くべくんば、大正三年頃の時期、日清戰爭後の好況後の時期も矢張り整理期といふべきではあるまいか。然るに氏が特に大正九年以前を全體として發展期とし、其以後を整理期として

知らない政治法律の說明である。然しながら養學徒として奉仕する五十年、その間に發表せる研究一萬頁、蓋し彼の學說を解明し紹介するは至難なわざである。今私たちはこのわざの要領よき解說を本書に於て得た事を喜ぶ。（四六版三一七頁、定價一・八〇、東京本鄕湯島切通坂町一九・ロゴス書院）

思想と文學の諸相（岡田哲藏著）　現代人の教養を培ふ上に於て殆んど必須とも云ふべき述作を收む。「カントの末日」「パピニの人物評論」「トマス・ハアディの詩境」「ドリンクウオーターの劇とその道義性」「ウエルズの「それまでに」」其他。ヂャーナリスチックな運筆も甚だ氣持よい。（四六版四八九頁、定價二・五〇、東京神田北神保町二・新生堂）

當世浮世大學（大泉黑石著）　純情と眞面目素朴と荒削りとをもつた、プロレタリアート・イデオローギイのユーモア文學（四六版五一九頁、予約現代ユモア全集刊行會）

ロダンの言葉（高村光太郞編譯）　熱情の忠實なる奴僕ロダンの藝術は、地より出でて地に還れるそれである。ここに收められた大部分は、未だ邦譯されざる彼自身の述作及談話であり、活字に適應しての插畫は理解を易からしめて居る。（四六版三一〇頁、定價一・〇〇、東京牛込神樂町二の一一・叢文閣）

哲學とマルクス主義（デボーリン著、河野・永田共譯）　哲學批判的な及び論爭的な諸論文、唯物論史に關する諸論文、辯證法の理論を其對象とせる二論文などを收む。その

みられるのは、産業といふ見地を中心としたものではなく、特に資本主義の行詰り整理期といふ意であらう。大衆の自覺、對外發展の停滞等は、産業の資本主義的發展に對する障害をなし、之が特に近來著しいことは私も否定するものではないが、大正九年以後のみを産業の發展時代に對する整理時代といふのはどうであらうか。寧ろ産業發達史の方では、農業から工業へ、粗工業より精工業へといふ如き技術的方面を中心として全體を編別せられた方が、資本主義發達史等に比して著しき特色を持ち得たのではなからうかと考へる。即ちもつと具體的にいへば、本書に於ける第二編第三編は、特に産業史としての特色を強くもつて居るとは見難く、資本主義發達史を書いても大體同じやうな叙述になるのであらうと考へられる。第四編以下が産業史の本體をなすものであらうが、技術的、經濟的兩見地を中心に置かれた結果、第四編はやゝもすると、景氣變動史の色彩を持ち、又然らざる部分は第五編と多少重複するきらひなしとせない。

以上は、もとより私一個の意見を開陳したものであつて、本書の瑕疵とか缺點とかを指摘するつもりで書いたのではない。著者の此回の努力が吾國の經濟事情の紹介普及びに研究の刺戟に、必ずや多大の貢献をなすことを確信して、茲に一般讀者の一讀を御進めする

個々の點に就ては筆者も、もとより多少の異見、希望等がないではない。例へば租稅負擔が農業に重いために、農業が行き詰るといはれる場合の數字的實證は今少し、詳細にして頂きたかつた。農業に對する補助と商工業に對する補助とを數字的に對比して考へても頂き度かつた、又あまり、重要とも思はれないやうな文獻からの引用が長過ぎるやうな點も感ぜられる。

兎に角、かくの如き書物について缺點を拾ひあげることは容易であり、自らなすことは至難である。しかも、著者が序文にいはれる如く、『研究著作には「金」が要る。食はねばならぬ、身に一厘の財産所得をも持たぬ著者は之を稼ぎ出す外にない。即ち、諸雜誌その他に原稿稼ぎを傍らやらざるを得ないわけである』といはれるのには、私自身としても、つくぐ同感を禁じ得ないのである。(菊判九六三頁、定價六・〇〇、改造社)

テーマは多樣であるが、追求する所は革命的マルクシズムの哲學擁護である。(四六版五四五頁、定價一・五〇、東京神田錦町一の一二・上野書店)

街頭の社會學(室伏高信著)　過去一ケ年にわたつての述作を收む、相變らずの澄明な直觀、ヂャーナリスチックな筆致は、讀者を捉へずにはおかない。(四六版三四三頁、定價一・六〇、東京京橋上柳原町一二・田舍社)

日本カトリツク教史(三木露風著)　フランシスコ・ザヴェリオの日本への傳導より現在に至るまでのその狀態をのべたものだが足利末より明治維新に至る間の歷史にカトリックがいかなる關係を持つて居たかを傳へて興味を喚る。(菊版二二三頁、定價一・八〇、東京麴町一の五・第一書房)

本當にあつた事・續編(鈴木常吉著)　嘗て「週刊朝日」に掲載せるもの、犯罪の赤裸々な種々相が描かれて居る故に探偵小說的興味あるものであるのみならず、犯罪の起る動機や犯罪者の心理犯罪後の結果刑事裁判の實況なども記述されて居り有益な書物である。本編には「今津の美人妻殺し」「ピス健」「女鍼灸師殺し」其他を始めとして我國裁判史上に特筆すべき「小笛事件」がのつて居る。(四六版六二六頁、定價一・三〇、大阪朝日新聞社)

明治維新史(井野邊茂雄著)　黒船の襲來より王政復古の結果に至るまでの明治維新の梗概を傳た得た便利な書物。明治維新を以て經濟外的政變と見做して居る。(小四六版二六四頁、定價・九五、東京本郷・ロゴス書院)

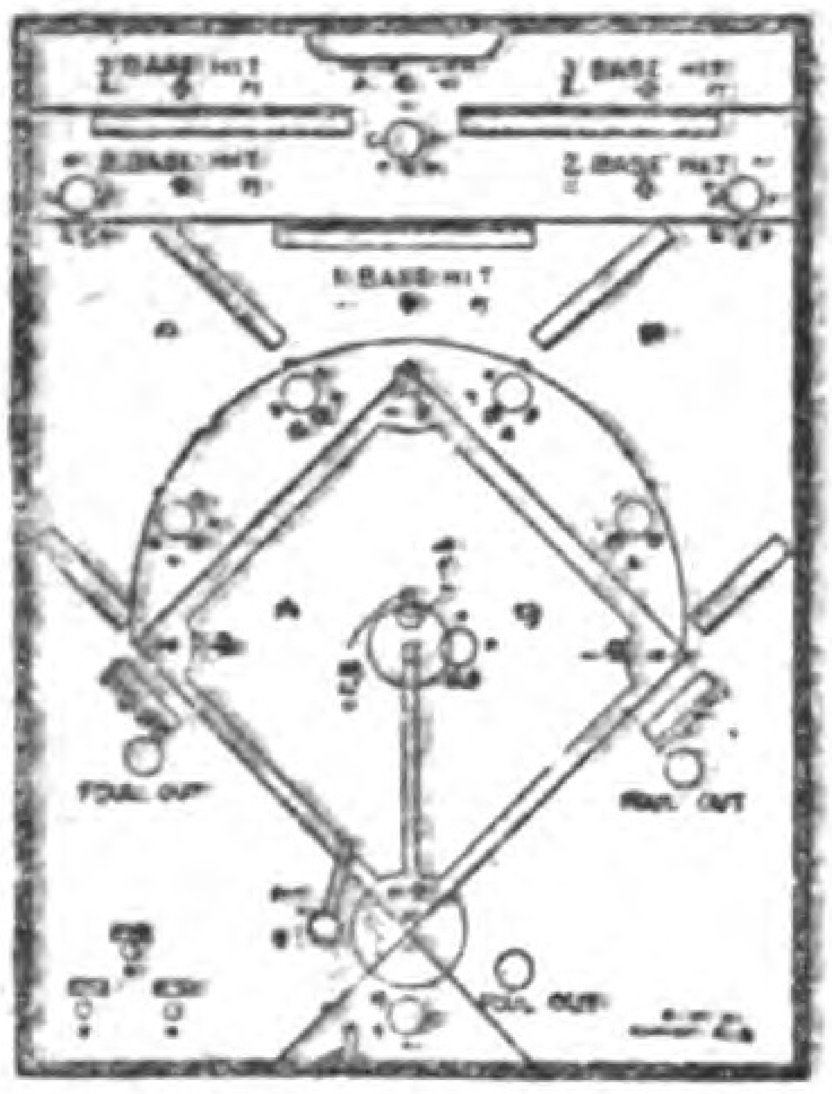
——Y・A——

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデイング七七六區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。
御註文の際は郵税をお忘れなく。
宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

誰にも愉快な
野球競技盤



約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのがこの高柔式野球競技盤です。

盤面は飛行機から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つで、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に、打手も亦選手がボックスに立つた氣分で、バットの振り方で美事本壘打を飛す事も出來れば、油斷をすれば、投手に計られて三振「アウト」にされて了ひます。

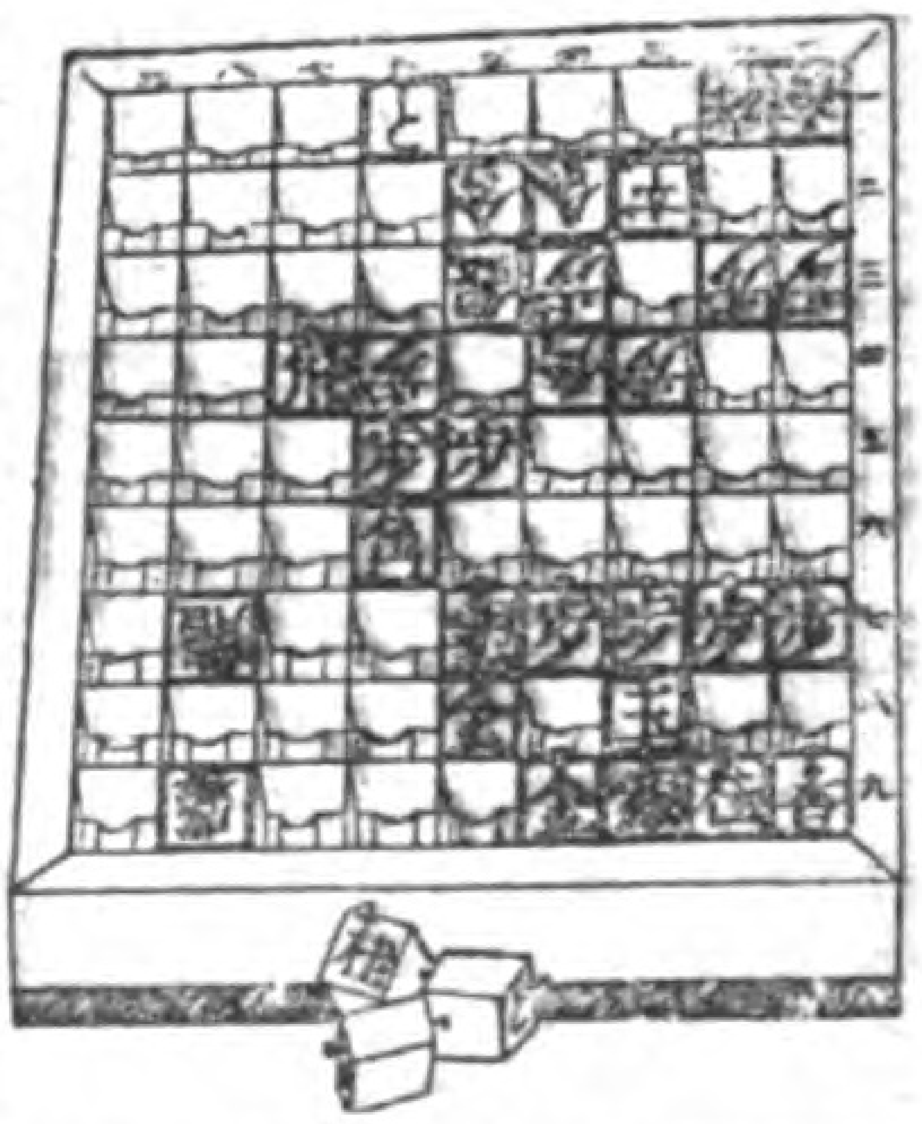
實戰に臨む人はもとより、高尙な新らしい家庭遊戲として一般の家庭におすゝめ致します。

小型(長一尺四寸 巾七寸五分)　**一圓三十錢**
中型(長一尺六寸 巾一尺二寸)　**三圓八十錢**
送料東京市内十二錢内地廿七錢鮮臺五十五錢

携帶用
輕便將棊盤

縱三寸七分横三寸二分厚サ五分の輕便將棊盤です。木とアルミニームで造られてありますから、ポケットに入れて少しも重くなく駒には一個一個蟲針が附けてある等婦女子の眼にも可愛らしいものです。

駒は標準文字を用ひ盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見乍らの研究には一層便利です。其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る好棊家にとつてこれ程便利なものはありません。



定價(駒全部附)　**一圓八十錢**
送料東京市内十二錢 内地十八錢 鮮臺四十五錢

スプリングコート兼用
バーバリーレインコート

英國製と同樣の生地を用ひた純國產品です。多額の運賃と少からぬ關稅とを仕拂ふ必要がないだけそれ丈、品質も仕立も非常に吟味されたものです。これならばスプリングコートともなり、天候の危ぶまれる日の外出にも安心して着て出られます。



色は紺・テツ・茶系統の常に最も斬新な流行色で、寸法は襟下鯨尺二尺六寸から二寸毎に三尺二寸までそれぞれ取揃へてあります。

各色共一着　**十九圓**
送料東京市内十二錢 内地二十七錢 鮮臺九十五錢

純良レインコート

純良なイートジート印のレインコー

トをお頒ち致します。上等の羽二重に良質のゴムを裏附けしたもので、尚裏面には上品な縞柄が染出してありますから、その氣品の良さは從來の舶來品の比ではありません。

色はネヅミ及茶系統の最も斬新な流行色を選んだもので、現在盛んに海外に輸出されつゝあるものです。

寸法は何れも襟下餘尺二尺六寸から三尺二寸まで二寸毎に取揃へてあります。

各色共一齊 十三圓

送料東京市内十二錢 内地二十七錢 領土五十五錢

替ズボン

洋服は三つ揃でなければならなかつた時代は過ぎて、上下變つたものにかへつて良き調和を見出す事が喜ばれる樣になつた今日では、ズボンだけ新しくして古い上衣をもう一度新しく着る事が出來、毎日屋内で執務の時間を經濟的な替ズボンですごせば新調の洋服を何日までも上下同じ新しさに保たせることが出來ます。

或ひは特に二三着の替ズボンを用意して、時々かへて外出する等は、單に氣分上の問題でなく、最も實際的經濟的方法です。

各種共大體次の寸法で用意致しました。

大	腹廻	二尺五寸	股下	一尺九寸五分
中	〃	二尺三寸	〃	一尺八寸五分
小	〃	二尺二寸	〃	一尺七寸五分

A 紺サージ	四圓五十錢
特上黑サージ	九圓八十錢
D 黑セル	五圓四十錢
E 上黑セル	五圓八十五錢
F 絹セル 黑紺	七圓
G フラノ 鼠紺	六圓

送料東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

紋染紙製

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備し、シカモ布よりも丈夫で洗濯が出來るといふ重寶な品です。この絞紙製品は婦人公論代理部で好評を博してゐますので、本誌でも特に格安にお取次いたします。

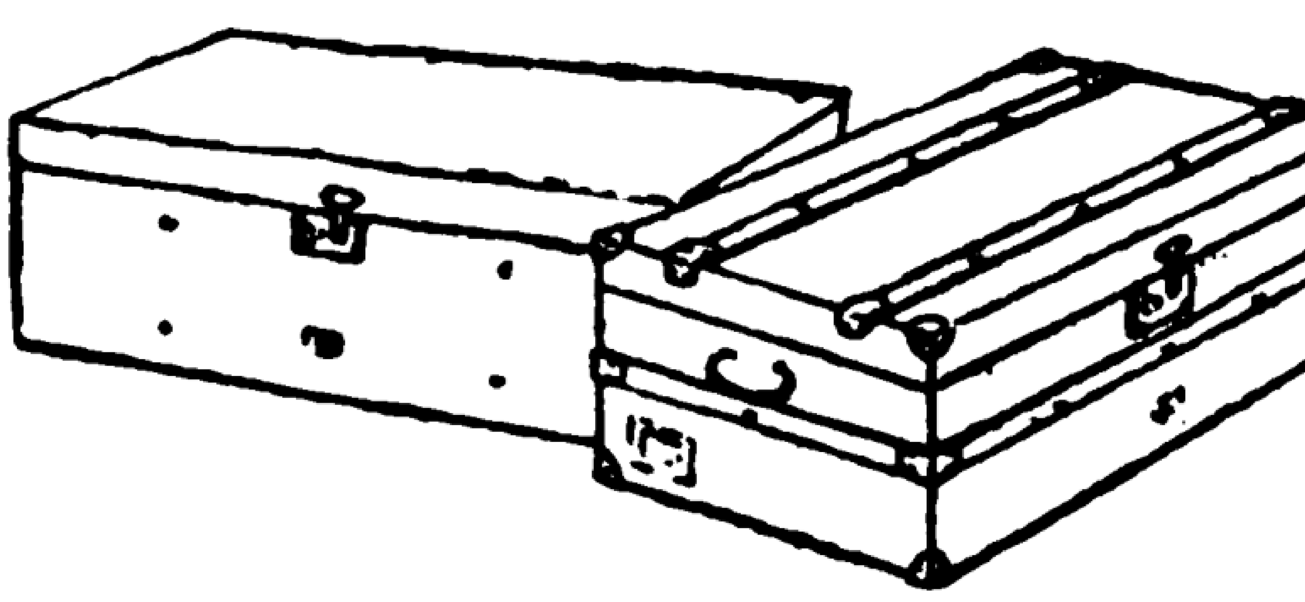
定價(大)一圓廿錢 (小)八十錢

送料東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

防濕防蟲毛織物入

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分の堅牢な容器で、内壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦の入れものがついてをり、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ



絕對に外氣の侵入を防ぐやうに出來てゐますから、毛織物その他の大切なものをしまつておくのに必須な品です。

特製は、要所に筋金が使つてありますから、トランク代用としてそのまゝ送り出す事が出來、滿蒙や支那鞄より遙に便利です。

定價 特製 九圓八十錢 並製 六圓八十錢

送料東京市内二十錢 地方は運賃先拂

萬能書見臺

小には机上の書見臺から、大には約五尺五寸位まで、腰掛けて見る場合、寢て見る場合、書架の部分には頁止めを附して奏樂用の譜面臺にも好適、屋外ではスケッチ用の畫架となり、横に曲げて氷嚢つりとなり、寢臺に取付ける事も出來る、大部分鋼鐵製ニッケル磨の、小箱入携帶至便、分解組立自在文字通りの萬能書見臺です。

寢ながらの書見には、下向の書物を完全に把持し、而も高低左右角度長短傾斜等意の欲するまゝです。

定價 一臺 八圓五十錢

送料東京市内十二錢 内地五十四錢 領土八十五錢

インターナショナル式

新聞綴器

近來の新聞はみな欄外が狹くなつたゝめに、普通の新聞綴器では折目に近い部分は讀む事が出來ず一々取はづすのは余りに煩瑣極ると云ふ缺點を、完全に一掃した新工夫の新聞綴器です。

本器は、新聞を挾んだまゝ欄外その他の部分も完全に讀む事が出來、廻轉裝置で任意の一枚でも容

易に取はづせる點に最も工夫をこらした、凡そ新聞を讀む御家庭には是非備へ度い品です。

定價（表紙裏紙附）　一圓二十錢
送料東京市内十二錢内地二十十錢鮮臺五十五錢

高級で低廉な

アテナ萬年筆

使ふに從つて直きに執筆者の手と書風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書き好くなるといふ定評を得てゐます。低廉で、シカモ舶來品に勝る高級品であります。

定價三圓五十錢・四圓・四圓五十錢
（回轉式自働吸入型）　三圓五十錢
送料内地十八錢　鮮臺四十五錢

▲型錄は二錢切手封入御申込の事

自働研式

バレイ安全剃刀

バレイ程完全かつ簡便な優秀品は、今はどこにもありません。巧妙な裝置によつて、いかなる素人にも立派に砥げます。從つて一枚の刃が、半年以上も毎日の使用に堪へ、その切れ味は廣光の古銘刀にも匹敵することが證明されてゐます。

C型（[illegible]）　一圓八十錢
同　同　二圓
B型（單價、替刃一打ニッケル箱入）　十三圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢　鮮臺四十五錢

香水を兼ねた

スマドレ・ヘヤトニック

このスマドレ・ヘヤトニックは米國で唯一の日本人向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニューヨーク・ロンドン・ハリー等の日本人に愛用されてゐるものです。洗髮後或は朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指頭で輕くマッサージしてをけば、フケを除り拔毛を止め、後には氣持ちの良い香りが永くのこり、毛髮は使用するにつれて軟くなり、漆黑の美を增します。

定價（婦人用男子用特大瓶）　二圓五十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

理想的な洗髮液

スマドレ・シヤンプー

毛質を少しも害する事なく、簡易に毛髮の汚れを落し、フケを除り爽かな潤のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や癖毛を直す點は全く不思議な程です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が禮儀とされる今日、僅かな時間に之を用ひて、毎もさつぱりとした髮で人に接する事が出來ます。

定價　特大瓶　二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

四季の香水

香水は夏のものに思はれたのは昔の事で、此の頃は一年中香水が用意される樣になりましたが、それも毎も同じものでなく、氣候や季節によつて變つたものを用ふるために、中央公論社代理部で創製したのが、この四季の香水です。

春は梅、夏は鈴蘭、秋はヘリオトロープ、冬はシクラメンの四種に別れてをり、贈答品にもふさはしい樣、素敵な體裁の函に納めました。四季何れでもお好みのままにお註文下さい。

定價（春、夏、秋、冬）各　二圓
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

携帶便容器入

ユトマ・ポマード

毛髮の榮養を兼ねた純良なポマードを携帶便な容器につめたものです。使用法は蓋をとつて容器から直接に毛髮に塗りつける丈で、少しも手に脂がつかず、使はれた丈の脂は常に表面の網を潜つて出て來る裝置の、一抹の無駄もない、至極重寶な、特に外出前や旅行先での使用には一層便利を感じます。

後は何回でもつめ替へがきく單に容器としても價値のあるものです。

定價　六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

理想的美髮料

スタイルセット

油やアルコールを絕對に含まぬしかもあまりばさばさしない理想的の新美髮料で、フケトリとポマードとを兼ねた合理的新製品であります。使用法はまづ髮を少量の水で濕らしておき、掌に少量のスタイルセットを滴らして、毛髮全體にゆきわたるやうに塗りつけるのです。

定價　六十錢
送料東京市内十二錢内地十八錢鮮臺四十五錢

古本賣買のお取次

主として地方在住讀者諸氏の御便宜を計る目的で特設いたしましたのが弊社代理部の「古書案部内」です。どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。古本御購入のお取次はもとより御賣却御希望の古本古文書、和本、錦繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次をいたします。お問合せだけで御返事いたしかねるやうな種類のものならば、一應御送附下さいますれば早速市内一流の專門家に囑して正確迅速に評價して御返事を差上げます、

古本賣買お取次規定

(A)紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。(B)註文はなるべく振替で、但送品は前金後一週間以內。(C)評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月、發行所、汚損の程度等詳細御報のこと。但古文書、錦繪等の如きは現品拜見の上ならでは正確に評價できない場合がありますから其旨お含みおき下さい。御返送の場合の送料は申受けます(D)宛名は中央公論社古書案内係と明記のこと。

佛蘭西化粧界の寵兒

除毛劑タキー

顏はもとより手足その他の部分の毛を、刀剃を用ひないで容易にしかも綺麗に除る藥がロージエ化學研究所で發明されました。

これはチューヴ入のクリームで手でも足でも、腋の下でも、任意のところに塗つて五分乃至十分後に水で洗ふと、剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり毛が除れてしまひます。

これを五六度繰返して使つてゐるうちに次第に毛が薄色の弱いものとなり、遂に全く發生しなくなつてしまひます。「タキー」は又腋臭を除く效果があります。

皮膚に害はないかと云ふ問合せが澤山參りますが、一個毎に添附の説明書の通りに御使用下されば全く無害で、效果は一層確實です。

定價(マスクリーム附) 二圓二十錢

送料東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

オプチサナ

獨逸製品の偉力は世評の認める所ですが、特にこのオプチサナは、せきを止めるのに著しく效果があります。甘くておいしいので百日ぜきの子供も喜んでこれを呑み、一週間服用すればきゝめがあらはれ、殊にぜんそくのせき止めには喜ばれてゐます。

何所々から醫家の纏つた御注文がありましたが、今後十個以上纏つた御注文には、多少の割引をする事に致します。

定價 二圓

送料東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

理想的な

産兒調節藥

從來の樣に醫師の手を煩はさず絕對的信用のある「オクルサトル」は、用器と錠劑とに分れてゐて、之を組合せて使用するものです。

用器は永久に使用出來るもの、錠劑は一錠一週間有效のものですから、始めて使用される人は、用器と錠劑とをお求めになる必要があり、二回目からの御注文の時のために、別に錠劑だけが用意されてあります。

あれこれと使用して效を奏さなかつた人にも、之だけは十分滿足を得られると云はれてゐる「オクサトル」の效果をお試し下さい。

定價 (用器と錠劑十二錠) 六圓

(錠劑だけ十二錠) 二圓

送料東京市内十二錢 内地十八錢 領土四十五錢

痔の藥

ネオラヂオリン

慢性痔病にも急性痔病にも著しい效果を持つネオラヂオリンは實驗的なきゝめがあると萩原博士も推奬されてゐます。

定價(大)二圓 (小)一圓

送料東京市内十二錢内地十八錢 領土四十五錢

糖尿病特效藥

プデイン

病狀の進行を阻止するばかりでなく、奇妙に根本的に全治さすと云ふのが、他の糖尿病藥と異る點で「プデイン」の特長です。

定價十二圓

送料東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

御注意

◇振替は、一番安全な送金法ですが、普通近い所で四日かゝりますから、特にお急ぎには電替で書留に願ひます

◇御註文のお品が、お氣に召さぬ場合、代理部へのお希望、お問合せ等は、中央公論社代理部親切係へお申越を願ひます。

婦人公
結

結婚の憂鬱

4月特輯

期待されるスポーツ界女流花形……廣瀬謙三

ダンスホールに咲く毒の花……小林欣二

子のない妻の心遣ひ

◇夫の瞳の行方に……山中艶子

◇長田秀雄夫人を訪ふ……A記者

◇結婚反逆者の悩み……佐賀美津子

◇池田長康夫人と語る……B記者

えぷりるふーる

◇マネキンの犯罪

◇ドウ・イト・ナウ

◇ラブ・イン・アイドルネス

◇ネクタイ

早稲田大學評判記 **時代の曉鐘は鳴る**

澤田正二郎を憶ふ……竹田敏太郎 野村清一郎 大河内傳次郎

東京・大阪・京都 **春の近郊めぐり**

創作

花はくれなゐ……池谷信三郎

ある「郷愁」……佐々木茂索

木がくれの巣……小島政二郎

八百屋お七……眞山青果

價七十錢

東京・丸ビル七階
振替・東京三四番

中央公論社

春から初夏へ……

生殖器と腦の衛生

衰弱を歎く人も　旺盛を欲する人も！

春から初夏へ！

歡樂の裏には必ず哀傷が附物です、春の陽氣に浮かれて放逸に過した人の肉體にも今や生殖器と精力、腦神經の衰退の悩みが襲來しやうとしてゐます。統計に由つて見ても今頃が一番性の悩みの多い時です！　知らぬ間の衰退に氣をつけないと、あたら働盛りに早老の浮目を見なければなりません。

生殖機能は

人間活力の根本源泉であつて、生命感情の基調を成してゐます、從つて性能が旺盛であれは內分泌も豊富に、精力絶倫となつて人生永遠の春を味ふことが出來ますが、性慾が減退すれは、枯木も同然です、何の生甲斐、何の快樂がありませう？

自覺症狀を

性慾、神經、が衰退して內分泌が缺乏すると性の微妙を減殺し、早漏となり、不感となり無力、無精となつて遂には全くの不能狀態を來します、同時に老衰を招き、精力減退し、腦神經衰弱して、不眠症、健忘症、頭痛、頭重、頭內朦朧、視力錯亂、倦怠、根氣喪失、記憶力減退して、去勢された如く、人間萬事悲觀と絶望の種となります。

權威ある藥物

かかる症狀の一つでも自覺する人は迅かに權威ある藥物の力に依つて旺然たる復活を促さねはなりません、卽ちトツカピンの如き世界的著名藥を服用して着々復活と增進を計るのです、本劑は生殖腺內分泌の營養となり、血液を青春化し、性の機能を旺盛に、根本的健康と相俟つて、眞の精力を充實せしめ、健腦の糧となつて、いかなる慢性の神經衰弱をも擊退する現代文化の收穫である。

世界的好評！

強精強腦劑として、トツカピンは內地は勿論世界的好評を受け、本邦輸出藥中の第一流である。いかに本劑が効果に於て勝れ、近代人の渇望を滿したかを證して餘りがある。近來は健康男女の間に於て精力腦力の常備藥として大流行を極めてゐる、蓋しモダン青春の泉として、一種意外の効目を發揮するからであらう。

因にトツカピンは價格三円、五円、十円、廿円五円以上には金色さんらんたる携帶容器附です。全國藥店にあり、品切の節は本舖より直送する、本舖東京市麻布新堀町八　丁子屋藥房　振替東京七二二一番）大阪市[illegible]町一ノ三（振替大阪一〇六番）

芭蕉の『貝おほひ』

小宮豐隆

芭蕉の『貝おほひ』は「寛文十二年正月二十五日伊賀上野松尾氏宗房釣月軒にしてみづから序す」と結んだ、序文を持つてゐる。寛文十二年は、西暦にすれば千六百七十二年であり、通説によれば芭蕉二十九の年である。是は今日寫本によつてのみ傳はり、板本の存在は全然知られてゐないけれども、ある寫本に、「芝三田二丁目中野半兵衛同庄次郎開板」と三行に書いた奥附の寫しが添へられてゐるところから、元祿五年の阿誰軒の目錄には載つてゐないが、凡その序文が書かれた時分江戸（芭蕉は寛文十二年に江戸に出て來たといふ事になつてゐる）で出板されたと、一般に想像されてゐるものである。

序文に、「小六ついたる竹の杖、ふし〲多き小歌にすがり、あるははやりこと葉の、ひとくせあるを種とし、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、其かたはらにみづからが、みじかき筆のしんきばらしに、淸濁高下をしるして、三十番の發句あはせをおもひ太刀折紙の式作法もあるべけれど、我まま氣ままに書ちらしたれば、世に披露せんとにはあらず、名を貝おほひと言めるは、あはせて勝負をみる物なればなり」とある。また「又神樂の發句を卷軸におきぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、小うたにも予が心さす所の誠をてらし見給ふらん事をあふぎて、當所あまみつおほん神のみやしろの、たむけぐさとなしぬ」ともある。春の諸句に始まつて冬の神樂に終る、自分の句も二

句選入つてゐないではないが、大部分は他人の何から成り立つ三十番の、當時の小歌やはやり言葉を取り入れた發句に、芭蕉が一一優劣の判詞を書き副へたこの『貝おほひ』は、是によれば、一旦、芭蕉の鄕里の、伊賀の上野の天滿宮に奉納されたものの樣である。

無論芭蕉の俳諧生活は、既にそれよりも餘程前から始まつてゐた。然しそれまでの芭蕉は、いつでも、他人の撰集の中に自分の名前を列べてゐたに過ぎなかつた。芭蕉の名に於いて一冊の本が纒められ、書かれ、若しくは出板されたのは、この『貝おほひ』をもつて最初とする。その意味でこの『貝おほひ』は、芭蕉の處女作とも言つて可いものである。

凡ての處女作がさうである樣に、この『貝おほひ』も亦、芭蕉を研究する上に、可也重要な地位を占めるものである。殊に『貝おほひ』は、その序文を瞥見しても分かる樣に、隨分特異な世界を持つてゐる。さうしてその世界は、ある意味では、我々が芭蕉らしい芭蕉として考へる、後年の芭蕉の世界と、劇烈な對照を形づくるものである。從つてこの『貝おほひ』は普通の處女作が普通の藝術家の藝術生活を研究する上に重要な地位を占めるよりも、もつと複雜な意味で、芭蕉の藝術生活を研究する上に重要な地位を占める。なぜなら、例へば、一見後年の芭蕉の世界と劇烈な對照を形づくる『貝おほひ』の世界は、果して眞正な意味で、後年の芭蕉の世界と劇烈な對照を形づくるものであるかどうか。若しまた事實後年の芭蕉の世界と劇烈な對照を形づくるとすれば、その對照はどういふ點にあるか。また假令劇烈な對照を形づくるとしても、尚一方では、後年の芭蕉の世界を豫言するもの、少くとも後年の芭蕉の世界を組み立てれば組み立て得る樣なものが、既にその中の何所かに存在してゐるのではないか。さういふ問題が、此所では、それからそれへと討究される必要があるからである。殊に『貝おほひ』は、まだ芭蕉が、過去の傳統に囚はれ、時代の波に漂はされながら、言はば他人の言葉で他人の世界を表現してゐるに過ぎない樣な時分の作品である。此所では、自分の世界は他人の世界から押しのけら

れさうになり、他人の言葉は自分の言葉と絡み合ひ、何所から何所までが本質的なもので、何所からさきが偶然な二次的なものであるかを區別する事が、ひどく困難な狀態になつてゐる。從つて此所では問題が既に複雜である以上に、材料を揃へて問題にするまでの手續が、二重にも三重にも複雜になつて、問題の解決を餘計面倒なものにする様に思はれる。

是までのうちに、『貝おほひ』の意義の重大な事を力說し、『貝おほひ』の研究に隨分骨を折つた人も、なかつたでもなかつたが、この二重三重の複雜な手續を踏まないか、若しくは劇烈な對照として受とるだけで滿足するか、ともかくも、より複雜に取り扱ふべき問題を反つてより簡單に取り扱つた事によつて、十分の成績をあげる事が出來なかつた様である。――素より是は、非常に面倒な仕事である。到底一朝一夕に纏め得られる筈の仕事ではない。此所で私が書かうとする事も、從つて、その解決ではなくて、寧ろ問題の出し方、もつと適切に言へば、問題を解決するに必要な、見當のつけ方の、一つの見本であるに過ぎない。

『貝おほひ』を讀んでまづ氣がつく事は、判詞が、藝術的に出來てゐるといふ事である。勿論此所でいふ藝術的といふ言葉には、多大のハンデイキヤツプがついてゐる。もつと適切に言へば、我我がある程度調子を下ろして、當時流の頭になりさへすれば、この判詞は、讀んでいかにも面白い判詞だといふのである。例へば芭蕉はその第六番で、左「きやん伽羅の香ににほへかし犬櫻」右「見にゆかんとつと山家のやまざくら」を左勝と定めて「左の句、伽羅の香ににほへとは、一句もやさしく、手ざはりもなく〳〵と、むく犬の尾もしろき作意なるに、右の句、さのみ言葉のたくみも見えず、とつとやまがのいよ古狸とうたふ小歌なれば、秀逸物の犬櫻に、狸は喰ひふせられ侍らん」と書いてゐる。またその第二十五番では、左「しやうことがたまらぬものはみぞれかな」右「みぞれ酒元來水じやとおぼしめせ」を右勝と定めて「左の句、しやう事がたまらぬといはれしは、みぞれのふる句とも見えず、われも面白てたまらぬに／右は、元來水じやと云ふ小歌を

みぞれ酒に作られたるは、桶の底意深くいひ立てられ、樽のかゞみともなるべき句なれば、かんなべのふた目とも見ず、かちのかちとさだめぬ。されど判者もひとつ過て耳熱し、目もちろ〳〵りのみぞれ酒、のみこみちがひも有やせん。かやうにはほむるとも、さのみに勿體付さすな」と書いてゐる。判詞が此所では、ビジネス・ライクに句の優劣高下を區別する器としてのみ用ひられないで、それ自身に特別な、藝術的な味を持たされる。批評家はその批評を、批評家としてのみ書かないで、より多く作家として書くのである。

もつともこの形式は、芭蕉によつて始められた形式ではない。是は既に芭蕉の師季吟によつても、ずつと前に用ひられてゐる形式であり、また近くは寛文七年（一六六）の『淸十郎ついぜんやつこはいかい』の判者、定與によつても用ひられてゐる形式である。從つて芭蕉は、此所でその獨創を要求する權利は毛頭も持つてゐないのではあるが、然し芭蕉は、さういふ若しくはそれに似た形式を用ひて判詞を書いてゐる人達の群を拔いて、遙に藝術的な、換言すれば、遙に面白い判詞を書いてゐる、とは言ふ事が出來る。殊に此所では、判詞がそれ自身に獨立して藝術的な味を持つてゐるのみならず、一一の發句と一一の判詞との關係に於いても、また一一の發句を中に挾んだ一一の判詞の、全體としての纏まり方に於いても、一種特別な藝術的な味を持つてゐる、その點で芭蕉の句『貝おほひ』は、更に當時の群を拔いてゐると言つて差支ないものである。

是は、此所に選み上げられた發句が、凡て當時流行の小歌やはやり言葉を取り入れて居り、それに對する判詞がそれよりももつと濃厚に同じ樣な小歌やはやり言葉を取り入れて居り、然もそれらの小歌やはやり言葉はいづれも底に共通した雰圍氣を持つてゐる爲に、自然と全體の統一を形づくる事を助けたものであるには違ひないけれども、それにしても芭蕉に、少くともそれだけの雰圍氣を判詞に與へ得る能力――假令小歌やはやり言葉を繫げるだけの仕事しかしてゐないと假定しても、それらのものを適宜に繫げてある纏まつた意味の事を言ひ、且つ纏まつた感じを出すだけの能力を假定するの

でなければ、是は到底可能になる筈の仕事ではない。例へば定興寺の『やつこはいかい』である。是は、當時流行の奴言葉を取り入れて、當時評判であつたお夏清十郎の戀物語を背景に使つて詠んだ獨吟の百韻に、定興が同じく奴言葉を使つて評を書いたものである。その小歌やはやり言葉を全體の氣分の上の背骨の様なものにしてゐる『貝おほひ』と、全然構成を同じくするものと言つて可い。然も讀者が受とる感じから言へば、『貝おほひ』全體の締まりに對して、『やつこはいかい』は、その半分も締まつた感じを與へる事が出來ない。それはひどく煩雜で、寧ろばらばらなものである。

例へば『貝おほひ』の判詞には、一定のリズムがある。それが特に多量に小歌やはやり言葉を自分の中に取り入れてゐる所から、そのリヅムは、一方では在來の七五調を主調とするリヅムとして流れながら、一方では小歌やはやり言葉のリヅムに可也に影響される。それら二つのものが相互に離合錯綜し、一種特別なリヅムとなつて、發句のリヅムと對應し、さうして發句とともに『貝おほひ』全體としての特別なリヅムを作り上げる。然るに『やつこはいかい』の判詞には、一定のリヅムがない。何かしらリヅムが流れてゐる場合でも、判詞と句との關係が散文的で、兩者の間の氣分の上の照應としての、特別な味のある言葉が、そのリヅムに乘つて動き出て來ない。從つて、獨吟百韻のリヅムとして獨立し、リヅムのない判詞はリヅムのない判詞で獨立し、ただ單に奴言葉を使つたといふ、外面的な點に於いてのみしか、双方共通するものを持つ事が出來ないのである。——一一の發句と一一の判詞との關係や、さういふものを繋げ合せた全體などを抽象的に考へてゐると、『貝おほひ』は私には、それぞれの發句を小さな模様として中に鏤めた、大きな一つの織物、例へばブーシエーの下畫かなぞになるゴブラン織か何かに、何所か通ふ所のある織物の様なものとして眼の前に浮かんで來る。

『貝おほひ』と『やつこはいかい』とを分つものは、單に其處にリヅムがあるかないか、一の問題だけではない。もつと二

つのものをはつきり區別するものは、才氣の有無である。勿論この才氣といふ言葉も、ある程度のハンディキヤップを附けたものとして理解されなければならない。卽ち此處では、さしあたり、洒落の連發に現はれる樣な、機智縱橫の意味に於いての才氣である。

『やつこはいかい』の百韻の發句は「若竹だ世に嘲歌や淸十郎ふし」といふ句である。是に定興は「鬼のちめ玉にも泪とはよくゆつた。もさやつこの口でやさしくも、俳諧を淸十郎が年も若竹の、世の歌のふしに云かけ、かれが妻夫のなれのはてを、事あはれにもとふらふ百ゐんの卷がしらを、がいにおもしらふ、いけぎもにひつちみて、棒を二本ひんなぐり申た」といふ判詞を書いてゐる。此所にも例へば「俳諧を淸十郎」とか「年も若竹の世の歌のふし」とか、幾つかの掛言葉が使はれ、ちめ玉とかがいにとかいけぎもにひつちみてとか、棒とかひんなぐり申たとか、多くの奴言葉も使はれてゐるにはゐるけれども、然もそれらのものはいづれも、ふやけきつてだらしがなく光彩がなく、非力な者がよろよろしながら得意になつて力持をしてでもゐる樣な、はたの者は妙に悲慘な滑稽な、甚だそぐはない心持になる事を遏め得ない種類のものにしかなつてゐない。是は定興に、洒落のめしたい要求はあつても、「本當に洒落のめして、人をあつと言はせるに足るだけの、十分な才氣がないからであるに違ひない。然るに『貝おほひ』に於ける芭蕉の判詞では、前にあげた例を見ても分かる樣に、あとからあとからと湧き出て來る噴水の樣な、滾滾として盡きない、さうして潑剌として新鮮な機智が、到る所にその閃きを見せて、全體にひどく引締つた感じを與へてゐる。「手ざはりもむくむくと、むく犬の尾もしろき」といふ掛言葉にも、單なる掛言葉以上に、ある實感もあれば、その實感から概念に移る經路もあり、その上、發句に卽きながら發句に離れ、それと不卽不離に照應する味もある。殊に卒然として「とつとやまがのいよ古狸」といふ小歌の句を引用して人を驚かすと思へば、再び卒然として「秀逸物の犬櫻に狸は喰ひふせられ侍らん」と言つて、思ひもかけない方面から、發句の優劣を片づける言葉を導いて來る所など、いかにもよく當時の芭蕉の、潑剌たる才氣を示してゐるものであ

る。「樋の底意深くいひ立てられ、樽のかゞみともなるべき句なれば、かんなべのふた目とも見ず」といふ様な掛言葉でも、一つ一つ取り離せば、さして斬新な掛言葉ではないけれども、是がかういふ風に並て続けにぞろぞろと列べられ、然もそのぞろぞろと列んだものが、それぞれに相互の間で或關係を持つとともに、それぞれがまた發句に或照應を持つ様に仕立て上げられる場合我我は、ある馬鹿馬鹿しさを感じないではないが、それでも尚作者の才氣の縱横なるに、あきれもするのである。——一口に言へば、芭蕉はその點で頭が可い。『やつこはいかい』の定興は頭が惡い。洒落にも呼吸が入る。また引き上げ時が大事である。芭蕉には、その呼吸も、またその引き上げ時も、凡て分かつてゐたものの様に見える。然し定興には、それが少しも分かつてゐないのである。

然もこの意味に於ける芭蕉の頭のよさは、單に定興の判詞との比較に於いてのみ明らかになるのではない。外の當時の誰彼の判詞との比較に於いても、我我はそれを十分明白に見てとる事が出來るのである。『淀川』の貞徳や『俳諧之註』の重頼やは一先問題にならないとし、例へば『大坂獨吟集』の宗因や『六百番俳諧發句合』の季吟や任口と比較するとしても、芭蕉の判詞は、その頭の可い事に於いて、嶄然頭角を抜いてゐるのである。

洒落のめす心を最も根本的なものに還元すれば、それは畢竟、餘裕のある心であるに外ならない。心に餘裕がなければ、洒落は決して出て來ない。對象に注意を奪はれ、對象の渦卷の中に身體を捲き込まれてゐるうちは、洒落の出て來ようがない。若しくは洒落を言つても、それが洒落として通用しない。洒落を言ひながら、その呼吸を知らず又その引き上げ時を知らないのは、餘裕のある心から洒落を生み出しながら、いつのまにかその洒落の爲に、今までの心の餘裕を奪はれて了ふからである。その點で芭蕉は、いつでもその餘裕を、とり亂す事がなかつた様に見える。いくら洒落を言つても、洒落を言ふ事その事のために、心の餘裕を失つて、人にうるさく田舍臭く未熟者に感じさせる所がない。何所までも

洒洒落落たるものである。この點『六百番俳諧發句合』の作は上人に似て、然も作は上人を凌駕するものがある。然も芭蕉は、その洒洒落落たる感じによつて『貝おほひ』の判詞全體を、柔らかく暖かく調和的なものに纏め上げてゐるのである。

芭蕉は此所で、それぞれの發句が表現してゐる世界の中に這入つて、それぞれの中にある良いものを見てやらうとしてゐる。その感情移入（アインフユールング）がどういふ方向に又どの程度に行はれてゐるかは問題であるとしても、ともかくも、芭蕉にさういふ意志があり、又それ相應の實行があつた事だけは、爭はれない。もつとも何等かの意味でそれがない限り、人から判者としての資格を認められる筈もないのであるが、洒落を生む心の餘裕は、同時に他人の發句の世界を細かに丁寧に眺める心の餘裕でもあつて、芭蕉の判詞は、短かいけれども親切なものである。もつとも其所から若干の洒落を、最も適切に引き出して來ようとすればするほど、勢ひ其所の世界の中に深く這入つて行く必要もあつたのかも知れないが、然し私は、芭蕉は洒落を言ふ爲に親切な見方をしたものではなく、親切な見方をした結果の報告を洒落で述べてゐるものと考へる。例へば前掲第二十五番の「左の句、しやら事がたまらぬといはれしは、みぞれのふる句とも見えず、われも面白てたまらぬに」といふ言葉でも、また第八番の左・「うたへるや晩鐘寺ぶしの暮の花」右「種ならばまかせておけろ花ばたけ」を左勝とした判詞の中の「右の句、花の種をまかせが定なら、といて口說（クゼイ）てかたりて聞せ侍らん種をまかる〻花すきの心も優にきこゆれど、浮世五十年、一寸もまだのびぬ花の枝、咲までの間遠なれば、先づ目の前のけふの花見こそたふとけれ。仍左を爲勝」といふ言葉でもまた第十三番の左「蚊やり火にわれも木賣が娘かな」右「ふすべられたはん半夜の蚊遣りかな」を右勝とした判詞の中の「左の句、木賣が娘とは、ふすべられたよといふをのこしたるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のものとも見えねど」といふ言葉でも、負けたものへの會釋として解釋する事も出來なくはないけれども、假にそれが會釋の言葉であるとしても、ともかくも作者が覘ひ若しくは骨折つた所を、判者が十分見てやつた――そ

の作品の中に判者が感情を移入してその世界の情感を十分精しく眺めてやつた上で、尙負と判定しなければならなかつたのだといふ意味でのみ、會釋になつてゐる筈の言葉である。即ち此所では、若しそれが會釋になつてゐるとしても、恰もその會釋になつてゐるといふ事その事が芭蕉が作者の發句の世界に這入つて、その良い所を十分に見てやつたといふ事を證明する事になるのである。

もつとも芭蕉は判詞の中で負けた者に對しても、會釋を與へてゐる樣である。然しそれには多く違つた方法が用ひられる。さうしてこの事は、芭蕉の感情移入が、單に發句の世界に對してのみ行はれるに止まらず、勝負に負けたものの心持に對しても亦行はれる、その意味で芭蕉の柔しい暖かな心遣ひを證明するものである樣に、私には思はれる。例へば、第二十五番の判詞の如きは、その一例である。芭蕉は此所で右の句をさんざ褒めちぎつて、最後に「かちのかちとさだめぬ」と斷定した。然しそれではあまりに、左の負けた作者に可哀想である。其所で芭蕉は、すぐ筆を續けて「されど判者もひとつ過て耳熱し、目もちろくりのみぞれ酒、のみこみちがひも有やせん。かやうにはほむるとも、さのみに勿體付さすな」と書いて、自分の批評にも十分間違ひがあり得るといふ事を冗談まじりに言ひながら、勝つた者が可い氣になる事を戒めた。然し是は、勿論褒めちぎられた者を戒めたものであるには相違ないが、それとともに、寧ろそれを超えて、自分の褒めちぎつた事が負けた方の作者に、餘りに鋭く響く事を防ぐ、特殊な機能を持たされて、生れて來たものである。また例へば第二番で、左「紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ」右「兄分に梅をたのむや兒さくら」を左勝として「左の赤いこんぶくろは、大阪にはやる丸のすげ笠とうたふ小歌なればなるべし。右、梅を兄分にたのむ兒櫻は、尤たのもしき氣ざしにて侍れども、打まかせては梅の發句と聞えず、兒さくらの發句と聞え侍るは、今こそあれ、われもむかしは衆道ずきの、ひが耳にや。とかく左のこん袋は、趣向もよき分別袋と見えたれば、右の衆道のうはき沙汰は、先おもひとまり

て、左をもつて爲勝」と書いた判詞の如きも、その一例である。芭蕉の言ふ樣に、右の句は、句の仕立方の上から言つて、兒櫻の句であつて、梅の句ではない。然も此所で要求されてゐるのは、梅の句であつて、櫻の句ではなかつた。それを單刀直入、芭蕉は判詞で「打まかせては、梅の發句と聞えず、兒ざくらの發句と聞え侍……」と批難する。然し芭蕉は、その批難が餘りに露骨に相手に肉薄する事を虞れて、「……聞え侍るは、今こそあれ、われもむかしは衆道ずきの、ひが耳にや」とすぐ續けた。衆道は無論兒櫻の兒の緣語である。それが芭蕉の頭の中で「今こそあれわれも昔は男山」の古今集の歌と結びついて、其所に、當時としては恐らく巧妙を極めた、一つの洒落が出來あがつた。芭蕉は、自分の批評眼を卑下する內容を持つたその洒落を、單刀直入的な批難にすぐ續ける事によつて、相手の痛手に膏油を塗つてやるのである。また第十六番で、左「月の舟や今宵はどこがおとまりじや」右「月の雲間よひ〳〵なんど出つ入つ」を左勝として「右の句、播磨の國の書寫むしや寺がおとまりなれば、御法の船にうたがひなく、月の光をはなつこと、光明遍照十方世界のまん中とは、此發句をや申べき。右もまた、よい〳〵なんどとをどるうちこそ佛なれとうたふゆゑにや。句作殊勝に侍りて、有がたき作意なれど、地ごく踊の小歌なれば、精靈のおばどを祭る盆の折から、かりにも鬼の沙汰をきらひて、にくさげなるつらつき、抹香くさく皺面つくり批判して、以左爲勝」と書いた判詞の如きも、その一例である。此所で芭蕉は、第六番の場合と同じ樣に、發句が取り入れた小歌に因緣をつけて、洒落の種にしながら、「にくさげなるつらつき、抹香くさく皺面つくり」强ひて右を負と定めるといふ樣な事を言つて、同じく負けた方の作者の心持を、十分にいたはつて、やるのである。

芭蕉は『貝おほひ』發句の中に、自分の發句を二句出してゐる。さうして二句ともに必ず右に置いて、また必ず相手の、左の句を勝と定めてゐる。是は歌合以來一つの型の樣なものになつてゐて、別に問題にするにも當らない。と言ふ人

がないとも限らない。然し私は、此所にも芭蕉の、自分をも正しく眺める事の出來る、我を立てる所のない、この意味で調和的な心持を見てとる事が出來る樣に思ふ。

芭蕉の句の一つは花の句で、『貝おほひ』の第九番に列べられる。「きても見よ甚べが羽折花ごろも」といふ句がこれである。さうして「鎌できる音やちよい／＼花の枝」といふ句が、その左に番はれる。芭蕉は判詞で「左、花の枝をちよい／＼とほめたる作意は、誠に俳諧の親／＼ともいはまほしきに、右の甚べう衛が羽折は、きて見て我をりやといふ心なれど、一句の仕立もわろく、染出すこと葉の色も、よろしからずみゆるは、愚意の手づゝとも申べし。其上左の鎌のはがねも堅さうなれば、甚べがあたまもあぶなくて、まけに定侍りき」と言つてゐる。今一つは鹿の句で、第二十番に列べられる。「女夫鹿や毛に毛がそうふて毛むづかし」といふのが、それである。さうして「鹿をしもうたばや小野が手鐵炮」といふ句が、その左に番はれる。芭蕉は判詞で「左の發句、小野といふより鹿とつゞけられ侍るは、彼の紫のしなもの、ひかるお源の物語りにも、小野に鹿のけしきを書つらね侍しより、尤能とりあはされたるなるべし、其上おのがてつぱうといふを、とりなされたる鐵炮の寸の口かしこく打出されたる玉の句ともいふべければ、火なわのひごんを打べきやうもなし、／右の女夫鹿、委しく論ぜんも毛むづかしければ、あぶなきつゝ先、あし早に逃のき侍りぬ」と言つてゐる。

發句は四つながら、今日の眼から見れば、まつたく他愛のないものである。然し、假に當時の眼になつて眺めて見ても、芭蕉の句は二句ともに、これほど秀でた所がある句とも思はれない。一つは「きても見よ」にからくりがあり、一つは「毛むづかし」のからくりだけの爲に全體が存在してゐる樣な、寧ろ働きのない、まづい句であり、又これほどに才氣走つた判詞の書ける者が、どうして又こんな句を作るのかと思はれる程、これほどスチユーピツドな句である。これに比べれば、これこれに組み合された相手の句は、小歌やはやり言葉の取り入れ方や縁語の組み合せ方などに、ともかくも働きがあつて、より多くその腕を見せてゐる。芭蕉が、自分の句を貶して、相手の句を揚げてゐるのは、從つて、在來

の型に從ふ意味もあつたのかも知れないが、然し實はこれは、はたの者から見ても、公平な判斷だつたのである。然も芭蕉の自句に對する判斷の公平は、單に此所だけに踏み止まつてはゐない。芭蕉は、「きても見よ」の句の爲には、いくらかの辯を費すが、「女夫鹿」の方では、無條件に「あし早に逃の」く。それは「女夫鹿」の句よりも「きても見よ」の句の方に、はたの者から見ても、まだいくらか働きもあれば味もあるからである。然も芭蕉は、この「きても見よ」の句をさへ、最後には「愚意の手づゝとも申べし」と評し去つた「愚意の手づゝ」といふ言葉は、一口に言へば、スチユーピツドであるといふ事を意味するものに外ならない。即ち芭蕉は自分の句を、はたの者が感じると同じ樣に、スチユーピツドなものとして感じてゐるのである。さうしてその點で、相手の句を揚げ、自分の句を貶してゐるのである。

今日の我我から見れば、假令當時の心持になつて見たとしても、例へば第二十番の左の樣な句に、あれほどの辯を費すのは、可也馬鹿氣た事である樣にも思はれる。然し、芭蕉には他人のものの良い所がよく分かるといふ事、然も自分のものの惡い所もよく分かるといふ事を勘定に入れれば、さうして、自分の句をまづく感じれば感じるだけ相手の句が一層よく見える樣になるといふ心理から、此所にこれほどの辯が費やされたものに違ひないと想像すれば、是は馬鹿馬鹿しいといふよりも、芭蕉のさういふ特別な心理の現はれとして、寧ろ興味の深い辯であるとも見做す事が出來る樣である。

元來才氣の煥發する人にとつては、さうして洒落づくめに洒落が出て來るほど心に餘裕のある人にとつては、他人が馬鹿に見えてしやうがない筈である。さういふ人が我が強く生れつくと、自分の優越を誇りたい爲めに、とかく他人を刻する樣な態度をとり易い。殊に判者となつて他人の句の優劣高下を定めるといふ樣な、言はば優越の地位に立たされる場合、さういふ人は、特に他人を刻しないまでも、二重の優越の意識から、自分の判斷を人に押しつける樣な、ヴルガーな態度に誘はれ勝である事を常とする。然し芭蕉の『貝おほひ』に於ける態度は、既に自分の句を「愚意の手づゝ」と言つてゐ

るのを見ても分かる様に、極めて謙虚で、如何なる點に於いても押しつけがましい所がなく、こつ意味でグルだした所を、少しも持つてゐない。梅の句を詠むべき場所で櫻の句になつてゐる様な句を詠んだ男に對してさへ、芭蕉は、まづそれを咎めたあとで、「今こそあれ、われもむかしは衆道ずきの、ひが耳にや」とさへ言つてゐるのである。又例へば第二十二番の、左「とりやげばゞが右の手なりの紅葉かな」右「もみぢぬと來て見よかしの枝の露」を、芭蕉は左勝と定めて、その判詞で「左の句、紅葉のきめうの作意也。／右の句、よくいひかなへられ侍れども、もみぢぬかしを好まるゝは、異風なる物ずきにて、色にふけらぬ人なるべし。左の婆々が右の手のあかくなるは、いかさま戀をすきもの丶、言葉の品も大むすこと、雲泥萬里のたがひあれば、かゝるめで度折ふしを、來てみよかしの木刀ならば、一本かたげて、のがれ候へ」と言つてゐる。紅葉の句を詠むべき場所で、紅葉しない樫の木の枝の露を詠むといふのも、梅の句の場所で櫻の句を詠むのと、殆んど變る所がない不調法である。然し芭蕉は、此所でも、それを決して、威丈高になつては咎めない。「よくいひかなへられ侍れども、もみぢぬかしを好まるゝは、異風なる物ずきにて、色にふけらぬ人なるべし」と言つて、洒落に包んで柔らかにその點を指摘し、「よくいひかなへられ」てはゐるが、然し此所では採る事が出來ない所以のものを説明するのである。また例へば第二十九番の、左「掃除して瓢箪たゝきや炭ぼこり」右「炭燒やおのが先祖はよくしつた」を、芭蕉は左勝と定めて、その判詞で「左、炭とりべうたんをたゝきて掃除したるは、手もまめなる處あらはれて、きれい成發句也。右は、野郎ざぶとく出申な、おのが先祖はよく知つたといふと、小野炭に取なされたる事、尤炭頭をかたぶけてかんじ入侍れども、先祖をよくしられん事わきまへがたくて、只左のへうたんのかる口にまかせて勝と定めたるは、をかしき判とゆふがほの、ひよんな事にやあらんかし」と言つてゐる。實際、ある意味から言へば、右の句の方が面白い所を持つてゐるのである。然し芭蕉が言ふ様に、此所で「おのが先祖をよくしつた」といふ事は、小野といふ地名で炭燒と繋がるものを持つてゐるだけで、二つのものの間には外に何等の連絡がない。従つて是は、一句として理の立たない句であ

る。芭蕉はその事を指摘する。然し芭蕉は、それとともに「只左のへうたんのかる口にまかせたるは、をかしき判とゆふがほの、ひよんな事にやあらんかし」といふ言葉を添へて、自分の批評が絶對のものではあり得ない、人から見たら或は笑ふべきであるかも知れないといふ事を、相手に納得させようと試みるのである。

人或は是を、洒席の洒落かなぞと同じ様に、單なる洒落に過ぎない、從つて此所では、洒落の種がある限りは洒落れるが、種がなくなれば默つてゐる、その意味で例へば第二十九番の判詞の樣なものは、洒落の種があつたから書き添えたまでで、其所からそんな意味を探り出して來るのは、寧ろ餘計な事であると言ふかも知れない。

然し注意を要する事は、此所では芭蕉には、句の優劣を定めるといふ一つの義務が、洒落を言ふ前から、ちやんと課せられてゐるといふ事である。從つて芭蕉は、いくら洒落を言つても構はない、又洒落を言ひながらいくら浮かれても構はないけれども、然しその洒落は凡て、その初めから課せられてゐる一つの義務を廻つて、生れ伸び動き出でべき條件の下に置かれる。その條件を充たさない洒落は、此所では、洒落として通用する事は許されても、判詞として通用する事は許されない。然もこの『貝おほひ』は、芭蕉自身によつて芭蕉の郷里の天滿宮に奉納されたものである。のみならず芭蕉はその序文で「小うたにも予が心さす所の誠をてらし見給ふらん事をあふぎて」と書いてさへもゐるのである。此所で、いくら小歌が出て來ても、又いくらはやり言葉が出て來ても、又いくら洒落のめしてゐても巫山戯ちらしてゐても、天滿宮に奉納するといふ事を一つの惡巫山戯と曲解しない限り、その奥の方には、必ず何か眞面目なものが動いてゐる筈だと考へるのは、極めて當然の事でなければならない。從つて、其所に列べられてゐる發句や、また其所に書かれてゐる判詞が、假令今日の眼から見て如何に價値のないものであらうとも、少くとも當時は、作者は作者相應に眞面目に骨を折つて發句を作り、判者は判者相應に眞面目に骨を折つてその優劣高下を辨別し又判者相應に眞面目に骨を折つてその判詞を書

いてゐる筈だと考へるのも、亦極めて當然の事である。事實、發句の價値を辨別する當時の標準を頭の中に置いて、一一の發句を眺めた後に、芭蕉の判詞の内容を點檢して見ても、それを表現する言葉は兎も角もとして、芭蕉はその要點を決して把握し損なつてはゐない。芭蕉は發句の價値の識別活動に於いては、可也眞面目で眞劍であつたのである。

此所では發句が既に小うたやはやり言葉を十分に取り入れてゐる以上、芭蕉は、判詞にもそれらのものを、取り入れ、從つて又洒落を用ゐなければならない樣に、初めから自然と規定されてゐたとも言へる。然し芭蕉は、その自然の規定を十分に利用して、自分の言ひたい事を、自分の言ひたい樣に言つてゐるのである。その點芭蕉は、ある與へられた形式を自在に驅使する事の出來る、大力者だと言つて可い。

『貝おほひ』の判詞に於ける芭蕉の態度の眞面目さを濁すと見做されるものに、其所に最も濃厚に漲ぎる遊蕩的な氣分がある。この遊蕩氣分とかの眞面目とは竟に兩立し難い樣に見える。然も、是までの『貝おほひ』研究者を、まづ辟易させたものも亦、この遊蕩的氣分である。今日では『貝おほひ』は、寧ろその爲めにのみ有名であり、或者は此所から、實際生活に於ける芭蕉の衆道沙汰を憶測しようとし、或者は此所から、實際生活に於ける芭蕉の女道樂を想像しようとさへもしてゐる。然し、事實、此所の遊蕩的な氣分と眞面目さとは兩立し得ないものであるか。さうしてその遊蕩氣分とは、一體どういふものをさすのであるか。

芭蕉は第二番の判詞で「今こそあれわれもむかしは衆道ずきの」と言つてゐる。第八番（左「うたへるや晩鐘寺ぶしの暮の花」右「種ならばまかせておけろ花ばたけ」の判詞では「浮世五十年、一寸もまだのびぬ花の枝、咲までの間遠なれば、先づ目の前の晩鐘寺の、けふの花見こそたふとけれ」と言つてゐる。第十番（左「鳴さわげにほんつゝみの無常鳥右「ゆかしきや山の尾常はなきやるもの」）の判詞では「右の句は、空なきさうなおつねの顏も、ずんどいやな氣なれ

も、左にひつぴけうんのめとうたふ小歌なれば、お常のしやくも捨がたくて、いづれのかちまけをもえさだめ侍らぬは、心きたなき判者なめり」と言つてゐる。第十七番（左「ちよいと乘たがるやたれも駒むかへ」右「むかふ駒の足もはぬるやひんこひん」）の判詞では「左、伊勢のお玉はあぶみかくらかといへる歌なれば、たれも乘たがるはことはりなるべし。／右、ひんこひんとはねまはるは、誠にあら馬と見え侍れども、人くらひ馬にもあひ口とかやにて、右の馬におもひ付侍る。左りのたれものりたがる馬は、ちとかんよわのうち氣ものとしられ侍れば、ふみ馬御免のあしもとをば、はや〳〵引てのがれ候へかし」と言つてゐる。第十八番（左「ほの上も大たばに出よ稻の束」右「かぶけるは稻のほのじぞ京女郎」）の判詞では「又右の京女郎に、ほのじはたれもすきくはの、かね〳〵のぞむ事なれど、稻のとのを持たれば、我妻ならぬつま成と、まづ此戀はさしおくて、田のひつぢばえは其まゝにて、左を勝とさだめ田」と言つてゐる。第十九番（左「鼻息もむせてのむ新酒かな」右「溫のめとあたゝめかゆる新酒かな」）の判詞では「右の句、溫のめと云ふこと葉を、下にてあたゝめかゆるとことわられし事、風味のよきはさらにて、實あすをもしらぬ身なれば、よき亭主ぶりもうれしくて、いづれの勝まけをも、えさだめ侍らぬは、判者とひとつ成口にや」と言つてゐる。第二十番の判詞では「左の發句、小野といふより鹿とつゞけられ侍るは、彼の紫のしなもの、ひかるお源の物語りにも、小野に鹿のけしきを書つらね侍しより」と言つてゐる。第二十三番（左「しつぽとやぬれかけ道者北時雨」右「しぐるおとやさつさやりたし簑と笠」）の判詞では「左のぬれかけ道者は、ぽつとり者のしなもの、袖にしぐれの通りものとや申さん。／右の句、さつさやりたしなんしゆんさまとうたへば、あつたものぢやないはさてといはまほしけれど、とてもぬれよならなまなかしぐれはいやよ、君がなみだの雨にしつぽとぬれかけ道者を、例のかちとや定めむ」と言つてゐる。――これらの言葉は、まさしく、浮ついた、お調子に乘つた、下品な、汚ごれた、肉の臭ひと酒の臭ひと汗の臭ひとの高い、野郎や傾城の評判記の中にでもありさうな言葉である。從つて此所から、芭蕉の實際生活に於ける遊蕩を揣摩しようとする者が出て來るのも、無理は

ないとも思はれる。

芭蕉もまた人間である——殊に所謂元祿期の人間である以上、その一生のうちには、案外沙汰も或はあつたかも知れない。また、女道樂をしたかつたとも、決して保し難いであらう。然しそれを肯定すべき材料を、この『貝おほひ』から取り出さうとするのは、凡そ、詩と事實との關係のし方を辨へない、想像の世界とを混同する、短見と早計とを表白する所以であつて、炯眼でも熟察でもなんでもないのである。なぜなら『貝おほひ』は、特別な藝術のうちの、また特別な藝術であり、芭蕉は又、特別な頭のうちの、また特別な頭の所有者であるからである。

「俳諧は、面白事ある時、興に乘じていひ出し、人をもよろこばしめ、我もたのしむ道なれば、おさまれる世のこゑとは是をいふべき也」とは、貞德がその『御傘』の序の冒頭に述べてゐる所である。貞德にとつて俳諧は、「利口のみにたはむれ」る事であつて、誠を吐露する爲の器となるものではなかつた。然も『貝おほひ』が生れた時代は、俳諧の歴史から言つて、素より芭蕉の正風はまだ現はれる筈の時代ではなく、その正風の一つ前の、宗因によつて創められる談林さへ、やつと眼鼻がついたかつかないかの、際どい時代である。從つて當時の芭蕉によつて理會されてゐる俳諧は、正風の意味ででも談林の意味ででもなく、勿論その師季吟から傳承した、貞德の意味での俳諧でなければならない。即ち當時の芭蕉にとつて俳諧は、後の土芳がその『しろさうし』に定家の言葉としてあげてゐる樣た、「俳諧と云は……利口也物をあさむきたる心なるべし心なきものに心を付物いはぬものに物いはせ利口したる體也」であるに過ぎなかつたのである。

然も『貝おほひ』は、前にも言つた樣に、特に小歌やはやり言葉を中に取り入れた發句ばかりを集めて、それに、同じ樣な小歌やはやり言葉を、もつと澤山に取り入れた、判詞を書き副へたものである。小歌やはやり言葉（此所では主として奴言葉）は遊廓や劇場を中心とし、若しくは背景として生れる。從つて小歌やはやり言葉は、それ自身の中に、多量の遊蕩的な氣分を含んでゐるものである。今芭蕉が、それらのものを中に取り入れた發句を、それらのものを中に取り入れ

た、然もそれらのリヅムから特に影響を受けて特別なリヅムを持たされた言葉で、その判詞を書くとすれば、芭蕉の頭にさういふ氣分の中にも這入れる感染能力がある限り、實際はさういふ生活はしてゐなくても、遊蕩的な氣分は、獨りでに十分に出て來る筈である。是は、例へば、役者が顏を白く塗り立てゝ着物をぞろりと着さへすれば、大抵は色男の様なものに見えるにも等しい。

芭蕉の頭が鋭敏な感染能力を持つてゐたかどうかは、遽にきめる譯に行かない問題であるかも知れない。然し、どの發句の世界の中にも一應は這入り、假令當時の芭蕉流ではあるとしても、その世界の良い所を兎も角も見てゐるといふ事實や、發句の勝負をきめるのに威丈高にならないのみか、負けた者をいたはる爲には、ある意味で自分が損をする様な事を言つても平氣でゐるといふ様な事實は、そのままではないまでも、既に芭蕉の頭のその、鋭敏な感染能力を證明するものの様に、私には思はれる。殊にその、遊蕩氣分が最も濃厚に出てゐるものとされ、從つてそれを證據に實際生活に於ける遊蕩生活が揣摩されるを常とする、八箇所の判詞の内容を仔細に點檢して見ると特にその感を深くする様である。

第二番の「今こそあれわれも昔は衆道ずきの」は、既に前にも觸れた様に、負けた者への會釋としての洒落と解すべきものであつて、是を直ちに芭蕉の自己告白と見做すのは、少少早計であるから、問題にしない。第九番の「浮世五十年」といひ、第十九番の「實あすをもしらぬ身」といふ言葉は、それだから樂しめる間に樂しんで置くが得だといふ様な、現世的な享樂的な心持を表現してゐる意味で、問題にならない事はないけれども、然しこれらの言葉は、言はば當時の常套語であり、從つてそれあるが爲に芭蕉の遊蕩生活が示唆され得るといふ程の、個性的な言葉ではない。第二十番の「彼の業のしなもの、ひかるお源の物語」といへども、源氏物語といふ事をパロディ式に世話に洒落崩したに過ぎないものであつて、是は貞徳が佐保姫に小便をさせる様な句を詠んでゐると同じ意味で、當時の所謂俳諧手段とも見らるべきものである。勿論此所では、その洒落崩す崩し方の上に、貞徳とは違つた、特別な臭ひがある事は爭はれない。然し、その

特別な臭ひといへども、これは第九番や第十九番の場合と同じ様に、寧ろ時代の臭ひであつて、芭蕉その人の實際生活を思はせるに足るほどの、特別な個性的な臭ひではない。第十番の「お常のしやくも捨がたくて」も同樣である。是は前に「ひつぴけうんのめとうたふ小歌なれば」といふ言葉がある爲に、「お常のしやくも捨がたくて」といふ言葉の中の遊蕩的氣分が一層濃厚になるのであるが、然もその「ひつぴけうんのめ」といふ小歌は、「鳴さわげにほんづつみの無常鳥」といふ發句が中に取り入れてゐる小歌であるに過ぎない。芭蕉が自分から、發句を離れて持ち出したものでもなんでもないのである。第十七番の「たれも乘たがるはことわりなるべし」は、發句の「ちよいと乘たがるやたれも駒むかへ」から引き出された言葉である。然も芭蕉は此所で「たれも乘たがるはことわりなるべし」と言つてはゐるが、その爲めにその發句を勝たせてはゐない。反對に「左りのたれものりたがる馬は、ちとかんよわのうち氣ものとしられ侍れば」と言つて、伊勢のお玉に事よせて、その發句の弱點を指摘してゐる。若し芭蕉に、人人が想像する樣に、實際生活そのものが此所へ溢れ出るほどの濃厚な遊蕩氣分があつて、眞面目なものは少しもなかつたとするならば、さういふ世界の濃厚な連想を豫想するこの發句を、芭蕉は當然勝とした筈である。少くとも是を「ちとかんよわのうち氣もの」といふ樣な言葉で、批難し得なかつた筈でなければならない。芭蕉は、相手の世界が持つてゐる氣分に、銳敏に感染はする。然し芭蕉は、そのために、その優劣高下を、假令當時の芭蕉流ではあつても、確と認識する事を忘れてはゐない。第十八番の「京女郎に、ほのじはたれもすきくわの」でもさうである。「京女郎にほのじの」などといふ言葉は、何も別に、芭蕉から言ひ出した言葉ではない。「かぶけるは稍のほのじぞ京女腐」と、發句に既に言つてある言葉である。此所の芭蕉は、發句で與へられた一つのテーマを、一方ではその發句の批評を書きながら、自分自身のヴリアチオーンに展開させた、作曲家の樣なものであるに過ぎない。第二十三番の「ぽつとり者のしなものの……」も亦さうである。左が既に「しつぽとやぬれかけ道者北時雨」といふ、特別な言葉と特別な世界とを持つてゐる發句である。右の發句でも「しぐるおとやさつさやりたし袋と

笠」であつて、中七に特別な言葉が用ひられ、從つてまた其處から全體の上に、ある色めかしい光を投げかける樣に出來てゐる發句である。それらの世界の空氣に感染する限り、それらの發句の判詞は、當然色めかしく艶めかしく粹めかしく一口に言へば、濃厚に遊蕩的な氣分が漲らなければならない。事實芭蕉は、「ぽつとり者のしなものの、袖にしぐれの通りもの」とか「さつさやりたしなんしゆんさま」とか「あつたものぢやないはさて」とか「とてもぬれよならなまなかしぐれはいやよ、君がなみだの雨にしつぽとぬれかけ道者」とか、それらの發句の持つてゐる世界の氣分に相應はしい言葉をいくつも集めて來て、その判詞を書いてゐるのである。

後年の芭蕉が、その感情移入の能力に於て、驚くべき豐富を示してゐる事は、その作品の凡てが證明してゐる。またその感染能力の鋭敏である事は、無敵な附句の手腕によつても、十分に窺ひ知られる。否後年の附句の手腕を俟つまでもなくもつと手近な、延寶八年（一六八〇）の秋の『田舍句合』と『常盤屋句合』に於て、其角の句と杉風の句との句風が違ふ樣に、芭蕉の判詞の味が違つてゐる事實を考へても、それは容易に想像され得る事である。既に延寶八年、換言すれば、この『貝おほひ』を去る事八年の時分に、可也明らかに認められ得る芭蕉の頭の特質が、既に『貝おほひ』の時分にも動いてゐると見る事は、當然すぎるほど當然の事ではあつても、少しも不都合な事でも不合理な事でもない筈である。然も『貝おほひ』に於てその特質を認めるとすれば、この幾年來『貝おほひ』の上に押しつけられた濃厚な遊蕩氣分と、其所から引き出された芭蕉の實際生活に於ける遊蕩の想像とは、ひとまづ引つ込まされて、もつと科學的な方面から、更に證明し直されなければならない事になつて來る樣である。

私は芭蕉の頭の感染能力といふ事を持ち出す事によつて、『貝おほひ』に現はれてゐる濃厚な遊蕩氣分を、悉く否定し去らうとする者ではない。假令芭蕉の判詞の中に現はれてゐる遊蕩氣分の大部分が、凡て他人の發句から引き出されたもの

であるにせよ、また假令その言葉の多くが當時の常套語であつて、芭蕉特有な個性的なものを持つてゐないものであるにせよ、其所に十分遊蕩氣分が動いてゐるといふ事、その氣分は兎にも角にも芭蕉の頭の中で動いたものであるといふ事は、竟に爭ふべからざる事實である。勿論當時は、民衆の生活の中心は、遊廓と劇場とであり、それらのものが恰も地上の極樂淨土の樣なものとして欣求され、それを知らないものはともに語るに足りない者の樣にも考へられてゐた時代であつた。從つて、少くとも氣分として一般を支配するものは、遊蕩的な氣分であつた。その時代に生れ合せ、その時代の波に漂はされて、格別な反省もなく生きてゐた者にとつては、遊蕩的な氣分は、言はば、空氣や米の飯の樣な、家常茶飯事でもあり得る。假に芭蕉がさういふ種類の人間であつたとしても、それは、常人にはそれほどの事にも考へられないといふ事を想像させる材料になるだけで、其所に遊蕩氣分が動いてゐるといふ事を否定する材料になり得るものではない。所詮芭蕉は、外にはいろいろ違つた要素を持つてゐるにしても、頭の中の一部では、ともかくも、遊蕩してゐるのである。

芭蕉の『貝おほひ』を眺めてゐると、其所には、後年の芭蕉の特質を形づくるものが、あとからあとからと列んで出て來る樣である。ビジネス・ライクにのみ物を眺めてゐる事が出來ない、味の世界として凡ての物を受けとりたいといふ樣な心掛を持つてゐたといふ事も、才氣潑剌として縱横に洒落のめす、その意味での鋭く物の側面をも摑む事の出來る頭と距離を置いて物を眺め得る餘裕のある心とを持つてゐるといふ事も、他人の世界にも十分に這入り込んで篤とその良い所を見てやらうとする、その意味で感情移入の能力を多分に持つてゐるといふ事も、その地位にゐても恣に自分の優越を誇つて他人を刻するといふ樣な態度に出でる事がない、他人の傷に觸れるに十分の思ひ遣りがある、その意味で我を張る事のない、愛に充ちた調和的な心持を持つてゐるといふ事も、自分をも何第三者から眺める樣に公平に眺める事が出來る、その意味で人間としてフレキシブルな所があり、人格として謙虚な所があるといふ事も、凡て後年の芭蕉の世界の美しさ

を形づくる要素であつて、然もそれらのものは、何等かの貌で、少くともその片鱗を『貝おほひ』の中に示してゐるところのものである。その意味で『貝おほひ』は、後年の芭蕉に對する、こだまよりはもう少しはつきりした豫言として、芭蕉研究の上に、可也重要な地位を占める。

ただ然し、其所に動いてゐる濃厚な遊蕩氣分だけは、假令これを芭蕉の頭の中だけの問題であると限るとしても、否、寧ろそれが頭の中の問題であればあるだけ、後年の芭蕉の世界とどうどの點で脈絡させれば可いか。是は單に、一時的に現はれてすぐ消えて行つた、芭蕉の生涯の上の通り雨の様なものと解釋すべきものであるか。然しこの意味での遊蕩氣分は、延寶の末芭蕉が正風開眼への第一歩を踏み出すまで、芭蕉の藝術に、殆どこのままの形で、附いて廻つてゐる氣分である。通り雨の様なものと見做すとしては、前後八九年間は、餘りに長すぎる通り雨である。然も、さういふ氣分が若し芭蕉の人間の中の一部分として、芭蕉に内在してゐるものであるとするならば、それは後年の芭蕉の中に、どういふ形のものとして止揚されてゐるのであるか。

遊蕩生活に牽かれる心の中には、最後の背景として、無限に自由を求める心と無限に愛を求める心とがある。寛文延寶の世の中に於いて、凡てが階級で縛られ凡てが傳統で左右される様な箱詰めの世の中に於いて、民衆の氣分が特に遊蕩的な方面に熱烈に動いて行つたのも、華麗な豪奢を喜ぶ純官能的な誘惑も多かつたからには違ひないが、一面から言へば、其所にのみ自由があり、又其所にのみ自發的な愛が發見され得るからであるに外ならない。然も此所での自由は物質に束縛される事の甚だしい自由であり、又此所での愛は、相手がプロフエツショナルな相手であるだけに、健全な要求とは似もつかない、技巧それ自らを喜ぶ様な、デカダンの世界に墮し易い傾向を持つてゐる。從つて、動もすれば、自由は放恣となり愛は戯れとなる。さうして現世的な享樂そのもののみが、低級の圓滿自足といふ様なもののみが、遊蕩の主たる目的となつて了ひ勝ちなものである。

『貝おほひ』に於ける芭蕉は、人間としてのそのあらゆる短所にも拘らず、それらのものを率いて赴かうとする所のものは、換言すれば、芭蕉の魂の方向は、現世的なものであり、地上的なものであり、手で觸れられるものであり、眼で見られるものである。若し芭蕉に自由と愛とを無限に求める心があつたとしても、既に芭蕉の態度が現世に向ひ地上に向かふものである以上、それは當然官能的な色彩を帶びる事の多い、享樂主義的な、遊蕩的なものとなつて現はれて來なければならない。然も、若し芭蕉の態度が、現世的な地上的なものから離れて、ロマンティシストとして、現世的でないもの地上的でないもの、換言すれば遙かな「無限」なものへの思慕に向けられ、現世的な地上的なものを無視し切る樣になるとすれば、その官能的な色彩を帶びる事の多い享樂主義的な遊蕩的なものは、そのままで、純粹な形で自由と愛とを無限に求める心となり得る筈のものである。――さうして私は、芭蕉の藝術を正風以前と正風以後とに分つ、その第一の標識として、この態度の轉向といふ事を數へ上げようとするのである。態度の轉向によつて、遊蕩的なものは、その本源的な純粹な形に還元される。さうして芭蕉の藝術の一つの大きな特色として活かされる。

後年の芭蕉は、その藝術の理想としてさびしをりといふ事を唱へた。さびとは、凡そ現世的なもの地上的なものから、若しくは享樂主義的な遊蕩的なものから、遙かに離れた世界である。さうして、からび、わび、ひえ、された世界と、共通な地盤の上に立つてゐる世界である。然もしをりとは、同じ樣に凡そ現世的な地上的なものから、若しくは享樂主義的な遊蕩的なものから、遙かに離れた世界ではあるけれども、ほのかな、あえかな、たをやかな、なつかしい世界として、享樂主義的な遊蕩的な氣分の世界からあらゆる猥雜なものを取り去つて了つたあとの世界と、何所か根本的な所で相通ずるものを持つた世界である。さうして芭蕉は、さびだけではなく又しをりだけではなく、さびとしをりとを、その藝術の理想とし、又その藝術に於いて表現する。此所に我我は『貝おほひ』の中で、後年の芭蕉とは最も縁の遠い樣に考へられてゐるものが、からいふ形で、後年の芭蕉の藝術の中に止揚されてゐる事を發見するのである。

編輯者雜記

○

本號は春季特別號とした。頁數も增大したが、内容に於ても、論文、讀物、創作を通じて悉く一粒選りの力篇揃ひである。近來出色の出來榮だと自負する。

○

島崎藤村氏の作品は愈々本號から掲載することになつた。「夜明け前」はその序の章であるが、今後何年かに亘つて連載される此作は、氏が畢世の大作であるのみならず、文壇に於ける劃期的名作であることを疑はない。名匠鏤骨彫心の跡を見よ。

櫛田民藏氏の論文は、殆んど雜誌には執筆されない氏が特に本誌のために書かれたといふ意味で珍しいばかりでなく、殊に本誌には初めての寄稿として一般讀者には珍しいものである。[redacted]時事的問題の重要性に於ても注目さるべきものである。

◇

田中反動内閣が總辭職するはめになつたつて、議會を解散するはめになつたつて、彼ら及び床次一派に甚だ都合よくでき上つて居るのが、今度の普選蹂躙の小選擧區制案だ。僕が若し代議士だつたら一身を以て床次猿を壇上になどたたせるものか。それにしても彼も何と云ふ阿呆卑劣老憺であるか、僕は馬鹿！と云ふ字を地球一杯に書いたつてなほもの足りはしない。日本民衆のために。

誠に現政局は暗迷極まる、若き聰明な頭腦はその重壓に堪へない。ただ誌界の覇王たる本誌が素破らしい出來ばえを示したのが以て慰むるに足ることである。低腦内閣列傳、政黨株式會社論其他こちらの定立問題に對してそのまま心よく引き受けて下すつた筆者には特に感謝したい。そして見よ！土方博士の社會主義的經濟學の根柢に投げつけた巨彈、珍らしくも櫛田民藏氏のものせられたマルクス貨幣論の偉容。吉野博士今回の論策に至つては其の俊鋭まさに日本の至寶たるを想はしめ、小島教授の所論亦近代日本の中核を抉つ[redacted]經濟部長の筆になり、探偵小説は特に中央公論讀者を目あてとせる筆者快心の作。もつと云ひたくてたまらないんだが、紙幅限りあり。

△

春ともなれば！之は、陰慘晦暝たること冬日にも譬ふべき現實日本の愚昧醜怪相に嫉忌し更新せんとする潜熱的翹望の語だ。光明、鬪爭力、夫等は外に求むべきではないが、又それらは發展の機を待たねばならぬ。

春をも待たで！　綠爛紅紫の時をも待たで散れるものは、山本の死だ。淺春吾々を打つ衝擊だ。伸びんとする力と踏み躙らんとする力の牴觸抗爭激突。反動内閣を背景とする刻下の現實態を吾々は何と見るか。

春なればこそ！澎湃たる太陽熱の充溢と欝勃山野に漲る生命力の擴大。爛漫春を彩る本誌の此の光彩・白熱を見よ。スペクトル的分析力と手擲彈的迫眞力——吾等は誇負と矜恃に滿ちて春に對する。

□

藤村氏の長篇小説「夜明け前」その他四月號には現文壇に於て大を成すもの一人佐藤春夫あるのみと云はるる氏の傑作を載せ得たこと、新進作家中の尤として最も活躍期にある[redacted]にのみその作を發表して常に文壇の收穫に寄與せらるゝ相馬氏の作品、嶄々名聲を博しつつある前田河氏の作品等ほんとに一粒選りの創作のみ提供し得たことは歡喜に堪えない。



夜明け前（第一篇）

島崎藤村

序の章

一

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨（そは）づたひに行く崖の道であり、あるところは數十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いてゐる。

東ざかひの櫻澤から、西の十曲峠まで、木曾十一宿はこの街道に添うて、二十二里餘に亘る長い谿谷の間に散在してゐ

た。道路の位置も幾度か改まつたもので、古道はいつの間にか深い山間に埋れた。名高い桟も、蔦のかづらを頼みにしたやうな危い場處ではなくなつて、徳川時代の末には既に渡ることの出來る橋であつた。新規に／＼と出來た道はだん／＼谷の下の方の位置へと降つて來た。道の狹いところには、木を伐つて並べ、藤づるでからめ、それで街道の狹いのを補つた。長い間にこの木曾路に起つて來た變化は、いくらかづつでも嶮岨な山坂の多いところを歩きよくした。そのかはり、大雨ごとにやつて來る河水の汎濫が旅行を困難にする。その度に旅人は最寄り／＼の宿場に逗留して、道路の開通を待つこともめづらしくない。

この街道の變遷は幾世紀に亘る封建時代の發達をも、その制度組織の用心深さをも語つてゐた。鐵砲を改め女を改めるほど旅行者の取締りを嚴重にした時代に、これほど好い要害の地勢もないからである。この谿谷の最も深いところには木曾福島の關所も隱れてゐた。

東山道とも言ひ、中仙道とも言ひ、木曾街道六十九次とも言つた驛路の一部がこゝだ。この道は東は板橋を經て江戸に續き、西は大津を經て京都にまで續いて行つてゐる。東海道方面を廻らないほどの旅人は、否でも應でもこの道を踏まねばならぬ。本馬何十文、輕尻何十文、人足何十文と言つた昔は、旅人はいづれも道中記をふところにして、宿場から宿場への駄賃表を繰りながら、この街道筋を往來した。

馬籠は木曾十一宿の一つで、この長い谿谷の盡きたところにある。西よりする木曾路の最初の入口にもあたる。そこは美濃境にも近い。美濃方面から十曲峠に添ふて、まがりくねつた山坂を攀ぢ登つて來るものは、高い峠の上の位置にこの宿を見つける。街道の兩側には一段づつ石垣を築いてその上に民家を建てたやうなところで、風雪を凌ぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでゐる。宿場らしい高札の立つところを中心に、本陣、問屋、年寄、傳馬役、定使などより成る百軒ばかりの家々が主な部分で、まだその他に宿内の控へとなつてゐる小名の家數を加へると六十軒ばかりの民家を

數へる。荒町、みつや、横手、中のかや、岩田、峠などの部落がそれだ。そこの宿はづれでは狸の膏藥を賣る。名物栗こはめしの看板を軒に掛けて、往來の客を待つ御休處もある。山の中とは言ひながら、廣い空は惠那山の麓の方にひらけて、美濃の平野を望むことの出來るやうな位置にもある。何となく西の空氣も通つて來るやうなところだ。

本陣の當主吉左衛門と、年寄役の金兵衛とはこの村に生れた。吉左衛門は青山の家をつぎ、金兵衛は、小竹の家をついだ。この人達が宿役人として、驛路一切の世話に慣れた頃は、二人ともすでに五十の坂を越してゐた。吉左衛門五十五歳、金兵衛の方は五十七歳にもなつた。これは當時としてめづらしいことでもない。吉左衛門の父にあたる先代の半六などは六十六歳まで宿役人を勤めた。それから家督を讓つて、漸く隱居したくらゐの人だ。吉左衛門にはすでに半藏といふ跡繼がある。しかし家督を讓つて隱居しようなぞとは考へてゐない。福島藩からでもその沙汰があつて、いよ〳〵引退の時期が來るまでは、まだ〳〵勤められるだけ勤めようとしてゐる。金兵衛とても、この人に負けてはゐなかつた。

二

山里へは春の來ることも遲い。毎年舊暦の三月に、惠那山脈の雪も溶ける頃になると、にはかに人の往來も多い。中津川の商人は奥筋（妻籠、三留野、上松から福島邊を指す）への諸勘定を兼ねて、ぽつ〳〵隣の國から登つて來る。伊那の谷の方からは飯田の在のものが祭禮の衣裳なぞを借りにやつて來る。太神樂も入り込む。伊勢へ、津島へ、金毘羅へ、あるひは善光寺への參詣もその頃から始まつて、これらの團體をつくつて通る旅人の群の動きがこの街道に活氣をそゝぎ入れる。

西の領地よりする參勤交代の大小の諸大名、日光への例年の勅使、大坂の奉行や御加番衆などはこゝを通行した。吉左衛門なり金兵衛なりは他の宿役人を誘ひ合せ、肩衣と袴との同じ色に染めてある定紋付の麻の裃を着用して、時には略服の羽

織袴で、西の宿境までそれらの一行をうや〳〵しく出迎へる。そして東は陣場か、峠の上まで見送る。宿から宿への繼立てと言へば、人足や馬の世話から荷物の扱ひまで、一通行ある毎に宿役人としての心づかひもかなり多い。多人數の宿泊、もしくは御小休の用意も忘れてはならなかつた。水戸の御茶壺、公儀の御鷹方をも、こんな風にして迎へる。しかしそれらは普通の場合である。村方の財政や山林田地のことなぞに干渉されないで濟む通行である。福島藩勘定所の奉行を迎へるとか、木曾山一帶を支配する尾張藩の材木方を迎へるとかいふ日になると、たゞの送り迎へや繼立てだけではなか〳〵濟まされなかつた。

多感な光景が街道に展けることもある。文政九年の十二月に、黑川村の百姓が牢舍御免といふことで、美濃境まで追放を命ぜられたことがある。二十二人の人數が宿籠で、朝の五つ時に馬籠へ着いた。師走ももう年の暮に近い冬の日だ。その時も、吉左衛門は金兵衛と一緒に雪の中を奔走して、村の二軒の旅籠屋で晝支度をさせるから國境へ見送るまでの世話をした。尤も、福島からは四人の足輕が附添つて來たが、二十二人共に殘らず腰繩手錠であつた

五十餘年宿役人としての生涯の中で、この吉左衛門等が記憶に殘る大通行と言へば、尾張藩主の遺骸がこの街道を通つた時のことにとゞめをさす。藩主は江戸で亡くなつて、その領地にあたる木曾谷を輿で運ばれて行つた。福島藩の山村家から言へば、木曾谷中の行政上の支配權だけをこの名古屋の大領主から托されてゐるわけだ。吉左衛門等は二人の主人をいたゞいてゐることになるので、名古屋城の藩主を尾州の殿樣と呼び、その配下にある山村氏を福島の旦那樣と呼んで、『殿樣』と『旦那樣』で區別してゐた。

『あれは天保十年のことでした。全く、あの時の御通行は前代未聞でしたわい。』

この金兵衛の話が出る度に、吉左衛門は日頃から『本陣鼻』と言はれるほど大きく肉厚な鼻の先へ皺をよせる。そして、『また金兵衛さんの前代未聞が出た』と言はないばかりに、年齢の割合にはつや〳〵とした色の白い相手の顏を眺め

る。しかし金兵衛の言ふ通り、あの時の大通行は全く文字通り前代未聞の事と言つてよかつた。同勢およそ千六百七十人ほどの人數がこの宿に溢れた。問屋の九太夫、年寄役の儀助、同役の新七、同じく與次衛門、これらの宿役人仲間から組頭のものはおろか、ほとんど村中總掛りで事に當つた。木曾谷中から寄せた七百三十人の人足だけでは、まだそれでも手が足りなくて、千人あまりもの伊那の助郷が出たのもあの時だ。諸方から集めた馬の數は二百二十匹にも上つた。吉左衛門の家は村でも一番大きい本陣のことだから言ふ迄もないが、金兵衛の住居にすら二人の御用人の外に上下合せて八十人の人數を泊め、馬も二匹引受けた。

木曾は谷の中が狭くて、田畑もすくない。限りのある米でこの多人數の通行をどうすることも出來ない。豐かな伊那の谷からの通路にあたる權兵衛街道や、飯田から山越しに木曾へ出る大平街道の方には、馬の振る鈴音に調子を合せるやうな馬子唄が起つて、米をつけた馬匹の群がこの木曾街道に續くのも、さういふ時だ。

三

山の中の深さを思はせるやうなものが、この村の周圍には數知れずあつた。林にはまだ鹿も住んでゐた。あの用心深い獸は村の東南を流れる細い折坂川について、よくそこへ水を飲みに降りて來た。

古い歴史のある御坂越をも、こゝから惠那山脈の方に望むことが出來る。大寶の昔に初めて開かれた木曾路とは、實はその御坂を越えたものであるといふ。その御坂越から幾つかの谷を經て惠那山の裾の方には、霧が原の高原もひらけてゐて、そこにはまた古代の牧場の跡が遠くかすかに光つてゐる。

この山の中だ。時には荒くれた猪が人家の並ぶ街道にまで飛び出す。鹽澤といふところから出て來た猪は、宿はづれの陣場から薬師堂の前を通り、それから村の舞臺の方をあばれ廻つて、馬場へ突進したことがある。それ猪だと言つて、持

皆鐵砲などを持出して騷いたが、日暮になつてその行方も分らなかつた。この勢のいゝ獸に比べると、向山から鹿の飛び出した時は、石屋の坂の方へ行き、七廻りの藪へ逭入つた。大勢の村の人が集まつて、到頭一ト矢でその鹿を射とめた。ところが隣村の湯舟澤の方から抗議が出て、しまひには口論にまでなつたことがある。

『鹿よりも、喧嘩の方がよつぽど面白かつた。』

と吉左衛門は金兵衛に言つて見せて笑つた。何かといふと二人は村のことに引張り出されるが、そんな喧嘩は取り合はなかつた。

檜木、椹、明檜、槇、欐の木――これを木曾では五木といふ。さういふ樹木の生長する森林の方は殊に山も深い。この地方には巣山、留山、明山の區別があつて、巣山と留山とは絕對に村民の立ち入ることを許されない森林地帶であり、明山のみが自由林とされてゐた。その明山でも、五木ばかりは許可なしに伐採することを禁じられてゐた。これは森林保護の精神より出たことは明かであるが、一方から言へば木曾山を財產とする尾張藩がそれほどこの地方から生れて來る良い材木を重く視てゐた。取締りはやかましい。すこしの怠りでもあると、木曾谷中三十三ヶ村の庄屋は上松の陣屋へ呼び出される。吉左衛門の家は代々本陣と庄屋とを兼ねたから、その度に庄屋として、背伐りの嚴禁を犯した村民のため言ひ開きをしなければならなかつた。どうして檜木一本でも馬鹿にならない。陣屋の役人の目には、どうかすると人間の生命よりも重かつた。

『昔はこの木曾山の木一本伐ると、首一つなかつたものだぞ。』

陣屋の役人の威し文句だ。

この役人が吟味のために村へ入り込むといふ噂でも傳はると、猪や鹿どころの騷ぎでなかつた。あはてゝ不用の材木を燒き捨てるものがある。圍つて置いた檜板を他へ移すものがある。多分の木を盜んで置いて、板にへいだり、賣拂いた

りした村の人などは殊に狼狽する。背伐りの吟味と言へば、村中家捜しの評判が立つほど嚴重を極めたものだ。目證の彌平はもう長いこと村に滯在して、幕府時代の卑い『おかつぴき』の役目をつとめてゐた。彌平の案内で、福島の役所からの役人を迎へた日のことは、一生忘れられない出來事の一つとして、まだ吉左衛門の記憶には新しくてある。その吟味は本陣の家の門内で行はれた。のみならず、こんなに澤山な怪我人を出したことも、村の歴史として曾て聞かなかつたことだ。前庭の上段には、福島から來た役人の年寄、用人、書役などが居並んで、その側には足輕が四人も控へた。それから村中のものが呼び出された。その科によつて腰繩手錠で宿役人の中へ預けられることになつた。尤も、老年で七十歲以上のものは手錠を免ぜられ、すでに死亡したものは『お叱り』といふだけにとゞめて特別な憐憫を加へられた。

この光景を覗き見ようとして、庭の隅の梨の木のかげに隱れてゐたものもある。その中に吉左衛門が倅の半藏もゐる。當時十八歲の半藏は、眼を据ゑて、役人のすることや、腰繩につながれた村の人達のさまを見てゐる。それに吉左衛門は氣がついて、

『さあ、行つた、行つた——こゝはお前達なぞの立つてるところぢやない。』

と叱つた。

六十一人もの村民が宿役人へ預けられることになつたのも、その時だ。その中の十人は金兵衛が預かつた。馬籠の宿役人や組頭としてこれが見てゐられるものでもない。福島の役人達が湯舟澤村の方へ引き揚げて行つた後で、『お叱り』のものゝ赦免せられるやうにと、不幸な村民のために一同お日待をつとめた。その時のお札は一枚づつ村中へ配當した。

この出來事があつてから二十日ばかり過ぎに、『お叱り』のものゝ殘らず手錠を免ぜられる日が漸く來た。福島からは三人の役人が出張してそれを傳へた。

手錠を解かれた小前のものゝ一人は、役人の前に進み出て、おづ〳〵とした調子で言つた。

『畏れながら申し上げまする。木曾は御承知の通りな山の中で御座いまする。こんな田畑もすくないやうな土地で御座いまする。お役人様の前ですが、山の林にでも縋るより外に、わたくしどもの立つ瀬は御座いません。』

四

新茶屋に、馬籠の宿の一番西のはずれのところに、その路傍に芭蕉の句塚の建てられた頃は、何と言つても徳川の代はまだ平和であつた。

木曾路の入口に新しい名所を一つ造る、信濃と美濃の國境にあたる一里塚に近い位置を撰んで街道を往來する旅人の眼にもよくつくやうな絞漫な丘の裾に翁塚を建てる、山石や躑躅や蘭などを運んで行つて周圍に休息の思ひを與へる、土を盛りあげた塚の上に翁の句碑を置く――その樂しい考へが、日頃俳諧なぞに遊ぶと聞いたこともない金兵衞の胸に浮んだといふことは、それだけでも吉左衞門を驚かした。さういふ吉左衞門はいくらか風雅の道に嗜みもあつて、本陣や庄屋の仕事のかたはら、美濃派の俳諧の流れを酌んだ句作に耽ることもあつたからで。

あれほど山里に住む心地を引き出されたことも、吉左衞門等にはめづらしかつた。金兵衞はまた石屋に渡した仕事もほぼ出來たと言つて、その都度句碑の工事を見に吉左衞門を誘つた。二人とも山家風なかるさん（雪袴）穿きで出掛けたものだ。

『親父も俳諧は好きでした。自分の生きてるうちに翁塚の一つも建てゝ置きたいと、口癖のやうにさう言つてゐました。まあ、あの親父の供養にと思つて、わたしもこんなことを思ひ立ちましたよ。』

さう言つて見せる金兵衞の案内で、吉左衞門も工作された石の側に寄つて見た。碑の表面には、左の文字が讀まれた。

送られつ送りつ果は木曾の秋

はせを

『これは達者に書いてある。』

『でも、この秋といふ字がわたしはすこし氣に入らん。禾へんが崩して書いてあつて、これにつくりが組んでせう。』

『かういふ書き方もありますサ。』

『どうもこれでは木偏の鍬としか讀めない。』

こんな話の出たのも、一昔前だ。

あれは天保十四年にあたる。所謂天保の改革の頃で、世の中建て直しといふことがしきりに觸れ出される。村方一切の諸帳簿の取調べが始まる。福島の役所からは公役、普請役が上つて來る。尾張藩の寺社奉行、又は材木方の通行も續く。馬籠の荒町にある村社の鳥居のために檜木を背伐りしたと言つて、その始末書を取られるやうな細い干渉がやつて來る。村民の使用する煙草入、紙入から、女のかんざしまで、およそ銀といふ銀を用ひた類のものは、すべて引き上げられ、封印をつけられ、目方まで改められて、庄屋預けといふことになる。それほど政治はこまかくなつて、何一つもうつかり建てられないやうな時世ではあつたが、まだ〳〵それでも社會にゆとりがあつた。

翁塚の供養はその年の四月のはじめに行はれた。生憎と曇つた日で、八つ半時より雨も降り出した。招きを受けた客は、おもに美濃の連中で、手土産も田舍らしく、扇子に羊羹を添へて來るもの、生椎茸を提げて來るもの、先代の好きな菓子を佛前へと言つてわざ〳〵玉あられ一箱用意して來るもの、それらの人達が金兵衛方へ集まつて見た時は、國も二つ、言葉の訛りもまた二つに入れまじつた。その中には、峠一つ降りたところに住む隣宿落合の宗匠、崇佐坊も招かれて來た。この人の世話で、美濃派の俳席らしい支考の『三顆の圖』なぞの幅に懸けられたところで、やがて連中の附合があつた。

主人役の金兵衛は、自分で五十韻、乃至百韻の仲間入は出來ないまでも、

『これで、さぞ親父も悦びませうよ。』

と言つて、辨當に酒さかなは重詰にして出し、招いた人達の間を斡旋した。

その日は新たに出來た塚のもとに一同集まつて、そこで吟聲供養を濟ます筈であつた。ところが、紀念の一卷を卷き終るのに日暮方まで掛つて、吟聲は金兵衛の宅で濟ました。供養の式だけを新茶屋の方で行つた。

昔氣質の金兵衛は亡父の形見だと言つて、その日の宗匠崇佐坊へ茶綿の綿入羽織なぞを贈るために、わざ〳〵自分で落合まで出掛けて行く人である。

吉左衛門は金兵衛に言つた。

『やつぱり君はわたしの好い友達だ。』

五

暑い夏が來た。舊曆五月の日のあたつた街道を踏んで、伊那の方面まで繭買にと出掛ける中津川の商人も通る。その草いきれのするあつい空氣の中で、上り下りの諸大名の通行もある。月の末には毎年福島の方に立つ毛附け(馬市)も近づき、各村の駒改めといふことも新たに開始された。當時幕府に勢力のある彦根の藩主も、久しぶりの歸國と見え、須原宿泊り、妻籠宿晝食、馬籠は御小休みで、木曾路を通つた。

六月に入つて見ると、うち續いた快晴で、日に増し照りも強く、村中で雨乞でも始めなければならないほどの激しい暑氣になつた。荒町の部落ではすでにそれを始めた。

丁度、峠の上の方から馬をひいて街道を降りて來る村の小前のものがある。福島の馬市からの戻りと見えて、青毛の親

馬の外に、當才らしい一匹の子馬をもその後に連れてゐる、氣の短い問屋の九太夫がこれを見つけて、怒鳴つた。

『おい、どこへ行つてゐたんだい。』

『馬買ひよなし。』

『この旱りを知らんのか。お前の留守に、田畑は乾いてしまふ。植えた苗でもみんな枯れ死んでしまひさうだ。荒町あたりぢや梵天山へ登つて、雨乞を始めてゐる。氏神さまへ行つて御覧、お千度參りの騒ぎだ。』

『さう言はれると、一言もない。』

『さあ、このお天氣續きでは、伊勢木を出さずに濟むまいぞ。』

伊勢木とは、伊勢太神宮へ祈願を籠めるための神木を指す。かうした深い山の中に古くから行はれる雨乞の習慣である。よく〳〵の年でなければこの伊勢木を引き出すといふこともなかつた。

六月の六日、村民一同は鎌止めを申し合せ、荒町にある氏神の境内に集まつた。本陣、問屋をはじめ、村役人から組頭まで殘らずそこに參集して、氏神境内の宮林から樅の木一本を元伐りにする相談をした。

『一本ぢや、伊勢木も足りまい。』

と吉左衛門が言ひ出すと、金兵衛はすかさず答へた。

『や、そいつはわたしに寄附させて貰ひませう。ちやうど好い樅が一本、吾家の林にもありますから。』

元伐りした二本の樅には注連なぞが掛けられて、その前で禰宜の祈禱があつた。この清淨な神木が日暮方になつて漸く鳥居の前に引き出されると、左右に分れた村民は聲を揚げ、太い綱でそれを引き合ひはじめた。

『よいよ。よいよ。』

互ひに競ひ合ふ村の人々の聲は、荒町のはづれから馬籠の中央にある高札場あたりまで響けた。かうなると、庄屋とし

この吉左衛門も骨が折れる。金兵衛は自分から進んで神木の樅を、寄附した關係もあり、夕飯の支度もそこ／＼にまた馬籠の町内のものを引き連れて行つて見ると、伊勢木はずつと新茶屋の方まで荒町の百姓の力に引かれて行く。それを取り戻さうとして、三つや表から墨石の邊で双方の揉み合ひが始まる。到頭その晩は伊勢木を荒町に止めて置いて、一同疲れて家に歸つた頃は一番鶏が鳴いた。

「どうもことしは年廻りがよくない。」

「さう言へば、正月のはじめから不思議なこともありましたよ。正月の三日の晩です、この山の東の方から光つたものが出て、それが西南の方角へ飛んだと言ひます。見たものは皆驚いたさうですよ。馬籠ばかりぢやない、妻籠でも、山口でも、中津川でも見たものがある。」

吉左衛門と金兵衛とは二人でこんな話をして、伊勢木の仕末をするために、村民の集まつてゐるところへ急いだ。山里に住むものは、すこし變つたことでも見たり聞いたりすると、直ぐそれを何かの暗示に結びつけた。

三日がかりで村中のものが引き合つた伊勢木を落合川の方へ流した後になつても、まだ御利生は見えなかつた。峠のものは熊野大權現に、荒町のものは愛宕山に、いづれも百八の松明をとぼして、思ひ／＼の祈願を籠める。宿内では二組に分れてのお日待も始まる。雨乞の祈禱、それに水の拜借にと言つて、村から諏訪の大社へ二人の代參までも送つた。神前へのお初尾料として金百疋、道中の路用として一人につき一分二朱づゝ、百六十軒の村中のものが十九文づつ出し合つてそれを分擔した。

東海道浦賀の宿、久里が濱の沖合に、黒船のおびたゞしく顯はれたといふ噂さが傳はつて來たのも、村ではこの雨乞

の騒動であらう。

問屋の九太夫が先づそれを彦根の早飛脚から聞きつけて、吉左衛門にも告げ、金兵衛にも告げた。その黒船の騒ぎにはたため、にはかに彦根の藩主は幕府から現場の詰役を命ぜられたとのこと。

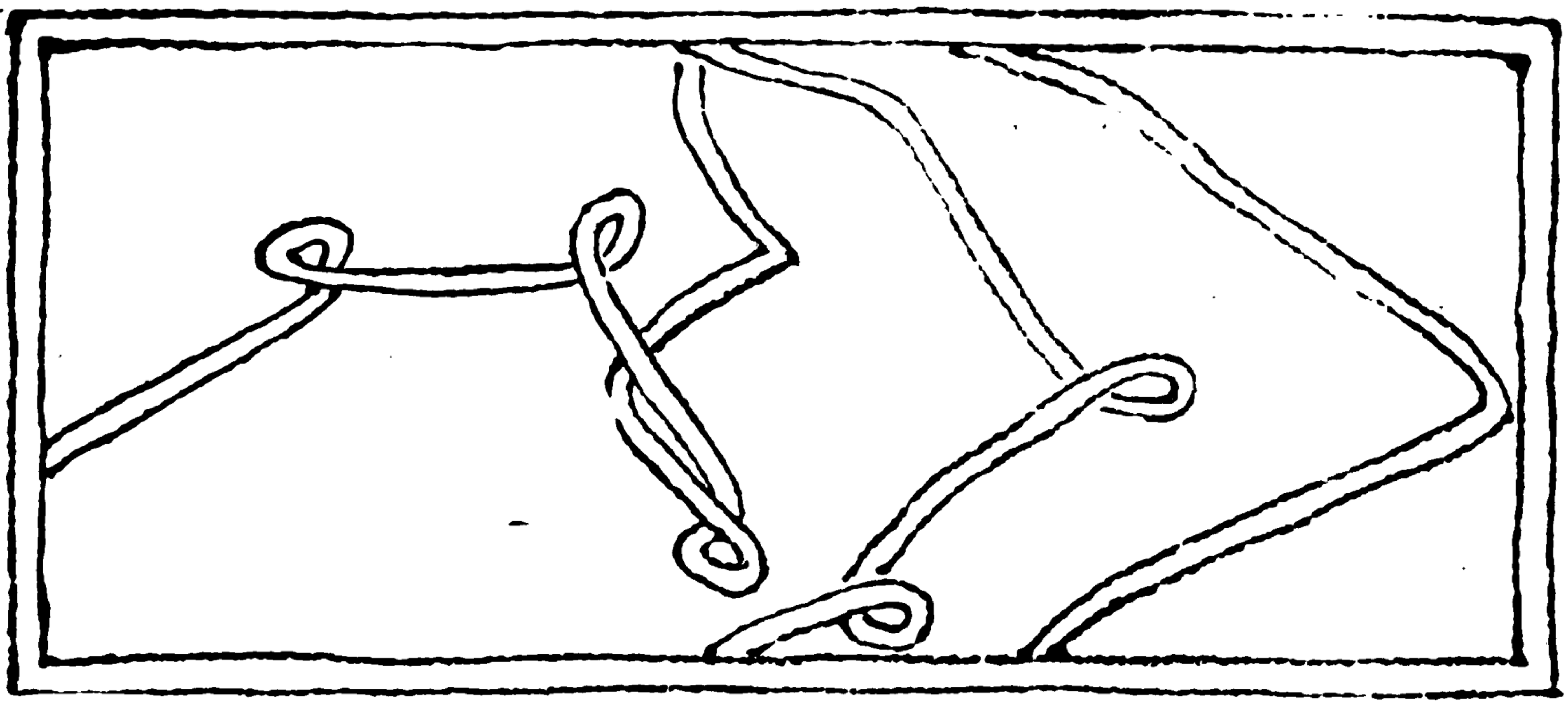
嘉永六年六月十日の晩で、ちやうど諏訪からの二人の代參が村をさして大急ぎに歸つて來た頃は、その乾き切つた夜の空氣の中を彦根の使者が西へ急いだ。江戸からの便りは、中仙道を經て、この山の中へ届くまでに、早飛脚でも相應日數はかゝる。黒船とか、唐人船とかゞおびたゞしくあの沖合にあらはれたといふこと以外に、委しいことは誰にも分らない。まして亞米利加の水師提督ペリイが四艘の軍艦を率いて、初めて日本に到着したなぞとは、知りやうもない。

『江戸は大變だといふことですよ。』

金兵衛はたゞそれだけを吉左衛門の耳にさゝやいた。

（序の章をはり、以下七月號に

附記――今回は自分の都合で序の章のみを掲載する。これで發端を終つて、來る七月號から第一章に移ることにする。實は昨年の暮からの乾いた寒さで、家には風邪にかゝるものがあり、正月上京した國許の悴も耳鼻科の原田醫院に入院するなどのことがあつて、この四月號には思ふやうに寄稿も出來なかつた。七月號の編輯〆切迄にはまだ間もあることだから、次回からはもつと多くの紙數を寄せられるだらうと思ふ。その點は寛恕を乞ふ。猶、新年號の誌上にも一寸お斷りして置いた通り、この作は一年四回に連載する。正月、四月、七月、十月の四回に亘つて、書き溜めた分を順に掲載して行くつもりである。（作者しるす）



ビルデヰングと小便

淺原六朗

新宿の遊廓の一軒一軒を、彼は順繰りにまわり歩いてゐた。

掲げられてゐる大形の寫眞を見つくして終ふと次の家の寫眞を仔細に、注意ぶかく眺める。男に勸められても、頭をかすかに振るだけで、彼は口をひらかなかつた。間歇神經性と云ふのであらうか、彼のやうに憶病な、羞恥心をもつてゐる男が、その夜、この場所で、勸誘する男たちの丁重な非難や、露骨な嘲笑に對して、無頓着でゐることが出來た。滿足するまで、それらの寫眞を見つくして仕舞ふと、無表情にちかい顏の硬さでその家をでて、次の家の暖簾に風のやうに吸ひこまれて行つてゐるのである。

彼はこの自分の裡に、急に湧きあがつてゐる異常感情を、客觀的にエステイメートした。このエステイメートは、彼に小さな惡戯的微笑をあたへた。

女たちの寫眞帖を、どう見まわつても、煽られてくる肉情にはなかつた。科學者の冷靜さで、女たちの顔を眺め歩ける。性慾の妄想で悩まされる彼にとつて、それは不思議な現象だつた。

勸誘する男たちの口占によると、たつた一圓五十錢の金によつて、この女たちのうちのどれでもが、自由に弄ぶことができると云ふのである。懐中には、五圓の金があつた。だから賣買の交渉が始められた時に、自信を失なふ必要はなかつたのであるが、見慣れた春畫を見るほどにも、彼のなかには情慾がうごいてこないのである。

寫眞のなかの女たちは、眞面目な顔をしてゐた。醜業と云ふそれ自體とは、全く沒交渉に、田舍の花嫁のそれのやうに、懸命な顔で、厚い唇をふさいでゐる。彼女たちの大きな鼻孔は、その眼と同じやうに、いぢらしく前方にむいてゐる。力一杯の、大禮服のやうな寫眞顔である。

彼は、自分のなかに湧いてきた感想をメランコリトにした。

あゝ、女たちは、どんな所業を夜毎に繰りかへしてゐるにしても、顔だけは修身のやうに眞面目にしてゐるのであらうか？　それがせめてもの慰みなのであらうか？

T夫人は新宿の驛前でポストのやうに待つてゐてくれた。

驛の時計はぴつたりと七時半である。

「お待ちになりました？」

「いゝえ、今きたばかりなのよ」

しかし、彼はこの夫人が、もう十分は確かに、こゝに立ち盡してゐたであらうことを知覺した。

驛樓上のテエブルで、紅茶を前にした時、彼は始めてこの夫人の近代性粉飾に刺激されてゐた。遊廓の女の直後だけに、際だつた風景でもあつたのである。彼女は、黑と朱の反對色をもつて、その襟と、その着物と、その帶を調和させ、

幅巾な顔を、巧みなコスチームで引き締めてゐた。

「奥さんにお逢ひする前の時間を、この街の裏通りにある遊廓で過してゐました。」

「まあ、嘘を云つてゐらつしやるわ。」

夫人はクララ・ボウのやうに小指をはね、唇をつきだして紅茶をのんだ。

「いゝえ、本當なのです。」

夫人は額に神經質のものをかすかに現はしたが、すぐに捨てゝゐた。

「で、面白うございました？」

「いゝえ、憂欝になりました。」

「面白くありませんことよ？」

「一度、H博物館で、無數に並らべられた動物の標本を見たことがありますが、あれによく似てゐます。」

「……………」

「みんな死んで硬くなつてゐるのです。可哀相にあの女たちは、お嫁にでもゆく時のやうに、一生懸命な顔をして、寫眞をうつしてゐました。」

「私、新宿に遊廓まであることを、知りませんでしたわ。」

「さう、奥さんは矯風會員ではなかつたですものね。」

夫人は興味がなささうに唇をひるがへしてボーイを招んだ。

「私にウヰスキーソーダを下さらない？　あなたはどう？」

「僕はいいんです。コーヒーをのみませう。」

「あのを……」夫人は云ひにくさうに口をひらいてゐた。

「良人が病氣なのよ。脚氣だつたんですけれど、心臓が大變に弱つてきたつて、醫者が云つてゐましたわ。」

「…………」

彼は默つてきいてゐた。夫人と逢引をする彼にとつて、その良人の病氣をどんな風に訊ぬべきか解らなかつたのである。

「家で良人の蒼い顏をみてゐると、私まで病氣に罹りさうなの。心細くつて、心細くつて……宅の顏、見てゐられないほどに窶れたのよ。」

夫人の顏は、その言葉と同調子でペソスな表情に鍍つてゐた。

「萬一の時のことを考へると、私、胸が引きしめられるやうに苦しくなるのよ。今、死なせるのは氣の毒なの。働きさかりなのですもの。それに私に對しては、本當に親切でしたわ。先刻も私が出かける時、お前の化粧が寂しすぎるつて、氣にしてゐるのよ。涙がこぼれさうでしたわ。」

夫人は悲しさうにウヰスキーソーグで喉を鳴らした。

彼は夫人の話をきゝながら、遊女たちの顏をくり返し思ひうかべてゐた。錯角で構成された遊女たちの顏は、夫人の話と同じやうに砂まじりのわびしさではなかつたか！

「今日は、これで別れませうか？」

「え、でも、どうして？」

夫人は、立ち留つて振りむいた人のやうに彼をながめた。

「病氣の人のことを想ふと、今日は別れた方がいいやうな氣がする。」

「ね、さうね。」

夫人は彼の眼にうなづきながら、姿態は扇のやうに嬌媚で展げたのだつたが、すぐにまたペエソスの感情に還つてゐた。

彼の勤めてゐる會社のビルデキングが出來上がつた時に、彼はブロックの堅さと、滑べるリノリウムと、毎日に磨かれる階段の眞鍮欄干と、大理石の装飾柱と、シャンデリアと、遠い展望に、心がひかれた。單調な勤めに對して、新鮮な都會空氣が加はつたからである。

重役の一人は、新築ビルデキングへの移轉と共に、事務能率の革新を企ててゐた。その方法は「能率週間」と云ふ新造語のもとに企圖された。即ちその「能率週間。」には、事務人員が半減されて、半數は東京各方面の得意店を手わけして廻ること、及び近縣若しくは、地方支店への特殊應援に出かけて、賣上げの増加を圖からうと云ふのである。會社内の事務は、半減された人員をもつて、平常通りの能率を擧げようと云ふのであつた。

彼及び彼等は、この新らしい計畫に抗議することは、もちろん許されてはゐない。抗議する場合、何等の躊躇なく、職をあさる群集の溢れてゐる街頭に、破れた靴下のごとく捨てられる。

スティームの消えた午后七時のビルデキングに、漸くその日の分擔をすました彼は、隣りのデスクに居のこつてゐた宮坂を顧みて苦笑しなければならなかつた。

宮坂はホッと溜息――これは苦惱の溜息ではない。息込んだ仕事が漸く片づいた時、生理的必然さで一時にでる息である――をついて、兩手をひろげ、欠伸をした。

「やりきれない、全く。」

けれど宮坂の聲は、言葉ほどにしよげてはゐなかつた

「そこいらでカツ飯でも喰べ、ダンス・ホールにでも行つてみませんか？」

宮坂は獨身者の快活さで、ポケツトから薄いブラシユをだすと、ズボンの折目を直して塵をはらひ、襟から背中にまでブラツシユの手をまわしてゐた

彼は莨に火をつけて、間借りの一室に、膳をこしらへて彼を待つてゐるであらう瘦せた姉を考へた。

「行きませんか？」

「まあ、僕はやめにしませう。體がつかれすぎてゐて……」

「ぢや、さようなら。」

宮坂はヂャズの口笛を、寂としたビルヂキングのガラスにひゞかせて、アメリカの青年のやうに大股に廊下を消えて行つた。

彼が立ちあがつた時、室の隅で書類と郵便物の整理をしてゐた少女が、青い事務服を脱ぎすてゝゐた。この時刻まで、事務をとつてゐる少女があらうとは、氣がつかなかつただけに、彼には驚きであつた。

「君ちやんはこんなに遲くまで、毎日のこるのかい？」

「いゝえ、でも時たま。」

少女ははつきり透つた言葉でこたえたが、二人つきりの恥かしさを感じたと見えて、顏をさげてしまつた。

「お歸り、僕が電氣を消して行つてあげるから。」

少女は小走りに、しかし好意のある笑顏を彼に見せて、ドアを押して行つた。もう階下の宿直を除いては、彼一人のビ

ルデキングである。外套に手を通したのであつたが、もう一度椅子によつて、莨に火をつけた。

げつそりと肉の落ちたビルデキングの寂寞か、この室にこめられた。そして彼一人に迫つてきてゐる。彼はこの音の死んだシック状壁のなかで、突然夫人Tに電話をかけたい慾望に襲はれた。そして若し彼女の外出が可能ならば、この室に彼女を招びよせ、もつれた糸のやうな彼女の歎きをきゝ、思ひきり彼女を抱擁したい好奇心に誘はれたのである。卓上の電話はもう効かないので、壁に装置されたオートマテイツク・テレホンを、2680と無器用な指尖でまわしてみた。

小間使ひの聲をきいた時、彼は夫人と會話をする興味を失なつてゐた。

「もし、もし、どなたでございますか？」

小間使ひのかんの高い聲は、この寂寥のなかで彼の神經には痛かつた。

「おくさんは……」

と、習慣的に云ひかけて、受話機をそのまゝ架けてしまつた。夫人を招びよせる興味が喪失しただけでなく、若しこの細い電話線のなかの聲に、彼女の良人の死が傳へられたら……、この恐怖が彼の皮膚を完全に寒くしたのである。彼は寒むくしたまゝの皮膚で妄像をつづけた。

このビルデキングが完成した頃、ある社員が、彼に說明してゐた。

「君、この鐵骨鐵筋のビルデキングは、地殼に異常な變化の起らない限り一萬年位の耐久力をもつてゐるのだ。」

「一萬年？」

「そうだよ、僕たちが過去にもつた歴史よりもつと永い將來にむかつて、このビルデキングは破壞されない限りたちつづけられるのだ。不思議な氣がするだらう。」

「すると、僕たちは、このビルデキングに住んだ最初の人間で、一萬年後に於ては、原始時代の生物としか見られないか

も知らないね。」

「そうなんだ。面白いぢやないか。一萬年後の人間は、どんな感情をもつて、このビルヂホンを見て、お辭儀をするかも知れない

が、一萬年の將來を想像することは、このビルヂホングの技術の技術者として光榮だよ。」

この社員の光榮感は、彼にとつて理解できないことではあつたが、一萬年とこのビルヂングを結びつけて考へること

は、彼にとつて憂鬱な材料だつた。

人間の生と死と、物質の恒久性と、それが頭のなかで走りまわつた。

「しかし××が起きれば、この建物も、その堅固に集中された資本も、狡猾にたくまれた事業も、破壞されてゆく。」

この言葉を、その社員にむかつて彼は投げつけたかつたのであるが、彼の職業地位を考へたとき、その言葉は口腔のなかで消えてゐた。

夫人への電話をやめて、彼はビルデングの恒久的を、生と死の不可分な事實を、生の短かさを、神秘な感情で考へつづけた。それはまつたく蒼ざめた恐怖にまで、彼を導くに足りるものだつた。何故ならば、やがてT夫人の良人が、亡骸のごとくに歪められた表情で、室の中空に描かれたからである。

T夫人の電話が、先夜の豫感をそのまゝに、良人の死をつたへてゐた。

「亡くなりましたのよ。つい一時間ほど前に……、すぐきて頂けない？すぐに……」

興奮してゐる夫人の聲を始めに耳にしたとき、彼は直覺的にぎよつとしてゐた。

「行きます、すぐに……

電話のなかから響いてくる興奮に、彼も同じ程度の興奮を覚えたのであらう。思慮を缺いた感情で、夫人の要求通り、「行く」と應へたのだつた。

答えた直後に、彼は反省的な理智をもつたのであるが、電話はぽつつりと斷れてゐた。

「いま、僕の知人が一人死んだ。」

周圍の者に云ふのでもなく、彼自身に云ふのでもなく、この言葉を彼は口にした。不安が、雲のやうに擴大され、彼は机にむかつてゐるのが、苦痛になつてゐた。もちろん、臆面もなくその家に出かけられないものを、彼は知つてゐた。

給仕が、彼の前に名刺をもつてきてゐた。

「すぐ、應接に通して。」

名刺の名前は、彼にとつて七年ぶりの名前である。彼は閉ざされたものが、ひらかれる救ひを、この場合に訪ねてくれた友人に感じた。

鹽田清堆、鹽田清堆、

彼は名刺をつかんで、その名前をくりかへしてみた。

應接に入ると、彼の友は蒼黒い顏に眼を光らせて、立ちあがつてゐた。

二人は瞬間の躊躇のちに、微笑を交し合つた。

「僕は、今朝東京に戻つてきたのだ。」

「と、云ふと……。」

「大阪の會社をやめてしまつたのだ。いや馘られたと云ふ方が正確だ。」

「いつたい、どうしたのだ？」

「中川はいろいろある、しかし結局に於て、しかし資本家の[illegible]きたくた[illegible]、[illegible]。資本家が寛大につかつてゐる筈はない。」

「そうか、奥さんや子供は？」

「一諸につれてきた。」

そのまゝ二人はだまつてゐた。だまつてゐたが、複雑な俤話が、眼と神經のなかで交流してゐた。

「學生時代から考へると、お互ひに縫つたのだね。」

彼は緩和する氣持で、この言葉をなつかしさのなかから換び起した。

「お互ひに七年逢はない。學校をでた時きりなのだ。」

「さうだ。もう七年たつ。」

彼は單調に反覆した。

三人の子供と妻をつれて、この友は東京でどうしようと云ふのであらうか。大阪と同じやうに、東京も人間に安々とパンを與へる處ではない。資本家の手先となる以外に五人の生活をさゝえうるほどに、特殊技能がこの友にあるとは考へられない。

患部にさわることを惧れるやうに、彼はこの友の今後について語ることに痛みを感じた。けれど中川からは、寒流に似た冷めたいが強いものが印象された。それは反抗だけではない。自信と氣魄がこの視力のなかにふくまれてゐるやうにも想はれる。

中川は容易に口をひらかず、やがて彼をながめきつたのちに、笑ひだしてゐた。

「君は僕を心配してゐてくれるね？」

「少し心配だ。君の生活負擔が、頭にさききたので。」

「飯を喰ふことだけ考へれば、君の云ふ通りだ。」

鹽田の短い言葉に、彼は自分の常識がいやしまれた。

「だが、現代では飯を喰ふことそれだけでも、生活の重大事になつてきてゐるのではなからうか。」

「俺は七年間それをやつてた。そして全く飯を喰ふことにあきてしまつた。疲れてしまつた。現在から、もつと俺が貧困に突き落された時、俺はまた新らしい勇氣で、出發できると想つてゐるのだ。俺は貧乏を恐れる根生が厭になつてきてゐる。貧乏を恐れながら、忠勤をぬきんで居れば、いつ金持になれる。絶對に、一生金持になれるわけではない。貧乏を恐れながら、貧乏で死んでゆくだけの話なのだ。だから俺は、馘られたことに快感を感じながら東京に歸つてきた。汽車のなかで、午前五時の富士をみた時、俺は七年間のうち一度も味つたことのない新鮮な歡喜にうたれた。」

耳できゝながら、彼は、肉づきが柔らかく、ロオマン派であつた七年前の鹽田の顏を、今テエブルを前に力づよく語る友の顏に押しあててみた。それは實に多くの修正が必要になつてゐた。その顏に刻まれた陰影と、鋭い視力は、ロオマン派の鹽田の顏にはなかつたものである。

「變つたねえ、君は……。」

彼はとほい學生時代のなつかしさに誘はれた。

「變つた。僕たちの年代の人間は、根本から變らなければいけない。」

奥底からでてくる鹽田の聲が、彼を引き入れた。

「變らなければいけないかも知らない。僕も變りたい。けれど最後に行くと、いつも過去のセンチメンタルに虐められて、變れない。」

「君は相變らず一人？」
「うむ、獨りだ。出戻りの姉と二人だ。」
「その獨身の生活が、君をあまやかせて、余剩な遊びに誘ひこむんだ。」
「そうぢやない、鹽田。」
寂莫な鹽田の前で、素直に彼の内部から湧きはじめてゐた。
「僕は、いろいろな點で生活は遊んでゐる。しかし苦しいんだ。そしてどうしていいか解らないでゐる。解らないから、妙な技巧で遊びたくなつてしまふ。今も、君がくるすぐ前、苦しい電話に打つかつてゐたのだ。」
鹽田のなかの堅固なものが、はつきりしてくるに從つて、彼は弱さに逆比例してゐた。泣きしほれて、鹽田の胸にすがりたい傷心を覺えた。
「鹽田、俺はこらえてゐるだけだ。この奴隷に似た俸給生活者の感情が耐らない。然しこの生活を棄てれば、俺は更に街頭の無能力者に陷ちるだけだ。戀愛も、結婚も、すべて考へると、俺には恐しい負擔なやうな氣がしてゐるこの頃は。」
「仕方がないね、樂をして得をしようとするブルジョア共通の氣持のなかで、苦しんでゐるのだから。」
「そうだらうか？」
「そうだ。」
感傷な自己暴露が、彼を微醉にした。と共に、理屈だけではなしに、氣持のニュアンスを感じてくれない鹽田が不滿に想はれた。
「お茶でものまうか？」
「いや、このビルデヰングには、屋上があるかね。久しぶりで東京をながめたいんだが。」

螺旋形の階段を、彼は重い感想にとらわれながら鹽川を案内して行つた。

「君は、さつきブルジョア共通の氣持だと云つたが、我々の苦しみは、それだけの言葉で解決できるものだらうか？」

「解決と云ふよりも、結論がそうなつてゆく。君は貧乏かも知らないが、プチ、ブルジョア的であることに於て、間ちがひではない。この階級は、ブルジョアの追隨者であつて、智識を技巧的に使用し、感情を、そのネタタイビンのやうに狡智に装飾して、カフエーで紅茶をのみながら苦しんでゐるのだ。」

前方のビルデングの底にバラツクが伏さつてゐる。細い紐のやうな露次を通じて、お内儀の一人がオシメをほしてゐるのが遠望された。

「谷底のやうな處で、何日かかつて乾かすのだらう。」

「さあ、永久の日陰だね。」二人は暫くながめてゐた。

「兎に角、東京は面白いやうだ。バラツクと、ビルデヰングの隔然たる對立をみても、僕の意識が、はつきりした衝動をとつてくる。」

鹽川は兩手をあげて、呼吸をふかくし、兵隊のはく靴で、ガチガチ、コンタリートを鳴らしながら、歩きまわつた。

夫人から電話のかかつてきた四度目に、漸く彼はその家の前に立つてゐた。

玄關にあらわれた夫人を前にして、彼は神經が硬ばるのをかくしきれなかつた。

「おまちしたのよ。何度お電話をかけたでせう。」

夫人は性急に、親しみを彼に注ぎこもうとした。彼はこれをうけるほどに落着いてはゐなかつた。

「どうぞ、今日は誰も留守なの。」

二階に通る廊下の薄闇で、夫人は急にふりかへつて、彼の首を兩手でまいてゐた。

「どうして、今までいらつしやれなかつたの？」

彼が應えるまへに、彼の唇は夫人の唇で壓へられてゐた。

この急激な抱擁がすむと、夫人はまた前の落着いた形式にかへつて、八疊の室に案内した。

「實は死ぬ少し前までは、大變苦しみましたの。けれど亡くなつた時には、靜かな顔をしてゐましたわ。」

しつとりと、ハンカチを手でつまみながら、夫人は語りだしてゐた

「三日ほどと云ふもの、私は寢ないで看病しましたのよ。死ぬ日の朝、實は私の手をにぎつて、だまつて涙を眼にためてゐましたわ。その時ほど悲しかつたことはありませんでしたわ。宅と一緒に死んでもいいと思ひながら、私は顔を浦團にふせて、聲をあげて長い間哭かされてしまひましたの。」

夫人は用意したハンカチで、にぢんでくる涙を、化粧くづれのしないやうに巧みに押へた。

「幾つで亡くなられたのですか？」

「丁度、四十五でしたの。あの人は若い時から大變苦勞した人で、これから漸く一息つけると云ふ時に亡くなつてしまつたのですわ。」

夫人の話題は、亡くなつた良人の身の上について、一時間にちかい長さを費した。

夫人の話によつて、彼はこの故竹中篠吉氏が、いかに勤勉なB保險會社の副參事であるかを知つた。十數年にわたる長い間、下級の勸誘員として、鼠のやうに驅けまわつて腕を認められた人であること。そして老後に困らないだけの小金を貯めることが、故人の理想であつたこと、のために、青春期はもちろん、中年期までの故人の生活は、削りへつた下駄の

やうに惨めであつたこと。またその理想のために、神經と良心を磨滅させて、忍耐しつづけたこと、そして此初期の理想が遂せられようとした現在、卒然として亡くなつてしまつたのだと云ふのである。

「わたしがお嫁にくるまで、あの人は女一人知らなかつたのだと云ひますわ。」

夫人はこの言葉を、話の結び目のやうに、つけ加へた。夫人が廿四才で結婚する時、故篠吉氏が卅八才であつたことは、彼も知つてゐた。

「まだ、澤山御相談したいことがありますの。その前に線香を一本でも宜しいんですの。佛樣にあなたから立てて頂けません？」

この言葉をきいた時、彼は鼻じろんで、夫人の顏を見詰めないわけには行かなかつた。

「僕がですか？」

「ゑゝ、喜びますわ。あの人は苦勞人なだけに、私がこれからも幸福になることを望んでゐるに違ひないのですもの。」

「線香を一本たてることは、簡單なことだけれど……奥さんは僕の良心をいぢめすぎます。」

「まあ、どうしてですの？」

「解りませんか。あなたに對する僕の位置は、亡くなつた竹中さんにとつて、氣持のいい位置ではなかつたでせう？」

夫人は顏をかすかに赧らめたけれど、感情と良心は、彼の言葉によつて破壞されてはゐなかつた。

「でも、宅は何んにも知りませんでしたもの。そして私を心から信じてゐてくれましたわ。」

夫人は立つて、次の間の襖をあけてゐた。

その室の床は、佛壇にしつらへられ、故竹中氏の位牌と寫眞を中心に、温室咲きの西洋花がうづたかく盛られ、香の煙りが立ちのぼつてゐた。

夫人は香をまぶし、暫くその寫眞をながめ、また新らしく溢れた涙の袖を顔におしつけてゐた。

「今日はあなたがいらしつて下だすつたせいか、何度も泣けますのよ。いけませんわ？」

彼は返辭をする代りに、突然起ちあがつて、佛前に頭をさげ、一時に五本ほどの線香を拔きだして立ててゐた。

寫眞の竹中氏は、でつぷりと副參事らしく、夫人好みの好男子に撮れてゐた。

「立派な人柄ではありませんか？」

「口髭が少し氣に入りませんけれど、綺麗な顔立をして居りましたのよ。でも、死ぬときには顔が蒼くむくんで、見られないほど相恰が變つて居りましたわ。」

襖をたてて、元の室に移つたとき、夫人は二度目の興奮で、羞恥もなく彼をとらえてゐた。この不可解な飛躍心理に愛欲を感じながら、彼も躊躇なく夫人の肌の蠱惑に溶かされてゐた。

かつて、彼はT夫人との逢引前の時間を潰すために、新宿の遊廓で、女たちの寫眞を軒並にながめて歩いてゐたが……。

女たちの顔は類型的だつた。その無智で、眞面目な表情も類型的だつた。この女たちの顔を、彼は悲しみと、輕蔑をもつてながめたのだつたが、今は床のなかでこの女たちと同じ素質のものを、自らのなかに感じないわけには行かなかつた。

隅田に別れて、午前一時の電車のなかで、既に索莫として、情熱の冷めてゆくのを、彼は知つた。間借りの室で、出戻りの姉が彼を迎へてくれた時、彼は痩せた姉に意味もなく怒りを感じてゐた。姉を睨みふせつゝ、物も云はず蒲團にくるまつたのである。

やがて、彼は遊女の寫眞と、彼の顔を同じ位置にならべながら、今日の感情起伏をしづかに客觀した。

ビルデイグでの出來事である。

「先夜の事務居殘りに、同僚の宮坂と少女君子が抱擁してゐた。」

この話題が、食堂雜談にのぼつてゐた。事件は雜談の興味からはなれて、終りには二人の進退の問題にまで進行してきてゐた。

「怪しからない話だ。神聖な我々の事務室を、彼等二人の野合で汚したまゝ默認すると云ふ話があるか。」

顏の四角な脇本と云ふ男が、理屈だけで唾をとばし、硬論を主張してゐた。

「宮坂が喰へないのだ。重役に對してあの男ほど悧巧な調子にでる男はないが、女に對してもそうだと云ふ話だ。僕はよそでいろいろ女に關しての話をきいたこともある。」

この話題の提供者深見が、更に言葉をそえてゐた。輕く風のやうに陰謀を注ぎこむこの深見の性格を、彼は知つてゐた。彼は云ひたいものを耐らえて、深見の顏を見詰めた。深見は彼の神經質な視線をさけて、チヨツキを叩き、

「まあ、こんなことはどつちでもいいことだと云へば、それでも構わないのさ。だが、脇本君の云ふやうに、我々の神聖な事務所が、常に處女を淪落する人間によつて汚されるとなると、大變なことになるね。野合するために居殘るのか、事務勤勉だとあつて增俸でもされるとなると、一寸愉快ぢやないか。」

「少しも愉快ぢやない。」

脇本には、深見の狡智がわかつてゐない。深見に煽られて、脇本は一直線に硬論を吐きだしてゐた。

「僕は深見君の云ふやうに、宮坂君が奸惡な人間だとは考へないが、少くとも今度の行爲は社員道德として許されないことだ。」

聽いてゐる同僚のＡＢＣＤは、好奇心の上に立つ追隨者にすぎなかつた。精勵で、課長候補でもある宮坂が、窮地に陷

つた果。職をはなれることにまで、殘忍な興味をもちうる悪徳者だつた。

「あの少女を宮坂は本當にやつたのだらうか。」

「やつたと云ふ話だ。」

深見は確信のある眼で、四邊を見まわして、

「だからあの少女は、會社に出てこないぢやないか。僕はこんな時、直ぐに弱くなつてしまふが、これはやはり脇本君の云ふ通り、今後もあることだから、課長にまで内密に云つて置く必要があるかも知れないね。」

食堂輿論ではあつたが、宮坂の運命は危險な線に移されてゐた。

彼は昂奮で、生理的に小便をもよほしてゐた。立つて便所に行き、醉ひどれのやうに、前の化粧煉瓦に額をつけたまま、小便をながした。

「俺はだめだ。俺はいさと云ふ時に、何んにもならない男だ。小さく利巧で、そして馬鹿だ。」

たまつた小便が、しみじみと體のなかから排泄された。そしてこのつぶやきも、生理的に彼の體のなかから洩れてゐた。

排泄が終り、Mボタンをはめ、彼は濁つた惰氣を捨てるやうに、兩手に力をこめて握りまわしてみた。

食堂では、まだ深見と脇本を中心に、宮坂と少女君子の話が動いてゐる。

「辰野君。」

深見が、彼の名前を改めた口調で呼んだ。

「さつきからの話だがね。僕はこの話を課長にまで告げる必要もないと考へたのだが、脇本君がきかないのだ。それにこゝにゐる他の連中も贊成だと云ふのだが、君の意見はどうだらう。」

「僕はそんな話、不賛成だ。」
この短い言葉を彼は息づまつて、聲を顫はしてゐた。
「どうしてだね?」
「どうしてつて、この話が本當か、どうかさへ解らない。若し事實であつたにしても、この話を課長に密告するなんて卑狂だと思ふ。」
「密告するんぢやない、報告するんだよ。」
「どつちにしても、同じことだ。不確實な噂さで、人の運命を左右するやうなことに僕は賛成できない。若しそれが事實としても、課長に云ふのは、お互ひの同僚である宮坂君に對して親切なやり方ではない。むしろ宮坂君に云ふべきだ。」
「君は案外人道主義者だね。」
冷笑にみちた言葉を、彼に投げて、深見は笑ひだしてゐた。
「人道主義者? そんなことぢやない。誰れでもにあるべき人間の良心の問題だ。僕は想ふ。我々は資本家に使はれてゐる哀れな階級だ。我々はお互ひに手をつないで結束して行くべきだ。資本家によかれと考へるよりも、我々によかれと考へて、種々の行動も助け合つて進むべきだ。それを資本家の走狗となつて、我々がお互ひに我々を陷し入れて自分だけ資本家階級に近づかうとするやうな手段をとるのは、卑狂すぎる。僕たちはプロレタリアのやうに團結はできないにしても、我々の仲間を陷し入れて資本家に賣るやうな所爲は愼むべきだと思ふ。」
喋舌り終つたとき、彼は自らこの昂奮の情熱に愕いた。そして春の微風のやうな心よさで、自らのなかに自信を感じた。
その夜、鹽田を訪ねた彼は、突然裡に湧き起つた情熱が、いかに彼等を壓倒したかを語つてゐた。

「それはいい。それは君の生活内部に起つた一つの昂進かも知らない。」

「深見と云ふ男が、あとで僕を社會主義者だと云つてゐた。」

それをきくと鹽田は太いバスで笑ひだしてゐた。

「君の態度はムウデイな正義派でしかないよ。科學とシステムをもたない正義派的なものが、君の内部にも存在してゐると云ふだけのことだ。」

鹽田のこの斷定をうけながら、彼はしよげたいだけの昂奮を、まだ持續してゐた。

「鹽田、今日の僕がとつた態度が立派だとおもへて僕は昂奮してゐるのではないんだ。只、僕の内部にも、對象が本物の時、燃えあがる情熱があることが解つたから、昂奮してゐるのだ。僕も鍛へられれば、鋼鐵になれさうな氣がしたので君の處にとんできたのだ。」

「僕、今この深川で勞働新聞を計畫中だが……」

鹽田は突然、言葉の調子を變えて語りだしてゐた。

「君の云つた鋼鐵になるのはなかなか難かしいことだ。しかし我々の運動に參加する者は鋼鐵の意志がなければ不可能なことだ。しかし闘ふ者のみが持つ緊張が、僕たちに積極的な快感をあたへてくれる。この街にすんで居れば、かつて味つた弛緩した享樂や、虚僞がない。みんな裸だ。それだけでも僕には生々とした刺激だ。君の氣持も解る。」

「解つてくれるか？」

彼の眼瞼は青年のやうに涙で熱くなつてきてゐた。

「僕は駄目な男なんだが、このまゝで居ればもつと腐つてしまふ。僕は今ある妙なブルヂョアの女と關係してゐるが、この關係も僕は斷ちきらうと想ふ。」

「斷ちきつたがいい。不健康な患部がある限り人間は健康になれない。患部は斷ちきつて、一直線の健康にならなければ駄目だ。」

「その女は亡夫の遺産をもつてゐるのだ。そして僕との共同生活を考へてゐる。」

「僕は君が背後にそうした生活が隠くされてゐるだらうと考へてゐた。君のネクタイの柄にもその女の趣味が現はれてゐる。七年ぶりに君に逢つた時、僕はすぐに、君が技巧的な戀を弄んでゐるだらうと想像した。學生時代とちがつて、君の言葉づかひにまで、何んとなくお白粉の香がしてゐた。」

「そうだらうか？」

「自分で解らないだけのことだ。君と僕との距離が、いかに遠くなつてゐるかを知つただけだつた。」

「その女との關係は斷つ。僕の弛緩してゐる感情が、その女と關係さしてゐたのだ。その女でも無ければ、どうにもならないほど、僕の生活には目標がなかつた。空虚だけだつたんだ。」

粒になつた涙が、眼元にういてゐた。彼にとつて、この涙は少年時代を除いては珍らしかつた。

「裸になつて、君と一緒に働けたら、愉快だと想ふ。」

「その日がきたら、いつでも來たまへ。席をあけて君を待つてゐよう。」

冷笑をまじえず、鹽田が同輩の感動で答へてくれたのを彼は感じた。

「ありがたう。」

質感と、貧しさで、鹽田の前に彼は頭をさげてゐたのだつたが……。

白く、脂が固いた滓となつて投げだされてゐる未亡人Tの腕に、彼は熱かれた唇を、きりきり巻きつけてみた

「まあ、痛いのよ。どうなさつたの？」

見ひらかれた眼を、彼は上から覗きこんだ。

「痛いの？　本當に痛い？」

「痛いわ。赤く痕がついたことよ。」

未亡人Tは、固い、白い腕を蛇のやうにうねらせた。

「奥さん、もう一度、きりきりに髪の毛をまかせてくれない？」

「どうなさつたのでせう。私に何か腹を立てゝゐらつしやるの？」

「いゝえ、僕は、僕に腹を立ててゐるのですよ。」

仰向きに返つて、天井をながめた。

「風が落ちた。風が落ちたのだ。」

彼は廊下で、事務室で、電車で、繰り返す言葉を繰り返した。この言葉は、附隨的に、鹽田の前で、涙をながしたセンチメンタルな彼の姿をつれてきてゐた。そして彼の全身は羞恥のやうに縮こまり、照れがましい茂づ掻ゆさで一杯になつた。鹽田を考へることさへも、彼には痛かつた。

「可笑しいのね。お頭がお痛い？」

彼は苦笑をしづかに嚙み殺した。

「奥さん。この頃、僕は毎日頭が痛い。」

「きつとどうかなるのよ。私の腕をあんなに痛くしたりして。」

「僕は氣狂ひになるかも知らない。氣狂ひになつても、奥さん僕と一緒になる？」

「まあ、恐しいわ、そんなこと仰言つて。竹中の叔父が氣狂ひになつたのを見たことがありますの。浅間しい恰好で、見てゐられなかつたのよ。」

描いた眉を細くしかめ、夫人は竹中氏の死後、吸ひなれた貰ひ火をつけた。

「それよりも計算なさらなければ駄目。私に渡される財産は、二萬圓にはならないのよ。一萬五六千圓ですの。心細いのね。」

「澤山でせう。僕はそんな大きなお金を見たことさへない。二人で若しアメリカにでも行つて來ようと想へば、贅澤に行つてこられますよ。」

「私、こまかく計算してみたの。五千圓で郊外に、ヴァンガロウつてあるでせう？ ヴァンガロウの家をたてるの。千圓でピアノを買つてはどう？ あとの一萬圓はのこして置くのよ。眞逆の時つて時があるでせう。」

「郊外よりも、鎌倉か、逗子か、ロマンチックな僕たちには、ふさわしくはありませんか」

「で、あなたは東京にお通いになる？」

「樂に通へますとも、向ふなら月の晩は海岸が散歩できます。」

この甘い會話に反感を覺えながら、彼の口は人形のやうに意識もなく、未亡人の空想にしたがつて、甘い言葉を吐きつづけてゐた。

かうして彼は一月以上、同じ言葉を夫人の前で繰り返してゐた。

ある日、盛裝した未亡人が、彼を會社に訪ねてきてゐた。彼はまづ、能率のためにのみつくられた會社の應接室で、壯

丹の花束のやうな彼女の盛装ぶりに眼を瞠つた、彼は物云はず、彼女を見つめてゐた。
「どうして、そんなに私を御覧なさいますの？」
未亡人は唇を解いて、自負にみちた微笑をつくつた。
「綺麗になつていらつしやつたからです。これに今、人間と人間との汚い交渉で、暗くなつてゐた處だから、尚更なのです。」
「かう云ふ會社にも厭なことがありまして？」
「え、今二人の社員が、可哀相に小さな理由で馘られました。」
「まあ。」
未亡人は肩をうごかして、髪の形に、そつと手をあてた。
「僕もやがて馘きられるかも知れません、」
「御戯談を仰言いますこと。あなたのやうな立派なお方が……。」
「こんな立派な男なら、世の中に澤山ころがつてゐます。」
「あのう、一寸そとにお茶でものみにいらつしやれません？」
「合憎、今は駄目なのです。そんなやうなわけで、何か御用なのですか？」
「少しお話したいことがあつて……」
「…………」
「では、こゝでお話いたしますわ。ゆつくりお目にかかつて、お話したいと想つたのですけれど、急なことでしたので……
……今度わたし竹中のすぐ下の弟と結婚することになりましたの。いろいろあなたにも御厄介になつて居りますから、
一寸そのことを御話して置きたいと思ひまして……。」

「結婚を、弟さんとですね？」

「家事上の都合で、どうしてもそうしなければならないやうなはめになりましたのよ。弟と云ひましても、私より五つ上で、親類などでは大變にこの話をよろこんで居りますの。」

「それは何よりです、お目出度い話で。」

未亡人と同じテンポで、彼は冷靜に應對することができた。かかわりのない結婚談でもきくやうに……

「結婚披露の時には、是非いらしつて頂きたいんですのよ。むかしからのお友達として。そのことは弟にも話してあるんですの。」

「御伺ひできたらお伺ひ致します。いつお擧げになるのですか、結婚式は？」

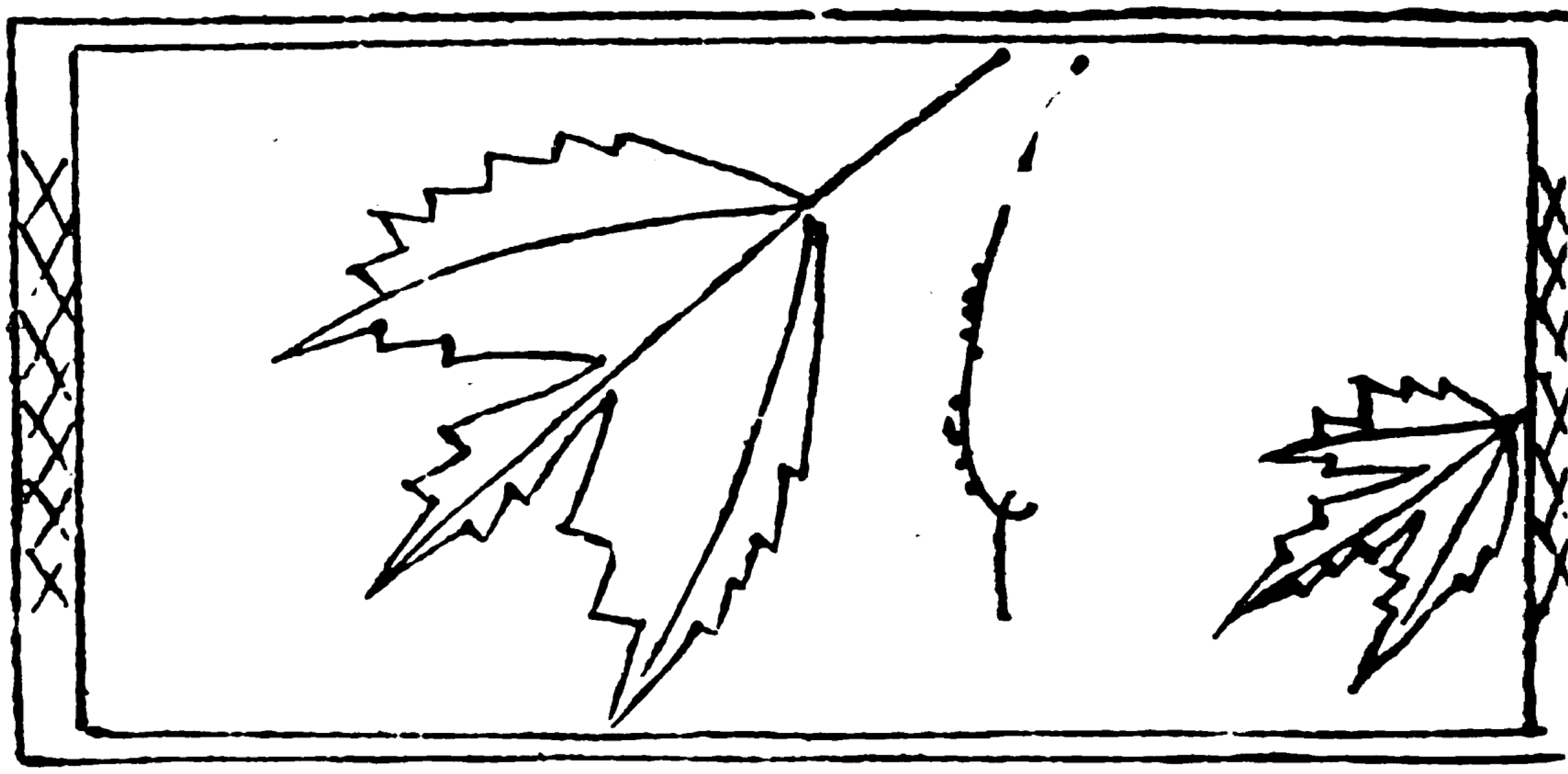
「十日ほどのちになると思つて居りますわ、すると、丁度、篠吉の四十九日も過ぎて居りますので、でも、今日は本當に嬉しうございますわ。いらしつて頂けるときいて。」

未亡人は大きな花瓣がゆれたやうに立ちあがつて、ヴウケの香水を、彼の鼻孔にながしこんだ。

未亡人が立ちよつたあと、彼は便所によつた。小便をながしながら、前の化粧煉瓦にぐつたりと額を押しつけてつぶやいた。

「さうだ、俺はビルヂキングで小便をしてゐるのが、一番いいんだ。ビルヂィングで………。」

排泄も快感であつたが、この薄弱なつぶやきも、彼にとつては快感になつてゐた。



陳述

――被告一ノ瀬醫學士陳述の一部――

佐藤春夫

……………（前略）私ハ日頃カラアノ女トハ不仲デアリマシタ。四年前、學校ヲ卒業シテ醫局ヘ入ツタ最初ノ日カラ、何ノ理由モナク私ハアノ女ニハ好感ガ持テマセンデシタ。虫ガ好カヌトイフノデセウカ、太ツテズングリトシタアノ女ヲ見ルト妙ニ腹立タシイ氣持ニナル事サヘアリマシタ。然シ、ソンナ心持ハアノ女ノ外形カラ與ヘラレルモノデハ決シテナイノデス。アノ女ハ勿論美人デハアリマセンガ、何人ニモ不快ヲ與ヘル程ノ醜貌ヲ具ヘテ居ルワケデハ決シテアリマセン。寧ロ丈コソ低ケレ肥エ太ツタトコロガ堂堂トシテ婦長トシテ風格ハ立派ニ具ハツテ居タ位デス。病院ノ外デチヤントシタ外出姿ヲ見カケタコトモ一二度アリマスガ、ドコトナク貴婦人ノヤウナ風格サヘアツタモノデス。私ト彼女トノ不和ハ、ソンナ外貌ナドノ問題デハナクモツトモツト本質的ニ、ツマリハ相互ノ性格ノ中ニ永久ニ反撥シ合ハナ

ケレバナラナイ何物カガアツタノダト云フコトハ後ニナル程ダンダンハツキリシテ來マシタ。時折、私ハ空想ヲシテミテ、コンナ女ヲ間違ツテ女房ニ持ツタラト考ヘタダケデ、身震ヒスルヤウナ氣ガシマシタ。

アノ女ハ珍ラシク賢イ女デス。女トシテハ賢スギマシタ。私ハアノ女ノ生ヒ立チハ詳シクハ知リマセンガ、同ジ地方出身ノ學生ナドノ口カラ出タトカデ自然耳ニ入ツタトコロニ憑リマスト、アノ女ハ信州ノ片田舍ノ農家ノ生レデ、十四ノ秋マデソノ農村ニ育ツタサウデス。中流ノ農家ダト云ヒマスガ、ソノ年ノ冬、繼母ノ虐待ニ堪ヘカネテ、自分カラ進ンデ諏訪ノ紡績工場ニ入リ、二年ホド女工ヲシタ後、父ヘハ繼母ト別レナイ以上ハ斷然歸鄕シナイト書キ遣シテ、當時□□□病院ノ看護婦ヲシテ居タ同鄕ノ娘ヲ手頼ツテ上京シタサウデス。都會デハ墮落スルカラ首ニ繩ヲツケテモ連レテカヘルト言ヒ張ル父親ヲドウ納得サセマシタモノカ、ソノ儘女中奉公ヲツヾケテ東京ニ居殘リマシタガ、ソノ翌年ノ春ノ□□□病院ノ看護婦試驗ニ合格シマシタ。四年間ノ見習看護婦生活ヲ濟マセタ後、仲間ノ誰彼ガ市内ノ派出看護婦ニナツタリ、或ハ看護婦免狀ヲ嫁入資格ノ一ツニシテ歸國シタリ結婚シタリスルノヲ尻目ニカケテ、アノ女ハソノママ病院附キノ、ソレモ慣レルトハ言フモノノ女トシテハ矢張リ決シテ氣持ノ好カラウ筈モナイ外科附キノ看護婦ヲ志願シテ留マツタノダト云ヒマス。十年程勤メタ結果ニハ到頭、外科病棟附キノ主任看護婦ニマデ經昇ツテ、ソノ後間モナク×××醫科大學ガ新シク設立サレルト同時ニ教授トシテ□□□病院カラ赴任サレタ岡野博士ニ拔擢セラレテ、私共ノ教室ノ婦長ニ轉任シテ來タノデス。全ク適任デシタ。私ガ知ツタ後、アノ女ノ婦長トシテノ手腕ハ實ニ見上ゲタモノデシタ。入院患者ノ病室ノ割宛、患者達ノ家族トノ種々ナ交渉、擔任醫員ノ詮衡、――患者ノ病狀ヤ社會的地位、醫師ノ技倆經驗性格、ソンナ小面倒ナ事ヲ即座ニ見極メテソレゾレピツタリト振當テ、一度ダツテ謬ツタ事ハアリマセンデシタ。手術室ヤ病室デ屢々起ル危急ノ場合ニモ、曾テアノ女ガ狼狽シタ態ヲ見タ事ハアリマセンデシタ。先年ノ震災時ノ突嗟ノ處致等ハ今デモ時々病院ノ話題ニ上ル位デス。兎角若イ女同士ニ有勝ナ嫉視ヤ反目ノ起リ易イ部下ノ看護婦達ノ間ニモ氣受ケモヨク、心服サレナガラ治

メテ居マシタ。尤モ、私ガ知ツテカラ只一度、チヨツト腕拔ケノシタ見習看護婦ノ一人ガ耳カクシニ髪ヲ結ツテ學ベノクリニツクヘ出タト云フノヲヒドク叱責シテ、勿論狂言デハアリマセウガソノ女ガ昇汞ヲ嚥ンダ事件ガアリマシタ。ソンナ些細ナ事ハ別トシテ、トニカク五十ニ近イ病室ト二十人ニ餘ル助手ト三十人以上ノ看護婦トニ係ハル事務ト監督ト給料トヲ朝飯前ノ仕事ニ切裁イテ、ソノ上几帳面デ有名ナ教授ノ身ノマハリノ世話一切ヲ始末シテ居マシタ。ソレデ居テ日曜ト祭日トニハ欠カサズ茶ノ湯ト生花トノ稽古ニ出掛ケテ、生花ノ方ハ既ニ奥許ヲ取ツテ居ルト云ヒマス——常ニ病院ヲ退イテ後ハオ花トオ茶ノ師匠デ身ヲ立テルト言ツテ居タサウデスカラ、勿論、趣味ヤ閑ツブシノ稽古事デハアリマスマイ。カウ申シマストイカニモアノ女ハ唯男優リノ味モ素氣モナイ女ノヨウニモ聞エマセウガ、必ズシモサウバカリデハアリマセン。サスガニ一面ニハ女ラシイ情味モアリマスノデ、若イ獨身ノ助手達ノ汚レタ手術衣ノ心ヅカヒヤ、靴下ノ穴ノ注意ナドヨクシテヤツテ居タヤウデ。——イエ、私ハ一度モソンナ心配ニ預ツタ事ハアリマセン。手術衣ト云ヘバ、思ヒ出シマシタガ、入局當時、一緒ニ任命サレタ助手ノナカデ私一人ガ、ドウ云フワケカ婦長カラ新ラシイ手術衣ヲ渡シテ貰ヘマセンデシタ。私ハ自分ガ人並ミ外レテ丈ガ高イノデ自分ニ合フモノガ備ヘ付ケノ中ニ無イノダラウト單純ニサウ思ツテ居リマシタガ、ソノ後毎年注意シテキマスト新ラシイ助手ガ入局スル毎ニ、キツト一人誰カ手術衣ヲ渡サレナイ者ガアルノデス。ソレガイヅレモ一癖アル男ノミデシタ。ソレデ、私ハ仲間ヨリ一月モ遲レテ、私ノ着テ居タ學生時代カラノモノガ餘リ見苦シイト教授カラ注意セラレテヤツト、婦長カラ渡シテ貰ヘマシタ。

若イ助手達ハアノ女カラ、入院患者ノ取扱ヒヤ手術室デノ失敗ナドデ時々ニハ辛辣ナ皮肉ヲ浴ビセカケラレル事モアリマシタガ、シカシアノ女ハ平生ハヨク女ニハ珍ラシイ縱橫ノ機智ヤ他愛ノナイ諧謔デ皆ヲ喜バセテ、一殺風景ナ醫局ニ海ノ湧クヤウナ哄笑ヲ起サセテ居マシタ。ソレニアノ女ハ將棋ガ好キデ——醫局デハヨクヨク閑ナ時ヤ夜分ナド助手達ガ、教授ニハ内々デ將棋ヲヤリマス——手ノ空イタ時ナドハ稀ニハ婦長モ、岡目八目ノ助太刀ナドスル事モアリマシタ。何デモ

醫局デ將棋ガ流行シ出シタ時、婦長ハ獨案內ヲ買ツテ夜分ノ閑ツブシニ眼ヲ通シテ居タサウデス。サスガニ自分デハ駒ヲ持ツ事ハアリマセンデシタガ、定石ダケハ充分腹ニ入ツテ居ルト見エテ、時々我々ヲ驚カス事ガアリマシタ。コンナ事ハクドクドト申上ゲル必要ハアリマセンデシタガ、要スルニアノ女ハ病院中ノ各科ノ婦長ヲ通ジテ、總ユル點デ最モ才幹アル婦長デシタ。ソンナ次第デモアリ、特ニ教授ガ古クカラ彼女ノ才幹ヲ認メテコノ地位ニ据エタト云フ因縁ヲ顧慮シテカ、――コレハ私ノ僻目カモ知レマセンガ、醫局ノ連中ハ隨分故參ノ先輩サヘアノ女ニハ一目モ二目モ置イテ居マシタ。否、モツト積極的ニ婦長ノ意ヲ迎ヘントスル傾向サヘアツタヤウデス。若イ助手ハ無邪氣ラシク裝フテ、古イ助手ハ如才ナイ世智ヲ以テデス。私ニハソノ二ツトモアリマセン。私ハソンナ場合ヲ見ル毎ニ、婦長モ遂ニハ矢張リ女ダト思ヒマシタ。ソンナ連中ガ何時ノ間ニカ破格ニ一等室ノ患者ヲ擔當シタリ、比較的珍ラシイ手術ヲ割當テラレタリ、或ハ素早ク幸運ナ就職口ヲ見ル者モアリマシタ。ソシテ婦長ノ御氣ニ入リニナツタ者ガ何時ノ間ニカ醫局デ巾ヲ利カシテ居ルノデス。尤モ、單ニ婦長ノ勢力ダケデ、之丈ケノ事ガ出來ルノデハアリマスマイ。婦長ノ影ニハ勿論醫局長ガ居ルワケデセウ。コノ二人ノ間ニハ、何デモ特殊ナ、ト云フノハ互ニ物質的な相互扶助ヲ計リ合ツテ居ルトカデ――、シカシ、コンナ事ハ別ニ必要モナイ事デスシ、ソレニ母校ノ名譽ヲ誤解サセルヤウナ事ガアツテハナリマスマイ。

コレラノ世界デ私ハ實ニ慘メ極マルモノデシタ。無口デ無愛想デ、西鄕騷動ノ時ニ城山デ討死シタ祖父ヲ持チ、漢學デ鍛ヘ上ゲタ父ニハ幼年時代カラ「男子ニ尙ブベキ直情徑行ト沐[illegible]敢爲」ト敎ヘラレ、極端ニ男尊女卑ノ薩摩ニ生レタ私ハ、婦長ニ對スルスベテノ點デドウシタトテ、圓滿ナ同僚ノ諸君ニハ勝目ノアル筈ハナカツタノデス。何時デシタカ酒ノ席デ、ソノ人自身決シテ平凡ナ臨床家ノタイプトハ言ヘナイ或教授カラサヘ、常談ニデハアリマシタガ、何ヲ戶迷ヒシテ醫科大學ヘナドマゴツイテ來タカ、ト言ハレタ私ノ醫局ニ於ケル存在ハ、婦長ノ目ニハ鯉ノ中ノ鯰ホドニ映ジタ事デセウ。否、婦長ノ眼ニダケデハ決シテアリマスマイ。同僚達ノ間ニ於テサヘ私ハ確ニ水ノ中ノ油ダツタノデス。第一私ハ同僚ト

一緒ニ醫局長ノ畫内博士ノ邸宅へ出入シマセンデシタ。出來ルダケ學費ヲ切リ詰メテ居タ私ハ、餘裕ノアル同僚達ト料理屋ノ門ヲ潜ル事ヲ常ニスル譯ニハユキマセンデシタ。觀劇ノ連中ニ加ハルノヲ拒ンダ事ガアリマシタ。猥リガマシイ常談ヲ口ニスル事ヲ憚リマシタ。ソンナ閑ニハ私ハ私ノ趣味タル社會學ナリ經濟學ナリノ書物ノ一頁モ讀ミタイト思ヒマシタ。醫局ノ同僚達ハ氣ノ荒イコノ專門ノ仕事カラノ自然的ナ影響デデモアルノカ皆、ブルータルナ飲酒ト漁色トノ手取早イ快樂ヲ逐フ事ニ急デ、性格ト趣味トノ異ツタ他人ノ心持ナドヲ理解スルニハ餘リニ單純ナ人達デシタ。一ノ瀬ハ社會主義者ダゼ、サウ私ハ言ハレタコトガアリマス。社會主義者――十年モ前ノ流行言葉デアッサリト片附ケテ私ヲ嘲笑スル同僚ノ單純サニ對シテハ、私モモウ苦笑スル外ニ手ハアリマセン。私ハ今ニナッテヤット、卒業間際ニ友人ノ一人ガ與ヘテクレタ忠告ヲヨク思ヒ出シマシタ。彼ハ私ニ精神科へ入局スルコトヲ勸メテクレタモノデス。シカシ私トシテハ、サイエンスヲヤル以上ハ精神科ノヤウナモノヨリモ、基礎醫學デハ病理學ナリ或ハ臨床方面デハ、外科ノヤウナ、シッカリシタモルフオロギイノ上ニ基礎ヲ置クモノデナケレバ物足リナイ氣ガシタノデス。サウシテトテモ基礎醫學ヲヤルダケノ資力ノナイ私ハ、家庭ノ都合モアリタウトウ外科ヲ擇ンダノデシク。併シ今ニシテ考ヘルト、私ハ友人ノ忠告ノ通リニセメテハ内科ナリ精神科ナリニ入局シテ居タナラバ、ソノ方面ナラバ多少ハ内面的ナ人モ居テ同僚トノ間ニコンナギヤップヲ生ゼズトモ濟ングヤウナ氣ガスルノデス。愚痴デス。又、事實ハドノ科デモ皆似タリ寄ッタリカモ知レマセン。ソレニシテモアノ婦長ガ居ナカッタ事ダケハ確實デス。

私ハ他人ニ對スル不平バカリ言ッテ居リマスガ、然シ私自身ノ中ニモ父方ノ母系カラ受ケタ人ト和シ難イ狷介ナ性質ガ遺傳的ニ潜ンデ居テ、其ガ私ノ性格ノ上ニ或ル影ヲ投ゲテ居ナカッタトハ決シテ申シマセン。私ハ自分ノ性格ヲ省ミルト何時デモ自己嫌惡ニ陥入ルノデス。事實、斷ルニ斷レヌ宴會ノ席上ナドデ、同僚ノ皆ガ醉ッテ歌ッテ、中ニハ跳リ出シテ居ルモノサヘアル間ニ、私一人ガ默默トシテ醉ヘバ一層憂鬱ニナル盃ノ數ヲ重ネタ記憶モ二度ヤ三度デハアリマセン。

ソン時私ハイツモ同僚達ヲ羨望シ、自己ヲ嫌惡シテ居タノデス。私ハ自分カラ論爭シカケル事モ、理由ノナイ喧嘩ヲシタ事モ一度モ無イニモカカワラズ、私ハイツノ間ニカ醫局デハ變屈ノ旋曲リニサレテシマツテ居マシタ。結局私モ其ノ方ガ氣樂デシタ。義理ダケハ欠カヌ通一遍ノ交際ヲシ乍ラ、心ハ固ク彼等ニ扉ヲ閉シテ居ル方ガ、肌合ノ合ハナイ人間ト調和スベク重苦シイ然モ無益ナ努力ヲ續ケルヨリ增シダ、トサウ斷念スル氣持ニナリマシタ。入局後一年間程ハ婦長トモ同僚トモコンナチグハグナ心持ヲ隱シ合ツテ愉快デハナイ乍ラモ、トニカク表面ハ圓滑ニ過ギテ來マシタガ、コノ不自然ナ狀態ハ或ル小サナ事件ヲシホニ、端ナクモ先ヅ婦長ト私トノ不和、其カラ私ト同僚トノ氣拙サノ順序デ露骨ニ現ハレル事ニナツタノデス。ソノ事件ト云フノハ滑稽ナシカシソノ結果ハナカナカ笑ツテハ了ヘナイ或ル出來事ナノデス。

私ヨリ二年後ノ卒業生デ栗田トイフ助手ガ居リマス。學生時代カラ評判ノ美少年デ病院中ノ看護婦の噂ノ種デシタガ、ソノ栗田ガ卒業後、各科ノ看護婦ヲ絕望ノ淵ニ沈メテ外科ヘ入局シマシタ。良家ノ生レデ都育チノ栗田ハ醫局ノ誰カラモ愛セラレマシタ。美貌ハ男ニトツテモ確ニ稀ナ天分ノ一デス。手術室デ白イ手術衣ニツツマレタ美少婦ノヤウナ栗田ガ皆ヲ引キ締メテメスヲ操ツテ居ル姿ハ實際惡クハ無カツタデス。栗田ノ事トナルト婦長ハ可笑シイ程ヤキモキスルノデシタガ、栗田モ最初ハ婦長ニ親シンデ居リマシタ。ソレガ二月程經ツト急變シテ妙ニ餘所々々シクシ始メマシタ。婦長ガ醫局ヘ入ツテ來ルト座ヲ立ツテ逃ゲル樣ニ醫局ヲ出テ行ク事サヘアリマシタ。ソノ理由ハ後ニナツテ栗田自身ノ口カラ聞カレマシタガ、ソノ頃恰度、運惡クモ醫局ノ口ノ惡イ連中ガ飛ンデモナイ馬鹿ラシイ常談ヲ言ヒ立テテ居タモノデス。ソレハ、私ガ栗田ニ何カ變態的ナ野心ヲ持ツテヰルト云フノデシタ。イヅレハ私ガ彼等ノ遊蕩ノ仲間入リヲシナイ事ノ腹癒セデセウガ、栗田ノ家ト私ノ下宿トガ近所デ、自然ヨク連レ合ツテ登院スルノト、モ一ツハ私ガ薩南ノ生レデアルカ爲メニコノ馬鹿々々シイ噂ニ或ル可能性ヲ與ヘテ、私ハヨク赤面スルヤウナ揶揄ヲ聞カサレル事ガアリマシタ。ツマリ醫局ノ他愛モナイ冗談デハ私ト婦長トハ美少年ノ栗田ヲ對照ニシテ滑稽ナ鞘當ヲ演ジテ居ル事ニサレテ了ツタノデシタ。眞逆、

此レガ原因トモ思ヒマセンガ、トニカク婦長ノ私ニ對スル態度ハ此ノ頃ヲ境ニシテ斷然ト惡化シテ來マシタ。從前上ノ些細ナ手落ヲ見付ケ出シテハ意地ノ惡イ仕打ヲサレク事ヤ、同僚ノ面前デ私ノ日常生活ニ關スル皮肉ヲ言ハレタ事ハアマリ度々デ、一々ノ場合ハ到底述ベ盡セマセンガ、サスガニ頭ノ冴エタ女丈ケニ辛辣ナモノデシタ。私トアノ女トハ何時トハ無シニ誰ガ見テモ、明白ニ敵同志ニナツタ觀ガアリマシタ。アレ丈ケ思慮ノ深イアノ女トシテハ如何考ヘテミテモ不合理ナ程露骨ニ、時トシテハ醫局ノ同僚デサヘ却ツテ私ノ方ニ同情ヲ示ス事ガアル程、私ニ對スル一擧一動ハ憎惡ト惡念ニ滿チタモノニ感ゼラレマシタ。ケレドモヨク考ヘレバソレモ必ズシモ理解出來ナイ事デハナカツタト思ヒマス。ソノ頃婦長ハコノ年頃ノ女トシテ必ズ遭遇シナケレバナラナイ或ル時期ニアツタノデス。確ニ更年期ダツタノデス。ソレデコソ私ニ對スル時トシテハ非常識トマデ見エル惡意モ、栗田ニ對スル愚カシクモ露（アラハ）ナ熱情モ、始メテ了解デキルノデス。何十年カ壓迫シ續ケテ、シカモ明日カラハ女デハナクナル老イタ處女ノ、恐ラクハ最初デ同時ニ最後デアル情炎ガドンナニ怪奇ナモノデアツタカハ、五月雨ノ降ル宿直室ノ深夜只一人ノ栗田ガ、薄化粧シタ婦長ヲ妖婆ノヤウニ恐怖シタ事ガアルトイフ簡單ナ彼ノ打明話ダケデモ想像サレルノデス。栗田ガ婦長ヲ見テ逃ゲルヤウニナツタノハ勿論コノ事ガアツテカラナノデス。彼女ノコノ情熱ノ對照ハ氣ノ毒ニモ、又當然ニモ、笑ト嘲ト好奇ノ種トヲ病院中ヘ蒔キ散ラシナガラ逃ゲ廻ツテ居タノデス。栗田ハソノ後間モナク地方ノ資産家ノ娘ト結婚ヲシテ、歐洲ヘ夫婦連レデ留學シマシタガ、ソレラスベテノ婦長ノ怨恨ハ何ノ理由モナク、私ノ方ヘ轉嫁サレテ來タノヲ私ハ感ジマシタ。

申シ忘レテ居マシタガ、私ハ入局シテカラ一年半バカリ經ツタ頃、醫師トシテハ頗ル不幸ナ機會ニ遭遇シタノデス。手短カニ申シマスト、私ハ私ノ手術スベキ患者ノ死ヲ手術臺上――殆ンド手術臺上デ迎ヘナケレバナラナイ場合ニ遭遇シタノデス。患者ハ肛門圍炎ノ婦人デシタガ式ニ從ツテ先ヅ腰椎麻醉ヲ行ツテ、イザ患部ヲ切開シヤウトメスヲ執リ上ゲルト同時ニ激シイ呼吸困難ト脈搏ノ不整トガ現レマシタ。手術ハ無論ソノママニ中止シテ病室ヘ還シタノデシタガ、輸送車

カラ病床へ移サレルノモ待タズニ急死シタノデス。「病院デハ勿論毎日ノ様ニ腰椎麻醉ノ一ツヤ二ツハヤツテ居乍ラ今迄ハ幸ニモ——否、寧ロ私ニトツテハ不幸ニモ、曾テ一度モコンナ前例ガ無カツタ事ト、病氣ガ取ルニモ足ラヌ臀部ノ小サナ腫物ニ過ギナカツタ事ト、ソレニソノ頃未ダ決シテ熟練ノ積ム筈ノナイ私ガ思掛ケヌ患者ノ急變ニ狼狽シタ態度ヲ見セタ事トハ、當然ニ醫局内デハコレハ私ノ腰椎麻醉ノ技術上ノ失策デハ無イカト云フ疑惑ヲ喚ビ起サズニハ濟ミマセンデシタ。ソノ翌日憤ル遺族ヲ百方宥メ且ツ説イテ、ヤツテノ事デ病理教室ヘ死因探究ノ目的デ屍體ヲ送ツタノデス。解剖ノ結果ハ、小サナ狹イ心臓ヤ、紙ノヤウニ薄イ大動脈ヤ、葡萄ノ房ホドモアル胸腺ヤ、小腎ノ像ガ子供ノヤウニ劃然ト分レタ腎臓ヤ、極度ニ發育シタ舌根部ノ淋巴裝置ナドノ解剖所見ニ依ツテ、患者ハ所謂胸腺淋巴體質トイフ一種ノ發育不全ノ體質デアツタ事實、並ニコンナ體質ニハ技術上何ノ失策ハ無クトモ完全ナ腰椎麻醉ソノ物ダケガ死ヲ突發サセル事ハアリ得ル事實ガ、學生時代カラ私ガヒソカニ敬慕シテ居タ病理部ノ教授ニヨツテ幸ニモ説明サレマシタ。オ影デ私ノ立場ハ一ト先ヅ救ハレタノデス。ソレデモソンナ危險ナ體質ニ對シテ何故ニ充分、手術前ニ周到ナ注意ガ拂ハレナカツタカト言フ批難ガ、直グソノ後ニ同僚ノ一人カラ發セラレマシタ。元來、戸越——ソノ同僚ノ名デスガ——ト私ハ醫局デモトリワケ仲ガ惡カツタノデス。戸越ハ醫局長ノ腰巾着ノヤウニ附イテ廻ツテ居ル輕薄ナ才子デ、コノ男ニ對シテ私ガ最モ不愉快ナ點ハ、内心ニハ何等ソンナ熱情ナドヲ持ツテモ居ナイ癖ニ、アリ合セノ小才ヲイイ事ニシテ石川啄木マガヒノ歌ナドヲ弄ンデソレヲ鼻ニカケテ居タ點デス。彼ハ最初ニ私ノ性質ヲ了解シテ居ルヤウナ顏ヲシテ居リマシタガ、私ハ自分ノ氣持ヲ僞リタクナイノデ彼ノ理解ヲ拒絶シタ態度デ正直ニ振舞ツタノデス。彼ト私トノ不和ノ原因ハコレデシタ。ソレニシテモ戸越ノ言ヒ分ハ一應ハ尤モデナイ事ハナカツタノデス。シカシ私ニシテモ充分ナ言ヒ分ハアリマス。私ハ珍ラシク彼ト激論ヲシマシタ。相手ガ戸越デサヘナカツタラ私ハ正直ニ怕氣テ閉口シテ居タカモ知レナイノデス。ソレニシテモ患者ヲ初診シテ、診療簿ノ治療方針ノ欄ニ「入院、切開」(アウフネーメン、インチヂオン)ト記入シタノハ醫局長自身デハ無カツタカ。手術前私ニ腰椎麻醉

ヲ命ジ、ソノ準備ヲ指揮シタノハ醫局長ト赤澤婦長トデハナカツタカ。私ハ只彼等ノ手トナリ足トナツタノニデハナイカ。成程、ソレ以上ノ事ヲスレバ或ハ患者ノ爲メニハヨカツタカモ知レナイ。ソレヲ注意シ得ナカツタノハ或ハ惡イデアラウ。シカシソレハ決シテ自分一人ノ責任デハナク、私ガソレヲ行ヘバ越權デアラウ。ソレ程ノ經驗モナク又ソレホドノ資格モナケレバコソ自分ハ助手ヲ勤メテ居ルノダ。私ハソンナ意味ノ事ヲ、相手ガ意地惡ク侮蔑スルガママニ追々ト激シテ仕舞ツテ、醫局ノ前ニ人ガ立止ルホドノ大聲デ呶鳴リマシタ。ソノ事件ハカウシテ私ト醫局長藪内博士及ビ赤澤婦長トノ關係ヲ一層氣拙クシテ、私ノ心中ニ忘レ得ナイ滓ヲ殘シタノデス。イヤ、人々ガ私ニ忘レサセナイヤウニシタノダト言ヒタイモノデス。ト申シマスノハ、前刻申シマシタ栗田トノ馬鹿々々シイ噂ナドガアツテ間モナタ、或ル日、醫局デ助手連ノ晝食後ノ雜談ノ間ニ、ソレハ言葉ノ行掛リ上別ニソウ不自然デモアリマセンデシタガ、傍ニ居合セタ婦長ノ口カラ「何シロ、醫局ニ二年余リモ居テ腰椎麻醉一ツ滿足ニ出來ナイ人ガ居ルノデスモノネエ」ト云フ言葉ガ洩レタノデス。食堂カラ歸ツテ醫局ノ隅デ煙草ヲツケテ居タ私ニハ、前々カラノ話題ガ充分ニ判リマセンデシタダケニソノ一言ガグツト心ニ應ヘマシタ。スルト直グソノ後ニ「何ト云ツタトコロガ外科醫ナンテモノハ、頭ヤ理屈デハナイ、腕ダヨネエ――畫家ヤ音樂家ナドト同ジ事デネ」ト云フ戸越ノ聲ガ聞ヘマシタ。私ハ直グ立チ上ツテ廊下ヘ出マシタガ、皆ノ笑聲ガ後カラ起ツタノヲ聞イタノハ、私ノ氣ノセイデハ無カツタト思ヒマス。ソレカラ後モ屢々、ソレモ醫局ニ教授ナドガ姿ヲ見セタ場合ナドニヨク「二年經ツテモ腰椎麻醉一ツ云々」ト云フ言葉ガ、婦長ノ口カラ洩レテ、婦長ニハコノ言葉ハ何時マデモ飽キナイラシイノデシタ。ソノウチニ又、私ハモ一ツ治療ノ上ノ大失策ヲ演ジテシマヒマシタ。御聽キ下サイ。實ニ變ナ失策ナノデス。

一昨年ノ九月ノ事デシタ。地方ノ開業醫カラ陰莖癌腫ト云フ診斷ヲ付ケラレテ上京シタ入院患者ヲ、私ハ擔當スルコトニナリマシタ。乳嘴狀ニササクレテ、潰瘍ヲ作ツテ、腐レカケタ花野菜ノヤウナ龜頭ヲ持ツタ四十男デシタ。初診シタ間野教授ノ診斷ニハ陰莖癌？トナツテ居リマシタシ、患者ガ何カ國元ニ打捨テ置ケナイ仕事ヲ持ツテ居ルトノ事デシタカ

ラ、患部ヲ根元カラ切斷シテ了フ事ニナツテ居マシタ。私ハ併シ念ノ爲メ、患部カラ組織ノ一片ヲ切リ取ツテ之カラ病理組織學的ノ標本ヲ作ツテミマシタ。言フマデモナク其ニヨツテ一層正確ナ診斷ヲ決定スル爲メナノデス。ソノ檢微鏡標本ヲ一應醫局長ノ篠内博士ニ見セマシタ。所ガ意外ニモ醫局長ハソレヲ決シテ癌腫デハナイト斷定シタノデス。黴毒ニ原因スル單ナル上皮ノ增殖ダトイフ意見ナノデス。男子ノ最モ樞要ナ機關ヲ切除シ去ラナケレバナラナイカ、或ハソノ必要ハ無イカト云フ重大ナ問題ガ、玆ニ生ジタワケデス。申スマデモ無イ事デスガ、篠内博士ノ言フガ如ク癌腫デナク單ニ黴毒性ノ炎症ニ依ル上皮ノ增殖デアル丈ケナラバ、患部ヲ保存シテ他ニイクラデモ療法ガアリ得ルノデス。私ハ迷ヒマシタ。岡野教授ハ多少ノ疑問ヲ殘シテクエツシヨンマーアクヲ附シテ居ルトハ言ヘ癌腫ト診斷シテ居リマスシ、私ハ醫局長ノ篠内助教授ノ診斷ニハ直グ同意シ兼ネタノデス。コレハチト申シ上ゲニクイ事デスガ、篠内博士ハ正式ニ病理學ヲ學ンダ人デハナク唯、學位論文ヲ作ルタメニ××大學ノ病理學部デ二年程研究シタダケノ事ナノデ、以前ニモ一度、私以外ノ一助手ガ見セタ結核ノ病理組織標本ヲ黴毒トイフ馬鹿ラシイシカシ未熟ナ目ニハ有勝ナ誤診ヲシタ事ガアツタモノデス。ソレ以來實ハ私ハ篠内博士ノ病理組織上ノ素養ニハ深イ信賴ヲ置キ難クナツテ居マシタノデ、私ハ考ヘアグネタ末ニソノ組織標本ヲ今一度隣室ノ整形外科ノ醫局ヘ持ツテ行ツテ、ソコノ芳川博士ニ鑑定ヲ乞フタノデス。芳川博士ハ母校ノ病理部ニ久シク助手ヲ勤メテ居ラレル人デ、學生時代カラ病理組織實習デハ親シク指導ヲ仰イダ事モアリマスシ、臨床方面デハ未ダ日ハ淺クトモ病理學ノ方面デハ充分ニ信賴スルニ足ル人デシタ。ソノ芳川博士ガ私ノ相談ニ對シテ與ヘテクレタ意見ハ、コノ標本ノ血管周圍ニ集簇シタ細胞ノ種類ヤ、浸潤性ニ增殖シテ居ル細胞ノナイ點ナドカラ黴毒性ノモノトモ考ヘ得ルガ、正確ナ診斷ヲ付ケルタメニハ他ノ部分カラモ切片ヲ採ル必要ガアル旨ヲ述ベラレタ後、熱心ニモ私ト一緒ニ病室ヲ訪レテ親シク患部ヲ視診シタ上デ更ニ教ヘラレタ所デハ、肉眼的ニハ矢張リ最初ノ診斷通リ癌腫ト考ヘルノガ至當ラシイガ一應ハ驅黴療法ヲ試ミテ見ルノモ無益デハアルマイト云フノデシタ。私ハ篠内助教授――醫局長ニハ芳川博士ノ意見ヲ

モ傳ヘタ後、改メテ治療方針ノ指揮ヲ仰ギマシタ。黴毒ヲ主張スル讃內助教授ノ命ニヨッテ私ハ、トニカク一應サルヴルサンヲ注射シテ見タノデス。所ガ私一個ニトッテハ何ト不運ニモ、患部ハ硬クナリ小サクナリ始メタノダス。數週間ノ驅黴療法ノ後、患者ハ喜色滿面デ私ニ幾度モ禮ヲ述ベナガラ退院シタノデス。今ハ私ニトッテモ愉快ナコノ日、私ハ岡野教授ノ室ニ呼バレタノデ、別ニ怪シミモセズ氣輕ニ行ッテ見ルト、教授ハ思ヒガケナクムツカシ氣ナ顏色デ、例ノ試驗的組織切片——標本ノ件ニ就テ私ニ言フノデシタ。ソレヲ私ガ整形ノ芳川博士ニ見セタト云フコトハ、サウイフコトハ兎角圓滑ヲ缺イテ居ル整形外科トコチラ——ツマリ一般外科デス——トノ、コノ兩者ノ間ニ一層不和ノ種ヲ蒔キ易イ事、以後教室內ノコトハ可成ク教室內ダケデ處理スルコトニス可キ事等ヲ諄々ト說キ且ツ誡メラレマシタ。私ハ幾度カ私ノ輕率ヲ詑ビテ引退リマシタガ、私ノ心中ハ頗ル苦シイモノデシタ。私ガ患者ノ患部カラ試驗的切片ヲ採ッテ出來ルダケ愼重ニ檢索シタガ爲メニ、彼ヲ完全ニ治療シ得タコノ結果ト、ソレトモ私ガ素直ニ岡野教授ノ診察通リ患者ノ患部ヲ切斷シタ場合ト、ソレガ患者ソノ人ニトッテノ問題ハ考ヘ無イマデモ、只醫師トシテノ私自身ダケデモ、ソノイヅレガ幸福デアッタカ。又、醫學ハ一醫局ノ或ハ一教授ノ勢力或ハ名聲ノタメニハ治療ノ可能ナ患者ヲモ不具ニスルコトモ厭ハヌ學問デアルカ。私ハ鬱シ切ッタ氣持デ教授室ヲ出テ醫局へ引退リマシタガ、醫局ニハ恰モ婦長ガ居合ハセテ、私ノ悄氣返ッタ顏ヲ見ルナリ、片頰ニ氷ツイタ笑ヲ浮ベテ言ヒマシタ「一ノ瀨先生、岡野先生カラ何カ好イオ話ガアリマシテ？」コノ一語トソノ表情トデ、私ハハット思ヒ當リマシタ。コノ女メ岡野教授ニ讒訴ヲシヤガッタナ。私ハ掴ンデイタ扉ノハンドルヲ、我知ラズ握リシメマシタ。

コレマデ申シ上ゲマシタ事ドモハ、シカシ、不愉快ハ不愉快デモ、單ニ感情ノ問題ニ過ギマセン。ソレニシテモソノ感情問題が時々ニ起ルノデハナク、刻々ニ在ッタノハ實ニ忍ビ難クハアリマシタガ、デモ私ハ理性デ押ヘル事モ出來マシタ。ケレドモ、私ガ婦長ヤ醫局長ノ讃內博士カラコノトホリ好感ヲ持タレ無クナッテシマッタソノ結果ノ最モ打擊トスル

所ハ、ソンナ日常ノ醫局生活ナドノ不愉快ヤ腹立シサナド云フヨリモ、モット重大ナ點ニ現ハレテ來タノデス。外デモアリマセン。ソンナ事以來、私ニハモウ滅多ニ手術ラシイ手術ガ割當テラレナクナツタノデス。ツマリ私ハ自分ノ生命トスル學術研究ノ好機ヲモウ一切持タセテ貰ヘナクナツテ仕舞ツタノデス。コノ憤ハ理性デハ押ヘラレナイドコロデハナク、却ツテ理性ニヨツテコソ燃エ上ルモノデシタ。念ノ爲メ申シテ置キマスガ、病院デハ入院及ビ外來患者達ノ手術擔當者ノ割當テハ、一ニ醫局長ト婦長トノ權限内ニアルモノナノデス。

コノ邊デ私ハ、先刻カラ屢々申シ上ゲタク思ツテ居タ私ノ家庭ノ事情ヲ少シ語ラセテ頂キマス。郷里ニハ父ト母ト一人ノ妹トガ居リマス。十年前マデハ船着場デ榮エテ居タ九州ノ果ノ小サナ町ナノデスガ、其ガ最近ソノ地方ヘ鐵道ガ敷カレ乍ラ、線路カラ外レテ仕舞ツタガ爲メニ日ニ日ニ火ノ消エタヤウニナツテ行ク町ナノデス。コノ町ハ港デハアリ當然鐵道ノ沿線ニナル事ハ誰シモ疑ハナカツタノデスガ、隣接ノ或ル町ノ富豪ガ地方出身ノ政治家ニ猛烈ナ運動ヲ賴ンダ結果トカデ、私共ノ故郷ノ町ハ港デ海運ノ便モアルカラト云フ理由デツヒ鐵道ノ恩惠ニハ預カレナカツタノデシタ。ソノ土地ヘ私ノ父ハ、歐洲戰爭ノ好景氣ノ頃、多少ノ無理算段ヲシテ田舍町ニハ不相應ナ病院ヲ設立シタノデス。停車場設置ノ期待ガアツタノト、ソンナ山氣ヨリモ寧ロ當時福岡ノ醫科大學ニ學生ダツタ兄ノ成業後ヲ樂シミニシテ計畫シタノデアツタラウト思ヒマスノニ、ソノ兄ハ卒業間際ニ腸窒扶斯デ急死シマシタ。九年前ニナリマス。サウシテ父ハ來年ハモウ六十二才デス。私ヘノ手紙ニハ毎度、老軀ヲ提ゲテ學校出ノ新進氣鋭且ツ神經モ體力モ强健ナ同業者ト角逐スル事ノ大儀サヤ、病院設立當時ノ負債ガ未ダ拔ケ切ラナイ計算ヤラ、道路ノ往診ノ車上デハ今更、愼一——亡兄ノ名デス——ノ事ヲ思ヒ浮ベテハ涙ヲ催スナド、要スルニ人生ニ倦ミ疲レタ老人ノ愚痴ガ繰返サレテ居ルノデス。喜怒哀樂ヲ容易ニ色ニモ見セズ私ヲアンナニストイツクニ教育シタ父ガ、手紙トハ言ヘカウモ愚痴ツポクナツテ居ルノデシタ。母カラハト言ヘバ、病院ヲ建テタノハアノ人ノ業ダト噂サレタホド男勝リナ母ガ、コレモ全ク父ト同ジヨウニ、一家團欒ノ日ノ待遠シイ事、廿四

ニモナツテハ一日モ早ク嫁ガセナケレハナラヌ妹ノ事、日々ニ衰ヘテ今ハ身モ禁シメナクナツタ父ノ事、御許ガ成長ノ日ガ一家ノ話題ニナラナイ日ノナイ事、其等ノ數々ガ女ダケニ細々ト冗々ト嘆カレテ居マシタ。ソンナ故郷カラノ消息ヲ見ル度ニ、私ハ髮ノ灰色ニナツタ父ト母ト又私ノ歸國ノ日マデ老父母ノ爲メニアラユル縁談ヲ斷リツヅケテ居ルト云フ健氣ナ妹トガ、波ノ音バカリ聞エル片田舍ノ、病院ト云フノモ今ハ名バカリデ唯ダダツ廣イダケノ家ノ中ニションボリ、ソレゾレノ死ニカカツタ希望ヲ胸ノナカニ抱イテ、私ヒトリヲソレ程ニ待チ詫ビテ居ル事ヲ思ツテハ、私ハ故郷カラノ手紙ハソノ封筒ヲ見ルノサヘ切ナイ氣持ガシマシタ。ソノ頃ノヤウニ、パナリチユム——瘭疽デス——ヤ、フルンケル——癤デスカ、ソレニ痔ナドノ手術バカリサセラレテ居タノデハ、コノ先タトヒ五年經ツテモ、恐ラク私ガ、一ツパシノ外科醫トシテ通用スル日ハ來ソウニ思ハレナイノデス。カウシテ元來ガ決シテ快活ナ男デナイ私ハ、日増ニ憂鬱ニナリ神經バカリガ妙ニ尖ツテ來マシタ。モトモト賑ナ同僚達トハ口ヲ利クノモ物臭クナリ、稀ニ物ヲ言ヘバ必度爭ヲ起スヤウナ事ニナリマシタ、彼奴ハ變人ダト云フ定評ガ何時ノ間ニカ何モ出來モシナイ癖ニ高慢ト變ツテ仕舞ツタノハ仕方ガアリマセン。中ニハ陰險呼ハリヲスル奴マデ出テ來タノデスカラ、何ヲ、酒ヲ食フノト女ヲ買フノトノ外ハ、醫局長ニ追從スルヨリ能ノナイ奴等ニ俺ノ性格ト氣持トガ解ツテタマルモノカト云フ私ノ心持ガ、サゾ自然ト表面ニ現レタ事デモアリマセウ。婦長ト醫局長トヲ精一杯デ取卷イテヰル同僚ト私トノ間ニ既ニアツタ溝ハ、日ニ日ニ深ク堀ラレツツアツタノデス。

コノ最中ニ、一方ニハ又私ノ心持ヲ今一層無慘ニシテ居ル事件ガ、モウ一ツ附隨シテ居マシタ。ドウニモナラナイ一種ノ感情デ——マア戀愛問題ノヤウナモノデス。丸ノ内ノ會社ニ勤メテ居ル同郷ノ先輩ノ義妹デ、芝ノ某學校ヲ出テカラ音樂ノ稽古ヲシテ居タ女デス。華美デ陽氣ナ都會ノ女デシタ。先方カラ好意ヲ寄セテクレテ、一年程ノ交際デ私ト彼女トノ感情ハ友情カラ一歩ヲ出テ、可ナリ深イ處マデ一致シテ居タト思ヒマスガ、結婚トイフ最後ノ一點デハドウシテモ駄目ナノデシタ。彼女——名前ヲ申シ上ゲル必要モ御座イマスマイカラ假ニA子ト申シテ置キマスガ、A子ニハ九州ノ果迄私ニ

從イテ來ルダケノ氣持ガナイノデシタ。又私ニハ既ニ申シ上ゲタ通リノ家庭ノ事情ガアツテ、女ノ希望通リ東京デ就職スルトカ開業スルトカハ絶體ニ不可能ナノデス。兩方トモ讓歩スル事ノ出來ナイ二人ノ關係ハ前途ノ暗礁ヲ知リ乍ラ未解決ノママデ漂フテ居マシタ。日毎ニチグハグニ離レテ行ク心持ヲハツキリト認メナガラ斷然ト別レル事モ出來ナイ二人デシタ。思ヒ切ツテ彼女ノ義兄ニ打明ケテ力添ヲ仰ゲバ、或ハ何トカ方法モアツタ事デセウガ、私ノ心中ニハ假令肉體的ニハ潔白デアラウトモ省ミテ先輩ノ信頼ヲ今迄裏切ツタトイフ感ガ深イノト、タカガ女一人トノ關係ヲ自分ノ手一ツデ處理シ得ナイト云フ事トガ何トナクウラ恥シイ氣持ガシテ、ソレモ出來マセンデシタ。若シ又、私ガ一切ヲ投げ出シテA子ニ歎願シテ見サヘシタラA子モ或ハ心ヲ動カシテクレタカモ知レマセンガ、コノ私ニハソレモ出來マセンデシタ。私ハ病院ニアツテ、只單ニ彼等ガ世俗的ナ性格デアルガ爲メニ上長ニ氣受ヨク、ソノオ影デ興味アル患者ニ接シ手術ニ從事シテ經驗ヲ豐富ニシ乍ラ、片手間ニハ醫局長ノ盡力ニ縋ツテ臨床部ノ研究室ニ出入シテハ、徐々ニデハアツテモ學位論文ノ製作ニ勵ンデ居ル同僚達ヲ輕蔑シツツモ、シカモ矢張リ否定シ切レナイ羨望ト寂寥トヲ胸ニ包ンデ私ハ、何ノ興味モナイ三等ノ入院患者二人――一人ハ結核性ノ痔瘻ノ女デ、一人ハ象皮病ノ男デス――ソレヲ何ケ月モ持テ餘シテ居マシタ。二人トモ手術ヲ受ケル決心モツカズソレカト云ツテ退院スル事ヲ拒ンデ居テ、醫局ノ皆ガ手ヲ燒イタ患者デス。外來ノ再來ト、小手術室ト、三等室トノミヲ毎日往來シテ、醫局ノ片隅デ助教授ヲ圍ンデ起ル洪笑ヲ、旅人ノヤウナ心持デ聞キナガラ私ハタダ日ノ暮レルノバカリガ待チ遠シイ思ヒデシタ。ソノ癖、夜ハ夜デ、モウ以前ノヤウニ專門ノ勉强ヲスルノデハナク、又道樂ノ經濟ヤ社會學ノ書物ヲ繙クデモナク、寧ロ一切ノ學問ナドハ呪ヒナガラ薄暗イ下宿ノ電燈ノ下デ、故郷ノ事、醫局ノ事、A子ノ事、新婚ノ友人達ノ事、就中圓滿ナ性格トソノ上美貌トヲ持ツテ妻ヲ携ヘテ歐洲ヘ留學中ノ栗田ノ事、サテハ又婦長ノ事、スベテハ三十近イヒトリ者ノ佗シサト、人ニ對スル憤リト運命ニ對スル怨ミトデ、私ノ心ハチヤウド燻リナガラ消エテ行ク火ノヤウデシタ。私ノ人生ニハモウ何ノ光明モ希望モナイ氣持バカリガシマシタ。イツノ間ニ

カ神經衰弱ガ昂ジテ居タノデス。

ソノウチ、去年ノ四月ノ事デシタ。私ト婦長トノ間ニハ、又シテモ重ネ重ネノ不愉快ガ起ツタノデシタ。考ヘテ見マスト、アノ女ト私トノ間ニハ奇妙ニ一定ノ間隔ヲ置イテ周期的ニ、一ケ月カ二ケ月目ニ事件ガ起ツテ居リマス。ドウモ閉止シツツアル月經ノ來潮時ガ、更年期ノ女ニ特有ナ精神上ノ不調和ヲ齎ス時期デハナイカト云フ氣ガシマス。サウ思ヒヤリヲシテ私ハ大抵ノ事ハ我慢シタノデスガ、コノ事件ヲ申シマスノハ、私ノ下宿ノ内儀ノ遠縁ノ娘デ病院ノ見習看護婦ヲシテ居ル女ニ關スルコトデス。コノ女ヘ私トハ下宿デ一二度出會ツタ事ガアツテ顔見知リノ間柄デシタ。ソノ看護婦ガ或ル朝、前日シ殘シタ仕事ノタメニ珍ラシク早ク出勤シタ私一人ガ居ルノヲ見計ラツテ、入ツテ來タノデス。私ニ少々聞キ度イ事ガアルト申スノデス。イヅレハ近頃下宿人ノ私立大學生ト妙ナ噂ノアル内儀ノ事デデモアロウカト思ツテ、私ハ手近ナ椅子ヲススメテ坐ラセタノデスガ、意外ニモ暫クノ沈默ノ後ニ彼女ハ思ヒツメタ表情デ「先生、何デモナクトモメンゼスガ止ル事ガアルモノデセウカ」と問イタモノデス。私ハ、姙娠デハナクトモ何カ精神上ニ激シイ打撃ガアツタトカ或ハ潜伏シタ肺結核ガアツタ場合ニハ、二三ケ月位ハ無イ事ガアリ得ル事實ヲ話シ、實際瘦セギスナ女ノ事デシタカラ、兎ニ角一應内科デ診察ヲ受ケル事ヲ勸メマシタ。看護婦ハ顔ヲ眞赤ニシテ立上リマシタガ、ソノ時扉ガ靜カニ開イテ、早起ノ婦長ガ入ツテ來タノデス。若イ看護婦ガ他科ノ醫局ヘ、シカモ若イ助手ガ一人キリデ居ル所ヘ入ツテ居ル事ハ確ニ穩當デハアリマセン。看護婦ハ眞赤ニナツタママ、狼狽シテ立上ルト、私ニトモ婦長ニトモツカヌ一禮ヲ殘シテ逃ゲルヤウニ立去リマシタ。ソノ時婦長ハ別ニ私ニ對シテハ何モ申シマセンデシタ。不幸ニモソノ看護婦ハ本當ニ姙娠シテ居タノデシタ。病氣ノ態ニシテ辭職シマシタガ、アノ女ニソンナ場面ヲ見ラレテ居ル私ハ到底冤罪ヲ免レル事ガ出來マセンデシタ。「遊ビモセズ、オ酒モ呑マネバ自然トオ手近ノモノヲ撮ミタクモナリマセウカラネ」當テツケガマシイコノ言葉ヲ私ハ何度カ醫局ノ中デ聞カサレマシタコトカ。「オ目出度フ、第二世ガ出來タサウデ」露骨ニ厭ガラセヲ言フ同僚モアリマシ

タ。ソレカラ二月程タツテ病院ヲヤメタ看護婦ガ婦人科ヘ出入リノ機械屋ノ若イ手代ト一緒ニナルマデ、私ハ何度カ腹立シイ情ナイ氣持ヲ忍バネバナリマセンデシタ。イツソノ事何モカモ打棄テテ、故郷ヘ歸ラウカト思フ事モアリマシタ。――亡兄サヘ生キテ居テクレタナラバ、――自我ヲ押通シテ法科ヘ入ツテ居サヘシタナラバ、――私ヲ理解シテクレル同僚ガ一人デモ居タナラバ、――彼女、A子サヘ私ノ傍ニ居テクレタナラバ。十年ノ返ラヌ過去カラ今日ノ日マデ、運命ハ何處マデ私ニダケ意地惡イノカト感ジラレマシタ。トツクノ昔ニ棄テタ筈ノ感傷癖ヲ自嘲シツツモ、ソノ感傷ダケガ唯一ノ逃ゲ場タル自分自身ガ、愛シクモアリ不憫デモアリマシタ。私ハ亡兄ト一緒ニ遊ンデ居ル少年時代ノ夢ヲ見テ、醒メテカラ涙ガ出タコトガアリマス。周圍ノ眼カラ見テモ、ソンナ私ガキツト影ノウスイ慘メナ者ニ見エタニ相違アリマセン。婦長モ、暫クシテ今度ハ極メテ婉曲ニ私ニ對シテ好意ヲ示シ始メタノデス。ケレドモソノ時ニハ私自身ガ、アノ女カラ憐レマレテ居ル自分ヲ腹立シク感ズルバカリデシタ。アノ女ノ好意ハ片端カラ斷然ト撥ネツケマシタ。――疚シイ點ガアルノナラ、俺ト醫局全體トノ前ニ匐ヒ突クバツテアヤマルガ好イ――私ハ心ノ奧デ叫ブ自分自身ノ聲ヲ聞キマシタ。婦長トノ關係ハコノ爲メニ一層惡化シマシタノハ申スマデモアリマセン。コノ責メノ大部分ハ或ハ私ニアルノカモ知レマセン。私ハ赤裸々ニアノ女ニ對スル敵意ヲ露出シマシタ。アノ女ノ卑怯ト自分自身ノ弱サトガ憎カツタカラデス。今デハ朝夕ノ挨拶サヘ碌ニシナイ一部ノ同僚ニモ、モウ何ノ參酌モシマセンデシタ。遠慮ナク彼等ノ愚ニモツカヌ皮肉ニ手強ク應酬シ、――揶揄ニ對シテハ皮肉ヲ、皮肉ニ對シテハ冷嘲ヲ與ヘル事モ辭シマセンデシタ。彼等ノ職務上ノ失策ヲ指摘シ揶揄シ、彼等ノ研究業績中ニ見出セル限リノ誤謬ト缺點トヲ議論シ哄笑スル事ガ私ノ快事ニナリマシタ。私ノ批難ニヨツテソノ杜撰ナ業績ノ半以上ヲ改竄シタ同僚モ、確ニ二人ヤ三人ハ居ル筈デス。私ハ決心ヲシタノデス。郷里ヘハ斷然歸ルマイ。家庭ノ事情ガ如何ニ逼迫シヨウドモココデ何年デモ、如何ニ困窮シヨウトモコノ醫局長ト婦長ト同僚トノ居ルトコロニ踏ミ止マツテヤラウ。今迄ハ彼等ニトツテ單ニ目障リナ人間ニシカ過ギナカツタ俺ハ、今カラ一轉シテ更ニ憎

タシイ存在ニナラズニハ措クマイ。私ハ事實ソノ決心ヲ着々ト實現シ出シマシタ。部長ト醫局長トニ强要シテ同僚ノ手カラ奪フヤウニシテサヘ、種々ノ手術ヲ私ニ渡サセマシタ。モウドノ先輩ノ敎モ必要デハナイ。敎科書ト解剖書トヲ首引シテ深夜迄、明日ノ手術ノ研究ト準備トヲ樂シミマシタ。小サナ失敗ヤ結果ノ良不良ナドハモウ一切拘泥シナイ事ニ腹ヲ据エマシタ。信ズルトコロニ從ツテ好キナ方法ヲドシドシ實行シテ見タダケナノデス。私ハ脹レキツタ膿瘍デシタ。ヤリサヘスレバ、大抵ノ事ハ自分一人ノ力デドウニデモ仕遂ゲ得ルモノダトイフ自信ヲ贏チ得マシタ。同僚トハ相變ラズ絶エズ反目シ啀ミ合ヒ罵リ合ヒタマシタ。私ハ又聲ヲ上ゲテ笑ヒマシタ。マルデ快活ナ人ノヤウニデス。一時ニ急變シタ私ノ態度ニ呆氣ニ取ラレタ婦長モ醫局ノ連中モ、シカシ決シテ沈默ハシマセンデシタ。ソレハ先ヅ醆內助敎授ノ好意ニヨツテ現ハサレマシタ。助敎授ハ或ル日三階ノ店屋ノ一室ニ私ヲ呼ンデ、思ヒガケナクモ一枚ノ寫眞ヲ見セタモノデス。私ニ女房ノ世話シヨウト云フノデス。地方ノ資産家ノ長女ダガ、有爲ノ青年學者ヲ婿ニシテ大成サセタイトノ先方ノ希望ニハ、君ヨリ適當ナ人ハ無イト助敎授ハ云ツタノデス。淺マシイ話デスガ、ソノ寫眞ノ丸ポチヤナ單純サウニ美シイソノ娘ヨリモ、學資ヲ援助シテ貰ヘサウナソノ話ニ、私ハウツカリ心ヲ引カレテ居タヤウデシタガ、心ヅイテ私ハソノ場デ丁寧ニ然シ稍皮肉ニ辭退シマシタ。コノ助敎授ニ毎日仲人面ヲサレテ堪ルモノカ。コノ男ナド何ヲ掴マスカワカツタモノカ。私ノ腹ヲ割ツテ言ヘバ、實際、ソンナ氣持ガシタノデシタ——人ノ親切ヲサヘソノ通リニ受ケ入レラレナクナツタ私ヲ憫レンデ下サイ。尤モ私自身ハモウソンナ餘裕ハアリマセンデシタ。コノ親切ヲ素直ニ受ケラレナクナツタバカリニ、私ハ今度ハ搦目手カラ攻メカケラレル事ニナツタノデス。ツマリ私ヲ地方ノ病院へ赴任サセヨウト云フノデス。北海道ノ或ル炭山ノ病院。東北ノ小サナ町ノ病院ノ外科部長。私ハ親切ゴカシニ醫局長ノ醆內博士ガ持チカケルソンナ就職口ヲ片端カラ斷リマシタ。到頭最後ニ直接、岡野敎授自身ノ口カラ地方赴任ノ勸告ヲ受ケマシタ。敎授直接ノ勸告ハ半バ命令トモ見ルベキモノデス。樺太ノ或ル町ノ病院ノ外科部長トシテ就任シテハドウカ、條件モ好シ二年モ辛抱スレバ後任ヲ送ツテ再ビ醫

局へ呼ビ返ス――ト云フ話ナノデス。私ハ郷里ノ事情ヲモ一通リ述ベタ上、一應熟考サセテ欲シイト答ヘテ引退リマシタ。其時ニハ實ノ所、醫局生活ニモ厭氣ガサシテ居ル折カラデモアリ、又恐シク蒸シ暑イ夏ノ午後ノ事デモアリ、教授カラ話ガアツタ一瞬間、フトソノ北方ノ見知ラヌ町ヘ行ツテ了ツテモ好イトイフ氣持モシナイデハアリマセンデシタ。ソノ翌日ハ私自身モ忙シク教授モ手術ノアル日デ顔ヲ合ス機會ガ無カツタモノデスガ、翌々日ノ朝、登院スルト「イヨウ、オ芽出度ウ、御榮轉ダサウダネ」トイフ奴ガ居ルノデス。私ハ狼狽シテ、大忙ギデ教授室ニ行ツテ、改メテ斷ツタノデシタガ、教授ノ言フトコロデハ、私ガ前々日ノ夕方、醫局長ニ承諾ノ返事ヲシタトノ事ダカラ、タツタ今先方ノ病院ヘ私ヲ推薦スル手紙ヲ出シタバカリダト云フノデス。サウ云ハレテ見レバ私モ、教授カラ話ノアツタ夜、病院ノ浴場デ「カウ暑イト、樺太行ナドモチヨツト惡クナイナア」ト誰ニトモナク言ツタ覺エハアリマス。ソノ時タシカ糠内博士モ入浴シテ居マシタ。シカシ、ソンナ獨語ガ何デ返事ニナリマセウカ。デモ、私ハ教授ノ前デ今度ハ詳シク家庭ノ内幕マデ打明ケテ百方陳謝シマシタ。新シク設立シタ學校デアツテ出來ルダケ學校出身者ノ勢力ヲ地方ヘ扶殖シテ置ク必要ノアル事、ソノ際ニ生返事ヲシテ迷惑ヲ學校ニ及ボサレテハ困ル事、ソンナ訓誡ヲ與ヘラレテ私ハ面目ナク教授室カラ引退リマシタガ、樺太ヘ放逐サレルノタゲハ辛ウジテ免カレマシタ――昨年ノ七月末ノ話デアリマス。此ノ事モマダシモ忍ベマス。如何ニモ無念ナ事ガマダアルノデス。事ハ少シク前後致シマシタガ、昨年ノ五月中、父ハ夜間ノ往診中――父ハ元來外科醫デスガ、田舍ノ事デハアリ、ソレニ病院モ今ハ名バカリデ醫員ニ不足シテ居リマスノデ、場合ニヨツテハ内科ノ患者デモ婦人科デモ扱ヒマス――ソレデ、胃痙攣ノ患者ヲ見舞ツタ歸途、車夫ノ不注意カラ車ガ顚覆シ、ソノ際父ハ右肩ニ打撲傷ヲ負ツタノデス。ソレ以來右手ガ不自由デ、細カイ手術ナドニハ一層ノ困難ト不自由トヲ感ジルニ就テハ、今度コソ是非トモ私ニ、セメテハ適當ナ代理者ガ見ツカル迄ノ間ダケデモ歸省シテ欲シイト再三申越シテ來タノデシタ。私ハソレデ、或ハ少々荷ガ勝チ過ギルカトモ案ジマシタガ、一人私ヨリ一年後輩デ當時就職口ヲ探シテ居タ同僚ニ頼ンデ、父ノ病院ヘ行ツテ貰ツタ

ノデス。私ハ父ノ助手ト云フ意味デ同僚ヲ周旋シタノデシタガ、父ノ方デハ病院ノ全部ヲ任切ルツモリダツタト見エテ、赴任シテ暫クシテカラ、ドウモ少シク間ニ合ヒ兼ネル矢張リ私ニ歸國シテ欲シイ、モシソレガ都合惡イナラバ代リノ人ヲ改メテ周旋シテクレナイカト言ツテ寄越シマシタ。友人ノ方カラモ手紙ガアツテ、稀ニデハアルガ意外ニモ大キナ手術ナドアツテ少シク不安ヲ感ジルナドト言ツテ來タノデス。私ハ直ニ醫局長ニ頼ンデ希望者ガアラバ知ラセテ欲シイト言ツタモノデシタ。「君ノオヤチサンノ病院カネ」ト言ツタキリ一向取合ツテクレマセンデシタガ、ソノ內暫クシテ父カラ一通ノ葉書ヲ同封シテヒドイ立腹ノ手紙ガ來タノデス。葉書ニハ「貴院ニ赴任シタ××君ハ未熟カモ知レヌガ、御令息達二君ヨリハ腕ハ確ダ。本教室ニハ目下希望者ガナイ上、御令息ニハ何故カ東京ヲ離レ難イ事情ガアル樣子ダカラ、暫ク××君デ辛棒サレテハ如何」ト云フ意味ノ事ガタダ學校教室ノ名デ書カレテ居マシタ。私ノ面目ハ丸潰レデシタ。同ジ事ヲ言ハレタニシテモ、セメテ封書デ教授ナリ助教授ナリノ名デ云ハレテ居ルノナラ未ダシモデスガ、コンナ曖昧ナタダ教室トダケデ、同僚カラカ或ハ看護婦カラカ——事實、葉書ノ文字ハ肩上リノイカツイ字デシタガ、ドウモ女ノ手蹟ラシク思ヘマシタ——得體モ知レナイ葉書ナドデ言ハレタトナルト、私ハソンナ人達ニサヘ輕ンゼラレテ居ル事ニナルワケデス。ソノ葉書ハソノ場デ寸断々々ニ引裂イテ了ヒマシタガ、私ニハソレガ段々ニ婦長ノ手蹟ニ似テ居タヤウニ思ハレテ來タノデス。コレハシカシ恐ラク私ノ邪推デアリマセウ。コレハ婦長ヨリ寧ロ外ノ誰カガヤリサウナ事デ、婦長トシテハアマリニ大人氣ナイノデス、ソウ氣ガ附イテ、モ一度葉書ノ手蹟ヲ見タイト思フタ時ニハモウソノ葉書ハ破イテ仕舞ツタ後デシタ。私ニハ今ダニコノ葉書ノ發信人ガ判ラズニ居マス。但、私ガソノ葉書ヲ見テ居ルウチニ直グ先ヅ第一ニ婦長ヲ聯想シタ事ハ事實デシタ。成程、私ノ腕ハ未熟カモ知レマセン。ソンナ未熟ナ腕シカナイ私ナラバ、何故、假令僻陬ノ地デアラウトモトニカク一病院ノ一部長トシテ私ヲ樺太ヘ赴任サセヨウトシタノカ。ソンナ理窟ガアラウカ。一切ノ不合理ハ生來私ニハ我慢出來ナイノデス。私ハ彼等カラコンナ不合理ナ壓迫ヲ何故ニ受ケナケレバナラナイノカ。コンナ人間達ノ仲間ニ居

テソノ支配ノ下ニ何故ニ留マラナケレバナラナイカ。面白クモナイ學問。一人前ノ外科醫。假令有名ナ大家ニナツテ見タトコロデソレガ何ダ。私ハソノ夜、暑苦シイ下宿ノ二階ノ色ノ褪メタ蚊帳ノ中デ何時マデモ眠レマセンデシタ。他人ノ壓迫ハ私ノ多少ノ才能ノ證據デアル トシテ見テモ、人ニカウマデ憎マレナケレバナラナイ自分ガ淋シクモアリマシタ。私ガソノ夜流シ タ冷タイ涙ハコノ感情デス。シカモ出來事ハコレダケデハアリマセン。引續イテ起ツタノハ十月ノ初メデアリマシタ。同期ノ卒業生デ同ジグループノ一人ダツタ高梨――私ニ卒業ノ時、精神科ヘ入局スルヤウニ忠告シテクレタノハ彼デスガ――ソレガ教授ノ推薦ニ依ツテ獨乙ヘ留學スル事ニナツテ居マシタ。ソノ出發ノ當日、私ハ再來ノ外來患者ヲ比較的仲ノ良イ同僚ノ内山ニ頼ンデ、高梨ヲ横濱マデ見送リマシタ。××研究所ニ居ル淀井、○○醫專ノ講師ヲシテ居ル有田ソノ他二三ノ友人達ハ前夜カラ送別ノ宴ヲ張ツテ終夜、別離ヲ惜ミ、私ヲモソノ仲間ニ誘フテクレタノデシタガ、私ハソレニ加ハル事ガ出來マセンデシタ。セメテ埠頭ニハ見送リタカツタノデス。ソノ見送リガ濟ンデ一同ハ南京街ノ支那料理デ晝食ヲシ、ソレカラ久シ振リニ皆デ當モナク散歩ヲシマシタ。私ハタ方迄ニハ是非トモ入院患者ヲ診ナケレバナラナイノデスシ、ソレニ酒ハ飲メマセンカラ、モウ一度飲ミ直スト云フ仲間ヲ無理ニ振切ツテ一人海岸通リヲ電車路ニ沿フテ歩イテ歸リマシタ。テーブノ虹ノ上カラ帽子ヲ振ツタ高梨ノ泣キ笑ヒノ樣ナ顔ヤ、彼ノ前ニ展ケテ居ル洋洋タル前途ヤ、又今頃ハ打解ケテ樂シゲニ再ビ盃ヲ交シテ居ル淀井ヤ有田ヤ、ソノ彼等ニモ亦約束サレテ居ル未來ヤ、サテ翻ツテ私自身ノ落莫ヲ顧ミタ時、私ハ明ルイ秋ノ日ノ港町ノ雜沓デ、危ク涙ガ落チルヤウナ氣ガシマシタ。フト頭ヲ擧ゲタ時、私ハ季節ノ帽子ヲ並ベタ唐物屋ノ飾窓ノ前ヲ歩イテ居タイデス。私ハフラフラトソノ店ヘ入リ、値段モ碌々聞カズニ紺ノベルベツトノ帽子ヲ買ツテ了ツタノデス。其日落合ツタ友人ノ中デ私ノ帽子ガ無論一番貧弱デ、買ツテ三四年ニモナル私ノモノハ煤ケ切ツテ居タシ、實際コノ秋ニハ新調スルモリデ、夏ノボーナスヲ共ニ宛テテ貯ヘテ居タノデス――臨床部ノ醫局デハ二年モ居レバ大抵ノ助手ハ有給ニナレルノデスガ、私ハ後輩ニ追ヒ抜カレテ未ダニ無給デス。只盆暮位

敎授ノポケツトカラ出ル少々ノ賞與ヲ貰ツタダケデシタ。學生時代カラ私ハセメテ帽子ナリステツキナリ、何カ一ツ丈ハ贅澤ナモノヲ持ツテ、ソレヲ出來ルダケ永ク用ヰル習慣ガアリマシタ。毛ノフカフカシタ兎ノ皮ノ樣ナベルベツトノ帽子ハソノ頃カラ欲シカツタノデス。私ハ京濱電車ノ中デ新シイ帽子ヲ膝ニ乘セテ撫デ廻シテ居ル間ニ、ヤツト私ノ先刻迄ノ憂鬱ガ少シヅツ薄ライデユクノヲ覺エマシタ。ケレドモ今度ハタカガ帽子一ツデ慰メラレル自分自身ガ腹立タシクモイトシイ氣持ガシテ來テ、直グニ再ビ氣ガ滅入ツテ來タノデシタ。病院ヘ歸ツタ私ハ大急ギデ擔任入院患者ヲ廻診シ終ツテ陰氣ニ疲レテ醫局ヘ戾リマシタ。何時ニナク醫局ニハ十人バカリモ助手ガ集ツテ居マシタガ、私ガ室ニ入ルト彼等ハ一齊ニハタト口ヲ噤ンデ私ノ上ニ眼ヲ注イダモノデス。彼等ノ傍ニハ婦長ガ居テ、婦長ノ手ニハ私ノ新シイ帽子ガ摑ミ上ゲラレテ居ルトコロダツタノデス。イヅレハ聞カサレル厭味ダト覺悟シテ居リマシタガ、婦長ノ口カラ出タノハ「一ノ瀨先生、之ハ隨分高イオ帽子ダサウデスネエ」トイフ案外何ノ奇モナイ言葉デシタ。ケレドモコノ平凡ナ一語ニドンナ嘲笑ガ含マレテ居タカハ、一時間後ニハ厭應ナシニ知ラネバナリマセンデシタ。見習看護婦ノ一人ガ私ニ、コレハ何氣ナク話シタトコロニ依ルトソノ前日同僚ノ一人ガ郷里カラ來タ十圓ノ小爲替ヲ一枚紛失シタノダサウデス。醫局長ハ何ノ理由モ語ラズニ豫メ前日ノ夕方カ　豫メ外來ヲ人ニ賴ンデ、ソノ日一日ヲ休ンデ居タ私ハ、コノ際ト云ヒ、日頃ノ立場トイヒ、忌シイ嫌疑ヲ受ケルニ充分ダツタノデセウ。身分不相應ナ買物ヲシテ居タ事モ一層不利デシタ。コレハ決シテ私ノ邪推デハアリマセン。婦長ガ私ノ帽子ニ與ヘタ批評ノ日頃ニモ似ヌ尋常サガコレノ確證デス。ソノ夕方、私ハ疾走スル滿員電車ノ窓カラ、買ツテ半日トハ經タヌ氣ニ入リノ帽子ヲ外濠ノ水ノ中ヘタタキ込ンデ了ヒマシタ。人ノ出盛ル宵ノ町ヲ帽子モ無イ私ヲ怪シム行人ヲ意識シツツ私ハ、恥ト怒ト悲トガ眞黑ニ渦卷ク心ヲ抱イテ下宿ヘ歸リマシタ。手モツケヌ夕飯ノ膳ヲソノママ下ゲサセ、冷々トスル闇ノ中ニ何時マデモ何時マデモ坐ツテ居マシタ。帽子——爲替——高梨。唯ノ一人カラ何時ノ間ニカ陰險ナ奴ニナリ、今度ハ盜癖マデアル私。私ハ私ダケガ秋風ノ中ニタダ一人取殘サレタ氣持ガシマシタ。夜廻

リノ柏子木ニ氣ガ付イテヤツト洋服ヲ脫ギカヘマシタ。枕ノ下ノ蟲ノ、聲ヲ聞キツヅケテ私ハ、歸去來ヲ感ジマシタ。何モカモ棄テテ故鄕ヘ歸ラウト思ヒマシタ。然ウデシタ。アノ時、故鄕ヘ歸ツテ居タナラバ、コンナ事ニダケハナラズニ濟ンダノカモ知レマセン、デモ、翌日ノ朝ニオルト、私ハ自分ノ昨夜ノ感傷ヲ自嘲シテ、ドンナ事ガアツテモアノ醫局ヲ出ルモノカト思ヒマシタ。醫局ハモウ私ニハスツカリ戰場ダツタノデス。

――ソノ紛失シタ小爲替デスカ。私ガ盜ンダ筈ノ小爲替ハ、盜マレタ筈ノ當人ノ書物ノ間カラ、ソノ翌日出テ來タサウデス。

此ノ事ガアツテ暫ク後ノ事デアリマス。私ガ業ヲ煮ヤス程持チアグネテ居タ例ノ象皮病ノ患者ガ到頭決心ガツイテ手術ヲ受ケルト言ヒ出シタノデス。一體、象皮病ノ手術ニハ幾通リモ方法ガアルノデスガ、一トシテ著シタ效果ノ上ルモノハ無イノデス。唯一ツ私ノ學校ノ整形外科ノ敎授ガ考案シタ手術法ダケガ多少ノ效果ヲ收メル事ガアルノデ、私ハ度々ソノ手術ヲソノ患者ニ勸メテ居タノデス。手術法ハ患者ノ皮膚ニ健康ナ他ノ部分ノ皮膚ヲ縫合セテ鬱滯シタ淋巴ノ還流ヲ計ルノデ、ソノ患者ノ場合デ申シマスト、患者ノ下腹部ノ健全ナ皮膚ト皮下組織トヲ瓣狀ニ切取ツテ、患部タル一升樽ホドノ睾丸ノ皮膚ヲ縫合スルノデス。コノ方法ノ創始者デアル整形外科ノ河內敎授ハ、研究ノ必要上當然ヒドク興味ヲ持ツテ居ル手術デスカラ、私ノ患者モ敎授ニ手術ヲ依賴シテ了ヘバ喜ンデ引受ケテクレル筈デスガ、私ハ自分ノ鄕里ガ比較的象皮病ノ多イ大州ノ西海岸デハアリ、又此ノ前ノ龜頭癌ノ場合ニ岡野敎授カラ受ケタ叱責的注意モ身ニ泌ミテ居ル事デハアリ、何ヨリモ第一ニハ私自身ノ學術的興味カラ自分自身ノ手デコノ手術ヲ遂行シテ見タイト思ツタノデス。ソコデ、ソノ日ノ午後、整形外科ノ醫局ニ河內敎授ヲ訪ネテ、手術法ニ關シテ約一時間ホド敎ヲ乞フタ後、整形外科ノ醫局ヲ出マシタ。ソノ閻會頭ニドアノ把手カラマダ手ヲ離サナイ私ト病棟カラ廊下ヲ步ツテ來タ赤澤婦長トガ、パツタリト目ヲ見合セタノデス。噫、今ニナツテ思ヘバ、ドウヤラアノ女ヲ刺シタ事ハ、前世カラノ約束事デアツタカノヤウニ思ハレテナリマセン。

コノ時私ガ整形ノ醫局カラ出ル姿ヲ、科長ニ見ラレタノハ、外科ノ醫局ニ於ケル私ノ立場ヲ一時、モウ殆ンド囘復シ難イホド不愉快ナモノニシテ了ッタノデス。一體、一般外科ニ整形外科トハソノ境界ノ至ッテ漠然トシタモノデ、近頃ニナッテ漸ク整形外科ガ獨立シタ迄ノ以前ハ同一ノ科デ取扱ハレテ居タノデス。今日デモ市井ノ小サナ病院デハ區別シテ居ナイ位ノモノデスガ、各大學病院デハ講座ヤ教室ハ勿論、醫局モソレゾレ獨立シテ居リマス。私ノ席ヲ置イタ一般外科ノ教授ハ整形外科ノ教授トハ性格モ異リ、年齢モ違ヒ、以前カラ、表面ハトモカクモ、内幕ハ決シテ圓滑デハナカッタサウデスガ、當時ハ特ニ事々ニ、例ヘバ學年始メノ豫算デノ教室費ト入院患者收容病棟ノ爭奪、部下ノ就職口ノ爭奪、或ハ前年度ノ外科學會デ擔當シタ宿題報告ノ研究業蹟ニ對スル兩科ノ教授ノ學術上ノ意見ノ相違、其他醫局員ニサヘ窺ヒ知レナイ種々ナデリケートナ、性格的相違カラ生ズル感情ノ縺レ等デ一シホ不和ガ昂ジテ居タ折カラデシタ。教授ノ不和ハ次次ニ教授ニ阿諛スル一部ノ醫局員ノ不和ヲ誘引シ、ソノ一週間ホド前ノ或晩ノ如キハ、私ノ醫局デハ教授ヲ擁シテ行キツケノ待合デ騒イダ上、酒ノ醉ニ任セテ教授ノ鼻息ヲ窺フ二三ノ助手達ハ可成リ激烈ナ言葉ヲ整形外科教授ニ對シテ吐イタモノダト云フ事デシタ。醫局デ孤立シテ居ル私ハ、幸カ不幸カソンナ會合ノアッタ事モ後々マデ知ラサレズ從ッテ勿論出席ハシマセンデシタ。所ガ偶然ニモ同ジ待合ノ隣室ニ、併テ一年程整形外科ニ籍ヲ置イテ後内科へ轉ジタ一助手ガ馴染ノ藝者ト來合セテ居タトカデ、襖越シニ聞キ込ンダ隣席上ノ話ヲ、一人一人ノ言葉ドホリ洩ラサズ聞キ書キシテ置イテ、翌朝早速整形ノ方へ報告シタモノダサウデス。筒抜ケニ知レテ了ッタ私ノ醫局デハ、裏切ガ居ルト血眼デ騒イデ居マシタガ、結局何處カラ洩レタカハ分ラナカッタサウデス。ソレデ整形ノ方デ何モカモ知ッテ居ルヤウナ顔ヲスルノハ或ハ嘘ダラウト云フ事ニナリカカッテ居タトコロダッタノデス。折モ折、患者ノ事デ整形ノ醫局ヲ訪ネタ私ハ、ソレ等ノ事情ハ勿論ソンナ會合ノ話モ前述ノ通リ一向知ラナカッタノデスガ、婦長カラ整形ノ醫局デコソコソ話ヲシテコソコソト出テ來タト醫局長ニ告ゲラレテハ、到底免レヌ汚名ヲ背負ハネバナリマセンデシタ。何モ知ラナイ私ノ冤罪ヲ氣ノ毒ガッテ整形ノ一助手

ガ私ニ事情ヲ明シタノデシタ。裏切ルベキ材料ヲスラ與ヘテ貰ヘナイ私ガ、裏切者ニサレテ了ツテ居タノデス。私ハモウ腹ヲ立テルノモ馬鹿ラシイ氣持デシタ。タカガ一大學ノ一分科ノ一教室ノマルデ芥子粒ホドノ事ヲ、大ノ男ガ眼ノ色ヲ變ヘテ騷イデ居ルノガ寧ロ笑止トモ思ハレテ來タノデス。シカシ哲人デナイ私ハ、實際ノ生活デハソンナ呑氣デハ決シテ居ラレマセンデシタ。私ノ職務上ノ壓迫ト不便トハ醫局長カラ婦長カラ、最近デハ教授カラサヘ加ヘラレテ居タノデス。兀々シク申シ述ベマシタガ、私トアノ女トノ間ニハコレダケ入組ンダイキサツガアリ、私ハアノ女カラ、引イテハ同僚更ニハ上長カラコレ丈ケノ苦痛ヲ嘗メサセラレテ來タノデス。

アノ女ヲ刺シタ當日ハ、私ハ朝カラ頭ノ重イ苛立シイ氣持ガシテ居マシタ。前晩殆ンド一睡モシテ居ナカツタカラデス。父カラトA子カラトソレゾレノ手紙ガソレゾレニ私ニ絶望ヲ齎シテ、前日ノ夕方屆イタノデス。父カラノ手紙ニハ、コノ年末ニハドウシテモ病院ヲ銀行ニ渡サナケレバナルマイ、萬一コノ十日ホドノ運動ガ効ヲ奏シテ銀行ノ問題ハ一時免レ得タニシテモ、來年カラハドウシテモ歸郷シテ貰ハネバナラナイ——實ハモウオ前ノ學資ヲ送ル事スラ重荷デアル、ト云フ意味ガ半バ哀願的ニ半バ命令的ニ兀々ト一丈モアル卷紙ニ腦出血後ノ震ヘル手蹟デ書カレテアリマシタ。A子カラハ又A子カラデ、コレハ至極簡短ニ、兼々兩親カラ勸メノアツタ縁談ガ纒マリ、來春三月ニハ式ヲ擧ゲルコトニ決定シタ故、アナタモワタタシナドヨリモツト適當ナ人ト早ク結婚シテタレル事ヲ望ム。今迄ノ手紙ヤ思ヒ出トナルモノハ一切燒キステテ欲シイ、トノ意味ガ書カレテアリマシタ。

アノ日ハ十時過ギニナツテ出勤シマシタ。簡短ニ義務ダケヲ濟マセテ、私ハ晝間ハ無人ノ宿直室ノベツドノ中デ放心シタ何時間カヲ頭カラ毛布ヲ引被ツテ身動キモセズニ過シマシタ。日ノ暮レルノヲ待チ兼ネテ醫局ヘ立寄ツテ歸仕度ヲ始メマシタ。鞄ヲ抱ヘテ椅子カラ立上ツタ時、ドヤドヤトオ湯カラ歸ツタ同僚ガ雪崩レ込ミマシタ。皆ノ中ニ雜ツテ居タ醫局長——糠內助教授ガ私ヲ呼ビ留メ、皆シテコレカラホテルノクリスマスイブヘ行ク筈ダカラ私ニ今夜ノ宿直ヲシテ欲シイ

ト云ハレマシタ。斷ハルヒマモナク傍カラ婦長ガ口ヲ出シマシタ「一ノ瀬先生ハ學者肌ノ方ダカラ、ソンナ子供ダマシノ場所ナド行キタタハアリマセンワネ。」コレ位ノ事ニハモウ慣レ切ツテ居ル私デスシ、ソンナ連中ト一緒ニクリスマスノ馬鹿騷ギヲ見タイトモ思ヒマセンシ、火ノ氣ノナイ下宿ヘ歸ルノモ、宿直室ニ泊ルノモ何レハ大シタ變リモアリマセンガ、今夜ダケハトニカク靜カニ自分ノ室デ考ヘタイ氣持ガシテ居タノデスガ、結局無理押シツケニ私ハ當夜ノ宿直ニナツテシマヒマシタ。

夕食後、後頭ノ心ガ痛ムノヲ我慢シナガラ病棟ヲ廻診シテ、ソレカラ醫局ノ瓦斯ストオブノ前デ煙草ヲ喫シ乍ラ昨夜カラノ續キニ思ヒ沈ンデ居マシタ。六時頃デシタ、ノツクスル音ガシテ病棟附ノ看護婦ガ入ツテ來マシタ。ろ號病棟ノ蟲様突起炎ノ患者ガ腹痛ヲ訴ヘルカラ今一度廻診ヲシテ欲シイト云フノデス。患者トイフノハ其ノ日ノ午後內科カラ廻サレテ來タノデ、明日、蟲様突起切除手術ヲ行フコトニナツテ居ル少年デス。一應診察ノ上別ニ激變ノナイノヲ確メタノデ、餘リ度々鎭痛劑ヲ注射シテハ腸ノ痲痺ヲ促シテ、手術後ノ經過ガ不良デアル事ヲ說キ聞カセマシタガ、眠ル事モ出來ナイヤウデハ手術ニモ差支ヘルト思ヒ直シテ、パントポン半筒ダケヲ注射シマシタ。室ヲ出ヨウトスルト附添ノ看護婦ガ廊下マデ追ヒ掛ケテ來タノデス。先刻迄居タ患者ノ母ガ明日ノ準備ノタメニチヨツト歸宅シテ、患者ハ看護婦一人キリデハ不安ガルノデ、若シ私ガ暇ナラバ暫ク病室ニ居テヤツテクレナイカ、附添看護婦自身ノ願デモアリ患者ノ希望デモアルト云フノデス。私ハ引返シテ患者ノ枕モトノ椅子ニ腰ヲ下シマシタ。先刻ニ比ベルト少シク落チツイタ患者ハ、我儘ヲ謝スルカノヤウニニツト白イ齒ヲ見セテ默禮シマシタ。私ハ手持無沙汰ニ新聞ヲ擴ゲ乍ラ、電燈ノ青イシエードノ下ノ患者ノ顏ヲ、私ハ今一度偷ミ視マシタ。腺病質ノ色ノ蒼白イ靜脈ノ透イテ見エルイカニモ都會ニノミ見ル型ノ少年デアリマシタ。發熱ノタメニ頰ガ少シク紅潮シテ、長イ睫毛ノ下ニ薄青イ影ガ出來、呼吸ノ度毎ニ端正ナ鼻翼ト唇トガ微カニ動クノヲ見テ居ルト、氷枕ノ上ノ五分刈ノ頭サヘナタバ寧ロ少女ト云ツク方ガ適切ナ形デアリマシタ。注射ノ効果デウトウトシ乍

ラ、廊下ヲ通ル人ノ氣配ヤ遠ク電車ノカーブスル音ニ折々目ヲ明ケテ、ソノ都度私ノ方ヲチラト見テハ又眼ヲ閉ヂルノガ如何ニモ可憐デシタ。無口デ無愛想ナ私ハコンナ親愛ト信頼トヲ患者カラ示サレタ事ハ未ダ曾テ無カツタノデス。私ハ思ヒ掛ケナイ今夜ノ當直ガ必ズシモ不愉快ノミデハナカツタヤウナ氣ガシマシタ。少年ノ面影ガドコカ私ヲ棄テテ嫁グトイフA子ニ似テ居ル氣持モシマシタ。馬鹿ナ話デス。前夜カラノ不眠ノタメニ私ノ體ハ疲レ切ツテ、私ノ心ハヤツトA子ヘノ憎ミニ倦ミ初メテソノ代リニ甘イ哀愁ガ襲ヒカカラウトシテ居ルノデス。私ハ立上ツテ患者ノ眠ヲ妨ゲヌヤウニ足音ヲ忍バセテ病室ヲ出マシタ。

アダリンヲ二服呑ンデヤツト私ハ、宿直室ノバネノ弛ミ切ツタ寢台ノ上デ眠ニ就キマシタ。

二時間モ眠ツタデセウカ。私ハ再ビ病棟看護婦ニヨツテ起サレマシタ。例ノ患者ガ激シイ腹痛ヲ訴ヘテ吃逆ヲ始メタトイフノデス。私ハ飛ビ起キマシタ。シマツタト思ヒマシタ。病室ヘ驅ケツケテ見ルト、患者ハ默ツテ腕ヲ伸シテ私ノ手ニ縋リツキマシタ。額ニハ玉ノヤウナ汗ガチツトリト湧イテ居マシタ。脈搏ハ百三十モアリ、吃逆シテ居マシタ。激シイ腹痛ヲ訴ヘ、帶ヲ解カス事モヤツトデシタ。腹壁ハ板ノヤウニ固クナリ指一本觸レテモ悲鳴ヲ擧ゲルノデス。大キナ眼ヲ瞬イテ私ヲ見ツメル患者カラ顏ヲ反ケテ私ハ憐憫トモ同情トモツカナイ混亂ト、思掛ケヌ急變ニ呆然トシタ狼狽トヲ、トニカク一瞬間ニ冷靜ナ醫師トシテノ自分自身ニ迄取戻シタノデシタ。私ハ青褪メタ患者ノ母ヲ廊下ヘ呼ビ出シテ、怖シイ穿孔性腹膜炎ヲ發シタ事、即座ニモ開腹手術ノ必要ナ事ヲ告ゲル一方、看護婦ニハ婦長ヲ迎ヘニ行カセマシタ。炎症ノアル蟲様突起ヲ持ツテ居ルノハ腹中ニ爆裂彈ヲ藏シテ居ルモ同然ダト云ツタ老大家ガアリマスガ、コノ患者ハ正シクソノ爆彈ガ破裂シタノデス。發病以來、町醫者ノ診斷ガ區區デ入院ノ期ヲ遲ラセタノト、入院ノ爲メニ自動車ニ揺ラレタノト、入院直後ニ行フベキ手術ヲ患者ノ都合デ一日延バサネバナラナカツタノトガ、失敗ノ原因ダツタノデス。驚イテ驅ケツケタ患者ノ父ニ私ハ寸時ヲモ爭フコノ場合ノ病症ヲ手短カニ説明シテ、直チニ開腹手術ヲシナケレバ百中ノ百迄生命ハ

覺束ナイ事、手術サヘ行ヘバ萬一縷ノ希望ハ殘サレテ居ル事ヲ説キ聞カセマシタ。勝手ノ違フ醫局ノ椅子ノ上デ震ヘテ居タ父親ハ眉宇ノ間ニ決心ノ色ヲ浮ベテ目ヲシバタタキ乍ラ「ヨウガス、ヤツテ頂キマセウ。ドウゾ」ト言ツタモノデス。私ハ案外ノ氣持ガシマシタ。今迄ニモ病院デハコレト同ジ場合ガ無論幾度トナクアルノデスガ、コノ一カ八カノ手術ヲコンナニ易々ト承諾シタ例ハ未ダ曾テ無イカト思ヒマス。ドンナ知識階級ノ家族デモ開腹手術ト言ヘバ先ヅ家族ノ方デ二ノ足ヲ踏ミ、ソノ爲メ永久ニ機會ヲ逃シテシマフノガ常ナノデス。私ハ、眼前ノ胡麻鹽ノ髮ヲシタ前垂掛ノ、日本橋ノ商人デアルトイフコノ父親カラコンナ返事ヲ聞カウトハ、實ニ夢ニモ思掛ケナカツタノデシタ。私ハ胸ノ透ク思ガシマシタ。ナホ手術者ガ私デハ不安ナラバ、教授ナリ助教授ナリヲ迎エテモ好イト私ハ言ヒ添ヘタノデスガ、之モ實ニ氣持ノ好イ返事デシタ。「イヤ、先生ニオ願ヒ申シマセウ。何モカモ因縁デス。コノ上ハ神頼ミダケデス」――私ハ自分ノ眼頭ニ溜ル涙ヲ意識シマシタ。私ノ四年間ノ醫局生活ノ間ニ、今夜ホド、患者ト患者ノ家族カラ、否、スベテノ人間カラコレホドノ信頼ヲ受ケタ覺エハ、一度ダツテアツタカ。昨夜來ノ心痛ト疲勞トノ結果、明ニ私ハ感傷的ニナツテ居タノデス。ソレニシテモ私ハコノ事ヲ一應ハ醫局長ニ傳ヘテ指揮ヲ仰グノガ穩當ダト思ツテ、早速ホテルヘ電話ヲ掛ケマシタガ、年末ノ事デハアリ、殊ニクリスマスノ夜トテ電話ハ仲々通ジマセンデシタ。ヤツト通ジタカト思フト其ト覺シイ一團ハ一時間以上前ニ引揚ゲタト云フノデス。一時間モ前ニホテルヲ出タトスレバイヅレハ何處カヘシケ込ンダモノト考ヘテ、平常ソンナ交際ノナイ私ニハ行先ヲ探スニモ一層手間取ルノデス。私ハ耳鼻科ノ宿直員ニ麻醉ヲ引受ケテ貰ツテ私自身ノ手デ手術ヲヤツテ見ヨウトキメマシタ。昨夜カラノ不眠ト煩悶トニ疲レタ身ヲ危ミナガラモ、コノ患者ダケハドウシテモ助ケルト決心ヲシマシタ。婦長モ事情ガ事情ダケニ今夜ハ流石ニ私ノ執刀ニ異議ハ申シ立テマセンデシタ。私ハ醫局デウヰスキーヲ一杯傾ケテ――コレハ私ダケデハアリマセン大手術ノ前ニハ誰モガヤル事デス――私ハ手術場ヘ出掛ケマシタ。私ハ明ニ亢奮シテ居マシタ。醫師トシテノ大キナ信頼ヲ示サレタ喜ビ。久振リデ手術ラシイ手術ガ出來ル緊張。私ハ亢奮シ切ツテ居▼

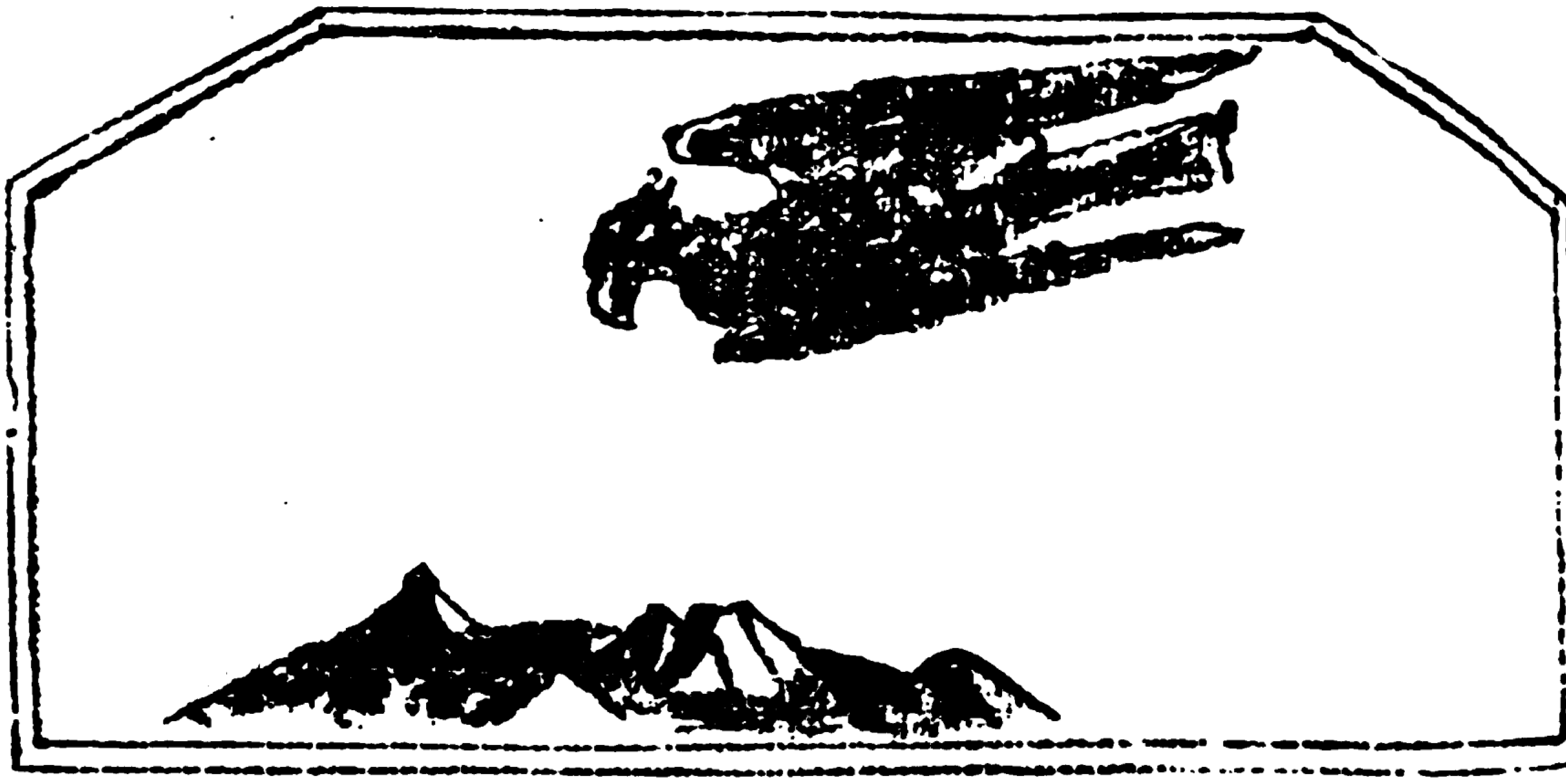
シタ。酒ノ廻ルニツレテ、頭ヲチヨクチヨク掠メテ居タ昨夜來ノ煩悶モ、手術ニ對スル不安モスッカリ消散シテ了ヒマシタ。私ハ自信ニ輝イテ冴々トシタ氣分デシタ。所ガ、ドウデセウ、ソノ氣持ハ手術室ニ入ルト直グサマ、婦長ノ一言デ無慘ニモ眞向カラ粉碎サレタノデス。アノ女ノ只ノ一言ニデス。アノ女ハカウ申シタノデス「一ノ瀬先生、シツカリヤツテ下サイヨ。コノ間ノ婦人科デノ事モアリマスカラネエ」。私ハ眞晝ノヤウナ電燈ノ下デ、脂ギツタアノ女ヲ一瞬間睨ミツケマシタ。婦人科ノ話ト申シマスノハ、地方ノ某大學病院デアツタ出來事デスガ、新參ノ助手ガ腎臟炎ノ姙婦ヲ人工流産ヲ行フニ就テ、抓把術ノ間ニ姙婦ノ子宮ヲ突キ破ツテ了ツテ居ルノニ氣ヅカズニ、母體ノ輸尿管ヲ胎兒ノ臍帶ト誤ツテ切斷シ、母體ノ卵巢ヲ胎兒ト誤ツテ摘出シテ死ニ致ラシメタ事件ナノデス。理由アツテ之ガ私達ノ醫局ヘモ聞エテ來テ先日來大分話題ニナツテ居ツタモノデス。コノ際ノ婦長ノコノ一言ハ、私ノ手腕ヲ危ンデノ注意カ、モツト積極的ナ惡意ノ言草カ、ソレハ何レニモ取レマスガ、トニカクソノ一言デ、今ノ今マデ天上ニ居タ私ハ一瞬間ニ谷底ヘ蹴リ込マレタノデス。同時ニフト忘レテ居タ昨夜來ノ憂悶ガ一時ニ堰ヲ切ツテ襲ヒカカツタノデシタ。白壁ノアル故郷ノ家、母、父、妹、A子、ソレニコレハマダ見タ事モナイ誰トモ知レナイ人間ノ顏。ソレガ私ノ瞬間ノ幻ニ見エ、私ハフト惡寒ニ似タ氣持ガ身内ヲ通リ拔ケタ後ニハ、頭ノ心ガ痛ム感ジガノコリマシタ。頭ヲ輕ク振ツテ見タトタンニ私ハ自分ノ頭ノ骨ガ軋ム音ヲ聞キマシタ。手術ヲ危惧スル厭ナ豫感ガ頭ヲ掠メマシタ。患者ハモウ輸送車デ運バレテ來テ婦長ハ熱心ニ看護婦ヲ指揮シテ帶ヲ解カセタリ着物ヲ脱ガセタリシテ居リマシタ。若イ看護婦ハ患者ノ腹部ヲ眞黑ニ沃度丁幾デ塗リ潰シ、麻醉掛ヲ引受ケテタレタ耳鼻ノ内藤君ハ患者ノ鼻トロトヲ覆フタマスクノ上ヘ看護婦ガ點下スル麻醉藥ノ滴數ヲ數ヘテ居マシタ。沈默ト緊張トガ手術室一杯ニ漲ツテ、スチームノラヂエーターガチーント鳴ルノヲ私ハ感ジテ居マシタ。蒼イ電燈ノ光ノ中デ默リコクツテ動イテ居ル私達ヲ私ハスクリーンノ人物ノヤウナ氣ガシマシタ。私ハ患者ノ右側ノ腰ノアタリヘ立チマシタ。婦長ガガーゼヲ取ツテ私ノ額ヲ拭ツテクレマシタ。「ヒドイ油汗デスコトネエ」ト言ツタヨウニ覺エテ居マス。私ハドウモ内藤君ノ麻醉掛ガ氣ニナツタノデス。一體コノ全身麻醉ト申シマスト、大腦ノ皮質ニアル知覺帶トカ運動帶トカヲ完全ニ麻痺

シ切ラセテ、然モ延髄ニアル内臓諸血管ヤ呼吸等ノ中樞ガ麻痺サレナイ間一髪ヲ利用スルノガ理想デス。淺ケレバ目的ハ達セラレズ深ケレバ死ニ到ラセマス。ヒト――ツ。フタ――ツ。………。………。患者ノ聲ハ一段ツツ不明瞭ニナリ低音ニナリ、霧ノ中カラ來ル聲ノヨウニナリマシタ。内藤君ハ麻醉ノ深度ヲ測ル爲メニ瞳孔ト角膜ノ反射ヲ檢査シテ居マシタ。私ニハドウモ内藤君ノ麻醉掛ガ不安ナノデシタ。イヽエ、内藤君ヲ信用シナイノデハナク、今迄共力シテ貰ツタ事ノナイ他科ノ人ナノガ不安ナノデス。一旦執リ上ゲタ腹壁切開用ノ圓刄刀ヲ機械卓子ノ上ヘ置キ直シテ、患者ノ頭ノ方ヘ廻ツテ覗マシタ。瞳孔ハマダ比較的敏速ニ光ヲ反應シマス。少シ麻醉ガ淺イヨウデス。看護婦ハ又麻醉劑ヲ傾ケマシタ。ヨシ！、内藤君ノ低イ聲ガスルト、私ハ反射的ニ今一度麻醉掛ヘ目ヲソラシマシタ。同時ニ半意識ノ間ニ右手ガ機械卓子ノ上ニ伸ビテ、私ハヒヤリト冷イ金屬ノ肌觸リダケヲ指尖ニ感ジマシタ。突然、アノ女ノ鋭イ叱聲ガ私ノ耳許デシテ、私ノ左腕ヘ、シツカリトアノ女ノ手ニ摑マレタノデス。――「オ止メナイ。貴方デハ駄目デス。直尖鋏デドウスルノデス、腹壁切開ニ！　貴方ニハコノ手術ハ出來マセン。濱内先生ヲ呼ビマス！」過失デス。私ノ過失デス。麻醉ニ氣ヲ奪ハレタ私ノ握ツタノハ腹壁切開用ノ圓刄刀デハナクテ、蟲樣突起切除ニ使用スル直尖鋏ダツタノデス。ハツト思ツテアノ女ヲ見下シタ刹那、アノ女ノ瞳ハ惡意ト嘲笑トニギラギラト燃エテ居マシタ。熱イ鐵ノ球ガ舌ノ根元ヘ突キ上ゲテ來ル氣持ガシテ、ソノ次ノ瞬間クラクラト目マヒガシマシタ。私ハヨロメク足ヲ踏ミシメルト婦長ノ心臟ヲ目ガケテ……（八十六字抹殺）……。

メストコツヘルノ落チル音。先ヅ機械卓子ノ上ヘ突伏シ、ソレカラコンクリートノ床ヘ崩レ倒レタアノ女ノ白イ看護服ノ胸ニハ血ガ段々ト泌ミ擴ガツテ行クノヲ見ツツ私ハ放心シマシタ。若イ看護婦ノ魂切ル聲、扉ノ破レル響ヲ聞イタ時、私ハモウ内藤君ノ腕ニシツカリト抱キメラレテ居マシタ。ドヤドヤト人々ノ雪崩レ込ム足音ヲ聞キ乍ラ、私ノ頭ハ却ツテシーントシテ目ノ奥ガヅキント痛ム氣持デシタ。クロルホルムノ甘イ香ガ重クアタリヲ閉シタノハ、ソノ扉ガ破レタノダナト、私ハソンナ事ニ氣ガツイテ居マシタ。廊下カラ闖入シタノハ患者ニ急變ガアツタト思ツタソノ家族ノ人々デシタ。私ハコノ時始メテ、自分ガ果スベキデアツタ重大ナ責任ヲ思ヒ出シタノデス。――イエ、イエ、アノ女ハ死ヌ筈ハア

リマセン！　決シテ死ニハシマセン。内藤君ノ腕ノ中デ藻掻キ乍ラ私ハ、内藤君ガモギ取ツタメスノ双ヲ、血ノ附イタ部分ダケ指先デ計ツテ見タノデス。三糎トハナカツタ筈デス。アノ女ハ助カル、ト、ハツキリソノ時思ツタノニハ間違ハアリマセン。アンナ肥ツタ皮下脂肪ノ厚イ女ノ胸ガ、三糎ノ深サデハ心臓ニマデ屆ク筈ハナイカラデス。アノ女ガ死ンダトハ思ヘマセン。尤モタトヒ死ンダニシテモ私ハ別ニ心ヲ動カシマセン。小量ナガラ酒ヲ飲ンデ居リ、又私ハサマザマナ困亂シタ狀態ニ居リマシタカラ、コノ點デ私ハ多少ノ弱點ハ持ツテ居マスガ、私ノ殺意ヲ私ハ自分デハ正當化シテ居マス。旣ニ殺意ガアツタ以上ソノ人ノ死ヲ弔フ氣ニモ、自分ヲ後悔スル氣ニモナラナイノデス。ソンナ事ヨリモ私ハ故鄕ノ父母ヤ妹ガ、コノ事ヲ知ツタ時ドンナダラウカトイフ事ヲ先ヅ考ヘマス。シカシ、私達ノ家族ハ前述ノトホリノ事ヲスツカリ知ツタラ、私ヲ許サナイマデモ了解ハスルト思ツテ自分デ慰メテ居マス。精神的血統？　私ノ血族ニハ母方ノ曾祖父ニ一人ソンナ人ガアツタトカ聞キマシタガ、外ニハ精神病者ハ居マセン。――有難ウゴザイマス。ソンナ御質問ヲ下サル意味ハヨクワカリマスガ、精神病者ハ自分デソノ徴候ヲ自覺シナイモノデス。私ガドコカ精神的ニ變調ガアルカ否カハ前述ノ陳述ヲヨク御聞キ願ツタ上デ、御判斷ニ任セル外ハアリマスマイ。私ニハ折角ナガラ何ノエキスキューズモ無ササウデアリマス。只一ツ事件ノ御理解ヲ願フタメニ申シ添ヘサセテ頂キマスレバ、手術場ノ外科醫ニハ一般ニ――デセウト思ヒマスガ、ソレトモ私ダケデセウカ、大手術デモアル場合ニハ何時モ一種血ニ饑エタトモ云フベキ特有ノ亢奮ガアルノデス。コノ激流ガアノ場合一時ニ堰キ止メラレ、ソノ瞬間ニ溢レタ亢奮ガ、私ノ活人ノ刀ヲ、殺人ノ刀ニ變化サセタカト思ヒマス。

ソンナ何事ヨリモ今、私ニ一番切ナイノハ、アノ瀕死ノ患者ノ手術場デ、我ヲ忘レタ不謹愼ソノモノデス。私ハ醫者トシテ又人トシテソレヲ恥ヂテ居マス。アノ患者ハドウシマシタラウカ。アノ手術ハタトヒ無効ダツテモ成功シタカツタノデス。呆然トシテ居ル人々ヲ私自身ガ促シテ、自首スル爲メニ手術室ヲ出タ後、私ハ廊下デ麻酔ノマダ淺カツタラシイ患者ノ囈言ヲ聞キマシタ――ドウスルノ。オカアサン、オカアサン――ト言ツテ居タヤウニ思ヒマス。ソノ聲ガ今デモ耳ニ殘ツテ消エ去ラナイノニハ困リマス………。



目算ちがひ

相馬泰三

一

辰造老人のところでは、朝から、一家總動員で（小學校へ通つてゐるお國や貞吉までが、學校から戻つて來ると、それ〲、それ相當な用を吩ひつけられた。）それに、手傳ひの人が二人も加はつて、てんてこ舞ひをしてゐた。そのために、屋内では、飼猫のミイが戸惑ひして、絶えずあちらへ間誤つき、こちらへ間誤つき、屋外では、名古屋コーチンの一隊が、急にコケッ、コケッ、コケッとけたたましい叫び聲をあげて走り出すといふやうな騷ぎが演じられた。――今日、此家では、親族會議が招集され、そして、そのあとで一席の酒宴が催されることになつてゐたのである。

家長の辰造老人は、もう、八十歳をずーつと越してゐた。悴の寅平は長いこと一家の主柱となつて働き通したが、たうとう、家督相續をさせられずじまひで、數年前、五十八歳かで病死し、その三人の子供はいづれも女であつた。

總領娘のおわきは、綺量はさほどでもなかつたが、小柄で、色白で、どこか男好きのするところがあつたので、自分から進んで聟養子にならうと望む者がいくらもあつた。それから、ここの家の身代（田地が六丁あまりあつて、それで老人をのぞいた外の者が揃つて野良へ出て働いてゐたので、老人が華手好きで相當物入りが嵩むことがあつても、暮らし向きに困るやうなことはなかつた。）を見込んで自分の息子を押附けようとしてゐる親達も尠くなかつたのだが、先方の家柄がどうだの、當人の品格がどうだのと、辰造老人がむつかしい事ばかり云ひ出すので、談はいつも此方から纏らなくしてしまふのであつた。そんなことで、おわきも次女のおとらも、可哀相に、あたら盛りの婚期をむざ／＼失つてしまつた。

それに引替へ、末娘のお峰は、姉たちに較べて瀬のろの辭に早熟で、みんながうつかりしてゐる間に下男の勘次とくつついて、滿十七歳になるかならないに、もう、お腹を大きくしてゐた。辰造老人は勿論のこと、寅平夫婦も、村で一二を爭ふ貧乏人の悴で、おまけに身體の人並すぐれて小さい、醜男の、不愛想者の勘次をそのまま聟養子にしようといふ氣は更になかつたのだが、さりとて、かうなつてしまつたものを引裂くわけにもならず、それに生れ出たのが男の子だつたので、それに曳かされて、不承不精、ずる／＼べつたりに、彼を家の中に住みこませて置くことにした。

おわきは村の農會の事務をやつてゐる堀田と夫婦になり、おとらは隣村の小地主で開業醫の長谷川へ貰はれてゆき、勘次とお峰との間には、その後續いてお國と貞吉の二人の子供が出來、そして、長男の春吉は十六歳になり、五町の縣立の農林學校の二年生である。かうした現狀から推して、家督は、名ばかりの聟の勘次を飛び越して、四代目の春吉へ讓られるものと一般に信じられてゐたのであつたが、最近になつて、模樣ががらりと變つてしまつたのである。

辰造老人にはお米といふ妾があつて、お婆さん（辰造老人の配偶者）が亡くなると、そのあとへ——十四五年も前から

此處へ引取られて、老人の身のまわりの世話などをしてゐるのであるが、この二人の間に出來た一人子の然作が、この春、帝大の法科を卒業し、とん／＼拍子に、間もなく、内務省の役人に採用された。老人は、型通りに、彼に世帯を持たせなければいけないと考へて、さつそく、配偶者の物色にとりかかつた。その相談にあづかつた円妙寺のご隠居が、ある時、ふと、「今泉の家にも、丁度具合のいい、年頃のが一人ゐるんだがね、正直なところ、こちらにひけめがあるんで、殘念ながら、談が切り出せませんわい。これが、あなたんとこの正統な後繼ぎででもあるといふんですとな、それこそ、私が自分のこの頭（つる／＼に禿げてゐた）に賭けてでも、きつとあれを貰つてあげてみせるんですが……」こんな述懷を洩らした。それを聽いて、家柄とか、家の格式とかいふことに日頃から異常な關心を持つてゐる辰造老人は有頂天になつて、たちどころにその氣になつた。

今泉といふのは、川向ふのS村の地主で、今は貧乏して實際的には何の勢力もないが、以前は大庄屋を勤めて、帶刀は勿論のこと草履とりを連れて歩くことを許されたほどの家柄なのだ。そして、さういふ意味では、現在でも、この界隈に並ぶものがないとして、みんなから特別な取扱ひを受けてゐるのである。因みに、円妙寺の先々代の配偶者はこの今泉家から輿入れしたのだが、その人の在世中は、毎年、飯米二十俵、炭十俵づつの寄進が續けられてゐたといふことが云はれてゐる。

辰造老人は、この緣談を取纏めるためには、どんな面倒でも、自分の身に引きうけてきつと解決してみせると誓つた。今泉家でも、その條件でなら、まんざら申込みに應じないこともないといふので、談は案外すら／＼と運んで行つた。

辰造老人は、もと／＼「家長の權利は絕對で、家の中のことは何によらず、自分の思ふ通りにしても構はない。それに對して、ほかの者は少しでも彼れこれ口を容れてはならないのだ。」といふ考を持つてゐた。そして、現に、ず一つとそれで押し通して來たのである。それどころか、家の中では、例へば咳拂ひ一つするにしても、煙草の吸殼を叩き落すにして

も、笑ふにしても、おほつぴらに、思ふ存分にやることを許されるのは家長である彼だけで、ほかの者はどこか常に控え目に、こそ〳〵と、遠慮をしながらやらなければならないことになつてゐた。だから、今度のことでも、老人が特に考慮を拂はなければならないのは、專ら親戚や世間の思はくに就いてであつた。

ところで、その親戚だつて、その世間だつて、辰造老人の眼から見れば、結局、屁でもなかつた。彼は、自分の周圍のもの――村の者、町のもの、彼が日毎に出會つたり、噂し合つたりするあらゆる人々の性質を、長い年月の間に、一々研究して、瑣細な點に至るまですつかり呑みこんでしまつてゐた。そして、それによつて、それ等と交捗するコツをちやんと心得てゐた。なかには、その研究が往々にして間違つてゐることもあつたが、それはそれで、間違つたなりに、結果としてそれ〲自分の都合のいいやうに處理する方法を知つてゐた。

それに彼は自分の辯舌の巧みさに可成り強い自信を持つてゐた。實際、大抵のものが、多くの場合、不思議と彼のために云ひ捲くられ、云ひくるめられてしまふのである。たとへば、彼は、會話のなかへ好んで、屁、警句や皮肉（或は警句めいたことや、皮肉めいたこと――どちでもいいのだ。つまり普通でない言葉）やを混ぜた。そして、相手がそれに耳を傾けたり、首をかしげたりしてゐる間に、今度は差し引きのならないドカンとしたことを、いきなり切り出すのである。たとへば、また、彼は「多分、あなたは……かう思つてゐるんでせう」などと、相手の心を讀んだやうな話しかたをする。そして、相手が「さうでない」とでもいふと、殊更に大げさな表情をして「はてね？」と深く考へこむ眞似をしたりする。それから、また、ず―つと引續き眞面目な調子で物を云つて來て、そのあとで、（風向きがよければそれで押し通してしまふし、さうでないと）急に大きく笑ひ出して、今までのことを全部冗談みたいにしてしまふ。が、また、（風向きによつて）それをもう一度（大笑ひをしたあとで）急に舊へ戻すことも出來るのである。……こんなやうなことの出來る人はこの地方には、この辰造老人をおいては外にない。たまには、それを眞似て見る者もないではなかつたが、いづれも、

そのために却つて思はない味噌をつける位がおちであつた。

それから、もう一ツ、老人は、處世の秘訣として他人に恩をきせることがあつても、他人から恩を被せられるやうなことのないやうに始終警戒してゐた。どんなつまらない、些細なものを貰つても、直ぐにそのお返しをすることを忘れなかつた。そして、あらゆる機會を利用して、何かのことで相手をいつでも自分に歎願させる廻りあはせに置くやうに努力した。それは、他から乘ぜられることを避け、いざといふ時に自分の無理をきいて貰ふことの出來る準備のためである。

辰造老人には、今度のことで、親戚の誰がどんなことを思ひ、世間の誰がどんなことを云ふか、初めからちやんと判つてゐた。それによつて、あれにはああ、これにはかうと、こちらの出やう云ひやうを、いろ／＼と自分の頭の中で練つた。そして、今日の親族會議に先だつて、豫め戸別訪問をして、それ／＼に諒解を求め巡つたのであつた。辰造老人自身の云ふところによると、そのために彼が歩き巡つた道のりの繼ぎ合せは、優に五十里を越えてゐるであらうとのことである。

二

噂は村ぢやうに擴まり、人々は、寄るとさわるとその話で持ち切つてゐた。

二三日前にも、用水堀のへりで二三人の者が鎌を研ぎながら、勘次がS町の辯護士のところへ相談に行つた相だといふやうなことを噂し合つてゐると、ちやうど午飯後の一服時だつたので、それを聽きつけて一人寄り二人集りして、しまひには十四五人のものが一かたまりになり、一時間あまりの小田原評議が開始された。

——勘次さたちの方になつてみれば、そりや無理のねえことさ。

——さうとも、さうとも。

——それに、春吉さだつて、ああして、もう、あんなに大きくなつてゐるものを。

——だが、勘次は、まだ籍が入つてゐねえはづだ。それで、子供たちは、たしか、みんなお峰さの私生兒で屆け出てゐるんだつてことでねえか。

——へえ、そんなこと、おらあ初耳だ。

——さういへば、お爺（辰造老人のこと、一種の尊稱）は、今度のことのために、おかか（お米のこと）を後妻として正式な手續きをしたつてことでねえか。

——そんなことが出來るもんかね。

——そりや、出來ねえつてかぎりもあるめえよ。あの人のやることだもの、ぬかりはねえさ。

——辯護士はどう云つてるんだえ？

——さあ、どう云つたかさ。おらあ、そんなことは知らねえが、當前に考へて、春吉さはお爺の正眞正銘の曾孫でねえか、だからよ、それにあとを繼がせねえのは嘘だと思ふだ。

——そんなことを云へば、健作さだつて、お爺の正眞正銘の息子には相違ねえんだからな。

——そりや、役場の帳面にはどんなふうに書き替えられてゐるかわからねえが、世間では、どうしたつて家の子は妾の子さ。

——まあ、さうさな。

——あの寅平さが、死ぬ前に家督相續をしてゐさへすれば、今頃になつて、お爺がいくら頑張つてみたところで、どうすることも出來ねえんだらうけれど……。

——さういふもんなのかの。

――それよりも、頭に、お爺の方が先きに死んでゐさへしたら、それこそ、何の面倒も起らなかつたのさ。

――そりや、さうだ。

――しかし、大體として、一軒の家の中のことは、そこの家長の好きなやうにやらせて置きさへしたら間違ひはねえだ。

――さう出來たら、それに越したことはねえのさ。

――出來たらも糞もあるもんか。家長のすることに、家の者が一々かれこれ云ひ出したんぢや、家の中の締めくくりがつくもんでねえや。

――だつて、ものにもよるわさ。

――ぢや、どうするだ？ 家長の好きなやうにしねえで、誰の好きなやうにするだ？

――そんなこと云つたつて、理屈に合はねえことや、間違つたことは……

――それだつて仕方がねえだ。さういふ馬鹿な家長を持つたが因果、自分たちの不仕合せと諦めるより外はねえのさ。

――それぢや、あんまり可哀相だ！

――ほんにさ！

――なんだと？ 手前までが何だ？ もう一遍云つてみろ！

――だつて、……

――默れ！ 手前はこの俺を何だと思つてゐやがるんだ。いつだつてさうだが、何ぞといふと、直ぐに口ごたへをしやがる……

と云つたやうな脱線騷ぎがあつて、もう少しで、途中、そのまま解散になりさうにしたのだが、なかに、機轉をきかし

て、突然、
――今泉さんのお嬢さんと健作さとは、前々からいい仲だつたんだとさ。
こんなことを云ひ出して、話題を變へてしまつたので、一同は、直ぐにまた、そつちの方へ引つぱりこまれて行つた。
――へえ！　あのお嬢さんが、あんな蟲も殺さねえやうな顏つきをしてゐて……
――蟲は殺さねえでも、あの道はまた別だとさ。ハツ、ハツ、ハツ。
――何を一人で嬉しがつてゐやがるんだ。
――女の方から首つたけなんだつてことでねえか。
――よう、よう！
――それどころか、もう、お腹がぽてりんなんぞつてことだ。
――まあ、驚いた！
――まさか、そんな馬鹿なことが……
――何がまさかだよ。よくあることでねえか。
――誰か見て來たものがあるのか？
――門平どんのはなしだつてさ。
――なあんのこつた！
――あの法螺吹きの門平どんのはなしぢや、眞にうける方が間違つてゐるかも知れねえな。
――さうでねえよ。今度のは、ことによると滿更の空事でもなささうだ。つて云ふのは、そんないはくでもなかつたら、あの舊家の今泉さんが、われわれ同樣と云つちや惡いか知れねえが、あの辰右衞門どん（辰造老人の家の名）ふぜい

と縁組みをなさる道理がねえだもんな。

——なるほど、さう云はれてみれば、さうよな。

——しかし、當節ぢや、家柄よりも當人次第だつて云ふからの。

——町方ぢやどうか知れねえが、田舎ぢや、まださうはいかねえさ。

——さうとも、さうとも。

——それはさうと、健作さは、東京で、内務省とやらいふところへ勤めてゐるんだ相だが、何でも、そこへは、毎日、大臣も通つて來るんだつてことだ。だから、つまり、大臣と一しよに仕事をしてゐるわけさ。

——へえ！　大臣と……

——大したもんでねえか！

——お爺が有頂天になるのも無理のねえはなしさな。

——まつたくだ。かりに俺がお爺だつたとしたら、やつぱり、同じやうなことを考へ出したにきまつてゐらあ。勘次と健作さとでは、あんまり違えすぎるからな。それに、さう云つちや何だが、あすこの身代にしても、家屋敷にしても、第一、勘次には勿體なさすぎらあ。はたから考へてみたつて、そんな氣がするでねえか。

——あすこの家ぢや、お爺の代になつてから、見違えるやうに、家の構えが立派になつた。座敷まわりや、庭のこしらへなんか、下手な旦那衆はだしだ。あれにや、隨分金もかけたらうからな。

——評判はよくなかつたが、郡會議員にもなつたことのある人だ。自分ぢや、あれで、すつかり旦那衆氣取りでゐるのさ。

——お爺は、そりや、どこへ持つて行つたつて押しも押されもしねえお爺で通るから、あれでいゝとして、お爺が死ん

でよ、そのあとへ、あの火傷頭の、ぴつこ眼の、ずんぐり男（勘次の頭には、全面積の五分の一ほどの火傷痕の赤禿がある。、そして、事實、彼の兩眼は大小不揃であり、脊丈が低い。）が家長の席に坐りこんで、エヘン〳〵などとやり出したら、それこそ、をかしげなもんだぜ。

――そして、われ〳〵がその前へかしこまつて、「どうぞ、一つよろしく――」てなことを云つて、金の無心に出かけなければならねえとしたらどうだ。

――もう、やめろ――はなしを聽いてゐるだけでも胸糞が惡くなるに。

――でも、健作さに相續させるのは家督だけで、身代の方はそつくり勘次さたちのものになるんだつてことでねえか。

――そんな阿呆なはなしがあるもんか！

――身代の三分の一とかを割けてやつて分家するんだ相だ。

――まあ、そんなところだらうよ。

――それにしたつて、おれに云はせりや、歩が良すぎらあな。

――それも春吉さの名儀になるんで、勘次さの一存ではどうすることも出來ねえやうに仕組むだとよ。

――それがあたり前さ。

――ところが、勘次さには、それが氣に入らねえらしいんだ。それで、先達うちから、誰れかれといふことなしに八ツ當りして、何かといふと直ぐに暴れ出しさうにするんで、家中のものが手古摺つてゐるらしいだ。

――身の程知らずの馬鹿者奴が！

――何でも、そのうちに、一騷動おつぱじめねえぢやおくめえつてことだ。

――罰あたり奴が――どうせいいことはねえだよ。

――さうとも、さうとも。

――お峰が、間(あひだ)に挾まつて、ひとりで困りぬいてゐる相だ。

――あの人と來たら、また、あべこべに、人が好くつて、おとなしい一方だからな。

――それにさ、初めに、お爺たちの前に頭のあがらねえやうな眞似をしてゐるだから、それだけ、肩身の狹めえ思ひをしなければならねえ。

――今更らどう云つてみたところで取りけえしのつかねえことだが、お峰さも、人もあらうに、選りに選つてあんな者の胤(たね)を宿さねえだつてよかつたらうにさ。

――しかし、それは、さうばかりも云へねえだよ。

――なぜ？

――なぜつて、おらにも解らねえけれど、ホ、ホ、ホ、勘次さでなければならねえつてことがあるかも知れねえだからな。

――何ぬかすだ、馬鹿！

――だつて、さうでねえかよ。ホツ、ホツ、ホツ、ホツ。

――ハツ、ハツ、ハツ。

そこへ、ちやうど、本人の勘次が下男の久平と二人で肥料車を曳いて通りかかつたので、人々は互ひに意味ありげに顔を見合はせ、何喰はぬふりを裝ひながら、ぽつり／＼と腰を上げ初めた。

三

今日、村の人たちは、通りすがりに辰造老人のとこの勝手口を覗きこんだり、或は、そこの垣根のそとに立留つてそつと内かたの物音に耳を澄ましたりして行つた

午すぎ、婿の勘次は、屋敷まはりの取片づけや庭掃除をすますと、下男の久平を連れて川原の畑へ大豆の收穫に出かけた。そして、日暮れまでに大體始末がつけられる見込で精出してゐると、一時間と經たないうちに使が來て、呼び戻された。その上に、折角干し場へひろげたものまでも、すぐに奇麗に納ひこんでしまはなければいけないと呍ひ附けられた。

「そんなこと、今日にかぎつたことでねえぢやねえか。お客さんがそろ〳〵詰めかけてござらつしやらうといふ時になつて、働き手のお前達が外へ出てゐたんぢや、用が足りねえで困つてしまふ。」——かう云つて、辰造老人は或る意味を含めて、ことさらに不機嫌な、ことさらにやかましい顔附きをしてみせた。——額には太い青筋があらはれ、眉と眉の間には皺が深く喰ひこんで、たんこぶやうなものが二つまでも出來上つてゐた。それを見ると、それでなくてさへむしやくしやしてゐた勘次は、我慢がし切れなくなつて、いつもにもなく、何か云ひ返へしてやらうかと思つた。が、あんまり一遍に嚇となつてしまつたので、咽喉がつかえ、舌が硬ばつて聲が出せなくなつた。

老人がゐなくなつたあとで、勘次は、隆々と盛り上つて、そのために生れつきの猪首を一層短く見せてゐる兩肩が、いやにむづ〳〵し出して來た。無茶苦茶に何か大聲でどなり散らすか、さうでなければ、譯もなく自分を身體ごと何かに厭といふほど叩きつけてみたいやうな衝動にかられた。しかし、彼は、大聲でどなり散らしも、自分を身體ごと何かに叩きつけもしなかつた。そして、そのかはりに、何と思つたか、腰に差してゐた鎌を拔きとつて、それを力任せに向ふへ投げ出した。きら〳〵と秋の日の反射を撒き散らしながら飛んで行つた鎌は、五六間先きの、肥料小屋の前の柿の樹にあたつて、それにグサと突き刺つた。

われにかへると、下男の手前、てれ臭く思つてか、勘次は、

「秋の日和が、都合よく、さう幾日も〳〵續いてくれるもんでもあるめえによ。」

こんなことを呟きながら、やがて、ガサガサとそこらのものを掻き集めたりし始めるのであつた。

辰造老人は、要のお米を相手に、廣間から座敷まはりのこしらへを、どうしたら一番立派に、富貴らしく見せることが出來るかに趣向をこらしてゐた。たとへば、茶器は廣間に京燒のを、座敷に九谷燒のを。それから、敷物は廣間に新仙のを、座敷に毛皮のを。……と云つた工合に。そして、それがすつかり出來上ると、老人はお米を床の間の前へ連れて行つて說明して聽かせた。

「この鼠の置物は、健作のえとに因んで、蔭ながら祝つてやつたといふわけさ。どうだね、いい思ひつきだらうが。それから、この掛物は、これは俺が初めて郡會議員に當選した時に、今泉さんの先々代からお祝ひにと云つて頂戴したもんだ。因緣つて不思議なもんでねえか。家にこんなものがあつてさ、今日、こんなことで、かうしてここに飾ることが出來るなんてな。」

彼の顏つきは、つゐ今のさつきとは別人のやうに伸びやかに、晴々としてゐた。云ふまでもなく、額の靑筋と、眉と眉との間の二つのたんこぶとは、跡かたもなく綺麗に姿を消してゐた。

「それもこれも、みんな、あなたのお蔭だと思つて喜んでゐます。それにしても、健作は、また、何といふ廻り合せのいい生れつきなんでござえませうね。」

これも、さも滿足さうに、汗性の小鼻を頻りにぴくつかせてゐた。

「俺も、時々、そんなことを考へることがある。彼奴には德がそなはつてゐるんだ。ことによると、素晴らしい出世をするかも知れねえぞ。俺が面倒な思ひをして、遮二無二、あいつに後を繼がせるやうに仕組んだのも、一つはそのためさ。論より證據、あいつのおかげで、われ〳〵風情が近鄕にまたとねえあの舊家の、大庄屋だつた今泉さんと緣組みが出

來るやうになつたのだ。このことだけで、ここの家の格が一ぺんにぐんと上らうといふものさ。今泉さんの先々代は、小柄な、顎ひげなどを無雑作に生した、どこと云つて變つたところのねえ方だつたが、自然に備はつた氣品といはうか、威光といはうか、俺などは幾度お會ひしても、どうしても顔をあげてまともに對ひ向ふといふことが出來なかつたもんだ。それがさ、いかに失敗つづき、ご不運つづきとはいえ、また、現在いかに女世帯であらつしやるとはいえ、世が世なら、とても〳〵、それこそ思ひもよらねえことさ。考えると、俺は夢のやうな氣がしてならねえだ。」

「さうでござえますとも。まして、私などは、たゞ、もう、勿體ないやうに思ひまして、……」

「ところで、」と、老人は思ひ出したやうに掛軸を眺めながら考へこんだ。「どうやら、俺は、この文句の讀み方を忘れてしまつたやうだぞ。いや、讀み方なんかどうだつて構うもんか、意味は、たしかかうだ、『一粥一飯』といふから、つまり、一杯のお粥、一杯のご飯だ、『當思』さうだ、一口に云つてしまふと、何でも、一杯のお粥、一杯のご飯でも、さうなるまでにはいろ〳〵の人の丹精を經て來てゐるのだから、それをおろそかに思つてはならねえ。と、まあ、そんなやうなことが書いてあるんだね、これには。」至極上機嫌である。

「へえ、さうでござえますかね。」手持不沙汰な挨拶である。

「今泉さんの先々代の云はつしやるには、このお粥は米で、このご飯は麥なんだ相だよ。どうしてさういふ見分けがつくのか、俺等にはとんと譯がわからねえだけれど……」

「私など、何も知らねえもんでござえますから、いつも何の氣なしに見てゐますが、大層有難えことが書いてあるんでござえますね。」

さう云はれて初めて、老人は、その文句が自分の日頃の考としつくりしてゐないのに氣づいた。さうなると、「餘計なことを」と思ひながらも、そのまま放つたらかして默つてゐるわけにはゆかなくなつた。

「さうさなあ別に有難えといふ譯でもねえが、ただ、ものの道理がさうだつてだけのことさ。これを書いたのは、何でも、主君に諫言して追放になつた浪士だとかいふことだが、總じてさうした人たちの物の考へ方は、いつもきまつて、ちと窮屈すぎるやうだな。實際の世渡りには、そんな些細なことにごてくさ云つてたんぢや、第一、不景氣臭くていけねえ。早いはなしが、うんと智慧を絞つて、うんと儲けて、それでうんと甘いものを食べて、うんといい思ひをして、一生を出來るだけ愉快にすごすやうにするのが一番賢いのさ。さうぢやねえか。そして、それの出來ねえ意氣地なし、やくざ者だけが倹約して、遠慮して月日を送らなければならねえんだ。俺などは、いつもそんなふうに考へてゐるんだ。……」

老人がこんなおしやべりをしてゐる間に、勘次は、下男の久平と一しよに風呂の水を汲みこんだり、薪を運んだり、客人用の火鉢の灰ふるひをしたりした。そして、それから先きも、用事は次ぎから〳〵と、しつきりなしに二人を追ひ立てた。

四

勘次はS町へ用たしに行つた歸へりに、廻り道して、自分の生家へ立寄つた。

母親のおまさが、たつた一人で、茶の間の圍爐裡で、頭から肩のあたりを灰で眞白にして、何かの煮ものをしてゐた。

勘次は家へは上らずに、入口のところへ腰をおろしたまま聲をかけた。

「お父つつあんは？」

「おや、お前かい。」と、おまさは吃驚したやうすで、煙の中で答へた。「お父つつあんはもう戻つて來さうなもんだがね、みんなについて甘藷をおこしに行つたんだけど……」

「お父つつあんも、今日、うちへ招ばれてゐるんだ相だが、矢張行くことになつてるんけえ？」

「さうともな。是非來てくれなければいけねえつて、そのために、お爺（辰造老人のこと）がご自分で、わざ〳〵やつて

來て、頼むやうにして云はつしやつた手前もあるし、それでねえつたつて、うちとしちや、あちらの云ひなりになるほかねえでねえか。」

「…………」

「それから、昨日は、おかか（お米のこと）を使者に、『歴つきとしたお客様たちの前へ出るのにきまりの惡い思ひをさせたくねえ』つてんで、ご親切に、立派な、ぴかぴか光る着物に羽織、それに帶、新しい足袋まで添へて屆けて下すつたつけよ。」

「…………」

「あとで返してくれとも云はつしやるめえから、あれは、まあ、頂戴したも同じものさ。お父つつあんたら、喜んで、いおかかが歸つたあとで、子供みたいに直ぐにそれを着てみるといふ騷ぎ、そして、いふことがいいでねえか、『俺だつて、かうやりや、土藏の一つも持つた小地主くれえには見えるだらう』だつてさ。」

「チエ！」と、勘次は我慢がならないやうに舌打ちをした。そして、明かに憎惡の念をおもてに表はしながら云つた。「百姓がそんな光る着物やなんかに目をくれてどうなる！それから、物持ちのやうに見えたら、どうだつていふんだ？馬鹿々々しい！そんな下らねえ、けちな考でゐるから、見透かされて、すつかり甘い具合に奴等の計略に乘せられてしまふんだ。」

　おまさは、わけは解らないが、あつけにとられて、急に默つてしまつた。

　そこへ、のつそり、父親の與平次が歸つて來た。そして、勘次の姿を認めると、自分から、

「勘次！」と呼びかけ、藪から棒に「お前、辯護士のところへ相談に行つたつて本當か？」こんなことを訊ねた。

「おう」

「こんなことをして、どうする氣なんだ！」
「わかり切つてるでねえか、出るところへ出て、どつちの云ひ分が理屈に合つてるか、それを決めてみるまでのことさ。」
「とんでもねえこと！ よしんば勝つたとしたところで、お爺が生きてゐる間は、どうする譯にもいかねえのだ。それに、萬一、負けにでもなつたら、それこそ、虻蜂とらずで、この時は泣いても喚いても、もう、おつつかねえこつた。喩にも、長いものには卷かれろつて云ふでねえか。ここのところは、一つ、目をつぶつて、向ふ様の云ふ通りに從ふこつた。さうすりや、四方圓く治つて、お蔭で、俺達までが樂にやつて行かれるやうになるんだ。」
「さうとも、さうとも！」と、おまさも、ことばかりに一心に應援した。「お爺の云はつしやるには、お前達には新堀外の二町歩あまりの田地をつけて分家させ、それから、私たちにまで、川原の畑を五反歩ばかり下さるつてことだ。有難えはなしさ。もと／＼、こちらの所有つて一つもねえのだから、向ふ様のものを向ふ様がどうなさらうと、文句のあらうわけはねえのさ。そこのところをようく考へてみなけりや……」
「お前たちは直ぐに損得のことを云ひ出すけれど、本當を云や、おらあ、金や田地のことを問題にしてゐるんでねえだ。」
「それぢや、どうしようつて云ふんだ？」
「…………？」
與平次とおまさは、申し合はせたやうに悴の顔をのぞきこんだ。
「おらあ、面白くなくて仕様がねえだ。何の必要があつて、今更、おれ達を退けものにしなければならねえだ？ あの爺ちの見栄坊奴が、座敷を建てたり、庭を造えたり、そんな余計な眞似ばつかりしてゐるもんだから、つゐ、今度のやうな迷ひも出て來ると云つたわけだ。おらあ、あの量見がたが面憎くて、どうにも我慢がならねえんだ。さうぢやねえか、貧乏人の子だからつて、學問がねえからつて、何もそんなにまで蔑まれなければならねえつて法はあるめえ。そのかわりに、

おらあ、お爺が死んだら、座敷をこわして、庭をつぶして、そのあとへ馬小屋を造り、豚を飼つたりしてやるんだ。」

「まあ、豚をや？」と、おまさは、あきれ返つて開いた口が塞がらないと云つた表情をした。

「あゝさうだよ。」と、勘次は、それに對して反抗するやうに答へた。「おらあ、きつと、自分の思ふ通りにやつてみせるから！」

「勘次！」と、與平次はたしなめるやうにそれを遮つた。「そりや、お前の考が間違つてゐる。」

「さうでねえ。辯護士が云つたぞ、お爺の方が間違つてゐるつて。あんなこと、第一、法律が許さねえさうだよ。」

「そんなやうなことは、俺も、ほかの人から聽かされた。しかし、世間は、法律やなんか丈けで渡れるもんでねえ。みんなで相談して、それで決めるのが一番穩かでいいんだ。」

「さうすりや、お爺の云ひなり放題で、おれの負けになるのは眼に見えてゐるでねえか。」

「それだつて仕方があるめえ。そりや、望みを云へば、きりのねえはなし、何でも、あんまり自分の我が張り通すこつちやねえ。碌なためしのあつたことがねえから。」

「どういふ譯だか、おれには、みんな申し合はしたやうにそんなことを云ひやがるんだ。お峰の奴までが……つまりは、誰もかれもがお爺の味方をして、おれはいつも獨りぼつちになつてしまふんだ。さう云や、お爺と喧嘩する夢をよく見るんだが、二人が取つ組み合ひをしてゐると、きまつて、誰か彼がやつて來て、てん〴〵に俺の手や足をおさへつけてしまひやがるんだ。すると、お爺の奴、いい氣になつて何處からか大きな鋸を持ち出して來て、それで俺の手や足をゴリ〳〵切り初めたりしやがるんだ。」

「まあ、鋸でや？」と、おまさは、さすがに、痛々しさうに眉をひそめた。

「そのかはり、」と、勘次は、やや昂奮して續けた。「三四日あとのこと、お爺が、たつた一人で向ふむきになつてゐたの

で、俺は、そーつと忍びよつて、頭から大風呂敷をひつかぶせてやつた。そして、日頃の仇、思ひ知れとばかりで、うんと蹴つたり、□つたりしてやつた。」

「ほんとか、それは？」

今度は、與平次の方が驚いて問ひ返した。

「ほんとだとも、いい氣味だつたぞ。ジタバタやつてゐたが、いい具合に誰もやつて來なかつたんで、おらあ、思ふ存分やつつけてやつた。」

「何といふことをし出かしたんだ、この大馬鹿野郎が！」

與平次が血相變へて怒り出したので、勘次は、やつと、それと氣がつき、

「なあに、やつぱり夢でよ。」と說明してやつた。

「夢だ？」と云つたきり、與平次は笑ひ出すかはりに、十二指腸蟲にたたられてゐる、氣力のない顏面を、間の惡るさうに、二三度くしやくしやに歪めた。

一座が、急に白けかへつた。

唇を嚙みながら、ぢつと腕組みをしてゐた勘次は、何と思つたか、いきなり與平次の方へ向き直り、ぶつきら棒に、

「お前、今日、うちへ來てくれるな？　おらあ、それを云ひに來たんだ。」と云ひ放つた。

「何でや？」

「何ででも、おらあ、今日、お前に來て貰ひたくねえんだ。」

「そりや、駄目だ！」

與平次も、强く云ひ返へした。

「一生のお願げえだ。おれの頼みをきいてくれ！」

「お爺と堅い約束がしてあるんだから……」

「どうしても駄目か？」

「うん。」

「お前の恥さらしになるから、止せつて云ふんだ。」

「おれは、どうしたつて、お爺に逆ふやうな氣にはなれねえ。」

「それなら、好きなやうにしろ！　お前がその氣なら、俺にも覺悟がある。俺がどういふ人間だか、何をやり出すか、性根を据ゑてよう見てゐるがいい！」

から云ひ捨てて、勘次は、その場を蹴立てるやうにして立ち去つた。

往來へ出ると、太陽の沈んだあとの一時の明るさと靜けさとがあたり一面に擴がり、數限りもない赤蜻蛉の群が、そのなかで、弱々しさうな翅をチラ／＼とふるはしながら、あちらこちらへと飛び交はしてゐた。そして、石ころ混りのデコボコ道を自轉車で走らせてゐる勘次の兩方の眼からは、涙が、ぽたり／＼と、とめどなく流れ落ちてゐた。

五

おわき（辰造老人の悴――死んだ寅平の總領娘）の聟の堀田を除いたほかの者の顏が揃つたので、辰造老人は立つて、一同を廣間から座敷の方へ案内した。

床柱の前の熊の皮の上へ昌妙寺のご隱居が坐り、それから、例の「一粥一飯」の書幅（辰造老人が初めて郡會議員に當選した時に、今泉の先々代から、お祝ひとして贈られたといふ曰くつきのもの）がかかり、鼠の置物（健作のゑとにちな

んだもの）の飾られてある床の間を挾んで、床脇の柱の前の黒い山羊の皮の上へは寅平の妹聟の齊藤老校長、その次ぎの茶斑の山羊の皮の上へはおとら（寅平の二女）の良人の長谷川ドクトル、その次ぎの黑斑の山羊の皮の上へは辰造老人の配偶者の兄の宇之助老人が坐り、それから、かぎの手に猪、狸、山犬と三枚の毛皮が敷かれてあり、その第一のものの上に、辰造老人の妹の嫁付き先きの當主小林市藏が坐り、その次ぎは堀田の分として殘し、最後の席に、勘次の父親の與平次が坐り、それから、昌妙寺のご隱居の下席——ちがひ棚の前の狐の皮の上に寅平の妻の弟である村會議員の高橋が坐り、それから、少しわきへ外れて、丁度長谷川ドクトルの眞向ふ見當に猿の皮が敷かれてあつて、その上へ當家の主人の辰造老人が着席した。

一同は、思ひ〳〵に茶をすすつたり、煙草を吹かしたり、やたらに火鉢の椽を撫で廻したり、手のやり場に困つて顔や首筋を擦つたりしながら、何れもてれ臭さ相に默りこんでゐた。それは、主催者側としては、豫め、ちやんと判り切つてゐたのである。

「どうぞ遠慮なく、ごめい〳〵に、腹藏のねえところを一つおつしやつて頂きてえんで……」と、辰造老人は、半ばは安心し、半ばは得意を感じながら、切口上に云つて、ゆつくりした重々しいお叩儀をした。

やはり、誰一人として口を切るものがなかつた。

「どうです、校長さんあたりから初めておくんなすつたら。」と、高橋が自分から幹事の役を買つて出た。

しかし、耳の遠い齊藤は、それがはつきり聴きとれなかつたらしく、要領のいい高笑ひにまぎらして濟ましこんでゐた。

「さあ、どうぞ、さうでねえと、いつまでしても埒が明かねえですから。」

暫くしてから、高橋は、さう云つて、もう一度促した。すると、今度は、隣り合はせてゐる長谷川ドクトルが心得て、

それを取次いでやつた。

「はあ、なるほど」と、ニコ〳〵うなづきながら、身體の姿勢を正して云つた。「ところで、私といふ人間が、どうも、その、かういふお相談にあづかるには至つて不向きに出來てゐますので、つまり、その、どちらに決るにしても、結果として圓滿に解決しさへすればいいといふ考を常に持つてゐるものですから、どうも、その、自分から進んでどちらへと申上げることが出來兼ねるやうな譯でして、………それに、ご承知の通り、耳が、その、非常に遠うございまして、………さういふ次第ですから、私にはおかまひなく、どうぞ、皆さんでよろしいやうにご協議なすつて頂きたいもので………」

これは單なる謙遜や無責任な云ひ逃れからではなく、駆け引きのない彼の本音なのだ。事實、彼は、自分の仕事に精出して、そのひまに酒を飲んで、釣をしてゐさへすれば、そのほかに何の慾も起らなかつた。自分の周圍に何事が初まらうと、世間の人たちがどんなことをしてゐやうと、そんな事は一向氣にかからない性質であつた。そして、その點が、村の人たちから一種の變人として歡迎されると同時に、また、物足りなく思はれてゐる所以でもあつたのだ。

「それでは、長谷川さん、あなたから一つ、皮切りをして頂くことにしませう。」

高橋は、すつかり進行係になつて、指圖するやうに云つた。

若いドクトルはひどくどぎまぎして、

「いいえ、どういたしまして。私が、この中で一番の年下ぢやありませんか、……どうぞ、どなたか、ほかの方からお初め願ひます。」と、あわてて尻ごみした。そして、薄皮な、血走り易い顏を眞赤に染めて、恥らひながら、「それに、私などは、もと〳〵皆さんのご意見次第で、どちらにしましても、それに對してかれこれ申上げようなんて考は毛頭ございませんので……」と、それだけのことを、前々から用意でもしてあつたもののやうに、割にすら〳〵と附け加へるのであつた。

「困つてしまふでねえかな、皆さんが、さう堅つ苦しくされたんぢや。どうですね、もつと、かう、砕けて、ざつくばらんにやつちや。」と、高橋が、いかにももつともらしい口調で云つた。

「さうとも、さうとも！何を云ひ合つたつて聴かれて悪い人がゐるわけぢやなし、お互ひに、勝手に議論でも何でも初めて貰ふやうでねえぢやねえね。」と、辰造老人は、心の中でそのあべこべを祈りながら、主人としての義理のやうにして相槌を打つた。

しかし、長谷川ドクトルの場合、彼がひどくどぎまぎしたり赤い顔をしたりしたのは彼自身に對してであつて、一座の厳粛さに窮屈を感じたりそれに遠慮をしたためでなかつたことは明かである。村で唯一のモーニングや縞ズボンの着用者である彼は、その内生活に於ても、斷然ほかの者と飛び離れてゐた。彼は、自分のその孤獨の淋しさを讀書によつて慰める外に方法も知らなかつたのだが、その結果、兩者の距りは大くなる一方で、彼の心持ちは、この頃では諦めから漸次惰人的に移つて行く傾きがあつた。それで、彼は、自分の性質として、周圍の出來事や世間の人たちの考へ方やに對して無關心でゐるわけにはゆかなかつたのだが、そして、齋藤校長とは自づから違つた意味からではあるが、やはり、努めてそれ等から逃れ、努めてそれ等に立ち入らないやうな方針を執つてゐるのである。

一座は、依然として沈默を守り、再び手持不沙汰なてれ臭さに襲はれた。

「宇之助どん！」と、高橋は、ほかに妙案も浮んで來なかつたものかして、順を追つて次ぎの黒い山羊の皮の上に坐つてゐる人に呼びかけた。そして、前と同じやうに「何か云ひたいことがあつたら……」と促した。

半ば居睡しかけてゐた宇之助老人は、きよとんとして頭をあげた。そして、老い朽ちてしまつたやうな弱々しい、が、荒い、しやがれ聲で、

「はい、はい。」と返事した。そして、はつきりしない口調でもぞ〳〵と續けるのであつた。「私は昔者で何もわかりませしね

えだよ、はい。寅平さが生きてゐてくれせえしたら、なんて、そんな愚痴なことばつかり考げえてゐますでごぜえますだよ。寅平さが死んでしまつたのが何よりも殘り惜しうてなりましねえつて、今朝も、婆（自分のつれあひのこと）とはなしてゐたでごぜえますだよ。寅平さが居ねえ上は、そりや、もう、誰が何と云はうと、お爺（辰造老人のこと）の思ふやうにやつて貰ふほかねえでごぜえますだよ。私はむかし者で何もわかりましねえだが、まあ、そんなふうに考げえてゐるでごぜえますだよ、はい。一軒の家の家長となると、これでいろ〱苦勞があるものでごぜえましてな、お爺も年寄つて、まだ家督がきまらねえでゐるんぢや、なか〱大ていなこつちやごぜえましねえだよ、はい。……一日も早うきまりをつけて、あとは、またお互えさま、後生のことも考げえにやなりましねえでごぜえますからね、……」

こゝまで來て、宇之助老人は、疲れるやら、息切れがするやら、それに、むやみと欠伸が出たくなるやらで、どうにも後が續けられなくなつたので、そのまゝ、意氣地なく、うやむやに默りこんでしまつた。

次ぎは猪の皮の上に坐つてゐる小林市藏だが、これは純粹の働き手の百姓で、人の前であらたまつた口の利きやうなどは心得てゐなかつた。もし、また、彼にそれが出來たとしたところで、眞面目になつてそれに耳を貸すやうな者は、おそらくは村ぢゆうに一人もないであらう。以前、たつた一度、彼が村一番の評判者になつたことがあつた。それはかうである――或る人が死んで火葬場で燒かれた時、どうした間違ひからか、死骸が半分火焔のそとへ轉がり出してしまつた。身内の人達を初め、一同が突差の處置に當惑してゐると、市藏が群集の中からつか〱と進み出るなり、その死骸を抱きかゝえて悠々と火の中へ投げこんだ。……この藝當は、たしかに、彼以外の何者にも出來ないことであつた！　彼は、今、四十八歲であるが、この先、いくら生き延びたとしても、彼の一生を通じて特筆すべきことゝ云つたら、これで盡きてゐるに相違ない。

市藏の氣持から云つても、これほど立派な家屋敷と、金に見積つて尠くとも三四萬はあらうと思はれるここの家の財產

を、與平次の倅ふぜいに――あのびつこ眼の、大傷頭の、すんぐり野郎（與次の頭には、その全面積の五分の一ほどの大傷痕の赤禿がある。そして、事實、彼の兩眼は大小不揃であり、脊丈は人並すぐれて低い。）にやつてしまふのに、他人ごとながら殘念でならなかつた。と云つて、妻の子供に後を讓るつて法もないと考へられた。それではどうしたらいいのか？から訊ねられたら、「さあ？」と云つて直ぐに行き詰まつてしまひ、そして、結局、「どうならうと俺の知つたことでねえや」と投げ出すほかないのである。ところで、彼は、いま、それどころの騒ぎではなかつた。いつもにもなくきちんと坐らせられたので、先刻から頻りにしびれで惱まされてゐたのだ。それに、早く酒になつてくれればいいと、そのことばかり願つてゐたので、彼は出來るだけ簡單な言葉で原案に贊成の意味を述べて引きさがつた。――一つには、どうせご馳走になるものなら、うまく、陽氣に、面白く醉へるやうな仕組にした方がましだといふやうなことを、考慮の中へ入れてゐたことも事實である。

一座の人々の眼が、一齊に、ちよつとの間、次ぎの席に敷かれてある主待ち顏の狸の皮の上へ注がれた。すると、これを受取るやうにして、高橋が説明した。

「堀田さんは、あひにくと今日、水利組合の方の用でS町へ出掛けられたので、……それにしても、もう、おつつけ戻られる筈ですが…………」

そして、「さあ、お前の番だ！」といふやうに、次ぎに控えてゐる、山犬の皮の上の與平次の方を向いて顎をしやくり出した。すると、それにつれて みんなの視線がぞろ〱とそのあとを追つた。與平次は、自分が借着をして飾り立てゝゐるのを見とがめられてゐるのだと思つて、てれてもぢ〱してゐた。

「さあ、與平次どん！」

辰造老人からの聲がかりがあつたので、與平次どんは、はつと我にかへつた。なぜなら、彼には、「つまらないことを云

ひ出したら承知しないぞ！」と念を押されたやうに思はれたからである。

「はい、はい。私のやうなものにまで、何か云へと云はつしやるだかね。勿體ない！かうやつて、みなさまと一緒に並べて頂でえただけで、私は、もう、嬉し涙がこぼれるやうに思つてゐるでごぜえますに。……」

「さうでねえよ。」と、議長格の昌妙寺のご隱居が、初めて、鶴の一聲といつた格好で云つた。「お前さんこそ、大切な、この席にはなくてならねえ人なんだからの。何なりと、自分の思つてることを、遠慮なく云つてみなさるがいい。」

「はい、はい。」と、與平次は、その度びに一々、丁寧に頭をさげながら云つた。「私は、初めから、勘次がこちらの家督とりになるだらうなんて、夢にも思つてみたことはごぜえましねえ。あんなやくざ者に、何でそんな資格がごぜえませう。それどころか、萬一、そんなやうなおはなしでもあつた節には、こちらから堅くお斷りを申上げなければならねえと、常常決心してゐたでごぜえますよ。何の心得もねえ勘次のことでごぜえますから、世間さまと滿足なおつきえいの出來る筈はござりましねえ。こればかしでなく、ひよつとかして、へまな行き違えでも引き起して、こちらのお家の名折れになるやうなことでもあつたら、それこそ、取り返えしのつかねえことでごぜえます。……」

「それで、與平次どんの心持ちにはようく解りました。そして、勘次さの考は？」と、高橋が、いかにも氣がかりのやうな顏をして訊ねた。

　しかし、この邊の懸引きは、前から、これ等の人達の間に申合はせがついて、ちやんと仕組まれてあつたのである。

「はい、はい。」と、與平次は、ここぞとばかりに勢ひこんで答へた。「勘次とはそんなことを談し合つたこともござりましねえが、勘次とて、所詮、私と同じ心でゐるに違えありましねえ。勘次と來たら、それこそ、私などよりももつと〳〵こちらのお爺のご恩に感じ入つてゐることでごぜえませうからね。それに、萬々そんな筈はねえでごぜえませうが、もし、勘次が何ぞ心得ちげえなことを考えてゐたとしてみましたばが、親として私の云ふ通りにさせずにはおきましねえ！それ

は、私が、ここで、皆さまの前で誓つて、さう申上げて置きますでごぜえますだ！」

自妙寺のご隱居と、辰造老人とは、それを聽きながら、時々、みんなにも氣がつくほど大げさに頷いてみせたりしてゐた。そして、與平次のはなしが終ると、それを待ち構えてでもゐたやうに、お米が先頭に立つて、ご馳走を滿載した膳部を一同の前へ持ち運んで來た。

この時刻になつてやつと、堀田はぶら提灯をさげて、S橋の上をコツ〳〵と急ぎ足で歩いてゐた。——そこから此處(ここ)まで、一里の道はたつぷりある。彼が今日S町へ行かなければならなかつたのは事實だが、それよりも、その日を特に選んでこの會合を計畫したのだと云つた方が、寧ろ當つてゐるのである。

堀田は、東京にも何年か住んでゐたことがあるし、それから、始終、新聞や雜誌に目を通して相當それを讀みこなしてもゐたし、つまり、田舎流でなしに、本當の意味での廣い世間のことを何かと心得てゐた。それで、彼の考や、云ふことは、ほかのものに較べて、大體として理屈に合つてゐて、正々堂々としてゐた。それに、彼は、齋藤校長や長谷川ドクトルのやうに、それを自分の胸に納めて置くだけでなく、何によらず、また、誰の前をも憚らず、眞正面から、自分の所信を主張するだけの勇氣と熱意とを持つてゐた。それが、田舎流のごまかし仕事をやる者のためには、何よりの苦手(にがて)であつた。まして、今度のことでは、辰造老人はじめ、自分たちに無理のあることが解つてゐたので、「堀田」の煙つたさが、一層身にこたへた。そして、かりに、堀田が何も云はずに、默つてゐてくれたとしても、彼がその場に居合はせてゐるといふだけで、もう、自分たちの仕組んだ芝居のどこかに大穴があいて、そこから目茶苦茶に崩れて行つてしまひ相な氣がしてならなかつたのだ。

堀田のS町での用は四時項に濟んでゐたのだが、S橋の橋詰の小間物屋の前へ差しかかると、そこの主人が飛び出して來て、遮二無二、彼を店の内へ引つぱり込んだ。そして、將棋盤を前へつきつけて「たつた一番だけでいゝから」と云つ

て、どうしても離してくれないのだ。妙だとは思ひながら、堀田もそれには目のない方なので、氣にかかりながらも、やり出すとつゐ夢中になつて、たうとう三番たて續けにさしてしまつたのである。が、實を云ふと、これも、高橋が前の日に菓子折などを持ちこんで、そこの主人にさうしてくれるやうに懇々と賴んであつたのだ。だから、先刻、彼が「それにしても、もう、おつつけ戻られる筈ですが……」と報告したのは嘘の皮で、正直に云へば「どつちみち、もう少ししてからでないと、ここへは姿を現さないことになつてゐます」でなければならなかつたのである。

高橋は、かうしたからくりをすることが上手であり、そして、それが柄にあつてゐるやうな一種の才人であつた。彼は、自分にこれといふ意見を持つてゐなかつた代りに、常に趨勢を觀ることを忘れなかつた。はかりにかけてみて、少しでも余計に勢力のある方へ加擔する。その方が手つとり早いからである。そして、その中で、何とかして他の者より少しでも余計に得をしようといふことを考へる。彼は、他人を利用することが巧みであると同時に、他人に利用されることを得意にしてもゐた。それがために、彼は、行く先々で「重寶な人間」として、いつも、相當な歡迎を受けてゐた。しかし、彼は所詮大した人物ではない。なぜなら、阿諛は優れた魂から出るものではないからである。

德利がどん／＼空になり、それがあとから／＼と補充されて行つた。

高橋は、いま、眞赤な顏をして、指の先きまでも赤くなつた兩手を振りまはしながら「健作君は、ゆく／＼は官吏生活をやめて、この土地から代議士として打つて出るやうにして貰はなくつちや……」こんなことを云つて、盛んに氣焰をあげてゐた。

ほかの者も、いつかあぐらをかいて、てん／＼に唄をうたつたり、冗談を云ひあつて大笑ひをしたりしてゐた。そのなかで、たつた一人、長谷川ドクトルは酒の飮めない手持不沙汰に煙草をふかしながら、心の中で、一座の人達の健康診斷をしたりしてゐた。それによると、辰造老人は代表的な健康者で、この人こそは、おそらくは百歳以上の長壽を保つてあ

らうと思はれた。それに引きかへ、宇之助老人と日妙寺のご隱居は、前者は胃擴張、後者は腎臓系統の疾患のために、可哀相にあともう幾らも生きられないだらうといふことが推測された。それから、齋藤校長には腦溢血のおそれがあり、小林市藏には明かにアルコール中毒とニコチン中毒の徴候が現はれてゐること、高橋の眼は慢性結膜炎で、與平次のはトラホームをこぢらかしてしまつたもの、なほ、與平次には、十二指腸蟲か――何かその種の寄生蟲がわいてゐるに相違ない、………といふやうなことを、それからそれと觀察し、しらべ上げて行つた。

やがて、市藏と與平次とが立ち上つて、頬被りをして、おけさを踊り出した。遅ればせながら、高橋も立つてそれに加はつた。そして、一同がやんやと云つてそれを囃し立ててゐると、屋外で、突然、

――チヤーン、チヤーン、………と、けたたましい警鐘の音がひゞき渡つた。そして、それは何時止むとも知れず、性急な調子で、ます／＼激しく打ち續けられるのであつた。

人々は、一ぺんに興醒めて、互ひの顔を見合はせながら、ただ、矢鱈にうろたへ出した。

――火事だ、火事だ！

――近いぞ！

――すぐそこだ。

こんなことを叫びながら、垣根のそとを走けて行く者があつた。

臺所の方から、座敷へ、火事は與平次の家だと云つて知らせに來た者があつた。しかし、與平次は、酔つぱらつて、踊り疲れて、疊の上へぺつたりと坐りつぶれてゐた。そして、一同から大聲で呼び立てられても、それが一向に通じないらしく、トラホームで眼もあてられないほど赤ただれのした兩眼をぱちくりさせ、兩手でだらしなく泳ぐやうな眞似を繰返へしながら、呂律の廻らないことを何やらぐづ／＼云ひ續けてゐた。

六

火は、幸ひ、大事に至らなかつたが、放火の疑ひがあつて、二三の者が村の（巡査）駐在所へ引つぱられた。その中に、與平次が今度辰造老人から貰ふことになつてゐる川原の畑の小作人である門助が混つてゐたのが、ちよつと、村の人達の注目をひいた。が、いづれも證據不充分で、直ぐに釋放された。

昌妙寺のご隱居が、親族會議の結果を齎らして今泉家を訪問すると、先方でも大變に喜んで、さつそく結納の取交はせをしようといふことであつた。ご隱居は歸つて來て、辰造老人にその報告をおはると、そばにゐ合はせたお米に向つて、笑ひばなしにして、「ご本人は、もうすつかり夢中になつて人前も憚らず、朝つから健作さの寫眞と首つぴきださうですぞ！」こんなことを云つた。

一週間ばかりすると、東京から健作がやつて來た。辰造老人から、急に會つて談したいことがあるから是非さうしてくれるやうにと、手紙で書いてやつたからである。それに、實をいふと、健作の方にもその必要があつたのだ。彼には二年越しの戀人があつて、四五ケ月前から同棲してゐるのだが、最近になつて懷姙の事實が確認されたので、それを機會に正式な結婚の手續きをしなければならないことになつてゐた。

これで、辰造老人が、老人の癖としてわざと落付き拂つて、遠まわしに、

「お前も學生の時とちがつて、いろ／＼不自由なこともあるだらうし、嫁さんを貰つて、家でも持つやうなことにしたら……」

こんなふうに切り出すと、健作は、渡りに船と喜んで、これはまた、青年の常として、自分の秘密を何もかも一ぺんにさらけ出してしまつたものだ。

それを聽いた辰造老人とお米とは、しばしの間、文字通りに開いた口が塞がらなかつた。と、その次ぎの瞬間に、辰造老人の顔は、見る見るうちに險惡になつた。額には太い青筋があらはれ、眉と眉の間には皺が深く喰ひこんで、たんこぶやうなものが二つまで出來上つた。彼は不機嫌そのもののやうな口調で

「わしは、どうあつても、さういふ馬鹿げた結婚を承認することは出來ぬえ！」と、斷乎として云ひ放つた。

それに對して、健作は、殊勝らしく恐縮して默つてゐた。

お米は蒼くなり、今にもべそをかき出しさうな顔をして、二人の顔を見比べながら、唯、譯もなくおど／＼してゐた。

ところが、すぐそのあとで、老人は、

「わしの面目といふことも少しは考えてくれなくつちやいけねえぢやねえか。」と、勢ひにまかせて、つゐ、「そんなどこの馬の骨だかわかねえやうなものと自分勝手にくつつき合つたり、子供を孕ましたりして、……」こんな失言をして了つた。

すると、健作も默つてはゐなかつた。

「どこの馬の骨だかわからないなんて、どうしてそんなことが云へるんです？」

「親の許さねえ不義をするやうな女に、どうせ、碌なもののあつたためしはねえ。お前にしてからが、さうぢやねえか、第一、そんなものを連れて、これから先き、人様の前へおほつぴらに出られると思つてゐるのか……」

「そんなことを云つたら、僕自身だつて、」と、健作は、ここでちよつと言葉を途切らして躊躇つたが、すぐに、また、半ばやけ糞氣味にあとを續けた。「あなた方を前にして、こんなことを云つちや何だが、もと／＼あんまり大きな顔をして人様の前へ出しや張れる身分ぢやないんですからね。」

それを云はれると、流石に、辰造老人も返す言葉がなかつた。そして、急に、色が白けてしまつた。

お米は、その場を繕ひ、二人の間を取なさうとして、健作に先達の親族會議の一端を洩らし、その結果として、自分が

正統の後妻として迎へられ、健作がこの家の相續人になることに決つた次第を物語つた。そして、それはみんな辰造老人が健作を可愛がり、健作の將來の爲めを思ふ心から出た仕事であること、それから、そのために辰造老人が老の身も厭はず、のべ里數にしてたつぷり五十里は歩き廻つたであらうことなどを、くど／＼と、噛んで含めるやうにして云つて聽かせるのであつた。

すると、今度は、健作の方が

「え？」と云つたつきり、開いた口が塞がらなかつた。

その樣子を見て、お米は、健作が嬉しがつてゐるのだと思つた。そして、漸くほつと胸を撫でおろしたやうな氣持ちになつてゐると、あべこべに、健作は、やがて、「飛んでもないことを！」といつた調子で堂々と反對の意見を述べ立てた。

「田舍のことに通じ、田舍のことをよく知つてゐる者が、田舍を治めて行かなければいけない。それには、勘次のやうな眞面目な働き手が適任である。百姓の家を繼ぐのに、百姓で不足のある筈はない。」

から、彼は主張するのである。それから、また、彼は、春吉が送つてくれた校友會雜誌の中で讀んだ春吉の「我等は如何にして農村を改善すべきか」といふ文章のことを憶ひ出して、それを說明し、少年のかうした幼稚ではあるが純眞な抱負や憧れを無視したり蹂躪したりするやうな企てに與することは、自分としてどうして出來兼ねる意味の事を力說した。

その翌日、健作は、また、辰造老人の前へ呼び出された。が、昨日と打つて變つて「若いうちの間違ひは誰にでもあり勝ちのことで、それは、まあ、それでいいとして、……」と云つたやうな、すつかり碎けた調子に出られたので、「こいつは少し勝手が違ふぞ！」と思つてゐると、果して、老人は、「何とかして、女と別れてしまふわけには行かないか。」と云ひ出した。そして、健作が、「そんなことは出來ない。」と答へると、「そんなら、それはそのまま妾といふことにでも何でもして置いて、本當のお嫁さんは、是非、こつちで決めた人を貰つてくれなければいけない。」といふであつた。

健作は、暫くの間、ぢつと老人の眼を睨みつけてゐたが、刻々に怒りがこみ上げて來て、どうしても我慢がしきれなくなつた。そして、たうとう、我れを忘れて、

「馬鹿なことを考へるにも程がある！」と、大聲で怒鳴りつけた。「いい加減にしなさい！」

「何が馬鹿なことだ？」老人は、案外、落付き拂つてゐた。

「人の戀人をつかまへて妾とは何です！　妾とは？」

健作は、むしやくしやして、身體ががたがた慄え出して來た。

「まあ、まあ、もつと氣を落ちつけなければいけませんよ、ね。」と、お米が、そばから、手眞似で身體を抑えつけるやうにして云つた。

「いいえ、いいえ。親だつて何だつて、彼女のことをそんなふうに云ふ權利はないんです。」

「それだつて、お前、そんなふうにして、こちら（辰造老人のこと）へ逆ふつて法があるものかね。」

「世の中つて、お前の考へてゐるやうな、そんな簡單なもんぢやねえぞ。ようく考えてみなくつちやいけねえ。あとで後悔しねえやうにな。」と、老人が、努めて相手を冷靜にかへらせようとしながら云つた。

しかし、それは、反對に、健作の氣持をますます徒らに苛立せるだけであつた。

「放つて置いて下さい。僕は、自分が妾の子だつてことで、これまでにどれほど苦しい、厭な思ひをさせられて來たか知れないんです。それだのに、その上にまた、自分の戀人を妾にしろだなんて、何のためにそんなことをしなければならないんだ！」

「そりや、お前、家の體面といふことも少しは考へてみてくれなくつちやいけねえよ。」

「そんなこと、少しも僕に關係したことぢやないや。もともと、僕といふ人間が、そんな家の體面だの、あなた方の面目

だのつてことで生れて來たんぢやないぢやありませんか。」と、健作は、意地になつて、毒づき出した。
「まあ、お前！」と、お米は途方にくれてたしなめた。「何といふことを云ふんです。」
辰造老人は「やつぱり、高橋にでも賴んで、もう一ぺん、とつくりと談しこんで貰ふほかないわい。」こんなことを考へながら、靜かに頭を振り〳〵、誰れともなく、
「わしの考へてゐるやうなことがちつとも解らねえらしいんで、困つてしまふ。」こんなことを云つた。
と、すぐにそれを引きとつて、
「さうです。僕には解りません。これから先きも、解らうとは思ひません。それでは、これで失禮します！」
さう云つて、健作は、ふいと立ち上つた。そして辰造老人とお米とがあつけにとられて後を見送つてゐると、ほどなく、彼は洋服に着替えて、トランクを携げて、も一度そこへ姿を現はした。
お米は、今更らのやうに仰天して、泣きすがつて止めてみたが駄目であつた。それから三時間と經たないうちに、健作は、もう、東京行きの汽車に乘つて、あまり嗜みもしない煙草を矢鱈にふか〳〵ふかしたりしてゐた。そして、丁度その時刻に、辰造老人の家では、上を下への大騷ぎが演じられてゐたのである。――火鉢の椽にもたれて、長いこと、ぢつと考へこんでゐた辰造老人が急に正氣を失つて、ばつたりそこへ倒れてしまつたのだ。
お米は、狂人のやうになつて人々を呼び立てた。それを聞きつけて、近所の誰れかれが集つて來たが、徒らに騷ぎが大きくなるばかりでどうすることも出來なかつた。その中に混つて、勘次は、早合點して、辰造老人の枕元で殊勝らしく頻りに送り鉦（この地方の習慣で、臨終の折に、死んで行く人の爲めに、迷はないやうにと、鉦をその枕元で靜かに、打ち鳴らしてやるのである。）を打ち鳴らしてゐた。
辰造老人は、夢から醒めたやうに、不意に正氣に返つた。そして、きよとんとした眼を見張つて自分の周圍を見廻はし

てゐたが、勘次を認めると、自分にもどう云ひ表はしてみやうのない、或るえたいの知れない惜しみがむら〳〵と湧き上つて來て、

「それは何の眞似だ？」と、精一ぱいの聲で怒鳴りつけた。

あまりのだしぬけさに、人々は、一齊に後へひつくりかへらんばかりに吃驚してしまつた。なかにも、當の勘次の如きは、思はず「あつ！」と絶叫して、もう少しで腰をぬかしてしまひさうにした。

そこへ、呼びにやつてあつたので、長谷川ドクトルが、ハア〳〵云つて駈けつけて來た。診察の結果「輕微な腦溢血のやうな症狀で、大したことにはなるまいと思ふが、とにかく、絶對安靜の必要がある。」といふことで、いろ〳〵その手配をした。

そのことがあつてから、勘次は急に元氣になつた。それは、誰よりも勘次自身に一番よくわかつた。「辰造老人が近いうちに死ぬだらう。」と思ふと、何とも云へない晴々とした氣持ちになつた。「さうしたら、これもあれも、あれもこれも、ひとりでに自分の手の中へ轉がりこんで來るのだ！さうなつたら、何でもかんでもみんな自分の思ふ通りにすることが出來るのだ！」更に、かう考へ續けてみるに及んで、彼は、自分で自分を抑え切ることの出來ないほどの喜びを感じた。彼は、それを他人に感づかれてはいけないと思つた。が、さうすればするほど、胸がわく〳〵して來るのをどうすることも出來なかつた。そして、時々「ことによつたら、自分はこのために氣が狂ふのではないかしら？」などと考へて、自分自身にそつと警戒を與へたりした。

ところが、辰造老人の容態は、日一日と快い方へ向いて「この分なら、どうやら、遠からずまた舊の身體になれ相だ。」といふことが長谷川ドクトルによつて宣言された。

それから間もないこと、動かすことの出來ない確な證據があがつたので、勘次は放火犯（いつぞやの、與平次の家の小火一件の）として、S町の警察へ引き立てられて行つた。（完）



支那（長篇小説）

前田河廣一郎

五

ハムマーストン氏は、右手の拇指と中指とをかち合はして、竹で造つた樂器のやうな物音を出した。これは、西洋人が、骰子を起こしたり、競馬馬を聲援したり、手飼の犬を呼んだりするときの不思議な習慣である。

『テケツ、テケツ、テケツ――。』

どこにも、犬の姿は見えない。

しかし、すぐと李刀達は眼で理解した。副領事は、柔かい豚の亂毛のやうな毛の生へた右手で樂器のやうな音を出しながら、たくみにその人差し指を飜へして、床の上の赤い傳單を差し示してゐたのである。つまり、『それを拾へ！』と言葉で云ふ

かわりに、この英國の紳士は、犬を呼ぶ合圖を、李の上に應用してゐたのだ。

『あいや、傳單、これあとの證據。』

それを拾つた李刀達は、全然無表情な顔で、ハムマーストン氏の秘書官らしい、自分の集めて來たポスターやビラ類を選りわけてゐる、雀斑のある男の手元へ置いた。その傳單は、李の手の下で、今しもこちらの方へ廻轉した煽風器のためにぺらぺらと身もだへした。この間に、卓上電話へかかつてゐたハムマーストン氏は、こちら向きに掛けて、眼ばかりぎよろつかせながら、何かを低聲に誰かと打合はしてゐた

李刀達には、この呼び掛けが『ジム』といふ名なので、沙面で一番有名なゼームス總領事閣下であることに氣がついてゐた。

開け放たれた窓のむかうに、花火の音が聞えた。花火や爆竹の音は、それに狎れてゐる支那人でないと、容易にほかの爆發物の音から聽き分けることの出來ないものだ。

『なんだ、あれは?』

ハムマーストン氏の書記らしい男が、ぎよつと眼を猝やかして李刀達の額を睨んだ。

『花火、子供達です。――子供の排外運動、廣東みな怒つてる!』

李刀達は、河南の埋立地によくむらがり立つ恐ろしい蚊柱のやうな廣東市内の空氣を暗示して見せようとして、双手で下から煽り上げる恰好を表現した

『ゴッダアード君、』副領事が、李の背後から秘書官を呼んだ。そして、あとは何も云はないのに、機敏な秘書官は、李にむかつて、唇に指をあてがうことによつて『聲が高い、默つてろ!』と命じ、自分は、汗のからんだやうなヅボンを蹴りながら、沙面に面した窓の一枚を閉めた。李刀達は、ちよつと無氣味になつた。かういふ具合に、西洋人同志では、微細

な顔面筋肉の動作によつて、無言の通信が自由に交換され得るのである。ときに、合圖次第によつては、どんな刹那的な陰謀が實現されないとも限らない。ピストルの引金を曳く指の動きなどは、左の瞼をちよつと塞いで見せれば、すぐと應じる反射作用にしか過ぎないのだ。彼は、コツダアード君から、副領事の方へ開きなほつた。その副領事は、にこにこしながら、受話機をレシーヴアへ架けると、

『よろしい、ミスター・リー、次室へ來てくれまいか？』

と云つて立ちあがつた。

キヤビネツトに狹められたスクリーン・ドアを押すと、柘榴の果のやうに紅い髮をした女事務員が、タイプライターを敲いてゐた。女の横手には空らなレモネードのコツプがあり、さらに、そのコツプとタイピストとを守護するやうな陸戰隊の兵士が、拔劍のまま、ドアのわきに立つてゐた。李は、忘れないやうに持つて來たヘルメツトが、一瞬間、指先から逃げ落ちそうになつたのを感じた。

その次の室にも、番兵が不動の姿勢を維持してゐた。仄かな麝香の匂ひをあとへ曳きながら、李のためにドアを支へてやつてくれたハムマーストン氏は、厨房の奴隸から急に己が政治的重要さを自覺したらしい李刀達を、さげすむやうな、探ぐるやうな微笑をもつて顧みた。

低聲で何かを番兵へ命ずると、兵卒は擧手の敬禮をした上で、慫慂しにぎらぎらした劍の尖端の進行を見せながら、廊下をどこかへ出て行つた。

『さて、取引である、リー。』

白布を張つた椅子へ掛けた副領事は、今度はすつかり『ミスター』を削り落として、判事のやうに彼を上から覗き込んだ。

李刀達は、瞬きしながら、鎖のやうに組まれた白皙人種の十本の指を、卓の上に眺めてゐた。

『――これから、總領事閣下がお見えになる。秘書も居る。取引は、事實の具體的陳述を意味する。したが、ミスター支那人、君の不安もわかる。そこで、一定の保證をして置かう。と云へば、即ち、君も察するとほり、金さ。ここに、五百弗の小切手を持つてゐる。それから、私は、君のごく思慮深い判斷力に依つて、君の通牒事項の全部を、あと千五百弗にまけて貰ひたいものだ。それで、私は、私の個人的査定によれば、むしろ高過ぎると思つてるほどである。――よく理解してくれ、今日の報告に對しては五百弗、あと日限を切つて、十日以内に香港の銀行で受取れる千五百弗。これには一つの條件がある、即ち或る特定の事實を探つて貰ひたい――と云ふのが、その千五百弗の値段である。わかつたかね、それが、私の拂ひ得る値段の全部だ。』

そこへ、兵卒の一人が、レモネードのコップを持つて來た。その兵卒は、退場するとき、實彈の罩めてあるピストルを見せてゐた。李刀達は、本能的に、この太陽を水に溶かしたやうな飲料を警戒した。彼は支那人である。熱暑には、熱いタオルと、たぎつた茶に限るものだ。それに、コツクとしての多年の經驗は、容易に自分以外の人間の混和した飲料などに信を置かせるものではなかつた。

ハムアーストン氏は、笑ひながら、鎖のやうな十本の指をほどいて、ちよつと肩をゆすぶつた。李は、そつと自分の背後を顧みた。

『まあ、飲め。これはヴイシー・ウオータアから作つたのだ。』

かう云つて、副領事は、ストローの一端を啣へると、ずんずんコツプの內容を、ゲージ・グラスかなんぞのやうに減らして行つた。西洋人といふものは、とかくこんな機械的なことを欣ぶものである。割烹術的見地から批評すれば、ストローで吸ふ飲料は、皮下注射と選ぶところはないのだ。それは、嗅覺と味覺とを侮蔑的に省略した、單なる嚥下作用にしか

過ぎない。さいぜんから李刀達の憤激してゐたのは、一グラスのレモネードについてであつたが、その餘勢が、『取引』の上にもはみ出たことは、ハムマーストン氏も認めざるを得なかつた。さしもの李も、些か顏の色を變へてゐた。

『まあ、飲め。暑い時には冷めたい飲み物さ。』

『暑い時、熱い飲み物、これ支那です。』

『さうだつけ、二重否定（ダブル・ネガテーブ）が支那だつたね。それで、まだ、取引に關する君の承諾は得てゐないやうだが――？』

『その方は、單なる否定です！』

『興味がある。その理由は？』

『ちつとも、興味ない！――一萬弗か、ナツセング！』

李刀達は、顫へてゐた。その顫へは、彼をして、ウイツカー椅子から起立せしめた。副領事は、空らなコツプをとんと別な場所へ置き換へた。單にそれだけの動作であるが、もう一度、李は背後を顧みないわけには行かなかつた。再び向きなほつたときには、西洋人の巨きい掌は、コツプの糸底で濡れた圓いしみを、丹念に消してゐた。

『私のボーイよ、お前は何も知らぬよ。二人の紳士が相對すれば、紳士道が生じる。紳士らしく話そう。――一人の紳士の持つてゐる商品が、十磅（ポンド）の値打しかないとき、もう一人の紳士は、十二磅支拂ふだらうか？しかも、それが、八磅、七磅に値切り得る可能性のある商品である場合に。トム・リー、すべては常識だよ。悲しいかな、君達支那人には、ロシア人の教へた常識しか持合はしてゐないのだが――』

李刀達は、誰かを坂の中腹で追ひ駈けてゐるときのやうに、英語を考へながら、喘ぎ喘ぎ對手の早口にむかつて、言葉を狭めた。

『常識よろしい、この場合常識ない。非常識だけ。見なさい、東較場のデモンストレーションもう始まる。沙面（シャーミン）武裝――

戰鬪準備ある。廣東市こんなになつてゐる。空氣熱い、人間の沿み高かまつてゐる。黄埔軍官學校の士官候補生武裝してゐる。そのほか、國民軍武裝してゐる。鮑羅廷(ボロージン)、軍事顧問出席する。プロパガンダ、プロパガンダ！英國、支那と戰爭しますか？數千、數萬の人命を考へなさい！生命惜しくない、數千、數萬の？——私のピッヂャン英語、この悲しみ云ふこと出來ない。その値段です！一萬弗、それ以下、それ以上、要求しない。』

辛棒強く聽いてゐたハムマーストン氏は、この間の晩、李の部屋で示したやうな超越的な眼を据ゑて、しばらくじつとしてゐた。

『では、ぎりぎりのところ、三千弗。』

副領事は、巨きい掌を、佛陀のやうに開いて見せた。

『ノオ。一萬弗。現金(キャッシュ)で！』

白い掌は、もう一度空らなコップを摑んだ。

『頑固だね、三千五百弗、現金で。』

『ノオ。一萬弗。現金(キャッシュ)で！』

『ますます頑張る、何をそんなに貪るつもりなんだらう？——では、大まけにまけて、四千弗はづまう！』

『ノオ、副領事閣下。一萬弗。現金(キャッシュ)で！』

『面白いほど頑强だ。トム・リー、私はちよつと、君の背後に存在する一人のウエルシュ兵に君の視線を誘ひたいものだ。——見るとほり、この壯丁は武裝してゐる、彼れの武器と同じやうに、彼れの魂も英國を愛する忠節心で、觸れたら切れるほど磨ぎ澄まされてゐる。このロイド・ジョージ氏と郷里を同じふする兵卒は、約四つほどの連結した動作を濟なことによつて、君の背後から發砲することが出來るのだ。そして、外では花火の音がはげしい。——それでも、親愛なる

李君は、その無根據なる一萬弗説を主張するつもりか、李君の意見はどうですか?』

『李刀達死ぬ、一萬弗取らない、――よろしいか、副領事ハムマーストン氏。』李はここで、平手で水を切るやうに、空間を横に拂つた。そして、その手は、彼れの前に置かれた、場所錯誤的なレモネードのストローを拂ひ、ストローは地震になぎ仆されたアンテナのやうに曲がると、手から傳はる搏撃力を折半しながら小タンクのやうなレモネードのコップを卓上にころがした。『然らば、即ち、數千數萬の死人が生じることになるのです。李刀達は、今日の戰爭を防ぐ役目、單なるスパイではない。何と云ひますか、軋轢のルブリケーテング・オイル、調停者です。調停料一萬弗安い!』から云ひ終つて、彼れは、彼れを一發の狙撃で殺すであらうところのウエルシユ兵が、床の上にこなみぢんになつたコップのかけらを拾つてゐるのを尻眼に掛けて、支那服を着つけた習慣から、兩手を前に組んだ。

『いや、その一萬弗は、私が個人の名義で支拂はう!』

から云つて、のしのし背後から白靴で濶歩して來たのは、總領事のゼームス・ダナヒユウ氏であつた。

背後の部屋は、たしか、柘榴のやうな髮のゐた場所である。李刀達は、はつとなつて、その方を振り向いた。彼れの云つた言葉は、たしかに、タイピストの速記術によつて、すつかり書取られたらしい

それと同時に、彼は、自分の鼻先へ、黄色な小切手の突きつけられてゐるのを覺つた。

『具體的に――いつも具體的に、李君、お掛け、まだ一時間はたつぷり在る。さて、どういふ風に、誰と、この調停を行ふか、それがはつきりすれば、このチエツクは、君の物だよ。』

ダナヒユウ氏は、複雜な折疊み機械のやうに、體軀を多角形に折曲げて、卓の正面へ掛けた。いつも湯からあがつたばかりのやうな顏をしてゐる男であつた。

思はず、李刀達は、低頭したことである……。

どうせ、半分かたは、李刀達獨得の推理法による出鱈目であつたのだが。それが、不思議と、領事館へ這入つてゐる情報と合致してゐたなども、時節柄の流言蜚説が、どんなに英國人の神經を不統一に惑亂してゐたかがわかる。ただ、李刀達の場合では、それを、彼一流の熱辯で、味母で甘く食はせる惡食のやうに包んだだけである。

そこで、番兵を遠ざけ、タイピスト列席の上で、書き上げられた文書の中には、主として、左のやうな細かい情報が、沙面英國總領事館の重要な記錄に載ることになつた。――

一、一九二五年六月二十日、沙面佛租界東橋ヲ通過シテ、廣洲市ニ入ラントセシ二名ノ日本人ガ、何者カニヨツテ狙撃サレ、其一名ハ即死、他ハ重傷ヲ負フ。不幸ニシテ、支那官憲ノ云フトコロノ金品强奪ヲ證據立ツベキホド、該日本人等ハ大金ヲ所持セリ。

二、六月二十一日、沙面中國人援助上海慘殺案罷工委員會組織サレ、沙面在住ノ二千人ノ中國人ハ悉クストライキニ着キ、左ノ如キ宣言ヲ出セリ。

『各國ノ帝國主義者ハ皆ニ我中國人ノ○ヲ吸リ○ヲ喰ヒ、我等ノ汗汗ヲ搾ルノミナラズ、我等ハ生命ヲモ奪ヒ去ラムトス。則チ初メハ全力ヲ以テ壓迫ヲ加ヘ、遂ニ砲艦政策ヲ實現ス。……ココニ我沙面工友ハ奮起シテ上海、漢口、青島ノ工人軍ガ完全ニ勝利ヲ得ル迄援助スベシ』云々。

三、六月二十二日、沙基街上ノ中國人商店二階ニ若干ノ機關銃運ビ入レラレタリ。

四、六月廿三日、廣東市に於て、五三十事件ノ同情示威運動開始サル。滿都ニ排外的宣傳ビラ撒布サレ、其種類數フルニ暇ナシ。午前十一時、二臺ノ自動車ニ分乘セル黃埔軍官學校學生ハ沙基街ニ於テ排外宣傳ノビラヲ撒布セリ。市外東校

場（練兵場）ニ於ケル示威大軍ニハ、約二萬ヨリ三萬ニ至ル群集參加シタリ。之等ヲ團體別ニスレバ、廣東市内外、香港（之ハ香港罷工者三萬人中ノ殘部）澳門軍ノ工人各團體、省内各學校、商團、農民團體、黃埔學生軍、粵軍、湘軍、警衛軍等ノ代表者ニシテ、政府要人ノ大官列席者ハ殆ド全部トモ云フベク、農民協會代表潭平山主席ニ着キ、開會ノ辭ヲ述べ、中央執行委員、省長胡漢民ノ決議文朗讀、對外協會代表林森、國民黨代表兼工人部長廖仲愷、市黨部代表孫科商民協會代表甘乃光、伍朝樞、廣東大學校長鄒魯、汪精衛、ボローヂン等ノ激勵演説アルベシ。』

それから、ここへ『五』の箇條が加はつて、ロシア軍官によつて率ゐられた二千から三千までの『赤衛軍』といふものの推定が記入され、その武裝狀態、武器の概數などが書き込まれた。

すべて、これらの材料は、李刀達の眼には觸れなかつた。この場合の會議は、時刻を急いでゐたし、ほかの目擊者の情況證據などと組み合はせて、あとになつて英國側が發表するまでは、調査は極秘であつた。

『汪精衞先生、蔣介石將軍と仲がよくない。それよくわかつてゐる。間に立つてゐる廖仲愷先生、私、極力話します。この人工人部長です、越飛との交渉者、左翼の頭等、話よくわかる。小さな大きい男です。この人命令する、軍隊云ふこと聞きます。鮑羅廷、肩敲きます。怒ることない、しかし、命令は思つたやうに通じます。李刀達、生命を賭けて保證します。今日、戰爭ない、絶對に無い！』

かう云つて、汗ばむだ總領事の手を握つた李刀達は、その十二時三十分にその室を出たのであつた。彼れのポケットに深く折込まれた一萬弗の小切手には、その金額に該當するだけの雰圍氣が伴つてゐて、すべての世の中の危險率も減少するやうに思へた。――そこで、室から室へ、それから階段へ、廊下へ、最後にセメントの玄關へ、更らに芝生のある戸外へ、幾種類にもちがつた場所へ足を踏み入れ、その都度、ピストルへ油を引いたり、横眼でじろりと見ては肱で小突き合つたり、不意に彼れにむかつて銃劍を突きつけたりする兵隊達を見ても、李刀達は上將のやうに悠然と手を放つて歩いた。

『ジユ、あの小切手を持つて行きましたぜ！』

もとの部屋では、副領事がダナヒユウ氏へかう云つて詰め寄つてゐた。

ダナヒユウ氏は、今浴場から出て來たばかりのやうな顏を手巾で撫でて、

『持つて行つたが、どうしたのかね？』

と訊き返した。

『冗談、英國にアングロとサクソン族があつて以來、あんな空約束へ一萬弗支拂ふ紳士は、海外駐在官吏にあつた例はないのです。』

この副領事の氣の長い否定は、より氣の長い總領事の否定によつて、再否定された。

『英國にアングロとサクソン族が、ノルマン王朝時代からの混血によつて、英國民一般を形成して、今日のグレート・ブリテーンの英國人が生じたとすれば、ミスター・ハムマーストン、君は今の一言を撤回した方がほんたうの紳士だらうぜ。何となれば、我々は支那軍もボルシエヴイキ顧問も、この際徹底的にやつつける氣持だし、尠くとも、女皇ヴイクトリアの像に誓つてもよろしい、最後まで彼等を懲らしてやる心算である。要するに、あの豚の尻尾のやうな料理人が何か先方と交渉すれば善いのだ。交渉は、私の推測にして大過なくば、多少の躊躇を、彼等の側に撒布するものと思はれる。その先方の妥協的態度にこそ、こちらの先取權を確立する餘裕があるのだ。つまり、エニシヤテーヴの爭奪である。——ばア！外交（ヂプロマシー）の勝利さ！それが失敗でないことを確證するためには、支那側から、一發の砲聲でも湧いたなら、あの小切手は、決して李某へ支拂はないやうに、銀行へ約束してあるのだ。そして、考へても見給へ、武裝した支那兵が、こちらの砲撃に答へないほど、ロシア人は彼等をトルストイ流な無抵抗主義で訓練してゐる筈はない。——これらの話の要諦は、御賢察のとほり、あの小切手が空手形であるといふことを證明するに過ぎないのさ……。』

から云つて、總領事閣下は、兵卒の恭しくささげて來た『ヘエグ・アンド・ヘエグ』を、ぐつと一と息に嚥み乾したのであつた。

しかも、私達は、この場合、一人の支那人と一人の英國人とが、殆ど同時刻に、お互に對して、内心舌を出し合つてゐたといふデリケートな心理的交錯を記入して置く必要を感ずるのである。

七

商人馬伯堯は、職業の一部として人間の毛髪をひさいでゐた。

民國革命以來、男が辮髮を廢し、婦人も概ね斷髮してからといふもの、とかくこの商賣に食ひ込みが多くなつたことは事實である。從つて、馬伯堯の職業と、支那の新文明とは、本質上相容れないかたちのものであつたが、その埋め合はせとして、革命期の支那には、絶えず戰爭といふものがあつたのである。いくら廣東が、支那の『モスクワ』であらうと、ちよつと廣洲市の五哩外へ出ると、いくらもまだ辮髮をしてゐた人間があつた。

これらの事柄は、まだ馬伯堯が、西關目貫きの十八甫街に、堂々とした店構への『富基號』といふ、人髮取引所を設けさせ、廿五人の店員を傭つて、店に百斤角のアンペラ箱を積んで置かせるには十分な利潤を意味したのであつたことを意味する。

大まかに云ふと、彼は、戰爭の下うけをやつた。これは、大興公司とか、廣基昌などといふ一流取引所の手を出さぬ仕事であつたが、馬伯堯の宇宙觀から云へば、世の中に廢物と稱すべき何物もある筈はなかつたので、一と戰爭どこかで闘はれると、いつも勝つた方の軍隊に馬伯堯の密使が到來して、恭しく自任將軍の前へ、戰死者の毛髮代といふものが獻上された。そして、大部分はそのままに野原に放置される運命にある敵味方の戰死兵の毛髮が、誰かの手によつて、綺麗に、

剃り落されてゐたのである。已むを得ずして、屍骸を合葬したりする場合の人夫達の一人は必ず馬伯堯の手下であつて、そのまま土中に腐つて行く人體から、わづかづつなりと彼等は酒手にありついたのである。

この種の毛髪の最下等品であることに、誰しも異存はない。それは、そのままでは、外國人が『スタム』と稱する下等品よりも寸法が足らず、切れ易くて、どんよりした光澤しか持ち合はせてゐない商品であつた。しかし、馬伯堯は、化學工場を設計してゐて、そこらの死毛を、一定の藥品的プロセスを通過せしめない以上は、決して市場へ出さなかつたのだ。化學工場と云へば、最新式な文化を輸入でもしてゐるやうに受取れるが、その實、それは、城内にある一軒のうす汚い釜場に過ぎなかつた。そこで、丹念な顯微鏡的手工藝の洗練を經て、一定量の死んだ兵隊達の毛髪が、やや『スタム』程度の光澤を帶びて再現したときに、富基號では、小束に分けて藺草で縛り、これだけは二百斤包として、アンペラで包裝した。

この廢物利用の一面は、さしもの廣東に於ても表看板ではない。本來、人毛は雲南省や、四川省、廣西、湖南などの田舍から小仲買が天然鬘や繭を買ひ集めるやうに、一や二百元の資金を持つて、辮髪の爺さんや、ぐるぐる卷きの百姓婦の毛を剪つて歩くことにされてゐて、現に馬伯堯の店にも、さういふC、D、E、F品のサムプルぐらゐはあるのである。

——だが、一見單純な馬伯堯のこの商賣も、觀察の下しかたによつては、やや複雜性を帶びて見えることがある。これは、富基號の商賣の割に、あまり店員が多過ぎるといふこともあるし、年々激減して行くこの道に馬伯堯が反對に富んで行くといふ矛盾の點である。しかも、品物の取引關係にはあまり緣故もなさそうな多數の客が、いつもこの店に出這入りして、ときには、夜遲くまでタキシーを店前に待たしてあつたりすることも、不思議な現象の一つであつた。

富基號の二階では、ほとんど一週間に一度は何かの株主總會めいた會合があつて、わりに實直らしい商人の群が、支那人が金品のことを考へてるときにする重要な表情をしては、汚らしいその階段に長い裾を曳いて歩くのであつた。この會

議は、人毛取引關係の講とかギルドのやうなものだと思ふと、それは全然まちがつてゐる。いつもその會議の席では、太枠のロイド眼鏡を掛けた馬伯堯が決算報告をして、いつも鶴のやうに痩せた、頭髮も髯もまつ白な爺さんが、帳簿を調べてゐた。ほかの四人の株主めいた支那人が、茶を啜りながら高らかに何かを論じ合つたとしても、二階の窓はいつも氷庫のやうに嚴重に閉めきられてあつたし、店からの階段が、二つに折れて中二階めいた電話室の出來てゐる場所には、いつも旅館の番頭のやうに忙しい眼付をした店員が、鳴らない電話を掛けてゐたのである。………

私達は、かういふ叙述によつて、いたづらに馬伯堯の毛髮店を神秘化する必要を認めない。ごく單純な言葉でそれを說明すれば、馬伯堯は決して毛髮業に從事してゐたのではなくて、その看板の下に、全然看板のないもう一つの商賣をやつてゐたのである。戰爭の下うけも四川省への買出しも、馬伯堯が適宜だと考へた程度に於て實際に店員も派遣され、將軍への賄賂も流用されたのであつたが、それはそれつきりのものであつた。

その證據、十八甫路の富基號に、この妙な株主總會のあつた前後には、廣東や廣西や香港の方面にまで、必ず、すばしらい新聞記事の伴つた人攫ひ事件が起つてゐたのである。――かういふ理由で商人馬伯堯の本職は、人攫會社の經營といふことにあつたのだ。

この會社が、順調な商業様式を備へた株式會社であつたことは、誰の常識に愬へて判斷して貰つても、當然なことであつた。

それは、一定の商品として生きた人間を取扱ふことから、或ひはアメリカあたりの人道主義者の攻撃するところとなつてゐるかも知れないが、廣東の現在はさほどまでにアメリカ人の人道主義を尊重してゐるわけではない。先づ、その商業上の方式を云ふと、さつとこんな風な商賣が人攫ひ會社なのである。

或る特定な商品『人間』が、株主總會の席上で、交換價値のある諸點を明かにされる。その『人間』は、紳士でも、十

豪でも、愛妾でも、政府の要人でも、とてつもない富豪でも、金廻りの良い買辦でも、若い娘でも、誰でも個人的資格といふものを選ばないのだ。それには、火柴（マッチ）や罐詰にレッテルが貼つてあると同じやうに、他の商品と紛れぬ程度の名前があり、年齢があり、住所がある。更らに、商品の質を吟味するやうに、會社では、その人間の住宅や、日常生活や、嗜好や、趣味や、職業などを、委細漏らさず調査して置く必要がある。その人間が、政府筋とどんな關係を持つか、友人に軍人が幾人あるか、その妹婿は軍政府の要人ではないか、警察署長や警備司令官に縁戚がないか、あるか、などといふ情況も、大まかな『廣州民國日報』や、中央通訊社などの調査課よりも少しはくはしく探つて置く方が便宜である。就中、この商品に關して、最も重要な因子は、商品の交換價値としての、その商品を拔き取つたあとの人間が幾何支拂ふことが出來、こちらの要求する價格でその當人を買ひ戻すだらうかについての査定である。——これらの業務が、かなり敏捷な推理と、鋭い觀察と、綿密な計數力とを要したことは云ふまでもない。

で、もと市政府の財政次長をしてゐた神仙そつくりな王松儀が、鶴のやうな痩身を伸ばして、嚴重に帳簿を保管したことも道理であるし、そのほか、あと五名のうちの馬伯堯は、云ふまでもなく强（したた）か者であつたし、粤省商軍團の秘書をしてゐた呂雲卿も堂々とした人物であり、梧州に金（きん）の廢坑を持つてゐて外國人から借金する技術にかけては山師の湯廷芳に叶ふものはなく、華寧里の郵便局長を勤めてゐる林澤豐、廣東クラブのボーイ長を八年も勤めてゐる陳景山、いづれも代表的方面の代表人物を網羅してゐたことに於て、この會社の人物的構成は遺漏のないものであつた。

だが、たゞ一つの點に於て、この不思議な株式會社は、他の凡百の有限公司とちがつてゐた。それは、どんなに株主が重役會議を開いても、決して、會社の社長は一度も顏出しをしないといふことである。この社長の何人であるかは、王、馬、呂、湯、林、陳の六重役と雖も知らなかつた。彼等は、ただ、毎度の報告を、『上海郵務管理局、私函第3號』へ

へ送れば、同じ第3號の名によつて、緊急な指令や、資金の融通を受けたのである。つまり、普通の肥滿した大株主の代りに、『私函第3號』が、いつもこの會社の重要なポリシーを計畫し實行して行つたところから、重役達の想像力も、單なる想像力だけのものではなくて、漠とした一つの恐怖を伴つてゐたことは無理もない

會社の業務執行方面は、どんなに科學的に考へて見ても、些か冒險的たらざるを得ない。しかし、冒險と否とに拘らず、この執行こそは、富の生産の原動力たる勞働のやうなもので、資本家が政府や、議會や警察や、法律をもつて勞働力を巧みに自分の目的に合致せしめるやうに調節して行くと同じく、ここにも儼然とした恐怖組織が存在したのである。

普通の臨時傭ひは、一時的な雇傭關係の下に商品を運搬するだけの勞働に從事させられたのであるが、その中には、必ず二人の班員が混つてゐて、臨時傭ひの運搬や取扱ひを監視してゐたのである。この班員は、いつも油斷なく武裝されてあつて、各關係筋の班長によつて指揮された。班長に一定限度の生殺與奪の權のあつたことは無論である。かういふ班員が、實際に、人家に押入つたり、ホテルの自動車に假裝してゐたり、黄包子に乘つたり、黄包夫に化けたりして、人間といふ商品を掠奪するまでに、ごく簡單な命令が、重役の口から班長に傳はり、それが班員を動員するといふ、ほんのわづかな手數しか必要とされなかつた。

さて、かうして攫はれた『商品』をどんな倉庫に保管して置くかといふに、これも一見何人も首肯する程度の常識なのである。班員の一人か二人は、命令が下るや否や、或ひはその計畫前からでも、一軒の家を借りて、そこへはマアを備つたり家具を入れたりして、至極住み心地の良い住宅を拵へて置くのである。花瓶も用意しなければならぬし、壁の書額でもさう粗末なものではいけない。『商品』の値打が高ければ高いほど、保管料の增すことは、普通の倉庫や銀行の金庫と同一理由である。一日三食は、必ず附近の一流料理居から仕入れ、ただ『商品』が外の世界へ紛れ出て、無斷で自分の商品的價値を破毀しないやうに、戸口や廊下やカーテンの裏には、爪の先まで武裝した會社員をして、叮嚀に護衛させて置く

のか、少しほかの貿易品と桁がちがふ位のものである。かうして、大切に保管した商品が、忽然商業價値を帶びて來るのには、その班の人員が、その商品のもと屬してゐた家族や事務所や役所へ、電話なり、書簡なりで、指定の價格を要求し、その金額と取換へにF・O・B某所に於て、商品を引渡すか、それとも商品の所在地を責任をもつて明瞭にするかを決定することによつて生じるのである。すべての大會社の商取引のやうに、これらのことは、支那の傳統的な商業道徳を守つて、頗る嚴格に時間も正刻に執行される。總じて、事件によつては、この人攫會社のために動員される勞働者の數は、優に地方の小さな叛逆軍隊位には昇つてゐたのである。

さて、これだけの説明によつて、私達は、六月廿三日の朝に、馬伯堯が、他の五人の重役を非常召集して、緊急重要會議を開いた光景の前提としたい。

その朝、一通の電報が靑服の配達によつて彼に手交された。平凡な取引上の電文で、誰が讀んでも、

『カンシイヒンストライキホンコンワンチイピンヨリイクラデモカヒコミオクレソウバウケアヒガタシ　3』

としか讀めなかつた。

この平凡な電文は、馬伯堯の頭腦を殊のほか惱ましたのである。

王賚平（ワンチイピン）は、香港で一二の富豪である。この男は、もと英國人商館の手代をしてゐたのであつたが、いつの間にか爲替の切替や株式などで小金を儲け、そのうちに有力な銀號（ぎんこう）を買收して、専ら匿名組合組織の蔭に隱れて、悪辣な銀利を貪つて南支の金融界に覇をなしてゐた。

朝の重役會議は、暑いのに窓を閉めきつた室内で、電燈をともした上に、天井に煽風機を廻轉させて開かれた。六人が全部出揃ふと、馬伯堯が電報を朗讀して、直ちに相談に移つた。六人のうちの三等郵便局長をしてゐる林澤襟は、誰よりも、電文の意味について懷疑的であつた。

『こりや、當會社を政爭に捲き込むものでね、諸君。何となれば、御存知のとほり、今日から廣東の香港封鎖が內々政府筋によつて計畫されてゐますし、それに、御存知でもありませうが、王資平は名うての親英派ですからね。恐らく、ごらんのとほりの沙面側の武裝なども、この男の內通から行はれたものと思はれます。——つまり、時折會議の席で問題になりまするところの、當株式會社の社長の人柄が、この事件を通じまして、うすうす感得出來るやうに思はれて來たといふことは、私達にとつて大變大事な問題です。』

この示唆の下に、熱湯を吸つてゐた呂雲鄕が、熱いタオルで額の汗を拭ひながら、徐ろに意見を陳述した。

『この前の陳烱明の軍隊も、この王資平の手を通じて英國の金で武裝されたのですからね。そこで、問題は、一個純然たる營利會社である當會社が、今後もかういふ場合に遭遇することでせうが、果してこの種の政爭に手を染めていいか、惡いか、といふことですね。會社の定款には、一切この邊のいきさつが明示されて居りませんので……。』

王氏が、この言葉を、枯れた指尖で遮つた。

『社長の命令です。それ以上のことは私達の關知するところでないことは、紳士諸君も御承知のことだと思ひますが。もし、この電報を疑うやうになれば、もはや當會社も半分かた存在の意義がうすれてゐるといふものではありませんか。』

『それはさうです。電報はたしかに上海から來てゐますが、私が前にも臆測をしましたとほり、第3番は、この廣東に居るのかも知れません——或ひは、ひよつとしたら、この席上にも！』

これは馬伯堯であつた。

意見の相違は、直ちに重役の更迭であり、更迭は……死ですからね。』

から嚇かすやうに言葉を挾んだのは、這入つて來てからずつと無言でゐた山師の湯廷芳であつた。

『しかし、ですね、——しかし、萬ヶ一、私達の社長が、共產黨ででもあつた場合はどうなることでせう？』

共産黨嫌ひの林澤豊局長は、意志を明白に表示した。

『社長が共産黨員であらうと、チンパンヌであらうと、それは問題ぢやないではありませんか。私達の立場と職務は白い一本の線のこちらです。商品王賚平の荷造り、保管、價格附け、そして第二の訓電を待つ――と、その線を踏み越えたら、それは私達の仕事の分界を犯したことになるでせうが。』

王松儀老人は、算盤を彈くやうな指先をして、差し向ひの局長に迫まつた。

『よろしい、その議論は打切りにしませう。前例にないことです。近頃流行の職工の會合とちがつて、私達の間に、意見の相違などといふことがあつた例はないぢやないですか？――決議採決などと、それこそ國民黨の眞似をしなけりやならぬほど、當會社は無定見無方針ではなかつた筈です。そこで、直ちに、註文されました原品の調査にとりかゝりたいのですが――

馬伯堯は、一見、ただの厚ぼつたい黒檀の支那卓であると思はれる物の、裏側のどこかにある釦を指の腹で押した。忽然と六人の眼の前に躍り出したのは、一個の卓上電話である。他の五人は、別に怪しみもせずに、受話機を取り上げる馬伯堯の手元を熱心に見成つた。

『ああ、もしもし、唐か？ 香港長距離を呼んでくれ。香港政廳の經理課に居られる超丁教氏だ。こちらはいつものとほり……。』

嚴封したこの室内の重い扉の外で、人毛の散らばつた階段を五つほど降りた、中二階めいた曲り角の、壁に据ゑ附けられた電話機の前で、眼のはしつこい唐店員は、馬伯堯の云つたことを、しきりに壁にむかつて繰返してゐた。

そして、その壁を、十八甫路の外側から見た人は、誰しもそれは普通街角にある人毛貿易業富基號であることに不審を持たぬ筈である。何となれば、そこには、その日の廣東のどの店もがさうであつたやうに、無數のポスターが彼等の視線

を奪つたからである。ポスターの字はこんな風に讀まれた。

『打倒帝國主義！』

『收回領事裁判權！』

『取銷不平等條約！』

『援助上海慘殺案！』

『實行經濟絶交！』

『中華民族解放萬歳！』

それらは、文字だけでも、既に凄まじい一大デモンストレーションであつた。

八

李刀達は、沙碁街へ出ると、大新公司へ行かうとした足を轉じて、沙基中路へ折れ、そこから十七甫へ切れると安昌號といふ爆竹商から、中型の花火を三個買ひ求めた。

次に、そこから黃包夫の溜り場のある大通りへ這入つて、政府が出してゐる簡易閲報所で、二三冊のパンフレットを操つて拾ひ讀みをした。それを先刻から隅の椅子で見てゐた閲報所の若い青年事務員は、客のないところから共產主義のパンフレットを出してくれたり、三民主義を平易に解釋したものを示したりして、何くれとなく親切にした。ここは、謂はば、國民政府の設けてゐる無料圖書館の小さなもので、客は隨意に好きな新聞でも雜誌でも冊子（トラクト）でも立讀みが出來た上に、必要とあれば唯でその本を貰つて歸ることも出來たのである。

『貴方も、今日は進行へ加はるのですね？』

青年は李刀達に訊ねた。

『俺は途中で待つてるので、』

『上海では非道いことをやつつけやがつたですね。』

『憤慨に堪へないことです。』

『もう事件は知つてますか？』

『ふむ、多少は。』

『上海へは御出になつたことがありますか？』

『船でね。船のコックをやつてゐた時分だから、ずつと前ですよ。』

『ああ、貴方はコックさんですか。――やはりいまも？』

『沙面を罷工した一人ですよ。』

『おお、一昨日から？――ではやはり同志です。どうでせう、今日の示威遂行は、聞けば沙面では消極的防備をしてゐるといふぢやありませんか？』

『鐵條網は張つてあるがね。』

『その鐵條網が良くないですな。何もこちらがデモをやるのに、英國が反對するといふ理窟はないぢやないですか？』

『――もつと深い陰謀が、英國側にあるのぢやないかね？　例へば、聯俄といふやうな政府の方針を引繰返してしまふやうな？　尤も、俺には、さういふ問題はよくわからないんだが……』

『貴方は、支那が現在のままでゐた方がいいと思ひますか、それともロシアのやうな國と提携して帝國主義に對抗した方が幸福でせうか？』

『さア、ロシア——とすると、これはまるつきりわからないが、ともかく支那は現在のままでは、救はれませんね。』

『矢張り私と同じ意見ですな。——ロシアのことはこのパンフレットに書いてありますが、御持ち下さい。代はいりません。それから御昵近に、これが私の名刺です、御名前は?』

程方溝と書いてある名刺を受取つた李刀達は、自分の名を告げて、また悪愛路の方へぶらぶら歩き出した。花火といつしよに、二冊のパンフレットが、彼れの右側のポッケットに突込まれてあつた。

『妙な奴だな、いやに馬鹿親切ぢやないか！ 廣東の青年であんな親切な奴ははじめてだ。あいつ、ひよつとしたら、何かの間諜ぢやないかな?……』

すこし空腹を感じたので、彼は一軒の氣の利いた小料理屋へ昇つて、下の瞰せる窓際に掛けながら麺を註文した。註文した食物が來ると、彼は悠々と箸を取り上げた。

これらの行動を綜合して見ると、先刻沙面であれほど熱心に主張した英國側との契約に對して、すこしも彼は責任を持たぬことになつてゐるのである。——その誓言が、數千、數萬人の生命にかかはる一大事變の調停——ルブリケーテング・オイルであつたといふことよりも、この刹那の彼は、絹糸のやうな伊府麺の一本一本を、いかにして巧みに象牙擬ひの箸の先へ絡らみあげるかといふ方が、更らに重大に見えたらしいのである。

食事が終ると、ボーイがタオルを持つて來て、彼の腕の黒い布を見ると、いろいろに質問し掛けた。李刀達は、簡易幽報所で貰つた共産主義に關するパンフレットを、ぺらぺらと指の間で弄びながら、ボーイの一質問ごとに、自分が、ますます重要な人物らしく見られて行くことを知つて、ここでも芝居氣を出して見せた。

『俺は、市内警備の共産黨員だ。今日の遂行に何故君達も參加しないのかね? 上海は非道いことをやつたもんだ。有史以來の一大恥辱だよ！ 中華國民として、これをしも忍ぶことが出來たなら、その人間は英國のブルドッグに食はれて死ん

じまへ！ 戰爭だ！ 新しい戰爭だ！ イデオロギーを持つた勞働者と農民の反逆だ！ 君達も、これからかういふ本をどしどし讀み給へ。何に、我等の政府の設けてゐる辻々の簡易郵報所では、かういふ物は無數に唯で分配してるんだ！』

ボーイは、拜むやうな眼付をして、立ち上がつて金を拂ひにかかつた李刀逵を眺めた。その減食された犬のやうな眼付を見ると、李刀逵は、是非とも何かして見せないと濟まぬやうな氣がして、不圖、指先に觸れた總領事の小切手を出して、二つに折つてあるのを千斷るやうに振つて、對手の眼の下へ突きつけた。

『このとほりだ。我々共產黨には、金はいくらでもあるさ。——一萬弗、どうだい、但し、こんな物を單獨に持ち廻はつては危險だから、ちやんとピストルはここに用意してあるんだぜ！』

さう云つて、花火のポツケツトを敲いて、彼は高らかに笑つた。ヘルメツトを氣取つた手付でかぶつた李刀逵の後姿を、料理屋のボーイは、鼻の下を擦り擦り見送つてゐた。

眞鍮の棒で、カーペツトを押へてゐる、その店の階段を降りきらぬ前に、李刀逵の耳には、異樣な地響が傳はつた。車輪の轟きでもなかつたし、自動車の疾驅して來る音でもない。——それは、無限につづく、人間の跫音であつた。半ば休日狀態に這入つてゐる市街に、その土の下から數千人の坑夫が掘り上げて來るやうな、強い、しかし秩序的な跫音が、ぞく、ぞく、ぞく、ぞく、ぞく——と響いて、心臟といふ動く機械を內包した人間に、動け！ 動け！ と命じるやうに思はれた。それは、決して軍隊のやうな、ことさらに力を罩めた足取りではない。さうかと云つて、日常海岸通り(バンド)あたりで聞く、亂雜な、我勝次第な、四方八方から迫つて來る、時間にせかれた步調でもない。いろいろな粗末な履物をつけた脚が、一つ行動の下に營む、合意的な彈力のこもつた跫音がそれであつた。武裝せざる大軍の近づく音だつた。これは、たしかに、新しがりやの多い廣東の街でも新しい跫音だつた。この新しい跫音の特徵として、誰かの號令などといふものは聞えなかつた。じつと耳を澄まして聽いてゐると、鐵板のやうな市街の上を、見えざる無數の脚の音だけが擴がつて行く

やうに感ぜられた。李刀達は、胸へ何かを一杯に詰められたやうな氣になつた。その底苦しい鈍痛の間から酸つぱい涙が湧いた。彼は飛び出さうとして、自分を恥ぢた。恥ぢて、顏を赧らめながら、もう一度ヘルメットをかぶりなほすと、胸を張つて階段を降りきつた。その後姿を、料理店のボーイは、まだ口を開けながら眺めてゐた。

大きい街幅一樣にひろげられた白旗が、街を狹くして進んで來た。旗には、墨のほとばしつた字で、

『援助上海慘殺案！』

と大書してあつた。

旗の全面に太陽が漲つて、人間の顏はその下に黑く脂ぎつて、小さくしか見えなかつた。奇怪な帆を張つた海賊の群が、見慣れぬ船を押しまくつて、不意に都會を占領しにやつて來たやうな幻想が、見物人の頭を襲ふた。上半分のすつ裸な、筋骨の逞しい二人の勞働者が、黑い腕章をつけた腕に、撓ひきつた旗竿を、汗みどろになつて支へながら歩いた。旗持は、黑い顏に、はにかんだやうな微笑を見せてゐた。彎曲した唇に、滿面の汗がたらたらと流れ込んだ。これらが、支那の新しい英雄だ！ 大旗の過ぎて行くところには、街の複雜な陰影がすつかり打消されて、紙のやうに疊まれた。

ぞく、ぞく、ぞく、ぞく、ぞく……無數の跫音が、素足、靴、皮鞋(ピーア)、氈鞋(フェーア)、草鞋、足袋などの路面に對する摩擦を伴つて、いつまでも、いつまでも、李刀達の耳の傍にあつた。白い靴もある、赭い足もある、菜つ葉服のヅボンもある、青い袴もある、黑い靴もある、赤皮の歪んだ靴もある、東較場の土埃にまみれた泥鞋(ニーア)もある、切れた草鞋を急いで蹴飛ばす甲の高い足もある――それらを見てゐる李刀達の眼からは、粒の大きい涙がぽちりと墜ちた。そして、頭の上を、なぐさめるやうな鼓舞するやうな、小旗や組合旗や紙旗が、森の葉のやうにはたはたと鳴つて掠め去つた。

『俺も行くぞ！』

李刀達は、工人と農民團との列の切れ目へ飛び込んだ。惠愛東路のむかうの方には、大きい赤い旗が三角形に尖つ

て、旗だけがひとりで歩るいてゐるやうに、しづしづと動いて來た。その奥には、きらつ、きらつと、軍隊の銃劍の鋭尖が閃いた。この數へ切れぬ人間の群集、思ひ思ひの服裝、あらゆる標語を書いた旗の一切に、李刀達は、大きい統一を感じた。めいめいの人達は、殆ど呼吸でさへも同じタイムでやつてゐるやうに思はれた。四列縱隊に歩行してゐるのであつたが、誰一人拔け出るものもなければ、前を駈け拔けようと焦心るものもない。彼も夢中になつて列から離れまいとした。

傳令があわたゞしく行列の傍を駈け飛んだ。永逆路から長堤へかかると、誰かが聲高に何かを叫んだ。すると、李刀達の周圍は、一齊に巨きい釜が煮えくりかへるやうな群集の聲で氾濫した。

『打倒帝國主義！』

先頭の一人が、口號の音頭を取つた。

數千の口が、同じ言葉を異口同音に繰返した。

『打倒帝國主義！』

波濤のやうな複音である。それには、人間の群が、殆ど不可能だと思はれるほどの、重いはげしい無形の抵抗を撥ねかへす力が籠つてゐた。言葉は人間を勇氣づけた。何かにむかつて衝き進むだけの闘爭力が湧いた。複音がすこし亂れると、遙かに高く、喇叭のやうにりうれうとした音頭が、錐で突刺すやうに、

『打倒帝國主義！』

と先頭を切つた。

前にも、背後にも、左右の隣りにも、四人づつ組み合はせた生きた鐵環のやうな人間の長列が、肺腑の底から同じ言葉をコーラスに叫んでゐるのを耳にして、李刀達だけが沈默してゐる筈はない。

彼も聲を絞つて、同じ言葉を叫んだ。幾度も、幾度も叫んだ。――と、突然、彼は、自分達が、間もなく沙面近くに迫つてゐることに氣がついた。すこし勾配になつた、大新公司からの大道が、珠江のぎらついた水に滑り込まうとして、とサンパンやジャンクの帆柱や屋根に食ひ留められ、それが濃綠の沙面の裏側の木立の蔭に糊けてしまふのが先頃の大旗にぎられながら、見てはならぬ物のやうに彼の視覺を脅かした。

李刀達は、意識的に、計畫的に、行列を離れて、先方へ馳け出した。

殆ど工人團體の最前列へ追ひついた頃に、彼は、自分が沙面の西橋のまむかひに立つてゐるのを知つた。濠のこちら側には、電信柱が立つてゐて、その傍に白塗の電燈の支柱が細い柱身を撓はせるやうに立つてゐた。無心でこの向から歩いてゐたのだが、河岸には、工事中か何かの切石が置いてあつた。これは、行列の人達の足の間から、ぎらぎら白く光つた。切石のま向ひが、ワトソンス・ショップといふ酒場があつた。掩ひかぶさるやうに生え繁つた樹木が、ワトソンと並んだヴィクトリア・ホテルをほど良く保護してゐた。ホテルの壁は、西へ廻はつた日光を受けて、煉瓦の刻みを見せて黄ろく沙巷街へ反射してゐた。

行列に這入つてゐる勞働者や農民の團體は、口號を叫びながら、わざと投げつけるやうな視線を、ヴィクトリア・ホテルの方へ向けた。ホテルから橋へ掛けて、見渡す限り、そこには鐵條網の內側の英佛軍人の眼が、長列の支那人の眼を彈ね返して、隙があらば飛び掛らうといふ伏勢を取つてゐた。子供が石ころを投つて屆きさうな、狹い、どろどろに濁つた濠のむかうとこちらには、ばつたり空氣の流通が途斷えて、ただその上に、支那人が歷史を持つて以來の滿腔の呪ひを罩めた口號の響だけが、わーツ、わーツと、むかうのヹランダや、室や、戸口や、扉などに突當つては碎け、碎けては突當り、その際々まで、小さな氣泡のやうな餘韻を漲らせた。

鐵條網といふものは、どんな場合に張りめぐらされても、張つた方にも張られた方へも、必要以上の警戒心を與へるも

のである。しかも、その内側に、無數の軍人の焖つた眼があり、黒い圓い孔のあいた機關銃が覗いて居り、更に、それらの敵對行動を完全に睥睨する砂嚢のふてぶてしい胴腹を見るときには、張られた方の人間は、どうにかしてそれを撤去して見たいといふ欲望を感ずるにきまつてゐる。

　たしかにその反抗意識の嵩じた結果であらうが、李刀達は自分の眼の前を過ぎつつあつた學生團のうちから、二三人の學生が、

『俺がやる！』

『俺だ。』

『何を、君は籤で落ちたぢやないか！』

『やらうか――今だ！』

と、罵りながら、揉み合つて、そこだけ列を亂してゐるのに氣がついた。

　その光景に接した李刀達は、いきなりマッチを片手に摑み出すとよろけるやうに横丁の一つへ駈け込んだ。居住民が沙基街へすつかり見物に出拂つた横丁は、人つ子一人通つてゐなかつた。その最初の店屋の入口に駈け込むと、そこは、大小三つのかまどへいつも湯をわかしてゐる、老虎竈（ローフツアオ）と云はれる賣湯屋であつた。煤つぽけた天井と壁とに包まれた、すべて土からこね硬めた店である。李刀達の跫音を聞きつけたらしく、奥から、力ない咳がして、青い布きれで前髪を包んだ婆さんが顔を出した。彼は、何も云はずに、手元にあるマッチと三本の花火を、コークスの燃えくすぶつてゐるかまどの下へ一くくりにして投り込んだ。

『何をしてるんかね？』

『いや、ちよつと煙草の火を借してくんな、お婆さん。』

『あゝ、あゝ、いいとも。――今日はえらい人出だそうだの。もう行列はそこまで來てるそうだが……』

『あ、有難う。』

李刀達は賓湯屋の軒下から表へ飛び出した。壁を一つ巡ると、まむかうに、ヴイクトリア・ホテルが、芝居の幕のやうに眼を奪つた。その下を、いろいろな小旗が通過したと思ふと、急に旗の列がなくなつて、その代り、胸をどきどきさせる鉄劍の穂尖が、鰭を張つた巨大な大刀魚のやうに人間の波の上に動いた。

ヴイクトリア・ホテルから、望遠鏡でこちらを覗いてゐた、けばけばしい服裝をした、鼻の高い、顔の赤い西洋人が、覗き込んでゐた眼鏡をつるりと手から滑らすと、首筋へ釣つてあつたらしいその紐がぴんとまつ直に張つた。その何でもない動作の後に、西洋人は、誰かへ合圖でもするときのやうに、つと右の手を差し伸べた。……

そのときである。李刀達の今花火をくべに來た賓湯屋の方角から、轟然とした爆發物の響いたのは！

花火は、三つともいつしよに爆發したのか、あとは、ものの一秒間も、何の爆發もつづかなかつた。その一秒時間に、李刀達は、空前の希望を賭けて、ヴイクトリア・ホテルの黄ろい壁の反射を見戍つた。そして、その一秒間の後に全く豫期しないことから、一番先に驚いたのは、彼自身であつた。

無數の爆音に蹴散らされた河岸から、白い黒い洪水となつて、夥しい人間の洪水が、この横丁へ雪崩れ落ちたと思ふと、もう彼はその群集の犇めきに渫はれて、一丁ほどは、夢中で卻いてゐたのである。

そこで一度踏み留まつた群集は、互に蒼白になつた無表情な顔を眺め合つては、ほんのわづかの時間、河岸の方でわーツ、わーツといふ人間の叫喚と、あらゆる家財道具を引ばたいて敲きつけるやうな小銃の亂射に耳を藉すと、又、思ひ出したやうに、双手をひろげて、横丁の奥へ奥へと流れ込んだ。

ものの半丁も駈けたと思ふと、群集は、もう一度互の顔を見合はした。いろいろな叫び聲や、狼狽した掛け聲の上に、

た、た、た、た――と無限の鐵彈を吐く機關銃の音が、あざやかに人達の意識に、

『戰爭だ！　戰爭が始まつた！』

と教へた。

李刀達はあせり出した。彼は、幾度か踏み堪へようとして、異常な力で押して來る胴や手や脚や頭を、てんでに切離して、それぞれのめがけて行く方向へ進ませてやり、自分だけは何とかして後へ引戻そうと苦心したが、さういふ個人的努力をすればするほど、完全に一つの凝結力を持つた群集は、ますます奧へ奧へと彼を押包んで運び去るに過ぎなかつた。沙基街から三丁がほどの間は、もう身動き一つ出來ないほどの人間の頭で埋まつてしまつた。

『逃げろ、逃げろ！』

『道はこつちにもあるぞ！』

『早く城へ！』

『大變だ。外國人と戰爭になつた！』

幸に横丁は、どんづまりの壁へ突當ると、左右に安い通りへ退去場を展開してゐた。小便臭い突當りの壁の下には、群集に踏み仆された婆さんが、血みどろになつた肩を、土埃に埋めながら慄へてゐた。その前を、恐ろしい勢ひでどゝどーツと駈け通る群集は、危く婆さんの體を踏み碎かうとしては、ちよつと思ひ留つて、右へ左へ黒い渦を卷いて爭ひながら駈け抜けたのである。

李刀達は、沙基中路の方へ切れ込んだ。

その横丁では、道具類を出しかけては、逃げ落ちる群集に、何か聲高に訊ねてゐる婦も見えた。ここにも、急激に混亂化された街の姿があつた。人間といふ人間は、悉く芯から蒼ざめてゐた。その逼迫した、窒息的な呼吸の前に、極度の混

亂から生じる黄ろい塵埃が、西に傾いた日光を浴びて、煙のやうに立罩めて動いてゐた。

「俺の仕事はまだ終つてゐない！」

李刀達は、沙基中路から、ひた走りに沙基街へ飛び出した。

ぴしりツ！

彼の足元の鋪石を剝つて、彈丸が一つ横手の壁へ突刺さつた。町角へ出ると、彼は、廂を街路へ突出して、それを石の支柱で押へ、その下を人間の通路にあてがつてゐる廣東風の建物を心から感謝しないわけには行かなかつた。

最初は、いきなり行列を横向けにして、沙面側の砲擊に折式の構へで對抗したらしい軍官學校の生徒や軍人達は、何の隱蔽物もない平地の犧牲の數に氣がついたらしく、めいめいに麵行だの雜貨店だのの廂の下に陣取つて、鐵條網にむかつて射擊を開始した。

黑血を吐いたままに仰向けに斃れてゐる仲間の體軀を楯に取つて、根氣强く腹這ひになつた姿勢で狙擊してゐる兵士もあつた。動かないので氣がつかなかつたが、溝緣から店の前へかけて、ごろた石のやうに轉がつて、路面に低い陰影を投げてゐるものは、皆死骸であつた。わづか三十ヤードともない道路で、横なぎに仆れてゐる動かない陰影といふ陰影は、決して二十や三十ではきかなかつた

誰かが、英國橋の方面で、手に手巾らしい物を振つて飛び出した。その白い物を掴んだ手が、斃れてゐる陰影を、二三尺ずるずると曳摺つて動いたかと思ふと、手は手巾をうちやつて、放心したやうに空中に輪を描いて、ぱつたりと動かなくなつた。切石の一角へやうやく片手を力に匍ひ上がつた兵士が、今しも立上がらうとした途端に、何かがひゆーうと彼の方へ飛んで來て、その男は、意氣地なくも前のめりに溝へ吸ひ込まれてしまつた。もう、李刀達の耳には鐵砲の音は苦でなかつた。

緊張してじつと動かない人達の群は、水平に支へた銃身から、ぱッぱッと火花を吐かせてゐた。さういふ機械みたやうな人間のゐる傍らには、兩手をちぎれるほど振つたり、跛を曳いたり、聲も立てずに泣いたり、笑ふやうに口を動かしたり、むちやくちやに自分の着てゐる着物から離れようともがいたりする一團の人達もあつた。

どーッと、廣東一帶の土が全部撥ねあがつたやうな地響がした。遙か遠くの方で、谺が冴えた音をして、大砲の響であることを人達に思はせた。

『軍艦がやり出したぞ！』

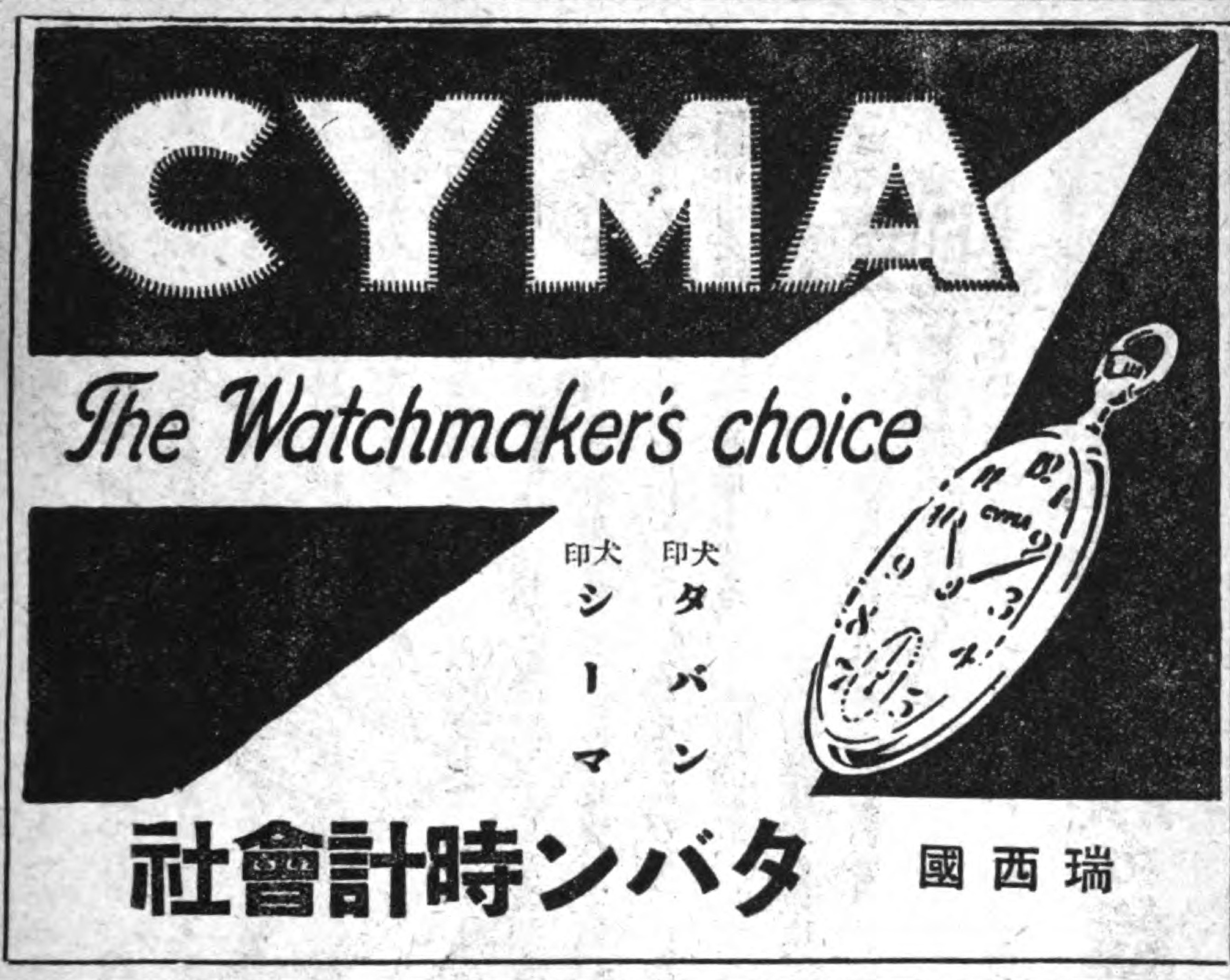
李刀達は、いきなり聲を出して叫ばうとした。しかし、聲は藥品で口をふさがれたやうに、喉から出て來なかつた。彼からさほど遠くない距離に、今自分の云はうとした言葉を、そつくりそのまま繰返してゐる男があつた。それが、この咄嗟の場合に、何か自分の聲がその男の方向へ反響してゐるやうに思はれた。しかし、聲はそれきりでは止まなかつた。その男は、李刀達の頭腦に出て來ない事柄をも叫びつづけたのである。

『孫中山先生は、我々を守つてるぞ！　同志諸君、火蓋は切つて墜された。この上は勇敢に闘つて死なう！　敵は、前面の卑怯な英國人ではないぞ！　我等無産階級國民の敵は、全世界の資…………』

ここまで叫ぶと、その男は、撞と仆れて、彼の背後に蹲まつて正體なくなつてゐる老人の上に仰向けに兩手をひろげた。竹の尖端で突刺したやうな彼の前額の孔から、見る見る赤い血が流れ出した。

しばらく經つてから、李刀達は、それが自分と同じ組合の、總領事のコックの下働きをしてゐた伍賴信であつたことを、直ぐ遠い幻覺のやうに、憶ひ出したのである。

（つづく）



定價		送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年三月十八日印刷
昭和四年四月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
印刷人　高木鳥三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番


Agfa
寫眞材料界の權威
アクッフアを お薦めします……
ロール・フイルム
フイルム・パック

神經衰弱
不眠症



レーベン

▼岡田醫學博士▼伊藤醫學博士
▼福田醫學博士▼ロビンソン博士證明推奨

主効病狀

腦病・神經衰弱・ヒステリー頭痛・頭重・逆上・便秘・不眠症・耳鳴・眩暈・記憶力減退・勉學過度・憂鬱焦燥・心身衰弱・遺精・夢精・陰萎等の生殖器障害

注意

學者、銀行、會社員、學生、著述家、技師、官吏、其他平素腦を使用する人は必ず常用せよ

レーベン は米麥等を主食とせる日本人の體質に適應する植物製劑にして絕對に副作用の憂なし

◎レーベン は腦の重要なる榮養素たるリンサンを多量に含有し積極的治療劑として[illegible]精の卓効を有す

定價

一圓・二圓・三圓・五圓・(徳用分)拾圓(試用分)五十錢
全國到る處有名藥店にあり

◎**進呈**

増田博士森常持兩學士共著神經衰弱療法精神療法は申込次第贈呈

◎取次、中央公論代理部にても取次します。

◀發賣 東京市京橋區弓町 大阪市天王寺上汐町六 中南定太郎藥房▶



GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription: Annual subscription yen 12.48, Single copy 80 sen including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.